原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第30集

原の辻遺跡　総集編Ⅰ

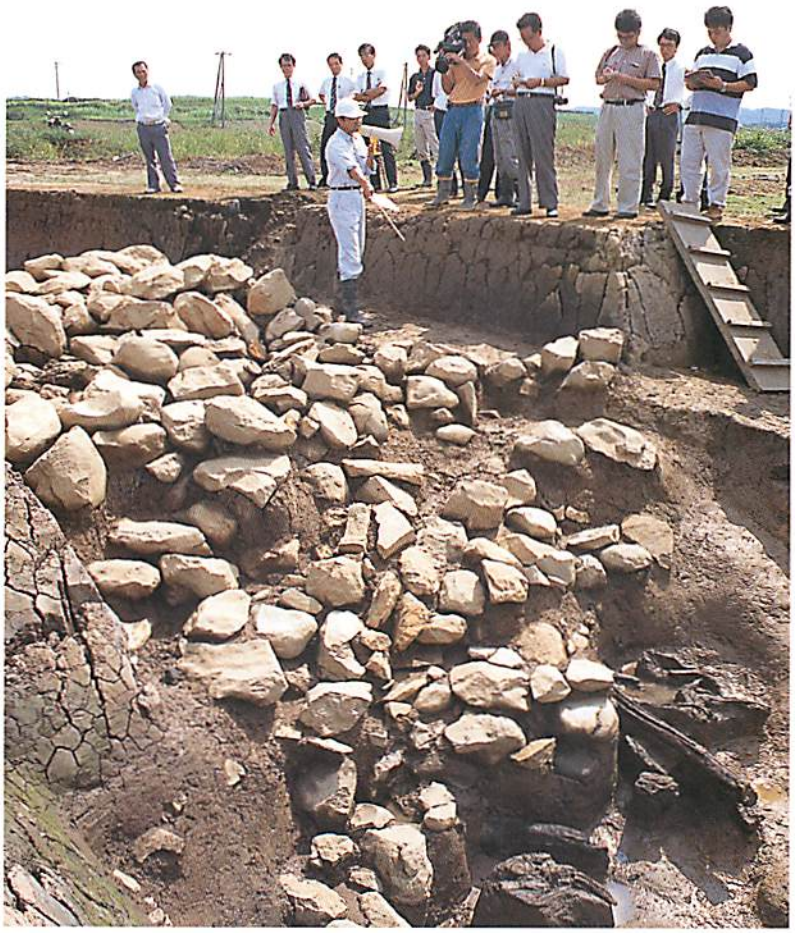
（はるつじ）

－平成16年度までの調査成果－

原の辻遺跡全景（北方洋上に対馬を望む）

原の辻遺跡と東方海上を望む

丘陵北側より印通寺方面を望む



船着き場跡の発見（平成８年）

船着き場跡東側突堤（東から・八反地区）／弥生時代中期

楽浪系瓦質土器（壺・高元地区）／弥生時代後期／高さ26.4cm

楽浪系瓦質土器（壺・八反地区）／弥生時代後期

楽浪系瓦質土器（左）と三韓系土器

発刊にあたって

壱岐島は玄界灘と対馬海峡の間に位置し，弥生時代の日本の様子を記した，いわゆる『魏志倭人伝』には，大陸の使者が立ち寄る倭人の国として対馬国に次いで「一支（大）国」として登場し，中国大陸や朝鮮半島と日本列島を結ぶ重要な役割を果たしてきました。

原の辻遺跡は，明治時代に地元の研究者によって発見されて以来，これまでに幾度となく調査研究が行われ大きく注目されてきました。平成５年度から始まった本格的な調査では，丘陵部を取り巻く多重環濠や，船着き場跡，丘陵上の祭儀場跡や住居跡など貴重な遺構の発見が相次ぎました。また，遺物も中国や朝鮮半島はもとより九州各地や山陰，瀬戸内地方の土器などが出土しており，倭人伝に「南北市糴」と記載された活発な交流がうかがえます。

これらのことから，原の辻遺跡は「一支国」の中心集落と考えられ，弥生時代の国の規模や構造を解明する上で希有の事例としてきわめて重要であるとの認識から，平成12年11月国の特別史跡に指定されました。

魏志倭人伝には日本に30余りの国があることが記載されていますが，その国と遺跡が同一と特定されたのは原の辻遺跡だけですので，それだけに当時の国のありかたが理解できる大きな魅力を秘めています。遺跡は現在も調査が進められており，新しい知見が得られています。そして，いよいよ平成17年度からは整備に入り，建物跡や当時の生活の様子をより具体的に復元していく計画です。

また，平成20年度をめどに県立埋蔵文化財センターや市立一支国博物館（仮称）建設も計画されており，地元の地域振興に寄与することが期待されています。

本書は，これまでの調査成果をまとめ，今後の調査の指標となることを目的に編集されたものです。編集にあたりましては，諸先生方より，玉稿を賜りましたことにつきまして感謝申し上げます。

最後に，本報告書が学術研究の一助となり，これからも多くの方々に活用されることを願い挨拶にかえさせていただきます。

平成17年３月31日

長崎県教育委員会教育長　立　石　　暁

例　　言

1．本報告書は，平成17年度から本格的に始まる原の辻遺跡の整備に向け，平成16年度までの調査成果を総集し，今後の調査，及び整備，研究に資することを目的とする。

2．本報告書は，平成16年度の国庫補助事業を受け作成した。

3．本報告書の執筆者については，下記のとおりである。本文中には，名字のみ末尾に記している。

Ⅰ　原の辻遺跡周辺の地形地質……西日本技術開発株式会社　林　信雄
〃　鳥井　真之
長崎大学教育学部　長岡　信治

Ⅱ　遺跡の歴史的環境
旧石器～古墳……長崎県教育庁佐世保教育事務所文化財調査課　杉原　敦史
古代～近世……長崎県立長崎図書館郷土課　石尾　和貴

Ⅲ　学史と調査経過
（大正時代～戦後東亜考古学会の調査研究）……福岡市教育委員会　塩屋　勝利
（昭和49年～現在）……長崎県教育庁学芸文化課　高野　晋司
（平成５年度～平成７年度の調査）……長崎県教育庁佐世保教育事務所文化財調査課　副島　和明
（平成８年度～平成12年度の調査）……長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所　安楽　勉
（平成13年度～平成15年度の調査）……長崎県佐世保教育事務所文化財調査課　町田　利幸

Ⅳ　遺構
1．環濠
・東側環濠について……長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所　中尾　篤志
・西側環濠について……〃　福田　一志
2．船着き場跡……長崎県教育庁学芸文化課　山下　英明
3．護岸遺構……長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所　林　隆広
4．祭儀場跡……中尾
5．住居跡……壱岐市教育委員会文化財課　山口　優
6．墓地……安楽
7．土坑……壱岐市教育委員会文化財課　松見　裕二

Ⅴ　遺物
1．土器……長崎県教育庁学芸文化課　宮崎　貴夫
・龍と鯨を描いた線刻土器……宮崎
・土製品……長崎県立佐世保西高等学校　西　信男
2．石器
・石庖丁，石剣，石斧類……福田
・石鎌，石製支脚，敲石，磨石，石製漁撈具……中尾
・砥石……長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所　村川　逸朗
3．金属器
・鉄器……中尾
・青銅器……福田
4．木製品……町田
5．骨角器……中尾
6．その他の遺物

・装飾品……長崎県立壱岐高等学校　小玉　友裕
・人面石……長崎県立明誠高等学校　藤村　　誠
・ココヤシ製笛……町田
・木製櫛……副島
・権……中尾
・卜骨……安楽

Ⅵ　自然科学分析

・原の辻遺跡下層（幡鉾川層）の後期更新世哺乳類化石……岡山大学大学院　稲田　孝司
愛知教育大学教育学部　河村　善也　　大阪市立自然史博物館　樽野　博幸
・植物遺体群からみた原の辻遺跡の植生と人間・植物関係史……東京大学大学院　辻　誠一郎
国立歴史民俗博物館　辻　圭子　株式会社パレオ・ラボ　鈴木　　茂
・原の辻遺跡から出土した木材の樹種……森林総合研究所木材特性研究領域　能代　修一
株式会社パレオ・ラボ　佐々木由香
・動物遺存体の分析……独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室　宮地　淳子・松井　章
京都大学大学院　丸山　真史
・貝塚から出土した貝類組成について……神奈川県立生命の星・地球博物館　松島　義章
・長崎県壱岐原の辻遺跡環濠内出土の弥生時代人骨……長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
発生分化機能再建学講座　分部　哲秋・佐伯　和信・岡本　圭史・長島　聖司
・壱岐市原の辻遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定……国立歴史民俗博物館
藤尾慎一郎・小林　賢一・今村　峯雄・坂本　稔・尾嵜　大真

Ⅶ　総括……中尾・福田

Ⅷ　附編

1．旧石器時代の遺物……福田
2．古墳時代……長崎県教育庁学芸文化課　川口　洋平
3．原の辻遺跡出土の建築材……東北芸術工科大学　宮本長二郎
4．原の辻遺跡での調査の課題と問題点……福田

Ⅸ　遺跡整備と保存活用……高野

Ⅹ　まとめ（ハングル）……田中

4．遺跡調査，本報告書執筆については，調査指導委員会の委員の諸先生，文化庁記念物課，壱岐市教育委員会の協力があった。平成５年度から平成16年度までの調査組織について記載する。

・平成５年度
壱岐教育事務所駐在　係長　副島　和明　　文化財保護主事　町田　利幸
芦辺町教育委員会　　教育長　野元　茂夫　　教育次長　辻本　正　　文化財指導員　松永　泰彦
石田町教育委員会　　教育長　後藤　正敏　　教育次長　山口　税　　文化財指導員　橋本　幸男
・平成６年度
壱岐教育事務所駐在　係長　副島　和明　　文化財保護主事　川口　洋平
芦辺町教育委員会　　教育長　今西　國善　　教育次長　辻本　正
石田町教育委員会　　教育長　後藤　正敏　　教育次長　山口　税　　文化財主事　河合　雄吉
・平成７年度
原の辻遺跡調査事務所　係長　副島　和明　　主任文化財保護主事　宮崎　貴夫
文化財保護主事　山下　英明・川口　洋平・石尾　和貴
芦辺町教育委員会　　教育長　今西　國善　　教育次長　辻本　正　　文化財指導員　松永　泰彦

石田町教育委員会　教育長　町田　忠治　教育次長　松本　陽治　文化財主事　河合　雄吉

・平成８年度

原の辻遺跡調査事務所　所長　田川　肇　課長　安楽　勉　係長　宮崎　貴夫

文化財保護主事　西　信男・山下　英明・川口　洋平

壱岐教育事務所　課長　岩永　道夫　主査　松嶋　繁昭

芦辺町教育委員会　教育長　末永　雅照　教育次長　辻本　正　文化財指導員　松永　泰彦

石田町教育委員会　教育長　町田　忠治　教育次長　松本　陽治　文化財主事　河合　雄吉

・平成９年度

原の辻遺跡調査事務所　所長　田川　肇　課長　安楽　勉　係長　宮崎　貴夫

文化財保護主事　杉原　敦史・西　信男・川口　洋平

壱岐教育事務所　課長　岩永　道夫　主査　松嶋　繁昭

芦辺町教育委員会　教育長　川原　忠雄　教育次長　辻本　正　係長　山口　信幸

文化財指導員　松永　泰彦

石田町教育委員会　教育長　町田　忠治　教育次長　松本　陽治　文化財主事　河合　雄吉

・平成10年度

原の辻遺跡調査事務所　所長　田川　肇　課長　安楽　勉　係長　宮崎　貴夫

文化財保護主事　村川　逸朗・杉原　敦史・西　信男

壱岐教育事務所　課長　岩永　道夫　主査　米沢　潤二

芦辺町教育委員会　教育長　川原　忠雄　教育次長　岩永　勲　係長　山口　信幸

文化財指導員　松永　泰彦

石田町教育委員会　教育長　町田　忠治　教育次長　松本　陽治　文化財主事　河合　雄吉

・平成11年度

原の辻遺跡調査事務所　所長　田川　肇　課長　安楽　勉　係長　宮崎　貴夫

文化財保護主事　村川　逸朗・杉原　敦史・西　信男

壱岐教育事務所　課長　町田　一久　係長　長岡　正記

芦辺町教育委員会　教育長　川原　忠雄　教育次長　岩永　勲　係長　山口　信幸

文化財指導員　山口　優

石田町教育委員会　教育長　町田　忠治　教育次長　村田　正明　文化財主事　河合　雄吉

・平成12年度

原の辻遺跡調査事務所　所長　田川　肇　課長　安楽　勉　係長　宮崎　貴夫

主任文化財保護主事　町田　利幸・村川　逸朗

文化財保護主事　杉原　敦史・藤村　誠

壱岐教育事務所　課長　町田　一久　係長　長岡　正記

芦辺町教育委員会　教育長　川原　忠雄　教育次長　岩永　勲　係長　山口　信幸

文化財指導員　山口　優

石田町教育委員会　教育長　山口　税　教育次長　村田　正明　文化財主事　河合　雄吉

・平成13年度

原の辻遺跡調査事務所　所長　高野　晋司　課長　安楽　勉　主任文化財保護主事　町田　利幸

文化財保護主事　藤村　誠・小玉　友裕・中尾　篤志

壱岐教育事務所　課長　町田一久　係長　長岡正記

芦辺町教育委員会　教育長　川原　忠雄　教育次長　岩永　勲　係長　山口　信幸

石田町教育委員会　教育長　山口　税　教育次長　村田　正明　文化財保護主査　河合　雄吉

・平成14年度

原の辻遺跡調査事務所　所長　高野　晋司　係長　町田　利幸　主任文化財保護主事　福田　一志

文化財保護主事　藤村　誠・小玉　友裕・中尾　篤志
壱岐教育事務所　課長　野中　滋生　係長　長岡　正記
芦辺町教育委員会　教育長　川原　忠雄　教育次長　岩永　勲　係長　山口　信幸
文化財指導員　山口　優
石田町教育委員会　教育長　山口　税　教育次長　小嶋　光博　文化財保護主査　河合　雄吉

・平成15年度
原の辻遺跡調査事務所　所長　高野　晋司　係長　町田　利幸　主任文化財保護主事　福田　一志
文化財保護主事　小玉　友裕・林　隆広・中尾　篤志
壱岐教育事務所　課長　野中　滋生　係長　冨永　宏美
芦辺町教育委員会　教育長　川原　忠雄　教育次長　前田　清信　係長　山口　信幸
学芸員　松見　裕二　文化財調査員　山口　優
石田町教育委員会　教育長　山口　税　教育次長　小嶋　光博　主査　河合　雄吉

・平成16年度
原の辻遺跡調査事務所　所長　安楽　勉　係長　村川　逸朗　主任文化財保護主事　福田　一志
文化財保護主事　林　隆広・溝上　貴稔・中尾　篤志
壱岐教育事務所　課長　野中　滋生　係長　冨永　宏美
壱岐市教育委員会　教育長　須藤　正人　教育次長　吉富　一敬　文化財課長　山内　義夫
文化財課長補佐　松尾　実　係長　山口　信幸・下條　健輔
主査　河合　雄吉　田中　聡一　主事　松見　裕二　文化財調査員　山口　優

・原の辻遺跡調査指導委員会委員
福岡大学名誉教授　小田富士雄（1995～）　大阪府立狭山池博物館長　金関　恕（2003～）　国立奈良文化財研究所　埋蔵文化財研究所長　工楽　善通（1995～）　国立歴史民俗博物館長　佐原　眞（1995～2001）　筑波大学芸術学系教授　沢田　正昭（1995～）　佐賀大学名誉教授　日野　尚志（1995～）　九州大学名誉教授　西谷　正（1995～）　東北芸術工科大学教授　宮本長二郎（1995～）
独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室長　松井　章（1995～）
指導委員会には文化庁より，臼杵　勲調査官，小池　伸彦調査官，小林　克調査官，岸本　直文文部技官，禰冝田　佳男調査官，加藤　真二調査官，本中　眞主任調査官の出席を賜り御指導を頂いた。

・原の辻遺跡保存整備委員会委員
福岡大学名誉教授　小田富士雄（1995～）　大阪府立弥生文化博物館長　金関　恕（1995～）　国立奈良文化財研究所　埋蔵文化財研究所長　工楽　善通（1995～）　国立歴史民俗博物館長　佐原　眞（1995～2001）　筑波大学芸術学系教授　沢田　正昭（1995～）　神戸芸術工科大学環境デザイン学科教授　杉本正美（1995～）　東北芸術工科大学芸術学部教授　田中　哲雄（1995～）　東京大学大学院教授　辻　誠一郎（2003～）　九州大学名誉教授　西谷　正（1995～）
整備委員会には文化庁文化財部記念物課より，本中　眞主任調査官，市原富士夫文部科学技官，磯村　幸雄調査官，小池　伸彦主任調査官　田中　哲雄主任調査官，小野　健吉主任調査官の出席を賜り御指導を頂いた。

5．本報告書に関わる記録類及び出土遺物については，長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所及び，壱岐市教育委員会に保管されている。

6．国特別史跡範囲と，本文中に記載された地区名については，本文前頁の地図を参照されたい。

7．本報告の編集は長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所，福田・中尾がおこなった。

本 文 目 次

Ⅰ　原の辻遺跡周辺の地形地質……1
Ⅱ　遺跡の歴史的環境……14
1．旧石器時代～古墳時代……14
2．古代～近世……17
Ⅲ　学史と調査経過……20
〈学史〉
1．大正時代～戦後東亜考古学会の調査研究……20
2．昭和49年～現在……25
〈調査経過〉
1．範囲確認調査と平成５年度～平成７年度の調査……31
2．平成８年度～平成12年度の調査……34
3．平成13年度～平成15年度の調査……37
Ⅳ　遺構……40
1．環濠……40
・東側環濠……40
・西側の環濠，河道，溝……54
2．船着き場跡……59
3．護岸遺構……63
4．祭儀場……65
5．住居跡……73
6．墓地……85
7．土坑……99
Ⅴ　遺物……109
1．土器……109
・龍と鯨を描いた線刻土器……132
・土製品……135
2．石器……137
・石斧類……137
・石庖丁……139
・石剣，石戈……140
・石鏃……142
・頁岩を素材とする石器の製作工程……144
・石鎌……147
・石製支脚……151
・磨石類・石皿類……151

・漁撈具 ……156
・砥石 ……161
・鋳型 ……166
3．金属器 ……168
・鉄器 ……168
・青銅器 ……179
4．器種別木製品と所属時期について ……190
5．骨角器 ……199
6．その他の遺物 ……203
・装飾品 ……203
・人面石 ……205
・ココヤシ製笛 ……206
・木製櫛 ……207
・権 ……208
・卜骨 ……209
Ⅵ　自然科学分析 ……213
1．原の辻遺跡下層（幡鉾川層）の後期更新世哺乳類化石 ……213
2．植物遺体群からみた原の辻遺跡の植生と人間・植物史 ……226
3．原の辻遺跡から出土した木材の樹種 ……242
4．原の辻遺跡出土の動物遺存体 ……254
5．壱岐　原の辻遺跡の貝塚から出土した貝類組成について ……274
6．長崎県壱岐原の辻遺跡環濠内出土の弥生時代人骨 ……287
7．壱岐市原の辻遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定 ……297
Ⅶ　総括 ……309
Ⅷ　附編 ……327
1．旧石器時代の遺物 ……327
2．古代の遺構・遺物 ……333
3．原の辻遺跡出土の建築材 ……336
4．原の辻遺跡における発掘調査の課題と問題点 ……344
Ⅸ　原の辻遺跡の保存活用 ……346
Ⅹ　まとめ（ハングル） ……354

挿図目次

第１図　壱岐島の接峰面図（１/25,000）……２
第２図　原の辻遺跡周辺の接峰面図と沖積低地の分布……３
第３図　原の辻遺跡周辺地域の地質図……４
第４図　原の辻遺跡周辺地域の断面図……４
第５図　原の辻遺跡の等高線図……８
第６図　原の辻丘陵の地質図・断面図……９
第７図　原の辻遺跡丘陵のボーリングコア柱状図の対比……10
第８図　原の辻丘陵の地下水経路……11
第９図　原の辻遺跡弥生時代集落以前の遺跡……14
第10図　壱岐の弥生時代主要遺跡分布図……15
第11図　壱岐の古墳・古代の主要遺跡分布図……16
第12図　平成５年度～７年度の調査区域……33
第13図　平成８年度～12年度の調査区域……36
第14図　平成13年度～15年度の調査区域……39
第15図　弥生時代前期の河道・環濠・溝の状況図……41～42
第16図　弥生時代中期の河道・環濠・溝の状況図……43～44
第17図　弥生時代後期の河道・環濠・溝の状況図……45～46
第18図　古墳時代前期の河道・環濠・溝の状況図……47～48
第19図　北東低地部遺構配置図……49
第20図　北東低地部環濠土層図……51
第21図　沼状落ちこみ・環濠出土土器および弥生時代中期における遺構群の変遷…52
第22図　西側低地部の環濠等状況図……55
第23図　西側環濠セクション図……56
第24図　西側環濠セクション図……57
第25図　船着き場跡実測図……61
第26図　護岸遺構セクション図……63
第27図　護岸遺構実測図……64
第28図　祭儀場遺構配置図……66
第29図　祭儀場南端部遺構平面図及びトレンチ位置図……67
第30図　祭儀場南端部トレンチ内土層図……68
第31図　祭儀場変遷想定図……71
第32図　高元・原地区の住居跡①……79
第33図　原地区の住居跡②……80
第34図　原地区の住居跡③……81
第35図　原地区の住居跡④……82
第36図　竪穴住居跡時期別分布図……83
第37図　原の辻遺跡墓地配置図……85
第38図　石田大原地区墓域図……87～88
第39図　大川地区墓域図……90
第40図　原ノ久保Ａ調査区配置図……91
第41図　原ノ久保Ａ・Ｄ遺構配置図……92
第42図　原ノ久保Ｃ，苣ノ木地区調査区配置図……93
第43図　原地区遺構配置図……94
第44図　鶴田遺跡遺構配置図……95
第45図　閏繰遺跡遺構配置図……96
第46図　遺跡出土甕棺編年図……98
第47図　１号・２号土坑実測図 ……102
第48図　３号・４号土坑実測図 ……102
第49図　５号・６号土坑実測図 ……103
第50図　１号・２号・３号焼土坑実測図 …103
第51図　１号～３号貯蔵穴実測図 ……104
第52図　１号・２号祭祀土坑実測図 ……104
第53図　１号独立柱遺構・１号周溝状遺構実測図 ……105
第54図　１・３号土坑，２号焼土坑，１号貯蔵穴３号貯蔵穴出土遺物実測図 ……106
第55図　２号祭祀土坑・１号周溝状遺構出土遺物実測図 ……107
第56図　弥生土器・古式土師器編年案①

……111～112
第57図　弥生土器・古式土師器編年案②
……113～114
第58図　弥生土器・古式土師器編年案③
……115～116
第59図　弥生土器・古式土師器編年案④
……117～118
第60図　弥生土器・古式土師器編年案⑤
……119～120
第61図　弥生土器・古式土師器編年案⑥
……121～122
第62図　弥生土器・古式土師器編年案⑦
……123～124
第63図　朝鮮半島系土器と共伴した弥生土器
……127
第64図　無文土器・擬無文土器 ……129
第65図　楽浪土器，三韓土器，陶質土器 …130
第66図　龍と鯨を描いた線刻土器 ……134
第67図　石斧類実測図① ……138
第68図　石斧類実測図② ……139
第69図　石庖丁実測図 ……141
第70図　石剣，石戈実測図 ……143
第71図　石鏃実測図 ……144
第72図　剥片実測と石器製作模式図 ……146
第73図　石鎌実測図① ……148
第74図　石鎌実測図② ……149
第75図　石鎌実測図③ ……150
第76図　石製支脚実測図① ……152
第77図　石製支脚実測図② ……153
第78図　磨石類・石皿類実測図 ……155
第79図　石製漁撈具実測図① ……157
第80図　石製漁撈具実測図② ……158
第81図　石製漁撈具実測図③ ……159
第82図　砥石実測図……163～164
第83図　鋳型実測図 ……167
第84図　鉄器実測図① ……169
第85図　鉄器実測図② ……171
第86図　鉄器実測図③ ……173
第87図　鉄器実測図④ ……175
第88図　鉄器実測図⑤ ……177
第89図　鉄器実測図⑥ ……178
第90図　青銅製品出土及び表採地点 ……180
第91図　青銅鏡実測図 ……181
第92図　銅剣実測図 ……182
第93図　銅鏃実測図 ……185
第94図　銅鏃形態分類図 ……186
第95図　その他の青銅製品実測図 ……187
第96図　その他の青銅製品実測図 ……189
第97図　梯子・斧柄・鍬類の編年案 ……192
第98図　柄杓・容器・案の編年案 ……193
第99図　杵・臼・横槌・武具の編年案 ……194
第100図　機織り具・机・ココヤシ製笛の編年案
……195
第101図　骨角器実測図① ……200
第102図　骨角器実測図② ……201
第103図　切子玉実測図 ……204
第104図　人面石製品実測図 ……205
第105図　権実測図 ……208
第106図　壱岐島出土卜骨 ……210
第107図　原の辻遺跡下層(幡鉾川層)から産出した後期更新世哺乳類化石の分布 …214
第108図　原の辻遺跡下層化石産地とその周辺の露頭スケッチと地質柱状図 ……216
第109図　原の辻遺跡の植物遺体群の資料地点および調査地点 ……227
第110図　幡鉾川川岸および西側低地17調査区の地質断面と試料層準 ……228
第111図　幡鉾川川岸（Ｈ１地点）の主要花粉組成図 ……229
第112図　西側低地17調査区 SD6N(Ｈ２地点)におけるＨ２-Ａの主要花粉組成図…229
第113図　西側低地17調査区 SD6N(Ｈ２地点)におけるＨ-２Ｂの主要花粉組成図…230
第114図　西側低地15調査区 S-T2(Ｈ３地点)の

主要花粉組成図 ……230
第115図 02コクホ石田高原Ⅴ区15Hj南北トレンチから出土したヒョウタン果実遺体 ……232
第116図 イヌのサイズ別出土量 ……268
第117図 遺構別動物遺存体組成 ……269
第118図 原の辻遺跡の4か所の調査区から出土した貝類の生息深度 ……280
第119図 原の辻遺跡の4か所の調査区から出土した貝類の群集組成 ……281
第120図 原の辻遺跡の4か所の調査区から出土した主要貝類の種組成 ……281
第121図 主成分分析による比較 ……289
第122図 ペンローズの形態距離に基づくクラスター分析 ……289
第123図 北部九州弥生人を基線とした四肢骨計測値の偏差折線図 ……291
第124図 ペンローズの形態距離に基づく主座標分析 ……291
第125図 測定した弥生土器1 ……298
第126図 測定した弥生土器2 ……299
第127図 暦年較正の確率分布図1 ……305
第128図 暦年較正の確率分布図2 ……306
第129図 原の辻遺跡出土土器の較正年代分布図 ……307
第130図 剥片廃棄土坑実測図 ……309
第131図 溜池・河道出土の石器 ……311
第132図 原の辻遺跡出土鉄素材，鍛冶具分布図 ……313
第133図 原の辻遺跡出土木製品分布図 ……314
第134図 原の辻遺跡の変遷(弥生時代前期) ……317～318
第135図 原の辻遺跡の変遷(弥生時代中期) ……319～320
第136図 原の辻遺跡の変遷(弥生時代後期) ……321～322
第137図 原の辻遺跡の変遷(古墳時代前期) ……323～324
第138図 旧石器時代の遺跡分布図 ……328
第139図 D地点遺物実測図 ……330
第140図 E地点遺物実測図 ……331
第141図 C地点遺物実測図とD地点土層図 ……332
第142図 原の辻遺跡出土の初期貿易陶磁 …335
第143図 建築部材実測図 ……341
第144図 建築部材実測図 ……342
第145図 建築部材実測図 ……343
第147図 整備のゾーニング ……351

写真図版目次

巻頭カラー　原の辻遺跡の遠景
巻頭カラー　原の辻遺跡の遠景
巻頭カラー　船着き場跡
巻頭カラー　楽浪系・三韓系土器

本文掲載写真図版

PL. 1　津合橋下の幡鉾川河床に露出する幡鉾川層と原の辻層 …… 7
PL. 2　昭和26年東亜考古学会調査風景 ……24
PL. 3　船着き場跡検出状況 ……62
PL. 4　鋳型表面写真 ……167
PL. 5　鋳型側面写真 ……167
PL. 6　トンボ玉写真 ……203
PL. 7　木製櫛 ……207

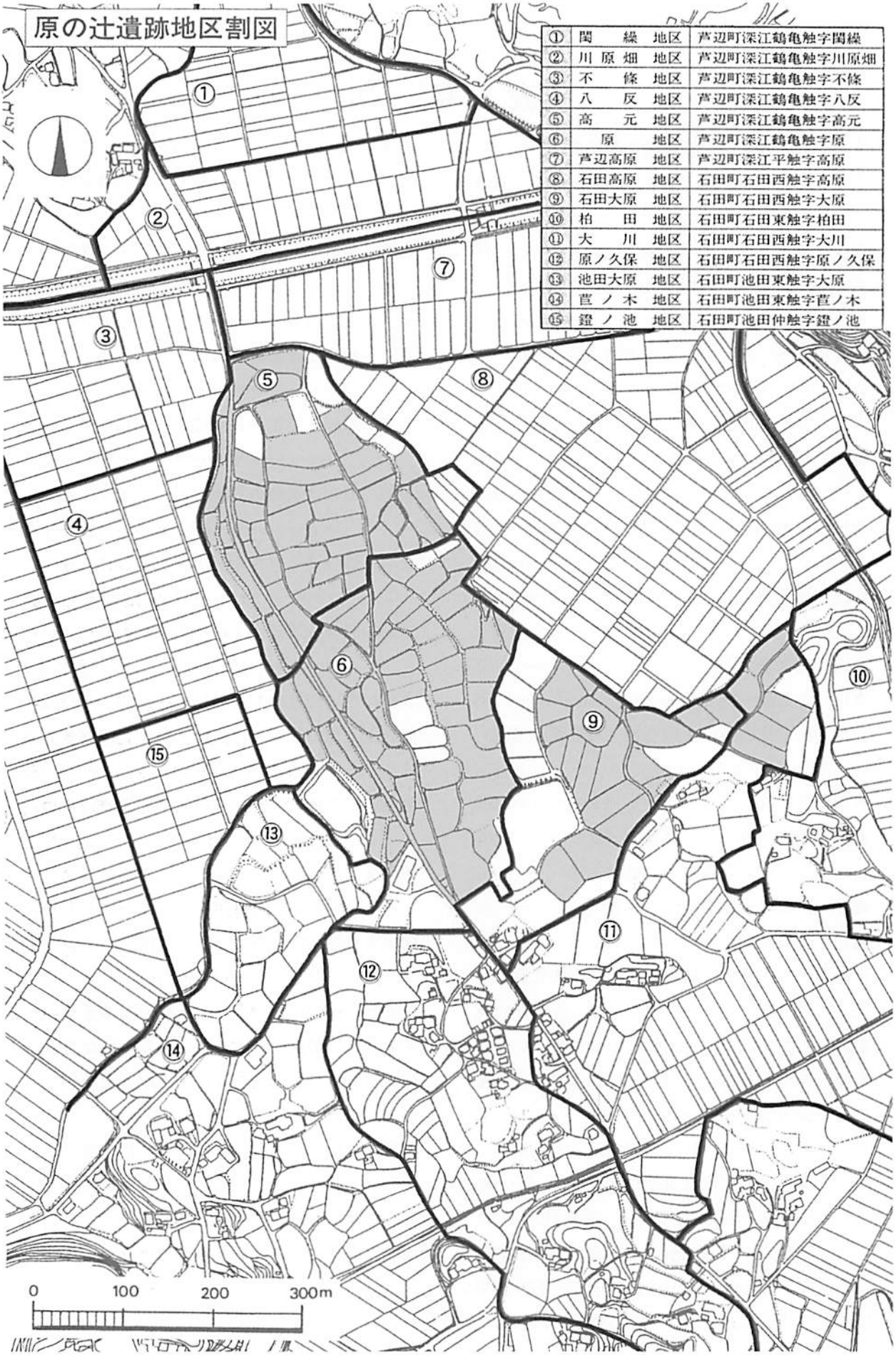
PL. 8　原の辻遺跡下層の化石産出地 ……213
PL. 9　原の辻遺跡下層の哺乳類化石(1) …221
PL. 10　原の辻遺跡下層の哺乳類化石(2) …222
PL. 11　原の辻遺跡下層の哺乳類化石(3) …223
PL. 12　原の辻遺跡から出土した主要な種実類Ⅰ ……239
PL. 13　原の辻遺跡から出土した主要な種実類Ⅱ ……240
PL. 14　原の辻遺跡から出土したヒョウタン遺体 ……241
PL. 15　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(1) ……247
PL. 16　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(2) ……248
PL. 17　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(3) ……249
PL. 18　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(4) ……250
PL. 19　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(5) ……251
PL. 20　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(6) ……252
PL. 21　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(7) ……253
PL. 22　イヌ ……270
PL. 23　鹿角加工 ……271
PL. 24　鰭脚類 ……272
PL. 25　イノシシ ……273
PL. 26　Ｈ５年に採取した貝塚出土の貝類－１ ……282
PL. 27　Ｈ５年に採取した貝塚出土の貝類－２ ……283
PL. 28　原の辻コヨウ４区出土の人骨 ……296
PL. 29　試料の炭化物写真１ ……303
PL. 30　試料の炭化物写真２ ……304

写真図版

PL. 1　原の辻遺跡全景
PL. 2　環濠検出状況
PL. 3　環濠検出状況
PL. 4　環濠検出状況
PL. 5　環濠検出状況
PL. 6　高台（祭儀場）の調査状況
PL. 7　住居跡検出状況
PL. 8　船着き場跡検出状況
PL. 9　護岸遺構・樹皮敷遺構検出状況
PL. 10　河道検出状況
PL. 11　墓地検出状況
PL. 12　墓地検出状況
PL. 13　墓地検出状況
PL. 14　土坑検出状況
PL. 15　土坑検出状況
PL. 16　畦畔検出状況
PL. 17　朝鮮半島系土器出土状況
PL. 18　朝鮮半島系土器出土状況
PL. 19　土器出土状況
PL. 20　土器出土状況
PL. 21　木製品出土状況
PL. 22　木製品出土状況
PL. 23　自然遺物出土状況
PL. 24　骨角器類出土状況
PL. 25　金属器出土状況
PL. 26　石器出土状況
PL. 27　無文・楽浪系・三韓系土器
PL. 28　主な出土遺物
PL. 29　主な出土遺物
PL. 30　主な出土遺物

表　目　次

表１　原の辻遺跡周辺地域の層序表……6
表２　原の辻遺跡における竪穴住居跡の一覧表……84
表３　原の辻遺跡墓域関係表……86
表４　2001年度石田町調査の遺構一覧…87～88
表５　1974年調査の遺構一覧……87～88
表６　平成７年度大川地区遺構一覧……90
表７　原ノ久保Ｄ区遺構一覧表……92
表８　原の辻遺跡の墓域変遷表……97
表９　報告書で使用した遺構の一覧表 ……108
表10　報告書で使用した遺物の一覧表 ……108
表11　地区別にみた朝鮮半島系土器の出土点数……132
表12　地区内における朝鮮半島系土器の割合……132
表13　投弾計測表 ……135
表14　土製品一覧表 ……136
表15　竪穴住居跡出土磨石類・石皿類の構成……154
表16　砥石計測表 ……165
表17　挿図に使用した遺物の一覧表 ……167
表18　図版にした遺物の一覧表① ……197
表19　図版にした遺物の一覧表② ……198
表20　壱岐島出土卜骨一覧表 ……209
表21　原の辻遺跡下層から産出した哺乳類化石のリスト ……218
表22　ナウマンゾウ臼歯化石の計測値 ……220
表23　原の辻遺跡から出土した現地取り上げ種実遺体 ……235
表24　幡鉾川川岸（Ｈ１地点）から水洗によって検出した種実遺体 ……236
表25　幡鉾川川岸(Ｈ１地点)，西側低地15(Ｈ３地点)・17調査区(Ｈ２地点)の花粉組成表……237～238
表26　原の辻遺跡出土木材の樹種 ……246
表27　原の辻遺跡出土動物遺存体の種名表……264
表28　集計表（哺乳類）……265～266
表29　集計表（哺乳類以外） ……267
表30　加工痕観察表 ……268
表31　原の辻遺跡の貝塚出土の貝類リスト……284
表32　原の辻遺跡の貝塚出土の貝類リスト……285
表33　原の辻遺跡の貝塚出土の貝類リスト……286
表34　原の辻コヨウ４区出土主要人骨一覧……288
表35　原の辻コヨウ４区出土頭蓋の計測値比較……289
表36　主要四肢骨計測値比較 ……290
附表１　原の辻コヨウ４区・脳頭蓋計測値……293
附表２　原の辻コヨウ４区・顔面頭蓋計測値……293
附表３　原の辻コヨウ４区・下顎骨計測値……293
附表４　原の辻コヨウ４区・上腕骨計測値……294
附表５　原の辻コヨウ４区・橈骨計測値 …294
附表６　原の辻コヨウ４区・尺骨計測値 …294
附表７　原の辻コヨウ４区・大腿骨計測値……295
附表８　原の辻コヨウ４区・頸骨計測値 …295
附表９　原の辻コヨウ４区・腓骨計測値 …295
表37　試料一覧と測定結果 ……301
表38　試料の重量と炭素含有率 ……302



本報告で使用する地区割図（S＝1/6,000）
※アミカケは国特別史跡指定地範囲

Ⅰ　原の辻遺跡周辺の地形地質

はじめに

本報告では，主に2002年度から2004年度に行った原の辻遺跡および周辺の地表調査，ボーリング調査，地下水調査に基づいて，遺跡周辺の地形地質および湧水について概略を述べる。

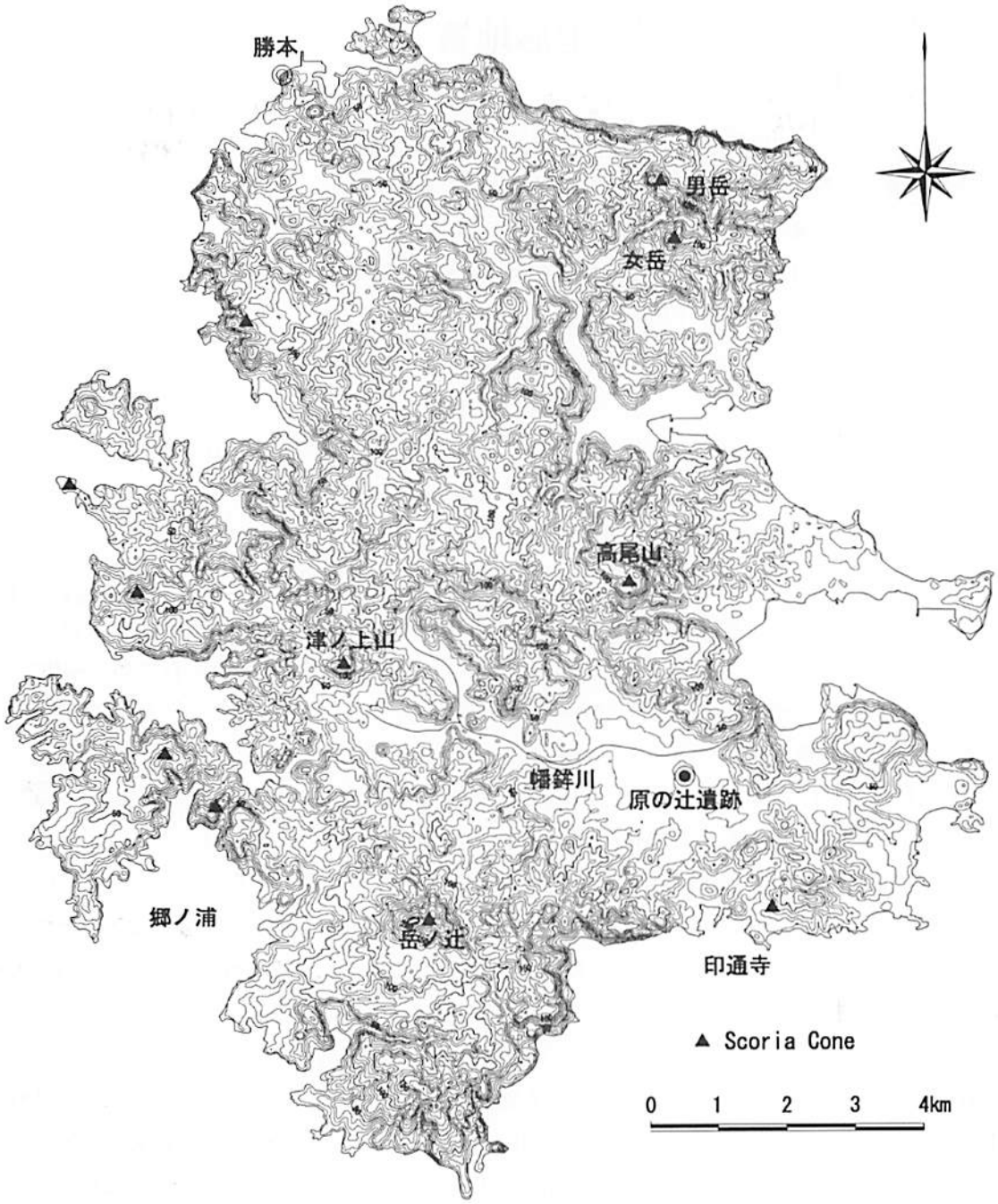
九州北西方の玄界灘に浮かぶ壱岐島は，西日本弧の火山フロントから150km内陸に位置し，主に新第三紀～第四紀中期の火山岩からなる。壱岐島の火山地質の研究は，奈佐（1891）や20万分の１地質図の調査（大築，1910）により予察的に行われ，さらに松井（1958）により５万分の１地質図幅調査が行われ全体像が明らかとなった。一方，青木（1958），Aoki（1959）は，本島に分布するアルカリ岩の岩石学的な成因の考察を行った。その後，壱岐団体研究会(1973)，壱岐島地学研究グループ(1973)，松本・壱岐団体研究グループ（1977），竹下ほか（1987）により，詳細な火山層序が明らかにされた。また，佐野（1995），松井ほか（1997）はK-Ar年代に基づいて壱岐島全体の火山噴火史を考察している。長岡・中川（2003）は，南部の岳ノ辻火山の噴火史について報告している。

壱岐島の地質は下位より，砂岩・頁岩からなる勝本層群，砂岩・泥岩・火山岩・凝灰岩・珪藻土からなる壱岐層群，玄武岩・安山岩・流紋岩・砂礫層からなる芦辺層群，そして玄武岩・安山岩からなる郷ノ浦層群に分けられる（壱岐団体研究会，1973；竹下ほか，1987）。勝本層群の形成年代は浮遊性有孔虫化石層序から始新世とされる（Sakai and Nishi，1990）。また，K-Ar年代値に基づいて，全島の分布する火山岩類の噴出時期は，第１期（4.3-3.5Ma），第２期（3.5-2.8Ma），第３期（2.5-2.2Ma），第４期（1.7-1.4Ma），第５期（1.0-0.6Ma）の５期（佐野，1995），または最古期（10.8Ma），古期（5.5-4.5Ma），中期（4.5-2.5Ma），新期（1.7-0.7Ma）の４期（松井ほか1997,）に区分されることから，火山岩からなる壱岐層より上位の地層の形成年代は中新世以降と考えられる．これら中新世以降に噴出した火山岩類は量的には玄武岩を主体とし，大部分が海抜100m以下の低平で侵食の進んだ溶岩台地を構成している（第１図）。台地上には，高尾山・津ノ上山・御津ノ辻・鹿ノ辻・岳ノ辻・久美ノ尾などのスコリア丘が点在している（第１図）。この中で，島の南部に位置する岳ノ辻は，海抜212mの島内最高点の山頂を持ち，底面の東西方向の長径1.2km，南北1.5km，溶岩台地からの比高約100m以上と島内のスコリア丘の中では最も地形的に大きい．岳ノ辻スコリア丘は，郷ノ浦層群の最上部に位置し，佐野（1995）の第５期，松井ほか（1997）の新期の火山活動に属し，約0.9-0.6 Maに活動したと考えられており（長岡・中川，2003），壱岐島では最も新しい活動の火山体の一つである。沖積低地は各河川沿いに小規模に分布するが，原の辻遺跡のある南部の幡鉾川流域に最も広く発達している。本報告では，以下，この沖積低地を幡鉾平野と呼ぶ。幡鉾平野の沖積層については，河村ほか（1998）によるナウマンゾウ化石と関連した報告がある。

2．幡鉾平野および周辺の地形・地質

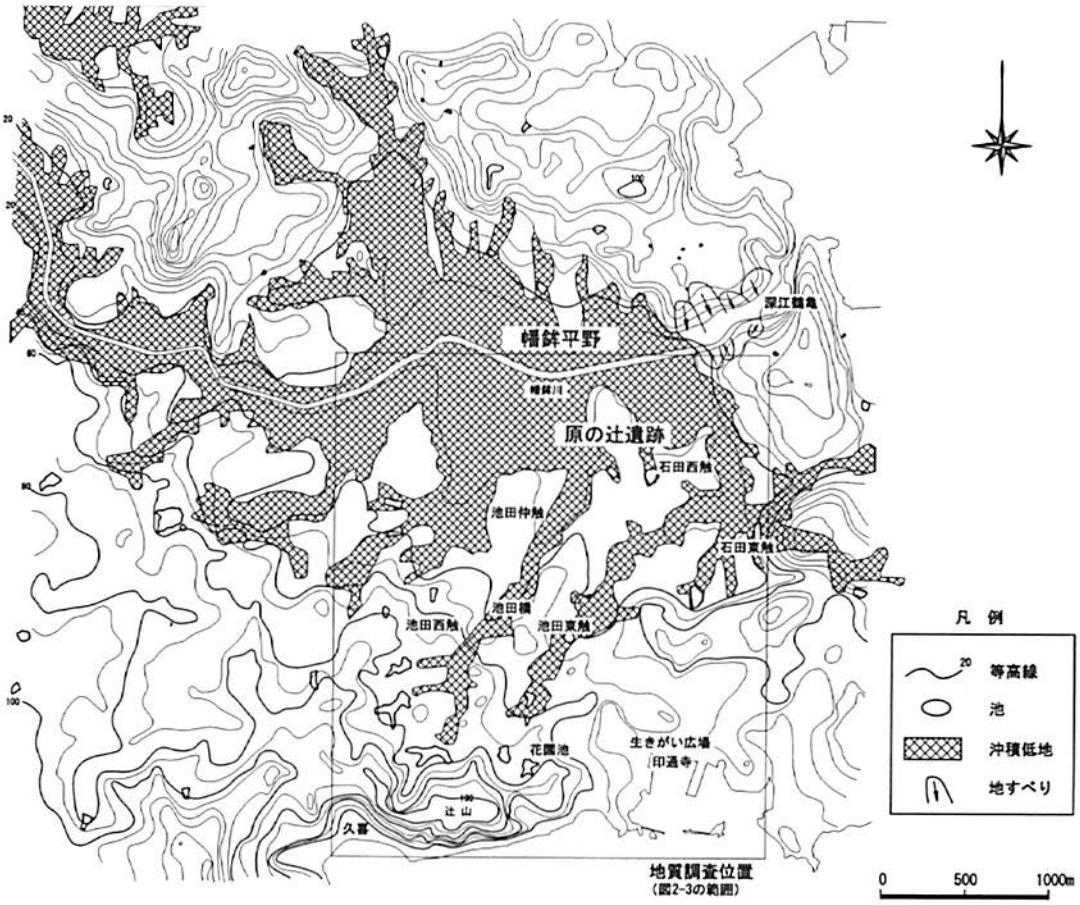
2－1　概　　観

幡鉾平野は，海抜50m以上の玄武岩台地や丘陵に囲まれた内陸盆地で，西から東に流下する幡鉾川に沿って，海抜20～５mの沖積低地からなっている（第２図）。原の辻遺跡は平野南部から舌状にのびる20～10mの丘陵およびその周辺の沖積低地に立地している。



第１図　壱岐島の接峰面図（1/25,000）
地形図から50mメッシュの数値地図を起こし，新たに10mメッシュの地形図を作成，これを基に20mメッシュの最高点を抽出し作成した。

幡鉾平野周辺の溶岩台地および平野内部の低平な丘陵の地質は，平野北縁では丘陵下部に壱岐層群の砂岩泥岩互層が広く分布しており，その上位を玄武岩が覆っている。平野南縁では玄武岩，流紋岩，凝灰岩，泥岩，礫岩など複雑な構成となっている。丘陵周辺には，沖積低地より数m高く，背後の丘陵斜面より緩やかな緩斜面が見られることがある。これは崖錐や河成段丘と考えられるが，露頭が少なく不明な点が多い。また一部は丘陵を人工改変した平坦地である。原の辻遺跡の位置する丘陵も周辺の丘陵に較べ際だって低平であることや大規模な集落が存在したことから，人為的に平坦化を受け



第２図　原の辻遺跡周辺の接峰面図と沖積低地の分布
接峰面図は１/5,000の地形図より100ｍメッシュの最高点を抽出し作成

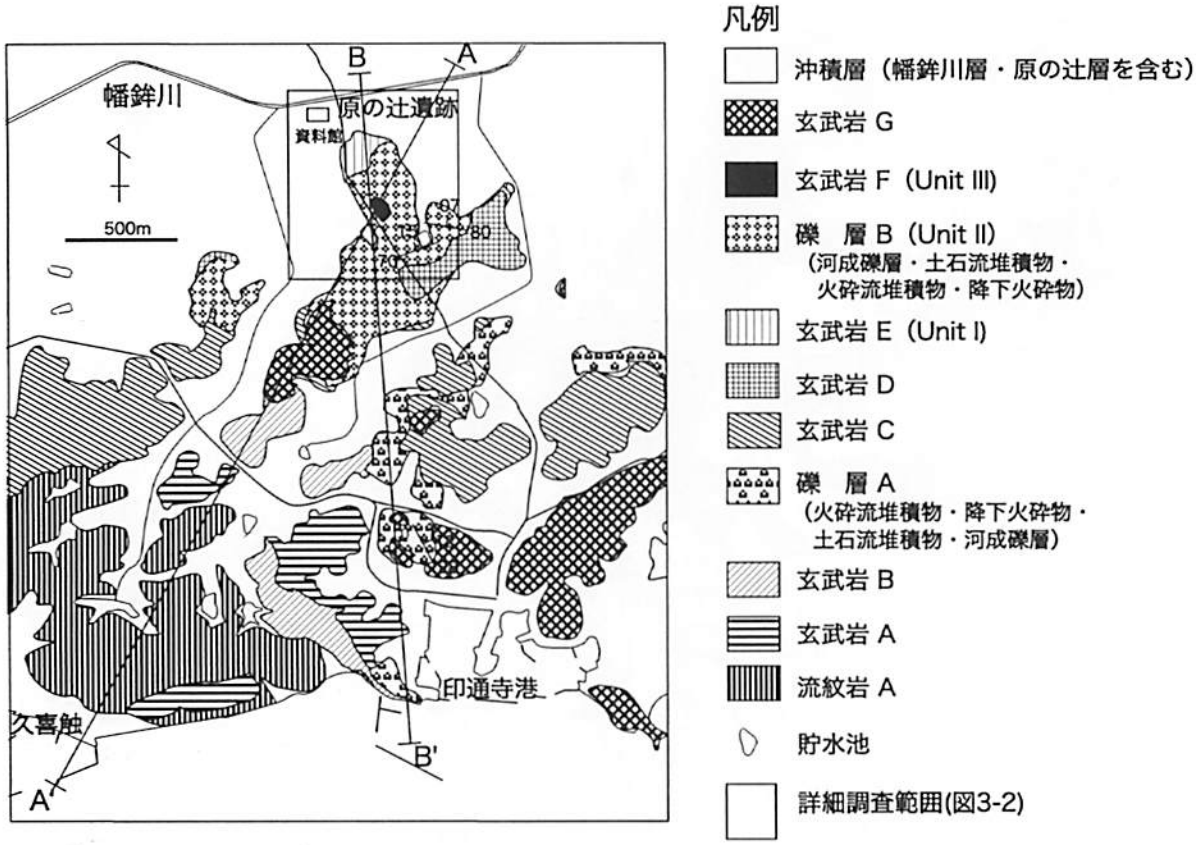
た可能性が高い。沖積低地の地質についての情報は少ないが，後述のように，幡鉾川下流域では，下位の砂礫質の更新統，幡鉾川層と，上位の砂泥質の完新統，原の辻層の２層からなっていることが知られている（河村ほか，1998）。

２－２　幡鉾平野の南縁部の地質

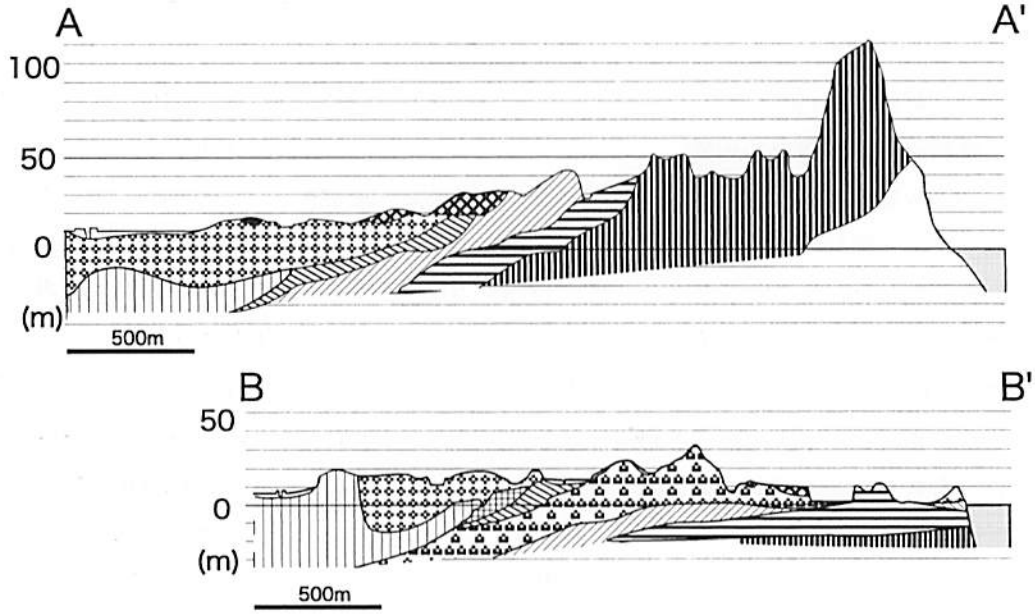
幡鉾平野の南縁部周辺地域は原の辻遺跡への地下水涵養地と推定されることから，以下に地質の詳細を述べる。なお，幡鉾平野南縁部に分布する玄武岩，流紋岩，凝灰岩，泥岩，礫岩などは郷ノ浦層群・壱岐層群（壱岐団体研究会，1973），または佐野（1995）の第２期に属する溶岩に対比される。しかし，これらの既存研究では層位関係と放射年代値との関係が整理されておらず，また，この地域の火山岩類の分類も不明確であることから，本報告では，既存の地層名は用いない。

原の辻遺跡を含む幡鉾平野南縁部の地層は層位関係と岩石学的特徴から，下位より，流紋岩Ａ，玄武岩Ａ，玄武岩Ｂ，礫層Ａ，玄武岩Ｃ，玄武岩Ｄ，玄武岩Ｅ，礫層Ｂ，玄武岩Ｆ，玄武岩Ｇに分けられる（第３図，第４図，表１）。

流紋岩Ａは，辻山周辺に広く分布する角閃石黒雲母流紋岩で壱岐団体研究会（1973）の壱岐層群久喜累層上部流紋岩に相当し，佐野（1995）の第２期 AR１（アルカリ流紋岩）に相当する。壱岐団体研究会（1973）では模式地を久喜から印通寺にかけての海岸を模式地としている。いずれの露頭も風化し，白色灰白色を呈す。



第 3 図　原の辻遺跡周辺地域の地質図



第 4 図　原の辻遺跡周辺地域の断面図
断面位置および凡例は第 3 図を参照

玄武岩Ａは印通寺港の西から池田橋の南付近に広く分布する無斑晶質の溶岩で，暗灰色を呈する。池田橋の南付近ではフローユニット間に層厚３ｍの降下火砕物を挟在する。印通寺港西の海岸では赤色土壌化した本層が３ｍの降下火砕物を挟み玄武岩Ｂに覆われる。

玄武岩Ｂは印通寺港西の海岸から花園池北側付近と，池田東触（遣新羅使墓）付近に分布する。暗灰色の溶岩で長石斑晶を特徴的に含む。印通寺港西の海岸では柱状節理が発達する。壱岐団体研究会（1973）の壱岐層群久喜累層安山岩に相当する。

礫層Ａは印通寺港西の海岸，旧石田町生きがい広場周辺と，石田西触，石田東触付近の丘陵斜面下部に分布している。おもに１㎝程度の軽石と岩片を含む桃色の火砕流堆積物と，降下火砕物(火砕サージを含む)，流紋岩礫や玄武岩礫からなる土石流堆積物を主体とし，他に河川性の礫層から構成されている。生きがい広場に分布する土石流堆積物には黒曜石の岩片が特徴的に含まれている。河成の堆積物の層理面は，北北西～南南東走向で東側に緩やかに傾斜している。生きがい広場の西側で玄武岩Ｇに覆われる。本層の一部は壱岐団体研究会（1973）の壱岐層群初瀬累層中の火砕流堆積物・凝灰岩に相当する。

玄武岩Ｃは池田西触から石田東触にかけての丘陵に分布している。斑晶は少なく，かんらん石と単斜輝石の斑晶が点在する灰色の溶岩である。多くの露頭では風化が進行し灰白色を呈し砂岩のように見える。池田西触では流紋岩Ａを覆っており，また礫層Ｂに覆われる。玄武岩Ｃおよびそれよりも上位の溶岩は，壱岐団体研究会（1973）の未区分玄武岩，佐野（1995）の第２期 AB30（アルカリ玄武岩）の一部に相当する。

玄武岩Ｄは池田および石田西触における丘陵の最北端に位置している。無斑晶質で灰～暗灰色を呈する。タマネギ状風化で赤色の風化色を呈する。本層は池田中触で礫層Ｂに覆われる。

玄武岩Ｅ（後述の原の辻遺跡における UnitⅠ）は原の辻遺跡丘陵最北縁および，試錐により丘陵地下に分布が確認される。暗灰色を呈し，かんらん石の斑晶を顕著に含む。板状の節理を特徴とする。原の辻遺跡にて本層は礫層Ｂに覆われる。

礫層Ｂ（UnitⅡ）は原の辻遺跡丘陵に広く分布しており，河成礫層および土石流堆積物から構成される UnitⅡb と，土石流堆積物，火砕流堆積物，降下火砕物から構成される UnitⅡa に分けられる。UnitⅡb の河成礫層は３㎝以下の玄武岩および流紋岩の亜円礫～円礫と，細砂～粗粒砂の基質をからなる。まれに挟まれる砂層の層理面はほぼ東西方向の走向で緩やかに北傾斜を示している。土石流堆積物は５㎝以下の亜角礫～円礫と，細砂～粗粒砂の基質からなる。最下部では玄武岩が礫の中心であるが，上位になるに割合は減少する。UnitⅡa の火砕流堆積物や降下火砕物は試錐でのみ確認されている。本層は玄武岩Ｄ，玄武岩Ｅ（UnitⅠ）をそれぞれ覆うが，一部指交関係にある可能性がある。

玄武岩Ｆ（UnitⅢ）は原の辻丘陵上部のみに分布している。露頭が風化していることから詳細は不明であるが，斑晶の少ない溶岩で灰白色を呈している。原の辻遺跡で礫層Ｂ（UnitⅡ）を覆っている。

玄武岩Ｇは幡鉾平野の中部から南東部にかけての丘陵の上部に分布している。暗灰色を呈し，かんらん石と少量の単斜輝石の斑晶を含んでいる。板状節理を示すことが多い。生きがい公園では礫層Ａを覆う。

これら幡鉾平野南縁部の台地および丘陵を形成する地層の年代は，佐野（1995）により最下位の流紋岩Ａについて3.45±0.18Ma の K-Ar 年代値が報告されている。さらに佐野（1995）はこの地域の

時代		地層名	岩　相	放射年代値
第四紀	沖積層	原の辻層	下部はトラフ型斜交層理をもつ砂層．木片や土器を含む． 上部は植物片を多く含む暗灰色シルト	4200±40yBP 植物遺体^{14}C法 (長岡,未公表)
		幡鉾川層	下部は細礫～大礫の不淘汰礫岩． 上部はトラフ型斜交層理をもつ砂層．ナウマン象化石を産出	39860±500yBP 木片^{14}C法 (古環境研究所,1998)
鮮新世	後期	玄武岩 G	灰黒色を呈し，層厚1m程度のフローユニットが複数認められれ，板状節理を示すことが多い．斑晶はかんらん石が多く単斜輝石もみられる．石基はインターグラニュラー組織で，トラキティック組織を示す．	3.12±0.16Ma K-Ar法(佐野,1995) 採取層準不明につき何れかの玄武岩
		玄武岩 F(Unit III)	無斑晶質，風化し灰色を呈する．	
		礫　層 B(Unit II)	上部のUnit IIaは層流堆積物が主体，下部のUnit IIbは，土石流堆積物，火砕流堆積物，降下火砕物などの堆積物が卓越．Unit IIaの層流堆積物は礫支持の礫層，もしくは不淘汰粗粒砂からなる．礫のサイズ，種類はUnit IIbとほぼ同じで1～5cmの亜角礫～円礫の流紋岩・安山岩・玄武岩からなる．Unit IIbの土石流堆積物は最下部で玄武岩の占める割合が多い．	
		玄武岩 E (Unit I)	灰色を呈し板状節理を示すことが多い．斑晶はかんらん石および単斜輝石もみられる．石基はインターグラニュラー組織で，トラキティック組織を示す．	
		玄武岩 D	暗灰色を呈する溶岩．無斑晶質で石基はインターグラニュラー組織を示す．石基には不透明鉱物が多い． 赤色に風化し，タマネギ状になることが多い	
		玄武岩 C	灰色を呈すする溶岩．風化色は白色～灰白色．斑晶量は少なくかんらん石と単斜輝石の斑晶が点在．石基はインターグラニュラー組織で，トラキティック組織を示す．	
		礫　層 A	火砕流堆積物，降下火砕物（火砕サージを含む），流紋岩礫や玄武岩礫からなる土石流堆積物を主体とする．他に河川成の礫層から構成されている．	
		玄武岩 B	灰色の溶岩で柱状節理を示す．2mm程度の長石や単斜輝石の斑晶を多く石基は含むインターグラニュラー組織で，弱いトラキティック組織を示す．	
		玄武岩 A	暗灰色を呈する溶岩で無斑晶質．降下火砕物を挟む	
		流紋岩 A	角閃石黒雲母流紋岩．針状の角閃石を特徴的に含む．灰白色を呈する．	3.45±0.18Ma K-Ar法(佐野,1995)

原の辻遺跡地区に分布する地層

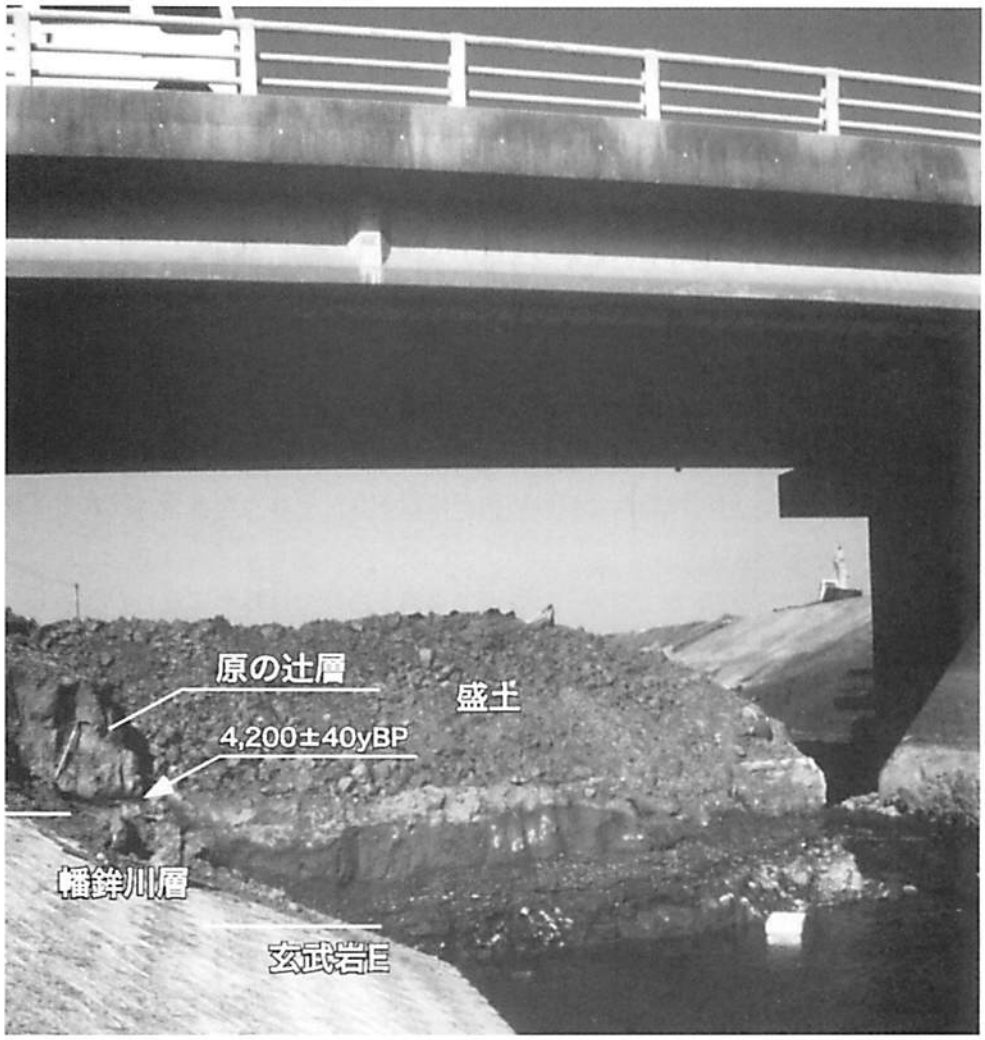
表１　原の辻遺跡周辺地域の層序表

玄武岩（AB30）の年代測定も行い，3.12±0.16Ma の年代値を得ている。しかし，玄武岩の採取地点の詳細記載がないことから，採取層準が本報告のいずれの玄武岩に相当するのかは不明である。いずれにしてもこれらの値から台地および丘陵を構成する地層は後期鮮新統である可能性が高い。

3．原の辻遺跡の地形地質

3－1　沖積低地

原の辻遺跡周辺の沖積低地は，海抜８～５m付近にあって，南から北へ舌状に伸びた丘陵を取り囲んで分布している。現在の幡鉾川は河川改修によって直線的に改められ沖積低地を２～３mほど掘り下げて流れている。遺跡周辺の沖積低地を構成する地層は，下部の幡鉾川層と上部の原の辻層である



PL. 1　津合橋下の幡鉾川河床に露出する幡鉾川層と原の辻層

（河村ほか，1998，PL. 1）。

幡鉾川層（河村ほか，1998）は，津合橋付近から下流の幡鉾川沿いを模式地とする。模式地付近では，厚さ1～3m以上あり，下部がやや固結した大礫大以下細礫主体の礫層で，上部が時折トラフ型斜交層理を交える細砂から粗砂である。層相から小規模な河川の流路堆積物と考えられる。この中からナウマンゾウ化石が発見されており，このゾウ化石や含まれる木片の^{14}C年代値が2万～4万年前を示すことから（古環境研究所，1998），幡鉾川層の時代は後期更新世と考えられる。

原の辻層（河村ほか，1998）は，原の辻遺跡周辺を模式地とする原の辻遺跡の環濠などの遺構の包含層である。沖積低地を直接構成している地層である。模式地付近では，厚さ3m以下である。下部1mが細礫～細砂層で，トラフ型斜交層理が発達し，大型の材木や土器片が混じる。PL. 1のように最下部に植物遺体が密集することもある。下部は流路堆積物と考えられる。上部2mは，均質な暗灰色粘土～シルトで茎や葉などの植物片が見られることから，後背湿地堆積物と推定される。筆者の一人，長岡は，PL. 1の原の辻層基底の植物遺体密集層から，^{14}C年代として4200±40yBP（紀元前2800-2650暦年，GX-24661-AMS，長岡未公表資料）を得ていることから，原の辻層の大部分は，紀元前2800年前以降の完新世に堆積したと推定される。

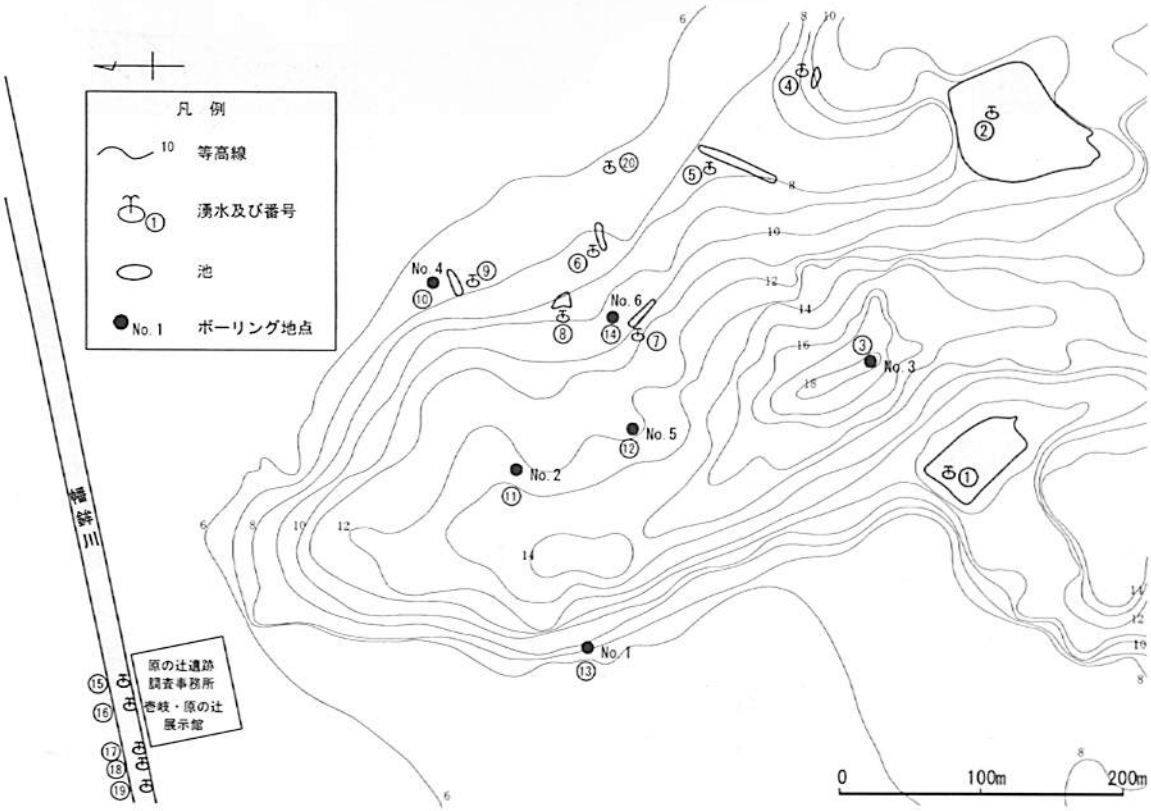
原の辻層がつくる沖積低地は，原の辻遺跡周辺の幡鉾川中流部では比較的広いが，平野の出口の深江鶴亀地区付近は玄武岩台地が迫る狭窄部となって，幡鉾川はそのまま海に至る。ここには地すべり地形が集中的に分布し（第２図），またボーリング調査によっても，基盤の壱岐層群の泥岩，砂岩を覆って，地表から深度11mまで地滑り移動体の崩壊堆積物（地すべりブロック）が確認されている（長崎県壱岐支庁・西日本技術開発株式会社，1991）。現時点では，幡鉾平野および周辺の地質情報が乏しいため，断定はできないが，こうした地すべりや人為により幡鉾川が堰き止められて上流側に湿地が出現し，そこに原の辻層が堆積したと考えられる。

３－２　丘　　陵

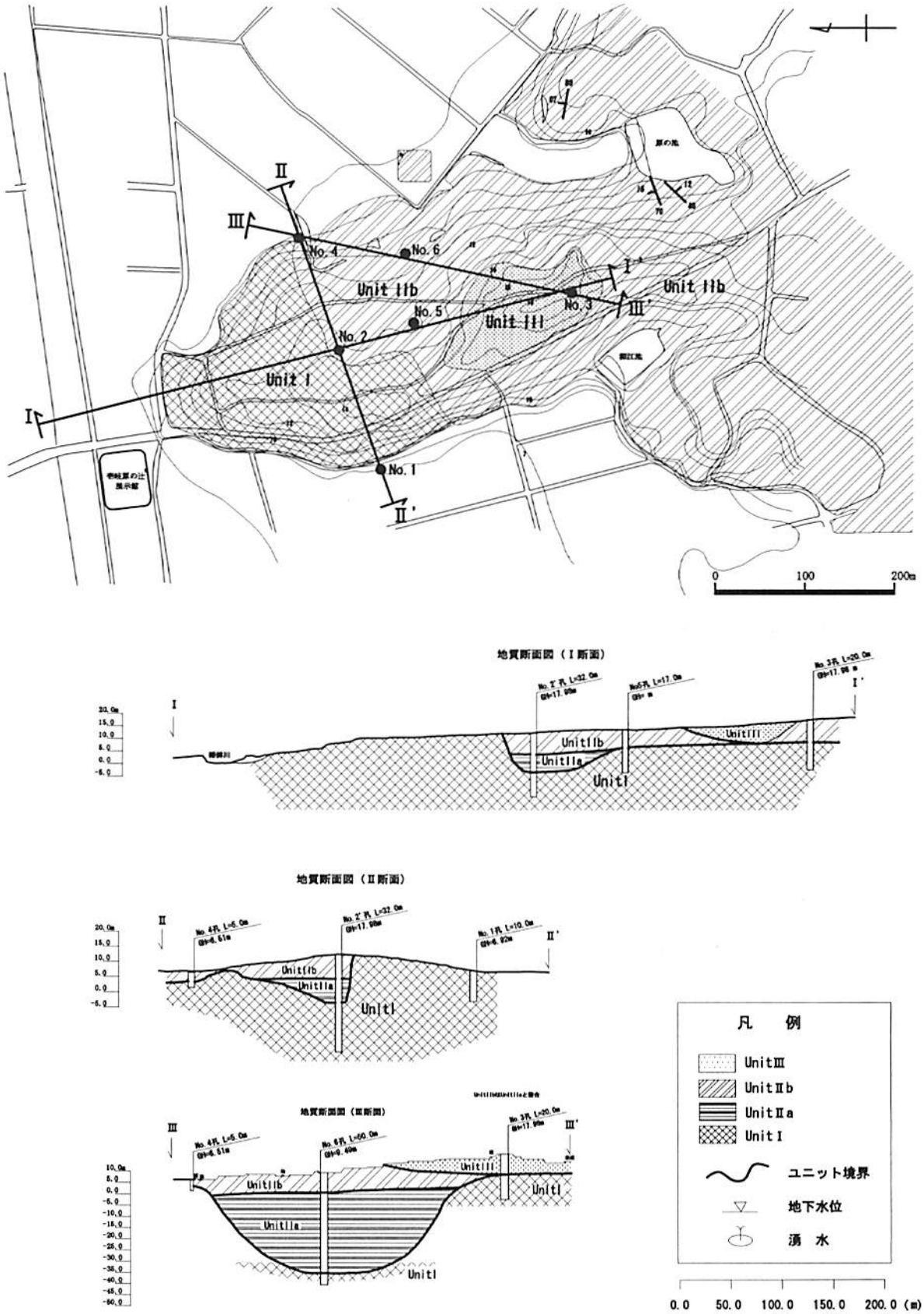
ここでは原の辻遺跡が位置する丘陵を原の辻丘陵と仮称する。原の辻丘陵は，南北方向に伸びた舌状を呈しており，一見溶岩が流下した溶岩の残丘地形に見える。しかし，後述するように，今回，溶岩の他にも火砕流や土石流，河川流路などの砕屑物が確認され，それらが堆積と浸食を繰り返し，最終的に丘陵化した地形である。

また，丘陵の地形を細かくみると，稜線をはさんで東側と西側では地形に違いが認められる。すなわち，西側は等高線が密で急峻な地形であるのに対し，東側は等高線が粗でなだらかな地形を呈している（第５図）。これは，西側に堅い玄武岩Ｆ（UnitⅢ）のキャップロックあり，東側に比較的柔らかい礫層Ｂ（UnitⅡb）が広く露出しているためである。

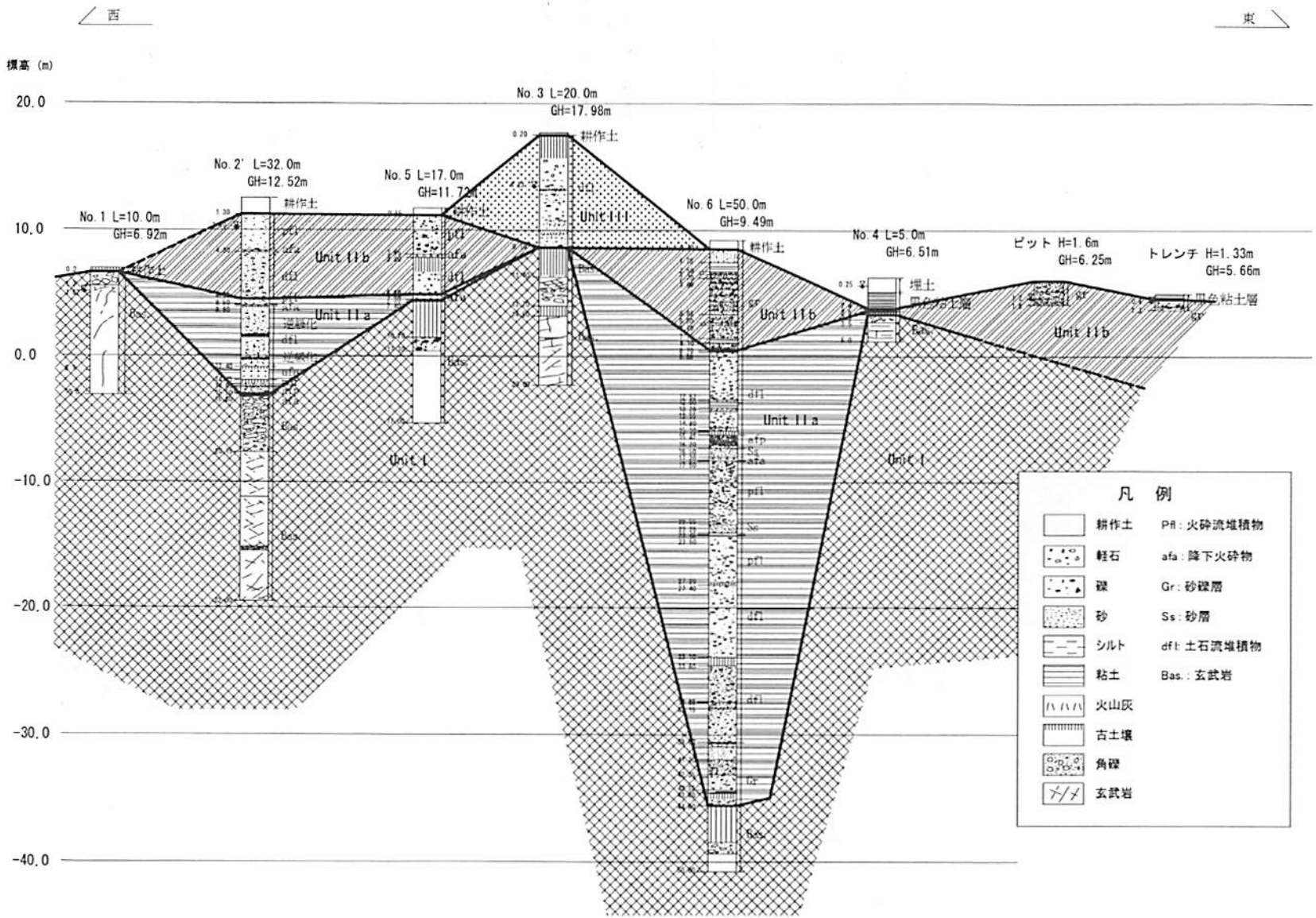
竹下ほか（1987）や佐野（1995）によると，表層の遺物を包含する土壌層を除く，原の辻丘陵の地質は，鮮新世～更新世の玄武岩のみとされている。しかし，今回の地表およびボーリング調査結果から，玄武岩質溶岩のみならず，流紋岩質火砕流堆積物や降下火砕物，土石流および河成堆積物などが



第５図　原の辻遺跡の等高線図



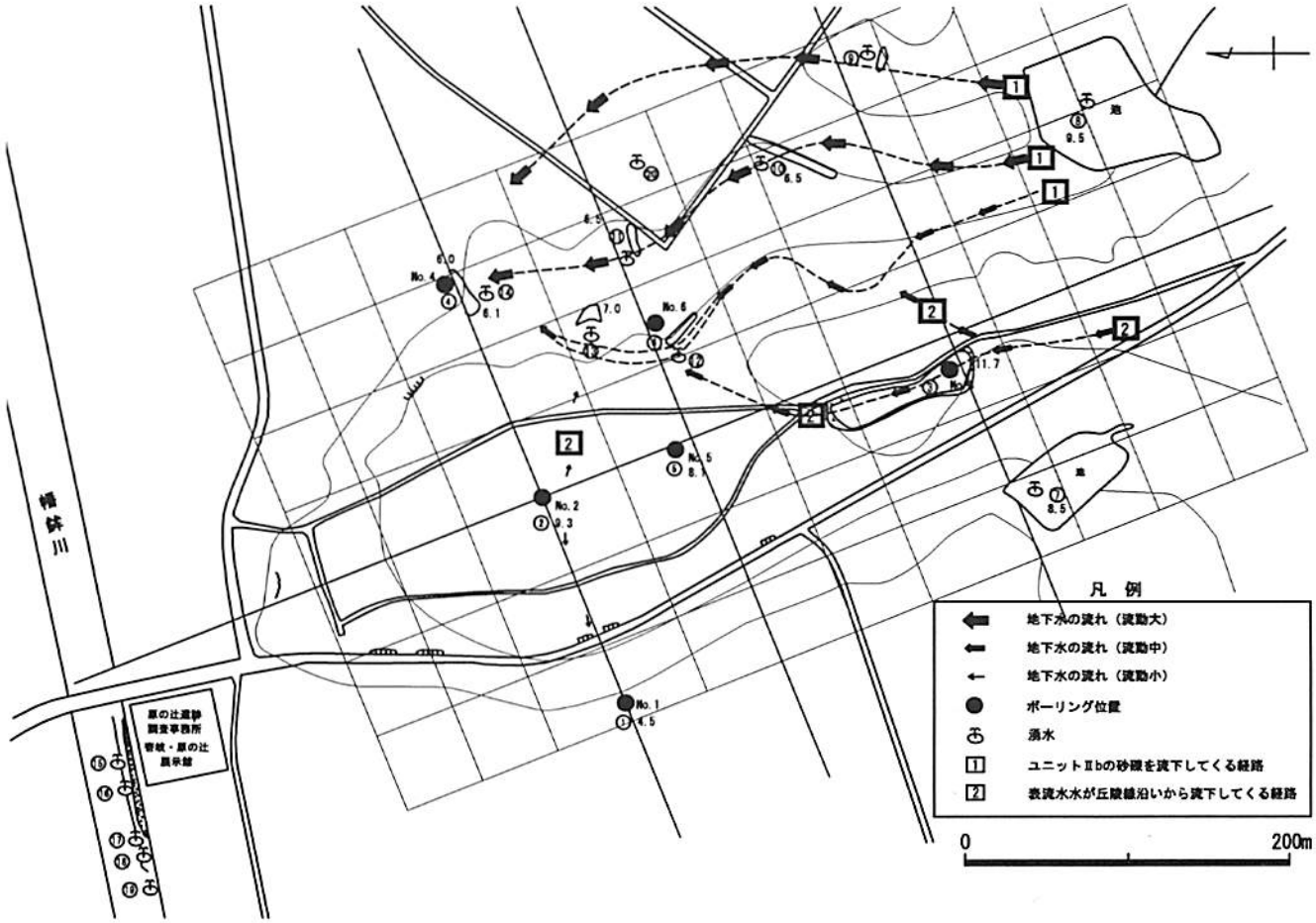
第６図　原の辻丘陵の地質図・断面図

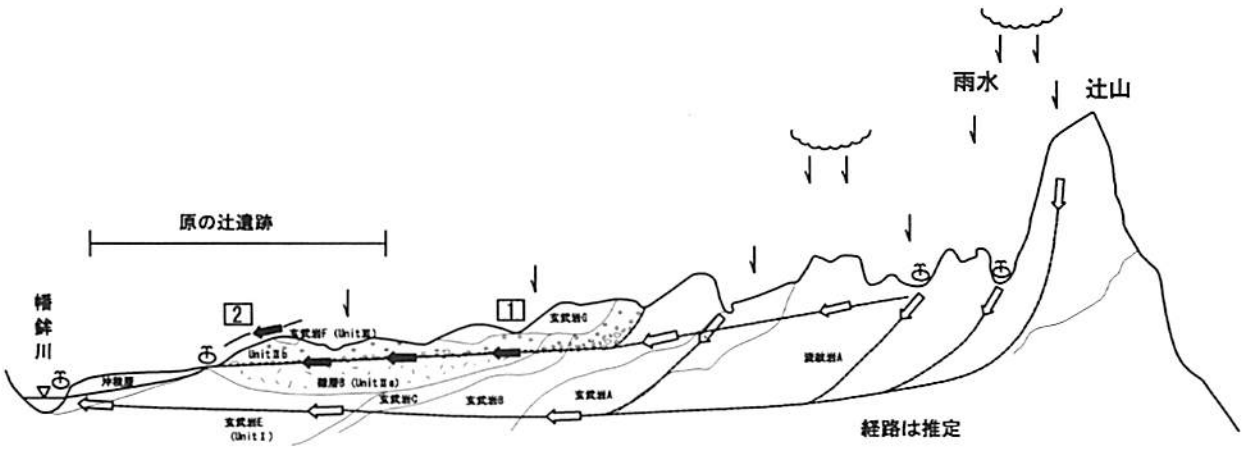


第７図　原の辻遺跡丘陵のボーリングコア柱状図の対比

複雑に分布していることが判明した。

この丘陵は，玄武岩や火砕流堆積物，土石流堆積物，河成堆積物などの砕屑物から構成されており，





1：ユニットⅡbを流下してくる経路

2：表流水が丘陵線沿いから流下してくる経路

第８図　原の辻丘陵の地下水経路

それらは，層相と浸食面の存在に基づいて，下位より玄武岩からなるUnitⅠ，礫質の砕屑物からなるUnitⅡ，そして玄武岩からなるUnitⅢの３ユニットに分けられる。さらにUnitⅡは上部の河成堆積物を主体とする（UnitⅡa），火砕流堆積物および土石流堆積物を主体とする（UnitⅡb）に細分される。これらのユニットは，幡鉾平野南縁域の調査結果に基づいた前述の地層区分では，UnitⅠは玄武岩Ｅ，UnitⅡは礫層Ｂ，UnitⅢは玄武岩Ｆにそれぞれ相当する（第６図，第７図）。UnitⅡbは，地表露頭やトレンチで確認されており，地層の走向は概ね東～西方向で，北～北東に緩く傾斜している。このUnitⅡbは湧水の集中する丘陵東側を構成し，UnitⅡbからの湧水も直接観察されることから，地下水流動との密接な関係が強く示唆される地層である。

４．遺跡の湧水と地下水の経路

原の辻遺跡周辺では，湧水箇所が多く存在しているが，特に丘陵の東側に多く認められる。原の辻丘陵の稜線は，南北方向に伸び，南側に向かって標高が高くなっていくが，その稜線は南北から南西方向に変化し，後方の辻山（標高116.6m）まで伸びている。原の辻遺跡南方の地質は，玄武岩・流紋岩などの火山岩類が主体であり，地質的に帯水層となりやすいことから，原の辻遺跡周辺の地下水は，大きくは後方の辻山から供給されていると考えられる。しかしながら，原の辻遺跡周辺では地質構成や地質構造が複雑になっていることから，地下水の供給は，それらを反映していると考えられる。すなわち，間隙地質的に帯水層を形成できる可能性がある地層は，①UnitⅡbの河成礫層，②UnitⅡaの火砕流堆積物，③UnitⅠの玄武岩Ｆの３層であり，これらに地下水が供給されていると考えられる。

これらの帯水層のうち，丘陵東側～北東の湧水と関係するのはUnitⅡbの河成礫層である。この堆積物は，走向が概ね東西方向で北に緩く傾斜していることから，地層の傾斜方向に地下水が流下しているものと考えられる（第８図）。但し，この砂～砂礫層は，風化により基質が粘土化している部分が多いことから，地層全体が帯水しているのではなく，部分的に帯水層が存在し，同地層中の間隙部を網目状に地下水が流下しているものと考えられる。特に丘陵東側の環濠が存在する付近は，地温探査結果から低地温が測定されており，網目状の水みちが形成されている可能性が高い。したがって，このUnitⅡbが存在するために丘陵東側で湧水が多く存在すると考えられる。

一方，原の辻遺跡丘陵では，地下水位観測を実施しているが，地下水位は比較的高い位置にあり，雨期では地表から－１～－３m，乾期でも地表から－２～－６mに分布している。等地下水位線図を描くと，丘陵の等高線と調和的であり，稜線沿いの上部ほど地下水位は高くなっている。このことは稜線沿いの上部から下部への地下水の流れがあることを示しており，上記UnitⅡbの砂礫層中を流下する地下水とは別の経路も考えられる。すなわち，丘陵の頂部から，東側の湧水につながる経路の表層水である。丘陵の上部は，地下水位が高くなっているが，この原因は表層地質が(1)不透水性の粘土化したUnitⅡb～Ⅲからなること，(2)丘陵が緩傾斜であること，(3)丘陵が水田や畑などとして利用されていることが挙げられる。但し，丘陵の東側は湧水に係わる流域面積が小さいこと，この上部での地下水位観測では，乾期に地下水位が低下することから，地下水の流れとしては小さいものと想定される。

以上から，丘陵東側の湧水を涵養する地下水の経路は，１）UnitⅡbの砂礫層を流下してくる経路，２）表流水が，丘陵稜線沿いから流下してくる経路の２とおりがあると考えられるが，UnitⅡbの砂礫層流下している経路が湧水の形成に大きく関わっていると考えられる。

5．ま と め

1）原の辻遺跡は，幡鉾川沿いの丘陵と沖積低地に位置している。

2）環濠等が分布する沖積低地は，後期更新世の幡鉾川層と紀元前2800年以降に堆積した原の辻層からなる。

3）原の辻遺跡の主な集落が分布する丘陵は，鮮新世の複数の溶岩や火砕流，土石流，河川堆積物が，堆積と浸食を繰り返し，それらが最終的に丘陵化した地形である。

4）遺跡の湧水を涵養する地下水の経路は，河川性や土石流性の砂礫層中と丘陵表層が考えられ，特に前者が大きな役割を果たしている。

（長岡信治・鳥井真之・林信雄）

謝　　辞

高野晋司前所長をはじめとする長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所の皆さま，壱岐市教育委員会文化財保存課の皆さま，遺跡保存整備委員会委員の皆さまには格別のご支援を頂きました。また，東京大学大学院の辻誠一郎教授ならびに西日本技術開発株式会社の西園幸久博士には有益なご助言を頂きました。さらに地表踏査に際しては壱岐市民の皆さまにご協力頂きました。ここに記して深く感謝の意を表します。

【引用文献】

青木謙一郎（1958）壱岐島および東松浦半島地域のアルカリ岩の分化．火山，3，1-16.

Aoki, K.(1959) Petrology of alkali rocks of the Iki Islands and Higashi-Matsura district, Japan. *Sci.Rep.Tohoku* Univ., Ser. 3，6，261-310.

壱岐団体研究会（1973）壱岐島の地質－とくに中新統壱岐層群について．地質学論集，9，69-81.

壱岐島地学研究グループ（1973）壱岐島の地質と化石－第三系層序，象化石，魚類化石について．金沢大学日本海域研究報告，5，89-114.

河村善也・稲田孝司・副島和明（1998）長崎県壱岐幡鉾川周辺の第四紀哺乳動物化石とそれれに関連する第四紀層．平成７年度～平成９年度科学研究費補助金　基盤研究(Ｂ)⑵研究成果報告書，課題番号07459015，「旧石器時代動物化石共伴遺跡の探査とタフォノミー研究」研究代表者　稲田孝司，55-66.

古環境研究所（1988）第四紀哺乳動物化石関係資料の放射性炭素年代測定結果．平成７年度～平成９年度科学研究費補助金　基盤研究(Ｂ)⑵研究成果報告書，課題番号07459015，「旧石器時代動物化石共伴遺跡の探査とタフォノミー研究」研究代表者　稲田孝司，86-87.

松井和典（1958）５万分の１地質図幅「勝本・郷ノ浦・芦辺」および説明書．地質調査所，31ｐ.

松井和典・宇都浩三・広島俊男（1997）20万分の１地質図幅「唐津（第２版）」．地質調査所.

長崎県壱岐支庁・西日本技術開発株式会社（1991）鶴亀地区地すべり調査委託報告書．30ｐ.

松本征夫・壱岐団体研究グループ（1977）壱岐の地質．長崎県生物学会（編）」「壱岐の生物」，13-37.

長岡信治・中川英朗(2003)長崎県壱岐島，岳ノ辻火山の噴火史．長崎大学教育学部紀要，自然科学，69，1-16.

奈佐忠行（1989）長崎縣管内豫察地質調査報文．地質要報，第壱号，農商務省地質調査所，266p.

大築洋之助（1910）20万分の１地質図幅「壱岐」および同説明書．64p.

Sakai,H.,Nishi,H.(1990) Geologic age of the Taishu Group and the Katsumoto Formation in the Tsushima and Iki Island, off Northwest Kyushu on the basis of planktonic foraminiferas. *J.Geol.Soc.Japan*，96，389-392.

佐野貴司（1995）壱岐火山群の地質：主にK-Ar年代に基づく溶岩流層序．火山，40，329-347.

竹下　壽・林　茂・浦川虎郷・山内正志・田島俊彦・壱岐団研(1987)壱岐島の火山層序．地団研専報，33，21-52.

Ⅱ　原の辻遺跡の歴史的環境

1．旧石器時代～古墳時代

壱岐島は，博多，対馬へ約67km，佐賀県呼子まで約26kmの距離で，その地理的条件から中国大陸や朝鮮半島と日本とを結ぶ，文物の交流，交通，防衛上の中継地点，拠点として歴史上重要な役割を果たしてきた。ここでは，壱岐島及び原の辻遺跡の旧石器時代から古墳時代までの歴史的環境について概観してみたい。

1. 串山ミルメ浦遺跡
2. 前神田遺跡
3. 浦海遺跡
4. 松崎遺跡
5. 大柳遺跡
6. 鎌崎遺跡
7. 名切遺跡
8. 原の辻遺跡
9. 堂崎遺跡
10. 大久保遺跡
11. 大宝遺跡
12. カラカミ遺跡

第９図　原の辻遺跡弥生時代集落以前の遺跡

原の辻遺跡では，多くのナイフ形石器，台形石器，石核，細石器等が発見されている。旧石器は，他にも壱岐島内では，興触遺跡，カラカミ遺跡，国柳遺跡でも出土しているが，いずれも後期旧石器時代，姶良丹沢火山灰（AT）以降の石器群である。なかでも，台形石器は，AT降灰直後の石器組成上重要で，「原の辻型台形石器」と呼ばれている。また，朝鮮半島との関係が指摘される剥片尖頭器も出土している。この他，原の辻遺跡では，ナウマン象臼歯が数例発掘されているが，残念ながら旧石器との共伴は確認されていない。また，縄文時代の遺物では，打製石鏃や土器片が出土して人的活動の一端を知りえるが，詳細は不明である。壱岐島全体では，20カ所ほどの縄文時代の遺跡が知られている。主に沿岸部に多く見られ，従来は島の西半部に偏っていたが，近年東半部でも遺跡が発見・調査されている。なかでも勝本町の松崎遺跡は，湯ノ本湾の潮間帯に位置し，曽畑式土器などを出土する前期から後期の遺跡である。朝鮮半島南岸地域の櫛目文土器が採取され，この時代における朝鮮半島との繋がりを示している。郷ノ浦町の鎌崎遺跡からは石製銛先などが発見され，同町の名切遺跡では後期を中心とした30基を越すドングリ貯蔵穴が潮間帯から検出されている。

弥生時代になると，壱岐島は，３世紀の有名な中国の歴史書『魏志倭人伝』に「一支國」として登場する。そこに記載されている弥生時代終末期の状況は，「(対馬國から）南に瀚海という海を渡り，千里余行くと，一大國（一支國）に着く。長官は卑狗，副官は卑奴母離と呼ばれている。広さは四方三百里ばかり。竹林・叢林が多く，三千ばかりの家がある。やや田地があるが，食べるには足らない。南北に海を渡って米などを買っている。」というもので，短いが当時の壱岐を知る貴重な記述である。

これまでの調査結果によると，原の辻遺跡では，弥生時代前期後葉段階になると集落が形成され，台地（高元地区）と低地（不條地区）の約８ヘクタールの範囲で居住が始まったと考えられる。壱岐

島内では，現在約60カ所の弥生時代の遺跡が確認されているが，原の辻遺跡はその中で最大の規模を誇り，検出，出土した遺構と遺物も質，量ともに他をしのいでいることから，『魏志倭人伝』に記載されている「一支國」の王都に特定されている。『魏志倭人伝』に記載された国の都が特定された遺跡は唯一である。島内で原の辻遺跡（芦辺町・石田町）以外の弥生時代の重要な集落遺跡としては，カラカミ遺跡（勝本町）と車出遺跡（郷ノ浦町）がある。カラカミ遺跡は原の辻遺跡と同時期に始まる。高地に位置し，環濠を巡らせているが，原の辻遺跡と比べると規模が小さく遺物の内容もやや劣る。原の辻遺跡と別個に発祥した集落が原の辻遺跡の発展過程のなか，原の辻主導で連合して島北部の管理を担ったものと考えられる。車出遺跡は弥生時代中期後半に始まり，その発祥時にはすでに原の辻遺跡は発展を遂げていたため，また幡鉾川上流に位置するが，その水系により原の辻遺跡とも結ばれているため，発祥時より原の辻主導の連合下にあったと考えられる。原の辻遺跡の集団の一部が分離形成した可能性もある。西側の低い丘陵を越えると，対馬を望む半城湾に出る。島内外から幡鉾川を下って原の辻遺跡に入る物資の搬入拠点，島西部の管理拠点として重要な役割を果たしていたと考えられる。

第10図　壱岐の弥生時代主要遺跡分布図

弥生時代中期前半須玖Ⅰ式段階には，環濠の掘削，船着き場や祭儀場等の整備などの計画的大土木工事により，一支國の王都としての景観を呈するようになる。背景として，紀元前108年の前漢による楽浪郡等４郡の設置を契機とする交易活動の活発化と，これを促進する北部九州地域のクニ連合体による交易中継センターとしての機能拡充があったものと推察される。船着き場に近接する遺跡西北部低地（不條地区）では，朝鮮半島系無文土器や擬無文土器，五銖銭，三翼鏃などの中国系の遺物が集中して出土している。出土した土器の器種は煮炊具の甕を主体とするため，この地区に大陸系の人々が多く居住し，船着き場を利用した，民間による自由な交易が行われる市が存在した可能性が高い。弥生時代後期初頭には，低地の居住域の放棄と環濠の再掘削と新設が行われている。環濠は，弥生時代中期後半しだいに埋没していったが，後期に入り再び掘削されている。また，遺跡西北部低地（不條地区）では，後期になると生活関連の遺構は姿を消し，換わって複雑に配置，新設された５条に及ぶ濠が検出された。反面，台地上の居住域は過密状況を呈し，あたかも籠城的観がある。溢れ出た人口は，車出遺跡に収容された可能性もある。従来の船着き場も後期初頭が使用の下限であり，新たな船着き場は別地点に移転され，交易のための市も台地上に移ったと考えられる。朝鮮半島系土器の出土傾向を見ると，原の辻遺跡の場合，概ね無文土器は弥生時代前期末から中期前半，三韓系土器・楽浪系土器は中期後半から後期，陶質土器は古墳時代前期という変遷をたどるが，三韓系土器・楽浪系土器・陶質土器の出土は，台地上やその周辺を中心とする。また，器種はそれまでと変わって，交易に伴い搬入されたと推測される貯蔵用の壺を主体とするようになり，交易の在り方もこの時期に政治

的管理下に置かれるようになったと考えられる。これらの変化は，後の「倭国大乱」につながる北部九州地域の政治体制の再編成を背景とした，防御域の拡大強化を示すものと考えられる。しかし，弥生時代後期後葉になると濠に遺物が一括廃棄されるようになり，弥生時代終末期にはほとんどの濠が埋められていく。「倭国大乱」の終息と邪馬台国連合体制への編入による，防御施設の不要化などによるものであろう。

繁栄を誇った一支國の王都も４世紀中頃，古墳時代前期前葉に解体消滅する。朝鮮半島では313年楽浪郡が，314年帯方郡が相次いで高句麗に滅ぼされた。国内においても，この時期は大和政権による国内統一が進展して，これまでの対外交渉・交易システムが崩壊し，原の辻遺跡の国際的交易センターとしての存在意義が失われたためと考えられる。

1. 双六古墳　2. 笹塚古墳　3. 鬼の窟古墳
4. 壱岐島分寺跡　5. 串山ミルメ浦遺跡
6. 原の辻遺跡（安国寺前A地区・川原畑地区）
7. 原の辻遺跡（大川地区）　8. 椿遺跡
9. 大塚山古墳

第11図　壱岐の古墳・古代の主要遺跡分布図

江戸時代中頃，1742（寛保２）年に編纂された『壱岐国続風土記』には，壱岐島に338基の古墳があったと記録されている。また，有名な平戸藩主松浦静山の『甲子夜話』には，1837（天保８）年に296基の古墳があったことが記されている。現在でも壱岐島には，長崎県内500余基の半数以上，約270基の古墳が確認されている。編年的には４世紀まで遡るものはなく，最古期のものの１つに芦辺町の大塚山古墳がある。直径14m，高さ２mほどの円墳で，壱岐では最古の竪穴系横口式石室を内部主体とする。５世紀後半の築造と考えられ，原の辻遺跡をのぞむ北側の山頂にあり，この頃までは環濠集落解体後も依然として付近に集落が営まれ，原の辻遺跡の首長に繋がる支配勢力が付近に存在していたことが推測される。６世紀から７世紀になると，島央の国分地区周辺に大型古墳が集中して築造された。現存する約270基のうち，実に90余基が勝本町南部から芦辺町西部にかけての直径800mの円内に集中している。代表的な古墳をあげると，長崎県内で最大規模の前方後円墳である双六古墳は，全長約91m，後円部の高さ10mに比べて，前方部は高さ４m，長さ44mと低く長い独特の形態をとる。県内最大の円墳である鬼の窟古墳は，直径約45m，高さ13mを有する。石室の規模は長さ17mで，玄室，中室，前室からなっている。金銅製馬具が出土した笹塚古墳は，高さは10mながら直径は38mを誇る。石室は長さ15m余を有し，構造や構築方法は鬼の窟古墳とまったく同じプランであり，強い類似性をもつ。このような古墳の規模や副葬品の内容などから，壱岐の首長と中央政権との強い結びつきが窺えるが，これもまた中国大陸や朝鮮半島との中継拠点としての，壱岐島の政治的，国防的重要性に起因するものであろう。そして，この時期に島内における中心勢力が原の辻付近から島央に移動したものと考えられるのである。

（杉原）

2．古代～近世

(1) 古　　代

大化の改新以降の律令による中央集権国家体制の形成にともなって，全国に国郡が設置された。九州の諸国については，『続日本紀』巻３・慶雲３年（706）７月条に「九国三島」と見え，このうち三島が壱岐・対馬・多禰をさしていることはほぼ疑いなく，壱岐は国に準じる扱いを受けていた。国には大・上・中・下の等級が設けられていたが，『延喜式』巻22・民部上によれば，壱岐は下国で，壱岐・石田の２郡が置かれ，また，近・中・遠のうち遠国であった。令の規程で下国は国司として守１人・目１人，書記役として史生３人と決められており（『令義解』巻１・職員令），国司の四等官のうち介・掾は置かれていない。ただし，天平10年（738）の「周防国正税帳」（正倉院文書／『大日本古文書』巻２）には，「壱岐島掾従七位下間人宿祢玉浦」と見え，『延喜式』の記載と違い，「掾」の存在が確認できる。

壱岐国司の職掌は，一般の国司の職掌以外に「惣べて鎮捍（寇賊の防禦鎮定），防守，及び蕃客の帰化を知る」（『令義解』巻１・職員令）と，対馬・日向・薩摩・大隅などの国々とともに対外的防備の役割が付加されており，令の制度上特別地域として規定されていた。

元和本『和名類聚抄』巻５によると，田は620町，壱岐郡に風早・可須・那賀・田河・鯨伏・潮安・伊宅の各郷が，石田郡に石田・物部・筥原・沼津の各郷があり，国府は石田郡にあった。また，高野山本『和名類聚抄』巻９には駅家として壱岐郡に伊周，石田郡に時通の名が見える。

壱岐の国府は，その成立について不明な点が多いが，天平２年（730）正月，大宰帥大伴旅人宅に集まって開かれた梅花宴で，壱岐守板氏安麻呂（『続日本紀』巻12・天平７年９月条では板茂連安麻呂とある）及び壱岐目村氏彼方が歌を残しており（『万葉集』巻５・831及び840），少なくともこの頃までには成立していたと思われる。この国府の所在地については諸説あるが，考古学的にはいまだ特定されていない。これに関連して原の辻遺跡では，奈良・平安時代の木簡，硯，初期貿易陶磁器，施釉陶器などが出土している。また，道路状遺構も確認されており，この付近に官衙など，重要施設が存在した可能性が考えられる。

国分二寺については，天平16年（744）の詔で「四畿内七道の諸国，国別に正税四万束を割き取りて，以て僧尼両寺に入るること各二万束，毎年出挙して，其の息利を以て永く造寺の用に支へよ」（『続日本紀』巻15・天平16年７月条）とあり，出挙の利を造寺料に充てさせたが，壱岐については，この詔に続いて「壱岐島，肥前国分を充つ」（『類聚三代格』巻14・出挙事）と，壱岐島内ではまかなえなかったようである。このうち国分尼寺が壱岐に置かれたかは不明であるが，国分寺については，「壱岐島直氏寺を島分寺と為す。僧五口を置く」（『延喜式』巻21・玄蕃寮）と，壱岐直の氏寺を転用した。ただし，これがいつの段階で行われたのかを示す史料はない。なお，中世における太宰府天満宮安楽寺領の状況を知ることができる「安楽寺領注進状案」（観応３年（1352）２月の日付，筑前太宰府天満宮文書／『南北朝遺文』九州編3340）に「島分寺」の名が見える。

壱岐は，国境の島でもある。大陸・半島と日本の接点として，新しく華やかな文化が往来していた。しかし，いったん外交上の問題が起こると，国防の最前線として幾多の外敵の侵入を受けた。これについて，以下，六国史など当時の記録から記事を拾ってみる。

天智２年（663），朝鮮半島の白村江での日本の敗戦を受けて，九州各地の防衛が強化されるが，翌

天智３年，最前線である壱岐にも防人と烽が置かれている（『日本書紀』巻27・天智３年是歳条）。

延暦14年（795），壱岐・対馬を除いて，防人を廃止し（『類聚三代格』巻18・軍毅兵士鎮兵事），また，同23年には，壱岐の防人も廃止され，壱岐島の兵士300人を分番して配置している（『日本後紀』巻12・延暦23年６月条）。

承和２年（835），大宰府が，このごろ新羅商人の往来が絶えず，壱岐の防衛が不十分なため，島民330人を雇い，兵仗を持たせて，14ヵ所の要害の埼に配置することを請い，認められている（『続日本後紀』巻４・承和２年３月条）。

寛平７年（895），大宰府は，壱岐の官舎などが賊にことごとく焼かれてしまったことを報じている（『日本紀略』前篇20・寛平７年９月条）。なおこの記事は，寛平６年の誤りと思われる。

寛仁３年（1019），刀伊の賊船50余艘が対馬に来襲，ついで壱岐を襲い，さらに大宰府に向かっている（『日本紀略』後篇13・寛仁３年４月条）。壱岐島講師常覚の戦況報告によると，壱岐守藤原理忠ら国司，島民の多数が殺害されている（『朝野群載』巻20・異国）。

(2) 中　　世

鎌倉時代の壱岐国守護については，初期の史料を欠いており，詳しいことは分からないが，寛元２年（1244）の「相馬胤継奉施行状」（肥前吉永文書／『鎌倉遺文』6394）が守護代に宛てられていることから，その存在はうかがえる。守護の名前が現れるのは，文永10年（1273）の「少弐（武藤）資能施行状」（肥前松浦家文書／『鎌倉遺文』11468及び来島文書／『鎌倉遺文』11469）においてで，武藤氏の守護管国に壱岐の国名が見える。以後，壱岐国の守護については史料を欠くが，これ以降も武藤氏によって守護職が保持されたものと考えられる。なお，この武藤氏は鎌倉時代中期以降，少弐氏を称している。

国境の最前線である壱岐は，常に外敵の脅威にさらされており，元寇（文永・弘安の役）では，壊滅的な打撃を受けた。対馬を侵したモンゴル・高麗連合軍は，文永11年（1274）10月14日，壱岐の西海岸に現れた。上陸したのは香椎・鯨伏付近とされている。守護代平内左衛門尉景隆は御家人百余騎で迎え撃ったが，圧倒的な兵力を持つ連合軍の攻撃により居城の樋詰城に退いて自害した（「八幡愚童記」／『大宰府・太宰府天満宮史料』巻８）。また，『高麗史』巻104・金方慶によれば，文永の役に参加した高麗兵は壱岐の人々千余人を殺害したという。

７年後の弘安４年（1281），モンゴル軍は再び来襲。５月26日，東路軍は壱岐の「忽魯勿塔」（勝本か）に向かい，風に遭って兵士113人，梢工・水手36人が行方不明となっている（『高麗史』巻29・忠烈王７年５月条）。また，「八幡愚童記」（『大宰府・太宰府天満宮史料』巻８）によれば，「また弘安四年五月二十一日，蒙古の賊船おそひ来たる，（中略）壱岐対馬より上りて，見かくる者を打ころしらうせきす，国民さゝへかねて，妻子を引具し深山に逃かくれにけり，さるに赤子の泣こゑを聞つけて，捜りもとめて捕けり」と，悲劇的な状況を伝えている。

室町時代の壱岐の情勢を記した史料に朝鮮王朝の申叔舟が著した『海東諸国紀』がある。同書の「一岐島」の部分には，「郷七。水田六百二十町六段。人居は陸里十三，海浦十四なり。東西は半日程，南北は一日程なり。志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留分治す。市は三所有り。水田と旱田は相半す。土宜は五穀。収税は対馬の如し」と記されている。７郷として，加愁（可須）・唯多只（湯岳）・古仇

音夫（国分）・小于（庄か）・無山都（武生水）・時曰羅（志原）・郎可五豆（鯨伏か）の各郷が見える。これらを支配していたのは，志佐氏以下のいずれも松浦党の一員で，彼らによって分治されていた。また，13里と14浦の地名と，戸数としてそれぞれ1360余戸，700余戸，総計2060余戸の数字が記されている。同書の「日本国一岐島之図」には，筑前博多から世渡（瀬戸）浦・風本（勝本）浦を経て対馬に至る航路，肥前上松浦から毛都伊（本居）浦を経て対馬に至る航路が見える。

(3) 近　　世

天下を統一した豊臣秀吉は，天正19年（1591），朝鮮出兵（文禄・慶長の役／壬申・丁酉の倭乱）にあたり，肥前国名護屋城の築城を九州諸大名に命じ，あわせて平戸の松浦鎮信に壱岐の勝本城構築を命じた。この勝本城について「壱岐国続風土記」三・可須邑・郷邑之部一には，「勝本浦の頂上にあり，（中略），其旧跡を見るに，子城の址東西三十六間，南北三十二間，周囲二町五十六間半」と記されている。

戦国期に平戸松浦氏領となった壱岐は，関ヶ原の戦い後も引き続き松浦氏が領有し，平戸藩領として明治維新に至っている。慶長９年（1604），江戸幕府に提出した「平戸分領并壱岐島田畠惣目録」によると，壱岐は25の村と２つの島に分かれ，総石高は15,732石余，他に寺社領として250石余があった。一方，幕末期の数字を記した『旧高旧領取調帳』九州編（日本史料選書18）には，壱岐郡11ヵ村，18,981石余，石田郡11ヵ村，16,061石余，合計22ヵ村，35,042石余とあり，江戸時代の石高の増加が見て取れる。

また，「壱岐国続風土記」一・提要上によれば，寛政10年（1798）の数字として，戸数6,385軒（武家を除く），人数27,740人（武家を除く），酒家数38軒，麹家数37軒，神社数836座，寺院数378ヵ所，馬数25疋，牛数7,267疋，船数373艘をあげている。

江戸時代の壱岐は朝鮮通信使が寄港した島でもある。享保４年（1719），通信使に製述官として随行した申維翰の記録『海游録』（東洋文庫252）には，勝本浦の様子として「浦口は，水が浅くて入れない。船を連ねて陸橋を作り，その上に板を設け，左右を竹欄となし，重純席（太く束ねた糸で編んだ敷物）を敷き，まっすぐ使館までいたる」と述べ，また，「浦を隔てて民屋わずかに百余戸。黍や豆が疇（はたけ）に満ち，あるいは稲田には穂を出す（中略）。倭の言によれば，土地が上々で，民がみな農につとめ，飢える者がないという。海中の孤島とはいえ，形は釜を覆したようなところすら必ず過半は開墾し，新穀がよく繁茂している」と記している。　**（石尾）**

【参考文献】

長崎県史編集委員会　1973『長崎県史』藩政編
長崎県史編集委員会　1980『長崎県史』古代・中世編
山口麻太郎　1982『壱岐国史』
中上史行　1995『壱岐の風土と歴史』
長崎県教育委員会　1998『原始・古代の長崎県』通史編

Ⅲ　学史と調査経過

〈学　　史〉

1．大正時代～戦後東亜考古学会の調査研究

はじめに

原の辻遺跡のこれまでの発掘調査・研究史は，大正時代初期の地元研究者による遺跡紹介から1944年までの戦前の調査研究段階（第１段階），戦後の1951年から1961年に至る東亜考古学会による学術調査段階（第２段階），1974年以降現在までの長崎県・芦辺町・石田町教育委員会による行政調査段階（第３段階）というように，大きく３つの段階に区分することができる。いずれの段階も，当該時代の考古学の置かれた学問的状況を色濃く反映していることは当然で，第１段階は遺跡・遺物という概念がいわば考古学の純学問的対象であると同時に，法的には「史跡・名勝・天然記念物保存法」に言う「保存概念」に規定され，戦後の第２段階は文化財保護法に言う「保護概念」に転換し，現在の第３段階はさらに「公開・活用概念」に進化して，遺跡を史跡として積極的に整備・公開し，国民大衆に文化的享受を受けてもらうための調査研究段階と言うことができよう。したがって，今後の原の辻遺跡の調査研究もまたそのように推移していくことは当然であるが，以下，第１段階から第２段階までの調査研究史を振り返ることにしたい。

(1)　戦前における弥生式文化研究の沿革

弥生式土器の発見　日本における近代考古学の出発は，1877（明治10）年に東京大学講師の米国人動物学者エドワード・モースによって行われた東京大森貝塚（おおもりかいづか）の発掘で，この時発見された土器が厚手・黒褐色を呈し縄目文様をもつことから縄文式土器（じょうもんしきどき）と名付けられた。その７年後の1884（明治17）年に有坂鉛蔵（ありさかしょうぞう）によって，東京本郷弥生町の向ガ丘貝塚（むこうがおかかいづか）から薄手・赤褐色・無文の僅かに口縁部を欠く壷形土器が発掘され，1889（明治22）４月に坪井正五郎が「帝国大学の隣地に貝塚の跟跡あり」（『東洋学芸雑誌』91）と報告して一躍有名になった。この記念すべき新発見の土器が従来の縄文式土器とは異なるものであるという認識から，いつしか発見地の名前をとって弥生式土器（やよいしきどき）と呼ばれるようになったが，蒔田鎗次郎（まいたそうじろう）が1896（明治29）年に，「弥生式土器（貝塚出土ニ似テ薄手ノモノ）発見ニ付テ」（『東京人類学雑誌』122）という論文を発表し，初めて弥生式土器の概念規定を行った。その後，1905・６（明治38・39）年頃に至る間，全国各地で弥生式土器の発見が相次ぎ，その分布が全国にわたることも知られるようになった。

弥生式土器および弥生式文化研究の歩み　この土器の性格や所属年代については，石器時代の土器と古墳時代の両者の性格をもっているという漠然とした理解から中間土器と名付けられたり，その他様々な名称が付けられたりしたが，結局「弥生式土器」という名称が定着することとなった。そうして明治時代後期の1900年代の初頭頃には，当時の縄文式土器の研究と同じように，弥生式土器研究もまた人種論や民族論との関連で議論され，縄文式土器と弥生式土器の差をそれらを使用した民族の違いで解決しようとする方向であった。このような学問的状況の中で，ヨーロッパに留学して考古学の型式学・層位学的方法を学び，1913（大正２）年に京都帝国大学に考古学教室を開設して主任教授となった浜田耕作（はまだこうさく）は，1917（大正６）年から開始した大阪府国府遺跡（こういせき）などの層位的な発掘調査を継続す

ることにより，縄文式文化と弥生式文化の差が民族の違いによるものではなく，時間的に前後する歴史的事実の結果であって，弥生式土器が縄文式土器と古墳時代の中間に位置するということを科学的に立証した。同じ頃，北部九州においては九州帝国大学医学部の病理学教授であった中山平次郎は，1917（大正６）年に「九州北部に於ける先史原始両時代中間期間の遺物に就いて（一）～（四）」（『考古学雑誌』７－10～８－３）という論文を発表し，青銅器を出土する大甕（甕棺）が石器を伴う日常の小型土器と同じ弥生式土器に属するという観点から，弥生時代が石器と金属器を用いた所謂「金石併用時代」であることを説いた。

昭和時代に入ると，森本六爾を主宰者として小林行雄・藤森栄一・杉原荘介など新進気鋭の若手研究者が集まって東京考古学会が組織され，1930（昭和５）年１月に記念すべき機関誌『考古学』第１巻第１号が刊行された。これはそれまでの考古学研究が京都帝国大学や帝室博物館などの権威筋を中心に行われていたことを打破するもので，以後機関誌『考古学』に各地の無名の考古学徒が投稿した。その結果，全国各地で弥生式土器の編年が進むとともに，弥生式文化の研究は飛躍的に進展したのである。北部九州においては，1936（昭和６）年に遠賀川川床の立屋敷遺跡から文様を豊富に施した一群の弥生式土器が発見され，翌年，中山平次郎は「福岡地方に分布せる二系統の弥生式土器」（『考古学雑誌』22－６）という論文を発表し，立屋敷遺跡出土の有文土器を第二系土器，従来の素文土器（今日の須玖式土器）を第一系土器として前者が後者に後出する時間的先後関係を論じた。しかしながらこの中山編年は同年，小林行雄の兵庫県吉田遺跡出土の弥生式土器の厳密な分析によって先後関係が逆転することになったが，中山の第二系土器が九州・畿内ともに大きな文化相を形成していることが注目され，「遠賀川式土器」という名称が与えられたのである。1934（昭和９）年，森本は北部九州の弥生式土器について(1)遠賀川式→(2)須玖式→(3)東郷式の三様式に分類・編年し，翌年，弥生時代を前期・中期・後期の三時期に区分して土器の三様式がそれぞれ対応することを論じた。つまり(1)・(2)の時期には石器を伴い，(3)の時期には石器が伴わないことを指摘したのである（「日本古代生活」『日本考古学研究』）。

このように1930年以降，全国で弥生式土器の編年研究が進み，1939（昭和14）年には東京考古学会から森本・小林の編になる『弥生式土器聚成図録』が刊行され，全国各地方ごとに弥生式土器編年が示されたのである。この図録はこれまでの弥生式土器編年研究の集大成であるとともに，以後の各地における弥生式土器の地域的編年研究の出発点でもあった。北部九州においては，1942（昭和17）年に森貞次郎が「古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」（『古代文化』13－７）という論文で，遠賀川式土器の細分を試みた。そうして，1943（昭和18）年には『大和唐古弥生式遺跡の研究』（『京都帝国大学文学部考古学研究報告』16）が刊行され，その中で唐古遺跡出土の弥生式土器が第１～第５様式に分類されると同時に，時間的に第１→第５様式という順に推移することが示された。さらに，この５様式分類は唐古遺跡のみに限らず，畿内各地の弥生式遺跡に普遍的なものであることが提起され，以後，全国の弥生式土器研究の指針となった。

このような弥生式土器の編年研究とともに，それに伴う各種の遺物についても研究が進み，特に1910年代の大正時代初期以降，石斧，石包丁・石戈など各種の石器組成や型式分類，銅鏡・銅鐸・銅剣・銅矛・銅戈などの青銅器の形式学的研究が飛躍的に進展した。北部九州においては，中山平次郎が1917（大正６）年に前述論文で，飯塚市立岩遺跡の石包丁や福岡市今山遺跡の石斧などの石器，福岡市板

付田端遺跡の銅剣・銅矛・銅戈などの青銅器について論究している。こうした研究動向の中で，森本六爾は1933（昭和８）年に「日本に於ける農業起源」（『ドルメン』２－９）を著わして，弥生式文化＝原始農耕文化であることを提起し，以後の弥生時代研究の方向を形成してゆくのである。

(2) 戦前における原の辻遺跡の調査研究の歩み

原の辻遺跡の発見　このような中央学界の弥生式文化研究動向の中で，壱岐島内においては早くも1904・５（明治37・８）年頃，松本友雄によって原の辻遺跡は発見された。松本が1930（昭和５）年に記した自筆の調査研究メモである『探古日録』によれば，当時国府小学校の代用教員であった彼は，生徒の清水某君から誘われて原の辻に赴き，県道より西側の畑に弥生式土器片の散列を発見して採集したという。その松本に影響を与え，松本をして壱岐考古学界の最大恩人と言わしめた人物が壱岐市庁在勤の獣医師滝川敏で，彼は青年時代に「斗酒なお辞せず」の大酒豪であったが一念発起して断酒，飲酒に代えて考古学研究に没頭してカラカミ貝塚や古墳の発見にも多大の業績を残したのである。そうして大正時代初期から昭和初期にかけて，中央学界からも著名な人類学･考古学･歴史学者らが壱岐島を踏査した。主な学者をあげると，東京帝国大学の鳥居龍藏が1916（大正５）と1921（大正10）年の２度，同じく東京帝国大学の黒板勝美と京都帝国大学の梅原末治が1923（大正12）年，九州帝国大学の中山平次郎が1927(昭和２)年頃，東京考古学会の森本六爾が1930(昭和５)年に壱岐島を調査した。

原の辻遺跡の紹介　弥生式土器片の採集以後，松本が原の辻遺跡を本格的に調査したのは石田小学校に奉職していた1923（大正12）年４月から1927（昭和２）年までのおよそ４年間で，その調査成果を1927（昭和２）年に初めて中央の学会誌に紹介した（「壱岐国考古通信（一）－深江春の辻の遺物包含地－」『考古学雑誌』17－２）。そうして1930（昭和５）年には，前述の東京考古学会機関誌『考古学』第１巻弥生式号に「壱岐に於ける弥生式土器遺蹟の分布と原の辻包含地」という報告論文を投稿し，壱岐島内の弥生式文化の遺跡を紹介するとともに，原の辻遺跡こそが壱岐を代表する弥生式遺跡であることを論述したのである。この松本の投稿論文に対し，森本六爾は同年夏，「玉稿有難く拝受致しました。御礼申上げます。小生此の夏御地に伺ひたいと存じて居りますが多分八月中旬頃になると思ひます。其の節はよろしく御願ひ申し上げます。草々，七月十四日」という書簡を送り，実際に８月11日に郷ノ浦港に上陸した。その時森本を案内したのは松本の他，郷土史家の目良亀久・山口麻太郎などで，壱岐島内の主な遺跡や古墳を踏査している。この時原の辻遺跡では，県道の岸の最上部に露出していた合口甕棺１基が発掘されたが，その報告は1933（昭和８）年に森本が「壱岐島の一甕棺」（『考古学』４－10）と題して発表している。この1930（昭和５）年の壱岐の考古学的状況について，山口麻太郎は『壹岐日報』1931（昭和６）年元旦号に「昭和五年の郷土考古学界」という論評を掲載し，その成果を高く評価した。

戦前における壱岐の弥生式文化研究　原の辻遺跡だけではなく，一部の研究者によって壱岐の弥生式遺跡の紹介と研究は大正時代から昭和戦前まで行われた。その最初が中山平次郎で，1920（大正９）年に「壱岐国立石熊野神社の銅鉾」（『考古学雑誌』10－８）を発表して壱岐の青銅器文化を論じ，1929（昭和４）年には「壱岐国加良加美山貝塚発掘の鏡に就いて」（『考古学雑誌』19－４）という論文でカラカミ遺跡の重要性を説いた。そうして松本友雄は1927（昭和２）年に「壱岐国考古通信（二）－金属器を伴出した加良加美山貝塚－」（『考古学雑誌』17－５），1928（昭和３）年に「壱岐国考古通

信（三）－貝塚出土の鑑鏡に就いて－」（『考古学雑誌』18－12），1933（昭和８）年に「壱岐カラカミ貝塚の骨角器（一）（『考古学雑誌』23－９），1934（昭和９）年に「壱岐カラカミ貝塚の骨角器（二）（『考古学雑誌』24－１）・「貝塚出土の鉄器に就て」（『考古学雑誌』24－６）を発表し，カラカミ遺跡の重要性を中央学界に報告した。また山口麻太郎は1930（昭和５）年の「使途不明の烏帽子形石に就きて」（『考古学』１－５・６）という論文で壱岐の弥生式文化の特色を述べ，人類学者の直良信夫は1941（昭和16）年に「壱岐カラカミ貝塚の自然遺物」（『古代文化』）を発表して壱岐島の弥生式文化の特殊性を提起した。

このように，原の辻遺跡とともにカラカミ遺跡もまた，壱岐島を代表する弥生式遺跡として中央学界に認識されるようになったが，1944（昭和19）年に「長崎県壹岐郡田河村原の辻遺蹟の研究」（『日本文化史研究』）を著わし，戦前における壱岐島の弥生式文化を総括したのが鴇田忠正である。当時壱岐中学の教師であった鴇田は，1939（昭和14）年の４月28日と29日の両日，耕地整理工事で削り取られた原の辻台地北端の東側斜面の断面に三層の遺物包含層を検出し，小発掘を行った。三層の包含層は整然とした層位を呈し，各層からは形態・手法を異にする弥生式土器が多量に出土した。鴇田は各層出土の弥生式土器の形態や製作手法などを綿密に分析し，当時の北部九州弥生式土器編年との比較を行い，各層出土の弥生式土器型式の推移を須玖式（中期）から高三潴式（後期）に移行する過程と認識したのである。また，各層から出土する石器・青銅器・鉄器・骨角器の形態・数量などの分析や，カラカミ遺跡出土遺物との比較から，両遺跡の間には何ら文化的に異質性はなく，両遺跡に見られる金属器と骨角器という二つの異なる遺物の共伴は，「弥生時代における史前文化と有史文化の斉一性」であり，両遺跡の弥生式土器型式は北部九州の影響にあったにも拘わらず，須玖遺跡や三雲遺跡とは異なる埋葬様式は，壱岐島の自然・経済的条件に規定されたものであると結論づけたのである。この鴇田論文は，原の辻遺跡とカラカミ遺跡の文化期が北部九州の弥生式土器の編年で中期から後期に位置づけられることを明らかにしたと同時に，壱岐島における弥生式文化が農耕文化と狩猟・漁撈文化との複合文化であることを示し，戦後の東亜考古学会の調査を招来するのである。

(3) 戦後の東亜考古学会の調査

戦後における弥生式文化研究の再出発　第２次大戦後の弥生式文化研究は，1947（昭和22）年から1950（昭和25）年まで実施された静岡市登呂遺跡の発掘調査から再出発した。この間の1948（昭和23）年に結成された日本考古学協会は，弥生式文化の成立と発展を研究目的として1951（昭和26）年に弥生式土器文化総合研究特別委員会を設置し，1958（昭和33）年に至る間，西日本の弥生式遺跡25カ所の発掘調査を実施した。その成果は1961（昭和36）年刊行の『日本農耕文化の生成』に結実したが，その中の最大成果は福岡市板付遺跡の発掘で，この遺跡から出土した土器は板付式土器と命名され，弥生時代の開始時期を従来の考え方から一段階古く遡らせることになったのである。

東亜考古学会による調査　戦後の壱岐の考古学的調査は，1948（昭和23）年の九学会連合による対馬総合調査の帰途に一般調査が行われたことに始まり，1951（昭和26）年から1961（昭和36）年の間，東亜考古学会による調査が行われた。東亜考古学会は大正時代後期に，京都帝国大学教授浜田耕作や東京帝国大学助教授原田淑人らを中心として創立され，戦前は朝鮮半島や中国東北部の主要遺跡を調査した。戦後においては，北部九州と大陸との関連から，対馬や壱岐を対象として調査を行ったが，

東亜考古学会による壱岐の調査は，第１次調査が1951（昭和26）年夏に原の辻遺跡の発掘調査，第２次調査が1952（昭和27）年夏にカラカミ遺跡の発掘調査と全島の一般調査，さらに1953（昭和28）年から1961（昭和36）年にかけて３度にわたる原の辻遺跡の発掘調査というように，合わせて５次にわたる考古学的調査が行われた。その正式な調査報告書はこれまで刊行されていないが，一連の調査成果は調査に参加した京都大学の水野清一・岡崎敬・秋山進午らによる『調査概報』や個別論文で窺うことができる。

1951（昭和26）年の原の辻遺跡の調査成果は，1954（昭和29）年に水野・岡崎が「壱岐原の辻弥生式遺蹟調査概報」として九学会連合対馬共同調査会刊行の『対馬の自然と文化』に報告した。この時の発掘は，1939（昭和14）年の鴇田調査地点に近接して原の辻台地東北から西南方向に幅２m，長さ30mのトレンチを設定して行われ，重要な調査成果が得られた。それは原の辻遺跡の文化期を具体的に明らかにしたことで，弥生式土器包含層が１層（上層）と２層（下層）に明確に分けられ，前者が北部九州弥生式土器編年の須玖式と高三潴式の中間型式，後者が須玖式土器とされ，原の辻下層式と上層式の２様式が設定されたのである。そうして下層式には石器を含むが，上層式には石器に代わって鉄器が登場することが述べられている。

翌年のカラカミ遺跡の発掘調査では，その文化期が原の辻遺跡と全く同じであり，石器や鉄器，青銅器，骨角器などの出土遺物も共通することが報告されている（水野清一・岡崎敬「長崎県壱岐郡カラカミ遺跡」『日本考古学年報』1928年版）。その後の1961（昭和36）年までの東亜考古学会による原の辻遺跡調査でも，原の辻上層式と下層式は明瞭な層位関係をもって検出され，北部九州弥生式土器の編年で，中期から後期の土器様式として認識されるようになった。また，岡崎敬は1956（昭和31）年に「日本における初期鉄製品の問題－壱岐ハルノツジ，カラカミ遺跡発見資料を中心として－」（『考古学雑誌』42－１）という論文を発表し，弥生式文化期における鉄製品の問題にを初めて論究するとともに，それらを出土する原の辻遺跡とカラカミ遺跡の重要性を指摘した。さらに1968（昭和43）年には「倭の水人－壱岐島弥生時代遺跡発見の鯨骨製品とその伝統－」（『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古稀記念委員会）を著わし，原の辻・カラカミ両遺跡に示される壱岐島弥生式文化を，農耕と漁撈の複合文化であることを指摘し，両遺跡の東アジア世界における国際性についても言及した。

このように，大正時代初期からの地元研究者の学問的情熱に基づく中央学界への紹介，戦後の東亜考古学会の調査によって，原の辻遺跡はカラカミ遺跡とともに北部九州を代表する重要な弥生時代遺跡として周知されるようになったのである。**（塩屋勝利）**

PL. 2　昭和26年東亜考古学会調査風景
（芦辺町在中，辻川秀好氏撮影）

2．昭和49年～現在

東亜考古学会による調査以降壱岐島での調査は休眠状態であった。島という特性からか大規模開発が行われる事もなく，従って開発に伴う緊急発掘調査が実施されることは殆ど無かったといって過言ではない。その後昭和49年になって，原の辻遺跡を見直す一大転機が訪れた。この時の事情について経過を少し詳しく述べておきたい。

昭和49年４月９日，当時の石田町（現壱岐市石田町）教育委員会に原の辻遺跡周辺で甕棺破片と箱式石棺の石材が散乱しているとの通報がなされた。通報者はたまたま原の辻遺跡の見学に来島していた大阪府文化課と泉大津市社会教育課職員（氏名不詳）で，その情報は翌10日，町から県文化課に急報され，直ちに県文化課職員が現地に赴き散乱した石棺材と甕棺破片を確認した。土地所有者からの聞き取り調査の結果，当該地は石田町石田西触字大原359，360番地にあたり，饅頭状に盛り上がった畑を水田にするため表面を削平した際に遺構が一部破壊されたものと思われた。この通報によってこの場所が弥生時代の墓域であったことが初めて確認された訳である。

当該地では既に削平工事が終了し，田植えの準備中であったが，遺構の重要性と地主の立石好男氏のご理解とご好意により緊急調査を実施することとした。発掘調査は４月18日から４月30日までの予定で行われたが，甕棺，石棺共に多く，６月30日まで延期された。しかしながらこの期間でも遺構の実測が間に合わず，改めて７月16日から８月12日まで補完調査を行った。延べ103日間という当時としてはかなり長期にわたる緊急調査であった。結果的には約1,000㎡の範囲に甕棺51基，石棺19基以上の他溝４条が確認された。副葬品としては，戦国式銅剣を始め，鉄製品，トンボ玉，ガラス小玉，勾玉などが数多く発見され，改めて大陸との関係が深い遺跡であることが認識された他，この調査区域は昭和28年に東亜考古学会によって調査された地点から直線で400m程度離れていることもあって，遺跡の規模が本来相当広範囲であることが予察されるに至った。

これを受け，改めて原の辻遺跡の範囲について確認する必要が生じ，翌，昭和50年度から３年間補助事業による範囲確認調査を実施することになった。以下その成果概要を述べておく。

昭和50年度の調査（第１次確認調査）

原の辻遺跡は沖積地に舌状に突き出た微高台地とその周辺の低地部分からなるが，低地の水田部分は地権者の理解が得られなかったことから従来から遺跡として周知されていた台地部分について試掘壙を設定した。その結果弥生土器や陶質土器に加えＶ字溝と思われる遺構を確認している。

昭和51年度の調査（第２次確認調査）

台地の南東部分を中心として実施。中国鏡を副葬した弥生後期の墓域を確認した。

昭和52年度の調査（第３次確認調査）

台地の南西部を対象として実施。新たな３ヶ所の墓域やＶ字溝を確認した。また良好な状況で旧石器時代の石器を発見した。その後これらの石器について検討がなされ，特に台形石器についてはその特徴的な形態から原の辻型台形石器の呼称が賦されている。

昭和54年度の調査（第４次確認調査）

第３次調査で確認したＶ字溝の延長を見るために試掘壙を設定した結果，後世の掘削が施された部分では遺構がかなり破壊されていることで明確な延長は確認出来なかった。

以上の確認調査によって遺跡自体旧石器時代から弥生時代全般にわたる大規模且つ広範囲な複合遺跡であることや，大陸との深い関係が認められるとが判明したため，この頃から遺跡の国指定への必要性が叫ばれ始め，その理解を得るために県教育委員会は石田町や芦辺町の住民への説明会などを数回開催することとなった。しかし，遺跡が所在する石田・芦辺両町に専門職員がいなかったことや，県文化課においても九州横断自動車道（昭和50～56，60～63年度）や諫早中核工業団地造成工事（昭和53～56年度），県立百花台公園工事（昭和57～60年度）等の大規模開発に伴う緊急調査が優先され，史跡指定のための積極的な働きかけも中座することを余儀なくされた。その後遺跡を取り巻く環境に大きな変化はなく，時折発生する大雨後の小規模の土砂崩れ等の災害関係や道路脇の電柱敷設，ため池掘削に伴う小規模な緊急調査が主であった。

平成３年度から遺跡の北側を流れる幡鉾川（壱岐国続風土記には田川の記載がある。一本の川であるが，上流が幡鉾川で，下流は河内川と呼ばれていた。ここでは幡鉾川で統一する。）流域総合整備事業がスタートした。幡鉾川流域約400ヘクタールについて，蛇行する川の直線化と大規模圃場整備を行うものであった。県教育委員会としてはこの事業に先立ち，これまで未確認であった水田部分の低地について試掘調査を広範囲に実施した結果，この部分にも掘立柱跡等の各種遺構が相当残存することが判明した。これらの結果を受け，平成５年以降遺物，遺構が密集する台地隣接地について本調査を実施した結果，台地は多重の環濠で囲まれていることが判明し，環濠の中からは弥生時代前期から後期に至る夥しい数の遺物が出土した。中でも膨大な数の弥生土器と同時に出土した大陸系土器の多さや，豊富な金属器，木器類，石器類，動物依存体など，これまで調査した弥生遺跡から出土する遺構，遺物と比較しても群を抜く規模内容であり，この調査成果は故佐原真先生の尽力もあって，大々的に報道された。また地元研究団体から「原の辻遺跡の保存に関する陳情書」も提出されることとなり保存へと大きく踏み出した。その影響もあって，環濠を含む台地周辺区域は当初の圃場整備区域から非農用地に転換されることとなった。開発から保存へと一大転換が可能になったのは事業を推進する県並びに地元各関係者の理解が第一にあったことは明記されなければならない。

この後，文化庁の係官の視察も行われるなど保存のための条件が整う一方，国指定史跡のための要望がなされはじめるようになった。国史跡を視野に入れた昭和54年の動きから15年が経過していた。

この後，様々な施策の実施や文化庁との協議を経て，平成９年９月には待望の国史跡に指定され，更に平成12年11月には特別史跡へと昇格することとなった。

以下，平成５年以後動き出した各種施策について概略を述べておく。

行政の動き

・文化課駐在員の配置

平成５年４月，幡鉾川流域総合整備事業に伴う本調査に向けて，壱岐教育事務所内に県文化課駐在員を２名配置することとなった。この配置により，これまでの県から出張で行っていた原の辻遺跡の

発掘調査は地元で恒常的に行うこととなった。

・「原の辻遺跡調査事務所」「壱岐・原の辻展示館」の開設

平成6年7月，県議会は壱岐に「原の辻遺跡保存活用施設」の建設を可決し，同年11月調査事務所と展示館の建設が着工された。

平成7年4月，調査事務所と展示館の開設に会わせ，県教育委員会は県組織として原の辻遺跡調査事務所を開設した。職員は所長を含めて6名の体制であった。施設面積は728㎡（調査研究施設331㎡，展示面積397㎡）で，敷地は遺跡内であったため，盛土の上の暫定的なプレハブ工法とした。

・「原の辻遺跡保存等協議会」の発足

平成5年度以降の調査成果によって生まれた原の辻遺跡の保存整備の気運が高まり，平成7年度には郷ノ浦町，勝本町，芦辺町，石田町の地元4町の町長と教育長からなる「原の辻遺跡保存等協議会」が発足した。原の辻遺跡に関する様々な事業に積極的に関わる目的で設立されたものであり，壱岐4町が合併し壱岐市になった現在も構成メンバーを替えて継続している。

・「原の辻遺跡指導委員会」と「原の辻遺跡保存整備委員会」の開催

本項目については，第Ⅸ章　原の辻遺跡の保存活用で詳述する。

・発掘調査

緊急発掘調査とは別に補助事業として，平成8年度以降，遺跡の範囲確認調査を継続している。

範囲確認調査は，県と地元芦辺町，石田町の3組織が実施しているが，基本的に地元2町が史跡地内の調査に限定し，県は史跡地内外を対象としている。

発掘調査は平成16年度末で遺跡面積約100ヘクタールの約8.2%程を終了したことになる。今後も調査は継続されるであろうが，最終的には15%程で集落の大方の構造は判明するものと考えられる。

原の辻遺跡関連論文

原の辻遺跡関連の書籍は数多いが，ここでは昭和49年（1974）以後の論文を中心として学史を展望してみたい。

昭和50年以後の調査成果を受けて，高倉洋彰氏が原の辻上層式土器について再検討を行っている。

この土器型式が提唱されたのは，昭和26年の東亜考古学会による発掘調査で水野清一，岡崎敬の両氏によって設定されたもので[註1]，後期土器すなわち高三潴式土器の前に原の辻上層土器が位置づけられていた。しかし，その後の調査成果と当時の土器の特徴，あるいは他の弥生遺跡出土土器との比較など子細に検討された高倉氏は，弥生後期前半の時期と思われていた原の辻上層土器は，後期中頃からやや下る頃に相当し，高三潴式から下大隅式にかけての過渡期的様相を持つ土器として比定され，今後原の辻遺跡上層土器の名称を用いる場合はこの認識を持つ必要があると考察された。しかしながら後期土器がまだ細分されていなかった当時において後期土器の細分が初めて行われたことに原の辻上層式設定の重要な意義があったと結ばれている。[註2]

原の辻遺跡の大きな特長として大陸系土器が多いことがあげられるが，これらの土器について武末純一氏は平成5年度の調査で出土土器について考察されている。

氏は原の辻遺跡から出土した大陸系土器を無文土器，三韓系土器，楽浪土器，三国陶質土器の4者に分け，それぞれの時期を無文土器は朝鮮半島における青銅器～鉄器時代初期で弥生前期から中期前

半に相当し，三韓系土器とは半島南部の原三国時代の土器，楽浪系土器は楽浪郡一帯を中心として使われた中国漢式土器で，ともに弥生中期後半から後期に比定された。三国陶質土器は朝鮮半島三国時代に相当する土器で古墳時代前期が主体をなし，一部弥生後期末までさかのぼる可能性を指摘された。

これらの土器の故地については，朝鮮半島南部，それも南海岸一帯との関係が強いが，弥生中期後半～後期には楽浪郡や帯方郡との強い関係に言及されている。しかし，これらの土器については，渡来漢人や韓人が集団的に固まって居住していたというより，倭人や漢人・韓人が交易の際もたらしたものであり，原の辻に居住していた人々を主体とした形状活動の結果との認識をされている。(註3)

片岡宏二氏は原の辻遺跡から出土する朝鮮系無文土器と擬朝鮮系無文土器について「後期前半」無分土器及びそれに対応する段階をⅠ類，「後期後半」無文土器及びそれに対応する段階をⅡ類とした。更に朝鮮半島で見られる無文土器そのものから弥生土器の影響の大きさによって１から３類に分類され，最も弥生土器化した３類をその程度によってａ～ｃに細分化された。このうちⅡ類からの擬化は原の辻遺跡のみに見られる大きな特長だとされる。これは他の遺跡と異なり，原の辻遺跡が各時期を通し，朝鮮半島土器文化の影響を常に受けてきた結果とされている。それを前提としながら，遺跡西北部低地に集中する朝鮮系，擬朝鮮系無文土器が弥生中期末～後期の始まりを境に衰退する現象について，「弥生中期中頃以後，原の辻遺跡における交渉の仲介者たちが果たした日韓交渉の質は，政治的干渉の少ない未熟な経済交渉のレベルからクニ外交を背景にした経済交渉へと変化していったのではないか」と述べられている。(註4)

白井克也氏は原の辻遺跡を含む我が国の弥生遺跡から出土した大陸製土器の考察から弥生時代の交易についてに言及されている。すなわち，氏は弥生時代に対応する時期の韓半島土器である無文土器，三韓土器，そして楽浪土器の分布とその変化を時期ごとにまとめ，韓半島における政次情勢などを考慮しながら交易の実態を考察された。氏はそれらの時期を（１期）弥生前期末～中期初頭，（２期）弥生中期前半（３期）弥生中期後半（４期）弥生中期末～後期前半（５期）弥生後期後半（６期）弥生終末（７期）古墳前期と７期に分けられた。そして，これらの時期の特徴として（１期）水石里式土器や疑無文土器の存在から韓人が北部九州に渡来・移住した時期であり，韓半島における政治変動から古朝鮮の人々が南方に移動した結果とみなした。（２期）は舶載粘土帯土器が流入しない時期に相当し，その理由として韓半島における政治情勢の安定化と新たな交易機構が確立したものと理解された。つまり，政情安定によって韓半島からの物資の流入が鈍ったために，倭人が積極的に韓半島南岸での交易を展開することになったためであるとされ，この時期の重要な貿易拠点は須玖Ⅰ式土器が多く出土する韓国慶尚南道勒島遺跡であると理解され，この時期を勒島貿易と呼称された。（３期）は勒島遺跡への弥生土器（須玖Ⅱ式古段階）の流入が終了し，代わって勒島Ⅲ式土器が流入する。勒島遺跡自体もこの時期には機能を終えていることが窺われ，勒島貿易の終焉が認められるという。その背景として，氏は西北朝鮮における衛氏朝鮮の滅亡と楽浪郡などの漢４群の設置による交易機構の解体・再編を考えておられる。またこの時期には原の辻遺跡において疑無文土器が生み出されており，遺跡への韓人の居住が考えられ，壱岐が交易の重要拠点となった可能性を指摘され，原の辻貿易と呼称された。確かにこの時期は原の辻遺跡において漢系遺物の流入が本格化する時期でもあり，大陸との積極的な交易が認められる。（４期）は三韓土器や楽浪土器が搬入される時期で，特に福岡県前原市三雲遺跡では楽浪人が居住を始めたとされる。（５期）は原の辻貿易が継続・繁栄していた時期で

あるが，対馬における楽浪土器の増加等から，楽浪人が韓半島南部，対馬，壱岐，北部九州玄界灘沿岸で積極的に交易に関与したとされる。（6期）には（5期）以降韓人・楽浪人と瀬戸内の倭人との直接交渉が拡大する時期であるとされる。そして，（7期）はまだ原の辻貿易は機能しているが，最盛期は過ぎ，代わって博多湾岸が重要な拠点となったとされ，これを博多湾貿易と呼称され，弥生時代の貿易の変遷を総括されている。[註5]

宮崎貴夫氏は原の辻遺跡調査事務所で5年間調査に参加した経験を活かして原の辻遺跡の全般にわたっての論考を考察され，原の辻遺跡の経営について，その開始から解体まで特に東アジアの歴史的変遷の中で捉えられた。

すなわち，原の辻遺跡の形成を壱岐島の内在的な発展に求めることは困難とした上で，弥生前期後葉頃「北部九州沿岸地域の集団によって朝鮮半島との交易を目的として経営が開始」されたと理解されている。前期末頃，台地北西の低地部に200点を超す朝鮮系無文土器や擬無文土器が集中的に出土することから朝鮮半島系の渡来人の存在があげられるのもその根拠の一つとされる。

原の辻遺跡の環壕集落としての成立は中期前葉の須玖Ⅰ式段階とされるが，その背景には朝鮮半島における中国前漢の武帝による楽浪郡などの4群の設置があり，交易の活発化が要因とされた。この時期船着き場も設置されるなど，恐らく大陸からの文物と共に新しい土木技術も将来している。

その後，社会的な緊張が解け中期後葉段階で埋没が進行していた壕は後期前葉の段階で再整備されているが，その理由を「57年の後漢への朝貢があり，奴国王の中国冊封体制への編入に伴うツクシ連合の主導」に求めている。原の辻の大集落はその集落形成当初から交易の中継基地として繁栄を続けてきたが，やがて防御機能としての環壕が埋められることで集落の解体が進むが，その最終時期は環壕に祭祀の結果廃棄された土器によって4世紀中頃には相当するとされる。この時期は楽浪郡の滅亡時期に相当し，中国における対外交渉相手の消滅が原の辻遺跡解体の決定的な原因とされる。

氏は同時に墓域の変遷にも触れ，8カ所の墓域についてそれぞれの消長を述べられている。[註6]

鄭仁盛氏は楽浪系土器について多くの論文を発表され，原の辻遺跡出土の楽浪土器について自ら土器を観察された結果，典型的楽浪土器として将来された資料の他，胎土の違いと調整方法の相違から当地でも作られた土器がある可能性に言及された他，これまで楽浪系土器として報告されていた土器の中には，楽浪よりさらに北方地域の遼東半島製が含まれていることを述べられている。[註7]

鐘ヶ江賢二氏は九州のみならず韓国各地の土器の胎土分析を精力的に行って，土器に関する人間の動きを追求されている。原の辻遺跡の場合，福岡県糸島系の土器が圧倒的に多いことから膨大な土器そのものが伊都国からの将来品ではないかとの意見に対し，糸島地方や原の辻遺跡出土土器の胎土分析の結果，胎土に含まれる成分の違いから壱岐での土器製作と消費を述べられている。[註8]

原の辻遺跡では，1995年以降，花粉分析，プラント・オパール分析，種実同定，寄生虫分析など低地部を中心として自然科学分析を行っているが，中尾篤志氏はこれらの分析結果や出土する石器の種類を通して原の辻遺跡における植物利用のあり方を考察されている。まず食料資源としては後期後葉の低地部のブロック貝層からはアズキ，イネ，アワ，コムギの炭化種子の他ヤマモモ，モモ，キイチゴ，メロン，ヒョウタン，ウリ科などが出土したことで，果実類の積極的な利用があったこと，また古墳時代初頭の竪穴住居跡からは，コムギが多く，イネ，アワ，アズキがこれに次ぐことからイネばかりでなくコムギ，アズキなどが栽培されていたことを述べられている。一方石製農耕具の内，石包

丁と石鎌の比率が１：９であることから，イネの収穫具とするよりイネ以外の雑穀類，とりわけコムギの収穫具ではなかったかと推定されている。

また，農耕具の中で石製土掘具が少ない状況について，原の辻遺跡では中期末には鉄製鋤先が出現していることから，他の地域に比べいち早く鉄器化が進んだ可能性に言及されている。そして，このような状況は韓半島におけるあり方，すなわち新石器時代においてはアワ，キビが主体であったものが青銅器時代以降イネ，オオムギ，コムギ，マメ類が加わる構成であるとの指摘からその共通性を指摘されている。(註9)また，石器の中で特に石鎌が多いことについて，ムギ類の収穫に特化した収穫具であった可能性に言及されている。(註10)

以上昭和49年から現在までの状況について述べてきたが，筆者の不勉強から原の辻遺跡を知る上で重要な論文に触れなかった可能性がある。今後機会を得て補っていきたい。　**（高野）**

註

(1) 水野清一・岡崎敬　1954「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』
(2) 高倉洋彰　1982「原ノ辻上層式土器の検討」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』
(3) 長崎県教育委員会　1995「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書　第124集
(4) 片岡宏二　1999「壱岐原の辻遺跡の朝鮮系無文土器にみる日韓交渉」人類史研究会
(5) 白井克也　2001「勒島貿易と原の辻貿易」『弥生時代の交易』第49回　埋蔵文化財研究集会
(6) 宮崎貴夫　2001「原の辻遺跡における歴史的契機について」西海考古　第４号
(7) 早乙女雅博・鄭仁盛　2003「日本列島と朝鮮半島東南部地域出土の楽浪土器基礎研究」高梨学術奨励基金年報
(8) 鐘ヶ江賢二　2003「壱岐・糸島地域出土土器の胎土分析から見た弥生時代中期の土器生産と交流について」
(9) 中尾篤志　2004「弥生時代における植物利用」日・韓交流の考古学　九州考古学会・嶺南考古学会　第６回合同考古学会
(10) 中尾篤志　2004「一支国」における生産基盤　考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）

〈調 査 経 過〉

1．範囲確認調査と平成５年度～７年度の調査

原の辻遺跡の発掘調査は，戦前から戦後の学術調査や畑地を水田にする大規模な圃場整備事業等の諸々の開発によって，遺跡の重要性が明らかにされ，日本考古学会でも中国大陸や朝鮮半島と対馬・壱岐，本土部との交渉，交流面で注目を受けていた。その後，昭和49年度の個人の畑地の水田化による甕棺墓や箱式石棺墓，溝状遺構等の発見を契機に，県教委は原の辻遺跡の広がりを確認する必要性から，昭和50年から52年度にかけて遺跡の台地部分の範囲確認調査を実施した。その結果は，旧石器時代の文化層や弥生時代の墓域等を発見した。

平成元年度に県営幡鉾川流域総合整備事業の計画が策定され，県農林部局から県文化課へ埋蔵文化財の取り扱いについての協議がなされた。工事計画及び規模は，平成４年度～13年度の10か年計画で圃場整備・河川改修・農道整備を骨子とするもので，土地条件の改良や耕地の集団化，大型機械の効率的な運行など生産性の高い条件に整備し，地域農業の発展に期することを目的に，郷ノ浦町・芦辺町・石田町域の約320ヘクタールの広範囲に係る大規模な計画であった。

原の辻遺跡の主体的な住居域である台地部については，遺跡の重要性を鑑みて工事区域から除外した形での策定であった。

県文化課は，計画区域内320ヘクタールの分布調査を平成２年11月26日～29日まで実施した。その結果，区域内に新規発見の遺跡を含め13ヶ所の周知の遺跡と隣接する８ヶ所の遺跡が確認された。平成３年度～４年度の２ヶ年にわたり，10遺跡について範囲確認調査を文部省国庫補助事業として，当該教育委員会が調査主体として県文化課の調査指導の基に実施した。

平成３年度の調査は，芦辺町域で原の辻遺跡の北側及び西側の現水田部分に49ヶ所・196㎡と石田町域で遺跡の東，西，南川の現水田部分に50ヶ所・200㎡について実施した。

その結果，遺跡の西側及び北側で弥生時代の杭列遺構，溝状遺構が数条と中世の杭列が検出され，ナウマン象の臼歯が発見された。また，石田町域では遺跡の東，西側に範囲が広がり，杭列遺構等が検出された。遺跡の範囲が20ヘクタールから台地部の60ヘクタールを合わせ約80ヘクタールの広大な面積に分布することが明らかになった。範囲確認調査では，鶴田遺跡にも23ヶ所・110㎡を実施し，弥生時代中期の甕棺墓１基を検出し墓域を確認した。

平成４年度の調査は，芦辺町所在の安国寺前遺跡・興触遺跡・都城遺跡，石田町所在の興触遺跡・椿遺跡，郷ノ浦町所在の車出遺跡・壱岐ノ戸遺跡・大宝遺跡の８ヶ所について実施した。その結果については各報告書に記載されているが，特に隣接する安国寺前遺跡は36ヶ所・144㎡を実施し弥生時代の溝状遺構，柱穴群，土坑群や中世の水田跡等が検出され，更に原の辻遺跡も北側の台地先端部から幡鉾川を越して200m程北側へ範囲が広がることが確認された。

また，芦辺町教委は，平成５年度に原の辻遺跡の台地部の東側で環濠の一部が本調査で発見されたので，西側部分での濠の有無についての範囲確認調査を実施した。その結果，濠が巡ることが確認され，大規模な環濠集落跡と判明した。同じく，原の辻遺跡を流れる幡鉾川の河川改修工事関係の範囲確認調査12ヶ所・88㎡を実施し，弥生時代中期から後期の遺構や包含層が残存していたために約8,000㎡の調査が必要となった。

平成３年度からの範囲確認調査の結果を踏まえ，県文化課は農林部局，幡鉾川流域総合整備推進協

議会，関係３町教育委員会と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ね，文化財保護の面から圃場整備事業の農道建設及び排水路布設工事箇所については発掘調査を実施し，圃場面については基本的に盛土で遺構等を保存し工事施工を行うことになった。

平成６年度から遺跡内の諸開発行為や保存・活用・整備のための基礎資料を得るために，県・芦辺町・石田町は国庫補助を受けて範囲確認調査を実施した。平成６年度に芦辺町教委は，高元地区の範囲確認調査を2,005㎡実施し，弥生時代中期から古墳時代初頭の住居跡13軒等の遺構と卜骨，獣帯鏡等の遺物も出土した。また，平成７年度には，芦辺，石田町教委は平成７年９月～平成８年１月まで原地区を1,573㎡調査し，祭儀場や竪穴住居跡等の遺構を確認し遺跡の中枢部であることが確認された。また，石田町教委は平成７年９月～11月まで大川地区の533㎡を発掘し，東西約60m，南北80mの範囲に式石棺墓・小児甕棺墓等の26基を含む弥生時代中期から後期の墓域を確認した。

また，県教委は重要遺跡の範囲確認調査（遺跡カルテ事業）を，原地区で766㎡について実施し，大型の柱穴群や溝条遺構等を検出し，遺跡の中枢的な施設が明らかになった。

平成５年度の幡鉾川関係の緊急調査は，原の辻遺跡石田高原地区・石田大原地区の調査を芦辺町教委・石田町教委主体で県文化課が調査協力して実施した。調査は，遺跡の主体部分に当たる舌状に延びる台地の東側一帯が平成５年度の農道建設及び排水路布設工事箇所の約4,969㎡について，平成５年４月～平成６年３月まで実施した。その成果は，弥生時代の中期から後期の環濠（外濠・中濠・内濠）が検出され，その規模は東西約350m，南北約750mの平面が楕円形状を呈し，環濠内面積が約24ヘクタールの大規模な環濠集落跡と判明した。その他，石敷遺構や洗い場跡等の水場の施設，大溝，通路状遺構，柱穴群等の遺構と木製楯等の多量の木製品類，楽浪系統の瓦質土器，朝鮮系統の無文土器等の中国大陸や朝鮮半島との交流を示す遺物や銅鏃，鉄鏃等戦いに関する武器や武具類が数多く出土している。

平成６年度緊急調査は，原の辻遺跡大川地区の調査を県教委・石田町教委，川原畑地区を県教委，芦辺高原地区を芦辺町教委が調査主体で3,264㎡の調査を実施した。また，県教委は現幡鉾川の河川改修事業で平成６年11月～平成７年３月まで4,000㎡の調査を実施した。その結果は，弥生時代中期から後期の包含層，旧河道や土抗群や古代の道路状遺構が検出された。

平成７年度緊急調査は，原の辻遺跡芦辺高原地区，安国寺前Ａ遺跡，安国寺前Ｂ遺跡は県教委と芦辺町教委が調査主体でそれぞれ分担して，平成７年月～平成７年３月まで412㎡の調査を実施した。

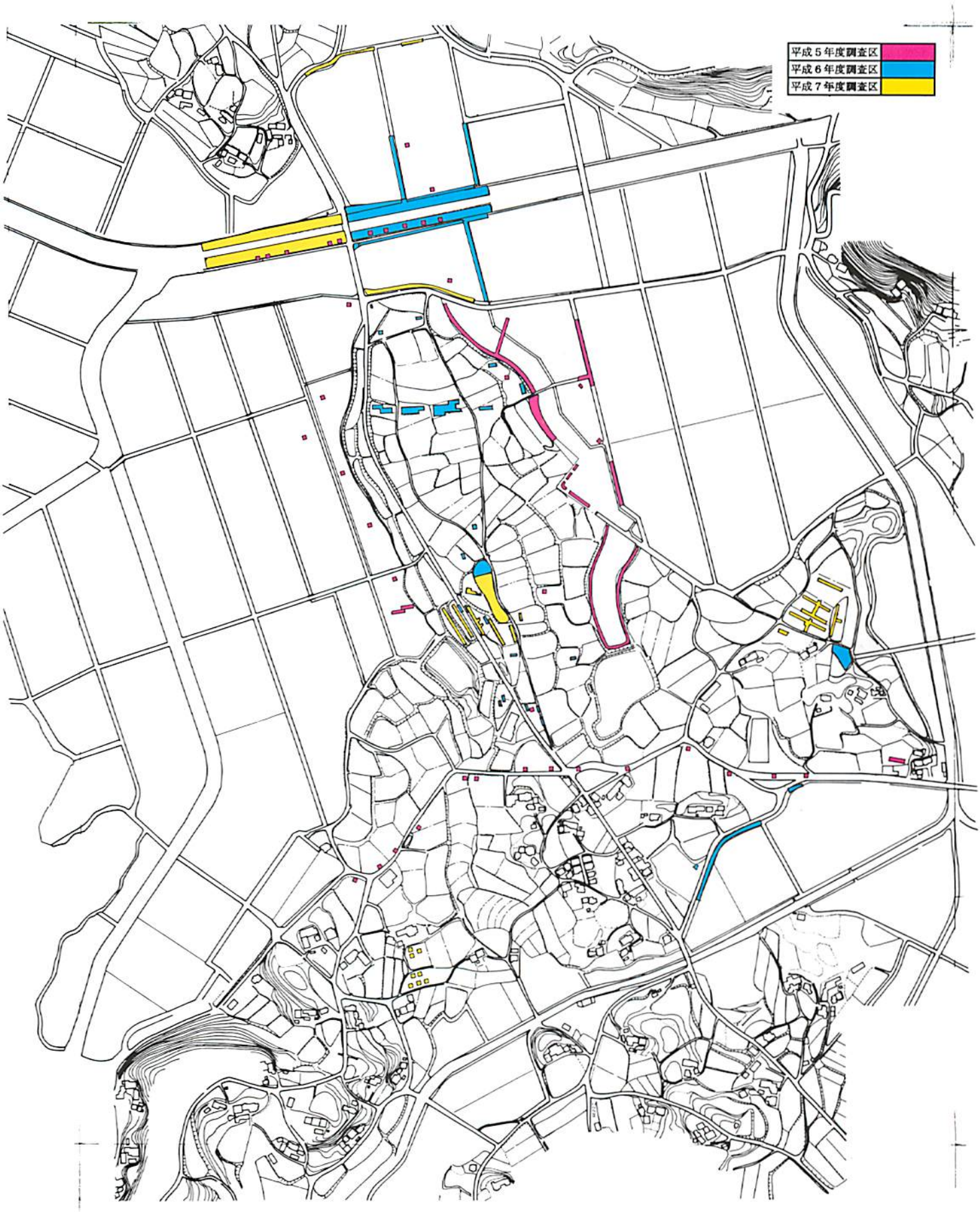
また，県教委は現幡鉾川の河川改修事業で平成７年12月～平成８年３月まで2,532㎡の調査を実施し当該工事関係事業は終了した。

また，長崎県は，平成７年４月に長崎県教育庁の地方機関として，原の辻遺跡調査事務所を設置して本格的な調査体制の整備を行い，遺跡の調査と遺跡の保存・保護を推進することになった。

（副島）

【参考文献】

1995　長崎県教育委員会「原の辻遺跡」幡鉾川流域総合整備計画に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ
長崎県文化財調査報告書　第124集



第12図　平成５年度～７年度の調査区域

2．平成８年度～平成12年度の調査

(1) 平成８年度調査　県営幡鉾川流域総合整備計画に伴う調査

①圃場整備事業に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第４集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字不條・八反

農道・排水路計画地域について県教育委員会・芦辺町教育委員会が調査を実施した。県が行った農道と排水路の交差した地点からは，弥生中期前葉に築かれた船着き場跡と石組遺構が検出され，大陸の土木技術を駆使した当時のハイテク遺構として大きな注目を集めた。町の調査区からは近世以降の溝状遺構，土坑，柱穴，包含層と古墳時代初頭以降の溝３条と濠を確認した。遺物については，弥生中期の高坏台部に７ヵ所の透かしを持つ丹塗り土器や石戈などが出土している。

②幡鉾川河川改修工事に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第９集）

調査場所　芦辺町字川原畑・不條

津合橋上流右岸の河川敷について県教育委員会が芦辺・石田両教育委員会協力のもと調査を実施した。調査の結果，弥生時代から古墳時代前期の河道が蛇行している状況で検出された。遺物は弥生前期末から中期を主体とする土器に伴って，石鏃・石庖丁・石剣などをはじめ，建築部材・杵・機織具・漆などの木製品，網かご，ココヤシ製笛，朝鮮半島系土器，細形銅剣などが出土した。なお，地山としている砂礫層からはナウマンゾウの臼歯とあご及びオオツノジカの角の化石骨が出土した。

(2) 平成８年度　原の辻遺跡発掘調査事業に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字原・原ノ久保

原地区は平成７年度に調査を行った台地最頂部で確認された濠や居住関係の遺構が東斜面にどのように拡がるのか追求する目的で９ヶ所の試掘坑を設定した。調査の結果，弥生中期から古墳前期の竪穴住居跡13棟，濠５条，溝５条，小児甕棺墓６基などを検出。原ノ久保Ａ地区からは，箱式石棺墓13基・石蓋土壙墓・土壙墓６基・土壙９基・小児甕棺墓３基等が検出され，副葬品として長宜子孫銘内行花文鏡・小形仿製鏡・ガラス小玉・ヤリガンナなどが出土した。

(3) 平成９年度　原の辻遺跡発掘調査事業に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字原・高元・石田町石田西触字大原・原ノ久保

台地西側傾斜面の原地区の範囲確認を行い，弥生中期から古墳前期の竪穴住居跡17棟，濠１条，溝６条・小児甕棺墓５基を検出した。高元地区では柱穴のほか弥生終末から古墳初頭の合口小児甕棺墓２基を検出した。大原地区からは，弥生中期の濠１条とピット群が検出されたが，明確な住居跡の確認には至っていない。原ノ久保Ｂ地区では，甕棺片が若干出土しただけであった。

(4) 平成９年度　県営圃場整備事業に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集・芦辺町文化財調査報告書第10集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字不條

溜め池造成工事に伴って県教育委員会と芦辺町教育委員会が調査を実施した。調査区中央からは，現在の幡鉾川本流に相当すると思われる河道を検出した。河道は，弥生中期後葉には層が水平に堆積しており，川の流れが変化したあと低地が埋め立てられ，耕作地として利用されたのではないかと推測されている。河道北岸の下場の掘り込みの上部には，登降用の梯子などを固定するため打った杭穴も見られた。周囲には磨石や凹石，くど石，貝殻や獣骨等が出土しており，洗い場遺構ではないかと

考えられている。遺物は弥生土器が圧倒的に多い中で，朝鮮系無文土器がまとまって出土している。注目される木製品は高床式建築の床材で，切り込みや枘穴を入れた床大引材が出土したことである。この枘指し込み栓留形式の建築様式は礎石をもつ可能性が指摘され，建築史上重要な発見であった。

(5) 平成10年度　県営圃場整備事業に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第15集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字不條

農道建設工事に伴って県教育委員会と芦辺町教育委員会が実施した。調査区は農道に沿って幅約6m，長さは南北に200mの規模で設定した。その結果，遺構は弥生中期の掘立柱建物5棟や柱穴に石製の礎盤を確認。そのほか弥生前期末～中期初頭の1号濠につながるものや溝及び沼状の落ち込みや旧河道を検出。遺物は旧河道から建築部材や竪杵，柄に装着したままの鉄鎌などが出土した。

(6) 平成10年度　特定調査事業に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字不條

船着き場遺構と同時期の幡鉾川旧河道と接続する水路等を確認するための調査で，旧河道2本，濠6条，溝7条，小児甕棺墓1基を検出，遺物では前漢時代の三翼鏃や五銖銭が出土した。またB区6号土坑からは，石器製作時の石チップがまとまって出土している。

(7) 平成11年度　県営圃場整備事業に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第20集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字不條

農道建設工事に伴って県教育委員会と芦辺町教育委員会が実施した。調査区は農道に沿って幅約6m，長さ南北に200mの規模で設定した。その結果，遺構は弥生中期の掘立柱建物2棟や中期～後期にかけての溝4条及び旧河道を検出した。また，畦畔跡と水田及び水路跡を検出した。遺物には弥生前期末の土器も出土している。

(8) 平成12年度　特定調査事業に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第21集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字不條・八反

調査区は台地北西部の低地に設定し，遺構は旧河道2条，濠1条，溝2条，土坑数十基，土器留1，集積遺構等を検出した。集積遺構の礫の中には島外産の花崗岩も含まれている。木製品には建築部材や樋・竪杵等があり，金属製品には銅鏃や大泉五十の貨幣が出土した。弥生土器も前期末から中期後半のものが多く出土している。

(9) 平成12年度　県営圃場整備事業に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第23集）

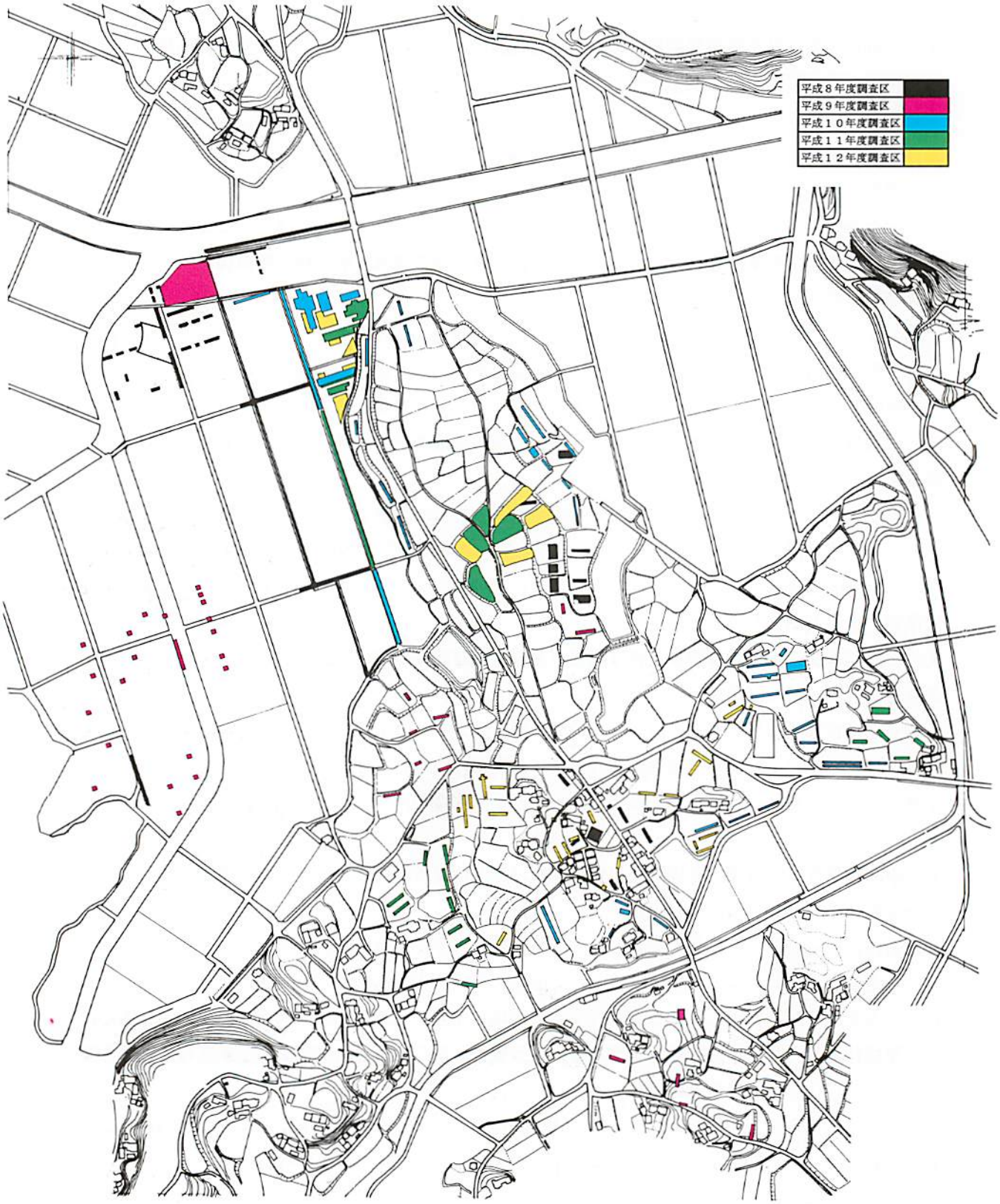
調査場所　芦辺町深江鶴亀触字不條

農道建設工事に伴って県教育委員会と芦辺町教育委員会が実施した。調査区は農道に沿って幅約6m，長さは南北に120mの規模で設定した。その結果，遺構は溝6条，水田跡2枚とその間に矢板を打ち込んだ畦畔跡を検出した。遺物は弥生土器のほか完形の朝鮮半島系無文土器等の出土がある。

(10) 平成12年度　長崎県緊急雇用対策事業に伴う調査（原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第2集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字八反

調査区は台地西側中央部の低地部分で，弥生時代の旧河道1条，溝跡7条，土坑2基のほか，獣帯鏡片，鉄製ヤス，鍛造鉄斧，有柄式磨製石剣，石戈等が出土している。時代は違うが，開元通宝22，至道元宝等25枚の渡来銭が出土した。　**（安楽）**



第13図　平成８年度～12年度の調査区域

3．平成13年度～平成15年度の調査

(1) 平成13年度

県の事業として，原の辻遺跡特定調査事業で八反地区，国庫補助事業で同じく①八反地区・②池田大原地区・③苣ノ木地区・④原ノ久保地区の調査を行い，芦辺町が原地区，石田町が大原地区の調査を実施している。特定調査では，北側から北区（300㎡）・中央区（500㎡）・南区（300㎡）の合せて1,100㎡について発掘調査を実施した。遺構は，濠３条と溝１条を検出している。

①八反地区では，低地水田部北側に南北26m×東西25mの650㎡について調査を実施した。結果，弥生後期～古墳時代初頭の溝を２条確認し，溝埋没後に近世の土地造成を確認している。

②池田大原地区では，遺跡の中心域から南西へ約300mほどの標高14m～15mの台地部を１区～９区としてトレンチ調査を実施した。削平のため，包含層及び遺構を検出することができなかった。

③苣ノ木地区では，町道江里線南側の水田部にトレンチ三箇所を設定した。結果，小児用甕棺墓５基，石棺墓１基，石蓋土壙墓１基の計７基の弥生時代の墓を確認した。遺物は，ガラス製小玉216個を副葬する４号甕棺墓，青銅製の釦とガラス製小玉107個を副葬する５号甕棺墓，石蓋土壙墓にガラス小玉151個と丹塗りの袋状口縁壺片が副葬されていた。

④原ノ久保地区（石田町）の調査区は，町道江里線の南東側にあたる。遺構は，石棺墓１基，石蓋土壙墓１基と弥生時代中期中葉～後期の甕棺墓９期を検出している。

(2) 平成13年度芦辺町事業（芦辺町文化財調査報告書第13集）調査場所　芦辺町深江鶴亀触字原

調査は丘陵東側について実施し，竪穴住居跡10棟，土坑14基，溝６条，道路状遺構，ピット群を検出している。主な遺物は，銅鏃５点・不明青銅製品１点・鉄鏃３点・弥生時代中期としては最大の26.5㎝を測る鉄鏃等が出土している。

(3) 平成13年度石田町事業（石田町文化財調査報告書第５集）調査場所　石田町石田西触字大原

原池の南側の調査で，弥生時代中期のＶ字溝を１条検出している。また，原池の北側は昭和49年の調査と併せて甕棺65基，石棺21基，溝状遺構５条を確認している。遺物は，青銅製の銅鏃25本以上，細型銅剣４点，多鈕細文鏡１点，後漢鏡１点が墓域周辺から出土している。

(4) 平成13年度長崎県緊急雇用対策事業（原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第３集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字八反　　調査区は，西側低地部で標高約７mの所に位置する。検出した遺構は，濠１条，溝２条，旧河道１条，畦畔条遺構，杭列，足跡状遺構などを確認している。濠内からは人骨と獣骨併せて282点が出土している。

平成14年度事業

(1) 平成14年度国庫補助事業（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集）

調査場所　①芦辺町深江鶴亀触字八反・②芦辺町深江鶴亀触字高元・③石田町池田西触字石田高原

①の八反地区は，弥生時代後期～古墳時代初頭の溝２条，弥生時代中期の溝１条，と１間×２間の１号掘建柱建物跡と２号掘建柱建物跡の柱穴２基を確認している。②は，遺跡の中心域に当たる台地高台部分で標高11m～15m部分にあたる。弥生時代終末～古墳時代前期にかけての住居跡７基を確認した。出土遺物に調査Ⅱ区４層から青銅製銅鐸の舌が出土している。③の石田高原地区は，弥生時代の溝14条と大型の落ち込み及び古墳時代の落ち込みを検出している。また，９号溝と10号溝が途切れた部分に遺跡中心域への入り口と見られる通路状遺構を確認している。遺物は，５号溝から竜の線刻

のある絵画土器や金属器・骨角器・組み合わせ式の机・ココヤシ製笛等が出土している。

(2) 平成14年度一般地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字八反

主な遺構として溝４条，環濠１条，旧河道２条及び堰状跡を検出している。遺物は堰に使用していた把手付の扉材等の木製品と半島系土器が出土している。

(3) 平成14年度芦辺町事業（芦辺町文化財調査報告書第15集）

調査場所　芦辺町深江鶴亀触字原・高元

調査地点は，遺跡丘陵頂部から北西に県道勝本石田線の沿線部にあたる２箇所を実施した。

調査の結果，竪穴住居跡12棟，掘建柱建物跡２棟，土坑３基，ピット群，道路状遺構等を確認する。

(4) 平成14年度石田町事業（石田町文化財調査報告書第６集）

調査場所　石田町石田西触字大原

石田町は昨年実施した墓域の南側の調査を行っている。この結果は，甕棺墓１基，土坑２基，ピットを確認している。

平成15年度事業

(1) 平成15年度国庫補助事業（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第28集）

調査場所　①芦辺町深江鶴亀触字原②芦辺町深江鶴亀触字高元③石田町石田西触字高原

①の原地区では，頂部縁辺部にトレンチを設定して調査を実施した。南側では１号環濠に接続する溝２条を検出している。②の高元地区は，弥生時代中期～古墳時代後期にかけての竪穴住居跡19棟，土坑32基，柱穴群を確認している。遺物として，銅鏃，鯨骨製アワビお越し，内行花文鏡等の遺物が出土した。③の高原地区では，弥生時代中期中葉の環濠および溝状遺構６条を確認している。

(2) 平成15年度一般地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査（原の辻ニュースレター第19号）

調査場所　①芦辺町深江鶴亀触字八反

北側水田部分を調査した結果，弥生時代中期～古墳時代前期の旧河道２条と溝８条，環濠を検出している。旧河道からは，樹皮を敷いた遺構と下流の東側岸からは，約40mに渡り礫を配した護岸遺構を確認している。

(3) 平成15年度芦辺町事業（芦辺町文化財調査報告書第17集）

調査場所　芦辺町鶴亀触字原

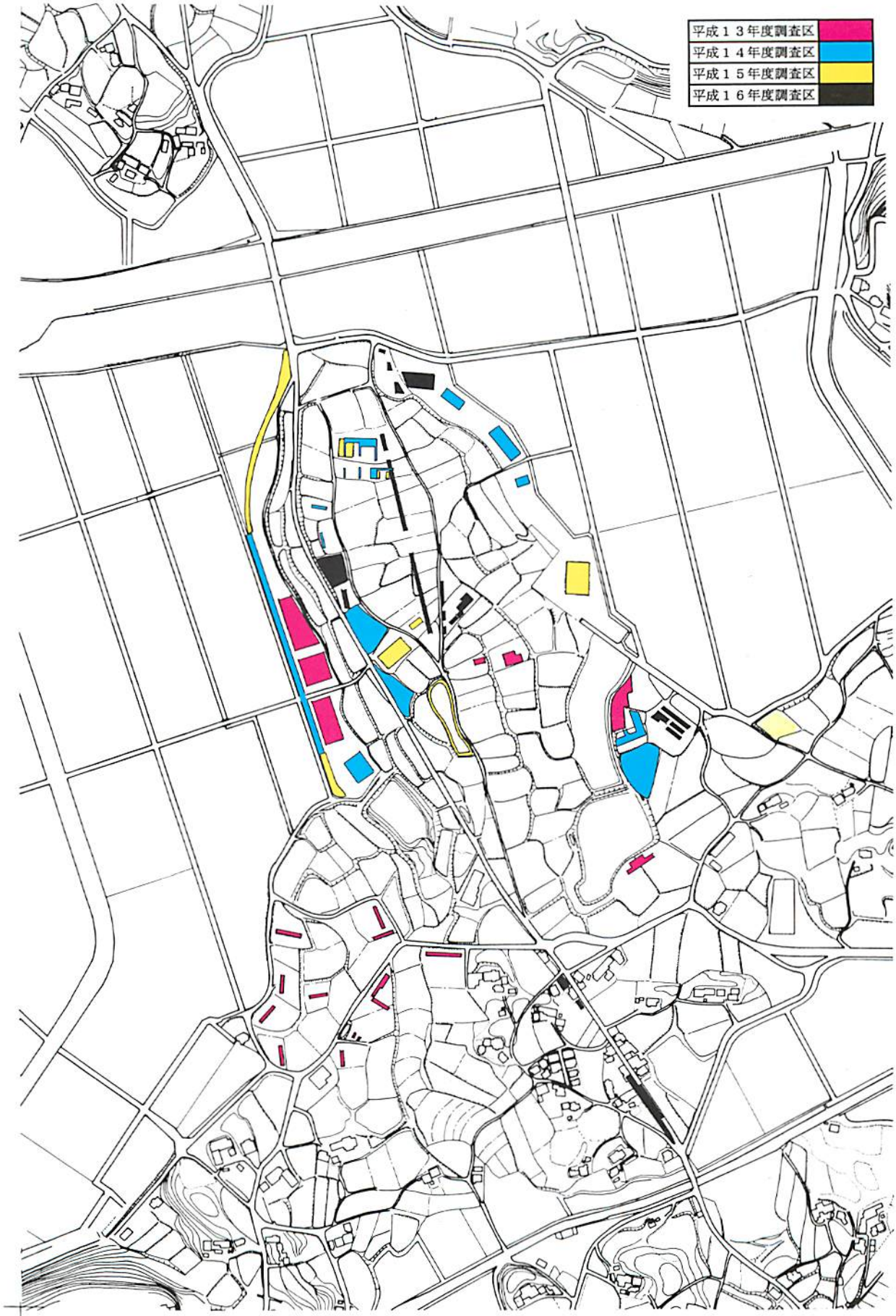
調査箇所は，丘陵頂部から北西部に下りた標高約15mの水田部にあたる。調査の結果，住居跡３棟，土坑11基，甕棺墓３基，石棺墓２基，土壙墓８基，溝２条，ピット群を検出した。主な遺物として，石英粗面岩を使用した鋳型や中広形銅矛が出土している。

(4) 平成15年度石田町事業（石田町文化財調査報告書第８集）

調査場所　石田町石田西触字大原・大川

大原地区から甕棺墓４基と溝状遺構１条を確認している。遺物に青銅製の鏡片２面分（内１点は内行花文鏡）が出土している。

（町田）



第14図　平成13年度～15年度の調査区域

Ⅳ 遺　　構

1．環　　濠

環濠は，原の辻遺跡の居住域である南北に伸びる低丘陵を挟むように広がる，東西の低地部分を中心に展開する。環濠には，低地部の湧水や雨天時の雨水を排水したり，水田に水を給排水する機能のほか，外敵から身を守る防御の役割を果たしたものと考えられるが，実際には，旧幡鉾川から分岐した河道を取り込んで複雑に展開しているのが実情である。ここでは，環濠に限らず，これに関連する河道や溝・落ち込みなども検討の対象とする。また，調査の進捗状況や遺構群の在り方の違いから，便宜的に低丘陵を挟んで東側低地部の遺構群と西側低地部の遺構群に分けて詳述し，最終的に環濠群の総合的な把握を試みることにする。

・東側環濠

東側低地部は，平成５年度以降本格的な調査が行われ，その後，平成14年度～平成16年度にかけて継続的に調査を行っている。調査面積は延べ8,000㎡以上に及ぶが，未調査箇所も多く，西側低地部と比較して不明な点が多いのが実情である。ここでは，遺構群の展開が複雑な北東低地部を中心に，環濠群のつながりや遺構群の切り合い関係について把握した後，遺構群の時期的な変遷についてまとめる。

環濠群のつながり

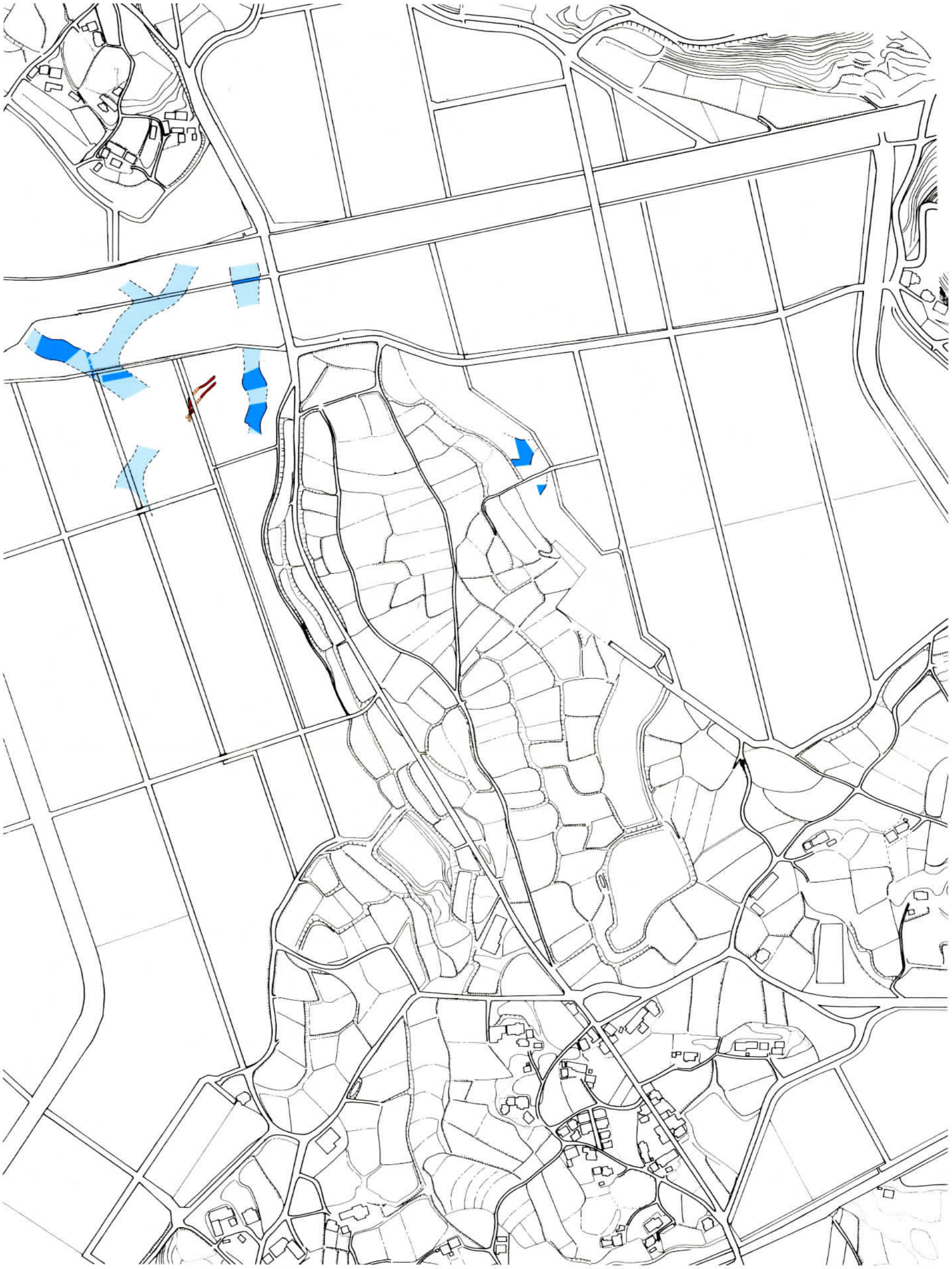
先述の通り，東側低地部の環濠群は未調査箇所も多く，環濠の平面プランだけでつながりを追うのは困難な状況である。そこで，ここでは環濠の断面形態と覆土の堆積状況を中心に，出土土器の在り方と併せて検討を加えたい。

環濠群は基本的に丘陵裾部に沿って南北に展開している（**第19図**）。現在確認されている環濠群のうち，最も丘陵に近いものを第１環濠とする。第１環濠は，弥生時代中期中葉に掘削され，中期末～後期初頭に埋没した後，後期後葉に再掘削される。断面形は逆台形を基本とし，東側の掘方の方が傾斜がきつい。また，覆土の中位～下層にかけて腐植土が堆積する点が特徴である（**第20図**）。なお，第１環濠Ｌ－Ｌ'土層では，覆土の中位に砂質土が堆積しており，北側の覆土と相違するが，この特徴は後述する第２環濠の特徴と共通しており，平面プランの検討と併せて，第１環濠と第２環濠が合流することを示しているであろう（**第19図**）。

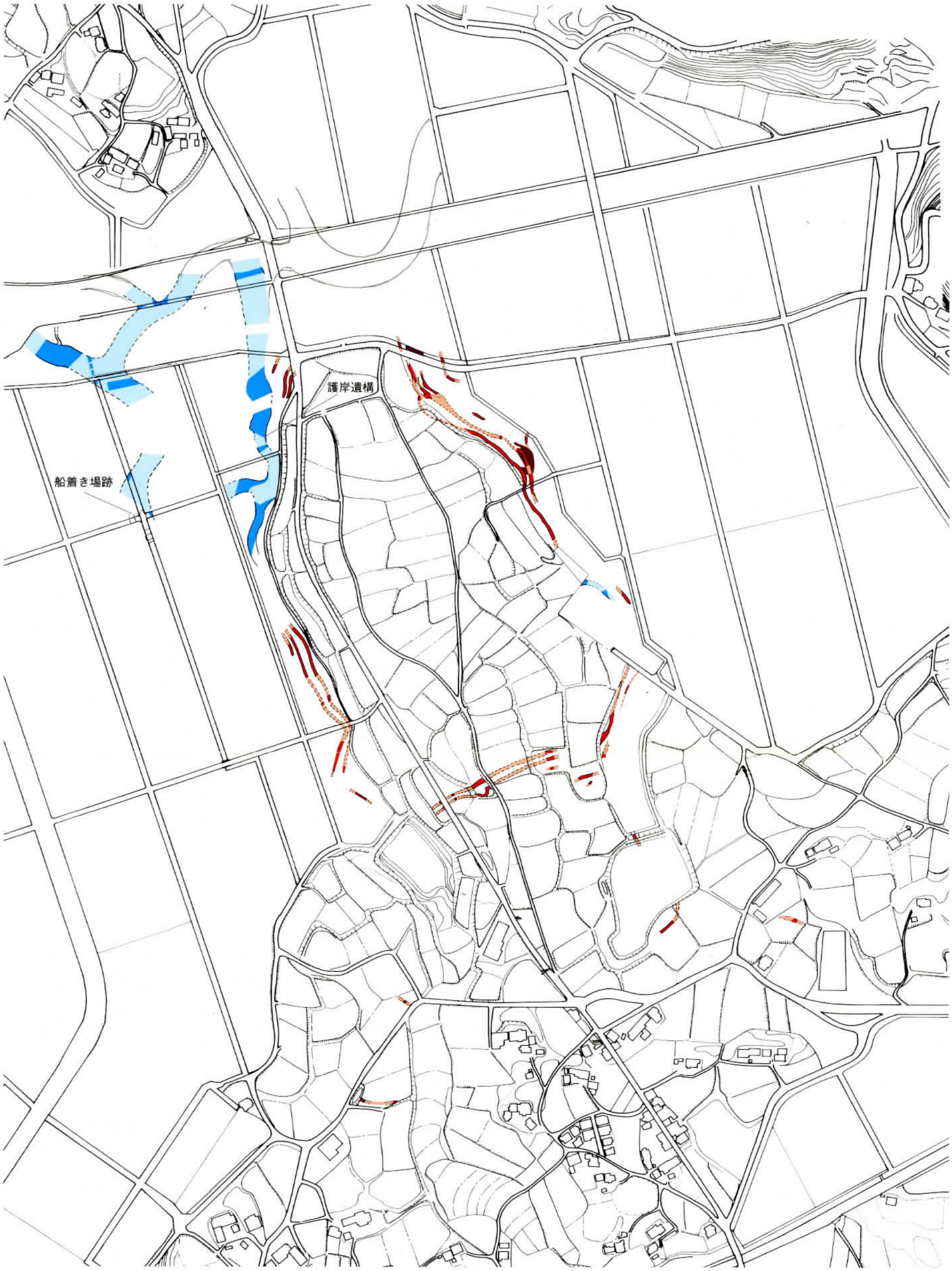
以上，第１環濠の構成は，北から順に以下の通りとなる。

５号溝（Ｈ５年度）－２号溝（Ｈ５年度）－１号溝（Ｈ５年度）

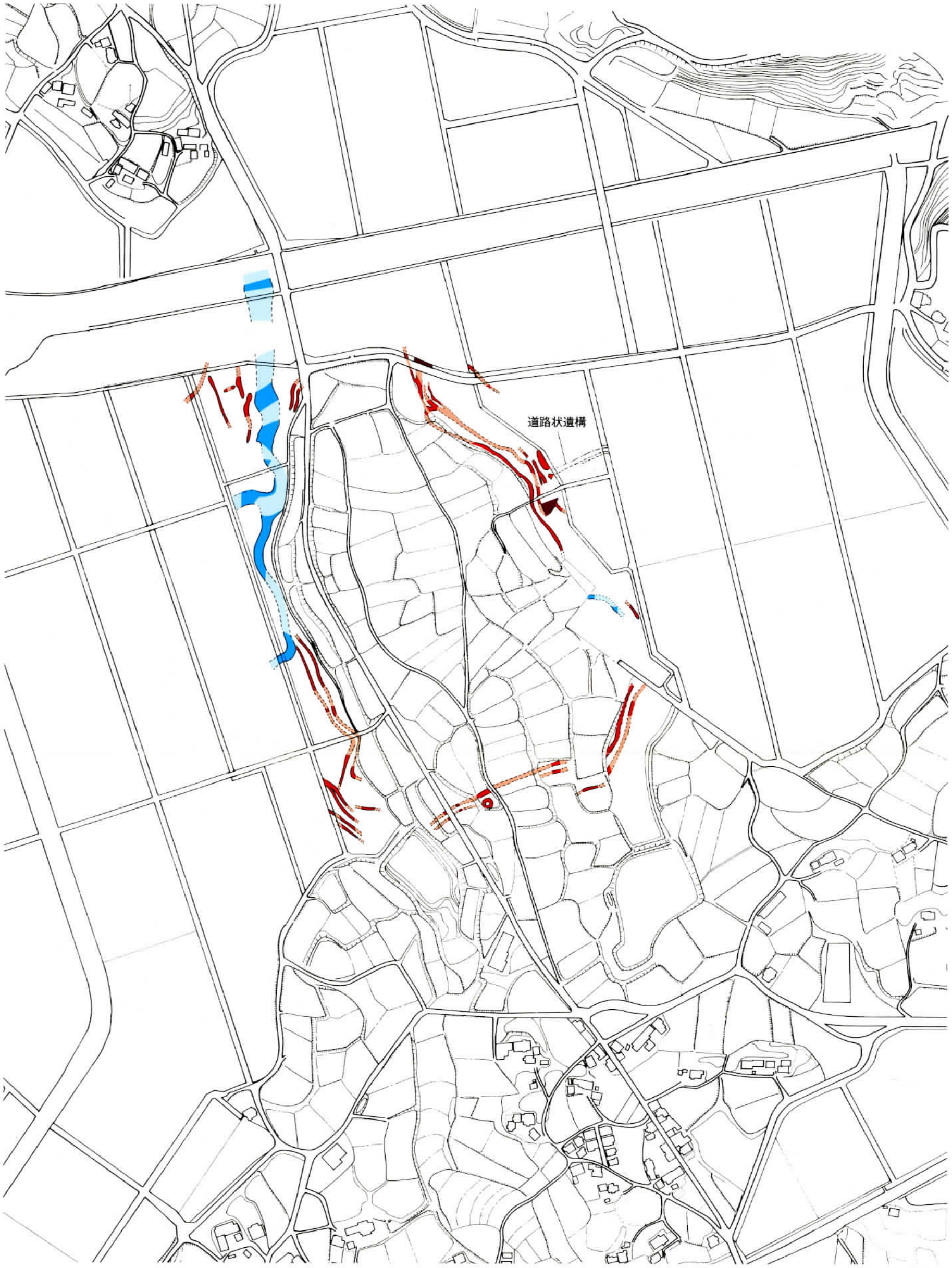
第２環濠は，第１環濠の東側に隣接する環濠である。第１環濠と同じく，弥生時代中期中葉に掘削され，中期末～後期初頭に埋没した後，後期後葉に再掘削される。断面形は逆台形で，第１環濠と同じく東側の掘方の傾斜がきつい。また，覆土の特徴は北半部では土層の中位に腐植土層が堆積しているが，南半部では中位に砂質土，最下層に腐植土が堆積している。北半部での特徴である中位に腐植土を挟む点については，第１環濠でも認められているが，平成16年度の調査で，第１環濠から分岐して南側へ展開する第２環濠の一部が検出されており，第１環濠との合流地点に近い地域では，第１環濠と共通した堆積環境にあったことが推測される。南半部での特徴である砂質土と腐植土の構成は，先述の通り，第１環濠の最南端でも認められており，第１環濠と第２環濠が合流することを暗示する



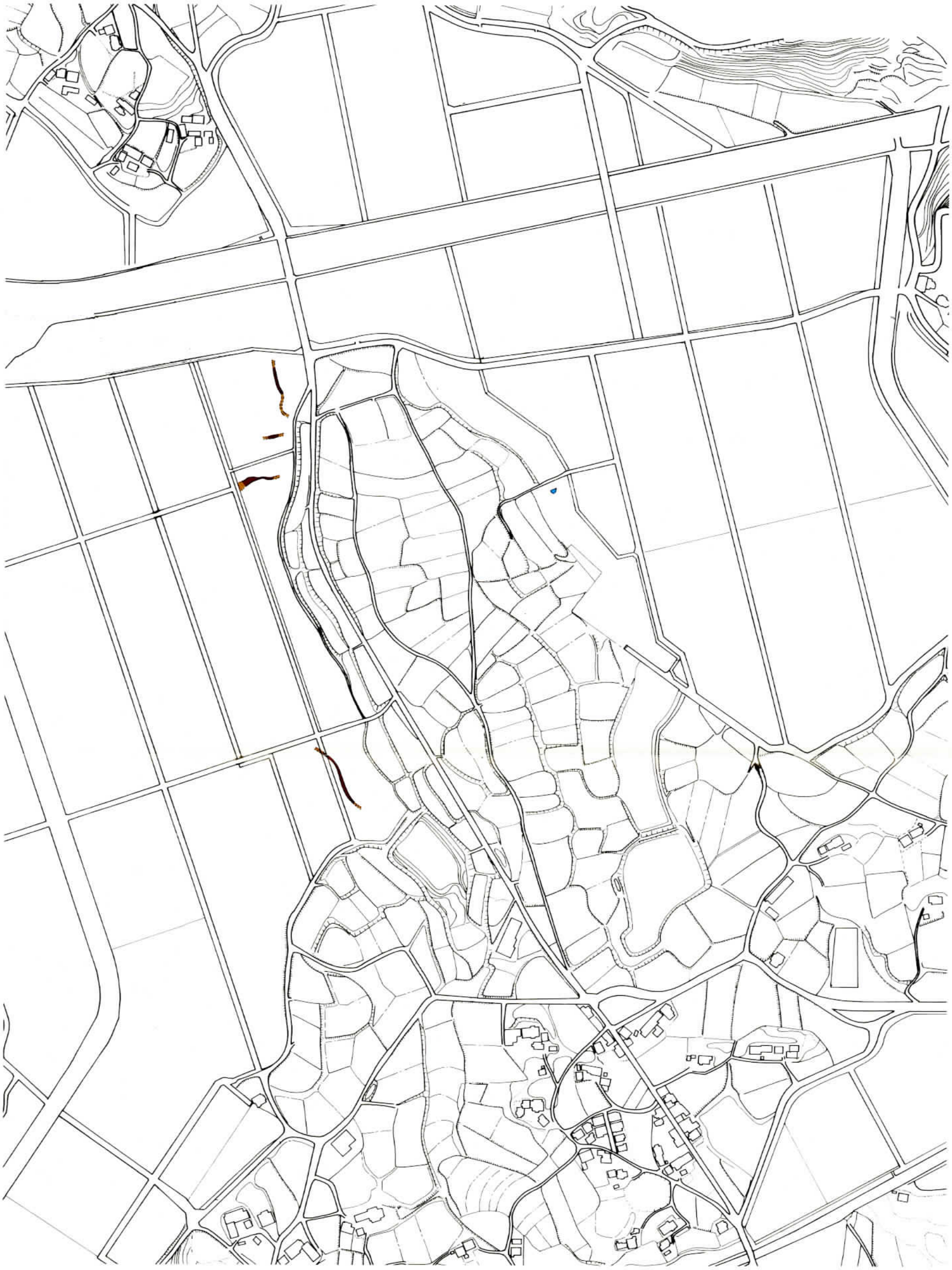
第15図　弥生時代前期の河道・環濠・溝の状況図（破線は推定ライン）



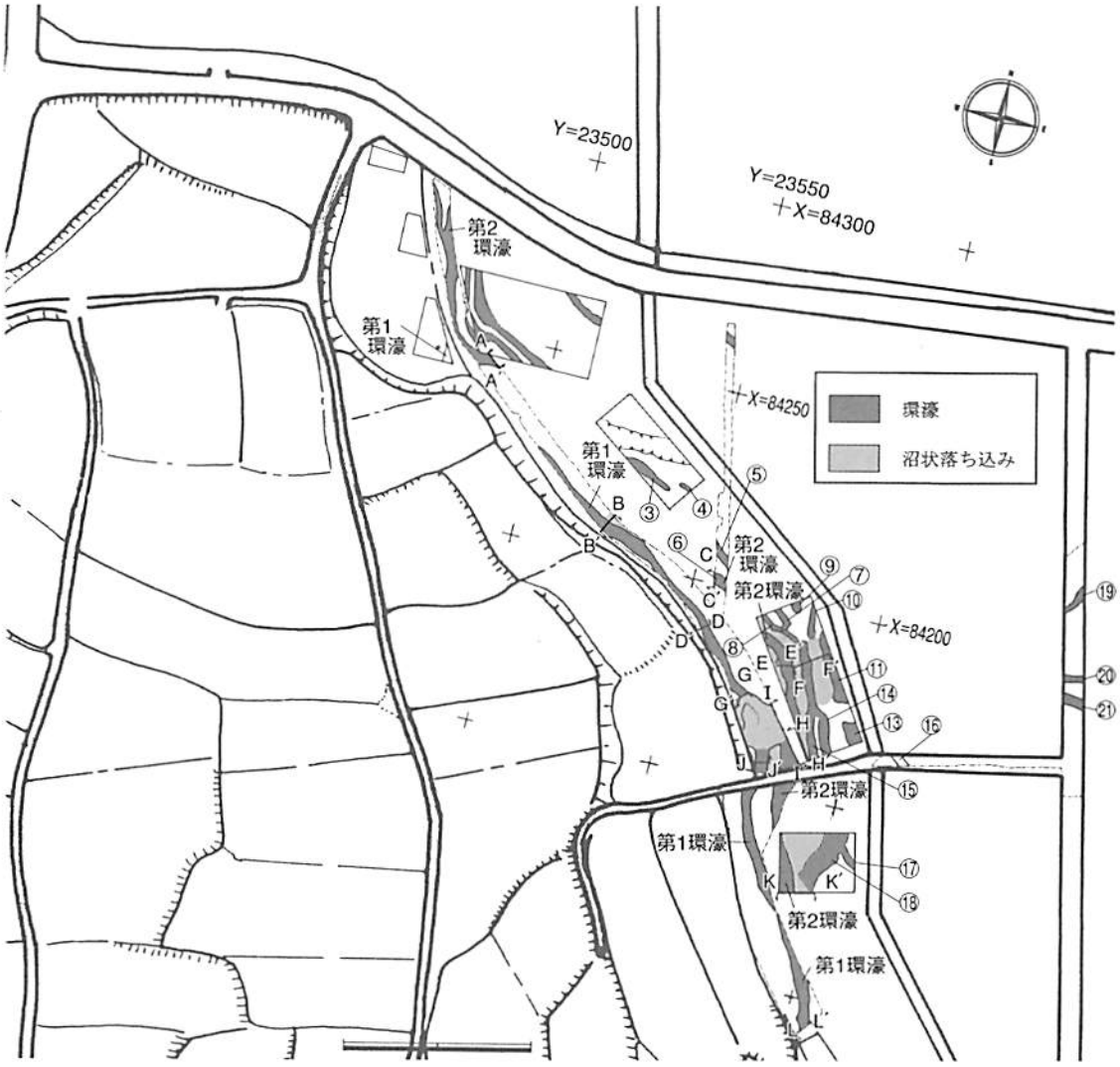
第16図　弥生時代中期の河道・環濠・溝の状況図（破線は推定ライン）



第17図　弥生時代後期の河道・環濠・溝の状況図（破線は推定ライン）



第18図　古墳時代前期の河道・環濠・溝の状況図（破線は推定ライン）



第19図　北東低地部遺構配置図

ものである。

以上，第２環濠の構成は，以下の通りである。

５号溝（Ｈ５年度）－３号溝（Ｈ５年度）－ＳＤ３（H14年度）－４号溝（Ｈ５年度）

北東低地部における遺構群の展開

①沼状落ち込みの広がり

平成14年度の調査の際，本格的な環濠掘削以前の堆積物を確認した。腐植土および砂質土の互層からなる堆積物で，比較的フラットな堆積で明確な掘り込みを持たないことから，落ち込み内に堆積した自然堆積物と判断し，「沼状落ち込み」と呼称した。一方，平成５年度調査時に「大溝」とした遺構は，東に隣接する場所からは溝として検出されず，この遺構の展開については検討の余地を残していた。大溝内からは，後述するように弥生時代前期後葉の土器がまとまって出土し，原の辻遺跡の初現期の遺構として非常に重要な位置を占めている。そこで，「大溝」を含めた環濠掘削以前の堆積物について検討を加えてみたい。

大溝の土層を観察すると，明瞭な掘方はなく，断面床面も比較的フラットであることがうかがえる（**第20図**）。また，覆土の堆積状況は，最下層に腐植土層が堆積し，粘質土の間層を挟んで砂質土が薄く堆積している。実は，この堆積状況は，平成14年度に確認した「沼状落ち込み」と共通している。すなわち，平成５年度調査区と隣接する平成14年度調査区の土層では，最下層に腐植土が厚く堆積し，粘質土の間層を挟んで砂質土が薄く堆積している状況が確認できるのである。このような堆積状況を

見せる環濠掘削以前の堆積物は，実は「大溝」の東側から北側，さらには南側へと一定の広さをもって展開し，最下層の床面標高も3.4～3.5mとほぼ共通することから，一連の遺構と考えることができる。そこで，ここでは「大溝」も含めて「沼状落ち込み」と捉える。

②沼状落ち込みと環濠群の切り合い関係

沼状落ち込みと第１環濠・第２環濠の関係は，土層図の観察からも明らかなように，沼状落ち込みの埋没後，環濠が掘削されている（**第20図**）。沼状落ち込みの最下層腐植土層からは，先述の通り，弥生時代前期後葉の土器群がまとまって出土しているが，埋没の時期および環濠掘削の時期は明確でない。北東低地部における遺構群の変遷を考える上で，両者の時期的な切り合い関係は非常に重要と考えられるため，ここで再度両者の出土土器を検討して，環濠の掘削時期について考えてみよう。

第21図上段は，沼状落ち込み出土土器，および沼状落ち込み埋没後に掘削された環濠出土土器のうち，古手の土器を掲載した。これによれば，沼状落ち込み内からは，弥生時代前期後葉～中期初頭の土器が出土しており，これを切る環濠内からは，弥生時代中期前葉（須玖Ⅰ式古段階）の土器が出土している。したがって，沼状落ち込みは弥生時代中期初頭には埋没し，中期前葉には環濠が掘削されたものと考えたい。平成14年度に調査した際には，沼状落ち込み検出面から弥生時代中期末～後期初頭の土器を検出したが，これは環濠が埋没する際に，覆土があふれて遺物が環濠外に広がった結果と捉えられる。

以上，北東低地部における弥生時代中期までの遺構群の展開をまとめると，次の通りとなる（**第21図**下段）。

弥生時代前期後葉～中期初頭にかけて，南半部を中心に沼状落ち込みが広がる。この範囲は，少なくとも南北80m，東西40mおよび，特に東側にかけてはこれよりも広範囲に展開する可能性が高い。中期前葉には，沼状落ち込みが埋没するとともに，低丘陵の縁辺に沿って環濠群が掘削される。環濠群は，低台地裾の第１環濠および第２環濠を基本に，北半部を中心に東側にも数条の環濠が展開している。

このように，北東低地部においては水はけの悪い沼状落ち込みが存在し，中期前葉段階における環濠も，低地部での新たな土地利用を画策する中で，排水を意図して掘削されたものと考えられる。環濠覆土に一様に認められる腐植土の堆積も，おそらくは沼状落ち込みに起源する堆積物と考えられ，上記の推測を裏付けるものである。

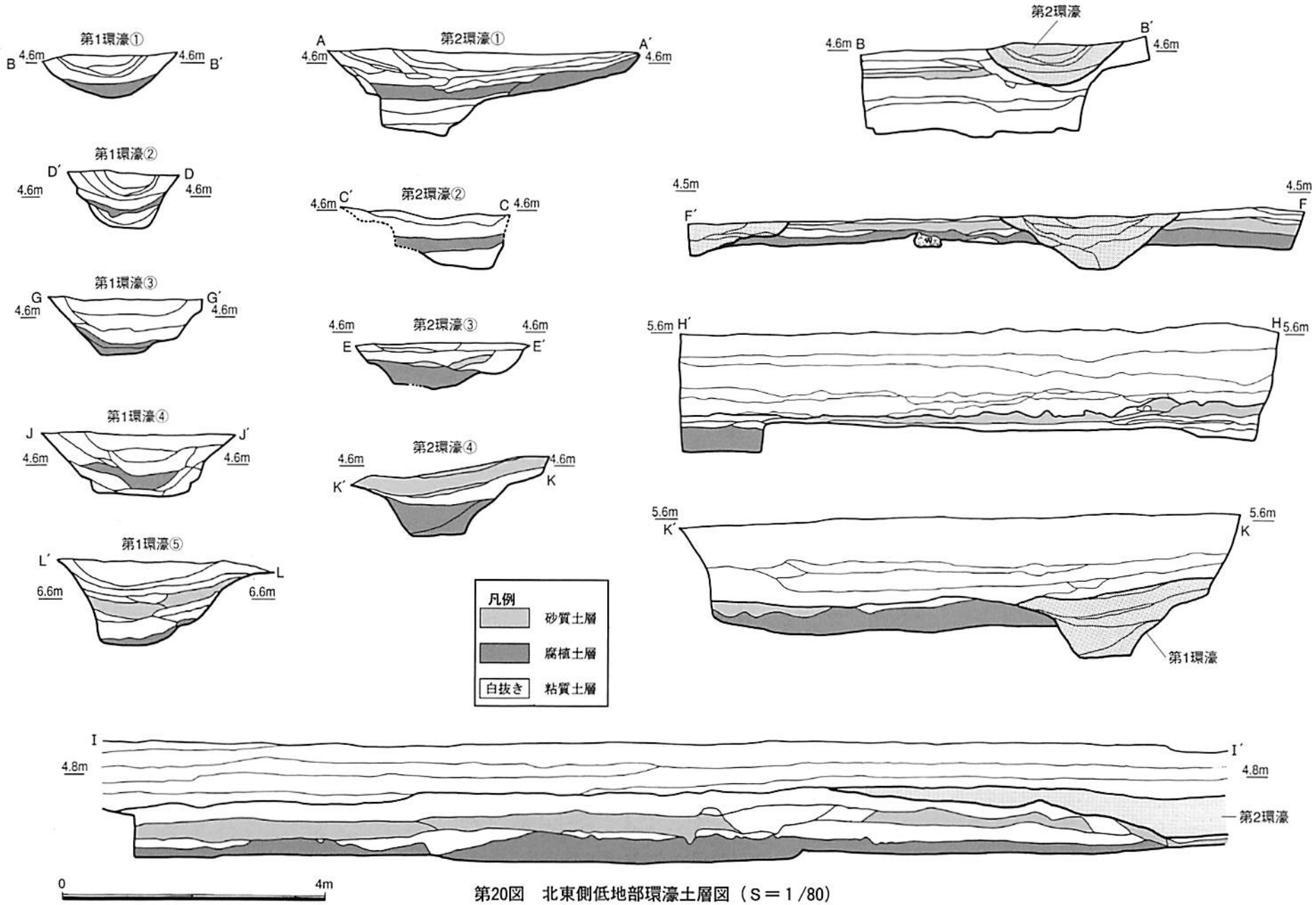
東側低地部遺構群の展開

これまで検討してきた北東低地部の成果を元に，南東低地部での調査成果を加味して，東側低地部における遺構群の変遷についてまとめたい（**第15図～第18図**）。

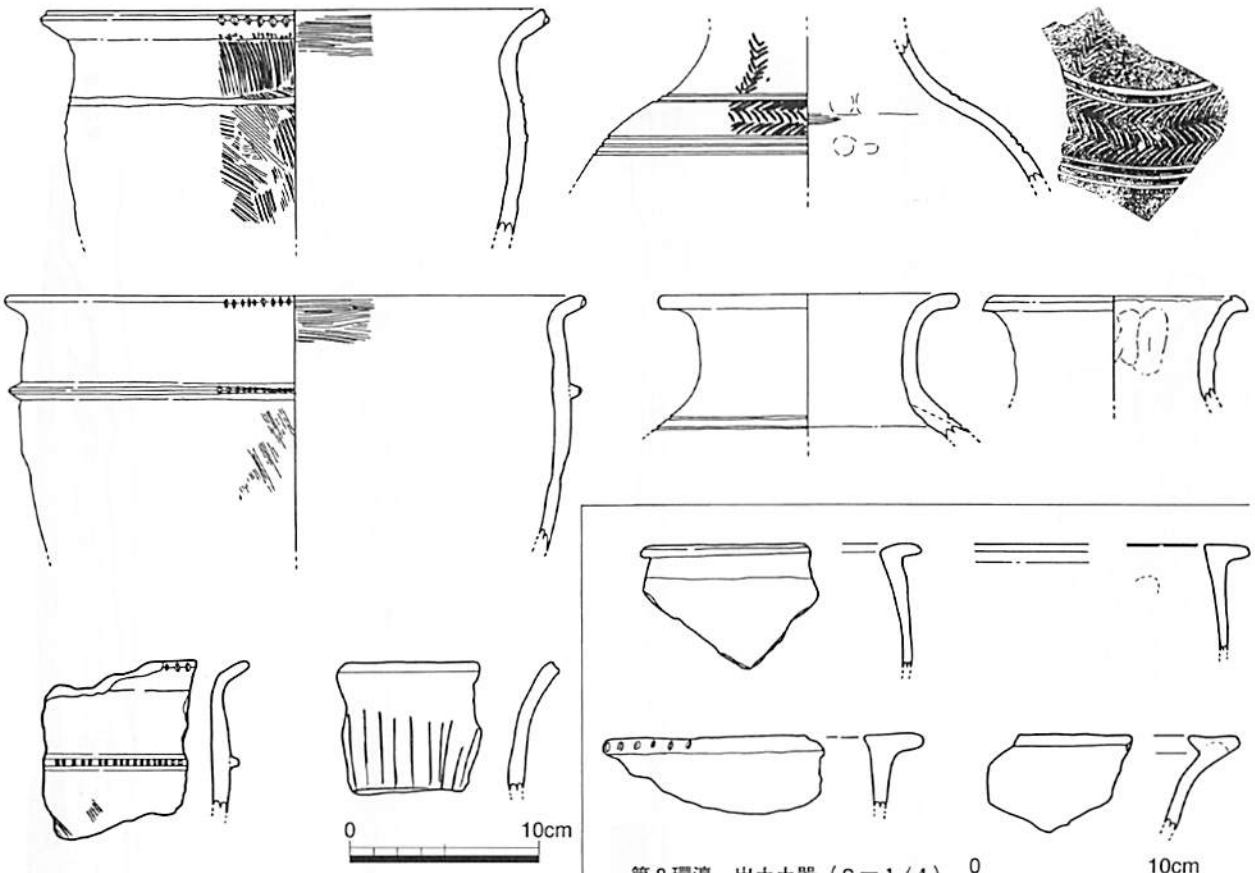
①弥生時代前期後葉～中期初頭（第15図）

この時期には，先述の通り沼状落ち込みが展開する。標高3.4～3.5m付近を最低地点とし，この上に腐植土・粘質土・砂質土が互層で堆積する点が特徴である。最下層の腐植土層中からは，弥生時代前期後葉～中期初頭の土器群がまとまって出土しており，原の辻遺跡形成直後には，東側低地部では積極的な土地の改変は行われていない。おそらく，沼状落ち込み周辺での水辺の祭祀が行われたか，あるいは灌漑施設を伴わない湧水地点周辺での小規模な水稲耕作が行われていたのであろう。

②弥生時代中期前葉～後期初頭（第16図）

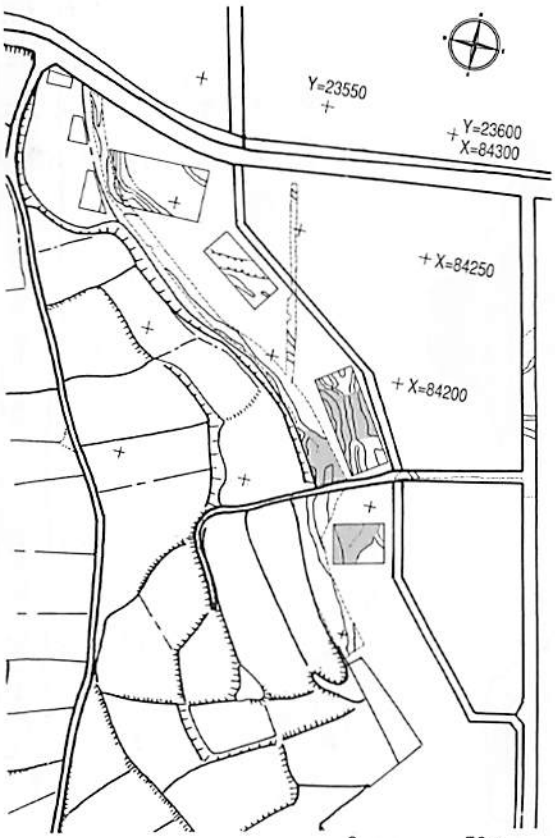


第20図　北東側低地部環濠土層図（S＝1/80）

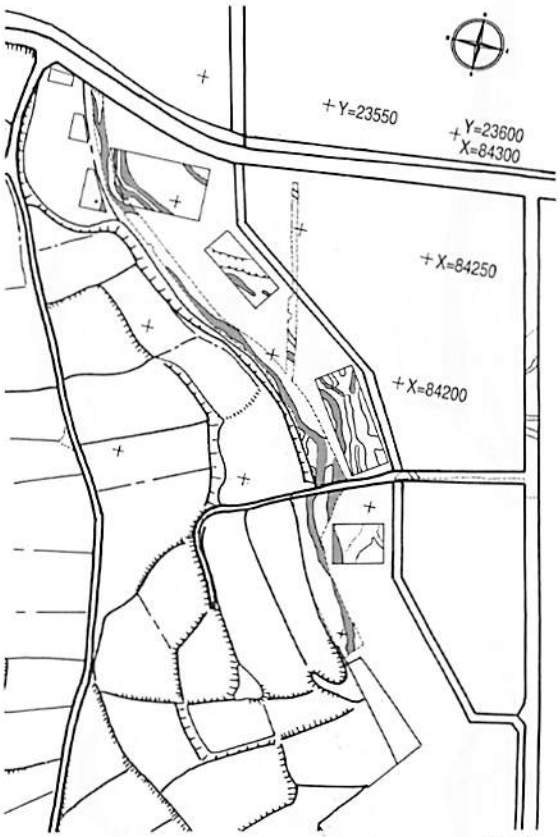


沼状落ちこみ最下層　出土土器（S＝1／4）

第8環濠　出土土器（S＝1／4）



弥生時代　前期後葉～中期初頭



弥生時代　中期前葉～後葉

第21図　沼状落ち込み・環濠出土土器（S＝1／4）および弥生時代中期における遺構群の変遷（S＝1／2,000）

積極的に遺構が構築される時期である。低台地の縁辺に沿って第１環濠・第２環濠が掘削され，さらに東側にも小規模な環濠か掘削される。この時期の環濠は，いずれも沼状落ち込みを起点に展開しており，北端部でも沼状落ち込みの存在と，これにつながる環濠の状況が復元できる。この時期の環濠の機能は，低地部の排水が主な目的であったと考えられ，集落全体の整備とそれに伴う低地部での新たな土地利用を意図したものであった可能性が高い。この時期の環濠覆土中には腐植土層が堆積する点が特徴で，沼状落ち込みを起源とするものであった可能性が考えられる。

一方，台地縁辺部での環濠の掘削は，南東低地部まで展開する。東西方向に伸びる小規模な谷を挟んで，さらに南側でも台地縁辺に沿って２条の環濠が確認でき，それぞれ北東低地部の第１環濠・第２環濠に対応できる。南東低地部の第１環濠は，台地上を横断して西側低地部の環濠群と接続するが，第２環濠は南東低地部からさらに南の台地上へと展開し，現在のため池（原池）を縦断して西側に折れる。このほかにも，南端部付近ではこの時期の環濠が散見され，南北約700mにわたって最も広範囲に環濠が展開する時期である。

③弥生時代後期前葉～弥生時代終末（第17図）

弥生時代中期の環濠は，中期末～後期初頭を最後にいったん埋没する。後期前葉段階でも環濠内から土器が出土する場合もあるが量は少なく，他の遺構の在り方も考慮すれば，中期までと比較して，相対的に低地部への働きかけが弱い時期と捉えることができる。東側低地部への本格的な働きかけが強まるのは，弥生時代後期中葉以降である。この時期，第１環濠・第２環濠の再掘削が行われるとともに，さらに東側でも新たに環濠が掘削される。第２環濠よりも東側で展開する環濠群は，途中で途切れる場合も少なくなく，分岐・合流を繰り返しながら，断続的に展開する。この途切れた環濠の合間を縫って展開するのが，道路状遺構である。東から西へと直線的に伸び，環濠と環濠の間の陸橋を通って南へと折れ，再度西に折れて台地上へと至る。道路状遺構の屈曲部分に相当する環濠では，掘り込みの際の部分で小規模なピットを検出しており，柵列のような環濠への転落を予防する構築物が存在したものと考えられる。

南東低地部では，第１環濠・第２環濠が再掘削される。第１環濠は弥生時代中期と同様，台地上へと展開していくが，第２環濠も台地上へと展開しており，南側台地へと展開しない点が，弥生時代中期の環濠との相違点である。結果として，この時期の環濠は東側へは積極的に展開するものの，南側への展開は前段階と比べて消極的で，南北480mの範囲を区画している。この点については，他の遺構群，特に墓域の形成と密接に関連するものと考えられる。

④古墳時代前期（第18図）

弥生時代終末から埋没し始めた環濠は，この段階でほぼ完全に埋没する。第１環濠や第２環濠の一部では，環濠の最上層にこの時期の包含層が浅く形成されており，自然流路のような状況であったと考えられる。また，北東低地部では，弥生時代中期の環濠を再掘削しているが，断面Ｕ字形に浅く掘り直しており，弥生時代の環濠とは明らかに異なる。低地部の排水や水田経営に伴う給排水が目的であったと考えられる。また，環濠の埋没に伴って，北東低地部南半部では沼状落ち込みが再度形成されることになる。

このように，東側低地部の遺構群は，沼状落ち込みをはじめ地下水位が比較的高い環境の中で，治水を前提とした展開を見せる点が大きな特徴である。

・西側の環濠，河道，溝

ここでは，第15～18図で示した西側環濠等の変遷について，遺構を分析するために第22図にそれぞれの環濠に番号を附記した。この遺構図を基に，セクション図を第23・24図に示し，報告書中での考察を基に，全体の変遷と性格について考える。ただし，報告書どおりに小さな，あるいは大きな時間軸でそれぞれの遺構を捉えた場合，各々の遺構が有機的に繋がらないという不都合が生じている。これは，調査者によって遺構の時期設定の方法が相違するということに起因するのであって，これを打開するには，遺構を遺跡全体の中で捉えることが必要となってくるものと考える。あくまで環濠は，ある時期に丘陵を幾重か巡っていたことを考えれば，繋がりがあったことは明白である。このことを念頭に，これまでの調査での環濠等の繋がりを全体的に捉え，大きな時間軸ではあるが，環濠・河道・溝について，弥生時代前期～古墳時代前期までの遺構の変遷の中で，各遺構の性格を捉えていくこととする(註1)。また，Ⅶ章の総括で東西の環濠をとおして考察する。

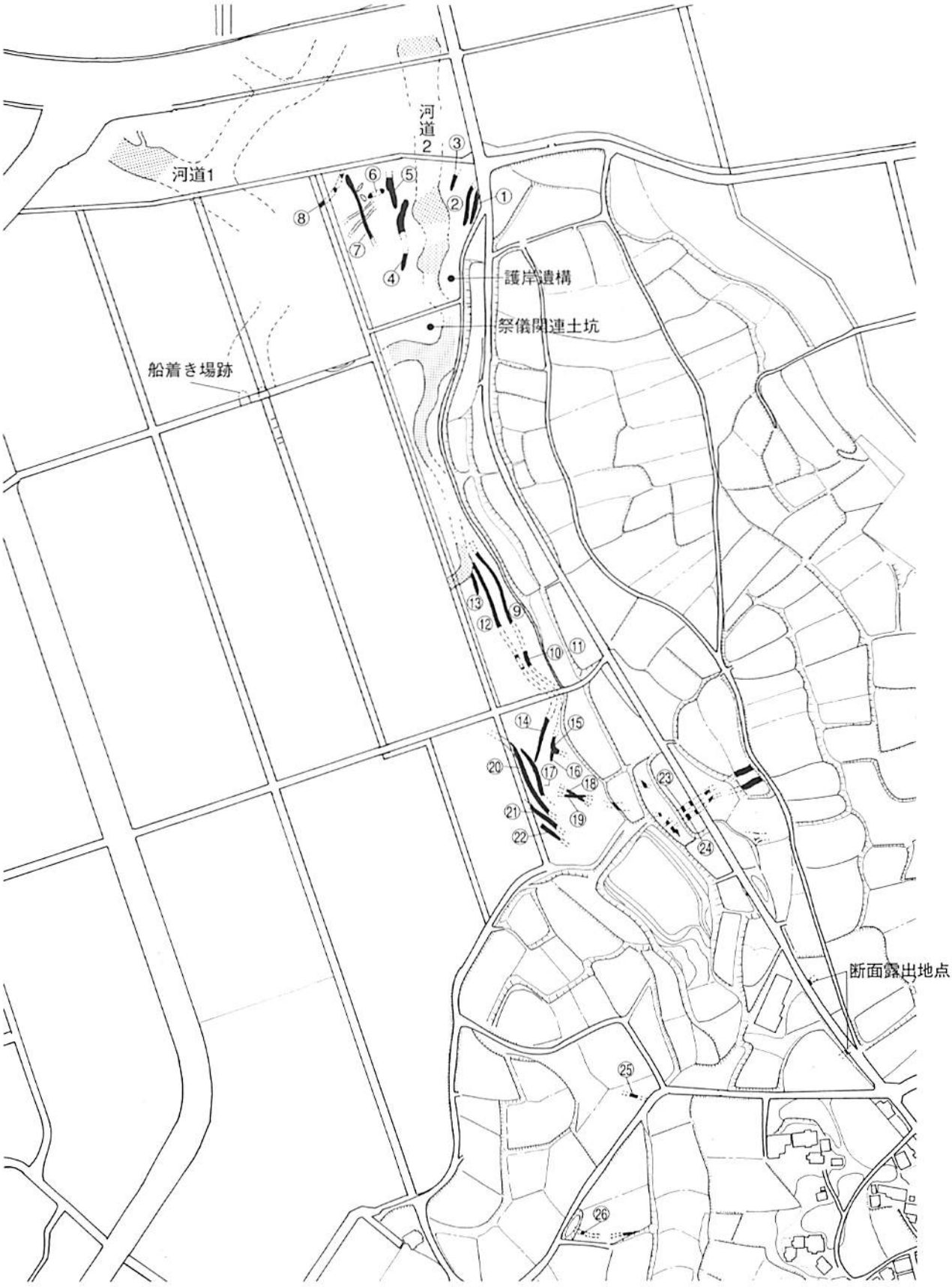
前期の状況

河道１は，遺跡の形成期である弥生時代前期末の遺物が出土しており，前期には丘陵北西側を蛇行しながら流れ，丘陵沿いを北上する流れと合流して東側に流れ出ていたことが理解できる。河道に取り囲まれた地域でピットや溝が検出されているが，前期に関する明確なピットについては不明瞭である。第15図の溝については，後期の環濠に切られ，遺物的にも前期末の土器が出土していることから，前期の溝として捉えられている。この溝については，他の遺構が判然としないことから，性格的なものについては定かではないが，後期の環濠と直行していることから，明らかに意識の相違が見られる。環濠との相違は，幅が狭いこと，深度が浅いことなどから溝として扱われている。前期に関わる溝としてはこの２本の溝以外に検出されていない。今後，付近で検出されているピット等を再検討し，溝の性格について検討する必要がある。

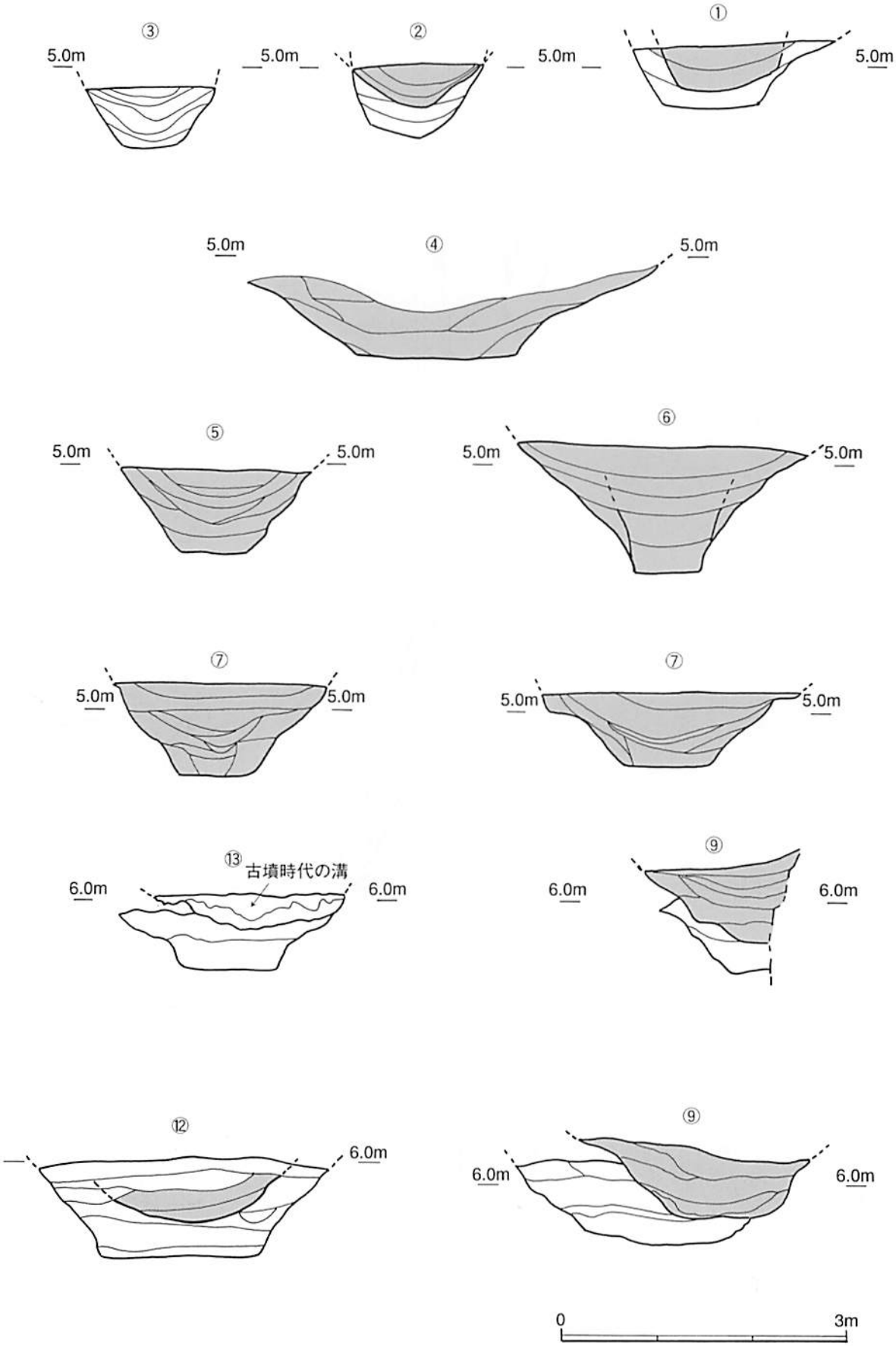
中期の状況

河道の流れは前期とほぼ同じ状況である。ただし，河道沿いに船着き場跡や護岸遺構を築き，河道を最大限利用する時期である。河道に対する祭祀の痕跡も見られるなど，遺跡における河道の存在は中期の段階でかなり大きな位置を占めるようになったものと思われる。

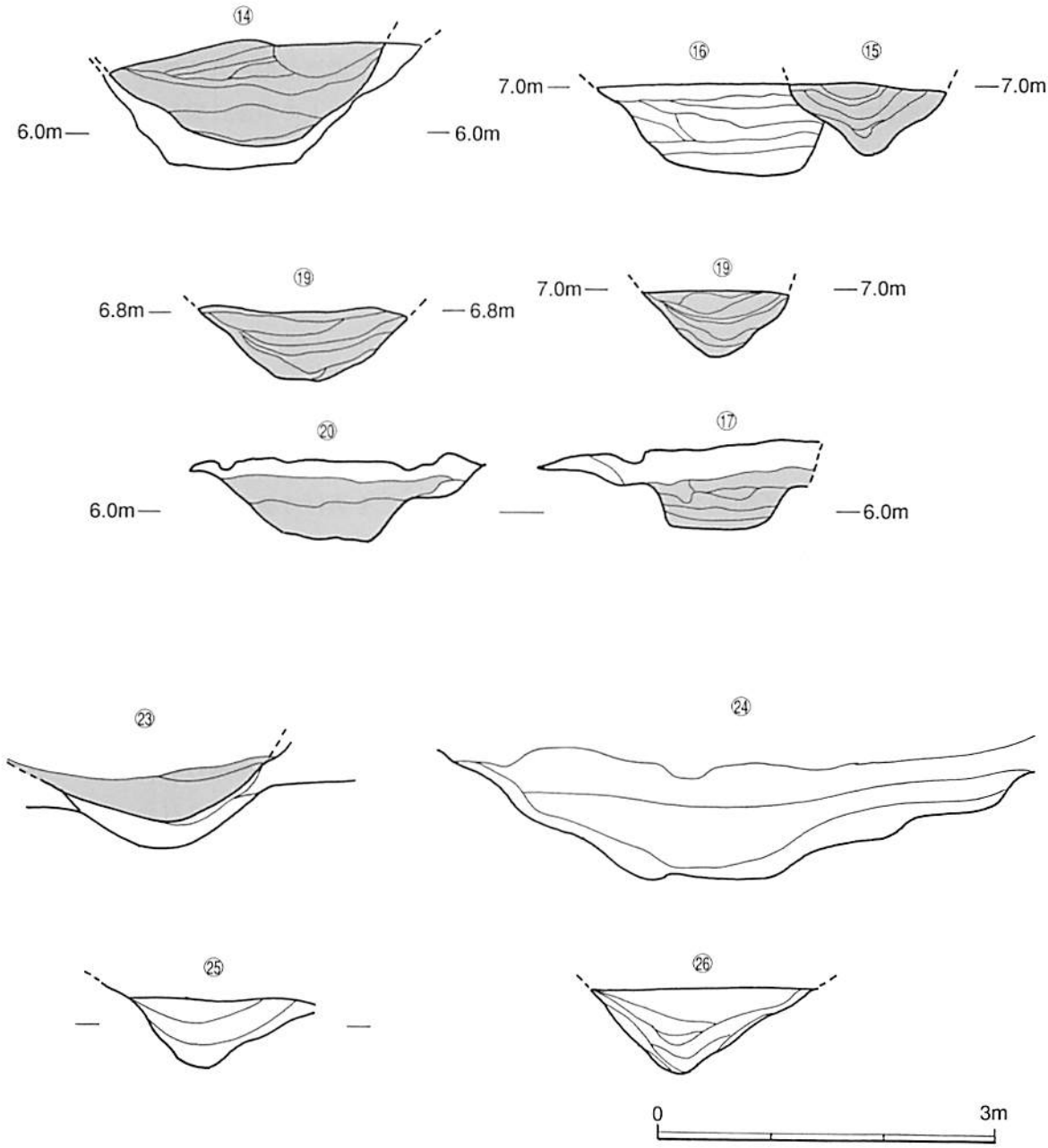
環濠については，第22図①～③の環濠で代表されるように，３本の環濠が丘陵側を取り巻く。①(内濠)・②（中濠）・③（外濠）は，第23図のセクション図でも理解できるように逆台形状を呈し，深さは約１m幅は３m前後である。ただし，丘陵際はかなり削平を受けていることを考慮すれば，深い環濠であったことが考えられる。この３本の環濠は途中で途切れているが，これは河道が自然の環濠の役割を果たしていることから，河道手前で環濠が途切れるものと考える。ここでも河道の果たした役割は大きいと言わざるをえない。この時期に環濠が３本存在することは①～③の環濠で理解できるが，南側でも⑨・12・13の環濠の在り方から３本の環濠が取り巻いていた可能性が高い。12・13は，後に河道によって切られていることから，北側の状況については不明瞭であるが，丘陵の中央部やや北側から河道が西側に抜けていたものと思われ，河道による防御ができない部分に環濠を巡らしたのであろう。①～③の環濠同様，北側では河道付近で途切れるような環濠と思われる。⑨と12の２本は南側に延びているが，13に繋がる環濠が確認できていない。この付近の旧地形は西側に膨らんでいる状況が見て取れ，３本目の環濠はさらに西側に位置している可能性がある。南端部では14・16・18が中期



第22図　西側低地部の環濠等状況図



第23図　西側環濠セクション図（番号は第22図と符号）
※アミカケは後期の環濠



環濠の上部は殆ど削平をうけている。中期の環濠の埋没後，後期の環濠が中期の環濠明確に切っていることを判別できるものもあるが，切り合い関係については上下の遺物の変化を重視したきらいもあり，線引きしていないものもある。多くのものは，上部に後期終末から古墳時代前期の遺物を含んでおり，環濠はこの時期の遺物の投げ捨てによって終焉を迎える。

第24図　西側環濠セクション図（番号は第22図と符号）
※アミカケは後期の環濠

の環濠である。⑭・⑯はほぼ並行して南西側に延びていくがその先は削平されていて不明である。18の環濠沿いには，⑱に切られて大型の建物遺構が確認されており，環濠が掘られる以前（中期前葉）になんらかの施設があったことが伺える。⑱の環濠については，丘陵上の環濠に繋がる可能性がある。㉕・㉖はこの一連の環濠の外にあり，内濠・中濠・外濠の３重環濠の外の環濠と思われ，中期には低地部で丘陵際に３重の環濠を巡らすことを基本としながらも，丘陵上南側では，ある一定の間隔をもって環濠が遺跡を取り巻いていた可能性が高い。この環濠については，環濠外の防衛ラインの一つとして理解されている。

後期の状況

河道１について宮崎は，中期末に埋め立てられ畑作などの用地にされていたと報告しており，後期の段階にはすでに流れはなかったとしている。河道２は後期まで存続することが確認されているが，規模的には縮小傾向にある。縮小したとしても，後期に再掘削される①・②の環濠が中期と同じ様に河道手前で止まることからも河道２が後期まで存在していたことを裏付ける。また，新たに丘陵沿いからの流れが合流する。この流れによって，中期の環濠⑨・⑫・⑬の北側が切られことになる。ただし，南側の流れは不安定で，古墳時代前期の遺物も取り込んでいることから，いくつかの流れの中の一つであろう。

環濠は，①～③のうち，③が埋没する代わりに，河道の外側に多くの環濠が築かれる。④～⑧はほぼ北に向きを向けるが，お互いに繋がることなく，短い環濠が錯綜するようになる。中には⑥のように他の環濠と直行する短い環濠も見られるなど，複雑な様相をみせる。⑤は水溜め状の遺構を伴い，④は環濠内に土橋状の粘土帯を何箇所かに設置するなど，性格上もそれぞれに違った在り方を想定させる。中央部では中期後葉に埋没した⑨・⑫・⑬の環濠のうち，⑨・⑫上に後期の環濠が再掘削される（第22図）。ここでは，北側の様に錯綜する環濠の状況は確認されていないが，先述したように，さらに西側で確認されるものと思われる。南側の環濠の状況は⑳～㉒などが中期の段階の外側に造られた環濠と考えられ北側と同じ様な状況を示している。ただし，南側の丘陵上では，中期の㉕・㉖のように後期の環濠と目されるものは確認されていない。

古墳時代前期の状況

環濠あるいは河道が埋没した段階であるが，埋没の過程の中でそれぞれに窪みは残り，水の流れはあったものと理解する。ほとんどの河道，環濠の上面には，漆黒色で有機質の土層が堆積しており，この土層から弥生時代終末から古墳時代前期の遺物が出土することからも，河道・環濠の埋没後に水の流れがあったことが理解できる。この流れに対して人工的に溝を掘削して，水田への水路としていたものであろう。⑳では，扉材を使用した堰が見つかっており，周辺から土師器・鼓形器台などが見つかっている。環濠から溝への変換は，弥生時代の緊張関係が解け，丘陵際まで水田開発に乗り出していく過程が見られる。

（福田）

註１　西側低地部の環濠等については，すでに宮崎によって編年感が造られている。

【参考・引用文献】

宮崎貴夫　2001「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』第４号　西海考古同人会

2．船着き場跡

(1) 船着き場遺構の概要

船着き場跡は，平成８年（1996年）度に実施した圃場整備事業に伴う発掘調査で検出した遺構である[註1]。検出地点は，原の辻遺跡北西部の低地で標高3.6～6.0mを測る。現在は周辺一帯が水田化しているが，以前は沼沢や溜池・曲がりくねった小川があったといわれている。弥生時代にも川が蛇行しながら流れていたことが一部確認されており（杉原，1999），船着き場遺構はこの旧河道に突き出した形で検出された。

船着き場跡は荷揚場と考えられる２つの突堤と，集落への連絡道と思われる石組遺構からなる。突堤は便宜上，西突堤・東突堤と呼んでいる。西突堤の東南隅はＬ字状に屈曲しており，東突堤の南西隅に繋がることが予想される。したがって，突堤部分の平面形はコの字形になると考えられる。突堤は横断面が台形状を呈しており，突堤の長さはいずれも約10mである。船渠部にあたる両突堤間は上部で約12.4m，下部で約8.0mを測る。突堤の構造は，基礎部分に木材や石を敷き，その両端は横崩れを防ぐため杭を打ち補強している。こうして基礎を固めたのち，上部に土を盛って土塁状に仕上げている。盛土の中には樹皮や敷葉と思われる植物堆積層があり土塁の強化を図っている。版築の状況は見られない。盛土の法面は，人頭大から一抱え程の玄武岩礫で覆われ，部分的に樹皮を張り付けている。

石組遺構は，突堤から南に約20mの地点で検出した。石組遺構も便宜上，北石組・南石組と呼んでいる。北石組は，北に向かい12度の傾斜面をもち，南石組みはＵ字形にくぼむ溝状の遺構である。いずれも，突堤と同様の玄武岩礫によって覆われている。両石組の間は起伏がなく土で平坦面を造り出しており，その間隔は約７mである。調査範囲が限られているため突堤と石組遺構の直接的なつながりは不明だが，その位置関係や構造，出土遺物や検出レベルからみて，石組遺構は荷揚場である突堤と集落とを結ぶ通路である可能性が高い。突堤と石組遺構が一連の遺構と考えるならば，南北約46m，東西約26mにわたる大規模な施設の存在が想定できる。船着き場跡の盛土からは弥生時代中期前半（須玖Ｉ式）の土器が出土しており，この時期以降に構築されたと推測される。

(2) 遺構の特徴

特に注目されるのは突堤の構造である。基礎部分は木材によって固められ，突堤の自重による沈下を防いでいるが，この工法は現代のジオテキスタイル工法と同様だといわれている（後藤，1998）。また，土塁の中に樹皮や植物の葉などを敷き込み強化する方法は，散草法・敷粗朶工法・敷葉工法などと呼ばれる[註2]。

これらの土木工学的技術は，現代においても通用する，いわばハイテク工法といえる。この工法をいち早く取り入れ，弥生時代では考えられない大規模な構造物を構築していたところに船着き場跡発見の意義があるといえるであろう。さらにいえばこれらの技術を持った工人集団は，おそらく中国や朝鮮半島から渡来した人々であろうし，原の辻遺跡から出土する大陸系の遺物とともにこの高度な技術ももたらされたと考えられる。

（山下）

註１　平成８年の発見当初，その形態から堤防状遺構と呼んでいたが，当時，弥生時代の同様な遺構の報告例がなく，その性格については不明な点が多かった。しかし，遺構が弥生時代の河道の中に造られていること，形状がコの字形で突堤状を呈していること，船が係留できるほどの規模をもっていることなどから船着き場跡であるという結論に達した。また，この遺構の分析については奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長の工楽善通氏に現地を見ていただき御指導を仰いだ。

註２　この工法は東アジアでは中国後漢代（１ｃ代）の安豊塘遺跡の貯水池の堤，韓国百済時代（４ｃ中頃）の碧骨堤遺跡における堤，韓国百済時代（６～７ｃ）の扶餘羅城跡の土塁，日本では弥生時代後期（１～３ｃ）の上東遺跡（岡山県倉敷市）の波止場状遺構，古墳時代中期（５ｃ末～６ｃ初）の亀井遺跡（大阪府八尾市）の堤，古墳時代後期（７ｃ前半）の津寺遺跡（岡山県岡山市）の護岸施設，飛鳥時代（７ｃ初）の狭山池（大阪府大阪狭山市）の堤，飛鳥時代（７ｃ後半）の水城跡（福岡県太宰府市・大野城市）の土塁などで確認されている。

【引用・参考文献】

安楽　勉・藤田和裕編　1978『原の辻遺跡（Ⅲ）』長崎県文化財調査報告書第37集　長崎県教育委員会

工楽善通　1995「古代築堤における敷葉工法」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集　奈良国立文化財研究所

小山田宏二編　2001『古代の土木技術』大阪府立狭山池博物館図録３　大阪府立狭山池博物館

後藤恵之輔　1998「壱岐・原の辻遺跡における土木構築物について」『原の辻ニュースレター』第２号　原の辻遺跡調査事務所

柴田英樹　1995「河道の護岸施設」『津寺遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会

下澤公明編　2001『下庄遺跡　上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157　岡山県教育委員会

杉原敦史編　1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集　長崎県教育委員会

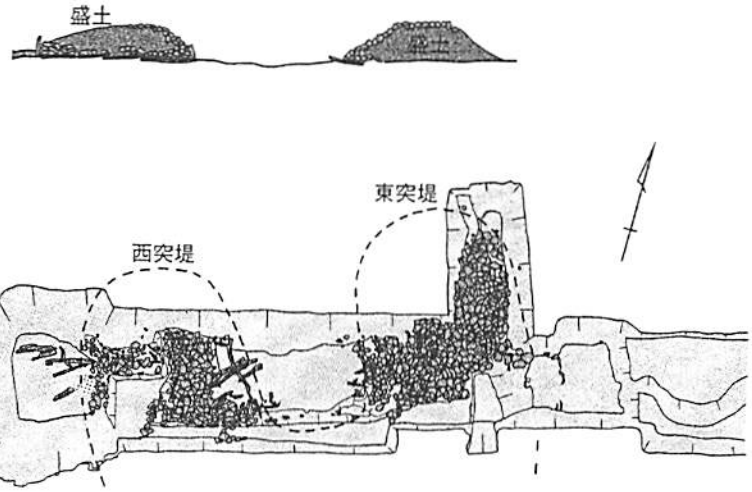
寺川史郎・尾谷雅彦編　1980『亀井・城山』財団法人大阪文化財センター

西信男編　1998『原の辻遺跡・鶴田遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第４集　長崎県教育委員会

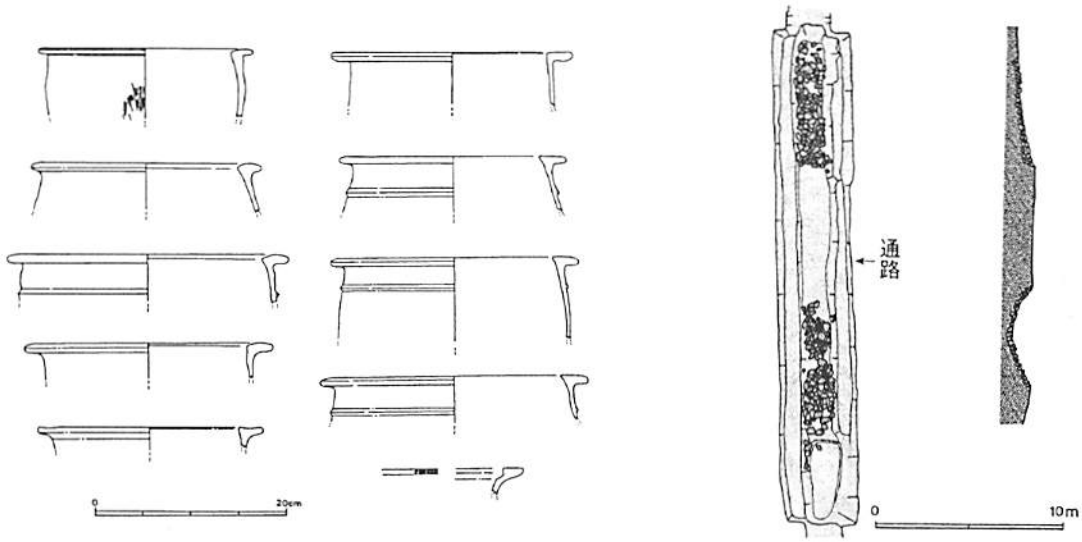
林　重徳　1996「水城土塁の地盤工学的研究」『大宰府史跡』平成７年度発掘調査概報　九州歴史資料館

朴　淳發（山本孝文訳）　2000「百濟泗都城の羅城構造について」『古文化談叢』第45集　九州古文化研究会

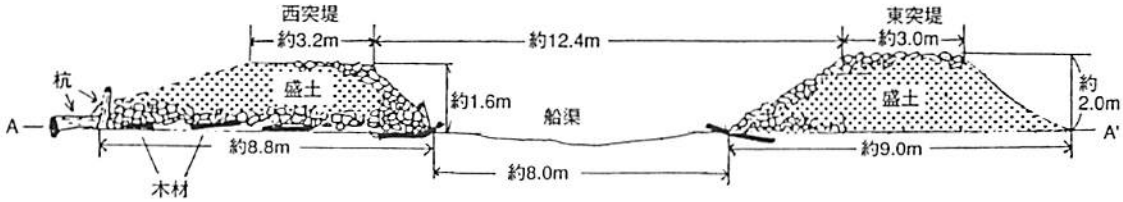
宮崎貴夫　1998「壹岐原の辻遺跡の弥生時代船着場」『環濠集落と農耕社会の形成』九州考古学会・嶺南考古学会



① 船着き場跡実測図（1/400）



② 船着き場跡出土土器（1/8）



③ 突堤断面模式図（1/200）

第25図　船着き場跡実測図

東突堤（奥）と西突堤（手前）（西から）

石組遺構（北から）

東側突堤（東から）

杭と樹皮による補強状況（西突堤西側）

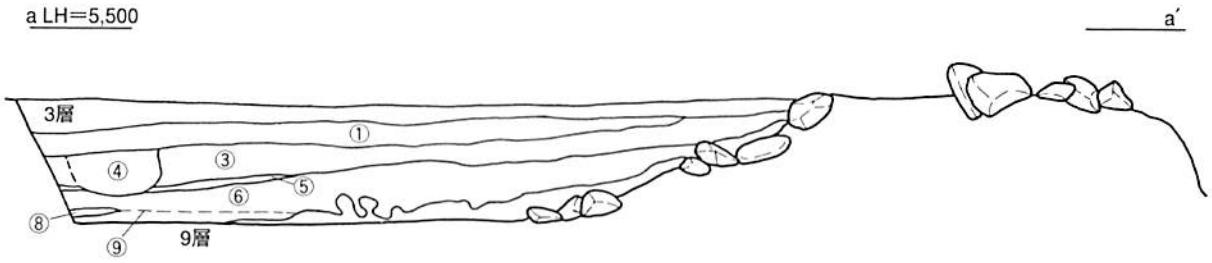
PL. 3　船着き場跡検出状況

3．護岸遺構

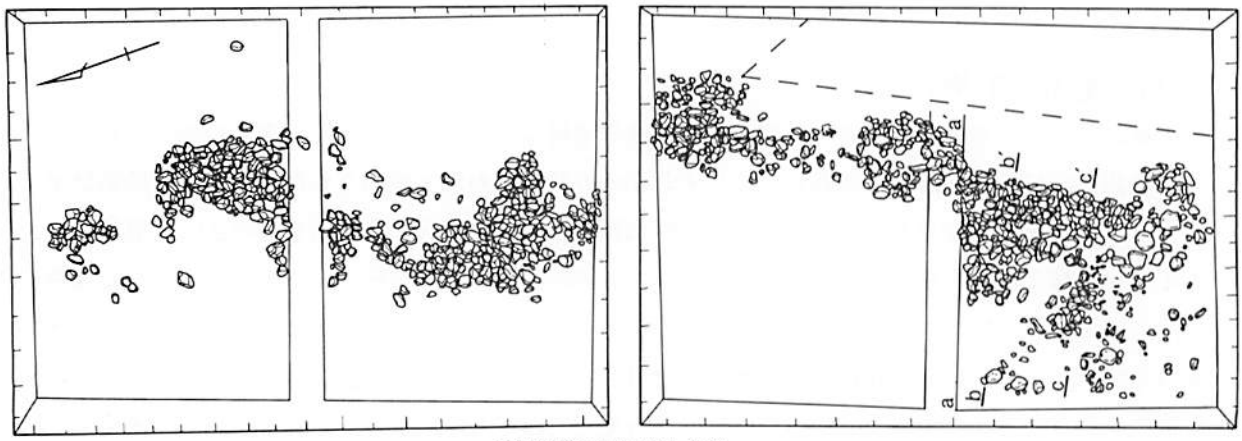
平成14年度県道緊急調査において確認された護岸遺構は，遺跡のある丘陵先端部西側の低地部で，丘陵縁辺を北に流れる河道の東側に沿って南北40mの長さにわたり検出された。護岸の丘陵側は削平を受けており不明瞭な点もあるが，丘陵が西側に傾斜した縁辺から川底へ石を投げ込んで構築された人工的な「捨て石（石積み）護岸」と考えられる。護岸遺構上部に堆積する土層から出土した遺物から，この遺構は弥生時代中期後半（紀元前１世紀頃）のものと思われる。護岸に使用した礫は大きいもので50㎝大で，玄武岩の角ばった自然石を使用している。この場所は，複数の河川が合流していた可能性があることから川の浸食作用を受けやすい地点であったことが推測され，河岸を保護するために護岸工事を行ったことが考えられる。護岸遺構では，平成８年に確認された弥生時代中期前半（紀元前２世紀頃）の船着き場跡で見られた敷粗朶（しきそだ）工法は認められなかったが，船着き場跡とは石の種類や大きさ，積み方など工法において強い類似性を示しており，土木技術的な関連が推測される。次に護岸遺構の西側を流れる河道の土層から護岸遺構を検討する。①層（黒褐色粘質土層）は中世の堆積である。③層（褐灰色粘質土層）はマンガン粒を含み，所々カーボンを混入する。④層（黄褐色土層）はパサパサした土層で植物根の成分が浸透したようにブロック状に堆積する。⑤層（暗オリーブ土層）は緑色のしまりのある３～５㎝ほどの土層で，東に延びて終息する。⑥層（灰色粘質土層）は③層に近似するがやや暗く，カーボンを含む。⑧層（暗黒色炭化物層）は炭化した有機物が著しく集中し，東に延びて終息する。⑨層（灰色混砂層）は所々カーボンや黄橙色砂を混入する。９層は小礫層である。９層からは中期中頃～後半を優勢とする土器片を多数検出しており，護岸遺構が機能していた頃の川底であったと思われる。③・⑥層からは後期を優勢とする完形に近い土器を検出した。後期にはすでに河道の流れも少なくなり，護岸の機能も失われていたことが推測される。なお，「捨て石（石積み）護岸」については後藤恵之輔氏（長崎大学大学院教授）よりご教授頂いた。**（林）**

【参考文献】

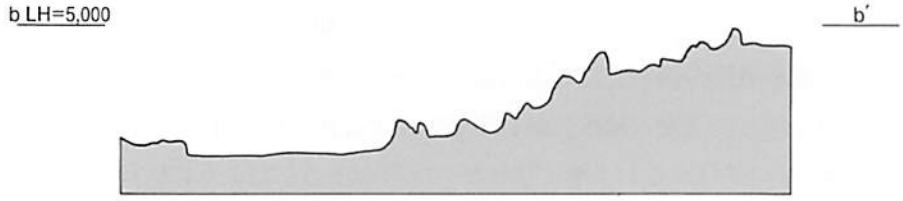
長崎県教育委員会　原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第４集（1998）
長崎県教育委員会　原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第29集（2005）



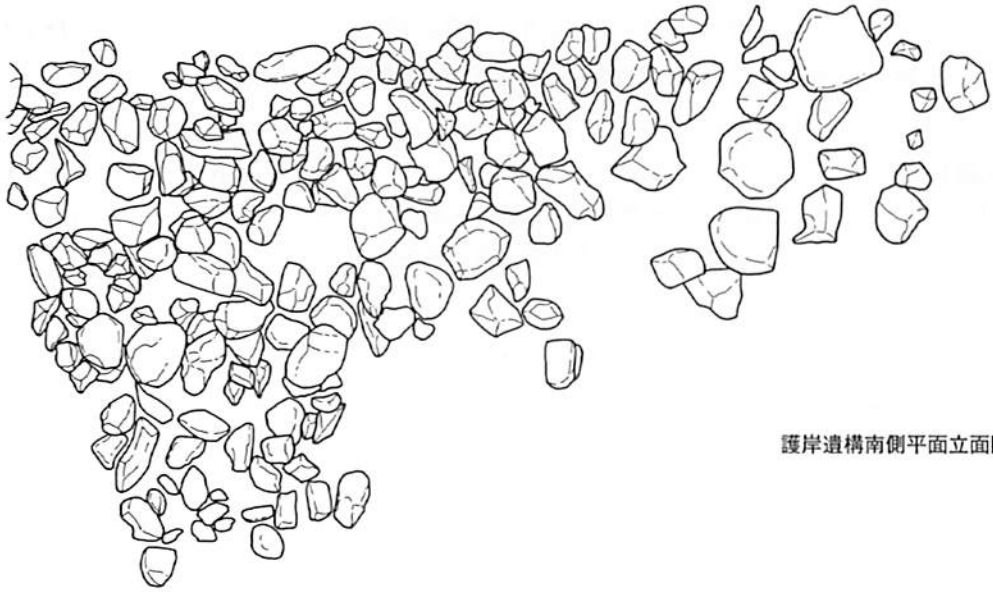
第26図　護岸遺構セクション図



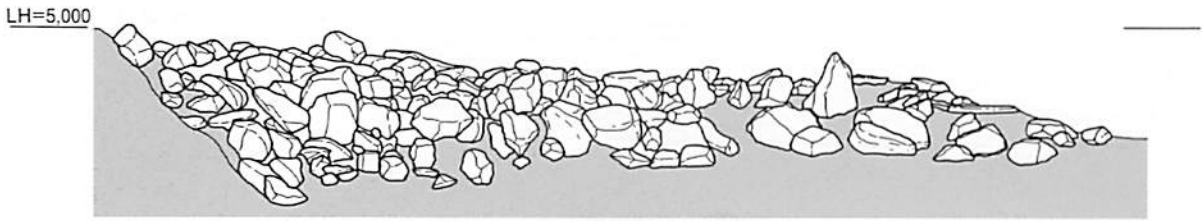
護岸遺構平面図（1/240）



護岸遺構断面図（1/80）



護岸遺構南側平面立面図（1/60）



第27図　護岸遺構実測図

4．祭　儀　場

・研究抄史

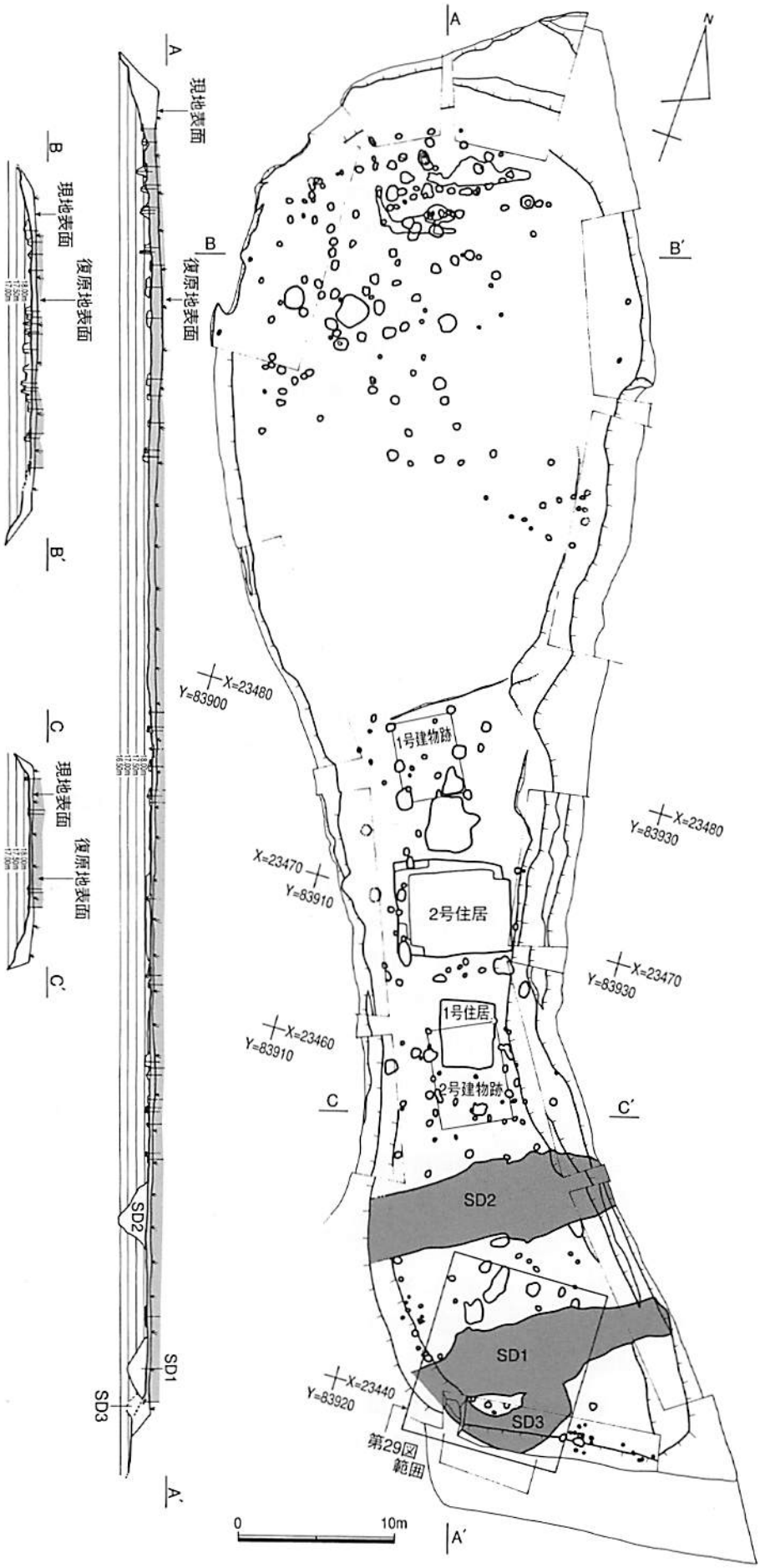
祭儀場は，原の辻遺跡の最高地点周辺の南北約50m，東西約15mの範囲を指す。平成６～７年度の調査で，200基以上のおびただしい数のピット群が検出され，北半部で掘立柱建物26棟，南半部で大型掘立柱建物２棟とともに，これらの遺構を取り囲むような柵列が復元された（川口編1996・宮崎1999）。最高地点周辺は，現地形で周囲よりも約２ｍほど高く盛り上がった地形をしており，これらのことを踏まえて周辺から隔絶された遺跡の中枢域としての機能が想定された。さらに，南半部の大型掘立柱建物が「高床主祭殿」「平屋脇殿」（それぞれ**第28図１号建物・２号建物**に相当）と位置付けられるに及んで，この空間の機能が「祭儀場」として明確化されることになる（宮本1995・1997）。これ以降，集落の中での場の機能や遺構群の構成が定着した。

そうした中，平成15年度に，祭儀場に達する入口の検出を目的として，祭儀場周縁部の調査を実施した。この調査により，祭儀場に関する重要な３つの知見が得られることになる（中尾編2004）。すなわち，周辺より２ｍほど高い祭儀場の現地形が，近世以降の盛り土によって形成されたもので，弥生時代のピットから復元される旧地形は，南から北に向けて緩やかに下る緩斜面に復元できることである（**第28図**）。また，北端部を中心に従来柵列とされてきたピットを再検討したところ，①ピット覆土の特徴にバリエーションがある，②ピットの床面標高にばらつきがある，③弥生中期の土器を出土したピットと古墳前期の土器が出土したピットが混在することが明らかとなり，これらのピット群が同時期に一連の遺構として存在していた可能性は考えにくくなった。祭儀場北端部周辺では，近年壱岐市教育委員会を中心に重点的に調査が行われており，おびただしい数のピット群が検出されている。このことから，従来柵列とされたピット群も，祭儀場北半部を含む原地区周辺の掘立柱建物群の一部を構成するピットの一部である可能性が高くなった。

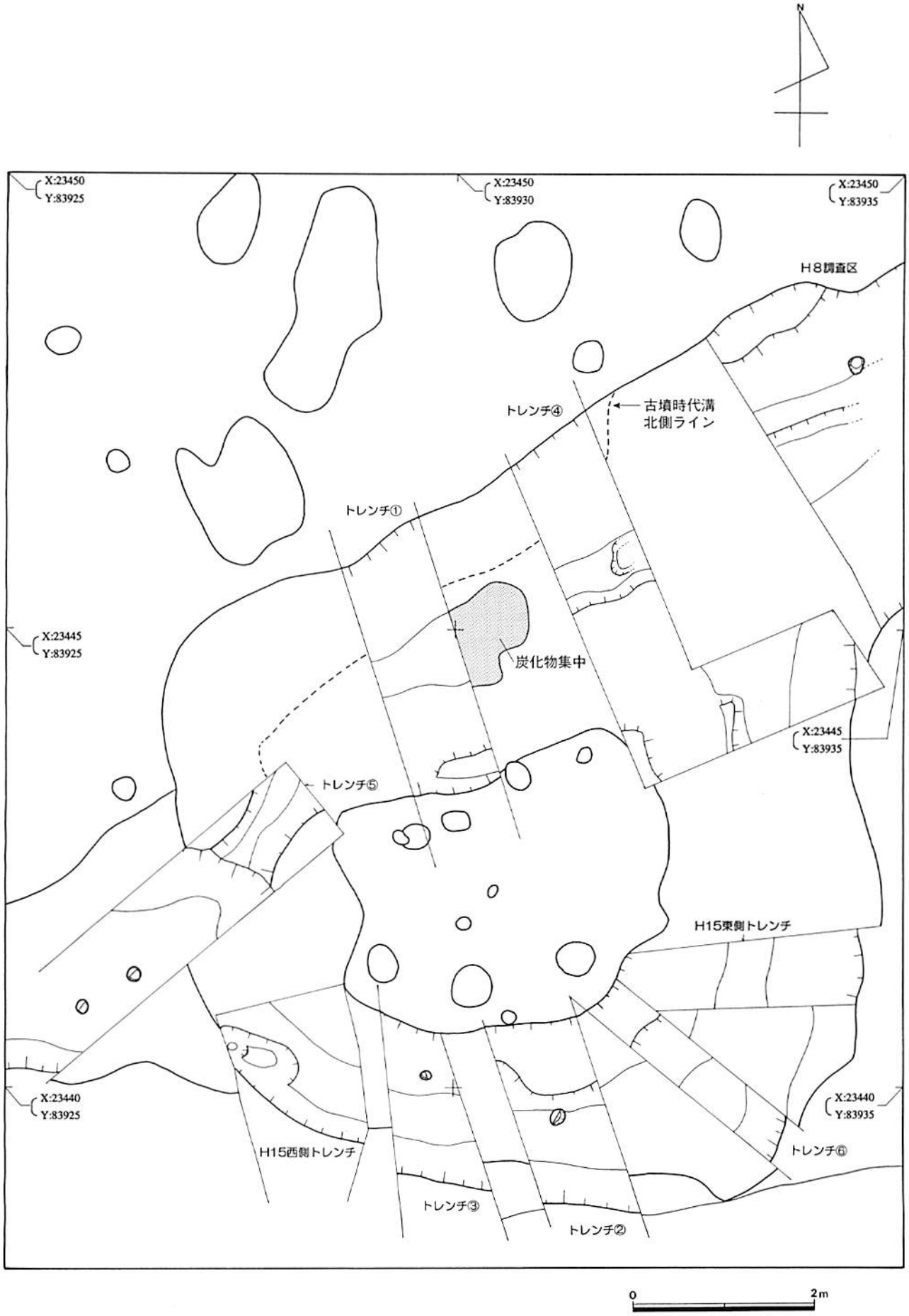
一方，祭儀場南端部は，平成８年度の調査で儀場を東西に横切る２条の環濠が検出されていたが，平成15年度の調査で，新たに南側に伸びる環濠（ＳＤ３・ＳＤ４）を検出することになる。この環濠は，南側環濠（ＳＤ１）の南側に半円形に取り付く形で検出したが，ＳＤ１の北側堀方の不自然なふくらみや，出土土器が弥生時代中期～古墳時代前期のもので構成される点は時期的にＳＤ１と共通することから，両者の環濠が時期によって複雑に切り合いながらも，ある時期に周溝状遺構として機能していた可能性を指摘した。しかし，調査面積が狭かったこともあり，具体的な遺構群の検討は次年度に引き継がれることになる。

平成16年度の調査は，ＳＤ１とＳＤ３・ＳＤ４の切り合いを確認することを目的として，両者を面的に広げてトレンチ調査を行った。その結果，弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構の変遷が明らかとなり，特に弥生終末期の周溝状遺構が確認できたことは，従来の祭儀場の捉えかたに一石を投じることとなった（中尾編2005）。

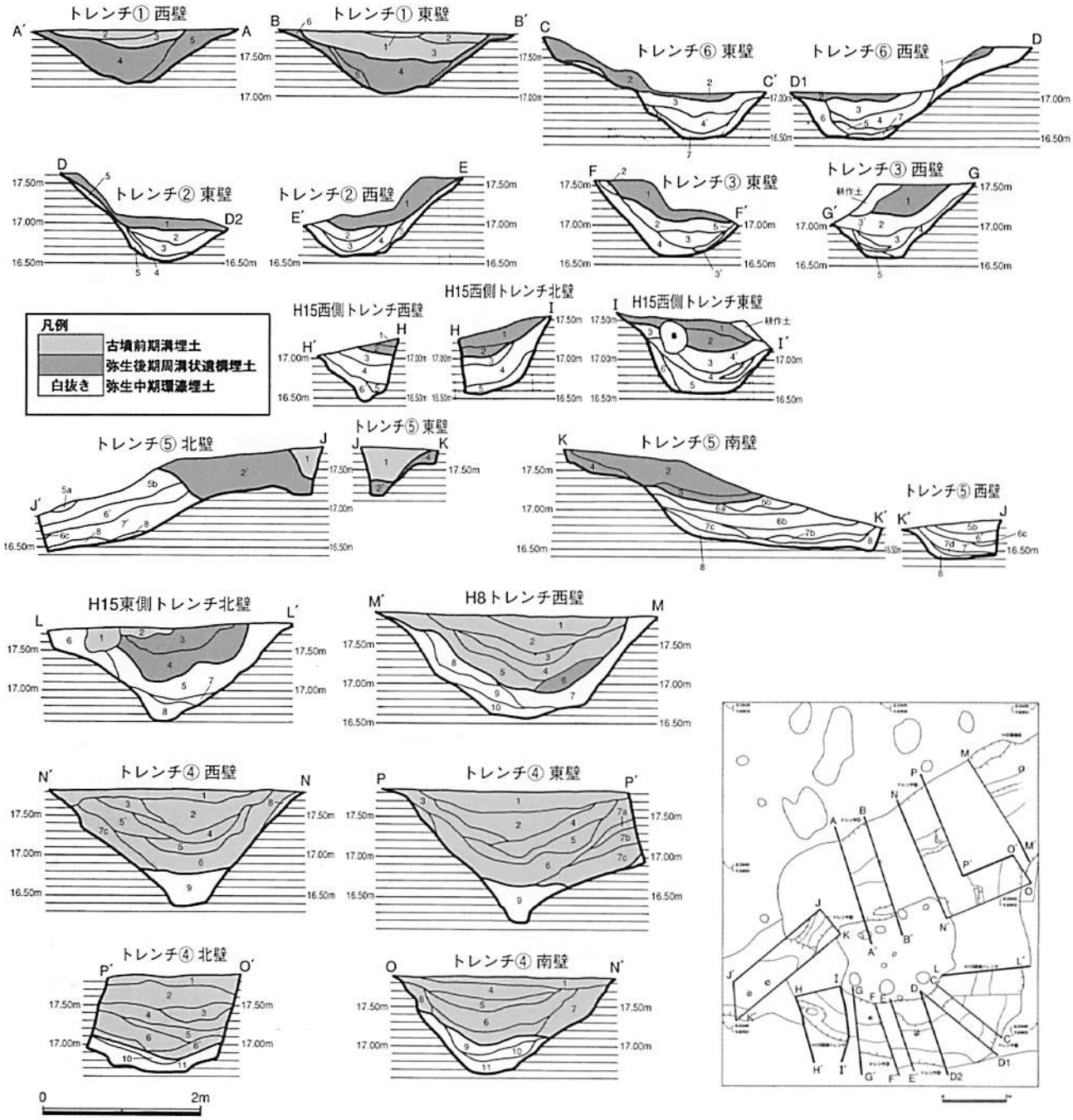
ここでは，祭儀場周辺の旧地形について検討を加えた後，平成16年度の調査成果に依りながら，祭儀場南半部の遺構群を中心に検討を加え，祭儀場における遺構群の変遷について再度検証することにする。



第28図　祭儀場遺構配置図（S＝1/400）



第29図　祭儀場南端部遺構平面図およびトレンチ位置図（S＝1/60）



原地区トレンチ内土層対応表

	トレンチ①	トレンチ②	トレンチ③	トレンチ④東壁・西壁	トレンチ④北壁・南壁	トレンチ⑤	トレンチ⑥	H15東側トレンチ	H15西側トレンチ	H8トレンチ
古墳時代前期	1層			1層	1層			1層		1層
	2層							2層		
	3層			2層	2層	1層				2層
				3層						3層
				4層	3層					4層
				5層						5層
				5'層						
				6層						
				7a層	4層					
					5層					
				7b層	6層					
				7c層	6'層					
					7層					
				8層	8層					
弥生後期	4層	1層	1層			2層	1層	3層	1層	6層
						2'層				
						3層	2層	4層	2層	
						4層				
弥生中期		2層	2層		9層	5a・5b層	3層	5層	3層	7層
			3層			6a・6b層	4層		4層	8層
		3層	3'層		10層	6c層	5層		4'層	
						7a～7c層				
								6層	5層	
	5層	4層	4層				6層	7層	6層	9層
	6層	5層	5層	9層	11層	8層	7層	8層	6'層	10層

第30図　祭儀場南端部トレンチ内土層図（S＝1/80）

・祭儀場周辺の旧地形

祭儀場の現地形が，近世以降の盛り土や削平によって形成された点については先に触れたとおりである。ここでは，弥生時代～古墳時代前期にかけてのピット群の床面標高を元に，弥生時代における祭儀場周辺の旧地形復元を試みる。

祭儀場とされるエリアは平面形しゃもじ形を呈し，北半部を中心にピット群が，空白部分を挟んで南半部を中心にピット群とともに竪穴住居や環濠が展開することが明らかとなっている（**第28図**）。これらの遺構群の検出面に遺構群の断面を投影し，南北方向・東西方向について図化すると，次のことが明らかとなる。

①遺構検出面は，南北ともほぼフラットであるが，遺構の空白部分については標高が若干低くなっている。

②遺構の床面標高は，北側ほど深く，南側の遺構群（特にピット群）は10cmにも満たない浅いものが多い。

①については，遺構検出面に重機によるものとみられる削平の痕跡が残されていたことから，近現代の水田化にともなって，フラットな削平を受けていることを示している。特に，南半部と北半部に挟まれた遺構空白エリアは周囲よりも標高が低く，周囲に比べて相対的に削平の影響を受けたことが考えられる。したがって，遺構空白部分にも本来は遺構が存在した可能性が高く，削平に伴って消失したものと考えられる。②については，ピットの床面標高を中心に検討を加えると，祭儀場北半部の方が南半部に比べて相対的に遺構の残りがよく，削平の影響を受けていないことを示しているであろう。このことから，本来は南半部の標高が高く，南から北へと傾斜する緩斜面であった可能性が高い。

試みに，祭儀場検出ピットが掘削時点で一律に深さ１ｍであったと仮定して旧地形を復元すると，南端部で標高約19.10m，北端部で標高約18.90mとなり，比高差約0.3mで南から北へと傾斜する緩斜面に復元できる。現地表面との関係では，北端部は現地表面標高とほぼ一致し，南端部については現地表面より約60cm標高が高くなる。東西方向の旧地形については，東西部分ともに大きく削平を受けていることから復元は困難であるが，祭儀場の範囲内については。ほぼフラットな地形に復元できそうである。このように，具体的な標高については検討を要するものの，弥生時代の旧地形は，概ね南から北へと傾斜する緩斜面と捉えることができるであろう。また，東西軸についても，祭儀場を中心に東西方向に緩斜面が展開していたものと推測できる（**第28図**）。

・祭儀場南半部の遺構群

ここでは，平成16年度の調査成果を中心に，祭儀場南半部の遺構群について検討を加える。平成16年度の調査箇所については第28図に示した。祭儀場の南端部に相当し，ＳＤ１とこれに連結する半円形の環濠が接続する部分に相当する。遺構群の切り合いを確認するために６カ所のトレンチを設定し，遺物の出土状況や土層の観察を行った。併せて，平成７年度調査トレンチ・平成15年度調査トレンチの土層を再検討し，遺構群の構造や時期的な展開について検討を加えた（**第29図**）。時期別に遺構群の変遷を辿ると，次のようになる。

①弥生時代中期中葉～後葉

平成７年度検出のＳＤ１および平成15年度検出のＳＤ３に相当する。東から伸びてきた環濠が，南側に半円形に張り出す（**第31図**）。張り出し部分の幅は外線で約７ｍである。床面標高は16.50mでほ

ぼ一致している（**第30図**）。南側の張り出し部分を中心に，覆土中に焼土層やカーボン層が確認できる。張り出し部のテラスにはピット群が展開し，環濠の際に沿って展開することから，弥生時代中期の環濠に伴うピットと考えられる。また，環濠床面からは複数の浅いピット群を確認しており，テラス部分のピットと併せて，何らかの仮設的な構築物が存在した可能性がある。出土土器は甕を中心とした構成で，低地部の環濠と共通する。この地点が遺跡の最高地点に相当することや，環濠張り出し部に大型掘立柱建物が建つ吉野ヶ里遺跡等の事例から，この時期の遺構は，遺跡全体や周辺地域の監視を目的とした実用的な用途を意図したものと考えられるであろう。

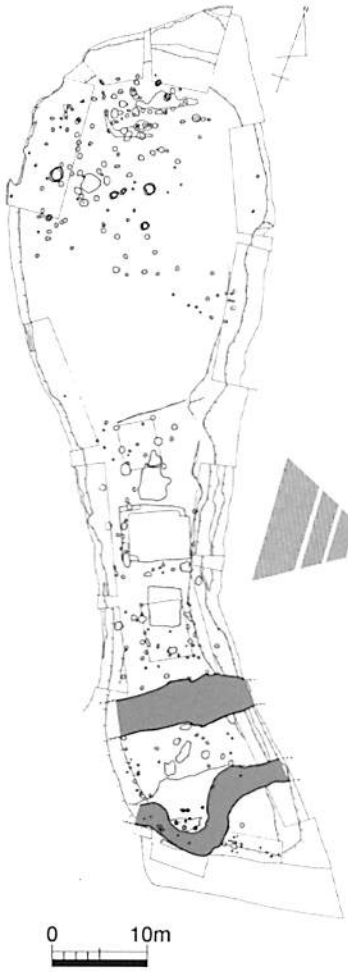
②弥生時代終末

平成７年度検出ＳＤ１および平成15年度検出ＳＤ３に相当する。弥生時代後期に埋没した環濠は，弥生時代終末に浅く再掘削される。同時に，北半部を「コ」の字形に掘削することで，周溝状遺構が成立する（**第31図**）。周溝状遺構の平面形は隅丸長方形で，外線で南北長8.5m，東西長7.2m，テラス部分が南北長2.7m，東西長3.8mに復元できる（**第31図**）。東西に位置する周溝が幅1.5～1.7mであるのに対して，南北に位置する環濠が幅2.5～3.2mとなり，南北に位置する周溝が幅広い点が特徴である。周溝は断面逆台形で，床面標高は17.00mでほぼ一致している。覆土はカーボンが散在する褐色系粘質土である。一方，Ｈ７トレンチで検出した同時期の包含層は，カーボンが集中する黒褐色土で，包含層の床面標高も16.80mと周溝状遺構床面よりも低い。Ｈ７トレンチの東側では，平成８年度に弥生時代終末期の環濠を東西方向で検出しており，Ｈ７トレンチの包含層もこれと関連するものであろう。その場合，周溝状遺構との関係が問題となるが，両者の接点となるトレンチ④は，後述する古墳時代前期の溝によって両者とも切られているため，不明といわざるを得ない。ここでは一応東側から伸びる環濠が，周溝状遺構の手前で止まる，と考えておきたい。

周溝内からは，土器を中心に多くの遺物が出土している。土器の器種構成は，甕に比べて壷の占める割合が高く，中には口縁部を打ち欠いて胴部に穿孔した大型の壷も認められる。このほか，鉄剣・鉄鎌・袋状鉄斧といった鉄製品の出土が注目される。これらの鉄製品のうち，鉄鎌は下面観が大きく湾曲し，基部の折り返しも身と接して完全に閉じている。また，鉄剣も厚みが一定せず，鎬や刃部の作りもなまくらである点など，実用品とは考えにくい特徴を有するものである。これらの事実は，周溝状遺構周辺において何らかの祭祀行為が行われた可能性をうかがわせるものである。

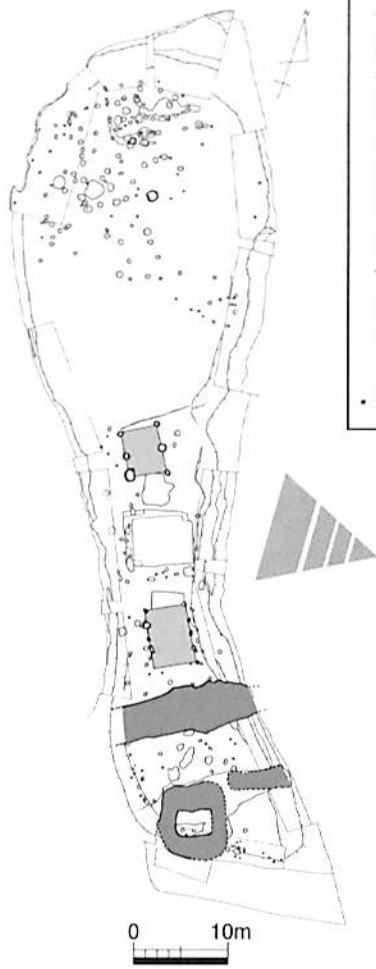
③古墳時代前期

平成７年度検出ＳＤ１にほぼ相当する。東側から伸びて平成16年度調査区中央付近で収束する溝状遺構である（**第31図**）。トレンチ④付近が最も深く，西側・南側にむけて急激に立ち上がる（**第30図**）。溝の平面形は不規則で，南側に若干張り出して蛇行しながら東側へと展開する。出土土器は，甕が完全に欠落し，鉢・低脚の高坏・小型丸底壷・ミニチュア土器などの祭祀系土器が主体となる点が大きな特徴である。また，ガラス小玉や黒曜石砕片などがまとまって出土している。これらの点から，弥生時代終末に周溝状遺構として具現化された祭祀空間としての認識が，古墳時代前期まで引き継がれていたことを示している。ただし，出土遺物を比較すると，周溝状遺構出土遺物とは構成がやや異なっており，祭祀の内容や対象は異なっていた可能性も考えられる。



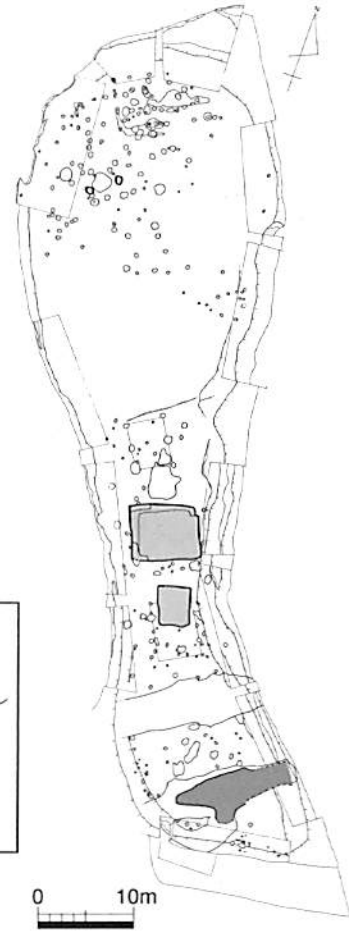
弥生時代中期

・祭儀場南端部に２条の環濠が掘削される。
・北側環濠は東西方向に直線的に伸びるが、南側環濠は「コ」の字形に南側に張り出し、張り出し内部にピットが散在する。環濠床面にもピットが散在する。
・北端部にはピットが散在する。



弥生時代後期

・北側環濠は弥生時代中期に引き続き存在する。
・「コ」の字形に張り出していた南側環濠は、張り出し部を中心に浅く掘り直される。同時に張り出し部に接続するように北側を「コ」の字形の溝がめぐり、周溝状遺構となる。
・北側環濠以北には、掘立柱建物が展開する。特に、１号建物・２号建物は、尾根に沿ってほぼ直線上に並ぶ。
・北端部にはピットが散在する。



古墳時代前期

・北側環濠が埋没する。
・周溝状遺構が埋没し、新たに溝が掘削される。平面形は不規則であるが、祭儀場以東に展開し西側へは伸びない。
・埋没した北側環濠に隣接して、北側に竪穴住居が２棟並ぶ。
・北端部にはピットが散在する。

第31図　祭儀場変遷想定図（１/800）

・祭儀場の変遷（第31図）

①弥生時代中期

祭儀場南端部に２条の環濠が掘削される時期である。このうち，南側の環濠は半円形に南側に張り出し，張り出し部のテラスや環濠内に小規模なピットが認められることから，仮設的な何らかの構築物があった可能性がある。出土遺物は，弥生時代中期中葉（須玖Ⅰ式古段階）を主体に，弥生時代中期後葉まで認められるが，器種構成は低地部環濠と遜色なく，祭祀的な要素は認められない。立地や他の遺跡での例を考慮すれば，物見場的な機能を果たしていたものと考えられる。このほか，祭儀場北半部にはピットが散在するが，南側遺構群との関連性は不明瞭である。

②弥生時代終末

弥生時代後期には，南半部の２条の環濠のうち北側環濠については残存するものの，南側環濠はいったん埋没する。その後，弥生時代終末にいたって，北側環濠とともに再度掘削され，北側にも溝を「コ」の字形に巡らして周溝状遺構が成立する。さらに，この時期，北側環濠の北側に２棟の掘立柱建物が建つ。これらの掘立柱建物群は，周溝状遺構と軸をそろえてほぼ直線上にならび，しかもほぼ等間隔に並ぶ点を考慮すれば，周溝状遺構と一連の遺構と考えることができるであろう。したがって，弥生時代終末における確実な遺構群としては，北側環濠を挟んで北側に掘立柱建物２棟，南側に周溝状遺構が，それぞれ軸をそろえて等間隔に配列する構成となる。性格としては，土器の器種構成で壷が多い点や，実用品か疑問の残る鉄製品などの出土から，これらを用いた祭祀行為が行われたことが推測される。なお，北半部にもピット群が散在するものの，南半部遺構群との関連は不明瞭である。

③古墳時代前期

北側環濠とともに周溝状遺構も埋没するが，周溝状遺構は東西に伸びる溝状遺構として再掘削される。この溝は，平成16年度調査区中央付近で収束し，部分的に南側に張り出しながら，東側へと展開する。また，埋没した北側環濠の北部に，2棟の竪穴住居が南北に立ち並ぶが，特に北側の竪穴住居は，長辺7.3m，短辺６mでベッド状遺構を持つ大型住居である。溝状遺構内からは，鉢・低脚の高坏・小型丸底壷・ミニチュア土器を主体とする土器や，ガラス小玉，黒曜石砕片などが出土しており，祭祀色の強い構成となる。竪穴住居群と溝状遺構の配置関係が，弥生時代終末の遺構配置に類似している点も考慮すると，古墳時代前期に至っても，このエリアが祭祀空間として認識されていた可能性が高い。なお，北半部ではピット群が散在するものの，南半部遺構群との関連性は不明瞭である。

このように，祭儀場周辺は，弥生時代中期段階における実用空間としての利用が，弥生時代終末以降には祭祀空間へと変質し，このような空間利用が集落の終焉まで継続したものと推測される。**(中尾)**

【参考文献】

川口洋平編1996「Ⅰ原の辻遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅳ』長崎県教育委員会
中尾篤志編2004『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第28集　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
中尾篤志編2005『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
宮崎貴夫編1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
宮本長二郎1995「弥生時代の祭儀建物と外来文化」『平成７年秋期特別展　邪馬台国への海の道－壱岐・対馬の弥生文化－』大阪府立弥生文化博物館
宮本長二郎1997「弥生の大型建物」『歴史九州』第７巻５号

5．住　居　跡

はじめに

原の辻遺跡からは古代の遺構・遺物等が低地部や丘陵部から多く検出され，平成６年度に範囲確認調査が丘陵部で行われ，これ以降，発掘調査が積極的に実施されていく。現在でも継続中である。今までの調査で確認された竪穴住居跡が134棟あり，弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて居住地が環濠内に長期間にかけて建てられていたことが発掘調査で解り，甕棺や石棺等も環濠内で確認されている。竪穴住居跡の床面遺構には炉跡やベッド状遺構，周溝，貯蔵穴，主柱等が報告されているが，原の辻遺跡における住居跡の時期的な特徴や地域性などの報告書は若干みられるものの本格的なものはない。今回は丘陵部で確認された単独にある住居跡や重複した住居跡等を具体的な時期の変遷を行うことにした。

(1)　竪穴住居跡の形態

原の辻遺跡の竪穴住居跡は弥生時代中期前葉から古墳時代前期前葉に集中して建てられており，他にも主柱だけ残る壁立式住居や高床建築・大型平屋の掘立柱建物と考えられる柱穴群が竪穴住居跡と切り合う格好で検出されている。竪穴住居跡の平面形の特徴は，弥生時代中期に円形・方形の小型が多く確認され，床面の状況は主柱２本が主体で周溝やベッド状遺構は基本的に弥生中期には見られず，この周溝，ベッド状遺構が確認されるのは弥生時代後期以降である。弥生後期に入ると弥生中期の住居がそのまま継続されているものの円形の竪穴住居跡は消滅し，これに代わるように長方形の大型竪穴住居跡が前半頃に出現している。床面の状況は主柱２本で，ベッド状遺構はＣ字型やＬ字型，短辺側等が設置され，炉跡や周溝が見られ，この構築が古墳時代初頭まで続く。ただ弥生中期でみられる住居跡の構造が古墳前期初頭でも確認されることから両者の住居が共存しながらあったものと推察される。現在でも発掘調査は進行中であるが，検出される住居跡の遺構面は水田化によって削平を受けていることから表面から床面まで約５㎝～20㎝のものが多く，約50㎝の住居跡が祭儀場跡から北側一段低い田畑から大型長方形の竪穴住居跡が確認されていることから当時は深い住居も存在していたと推察される。

(2)　地区における竪穴住居跡の形態（第32図～35図）

楕円形状の丘陵部からは竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多く確認されていることから北側の高元地区，原地区の祭儀場跡とその周囲，祭儀場跡から一段低い東南側を地区分けして住居跡の形態や特徴を述べることにした。

・高元地区（丘陵北側）

平成６年度に高元地区で発掘調査が実施された結果，竪穴住居跡13棟，土坑約30基，貯蔵穴２基，大小のピット100などが確認され，時期は弥生時代前葉末から中期中葉，弥生時代後期中葉から古墳前期初頭の期間に建物が築造されていたことが分かったが，弥生後期前葉の段階に建物が存在しない空間期間がみられ，この状況が平成14・15年度の発掘調査でも弥生後期前葉の建物遺構が検出されていないことから居住地が移動・移転したものと思われる。完全な形で検出された竪穴住居跡４基について述べることしたい。ＳＣ１～４は丘陵部の北端側にある住居跡で，床面までの深さは非常に浅く，

約５㎝しかなくて表面が削平を受け，他の住居跡も同じ情景である。この場所からは北側の低地部にある船着き場や多重環濠等を望むことができる。

ＳＣ１は住居同士が切り合う形で検出され，隅丸方形で長辺5.2m，短辺4.2mを測り，床面には２本主柱が想定され，出土遺物は弥生中期の土器と共に肩甲骨６点の内に卜骨２点が並べられた状態で，床面より若干浮いた状態で確認され，卜骨には使用痕がみられる。時期は弥生中期前葉と推定される。

ＳＣ２は直径６ｍの円形住居跡で，深さは約10mがある。床面には６本主柱で中心部に炉跡が検出され，壁面は急斜面状に掘り込みをしている。住居跡内からは消失した建築部材や炭化米，紡錘車，磨製石斧，サメ歯等が出土していることから弥生中期中葉の時期が推定される。

ＳＣ３は方形の住居跡で長辺4.2m，短辺3.4mを測る。壁面の状態は急斜面に掘られている。床面の遺構は４本主柱を想定され，南西側に壁溝を検出したものの炉跡は確認されていない。住居跡内からは弥生後期の甕片や砂岩製台石，凹石等が出土していることから弥生後期中葉の時期と推定される。

ＳＣ４は隅丸方形で長辺４ｍ，短辺3.4mを測り，床面にはコ字形の壁溝が巡る。時期は弥生後期後葉と推定され，住居跡内から弥生後期後葉の高杯等が出土している。

・原地区（丘陵中央部）

原の辻遺跡で最も標高の高い場所に祭儀場跡があり，その周囲には竪穴住居跡，掘立柱建物跡等の建物や土坑，ピット等が多く検出されており，時期は弥生時代中期から古墳時代前期初頭の間の連続的に居住地となっている。平成６～９・11～15年度にかけて発掘調査が実施されて竪穴住居跡86棟が確認され，そのうち38棟が祭儀場跡を囲む格好であり，弥生後期前半から古墳前期初頭の時期に大型の方形・長方形竪穴住居跡５棟が場所を代えながら連続的に居住していることから重要な位置を示しているものと考えられる。この丘陵中央部で検出された代表される竪穴住居跡を述べる。

ＳＣ５は祭儀場跡から東側の一段低い部分に隅丸方形の住居跡があり，長辺3.3m，短辺3.4mで深さ約20㎝を測る。住居跡の床面はやや荒い凹凸が見られ，壁面は急斜面をしている。床面遺構は中央に炉跡や南西側に２本主柱を検出される。時期は弥生中期後葉を推定される。

ＳＣ６は祭儀場跡から北東側の一段低い所に隅丸長方形の住居跡があり，長辺5.2m，短辺4.3m，深さ約30㎝で方形に近い。住居跡の床面は平坦で，壁面は垂直にしながら床面部分には湾曲している。床面の中央に弥生中期後半の完形な鉢形土器を使用した炉跡が検出しており，この南側に同時期の甕形土器２点と石鎌や石製紡錘車等が出土していることから弥生中期後葉の時期と推定される。

ＳＣ７は方形の住居跡で土坑に切られた状況で検出され，長辺4.5m，短辺4.5m，深さ約21㎝の小型住居跡でＳＣ６の類似している。床面にはベッド状遺構や２本主柱があるものの周溝，炉跡は検出されず，弥生中期の土器や青銅製？や鉄製？，小型鉄鎌等が出土していることから弥生後期初頭の時期と推定され，この頃からベッド状遺構が現れてくるが，ベッド状遺構の持たない住居跡も存在している。

ＳＣ８は大型の竪穴住居跡で祭儀場跡の一段低い北側で検出されており，長辺8.6m，短辺5.4m，深さ約52㎝の長方形をしている。床面は丁寧な平坦に調整され，垂直よりも若干外側に開くような壁面をしている。床面遺構はＣ字型ベッド状遺構や２本主柱と中央には比較的浅い方形の炉跡があり，このなかに炭化物や焼土魂が確認されていることから自然化学分析（放射性炭素年代測定）を炭化物で実施した結果，西暦30年前後と示唆している。また，焼土からはイネ・タケ亜科（メダケ節型・ク

マザサ属型・ミヤコザサ節型等）が検出されていることから燃料等として利用されていた可能性が考えられる。住居跡内から少量の弥生中期から古墳初頭の土器片や鉄製の鍬鋤先等が出土しており，弥生後期前葉の時期と推定される。

ＳＣ９も大型長方形の住居跡で長辺6.9m，短辺5.2mを測り，深さ約18cmである。住居跡の状況は壁面が急斜面の上側が外方に広がり，床面は荒掘りの上から黒褐色粘質土を使って塗り固められていることが確認されている。床面遺構は長方形のベッド状遺構や２本主柱があり，出土遺物は袋状鉄斧や弥生後期から古墳初頭があり，弥生後期前葉の時期と推定される。

ＳＣ10は小型の住居跡で長辺3.3m，短辺3.2mで深さ約７cmを測り，東南側に壁溝を巡らす。中央には炭状や焼土痕が見られ，時期は弥生後期と推定される。

ＳＣ11は隅丸住居跡で長辺5.9m，短辺4.2mの長方形をしており，壁面は垂直に掘れている。床面にベッド状遺構や２本主柱，中央に円形炉跡があり，床面の整地はやや荒掘りである。弥生後期の下大隈古段階の高杯土器が床面の近い部分から出土していることから弥生後期後葉の時期と推定される。

ＳＣ12は祭儀場跡から東側隣にある大型の竪穴住居跡で長辺6.5m，短辺6.2mの方形をしており，深さ約26cmあり，比較的浅い。住居跡の状態は垂直に掘られた壁面で，それに沿うように周溝がほぼ一周するように巡らす。床前面に黒褐色粘質土が見られ，丁寧な塗付けされていてＳＣ９も同じような光景がみられる。この下側は凹凸状の地山である。床面には西北側にベッド状遺構や２本主柱，中央に円形炉跡等が検出され，床面の近い部分に弥生後期中葉の甕型土器が出土していることから弥生後期後葉と推定される。

ＳＣ13～16は祭儀場跡から北側離れた場所に重複した竪穴住居跡があり，現在４基が確認されて方形で垂直状に掘られた壁面に周溝が巡らす。床面はやや荒く掘られ，赤褐色の焼土魂が四箇所の浅い鉢状で確認されている。時期は弥生後期末から古墳前期初頭の期間に築造されている。このように重複した住居を多く確認されている。

ＳＣ17は前方後円墳状の祭儀場跡にある隅丸住居跡で，長辺2.3m，短辺3.4mの長方形であるが，深さはあまり無くて10cm程である。床面には南側と北側片方にベッド状遺構が設けられ，壁溝や２本主柱，中央に円形炉跡が確認されている。古墳前期初頭の時期と推定される。

ＳＣ18は祭儀場跡にある大型の方形住居跡があり，この中に小型住居跡が確認されている。長辺7.3m，短辺6.0mで深さ約40cmを測る。床面はベッド状遺構や２本主柱，炉跡２箇所を検出され，時期は古墳前期初頭を推定されており，古墳前期の布留式土器に伴って鉄鎌，鉄鏃等が出土している。

・原地区（丘陵部東南側）

祭儀場跡の周囲で確認された竪穴住居跡が丘陵部の東南側でも斜面に沿う形で居住域が拡がり，この場所からは弥生時代中期から古墳時代前期にかけて竪穴住居跡が建てられており，東西方向の濠２条，子児甕棺墓等の遺構が確認され，住居跡が重複した状況がみられることから東側傾斜面が長期間にわたって居住域として利用されていたことが明らかになった。住居跡の形態は方形・長方形プランが多くて円形プランはきわめて少なく，弥生後期前半から古墳初頭の住居跡が多く確認されている。ここでも丘陵部東南側で代表される竪穴住居跡のことを述べたい。

ＳＣ19は小型の住居跡で，長辺2.7m，短辺2.5mの方形で深さ約15cmを測る。床面には大部分に炭化物で覆われていて主柱は不明であるが，住居跡の状況から２本柱と推測される。壁面は急斜面をし

ており，ベッド状遺構を確認される。時期は弥生後期末で古墳初頭の布留式土器が出土している。

ＳＣ20～22は重複した住居跡で，ＳＣ20は小型住居跡で長辺3.2m，短辺3.1mの方形であるが，西側に伸びる可能性があることから長方形と考えられる。

ＳＣ21は長辺4.5m以上，短辺4.5mの長方形住居跡で，床面にはＬ字形のベッド状遺構が見られる。

ＳＣ22は長辺7.3m，短辺3.7mの長方形の住居跡で，床面にはベッド状遺構が確認されている。弥生中期末から古墳初頭の土器等が出土していることから弥生後期末の時期に建てられたものと推定される。

ＳＣ23は小型の住居跡で長辺３m，短辺2.8mの隅丸方形をしている。住居跡内には古墳初頭の土器に伴って三韓系瓦質土器等が出土していることから古墳初頭の時期に建てられたものと推定される。

ＳＣ24は大型の住居跡で，長辺8.5m，短辺６m，深さ約50cmを測る。床面にはベッド状遺構や２本主柱，南西側に周溝が巡らす。

ＳＣ25は重複している長台形の住居跡で，長辺6.7m，短辺3.3m～４m，深さ約40cmである。大小のベッド状遺構を確認される。

ＳＣ26は長方形の隅丸住居跡で，長辺5.4m，短辺4.3mを測る。床面にはＬ字形のベッド状遺構を確認されている。ＳＣ23～26の時期は古墳初頭に建てられていると推定される。

(3) 原の辻遺跡における住居跡の変遷

【弥生前期末～中期初頭段階】

原の辻遺跡は弥生前期後葉段階には集落が形成され始められ，遺跡に拡がることが規模される。前期末から中期初頭には丘陵部北側の高元地区，丘陵部北西側の低地の不條地区，幡鉾川より北側の低地の安国寺前Ａ地区の三箇所に居住域が推定されるものの低地の不條地区や安国寺前Ａ地区では竪穴住居跡の遺構が検出されず，旧河道・溝・土坑等が確認されるだけである。この時期の竪穴住居跡はきわめて少なく，それに対して原地区の丘陵部では，中小形のピット群が多く検出されており，このピット群を検討した結果，大小型の円形・隅円方形・隅円長方形等をしている壁立式住居跡の遺構を確認されたことで，丘陵部や低地部でも壁立式住居跡と思われるピット（柱穴）や掘立柱建物跡が共存したと推測される。

【弥生中期中葉～後葉】

弥生中期中葉の時期では，小型円形・小型方形の竪穴住居跡が多く検出され，住居跡の配置は散らばる格好で丘陵部の全面にあり，それに伴う形で壁立式住居跡，高床建物や高床倉庫の掘立柱建物跡が確認されている。もっとも竪穴住居跡が検出されたのは祭儀場跡の周辺と丘陵部より北端側部分でみられる。弥生中期中葉になると竪穴住居跡・壁立式住居跡や掘立柱建物跡等が混在する格好で居住域が多くなってくる。竪穴住居跡の形態も小型のものから中型へ以降していることが確認され，壁立式住居跡も同じ光景が見られる。住居内部の状況は中央に炉跡があり，その左右に２本主柱があるだけでベッド状遺構，周溝，貯蔵穴等の遺構は弥生中期の時期では確認されていない。この時期の住居は重複した遺構が多くことから完全な住居跡の遺構は少ない。住居の形態は弥生中期中葉からほぼ同じ状況が続くものと考えられ，個数も弥生中期中葉に比べて増加している。

【弥生後期初頭～後期後葉】

この時期になると祭儀場跡の周辺で大型の竪穴住居跡が検出されるようになる。大型住居跡の状態はベッド状遺構，主柱２本の柱穴，中央に炉跡があり，この大型住居跡の遺構があるのは最も高い祭儀場跡の周囲と丘陵部の東南側で検出されるだけで他の調査区からは確認されていない。このことから重要な施設と考えられることから首長クラスの居住域の建物等があったものと推測される。居住域が祭儀場跡の周辺に集まり，北端側では住居跡が縮小していくが，遺構等で確認されている。弥生後期後葉には祭儀場跡から内濠内部の南側まで居住域が拡がることが遺構で分かる。住居跡の形態は周溝の遺構がみられるものの大きな変化は確認されていない。ただ弥生中期の住居跡も存在することから両者が共存しながら建てられていたことが古墳初頭まで続いていくものである。

【弥生後期末～古墳初頭】

祭儀場跡と南東側斜面状で大型の住居跡がみられ，形態も弥生後期とほぼ同じ状況である。ただ内濠内部の北端側で住居跡が弥生後期中葉から現れ始めてきたことが確認されるものの規模は小さく，これより拡がることは無いものと考えられ，全体の遺跡からもこれより先は竪穴住居跡の遺構は確認されていないことから居住域の終焉を迎えたものと推察される。

(4) 原の辻遺跡における住居跡の広がり

原の辻遺跡における住居跡の検出地点は丘陵部において最も多く，特に祭儀場跡周辺とその東南側にかけては住居跡が重複した格好で確認され，北端側付近の高元地区でも重複した住居跡群が確認されるものの調査が祭儀場跡と北端側のみで，他の調査が行われていない地域でも住居跡の遺構が丘陵部の前面に広がるものと考えられる。低地部北側の幡鉾川を挟んだ格好で不條地区低地，安国寺前Ａ地区に居住域が推定されているが，この地区では竪穴住居跡が検出されていないことから高床建物が主流となっていたものと推測される。また丘陵部で柱穴が密集する原地区で壁立式住居跡が検出されているので低地部にも存在した可能性が考えられる。低地部での居住域の時期は，安国寺前Ａ地区が弥生前期末から中期末，不條地区は弥生前期前葉から後期初頭，川原畑地区は弥生中期後葉から後期初頭まで居住がみられるものの弥生後期前葉になると居住域としての機能性は無くなり、それに変わるように濠が新設されている。丘陵部で竪穴住居跡が出現するのは弥生前期末からで，それほど数は少なくて高元地区の北端側と原地区の祭儀場跡の南側で確認され，弥生中期でも同じ状態が続くものの原地区の竪穴住居跡はあまり増えずに丘陵北端で多くなることから高元地区・不條地区・安国寺前Ａ地区を中心とする集落地域であったと推測される。原地区でも竪穴住居跡が検出されることから居住域が点在しており，この地区まで集落が拡がりを見せている。

弥生後期前半の竪穴住居跡は原地区の祭儀場跡周辺で確認されるだけで高元地区は住居跡が検出されないことから北側にあった居住域が丘陵の中心部に移住したものと推測されるが，住居跡の数は小ない。他の地区では竪穴住居が縮小するものの弥生後期後葉以降になると，竪穴住居が増加すると共に，調査地点全域に拡大する。この時期の竪穴住居跡はほとんどが切り合った格好で検出される場合が多く，特に祭儀場から低い東側で濃密している。この傾向は古墳前期初頭にも継続し，祭儀場の周辺に加えて丘陵の北端部付近まで竪穴住居跡が分布して拡大する時期である。

小　　結

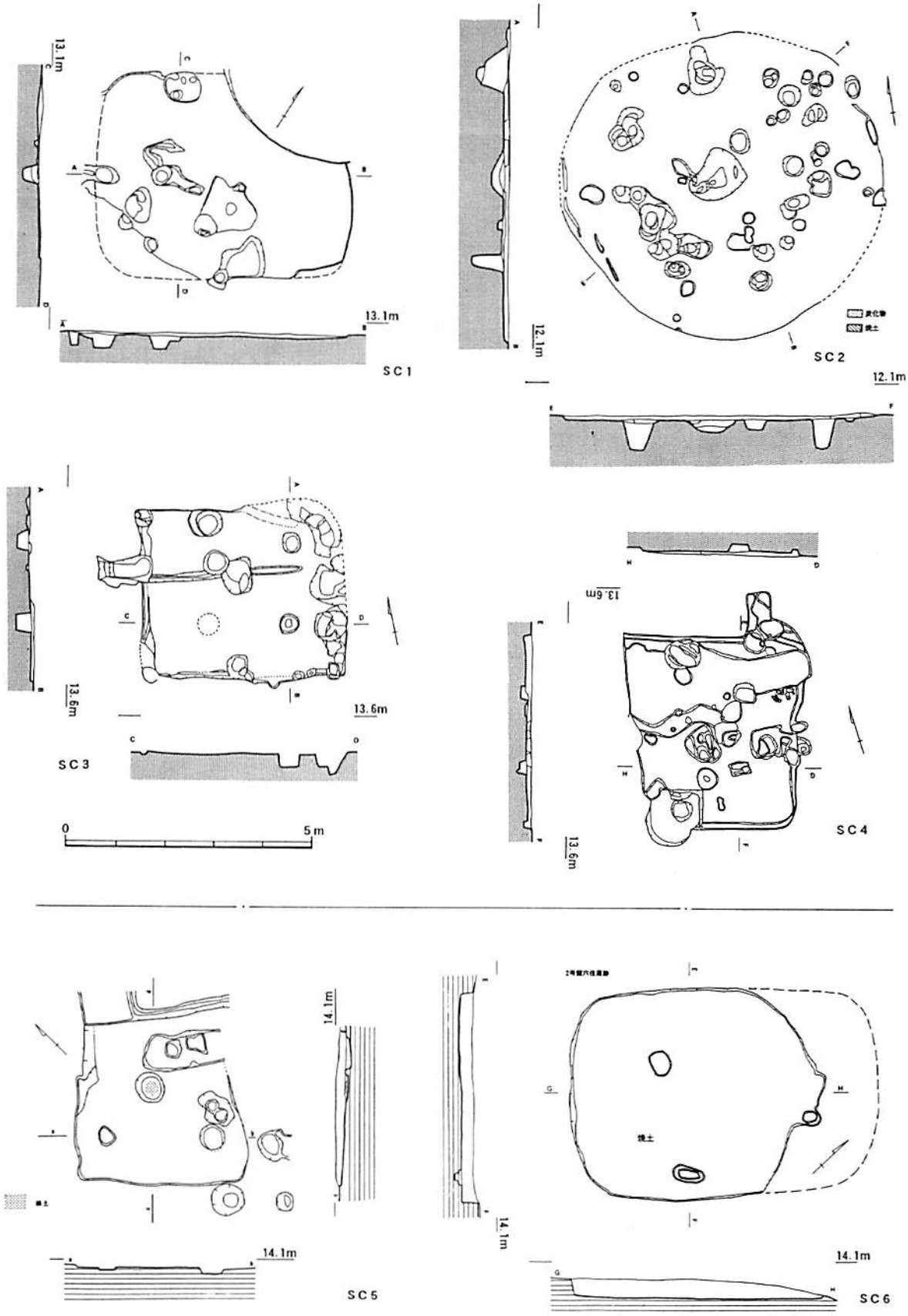
原の辻遺跡において竪穴住居跡の特徴を述べると，竪穴住居跡の平面形は，弥生中期中頃は円形・方形・隅円方形の小型な住居跡が多く，弥生中期後半には隅円長方形が現れて円形・方形と共存している。弥生後期に入ると方形・長方形の状況があまり変化は見られないものの中型から大型の住居跡に移住するものが出現し，大型住居跡は古墳初頭まで続く。特に祭儀場跡の周辺で大型の竪穴住居跡が確認されることから祭儀場の施設に関係した建物で，首長クラスの居住域と想定され，他の地区で大型竪穴住居跡はあまり見られない。弥生後期には円形住居跡が消滅して方形・長方形が主体となり，この状況が古墳前期初頭まで続きことが認められた。弥生後期後葉から古墳前期にかけて４本主柱をもつ住居跡の出現や平面形において方形に近くなるなどの特徴が北部九州における竪穴住居跡の変遷の画期となる時期である。原の辻遺跡においても同様の傾向は看取されるものの古墳前期前半でも長方形で２本主柱の竪穴住居が依然として主体となる点は，朝鮮半島南部と北部九州の関りが深いと様相が想定される。

原の辻遺跡において竪穴住居跡は丘陵全面に分布し，弥生中期では丘陵北端部と北側の低地部が主体となり，弥生後期前半は祭儀場とその周辺が居住地域で，弥生後期後葉以降に丘陵部における分布の拡大が確められる。環濠が埋没後の古墳前期でも住居跡数の増加が祭儀場から南側の東傾斜で確認されることから北側から南側に居住域を移住していたことが解った。古墳前期以降の竪穴住居跡は検出されていないことから不明であるが，原の辻遺跡の北側に５世紀頃の大塚山古墳が築造されているのでこの付近に古墳前期から中期の集落地域が存在するものと想定でき，今後の重要な検討課題の一つである。

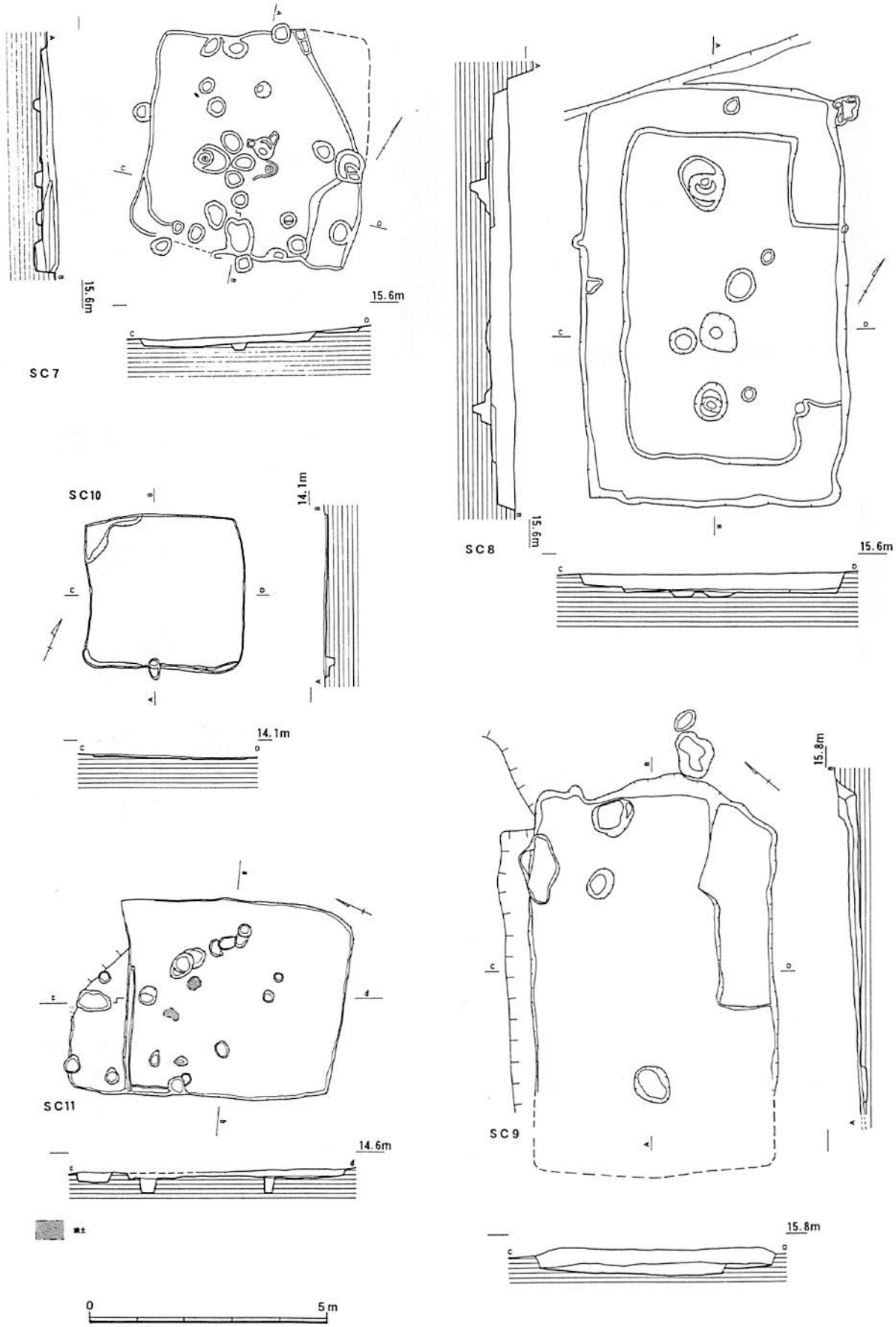
（山口）

【参考文献】

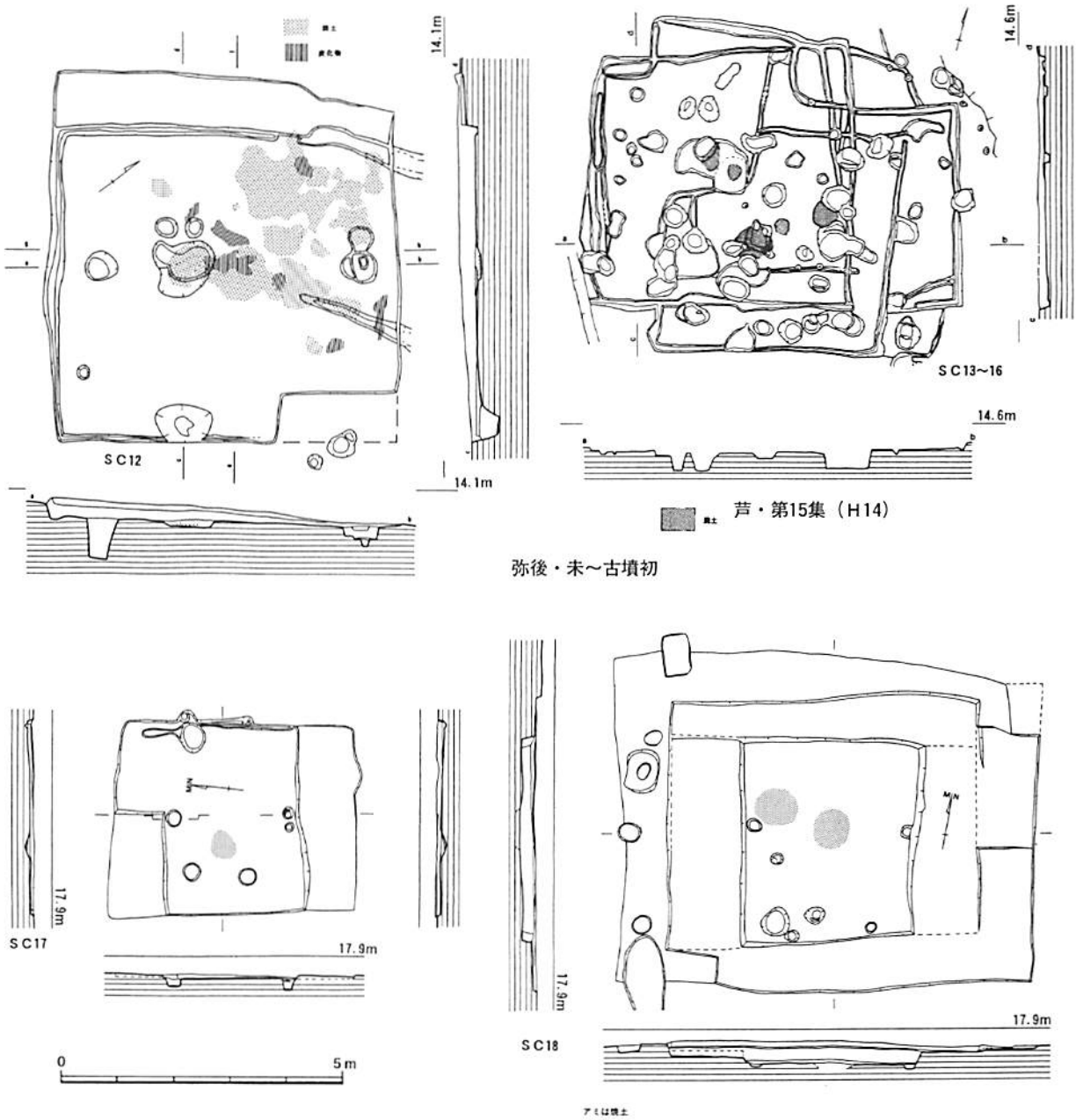
宮崎貴夫　2001『西海考古第４号・原の辻遺跡における歴史的契機について』西海考古同人会
中尾篤志　2003『原の辻遺跡調査事務所報告書第26集・原の辻遺跡』長崎県教育委員会



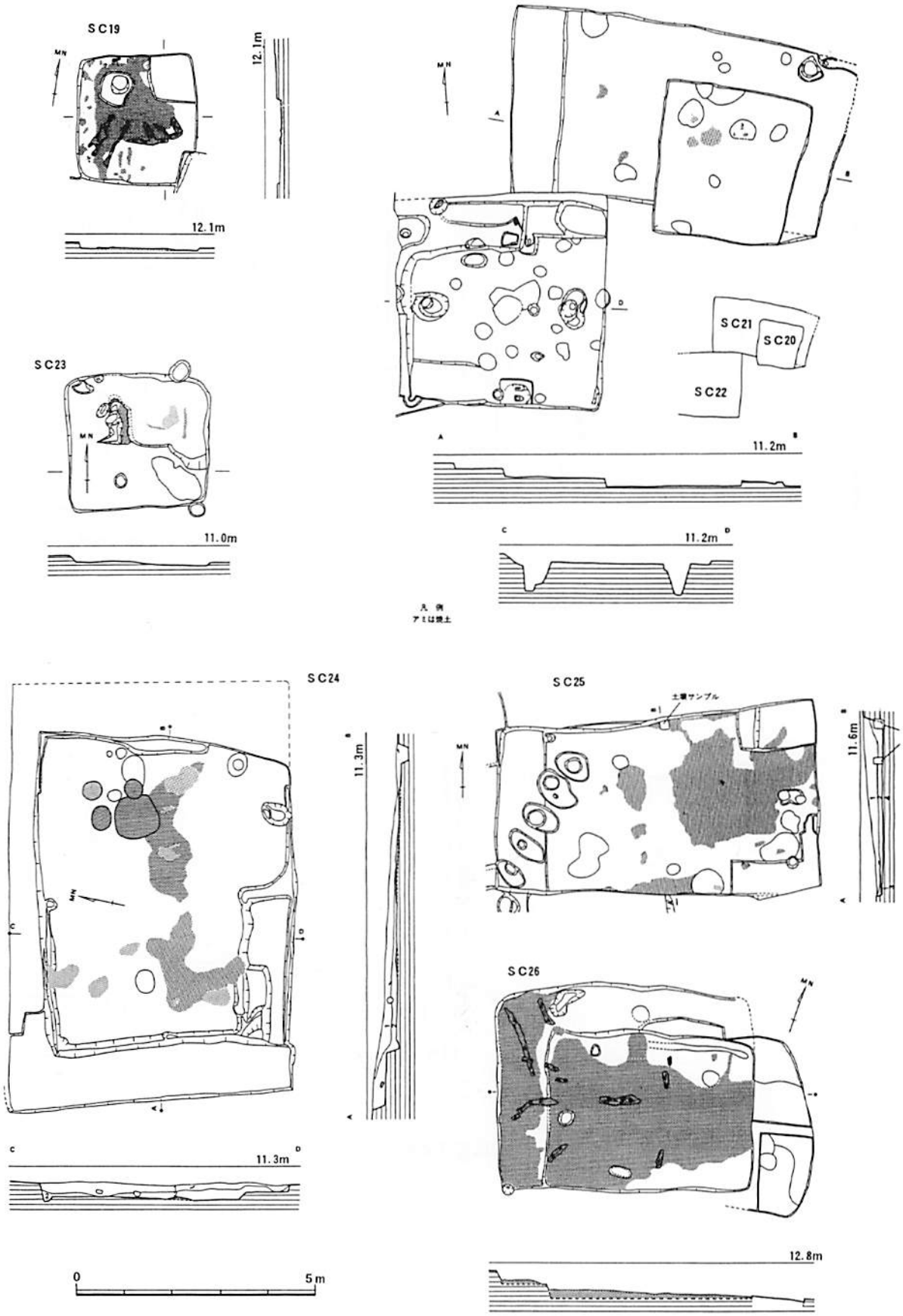
第32図　高元・原地区の住居跡①（1/120）



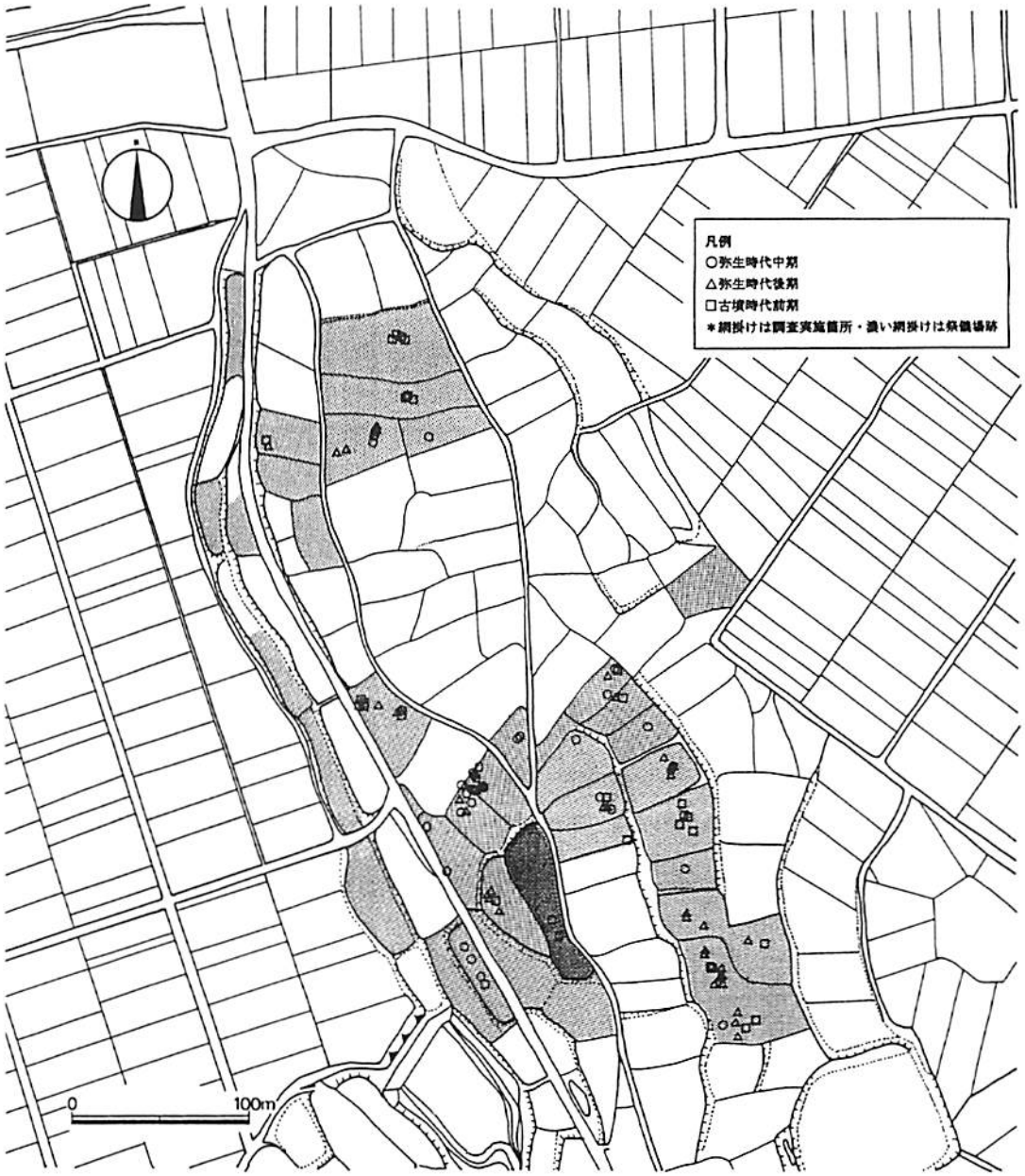
第33図　原地区の住居跡②（1/120）



第34図　原地区の住居跡③（1/120）



第35図　原地区の住居跡④（1/120）



（藤村・中尾2003より一部改変）

第36図　竪穴住居跡時期別分布図（1/4,000）

表２　原の辻遺跡における竪穴住居跡の一覧表

図版番号	本報告の遺構名	旧報告の遺構名	掲載報告書名
第32図	ＳＣ１	７号住居跡	芦辺町調査報告書第９集
〃	ＳＣ２	12号住居跡	芦辺町調査報告書第９集
〃	ＳＣ３	３号住居跡	芦辺町調査報告書第９集
〃	ＳＣ４	４号住居跡	芦辺町調査報告書第９集
〃	ＳＣ５	１号住居跡	芦辺町調査報告書第13集
〃	ＳＣ６	２号住居跡	芦辺町調査報告書第12集（平成11年度）
第33図	ＳＣ７	６号住居跡	芦辺町調査報告書第12集（平成12年度）
〃	ＳＣ８	１号住居跡	芦辺町調査報告書第12集（平成12年度）
〃	ＳＣ９	16号住居跡	芦辺町調査報告書第12集（平成11年度）
〃	ＳＣ10	１号住居跡	芦辺町調査報告書第12集（平成11年度）
〃	ＳＣ11	５号住居跡	芦辺町調査報告書第15集
第34図	ＳＣ12	２号住居跡	芦辺町調査報告書第13集
〃	ＳＣ13	１号住居跡	芦辺町調査報告書第15集
〃	ＳＣ14	２号住居跡	芦辺町調査報告書第15集
〃	ＳＣ15	３号住居跡	芦辺町調査報告書第15集
〃	ＳＣ16	４号住居跡	芦辺町調査報告書第15集
〃	ＳＣ17	１号住居跡	原の辻遺跡調査報告書第11集（平成７年度）
〃	ＳＣ18	２号住居跡	原の辻遺跡調査報告書第11集（平成７年度）
第35図	ＳＣ19	４号住居跡	原の辻遺跡調査報告書第11集（平成９年度）
〃	ＳＣ20	２号住居跡	原の辻遺跡調査報告書第11集（平成８年度）
〃	ＳＣ21	４号住居跡	原の辻遺跡調査報告書第11集（平成８年度）
〃	ＳＣ22	５号住居跡	原の辻遺跡調査報告書第11集（平成８年度）
〃	ＳＣ23	１号住居跡	原の辻遺跡調査報告書第11集（平成８年度）
〃	ＳＣ24	１号住居跡	原の辻遺跡調査報告書第11集（平成９年度）
〃	ＳＣ25	３号住居跡	原の辻遺跡調査報告書第11集（平成９年度）
〃	ＳＣ26	16号住居跡	原の辻遺跡調査報告書第11集（平成９年度）

6．墓　　地

原の辻遺跡で最初にみられる墓地の発見は，松本友雄氏が1937（昭和６）年探古日録（二）[註1]に記録されたもので「大正14年原の辻の車道堀切断面に小さい合口甕棺が崖面の自然崩壊のため露出しこれを掘り出した」とあり，場所は特定できないものの小児甕棺であった可能性が高い。

現在，墓地の所在は原の辻の丘陵部とその周辺部において第38図及び表２の９ヶ所が確認されている。

１．石田大原地区（第38図）

(1) 墓域の概要

この地区は1974（昭49）年畑地の水田化工事中に発見されたもので，その後の原の辻遺跡の重要性を裏付ける契機となった墓域である[註2]。未だ報告書が刊行されていないが，概要を述べる。

第37図　原の辻遺跡墓地配置図

調査では，字大原359番地の標高約10mの造成地中程から北側にかけて遺構が検出され，南側の溝遺構は性格等については不明であるが，溝２から北側が古い様相を示している。

なお，この区域は2001年と2002年にかけて字大原359，361，362番地の調査を行い，1974年に続く成果が得られている[註3・4]。内容は甕棺墓22基，石棺墓２基，土壙墓９基，溝１条が検出されている。しかし，ここでも調査区中程から東側は遺構の出土が希薄な傾向を示しており，削平をうけているものと思われる。さらに2003年，この区の西側に当たる349番地の範囲確認の調査では，４基の弥生中期の小児甕棺墓が確認されており[註5]，石田大原の墓域の範囲はこのあたりまで含まれると思われる。

表３　原の辻遺跡墓域関係表

番　号	地　区　名	調　査　者	調査年	備　　考
1	石田大原地区	長崎県教育委員会 石田町教育委員会	1974 2001．2002	土地造成工事 整備に伴う調査
2	大川地区	長崎県教育委員会	1976.	範囲確認調査
3	原ノ久保Ａ地区	〃	1996	〃
4	原ノ久保Ｂ地区	〃	1977	〃
5	原ノ久保Ｃ地区	〃	2001	〃
6	苣ノ木地区	〃	2001	〃
7	柏田地区	〃	1976	〃
8	原Ⅷ区	芦辺町教育委員会	2003	整備に伴う調査
9	閏繰遺跡	東亜考古学会	1954	学術調査

(2)　遺構の時期と副葬品について

1974年調査の内容については報告書が未刊のため，把握できた範囲で全体をまとめてみたい。甕棺の総数は77基に達し，前期後半から中期初頭のいわゆる金海式系と城ノ越式が９基で全体の約12％含まれ，共に出土地は359番地北東部に集中する。副葬品はガラス玉１点だけである。中期前半の須玖Ⅰ式は28基全体の約36％で副葬品は，勾玉や碧玉製管玉を含む甕棺が多い。そのなかで注目されるのは，1974年調査時の第18号甕棺に中国式銅剣の先端部（第92図）が副葬されていたことである。この種の銅剣は，佐賀県鶴崎遺跡や福岡県春日市立石遺跡からも出土している。また23・24号甕棺は壺を組み合わせた三重棺で小児棺とも考えられるが，中には刀子１・鉇１が副葬されていた。さらに下方の壺棺には外反した口縁部分から肩にかけて「捕鯨」を連想する線刻絵画が描かれている。

須玖Ⅱ式を主体とする甕棺は16基で全体の約21％のほとんどが器高60cm未満の甕の組み合わせであり，小児棺である。後期の甕棺もほとんど前葉の時期の小児棺である。分布状況は359番地北側の溝２を挟んで６基が集中している。この溝については，中から中期の土器が出土しており，それより古くは遡らないと思われる。また，後期終末の小児甕棺が1974年調査時の溝２東隅から出土しており，この甕棺が一番新しい遺構である。

石棺墓については，1974年の調査で19基検出され，４基から管玉や丸玉が出土しているが，14号石棺墓からは勾玉１個と管玉４個が副葬されている。2001年の調査では，２基の石棺墓が検出されそのうち２号墓が調査されている。石材は玄武岩で法量は内面が長さ110cm，幅37cmの長方形で２枚の蓋石をもつ。副葬品は長さ2.2cm，幅0.7cmの湾曲した勾玉２個と管玉８個が副葬されていた。土壙墓は2001・2002年の調査で10基が検出されているが，甕棺や石棺が集中しない南側にみられる。しかし，副葬品等も無く時期も確定しない。

この区域は畑地を水田化したため，かなりの遺構が削平されたと思われるのは先にも述べた。石材や大型土器など農耕に支障のある遺物は取り除かれているが，小さい遺物は低い部分に盛土された土の中に残っている場合が多く，墓地という性格を考え盛土をフルイにかけたり，丁寧に取り除いていくと意外な結果が得られた。

遺物は，古いものでは小破片ながら多紐細文鏡（第91図），細形銅剣約３本分に相当する破片（第92図），１個体になる後漢鏡片３点，一カ所に固まった状態で出土した銅鏃25本以上で，この銅鏃には樹皮や麻糸が巻かれているものや水銀朱が施されているものもあった。それと，1954（昭29）年の土地改良の際の土砂の採取地になったこの区域の北側から，多くの土器や石器，人骨のほかに細形銅剣２，銅戈１の出土がある。残念ながら今更どのような遺構に副葬されていたか知るよしもないが，

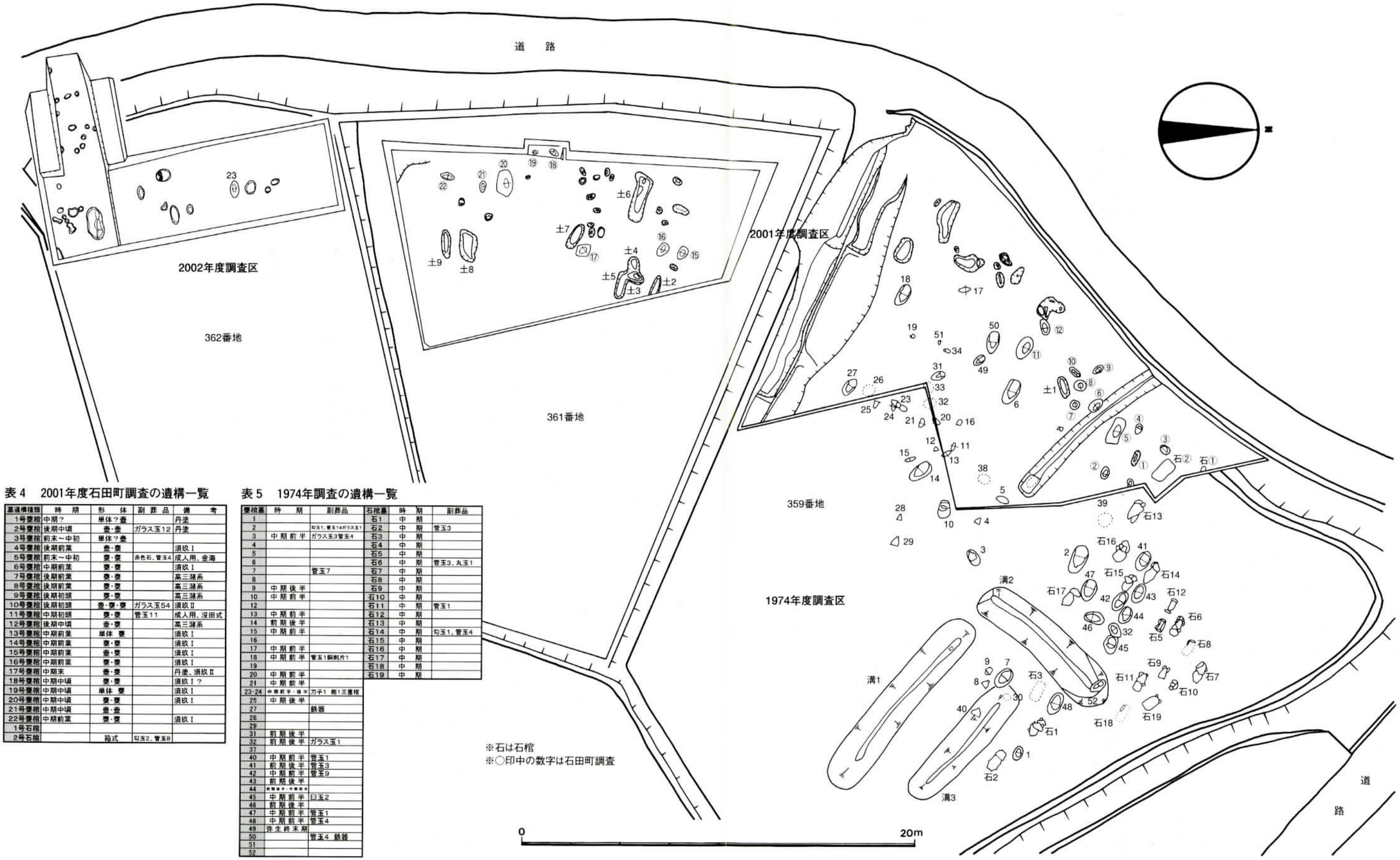


表4　2001年度石田町調査の遺構一覧

基礎構築類	時　期	形　体	副葬品	備　考
1号甕棺	中期？	単体？壺		丹塗
2号甕棺	後期中頃	壺・壺	ガラス玉12	丹塗
3号甕棺	前末～中初	単体？壺		
4号甕棺	後期前葉	壺・甕		須玖Ⅰ
5号甕棺	前末～中初	甕・甕	赤色石、管玉4	成人用、金海
6号甕棺	中期前葉	甕・甕		須玖Ⅰ
7号甕棺	後期前葉	甕・甕		高三潴系
8号甕棺	後期前葉	甕・甕		高三潴系
9号甕棺	後期初頭	甕・甕		高三潴系
10号甕棺	後期初頭	壺・甕・甕	ガラス玉54	須玖Ⅱ
11号甕棺	中期初頭	甕・甕	管玉11	成人用、没田式
12号甕棺	後期中頃	壺・甕		高三潴系
13号甕棺	中期前葉	単体 甕		須玖Ⅰ
14号甕棺	中期前葉	甕・甕		須玖Ⅰ
15号甕棺	中期前葉	壺・甕		須玖Ⅰ
16号甕棺	中期前葉	甕・甕		須玖Ⅰ
17号甕棺	中期末	壺・甕		丹塗、須玖Ⅱ
18号甕棺	中期中頃	甕・甕		須玖Ⅰ？
19号甕棺	中期中頃	単体 甕		須玖Ⅰ
20号甕棺	中期中頃	甕・甕		須玖Ⅰ
21号甕棺	中期中頃	壺・壺		
22号甕棺	中期前葉	甕・甕		須玖Ⅰ
1号石棺				
2号石棺		箱式	勾玉2、管玉8	

表5　1974年調査の遺構一覧

甕棺墓	時　期	副葬品
1		
2		勾玉1、管玉14ガラス玉1
3	中期前半	ガラス玉3管玉4
4		
5		
6		
7		管玉7
8		
9	中期後半	
10	中期前半	
12		
13	中期前半	
14	前期後半	
15	中期前半	
16		
17	中期前半	
18	中期前半	管玉1銅剣片1
19		
20	中期前半	
21	中期前半	
23・24	中期前半・後半	刀子1 鉋1三重棺
25	中期後半	
27		鉄器
28		
29		
31	前期後半	
32	前期後半	ガラス玉1
37		
40	中期前半	管玉1
41	前期後半	管玉3
42	中期前半	管玉9
43	前期後半	
44	前期後半・中期前半	
45	中期前半	臼玉2
46	前期後半	
47	中期前半	管玉1
48	中期前半	管玉4
49	弥生終末期	
50		管玉4 鉄器
51		
52		

石棺墓	時　期	副葬品
石1	中　期	
石2	中　期	管玉3
石3	中　期	
石4	中　期	
石5	中　期	
石6	中　期	管玉3、丸玉1
石7	中　期	
石8	中　期	
石9	中　期	
石10	中　期	
石11	中　期	管玉1
石12	中　期	
石13	中　期	
石14	中　期	勾玉1、管玉4
石15	中　期	
石16	中　期	
石17	中　期	
石18	中　期	
石19	中　期	

第38図　石田大原地区墓域図

しかし，この区域が原の辻遺跡初期の首長墓であったことは間違いないようである。

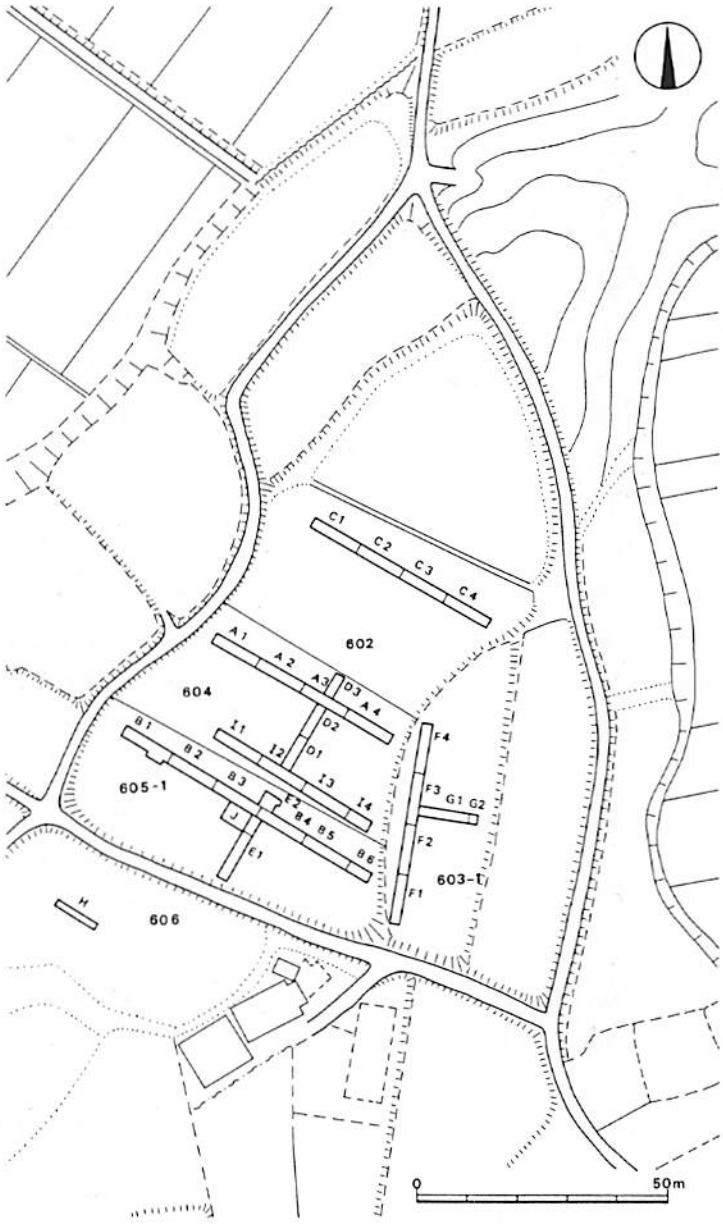
(2) 大川地区（第39図）

当該地域は遺跡の北東部，標高11～13mの丘陵部のいわば端に位置する。1976年の第２次調査では，かつて土地改良の際ブルドーザで削平され石棺．甕棺が出土したところの高台部分にあたり，ここに６カ所の試掘坑を設定した。その結果，箱式石棺墓２基，土壙墓２基，小児甕棺墓４基が検出され，第11試掘坑の第１土壙墓からは２本の鉄製鉋が副葬され，銹とともに木質が付着していた。第14試掘坑の後期前半の第３号甕棺（高三潴式小児合口甕）からはガラス製勾玉・管玉・小玉が副葬されていた。その後，この604番地の畑では意外な展開がまっていた。試掘調査も終わった12月，大型トラクターによって深耕された畑から，重要な遺物が壱岐商業高校郷土社会部員によって表面採集された。内訳は復元直径10.4cmの方格規矩鏡と復元直径11.2cmの獣帯鏡各１面及び有鈎銅釧３点，群青色した比較的大形のガラス玉や小形のものなど，連ねた長さにして270cmにも達する量であった。このことから，この区域は有力者集団の墓域として注目されることになり，1995年墓域の範囲確認と墳墓の内容・構成を究明する目的で602～606番地の畑に調査坑を設定した。その結果，箱式石棺墓５基，石蓋土壙墓，土壙墓及び土壙13基，小児甕棺墓７基，溝状遺構５条などの遺構を検出した。副葬品は表６のとおりであるが，主なものは，鉄剣・鉄鋤先・碧玉製管玉・ガラス製小玉などであり，墳墓でないＡ１区の１号土壙からは，鉄鋤先・鉄鎌・丹塗土器片などが出土した。また，Ｄ１・11区では後漢鏡片の円圏規矩四神鏡，内行花文鏡が出土している。

この墓域では，主に中期後半から後期後半を中心に営まれ古墳前期初頭まで存続したことが明らかになった。また少量ではあるが，弥生前期の土器も出土しており，墓地以前に小規模な住居域であったことが窺われる。

(3) 原ノ久保Ａ地区（第40図）

ここでは1977年の範囲確認調査の折に，家の周辺に棺材が置かれていたのを不審に思い聞き込みしたところ，小野氏敷地内の330－１番地からであることが判明，その時４基だけを一応確認しそのまま埋め戻した。その後，1996年墓域の範囲と内容を確認するため調査区を設定した。その結果，Ｄ区から箱式石棺墓12基，石蓋土壙墓５基，土壙墓10基，甕棺墓２基が検出されている。甕棺は後期後葉の西新式壺棺で底部を打ち欠いて蓋にしたものと，後期前葉の丹塗単壺が出土している。石棺は，６号石棺墓から副葬品として硬玉製勾玉と碧玉製管玉が出土している。また，８号石棺墓からは直径7.6cmの小型仿製鏡が１面副葬されていた。石棺の内法は長軸1.5m，短軸2.5m，深さ0.3mで細長の方形を呈する。この遺構は検出遺構のほぼ中央に位置することに加え段を持ち，さらに東西南北の四面に集石を意図的に配したのではないかと思われ，集団墓の中でも特別な被葬者であったことが窺える。また，１号土壙墓からは弥生終末の小形鉢のほかに鉄鎌と鉄鋤先が，２号石蓋土壙墓には同じ終末期の小形壺が副葬されていた。調査区の南東端で検出された９号土壙は，12号箱式石棺墓を切る形で検出された。長径約1.55m，短径約0.9m，深さ約0.32mの楕円形である。この中から直径20cmの長宜子孫銘内行花文鏡１面・ガラス製勾玉１点・同丸玉３点・碧玉製管玉１点・筒形不明青銅器１点が出土している。この遺構は，12号箱式石棺墓の石棺材が抜き取られた後に掘られたと考えられるが，後世に入れられた副葬品には間違いないと思われ，どんな意図で行われたのか，今後の課題である。この９号土壙からは，弥生中期から終末期までの土器が出土しているが，この周辺には1976年にも後期後葉の甕棺片や獣帯鏡片が採集されており，弥生後期前葉から終末にかけての首長級の墳墓が所在していたと想定される。なおＦ区でも後期前葉の小児合口甕棺が確認され，墓域の広がりを示している。



第39図　大川地区墓域図

表６　平成７年度大川地区遺構一覧

番号	地区	種別号数	時　期	遺物・副葬品	備　考
1	A1	1号甕棺墓	後期中頃		壺+壺
2	A1	1号土壙	中期末	鉄鏃先，鉄鎌，丹塗土器片	
3	A2	土壙			
4	A2	土壙			
5	A2	1号石棺墓	後期？	骨少々，弥生土器片	石棺抜け跡
6	B1	2号甕棺墓	後期前半		壺+壺？
7	B1	ピット	前期末	弥生前期土器片	
8	B1	2号石棺墓	後期	弥生土器片	
9	B2	2号土壙	中期末	丹塗土器片	
10	B2	1号土壙墓	中期末	ガラス小玉385以上，ヤリガンナ，丹塗土器片	木棺墓？
11	B2	1号溝	中期末	丹塗土器片	
12	B3	2号溝			
13	B4	1号石蓋土壙墓	後期？	弥生土器片	
14	E2	4号甕棺墓	後期前半	ガラス小玉54	壺+壺
15	B4	3号土壙			
16	B5	3号石棺墓	中期末	管玉7，丹塗土器片	石棺抜け跡
17	B5	6号甕棺墓	後期後半	ガラス小玉6，棺内に朱	壺
18	B5	4号溝			
19	B5	4号土壙	後期中頃	弥生土器片	
20	E1	土壙	後期？	弥生土器片	
21	E2	5号甕棺墓	後期前半	ガラス小玉20，管玉，丹塗土器片	甕+丹塗壺
22	B2	3号甕棺墓	後期前半	ガラス小玉19	甕+壺
23	G1	4号石棺墓			
24	G1	3号土壙墓	後期後葉	ガラス小玉4，鉄剣，弥生土器片	
25	G1	5号土壙	後期後葉～	弥生土器片	
26	G1	5号石棺墓	後期？	弥生土器片	石棺抜け跡
27	G1	6号土壙	後期？	弥生土器片	
28	G1	7号土壙	後期後葉～	弥生土器片	
29	G2	2号土壙墓	後期？	鉄鏃先	ピット
30	G2	7号甕棺墓	後期後半		甕+甕
31	E2	3号溝	中期末	丹塗土器片	
32	B1	5号溝			

(4)　原ノ久保C・苣ノ木地区（第42図）

この墓域は，町道江里線の南側の2001年調査の原ノ久保10区と12区出土の遺構と2003年原ノ久保13－１区及び苣ノ木13－１区を含むものである。216－３番地の10区からは中期中葉の須玖Ⅱ式の小児合口甕棺が長軸を南西に向け出土。そのほかは中期前葉から後葉の土器片が得られている。

12区からは，石棺墓が検出された。蓋石は長さ2.18m，最大幅0.62mで５枚の板状安山岩がヨロイ蓋状に重ねられている。蓋石を取り除くと中には細長い長方形の土壙が掘られ，頭部と思われる位置に１枚と長軸の両側板に小さい板石が２枚置かれているだけで副葬品は無い。石蓋土壙墓の範疇に捉えられるものと考えられる。

時期については不明であるが，北西に30cm離れたところから脚部が失われた中期後葉の丹塗り高坏が逆さまに置かれていた。さらにこの近くからは，同時期の頸部に暗文を施し大きく外反した丹塗りの壺が出土していることから，供献土器と捉えるならば遺構も同時期と考えても良い。

13－1区からは箱式石棺墓1基，甕棺墓9基が検出されている。1号石棺はほとんど棺材が削平を受けており，時期不明である。石蓋土壙は5枚の蓋石が重ねられ，土壙の長さ1.74m，幅0.4m，深さ0.25mの長方形を呈するが，副葬品は無い。甕棺はすべて小児甕で中期後葉の壺と甕を除いては，後期前葉の甕である。

苣ノ木13－1区は21－2番地に設定した。調査区からは，箱式石棺墓1基，石蓋土壙墓，小児甕棺墓5基を検出しているが，1994年の町道改良に伴う調査では箱式石棺墓の抜き取り跡が4ヶ所確認されている。また，南側の13－2区には遺構はない。なお，1977年の調査ではさらに南側の水田境界に沿った形で，濠が確認されている。

遺構の内容は，石棺墓については壁際の出土でもありそのまま埋め戻している。石蓋土壙墓は3枚板石を重ね目張りとして丸い礫を乗せている。副葬品としてガラス小玉151個と後期の袋状口縁の破片が出土している。後期前葉の4号甕棺墓は壺と甕の組み合わせであるが，ガラス玉216個が出土している。5号甕棺墓は後期中葉の壺であるが，上甕は壁にあり形状不明。副葬品として銅釦が1個出土した。銅釦は本遺跡からは初例であるが，佐賀県布施ヶ里遺跡や西山田二本松遺跡から出土例がある。このほかこの地区からは，供献土器と思われるものも出土している。

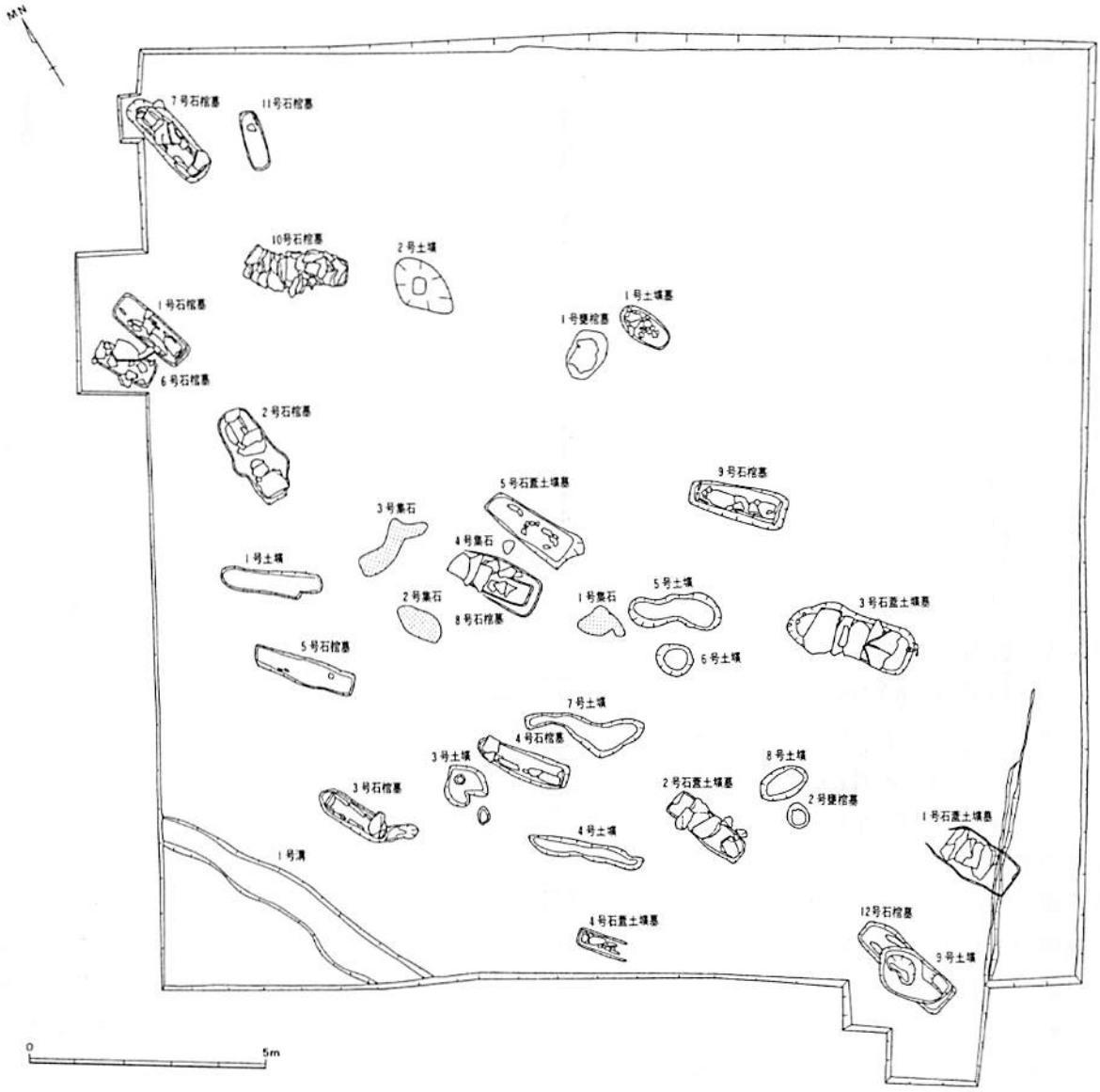
第40図　原ノ久保A調査区配置図

(5) 原の久保B地区（第37図）

1977年の範囲確認調査で第19試掘坑とした原の辻遺跡では一番南にあたり，小川の南に迫る標高22～14mの丘陵上である。弥生終末から古墳前葉の西新式の成人棺墓が2基まとまって出土している(註6)。1号甕棺墓にはガラス小玉多数と水晶小玉1点，2号甕棺からは碧玉製管玉2個とガラス玉多数が副葬されていた。その後1998年範囲を確認すべく，広い範囲で調査区を設定したが，地山まで浅く追加資料を得ることはできなかった。

(6) 原　地　区（第43図）

この地区は丘陵部の中央から東側にあたり，1996・1997年にかけて濠や住居跡がどのように展開す



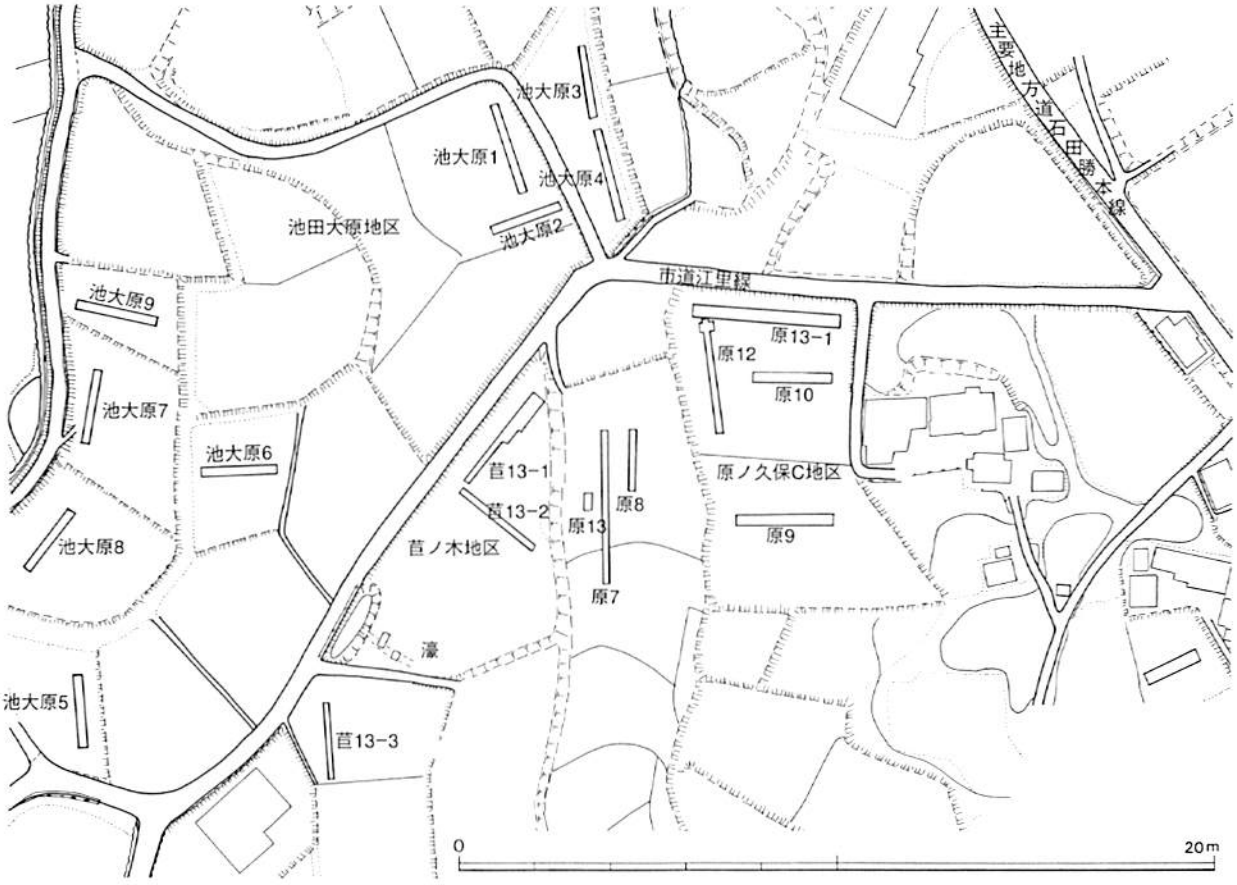
第41図　原ノ久保A・D遺構配置図（1/150）

表7　原ノ久保D区遺構一覧表

調査区	遺構名	出土遺物・副葬品	備考
D区	1号石棺墓		
	2号石棺墓		
	3号石棺墓		
	4号石棺墓		
	5号石棺墓		
	6号石棺墓	硬玉製勾玉，碧玉製管玉	
	7号石棺墓		
	8号石棺墓	小型仿製鏡	棺床に朱が残る
	9号石棺墓		石棺材の抜け跡あり
	10号石棺墓		
	11号石棺墓		石棺材の抜け跡あり
	12号石棺墓		9号土壙が石棺墓を切っている

調査区	遺構名	出土遺物・副葬品	備考
D区	1号石蓋土壙墓	ガラス製小玉	
	2号石蓋土壙墓		
	3号石蓋土壙墓	小壺	石棺材の抜け跡あり
	4号石蓋土壙墓		
	5号石蓋土壙墓		
	1号土壙墓	鉄鏃・鉄鋤先・小鉢	
	1号土壙		
	2号土壙		
	3号土壙		
	4号土壙		
	5号土壙		
	6号土壙		
	7号土壙		
	8号土壙		

調査区	遺構名	出土遺物・副葬品	備考
D区	9号土壙	後漢鏡・筒形不明青銅器・ガラス製勾玉・ガラス製丸玉・碧玉製管玉	
	1号甕棺墓		上甕・下甕,壺を使用
	2号甕棺墓		単式甕棺,壺を使用
	1号集石		
	2号集石		
	3号集石		
	4号集石		
	1号溝		
E区	1号溝	丹塗土器	
F区	1号石棺墓		
	1号甕棺墓		上甕・下甕,壺を使用



第42図　原ノ久保C，苣ノ木地区調査区配置図

るのかを目的とした調査で，前年度は濠４条と多数の住居跡を確認したほか，後期前葉から後葉の小児甕棺墓が６基検出された。Ａ区を設定した1314番地からは住居域から１基，Ｄ区を設定した1307番地からは，４号濠の両側に並んで埋葬され，成人が埋葬される一般的な墓地とは異なった状況が捉えられた。後年度の調査はさらに南側を対象に設定した。その結果1298番地Ｉ区から小児甕棺４基が，隣接した1305番地Ⅱ区から１基の小児甕棺墓を住居域から検出した。時期的には後期中頃から終末で壺単棺や甕，鉢と壺の合口である。

(7)　原Ⅷ区・ⅩⅢ区（第43図）

原Ⅷ区は，遺跡の一番高い部分から北側の標高約12mの1339番地にあたり，竪穴住居跡，土壙，ピットなどが多く検出されている。その中の長径1.18m，短径0.66m，深さ8.7～16cmの楕円形を呈した遺構から，ほぼ完全な側臥屈葬（横臥）の壮年男性の骨が良好な状態で検出された。ただこの埋葬状態は腰が右側を下にした横向きになっていたため，頭蓋も右側が下になるのが自然であるが，立てた状態になっており，意図的なものが感じられる。身長は約170cmと高く異色な感じであるが，これまで完全な人骨の出土は無く，どのようなヒトであったか背景までは不明である。なお，土壙墓内からは弥生中期の土器が出土している。

2003年調査のＸⅢ区1246番地からは，甕棺墓３基，箱式石棺墓２基，土壙墓８基が検出されたが，従来からこのあたりは中期前葉から後葉の住居，土坑域として捉えられてきたところである。甕棺墓は，１・３号は口縁部を欠いた前期後葉の金海式合口の小児壺棺で，１号には一番深い部分には赤色顔料が溜まっていた。２号はほとんど削平を受けていたが，わずかに残された土器は板付Ⅱｂ式の特徴もつ小児甕である。石棺墓は長軸2.20m，幅1.10m，深さ0.25mで２号も同様の規模である。副葬

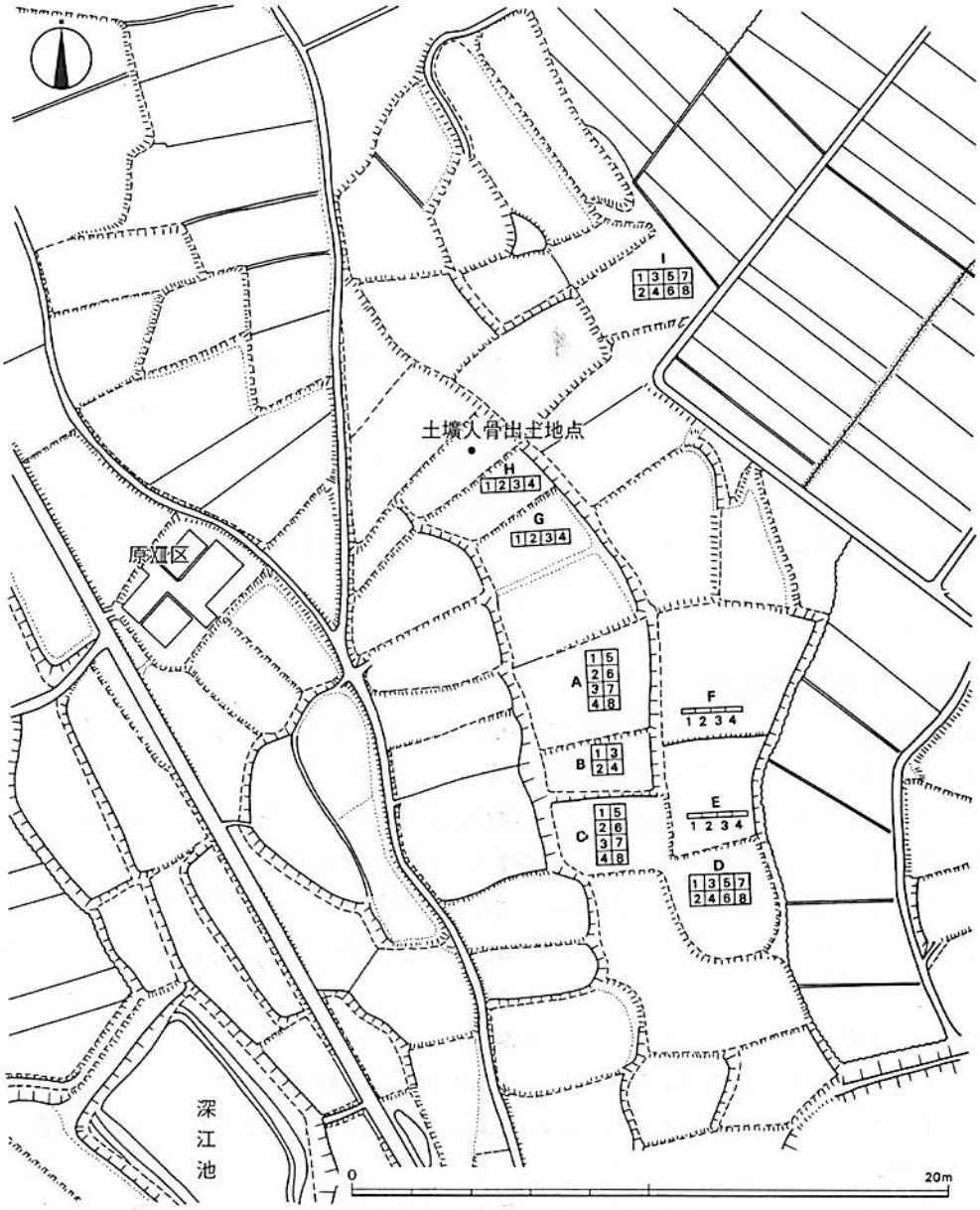
品は無く，時期は切られたピットから出土した土器から中期前葉と考えられる。土壙墓は１号を除いて斬り合い関係が顕著であるが，１号土壙墓出土の土器からして中期前葉前後が考えられ，これ以上の遺構の広がりはないと思われる。

(8) その他の墓地

原の辻遺跡のなかで墓地群として取り扱わなかった墓地の出土がある。いわゆる単独で出土した地点と甕棺の一部を確認した地点である。大川地区の南側609番地に弥生中期後葉の小児甕棺墓が１基，さらに南東側の柏田地区855－２番地に同時期の小児甕棺１基が存在する。

原ノ久保Ａ地区の墓域中心から南へ約100m離れた地点からも以前石棺が出たと伝えられる地点があり，棺材片とみられるものがある。またその周辺からも中期中葉の大型土器片があり，墓地が営まれていた可能性が高い。苣ノ木からは，内面に丹を塗布した弥生終末の甕棺片が出土したが，以前畑の造成中土器が出た話を聞いたことがあるということで，墓地のあった可能性がある。

そのほかに、墓地として捉えられてはいないが、2001年の調査において丘陵西側低地の環濠部分か

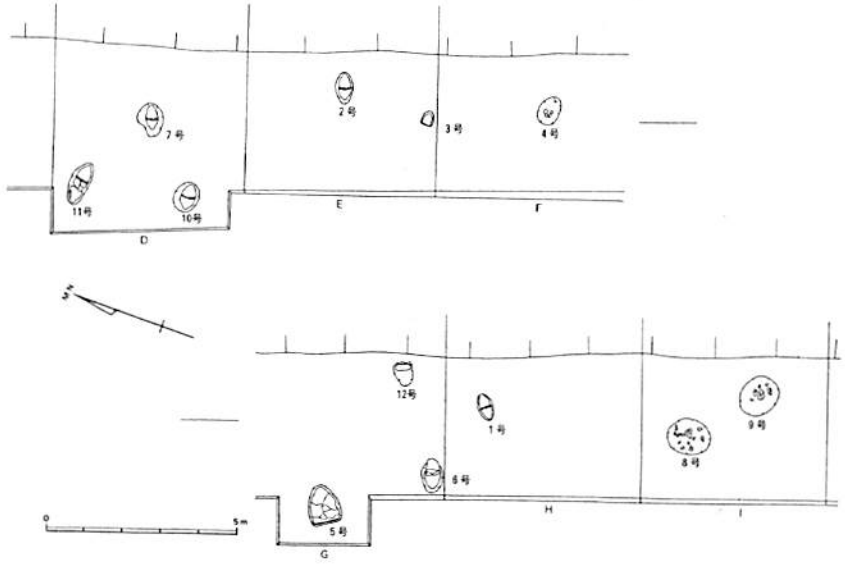


第43図　原地区遺構配置図

ら十数体分の人骨が出土している。[註8]人類学的所見については第Ⅳ章を参照していただくとして、出土状況が一次葬の状態を保っておらず、環濠が廃棄されたときに投げ込まれたような状況が観察された。しかも、人骨の構成が成人男性・女性や小児（幼児）が含まれていることであり、極めて特異な状況である。いろいろな解釈が考えられるが、さらに詳細な検討が必要である。

(9) 鶴田遺跡（第44図）

この遺跡は，原の辻遺跡の舌状に延びた丘陵部中央から約350m離れた西側丘陵部東端に位置する。河川と農道拡幅で調査を行った結果，須玖Ⅰ式を主体とする中期前葉から後葉の小児甕棺墓が11基と中期前葉の汲田式の成人用単棺１基の計12基が検出された[註9]。特徴的なのは埋葬方法が主軸方向を東西にとっていることで，３号は単棺で木蓋の可能性が，12号も単棺ながら石蓋であった。９号は広口の壺を利用している。この墓域は東側は崖面であることから西側に広がると推測される。この墓域は，東側は崖面であることから西側に広がると推測されるが，原の辻遺跡とは別の集団と捉えた方が良いと思われる。



第44図　鶴田遺跡遺構配置図

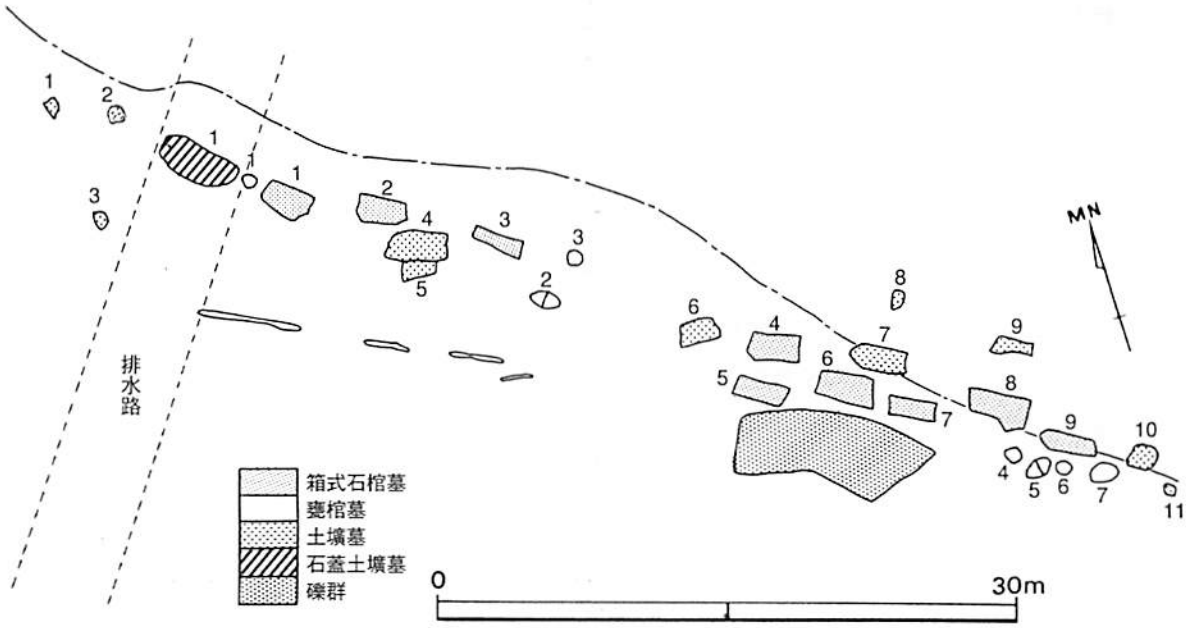
(10) 閨繰遺跡（第45図）

調査地点は安国寺の奥まった所から東側の，丘陵がせり出した南側先端部分で，原の辻遺跡丘陵先端から約330m北に位置する。この地点は，1956年東亜考古学会が調査しており，当時撮影された写真でみるかぎり，中期初頭の城ノ越式と中期前葉の須玖式甕棺墓及び箱式石棺墓が検出されている。壱岐を代表する郷土史家山口麻太郎は安国寺前甕棺，石棺群として「川内川の北向こうの山麓に出た。二所あって，一方は石棺が２個出ていた。一方は石棺と甕棺の群で大小数個あった。これは京大で調査した。」とあり，当時の状況を知ることができる。しかし，報告書が刊行されていないのでどういった内容か不明である。ただ，当時の新聞記事では箱式石棺墓14基，甕棺墓10基余りが検出され，副葬品として管玉４個が出土したことが知られるのみである。

1995年と1998年の圃場整備事業に伴う調査で，新たに箱式石棺９基，甕棺墓７基，土壙墓11基の合計27基が検出された[註13]。だがこの地区は遺構が保存されることになったため，１号石蓋土壙墓と１号甕棺墓だけで副葬品は確認されていない。

全体を総合してみれば，ここにも大きな集団墓地が石田大原地区とほぼ一緒の時期に営まれていた

わけで，際だった副葬品が見られないことから，原の辻に従属した集団墓と位置付けられよう。



第45図　闘繰遺跡遺構配置図

(11) 原の辻遺跡における墓地の変遷について

これまで原の辻遺跡には，隣接した地域も含めて９カ所の墓域が所在することが確認できた。そのなかで報告書に記載した甕棺の内訳は，前期末が４基，中期初頭１基，前葉７基，中葉13基，後葉４基，後期初頭３基，前葉10基，中葉５基，後葉８基，後期終末～古墳が４基で総計59基を数えるが，ここには1974年（昭和49）の甕棺49基は含まれないので実数は大きくなる。さらに，この墓域以外にも単体で甕棺，あるいは人骨が出土している地点が確認されている。

先ず，墓地の出現であるが，一般的には前期後半の伯玄社式あるいは前期末の金海式に求められているが，弥生早期の刻目突帯文土器の成立を境に，棺として使用される土器や墓地構成が大きく変化することから甕棺墓の開始との考え方もある。

原の辻遺跡の出自については，現在のところ弥生前期中葉の板付Ⅱ式より以前の土器は出土していないことから，この時期から集落が営まれてきたと考えられるが，地域は丘陵北部に限られている。墓域の変遷については表８のとおりであり，当然のことながら前期中葉以前の墓地は認められない。初めての甕棺墓として登場するのが，石田大原地区に見られる前期後半の甕棺である。1974年のものも含めると８基に達する。原ⅩⅢ区からも同時期のものが３基確認されているが，規模から見ると石田大原が大きく，玉類などの副葬品も揃っている。北部九州では，中期初頭から前葉にかけては甕棺独自の製作技法の確立で大型化していき，副葬品の所有形態も分散所有型で漢以前の朝鮮製青銅器を所有しており、ここでも例外ではない。金海（新）式と城ノ越式及び汲田式は石田大原に見られ，以前の工事で出土した細形銅剣や埋土から出土した多紐細文鏡はこれらの土器に副葬されたものと考えられる。これを裏付けるように2004年度の同じ地域の中期初頭の土壙墓からは，細形銅剣片の副葬が確認されている。

中期中葉頃になると北部九州では須玖式，立岩式古段階の最盛期にあたり，甕棺は大型化の傾向がみられる。しかしながら，本遺跡では須玖Ⅰ式の段階で池田大原でわずかに確認されたのみで，この時期日常用甕の転用が小児甕棺墓として多くみられる。隣接する鶴田遺跡では中期前葉から中葉にか

	前期	中期					後期					古墳		内容・構成等
	後葉	初頭	前葉	中葉	後期	末	初頭	前葉	中葉	後期	末	初頭	前葉	
石田大原	―	―	―	―	―	―	―	―						甕棺墓・小児甕棺墓・石棺墓・石棺土壙墓・溝
大川					・・・・・・	―	―	―	―	―	―	―	・・・・・	小児甕棺墓・石棺墓・土壙墓(木棺墓)石棺土壙墓
原の久保A			・・・	―	―	―	―	―	―	―	―	―	・・・・	小児甕棺墓・石棺墓・土壙墓石棺土壙墓
原の久保B											・・・	―	・・・・	甕棺墓
原の久保C		・・・・	―	―	―	・・								小児甕棺墓・石棺墓
柏田			・・	―	―	・・・								小児甕棺墓
原8.13区		・・・・・・	―	―	・・・・・・・	・・								
鶴田	・・・	・・・・	―	―	・・・・・									甕棺墓・小児甕棺墓・石棺墓
閏繰	・・	―	―	―	―	―	―	・・・・						小児甕棺墓・石棺墓・石棺土壙墓

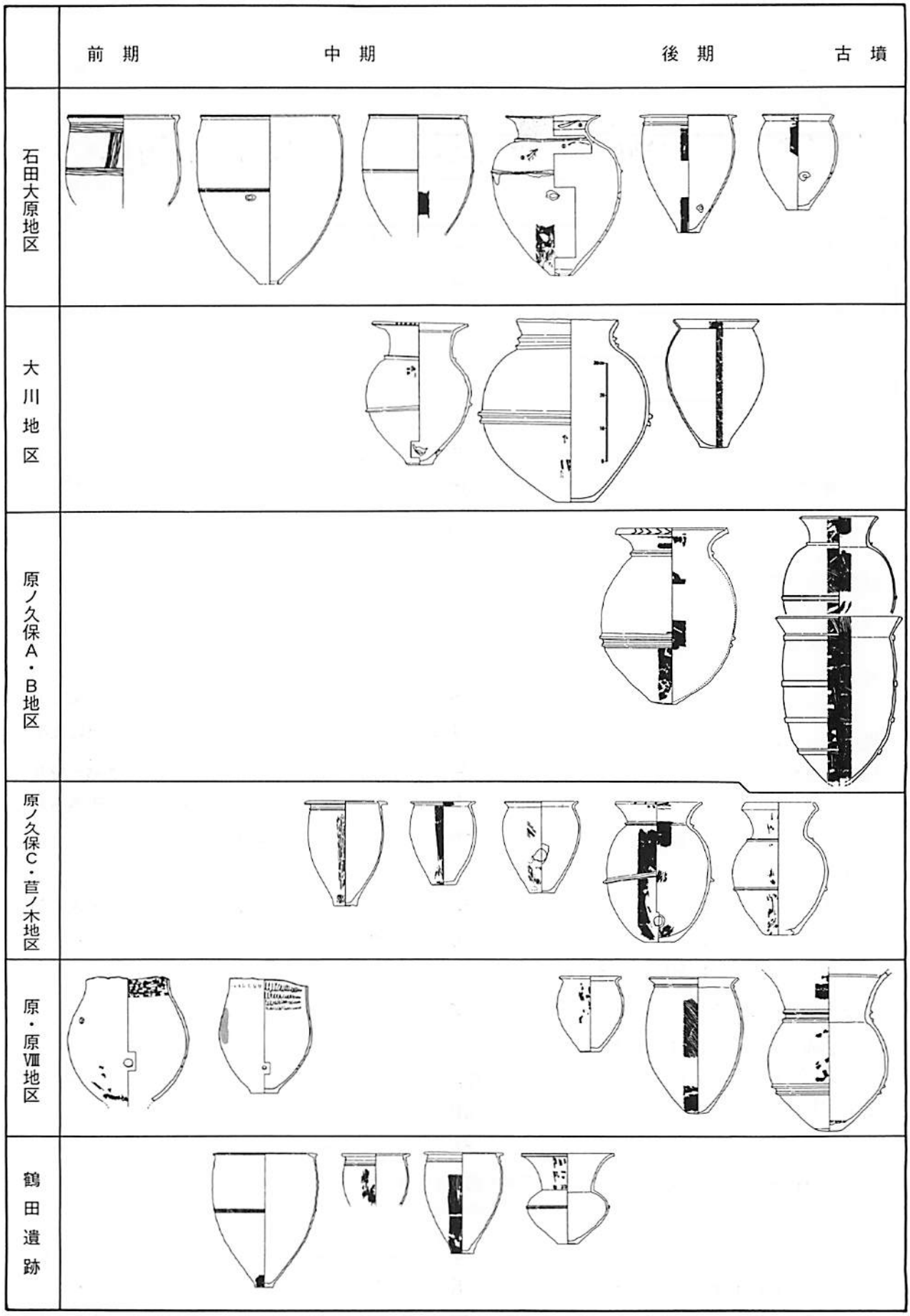
表8　原の辻遺跡の墓域変遷表

けての合せ甕が集中する反面，丘陵部では散発的に検出される傾向がある。副葬品についてはめだったものはみられない。

石田大原では，石棺墓が多く検出されているが，成人棺が甕棺墓から石棺墓に移行する時期として捉えられている。

後期になると大形棺は全く影をひそめ，小形の甕もしくは中形の壺が使用されるようになる。大川地区では，副葬品に舶載品のほか国産品として有鉤銅釧，剣，鉾，鋤先等豊富である。苣ノ木地区では後期前葉の合口壺棺出土の銅製釦がある。終末から古墳初頭の墓地は原ノ久保B地区の2基の甕棺が相当するが，群を形成するまでには至っていない。原の辻遺跡の墓地については，北部九州の甕棺墓地のように過密な状態ではなく，比較的ゆったりとしている。墳墓の構成についても成人墓は甕棺ではなく，箱式石棺墓と土壙墓が主体で北部九州とは異なっている。また，墓域は北から南にかけて形成されて行った課程がみてとれる。　（安楽）

註1．松本友雄　1931『探古日録』(二)
2．1974年（昭49）長崎県教育委員会が緊急発掘調査（報告書未刊）
3．河合雄吉　2002『原の辻遺跡』石田町文化財調査報告書第5集　石田町教育委員会
4．河合雄吉　2003『原の辻遺跡』石田町文化財調査報告書第6集　石田町教育委員会
5．河合雄吉　2004『原の辻遺跡』石田町文化財調査報告書第8集　石田町教育委員会
6．藤田和祐　1978『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第37集　長崎県教育委員会
7．宮崎貴夫　1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡文化財調査報告書第11集　長崎県教育委員会
8．『原の辻遺跡』原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集　原の辻遺跡保存等協議会
9．川口洋平　1998『鶴田遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第6集　長崎県教育委員
10．安楽　勉　2002『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査報告書第25集　長崎県教育委員会
11．松見裕二　2004『原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第17集　芦辺町教育委員会
12．松下孝幸　2001「長崎県原の辻遺跡出土の弥生人骨」『原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第17集　芦辺町教育委員会
13．安楽　勉　2002『閏繰遺跡』原の辻遺跡調査報告書第17集　長崎県教育委員会



第46図　遺跡出土甕棺編年図

7．土　　坑

はじめに

これまで原の辻遺跡において発掘調査が実施された土坑を選出する作業を行った。今回，総集編に使用した報告書は下記のとおりである。

・長崎県原の辻遺跡調査事務所刊行報告書（原の辻遺跡関係分のみ）　第１集～第28集
・長崎県芦辺町刊行報告書（原の辻遺跡関係分のみ）　第１集～第18集
・原の辻遺跡保存等協議会刊行報告書　第１集～第３集
・長崎県石田町刊行報告書（原の辻遺跡関係分のみ）　第１集～第８集
・長崎県石田町文化財保護協会　第１集・第２集
・長崎県壱岐市報告書第１集（2004年３月刊行）　参考資料

これらの報告書に記載された土坑５で全体の遺構配置図・個別遺構実測図・出土遺物実測図の３つが揃っている資料に限定すると合計で150基を選出したが，文章のみや上記の３つのどれかが欠けているものは選出していないので実際に原の辻遺跡で検出された土坑数は200基を越えるものと考えられる。

特徴のある遺構について

【土坑】

１号土坑（遺構：第47図　遺物：第54図）

１号土坑は丘陵先端部の北西にあたる低地部分から検出された。土坑の規模は長軸3.40m，短軸3.00m，深さ0.35mを測り，平面形状は略円形プランを呈す。床面は若干中央部分が窪んでいるがほぼ平坦である。また一番窪んでいる部分に径0.2mのピットが掘られている。側壁が直に近い状態であることから貯蔵穴使用後廃棄土坑として使われた可能性が高い。埋土内には土器が散乱し，北西側に集中して無文土器が出土した。その他の遺物は甕を中心に弥生時代中期前葉のものである。

２号土坑（遺構：第47図）

２号土坑も１号土坑と同様の位置で検出された。土坑の規模は長軸3.40m，短軸3.10m，深さ0.30mを測り，平面形状は略円形プランを呈す。床面は南西側が一段低くなっている。土層断面はレンズ状に堆積している。遺物は東側にやや集中してみられ，無文土器も東側のかたまりの中から出土した。その他の遺物は甕を中心に弥生時代中期前葉のものである。

３号土坑（遺構：第48図　遺物：第54図）

３号土坑も１号土坑と同様の位置で検出された。土坑の規模は長軸4.20m，短軸3.60m，深さ0.30mを測り，平面形状は不整形プランを呈す。床面は若干段々状になっているが段差はほとんどなく，西側を中心に炭化層が広がっていた。遺物はまばらであるが西側から無文土器や三翼鏃が出土した。その他の遺物は甕を中心に弥生時代中期初頭～前葉のものである。

４号土坑（遺構：第48図）

４号土坑も１号土坑と同様の位置で検出された。土坑の規模は長軸2.30m，短軸1.15m，深さ0.50mを測り，平面形状は隅丸長方形プランを呈す。床面は平坦で東側に径0.40mのピットが掘られている。土層断面はレンズ状に堆積している。その他の遺物は甕を中心に弥生時代中期末のものである。

5号土坑（遺構：第49図）

5号土坑も1号土坑と同様の位置で検出された。土坑の東側が削平により消失しているため全体の規模は不明であるが残存部で短軸1.8m，深さ0.1mを測り，平面形状は楕円形プランを呈す。遺構は二段掘りされており東側が落ち込んでいる。遺物は中心部に集中し，石製品の素材や未製品及びチップが多く出土したことから石製品工房関連遺構の可能性が高い。遺物は弥生時代中期前葉のものである。

6号土坑（遺構：第49図）

6号土坑も1号土坑と同様の位置で検出された。土坑の規模は長軸4.10m，短軸1.30m，深さ0.50mを測り，平面形状は長楕円形プランを呈す。床面は東側から西側に段々状に下がっている。遺物も丹塗りの袋状口縁壺をはじめ,多くの丹塗り土器を含んでいる。遺物は弥生時代中期後葉のものである。

7号土坑（遺構：第49図）

7号土坑は丘陵部分の高台の東側で検出された。土坑の規模は長軸1.10m，短軸1.05m，深さ上段0.37m，下段0.66mを測り，平面形状は円形プランを呈す。側壁は直に立ち上がり，床面は両段とも平坦である。遺物は弥生時代後期前葉の甕が出土している。

【焼土坑】

1号焼土坑（遺構：第50図）

1号焼土坑は丘陵部分の先端部の尾根状で検出された。焼土坑の規模は長軸2.70m，短軸1.75m，深さ0.50mを測り，平面形状は楕円形プランを呈す。土坑は二段掘りになっており，南側半分を深く掘り下げている。掘り下げてある部分は長軸1.75m，短軸1.30m，深さ0.23mを測る。土層はレンズ状に堆積しており床面にはカーボンと焼土が張り付いた状態であった。遺物は弥生時代中期前葉～中葉のものである。この遺構の性格として金属器の生産遺構の可能性が考えられるが，調査において，鉄滓や鋳造剥片などの生産時に生じる副産物や砥石などの生産関連遺物が出土していないため，明確な用途については不明である。

2号焼土坑（遺構：第50図　遺物：第54図）

2号焼土坑は丘陵部分の高台付近の尾根状で検出された。焼土坑の規模は長軸3.25m，短軸1.47m，深さ0.48mを測り，平面形状は楕円形プランを呈す。断面形状は意図的に側壁をオーバーハングしている。南西側を中心に側壁から床面にかけて熱を受けて赤く変色した痕が確認された。遺物は弥生時代中期後葉～末のものである。また遺物の中には，玉砥石が含まれており，玉砥石として使用した後，何らかの理由で熱を受けて黒く変色している。さらにその後，砥石として再々利用してあるといった火を使う何かに使われたことを窺わせるものである。またこの遺構のすぐ南側の包含層からは鋳型の破片が出土していることや鉄器や青銅器がこの場所付近から多く出土していることについても今後検討していかなければならない。

3号焼土坑（遺構：第50図）

3号焼土坑は丘陵部分の先端部の尾根状で検出された。焼土坑の規模は長軸5.50m，短軸2.25m，深さ0.65mを測り，平面形状は隅丸長方形プランを呈す。床面はほぼ平坦で，断面形状は逆台形状である。土坑の中位と下位にカーボンが面的に堆積しているのが確認された。遺物は弥生時代中期後葉～後期初頭のもので，出土したものの中には無文土器も含む。カーボン層は薄いものの床面から側壁

まで幅広く確認されていることから，この遺構で火を使う何らかの作業もしくは儀式が行われていた可能性が高い。

【貯蔵穴】

1号貯蔵穴（遺構：第51図　遺物：第54図）

1号貯蔵穴は丘陵部分の先端部の尾根状で検出された。貯蔵穴の規模は検出面で長軸0.70m，短軸0.60m，深さ1.26m，床面で直径1.20mを測る。形状は断面フラスコ状を呈す。側壁は床面から斜めに立ち上がり，入り口部分が若干広がる。床面からはこの貯蔵穴に関連するピット等は検出されなかった。遺物は弥生時代前期末～中期初頭のものである。

2号貯蔵穴（遺構：第51図）

2号貯蔵穴は丘陵部分の高台付近の尾根状で検出された。貯蔵穴の規模は長軸1.60m，短軸1.25m，深さ1.07mを測り，平面形状は楕円形プランを呈す。側壁は直に立ち上がり，土層はレンズ状に堆積していた。遺物は弥生時代中期後葉のものである。

3号貯蔵穴（遺構：第51図　遺物：第54図）

3号貯蔵穴は丘陵部分の高台付近の尾根状で検出された。貯蔵穴の規模は長軸2.20m，短軸2.12m，深さ0.71mを測り，平面形状は円形プランを呈す。側壁は直に立ち上がり，土層はレンズ状に堆積していた。遺物は弥生時代中期後葉のものである。

【祭祀土坑】

1号祭祀土坑（遺構：第52図）

1号祭祀土坑は丘陵部分の先端部の尾根状で検出された。祭祀土坑の規模は検出面で長軸4.50m，短軸1.50m，深さ0.48mを測り，平面形状は隅丸方形プランを呈す。遺物は全体に散らばっている状態で出土し，主に弥生時代中期中葉～後葉のものである。

2号祭祀土坑（遺構：第52図　遺物：第55図）

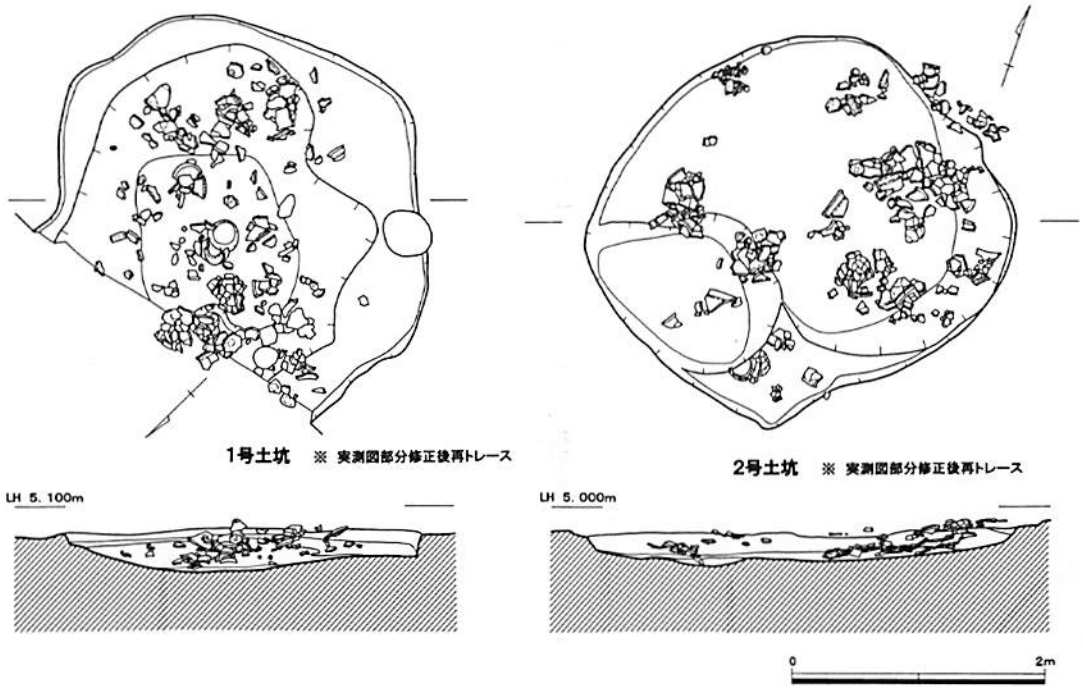
2号祭祀土坑は丘陵部分の先端部の尾根状で検出された。祭祀土坑の規模は長軸2.00m，短軸1.50m，深さ0.55mを測り，平面形状は楕円形プランを呈す。段々に掘られており西側が深くなっている。土層はレンズ状に堆積しており，カーボン層と黒褐色土が交互になっている。遺物は丹塗り土器を中心に大甕の破片など弥生時代中期後葉のものである。

【象徴的遺構】

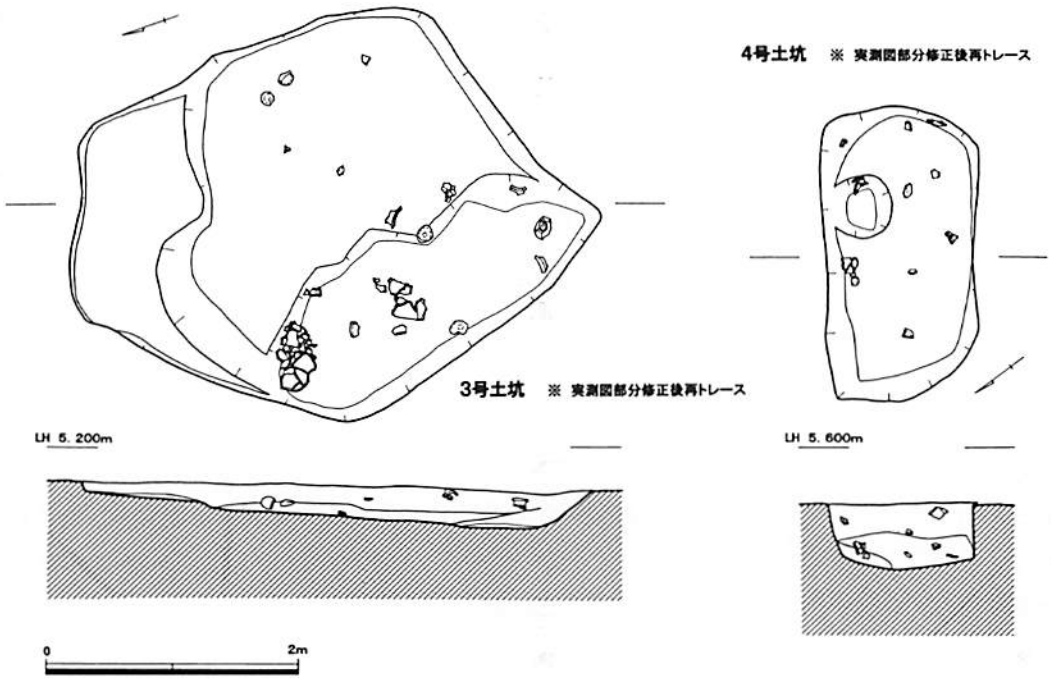
1号独立柱遺構（遺構：第53図）

1号独立柱遺構は丘陵部分の高台付近の尾根状で検出された。遺構の規模は長軸0.96m，短軸0.92m，深さ0.50mを測り，平面形状は隅丸方形プランを呈す。遺構は地山の岩盤まで掘り込まれ，直径0.20mの支柱を立てるのに約1m×1mの穴を掘っているのが特徴である。土層も床面から丁寧に数過程に分け土を入れていることからもその重要性が窺える。検出した遺構面も最低でも0.50m以上削平されていると考えられることから，支柱径は小さいもののある程度の高さがあり，それなりの強度が求められた結果であろうか。遺物は数点しか出土していないが弥生時代中期中葉のもので，廃絶時期もほぼ同時期であると考えられる。

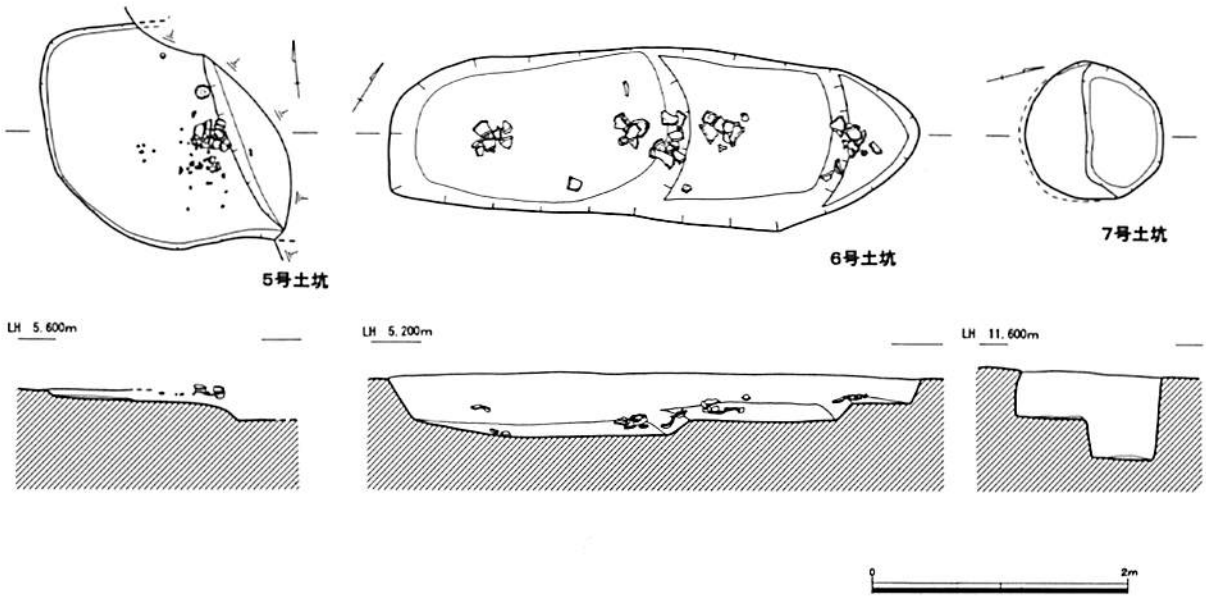
※丘陵先端部の北西にあたる低地部分から検出された同様の遺構が存在するが西側環濠の中で水辺祭祀としてとりあげているためここでは割愛することとした。



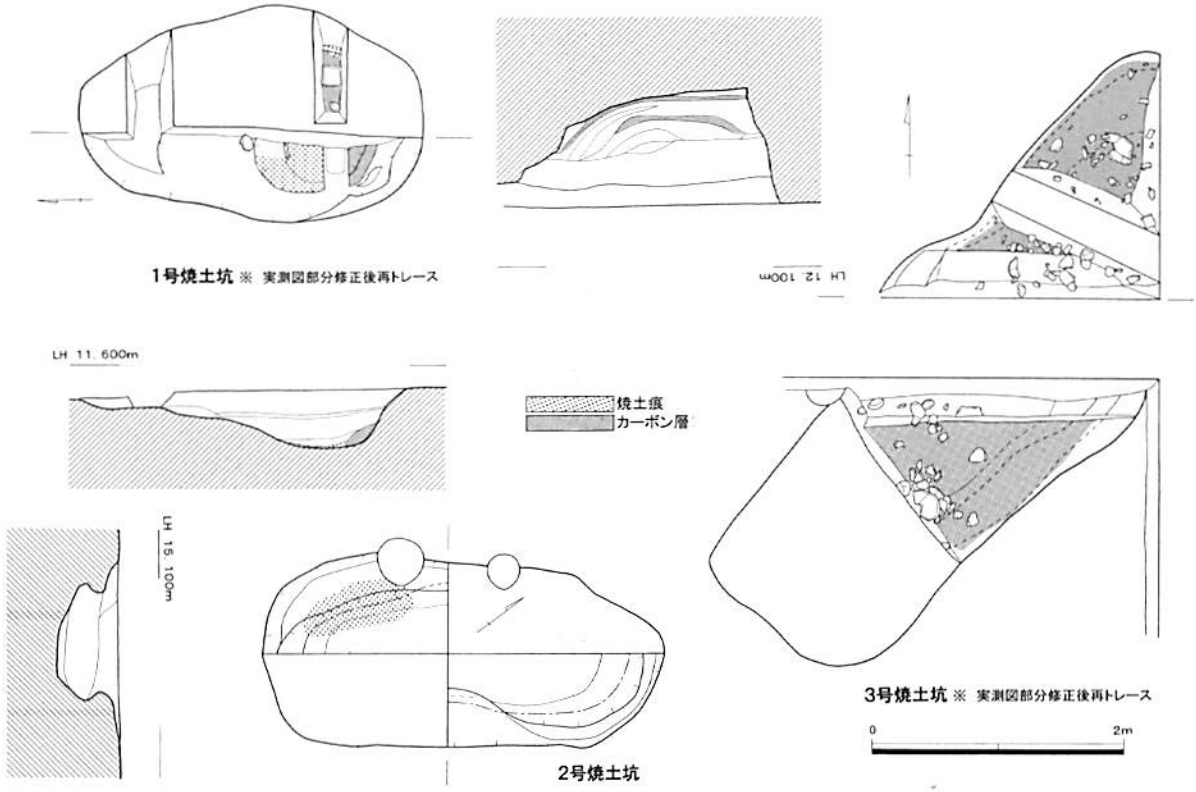
第47図　1号・2号土坑実測図（1/60）



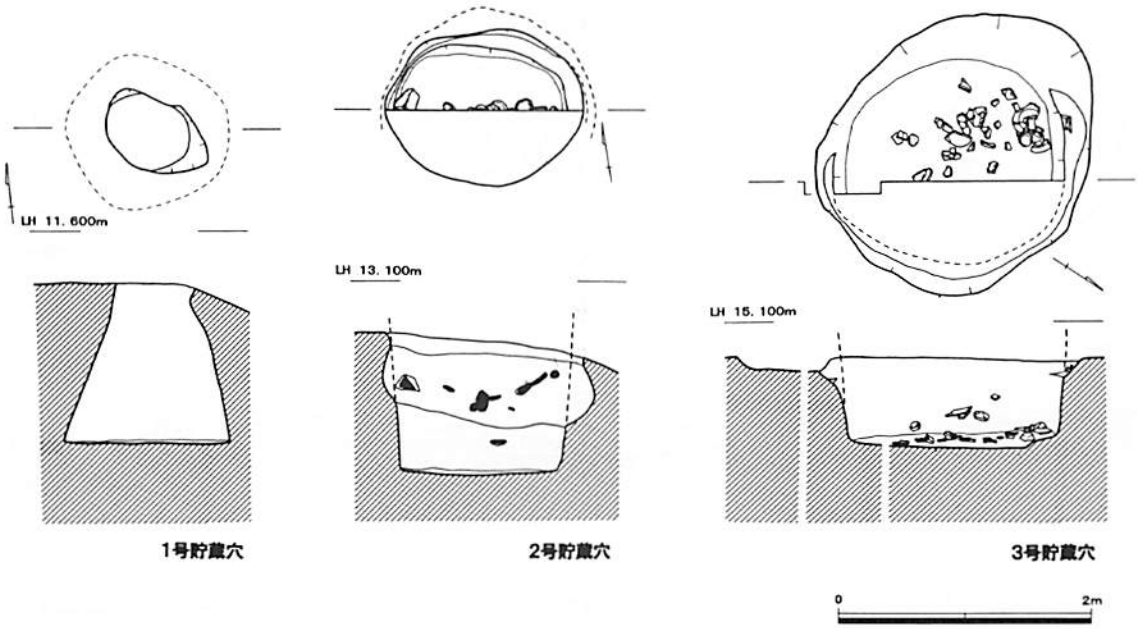
第48図　3号・4号土坑実測図（1/60）



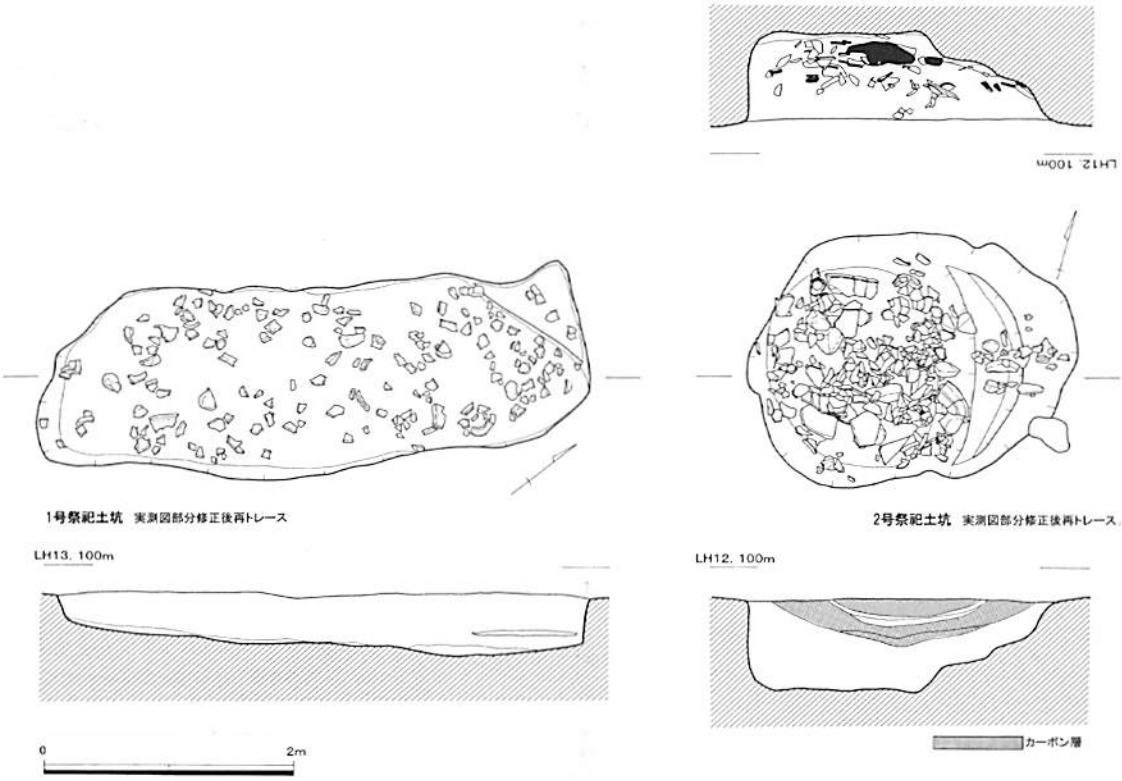
第49図　5号・6号土坑実測図（1/60）



第50図　1号・2号・3号焼土坑実測図（1/60）



第51図　1号～3号貯蔵穴実測図



第52図　1号・2号祭祀土坑実測図

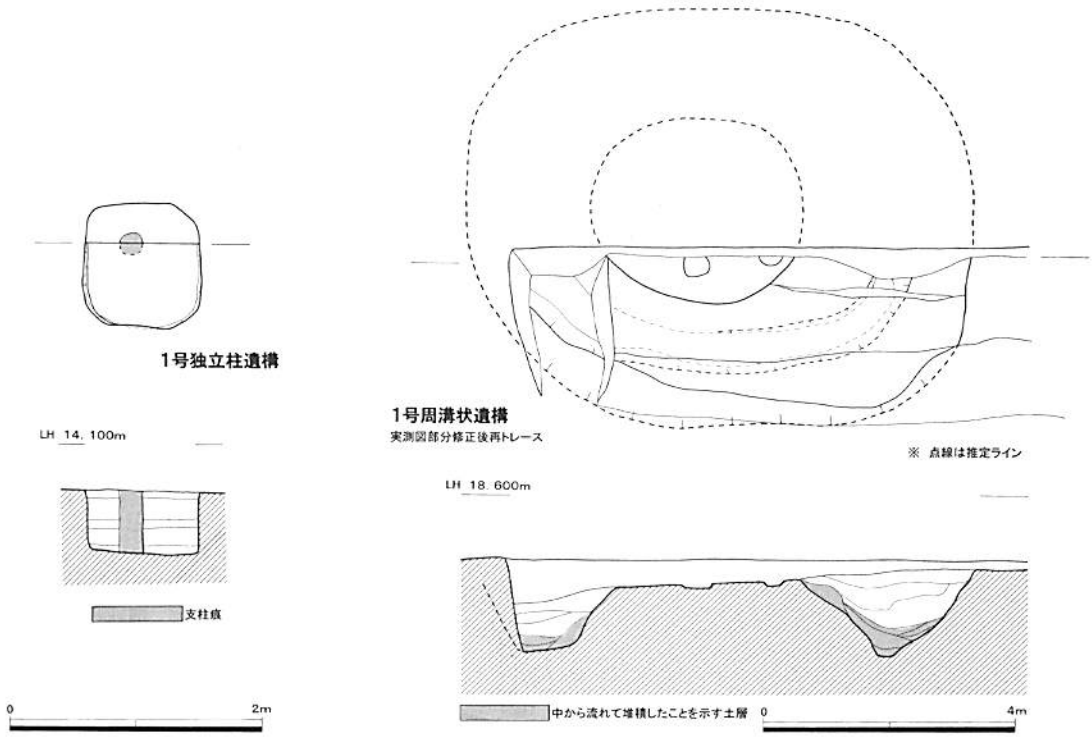
１号周溝状遺構（遺構：第53図　遺物：第55図）

１号周溝状遺構は丘陵部の高台南側で検出された。平成15年度の調査で周溝の２分の１弱が検出されている。周溝内は最大直径約3.00mの円形状と考えられることから，構築物が存在した可能性は低い。断面形状はＶ字状になっており，土層をみると床面付近に堆積した土が周溝内から流出し堆積したことを示している。遺物は弥生時代中期後葉～後期後葉のものである。周溝状遺構は弥生時代中期以降に北部九州を中心に見られる遺構で円形や方形の浅い溝を巡らすもので，規模も直径又は一辺の長さが５ｍ前後のものが多いようである。今回検出された遺構の規模はほぼ一致するものの，深さが他に例のないほどの深さであることからその性格については今後さらに検討しなければならない。ただし検出された場所が丘陵の一番高い高台部分で主祭殿と脇殿とされる建物の側にあり，周溝から出土した遺物の時期とほぼ同じであることにも注目しなければならない。

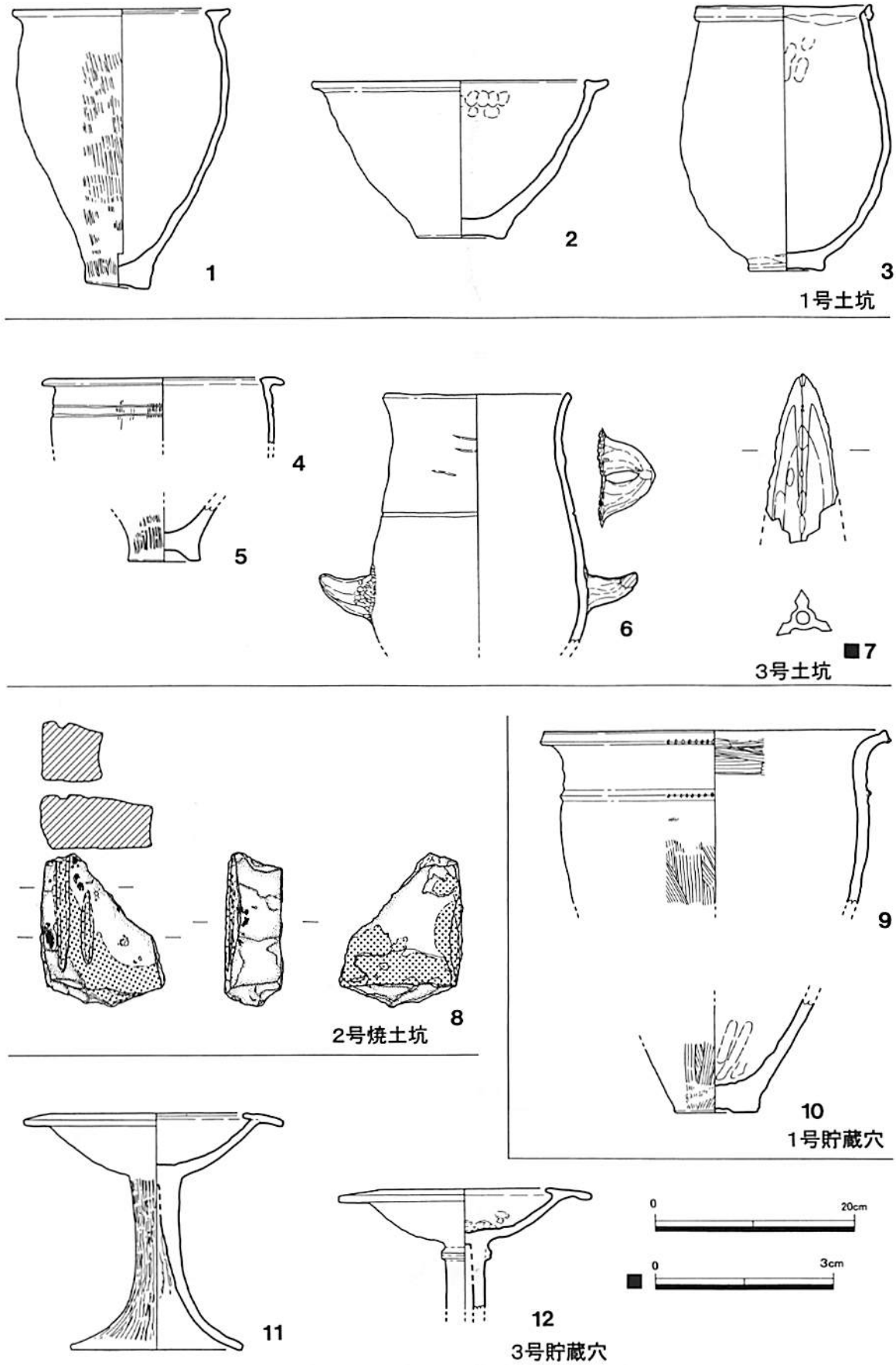
ま と め

遺構の検出状況では検出される位置に偏りがあることが分かった。発掘調査箇所の偏りは否定できないものの丘陵部から54基・低地部から96基検出されており，丘陵舌部の尾根状の場所（高元地区）及び丘陵高台中心部（原地区）・丘陵舌部の北西側低地（不條地区）及び丘陵舌部の北側低地（芦辺高原地区）からまとまって検出されたが，高台南西側の低地部（八反地区）や東側低地部（石田高原地区）からは土坑がほとんど検出されていない。これは住居跡の分布とほぼ一致し，居住区のそばに土坑が掘られていることから生活に密接に関係していることを示している。

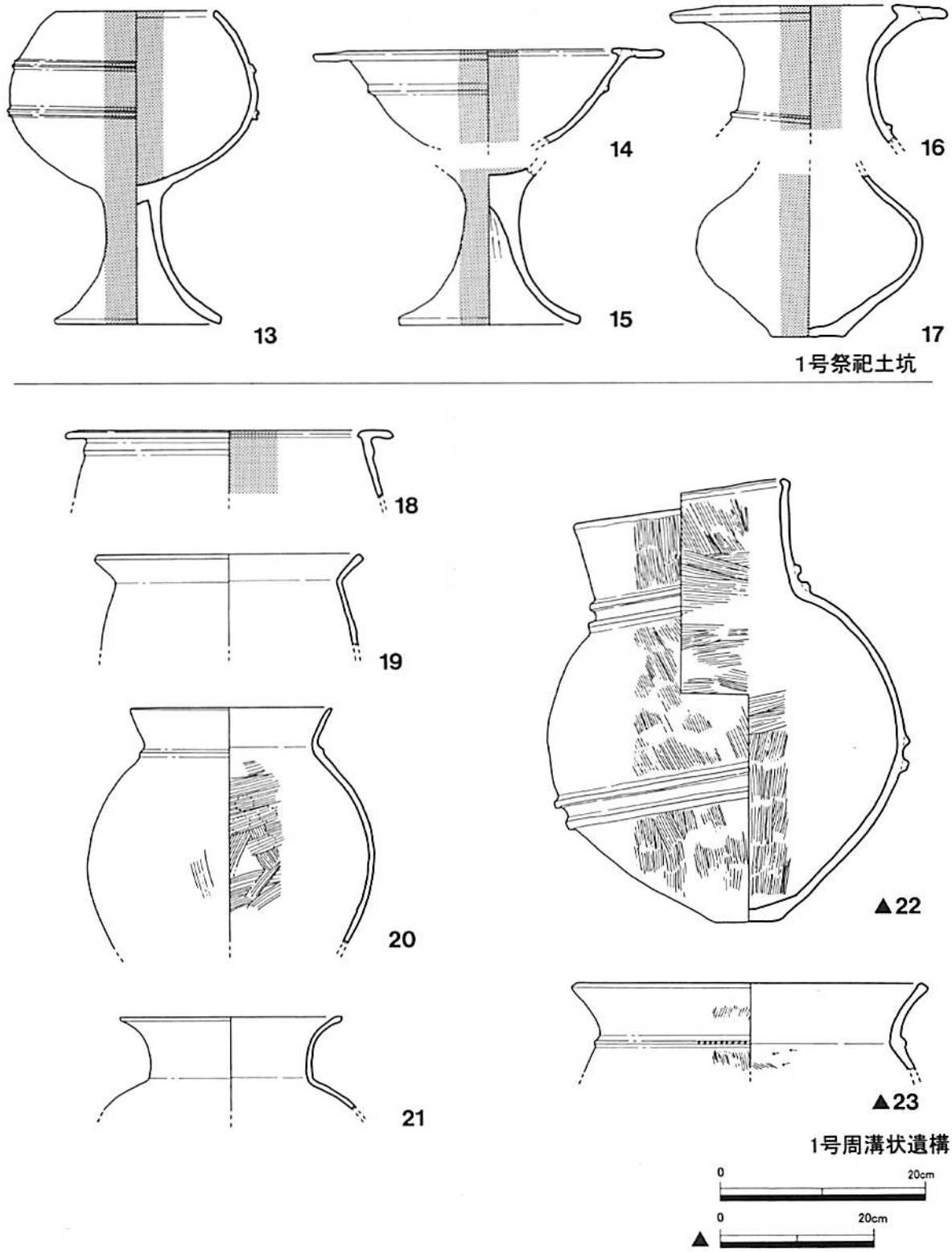
弥生時代中期前葉は不條地区を中心に低地部分で多く検出されている。また高元地区からも数基検出されている。弥生時代中期中葉は高元地区を中心に原地区などの丘陵部分で多く検出される傾向が



第53図　１号独立柱遺構（１/60）・１号周溝状遺構実測図（１/120）



第54図　1・3号土坑，2号焼土坑，1号貯蔵穴，3号貯蔵穴出土遺物実測図（1/60　■は1/1）



第55図　2号祭祀土坑・1号周溝状遺構出土遺物実測図（1／6　▲は1／8）

見られる。引き続き低地部分の不條地区にも土坑が造られている。弥生時代中期後葉には前時期と同様の場所に造られているが，新たに丘陵舌部の北側低地部分の芦辺高原地区で土坑群が検出されている。弥生時代後期後葉には土坑の造られる場所が丘陵舌部から高台中心部に移っている。この時期の土坑は高台中心部の原地区のみとなる。今後の課題として報告書ではあまり報告されていない墓域の土坑についても検討していかなければならない。　　（松見）

表９　本報告書で使用した遺構の一覧表

挿図番号	本報告書中の遺構名	掲載報告書	報告年	掲載報告書遺構名
第１図	１号土坑	原の辻遺跡調査事務所報告書第19集	2000	６号土壙
	２号土坑	原の辻遺跡調査事務所報告書第19集	2000	１号土壙
第２図	３号土坑	原の辻遺跡調査事務所報告書第16集	1999	Ｅ区16土壙
	４号土坑	原の辻遺跡調査事務所報告書第16集	1999	Ｄ区３号土壙
第３図	５号土坑	原の辻遺跡調査事務所報告書第16集	1999	Ｂ区６号土壙
	６号土坑	原の辻遺跡調査事務所報告書第16集	1999	Ｅ区11号土壙
	７号土坑	芦辺町文化財調査報告書第13号	2002	７号土壙
第４図	１号焼土坑	原の辻遺跡調査事務所報告書第26集	2003	ＳＫ２
	２号焼土坑	芦辺町文化財調査報告書第17集	2004	ＳＫ－01
	３号焼土坑	原の辻遺跡調査事務所報告書第28集	2004	ＳＫ３
第５図	１号貯蔵穴	芦辺町文化財調査報告書第９集	1995	２号貯蔵穴
	２号貯蔵穴	壱岐市文化財調査報告書第１集	2005	ＳＫ－01
	３号貯蔵穴	芦辺町文化財調査報告書第17集	2004	ＳＫ－02
第６図	１号祭祀土坑	芦辺町文化財調査報告書第９集	1995	７号土壙
	２号祭祀土坑	原の辻遺跡調査事務所報告書第26集	2003	ＳＫ１
第７図	１号独立柱遺構	壱岐市文化財調査報告書第１集	2005	ＳＺ－01
	１号周溝状遺構	原の辻遺跡調査事務所報告書第28集	2004	ＳＤ３・ＳＤ４

表10　本報告書で使用した遺物の一覧表

挿図番号	遺物番号	掲載報告書	報告年	報告書掲載遺構名	遺物名
第８図	1	原の辻遺跡調査事務所報告書第19集	2000	６号土壙	甕
	2	原の辻遺跡調査事務所報告書第19集	2000	６号土壙	甕
	3	原の辻遺跡調査事務所報告書第19集	2000	６号土壙	無文土器
	4	原の辻遺跡調査事務所報告書第16集	1999	Ｅ区16土壙	甕口縁部
	5	原の辻遺跡調査事務所報告書第16集	1999	Ｅ区16土壙	甕底部
	6	原の辻遺跡調査事務所報告書第16集	1999	Ｅ区16土壙	無文土器
	7	原の辻遺跡調査事務所報告書第16集	1999	Ｅ区16土壙	三翼鏃
	8	芦辺町文化財調査報告書第17集	2004	ＳＫ－01	玉砥石
	9	芦辺町文化財調査報告書第９集	1995	２号貯蔵穴	甕口縁部
	10	芦辺町文化財調査報告書第９集	1995	２号貯蔵穴	甕底部
	11	芦辺町文化財調査報告書第17集	2004	ＳＫ－02	高坏
	12	芦辺町文化財調査報告書第17集	2004	ＳＫ－02	高坏
第９図	13	原の辻遺跡調査事務所報告書第26集	2003	ＳＫ１	高坏
	14	原の辻遺跡調査事務所報告書第26集	2003	ＳＫ１	高坏坏部
	15	原の辻遺跡調査事務所報告書第26集	2003	ＳＫ１	高坏脚部
	16	原の辻遺跡調査事務所報告書第26集	2003	ＳＫ１	壺口縁部
	17	原の辻遺跡調査事務所報告書第26集	2003	ＳＫ１	壺
	18	原の辻遺跡調査事務所報告書第28集	2004	ＳＤ３・ＳＤ４	甕口縁部
	19	原の辻遺跡調査事務所報告書第28集	2004	ＳＤ３・ＳＤ４	甕口縁部
	20	原の辻遺跡調査事務所報告書第28集	2004	ＳＤ３・ＳＤ４	甕
	21	原の辻遺跡調査事務所報告書第28集	2004	ＳＤ３・ＳＤ４	壺口縁部
	22	原の辻遺跡調査事務所報告書第28集	2004	ＳＤ３・ＳＤ４	大壺
	23	原の辻遺跡調査事務所報告書第28集	2004	ＳＤ３・ＳＤ４	大甕

Ⅴ 遺　　物

1．土　　器（弥生土器・古式土師器，朝鮮半島系土器）

原の辻遺跡では，平成５年度から本格的に実施されている発掘調査によって百万点を超える遺物が出土している。その中で，弥生土器・土師器などの土器は，大半を占める中心的な遺物である。ここでは，原の辻遺跡が大規模な集落として存在した弥生時代前期から古墳時代前期の国内産土器と朝鮮半島系の舶載土器について報告を行う。今回は時間的な余裕がなく，紙数の関係もあり，弥生土器・古式土師器の編年案と朝鮮半島系土器の概観に限り，詳細については別途検討する機会をもちたい。

(1) 弥生土器・古式土師器の編年案（第56図～第62図）

弥生時代の土器は，前期を２期，中期を５期，後期を５期の合計12期に区分し，古墳時代前期の土器を４期に区分した編年案が，第56図～第62図である。各時期ごとに，簡略な説明を行う。詳細については別の機会に論じたい。なお，土器の縮尺は，第56図５・６・16以外は１／８である。

①弥生前期（第56図）

○弥生前期Ⅰ期（第56図１～13）弥生前期後葉

台地北東側低地の石田高原地区の大溝からの出土品を中心としている。**1～7**の壺は，球形の胴部から頸部ですぼまり，口縁部が大きく外反する形状の広口壺で，ヘラあるいは貝殻で羽状文などを施文している。**7**は，小児甕棺として使用された長胴の形状をもつ原地区の３号甕棺下カメ（７）である。甕は，如意形口縁で，胴部に沈線が施されるもの（10・11）と突帯がめぐるもの（12・13）がある。従来の板付Ⅱｂ式古段階の資料で吉留秀敏氏編年（註１）の８式相当する資料である。

○弥生前期Ⅱ期（第56図14～21）弥生前期末

台地北部の高元地区あるいは台地北西部低地の不篠地区出土品を主体とする。**14～16**の壺は，球形の胴部で前者と同様の形状をもつが，**14**は長胴を呈する。**16**は，ヘラの羽状文が施文され，肩が張った形状をもつ北東部九州系の資料であろう。**17**は，蓋付きの無頸壺である。甕は，台状の底部をもつもので，口縁が如意形と突帯をもつものがある。**21**は，胴部に沈線が３条施されるもので，北部九州東部系の資料であろう。この段階は，板付Ⅱｂ式新段階の資料で吉留秀敏氏編年の９式相当する資料である。

②弥生中期（第56図～第58図）

○弥生中期Ⅰ期（第56図22～46）中期初頭

台地北西部の不篠地区出土品を主体とする。**22～28**は，球形胴部から頸部が立ち上がり，口縁が外反する広口壺で，頸胴界に沈線や突帯が施されるものや，頸部に全面暗文が施されるものがある。**29～32**は，口縁上方を肥厚し，断面三角形の突起や段を有するもので，**31**は口縁外方に小さな刻目を施す。**33**は，無頸壺である。**34**は，頸部が逆ハの字形に拡がり，口縁内面に断面三角形の突起をもつもので，山口県伊倉遺跡出土品（註２）に類似しており，長門地域の資料であろう。甕は，口縁部が断面三角形や小さな逆Ｌ字形を呈するもので，**38～40**は刻目を施している。**41～44**は鉢で，**42・43**は口縁部が小さく逆Ｌ字形に折れるもので，**44**は丸みを帯びた断面三角形状の口縁を有する大形の鉢である。**45**は，皿状の坏部で口縁が上方に肥厚され，段がつく高坏である。**46**は，筒状の器台で，平成11年度調査研究事業の５号溝から出土した資料である。当期は城ノ越式の資料である。

○**弥生中期Ⅱ期**（第57図１～16）中期前葉古段階

台地北西部の不篠地区出土品を主体とする。１～３は，球形の胴部から口頸部が開く広口壺である。口頸部には全面暗文が施されている。４～７は，口縁上方を肥厚し，内面に段をもつ壺である。８は，蓋付きの無頸壺である。９は，甕蓋である。天井部が上げ底状に窪んでいる。10・11は，逆Ｌ字形の短めの口縁の甕である。13は，口縁が内側に傾斜し，底部が上げ底で踏ん張りをもつ形状の北部九州東部系の資料である。12は，外方がくぼむ逆Ｌ字形の口縁で，胴部に３条の沈線が施される鹿児島県入来遺跡などの薩摩地域の資料（註３）である。14は，逆Ｌ字形に折れる口縁をもつ大形の鉢である。15は，割と深めの坏部の高坏で，口縁上方が肥厚され，内面に段もつ。16は，筒状の器台である。当期は，須玖Ⅰ式古段階の資料である。

○**弥生中期Ⅲ期**（第57図17～27）中期前葉新段階（中期中葉）

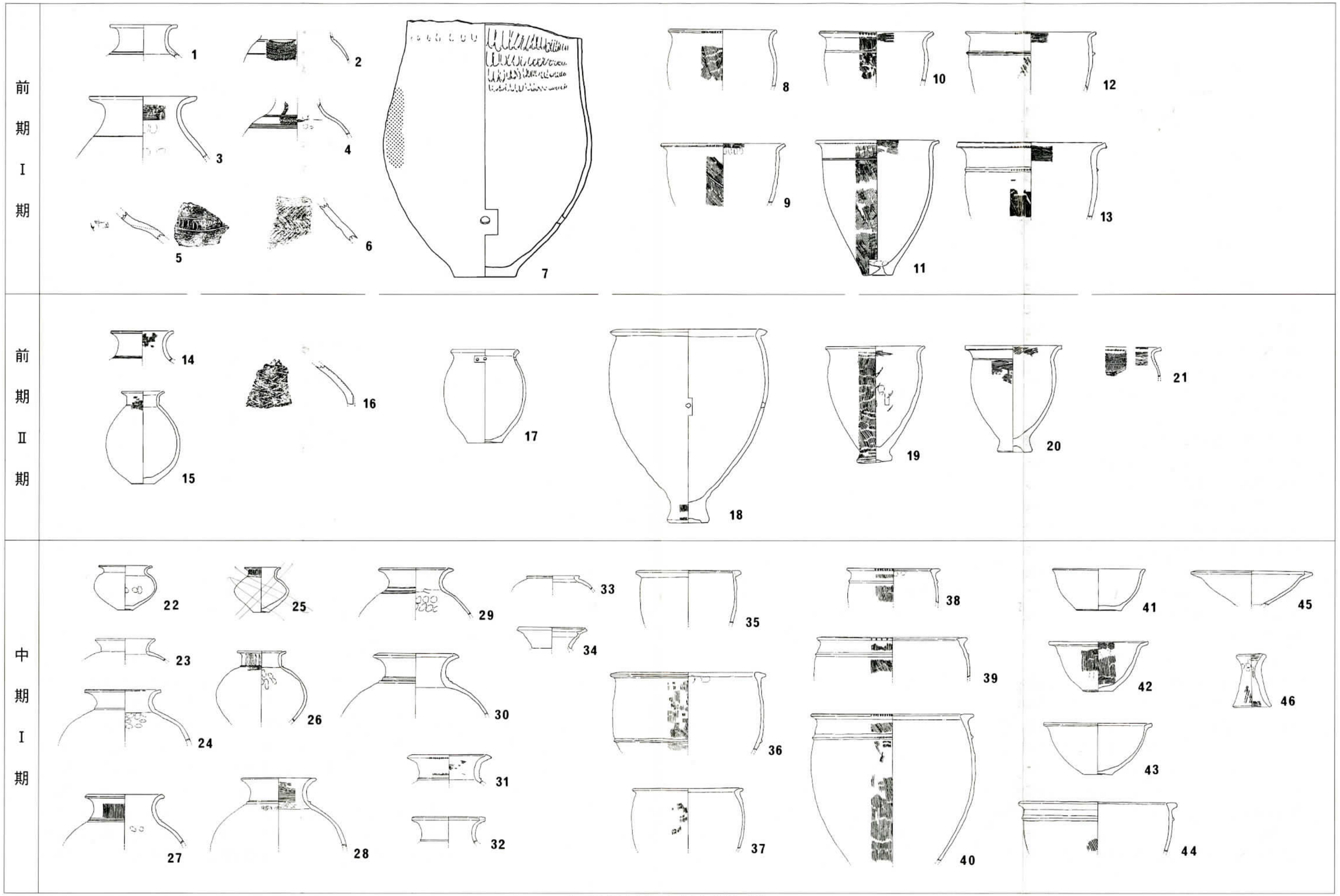
台地北西部の不篠地区出土品を主体とする。17は，球形の胴部から口頸部が開く広口壺である。口頸部に全面暗文が施される。18・19は，短めの鋤先形口縁の壺で，分割暗文が施される。20は，無頸壺の蓋である。21は，甕蓋で天井部のくぼみは少ない。22・23は，逆Ｌ字形の口縁の甕である。24は椀状の鉢で，25は逆Ｌ字形の口縁の大形鉢である。26は逆Ｌ字形口縁の高坏で，27は椀状の身に脚台が付いた小形の高坏である。当期は，須玖Ⅰ式新段階の資料である。

○**弥生中期Ⅳ期**（第57図28～52）中期後葉

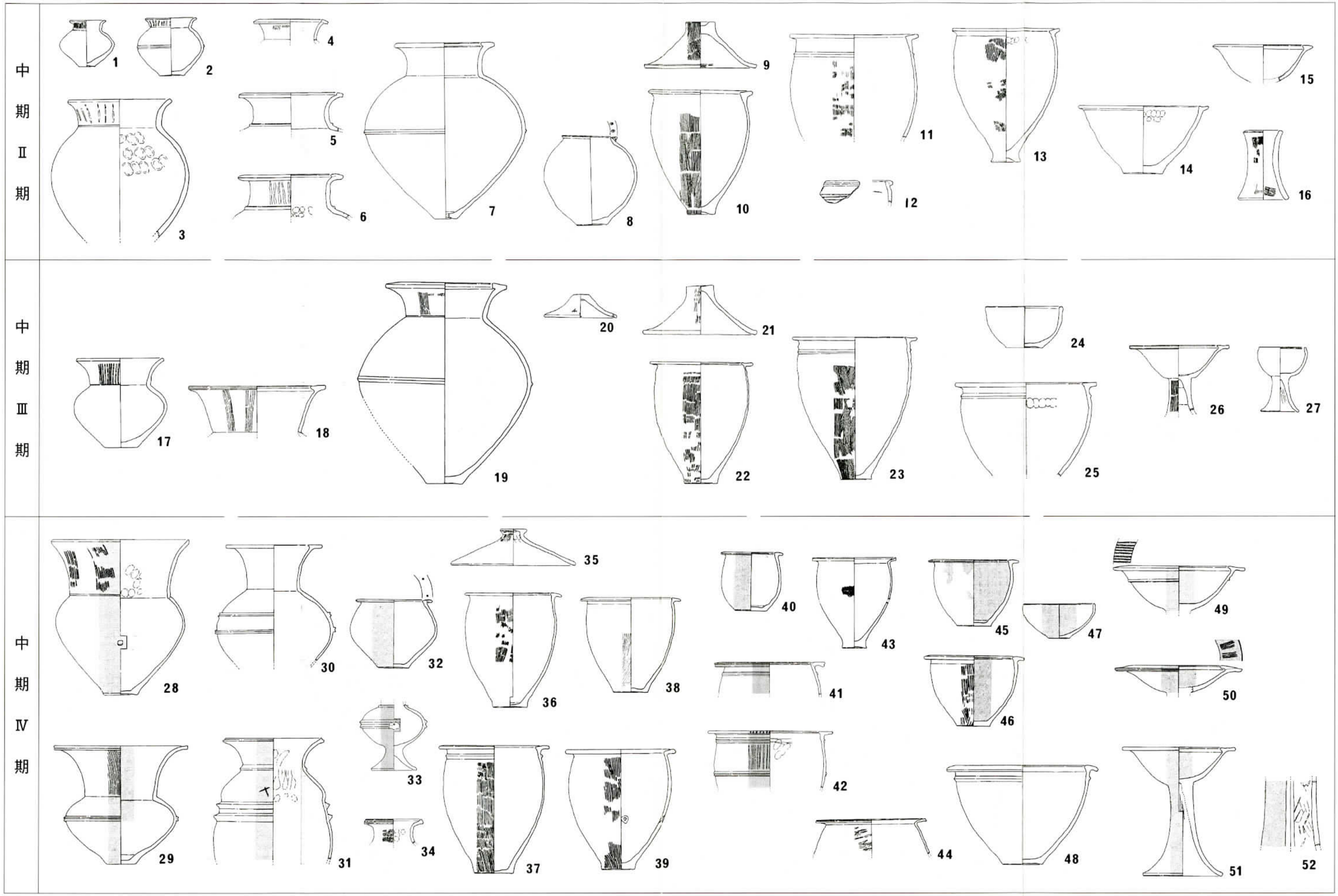
28・29は丹塗の広口壺で，29は胴部が扁球状をなし，胴部に断面Ｍ字形の突帯がめぐる。両者ともに，頸部に暗文が施される。30は，鋤先形口縁の壺で，胴部に断面Ｍ字形の突帯がめぐる。31は，丹塗の瓢形壺である。32は，蓋付の丹塗無形壺である。33は，台付の注口壺である。34は，口縁部が朝顔形に開く壺で，口縁外方に凹線文が施されているもので，瀬戸内や山陰の中国地方系の土器である。35は，天井部が摘み状をなす甕蓋である。36～38は，鋤先形口縁の甕である。39は，屈曲口縁の甕である。43は跳ね上げ口縁の甕で，北部九州東部系の資料である。44は口縁が逆Ｌ字形に折れ曲がり，端部が摘み気味におさめている。胴部は，横位にミガキが施され，瀬戸内地方系の土器と思われる。40～42は丹塗甕である。42は，胴部上部に全面暗文が施される。45～47は丹塗鉢で，47は椀形，他は鋤先形口縁の鉢である。48は，鋤先形口縁の大形鉢である。49～51は，丹塗の鋤先形口縁の高坏で，49・50は口縁上方に暗文が施されている。52は，丹塗の透かしをもつ特殊器台である。当期は，須玖Ⅱ式古段階の資料である。

○**弥生中期Ⅴ期**（第58図１～37）中期末

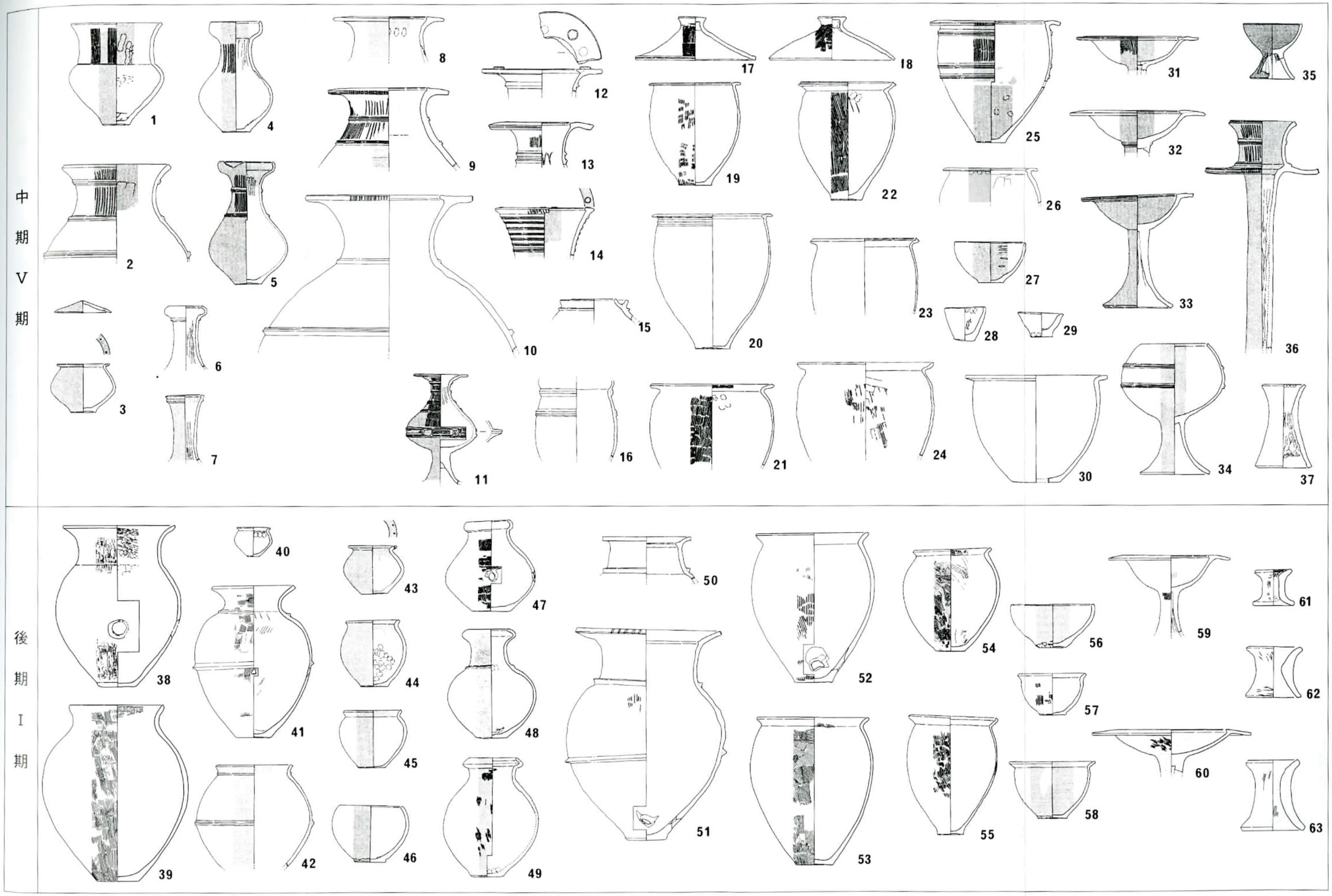
１・２は丹塗の広口壺で，２は断面Ｍ字形の突帯が３条めぐっている。口頸部に暗文が施されている。３は，丹塗の無頸壺とそのセットとなる蓋である。４・５は，糸島系の丹塗袋状口縁壺である。６は頸部が細い袋状口縁壺で，黒塗の可能性をもち，福岡平野系であろう。７は丹塗の長頸壺で，口縁下に断面三角形の突帯をもつ。北部九州東部系の資料であろう。８～10・12・13は鋤先形口縁の壺で，12・13は北部九州東部系の資料であろう。14は多条の突帯をめぐらす壺で，北部九州東部系の資料であろう。11は，二つの注口をもつ丹塗の台付壺である。15は，丹塗の樽型の壺である。16は，丹塗の瓢形壺である。17・18は甕蓋である。天井部の摘み部分が大きくなっている。19・20は鋤先形口縁の甕である。ずんぐりした形状をもち，胴部の突帯もシャープさに欠け，鋤先口縁が残るのも，糸島系の特徴をもつと考える。21は，屈曲口縁の福岡平野系の甕であろう。22・23は，跳ね上げ口縁の



第56図　弥生土器・古式土師器編年案①



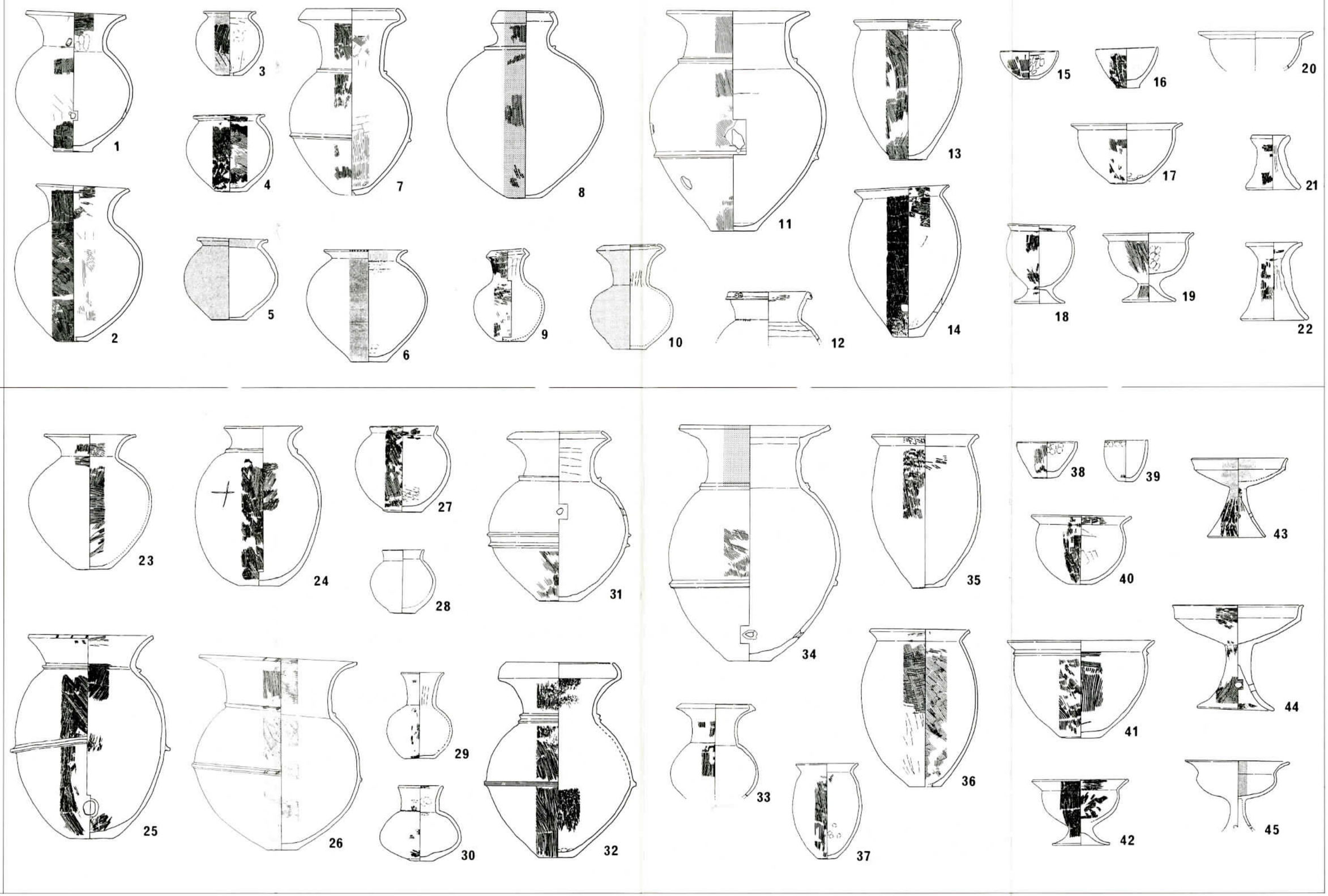
第57図　弥生土器・古式土師器編年案②



第58図　弥生土器・古式土師器編年案③

後期Ⅱ期

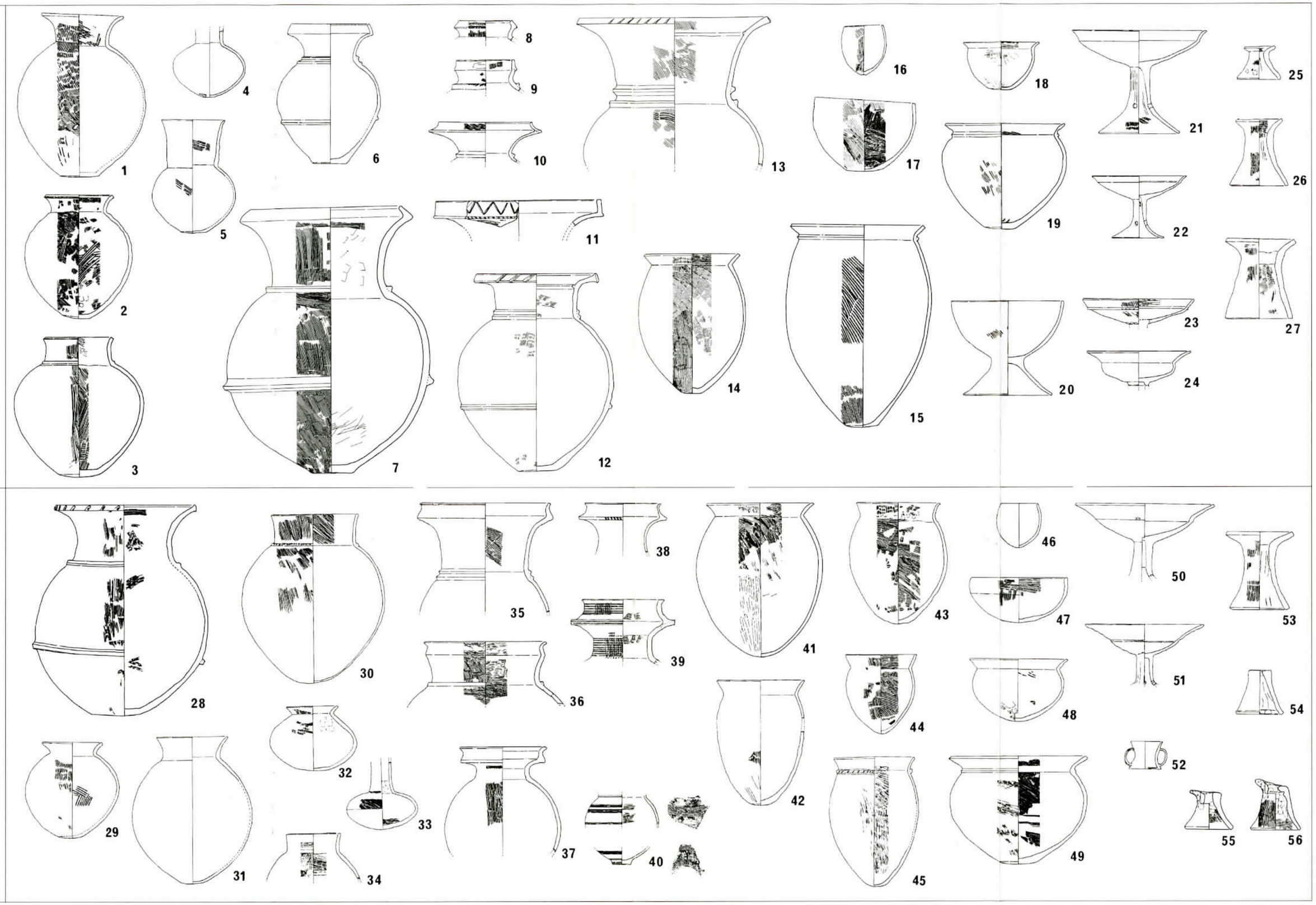
後期Ⅲ期



第59図　弥生土器・古式土師器編年案④

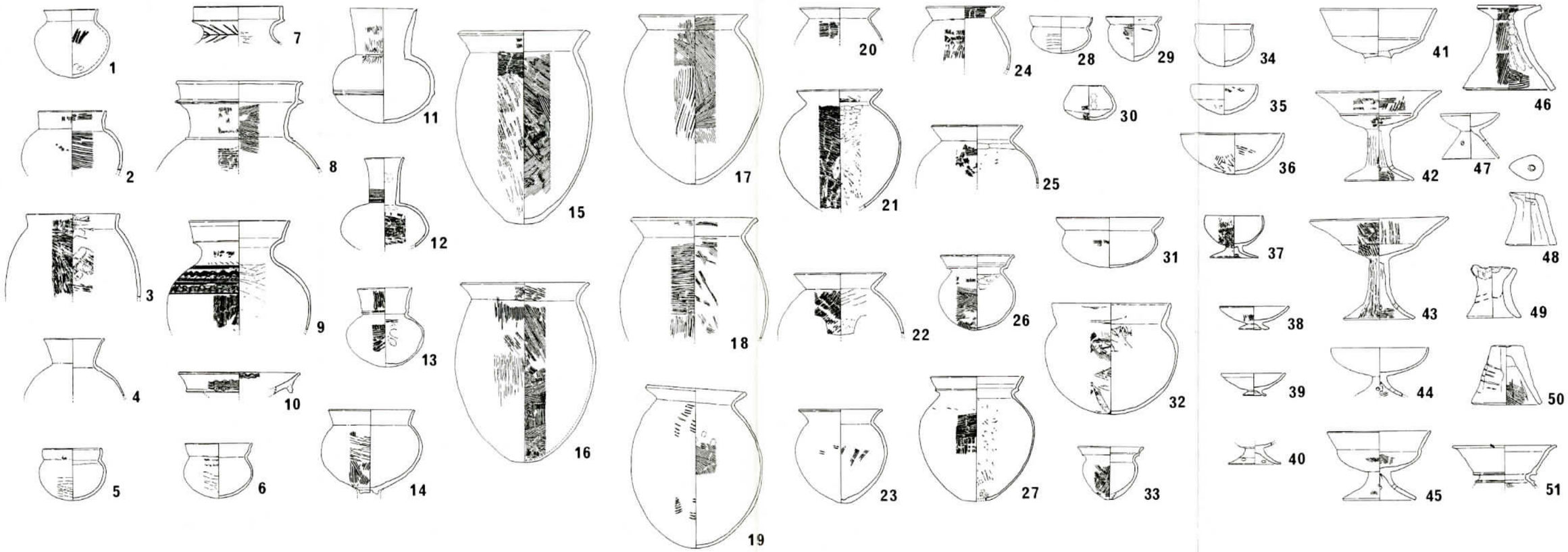
後期Ⅳ期

後期Ⅴ期

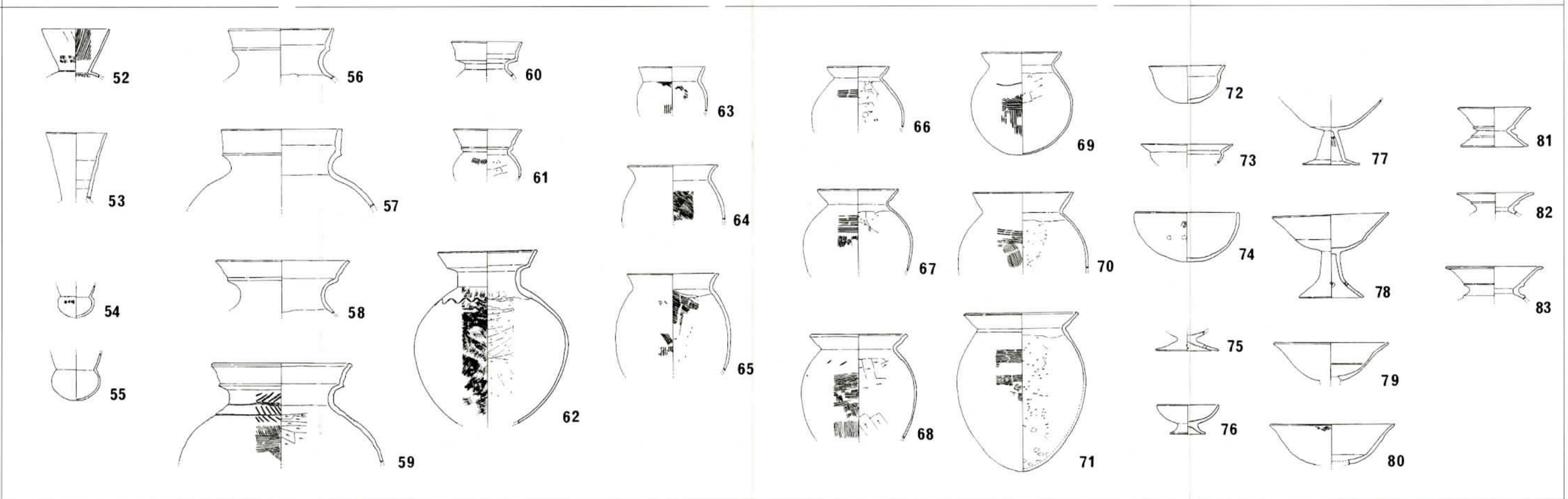


第60図　弥生土器・古式土師器編年案⑤

古墳Ⅰ期

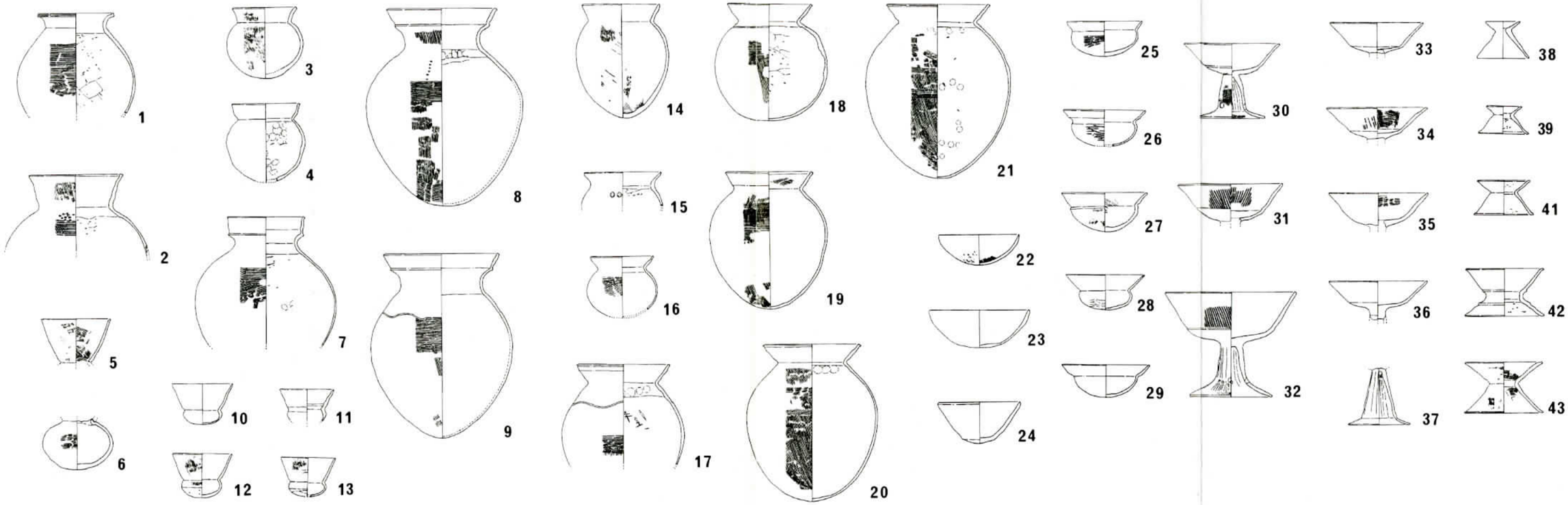


古墳Ⅱ期

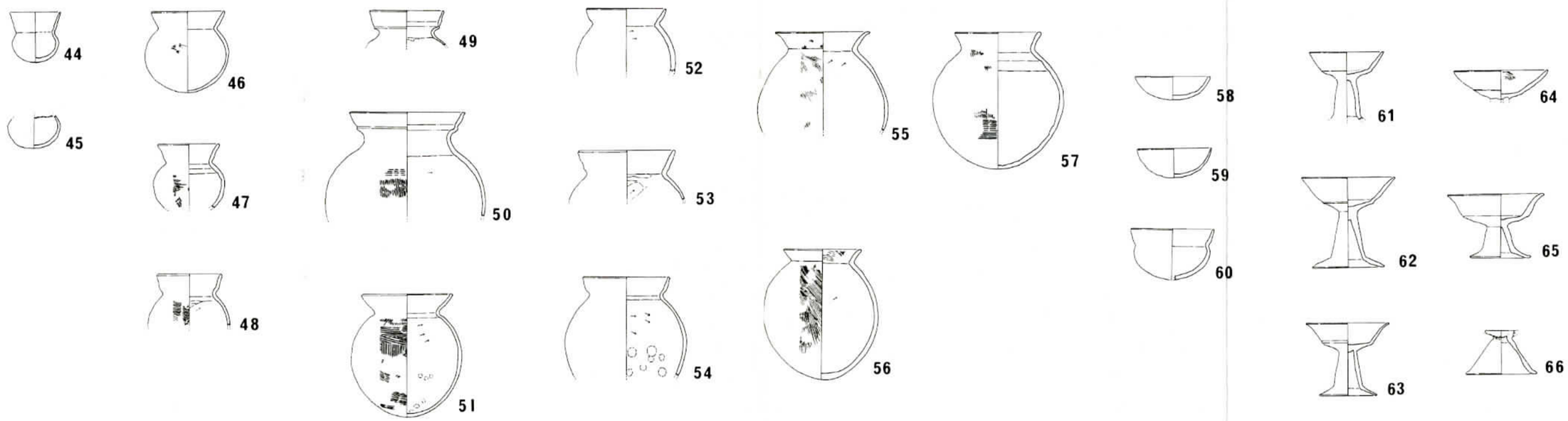


第61図　弥生土器・古式土師器編年案⑥

古墳Ⅲ期



古墳Ⅳ期



第62図　弥生土器・古式土師器編年案⑦

北部九州東部系の甕で，24もその系統の甕であろうか。25・26は，鋤先形口縁の丹塗甕である。27～29は椀形の鉢で，30は屈曲口縁の大形鉢である。31～35は，丹塗の高坏である。31～33は，鋤先形口縁の高坏で，34は壺胴部，35は椀形に脚台が付いた資料である。36は，大形の特殊器台で長方形の透かしは入らず，大きな鍔をもつ特徴がある。37は，筒状の器台である。口縁と裾部がくびれ部から開き気味になっている。当期は，須玖Ⅱ式新段階の資料である。

③弥生後期（第58図～第60図）後期初頭

○弥生後期Ⅰ期（第58図38～63）

38～42は，広口壺である。頸胴界があまり明瞭でなく，突帯は断面三角形になる。43は，丹塗の蓋付き無頸壺である。44・45は，小さく外反する口縁の丹塗広口壺，46は球形の胴部だけの丹塗壺である。47～49は，袋状口縁壺である。50・51は，鋤先形口縁の壺で，鋤先形口縁が残存する糸島系の特徴をもつ。52～54は，くの字形口縁で胴上位に張りをもつ甕である。55は，跳ね上げ口縁の甕で北部九州東部系の資料である。56は丹塗の椀形鉢，57～58はくの字形口縁の鉢である。59・60は，鋤先形口縁の高坏である。61～63は，鼓形の形状をもつ器台である。当期は，高三瀦式古段階の資料である。

○弥生後期Ⅱ期（第59図１～22）後期前葉

１・２は，口頸部が朝顔形に外反する広口壺で，３～６は頸部がなく口縁が小さく外反する広口壺で，５・６は丹塗を施している。７～10は，複合口縁壺で屈曲部の稜は甘い。11は，鋤先形口縁壺である。12は，畿内Ⅴ様式系の壺でこの段階にいれたが，Ⅲ期に下がる可能性ももっている。13・14はくの字形口縁の甕で，胴部最大径の位置がやや下がっている。15・16は椀形鉢で，17はくの字形口縁の鉢である。18・19は，台付鉢である。20は，口縁が大きく外反し鋤先形口縁の名残を残す高坏である。21・22は，鼓形の器台で，裾部の方が大きく安定した形状をもつ。当期は，高三瀦式の新段階の資料である。

○弥生後期Ⅲ期（第59図24～46）後期中葉

23～26は，口縁が外反する広口壺で，球形胴と長胴がある。27・28は，直口壺である。29・30は，長頸壺である。31～33は，複合口縁壺である。34は，鋤先口縁壺である。35～37は，くの字形口縁の甕で，胴中位に最大径をもつ。38・39は椀形鉢，40・41はくの字形口縁の鉢である。42は台付鉢である。43・44は，口縁が直立気味に立ち上がる外来系高坏で，この段階に定着をみる。45は，口縁が大きく外反し鋤先形口縁の名残を残す高坏である。当期は，下大隈式古段階の資料である。

○弥生後期Ⅳ期（第60図１～27）後期後葉

１・２は広口壺で，底部が凸レンズ状底となる。３は，直口壺である。４・５は，長頸壺である。６～11は複合口縁壺である。10は，北部九州東部系の資料であろう。８・９・11は山口県の長門・防長付近の資料であろうか。12・13は，鋤先形口縁の壺である。頸部に２条の突帯をもつのは，糸島系の特徴と思われる。14・15は，くの字形口縁の甕で，凸レンズ状底である。16・17は深い身の鉢。18・19は，くの字形口縁の鉢。20は深い身の鉢に脚台が付いたものである。21～24は，高坏である。21・22は，坏下半部から屈曲して口縁が外反する高坏である。23は，皿状の坏部に断面三角形の突帯が付くものである。24は，口縁が大きく外反し鋤先形口縁の名残を残す高坏である。25～27は，口縁が受部状となり，裾部が大きく拡がるものである。25と26は，平成７年度調査研究事業での原地区Ａ区２号濠上層から入子の状態で出土した。当期は，下大隈式新段階の資料である。

○**弥生後Ⅴ期**（第60図28～56）後期末

28～32は，口縁が外反する広口壺である。30・34は，直口壺である。33は，長頸壺である。28を除くと，底部が尖り気味に丸みをもっている。35～39は，複合口縁壺である。38は北部九州東部系の資料，39は山口県宮原遺跡に類例があり，周防地域の資料である（註２）。41～45は，くの字形に外反する口縁の甕で，底部は尖り気味に丸みをもち，胴部はラグビー球状をなす。46・47は深い身の鉢，48・49はくの字形に口縁が外反する大形の鉢である。50・51は，丸みをもつ坏下半部からさらに開く口縁の高坏である。52は，肥後系のジョッキ形土器である。53は鼓状の器台で，受部が浅くなっている。54は，上方が平坦になっている支脚である。55・56は，支脚で沓形器台とも呼ばれるもので，支えるための突起をもつ。当期は，西新式古段階の資料である。

④**古墳前期**（第61・62図）

○**古墳Ⅰ期**（第61図１～51）

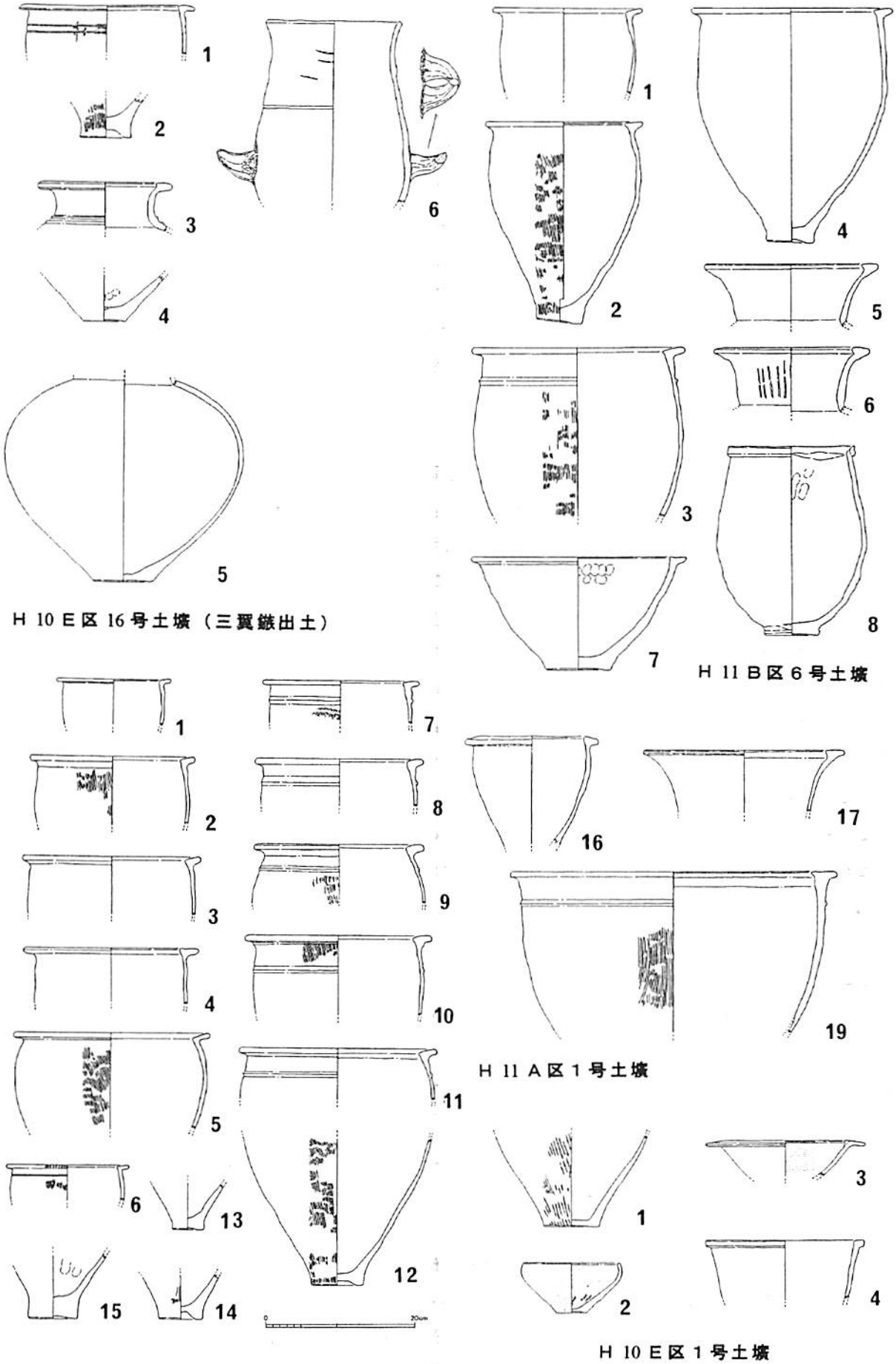
１～４は，直口壺である。５・６は，小形の丸底壺である。８は複合口縁壺で，常松幹雄氏によれば早良平野に類似例がある（註４）。７・９は山陰系の複合口縁壺である。10は，庄内式系の複合口縁壺である。11・12は長頸壺である。12は櫛目文と半裁竹管文が施され，山陰系の資料で在ろう。13は，山陰系の小形複合口縁壺である。14は，直口壺に脚台が付くもの。15～19は，在地系の甕で，18・19はタタキ目をもつ。20は，畿内伝統的Ⅴ様式系の甕である。21～23は，庄内式系甕である。24・25は，布留式傾向甕である。26・27は，山陰系の複合口縁甕である。21と27は，平成７年度発掘調査事業の原地区Ｅ区２号溝で出土している。28～32は，鉢である。28～30・34が小形丸底の鉢，35～36が椀形鉢，31・32がくの字形口縁の鉢である。33は，山陰系の小形鉢である。37は台付椀，38・39は皿形に小さな脚台が付く山陰系の台付鉢である。40～45は高坏である。41～43は，屈曲部からさらに外反する在地系高坏で，44は皿状に脚台が付く高坏で，45は屈曲部から口縁は直線的に開く，低脚の高坏である。46は鼓形の器台である。47は，庄内式系の小形器台である。48・49は，沓形器台と呼ばれる支脚である。50は，上面が平坦な支脚である。51は，山陰系器台である。当期は，古墳時代初頭の時期で，柳田氏の土師器Ⅱａ式（註５），井上裕弘氏の古墳時代１式（註６），久住猛雄氏のⅡＡ期（註７）の段階に相当する資料である。

○**古墳Ⅱ期**（第61図52～83）

52・53は，長頸壺である。54・55は小形丸底壺である。56～62は，山陰系の複合口縁壺で，59・61・62は搬入品であろう。63～65は，在地系の長胴甕である。66～71は，布留式甕であり，筑前型布留甕として定着するが，68は搬入品の可能性をもつ。72～74は鉢で，73は小形丸底鉢である。75・76は台付鉢で，76は山陰系鉢である。77は，畿内庄内式系統の高坏。78～80は，在地系の高坏。81～83は，山陰系器台である。当期は，柳田氏の土師器Ⅱｂ式，井上裕弘氏の古墳時代２～３式，久住猛雄氏のⅡＢ・ⅡＣ期の段階に相当する資料である。

○**古墳Ⅲ期**（第62図１～43）

当期の資料で主体を占めるのは，平成10年度調査研究事業の不篠地区Ｂ・Ｄ区の２号溝・３号溝と，平成８年度発掘調査事業の原地区10号住居の出土品である。１は，広口壺である。２は，直口壺である。３・４は，小形の丸底壺である。５・６は，外来系の長頸壺である。７～９は，山陰系の複合口縁壺であるが，在地に定着した形態をもっている。10～13は，布留式系の小形丸底壺である。



第63図　朝鮮半島系土器と共伴した弥生土器（1／8）

14は，長胴の在地系甕である。15～21は，布留式系甕で定着した姿をもつ。22～24は椀形鉢で，25～29は小形丸底鉢である。30・33～37は，畿内庄内式系統の高坏で，31・32は在地系の高坏である。38は庄内式系の小形器台，39・40は布留式系の小形器台，42・43は山陰系器台である。

当期は，布留式典型的の時期で，柳田氏の土師器Ⅱｃ式，久住猛雄氏のⅢＡ期の段階に相当する資料で，この段階をもって原の辻集落は消滅する。

○古墳Ⅳ期（第62図44～66）

当期の資料は，現在，原の辻遺跡の範囲に含まれているが，平成７年度に調査された当時安国寺前Ａ遺跡（閏繰地区）としていた沼状落ち込み４層の出土品である。44・45は，小形丸底壺である。46～48は，小形壺である。49・50は，山陰系の複合口縁壺である。51～54は，布留式系統の甕である。51は比較的古い様相をもち，他は新しい様相をもっている。55～57は，布留式甕から新しい土師器甕への特徴を備えた甕である。58・59は椀形鉢，60は小形丸底鉢の系統を引くものである。51～66は，畿内系高坏の系統のものであるが，66のように脚台がスカート状に拡がるタイプが出現してきている。当期は，柳田康雄氏のⅢａ式に相当する資料である。

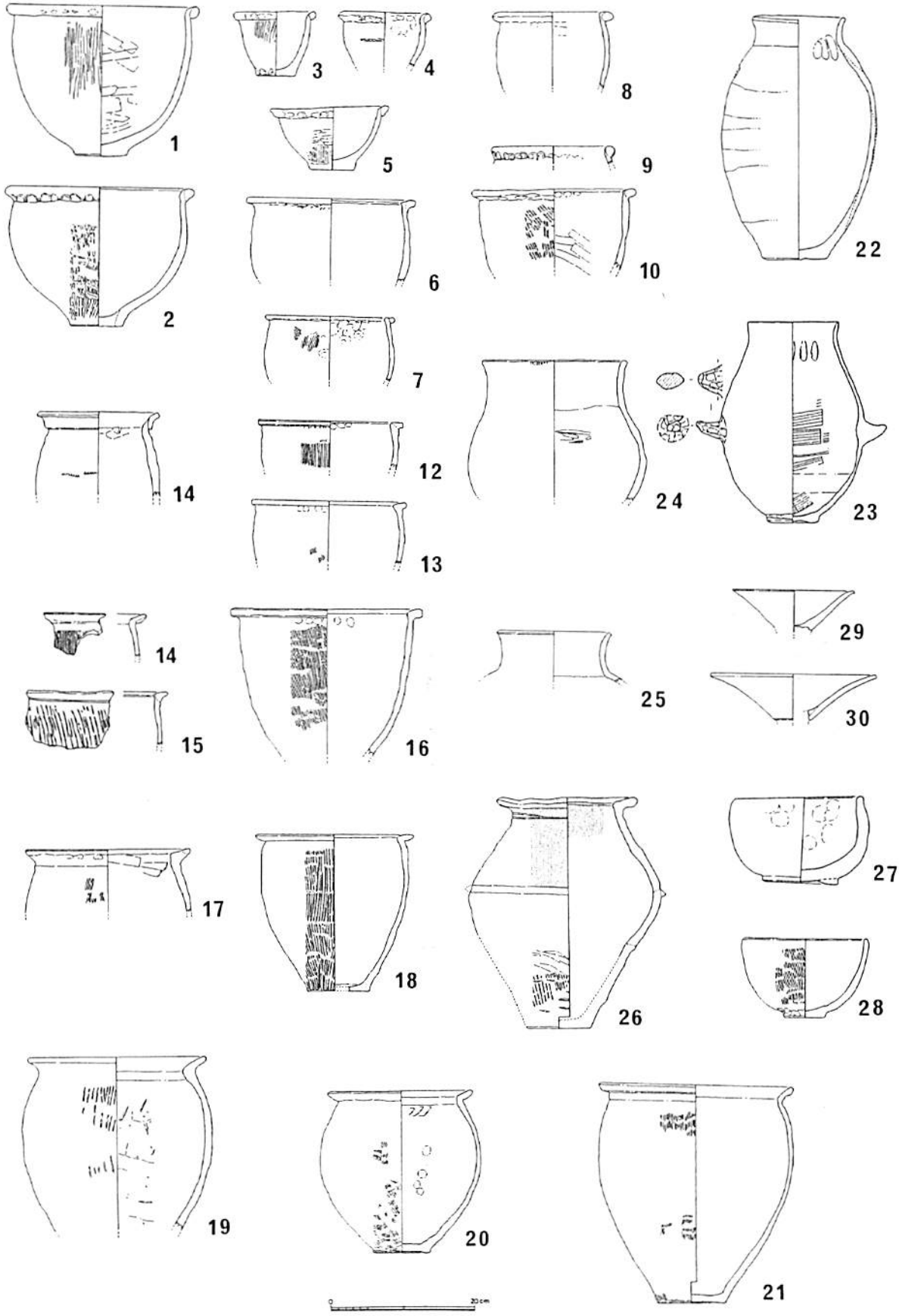
(2) 朝鮮半島系土器について（第63図～第65図）

原の辻遺跡で出土している朝鮮半島系土器には，無文土器と擬無文土器の粘土帯系土器，三韓土器（三韓系瓦質土器），陶質土器，楽浪土器（楽浪系滑石混入土器・楽浪系瓦質土器）がある。これらの朝鮮半島系土器は，現在把握している数量が597点（表11）であり，日本一の出土量であると思われるが，特徴として原の辻集落の存続期間である弥生前期後葉から古墳前期まで途切れることなく入っていることが分かっている。これまで，武末純一氏（註８），片岡宏二氏（註９），白井克也氏（註10）の研究があるが，今回は紙数の関係上概観に留め，詳細な検討は別の機会に論じたい。

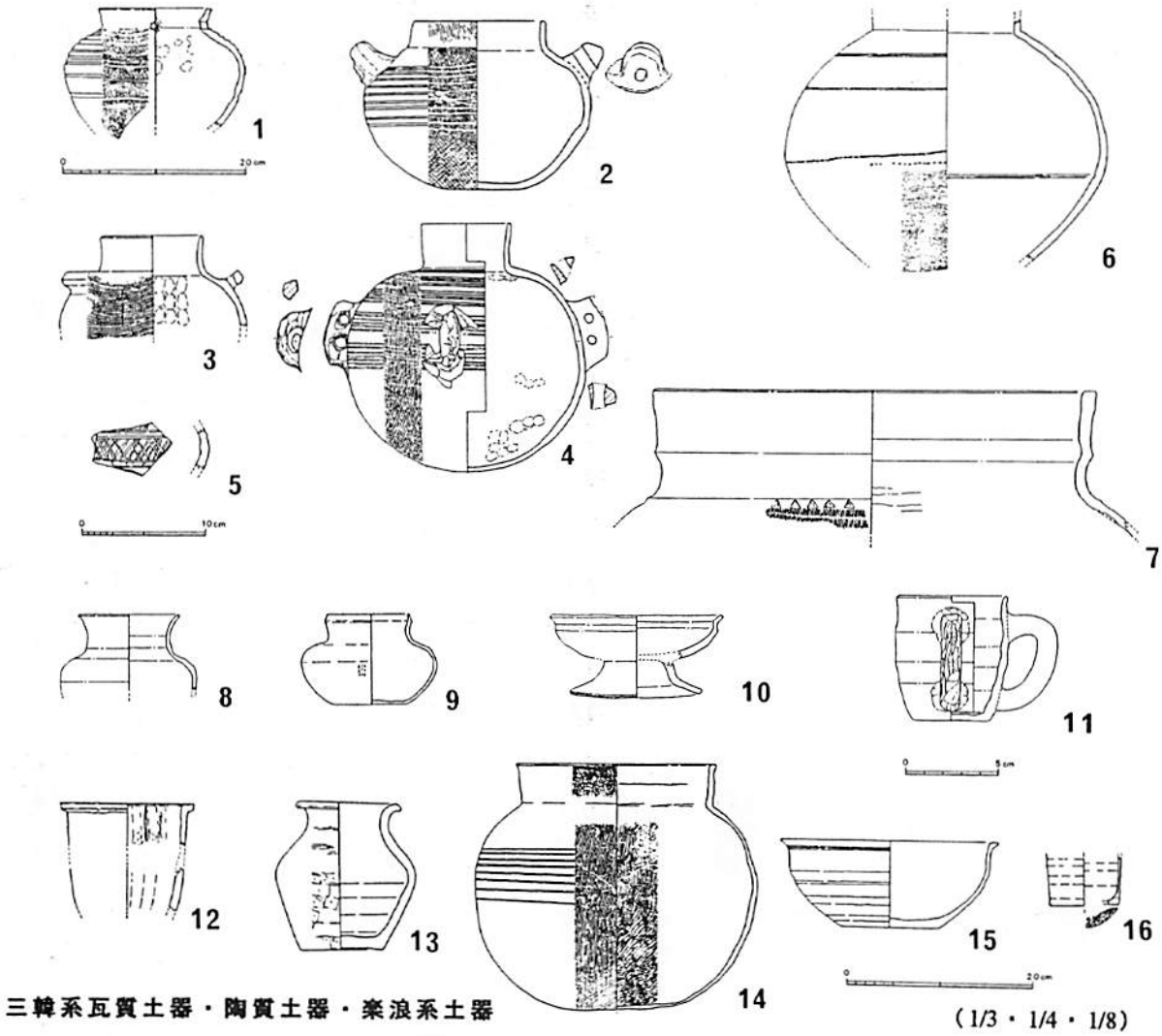
①粘土帯土器について（第63図，表11・12）

無文土器と擬無文土器の粘土帯系土器の分布状況を第８図の地区割図に照らしてみると，弥生前期後葉～弥生中期末までは，台地北西部低地の不篠地区に集中している状況がみとめられ，特に不篠地区の約4000㎡のエリアにまとまって出土していることが分かる。また，原の辻遺跡では，土壙などの遺構で弥生土器と朝鮮半島系土器が共伴出土することがあり，双方の編年のクロスチェックする上で有効的な資料となるが，台地北西部の不篠地区で無文土器や擬無文土器が共伴出土している（第64図）。なお，平成10年度調査研究事業のＥ区１号土壙では，弥生中期末の土器に共伴して楽浪系滑石混入土器の出土が確認されている。

このことは，台地北西部低地の微高地に，朝鮮半島系の人々が日本列島に渡来した子孫たちがまとまって弥生人と雑居し，一種の居留地のような状況がうかがえる。また，台地北西部の低地では，船着き場跡，石積護岸遺構，床大引材などの先進的な技術で造られた遺構や遺物，三翼鏃・五銖銭・大泉五十・貨泉などの遺物が発見されているところから市場の存在も推測され，朝鮮半島系の渡来人やその子孫たちが居住し，先端技術面で密接な関わりをもっていたことが考えられる。このように，無文土器や擬無文土器をもたらした人々は，大陸との交流・交易の拠点であった一支国の国邑原の辻遺跡と朝鮮半島および日本列島を結ぶ対外交渉の介在者であったことが推測される。



第64図　無文土器・擬無文土器（1／8）



第65図　楽浪土器（6・12～16），三韓土器（1～5，7），陶質土器（8～11）

②楽浪土器・三韓土器・陶質土器について（第65図，表11・12）

弥生後期初頭以降になると，楽浪系瓦質土器，三韓系瓦質土器，陶質土器の分布が，八反地区や石田高原地区の台地中央部の原・高元地区縁辺の低地にある環濠や旧河道へ廃棄された状況が捉えられる。遺構一括出土品として土師器と共伴した資料では，平成10年度調査研究事業の２号濠（11）と４号濠（８）の陶質土器が古墳Ⅲ期資料で，平成７年度調査の安国寺前Ａ遺跡（閨繰地区）の沼状落ち込み４層出土の陶質土器壺（報告書第10図30）が古墳Ⅳ期の資料である。最近の成果では，三韓系瓦質土器の爐形土器（５），馬韓系土器（２・３・７）が確認され，壱岐～対馬～慶尚南道に至るルートの最も近い伽耶地域以外にも全羅南道の馬韓系土器が流入していることが分かってきた。

弥生中期末までの段階においては，無文土器や擬無文土器の粘土帯系土器が煮炊き用の甕を中心とする器種構成であったが，瓦質土器や陶質土器では貯蔵容器である壺を中心とした器種構成に替わっており，それらは朝鮮半島から何らかの産物を運搬する外容器であったことが推測される。

一方，朝鮮半島から瓦質土器や陶質土器を運んだ人々は，煮炊具を残しておらず，弥生後期には台地内に，交易従事者や使節らに対して，宿舎・食事を提供して賄うような施設や体制の整備が図られていたことが想像される。平成15年度には，台地北西部低地で旧河道が石積護岸で覆われた部分が発見されたが，その内側の区域にはそれらの関連施設が存在した可能性が推測される。

片岡宏二氏が述べているように，政治的に未成熟で規制の緩かった粘土帯系土器段階の交易システムと比較すると，瓦質土器段階には「クニ」レベルあるいは北部九州のクニグニの政治連合体制に基づいた，管理的な交易への対外交渉のシステムの変換がなされていったことが想定され，「魏志倭人伝」の「大倭」と呼ばれる交易を監督する個人や機関と密接な関連をもつことが考えられる。なお，この項は，以前に朝鮮半島系土器を紹介した文献（註11）をベースに補足を行ったものである。

（宮崎）

註１　吉留秀敏　1994「板付式土器成立期の土器編年」『古文化談叢』第32集　九州古文化研究会

２　山本一朗編　1979『山口県の弥生式土器』周陽考古学研究所

３　中園聡　1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第９号　人類史研究会

４　常松幹雄　1991「伊都国の土器，奴国の土器」『古代探叢』Ⅲ　早稲田大学出版部

５　柳田康雄　1996「土師器の編年　九州」『古墳時代の研究』６　雄山閣

６　井上裕弘　1991「北部九州における古墳出現前後の土器群とその背景」『児島隆人先生喜寿記念論集古文化談叢』

７　久住猛雄　1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』19　庄内式土器研究会

８　武末純一　1995「朝鮮半島系の土器」『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第124集　長崎県教育委員会

９　片岡宏二　1999「壱岐原の辻遺跡の朝鮮系無文土器にみる日韓交渉」『人類史研究会発表要旨』人類史研究会

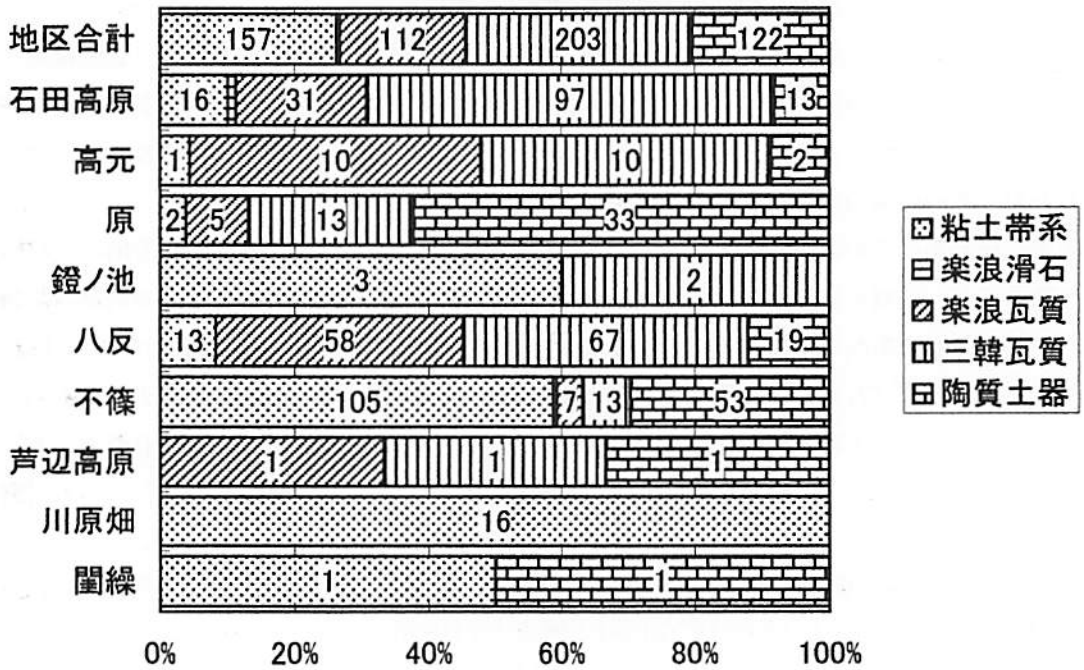
10　白井克也　2001「勒島貿易と原の辻遺跡」『弥生時代の交易』埋蔵文化財研究会

11　宮崎貴夫　2000「原の辻遺跡の朝鮮半島系土器について」『原の辻ニュースレター』第５号　原の辻遺跡調査事務所

表11　地区別にみた朝鮮半島系土器の出土点数

地区	粘土帯系	楽浪滑石	楽浪瓦質	三韓瓦質	陶質土器	合計
闔繰	1				1	2
川原畑	16					16
芦辺高原			1	1	1	3
不篠	105	1	7	13	53	179
八反	13		58	67	19	157
鐙ノ池	3			2		5
原	2		5	13	33	53
高元	1		10	10	2	23
石田高原	16	2	31	97	13	159
地区合計	157	3	112	203	122	597

表12　地区内における朝鮮半島系土器の割合



・龍と鯨を描いた線刻土器（第66図）

原の辻遺跡では，線刻の絵画土器が３点出土しており，龍を描いた資料が２点，捕鯨の様子を描いたと思われる資料がある。ここでは，この３点の資料について紹介したい。

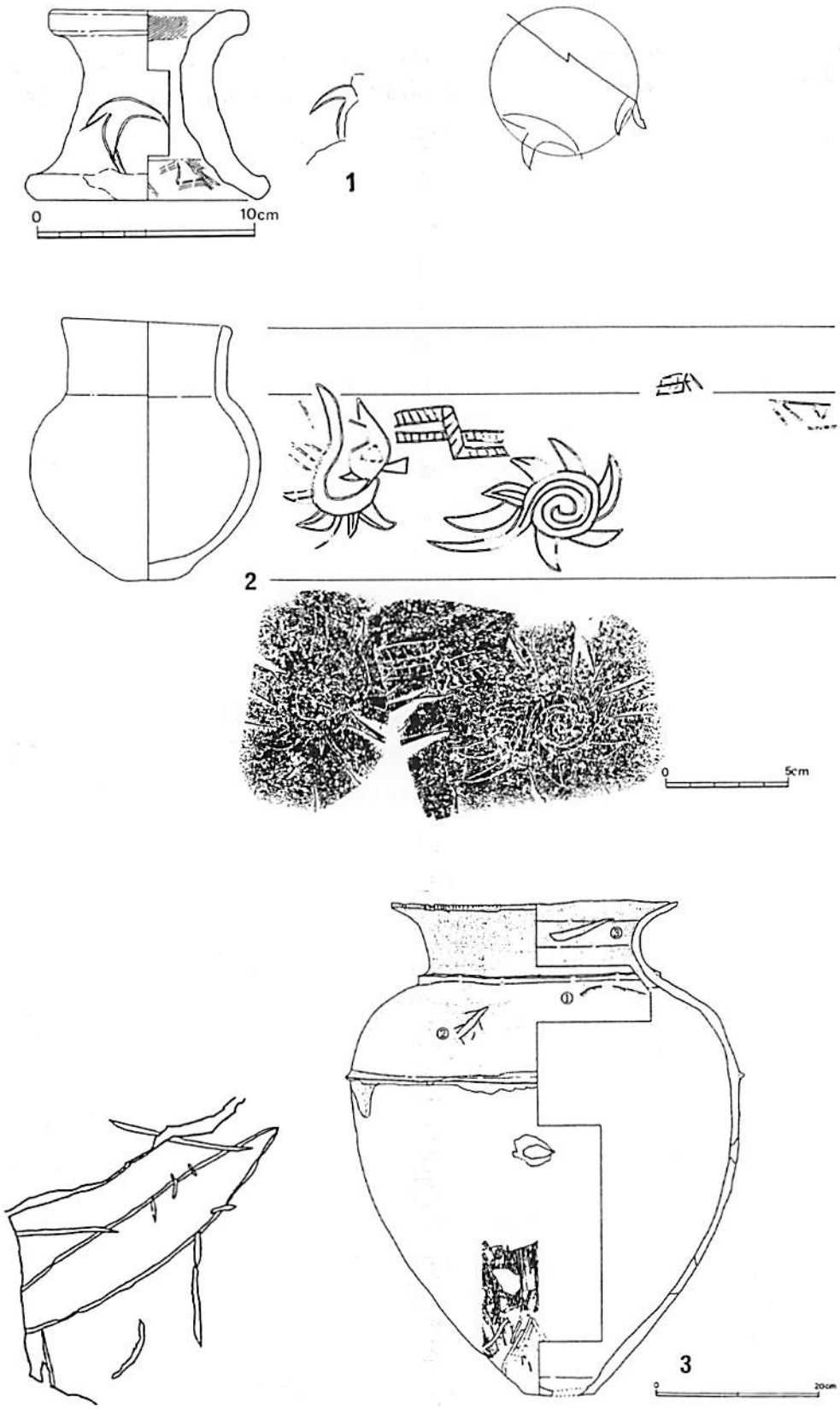
１は，平成11年度の原の辻遺跡調査研究事業の発掘調査で，台地北西部縁辺付近の低地（八反地区）に設置したＥ区３層から出土した資料である（註１）。３層は中世の土層であるが，台地縁辺に沿って流れる河道（２号旧河道）の直上から出土したことになる。土器は，口径9.2cm，高さ8.7cmの小形器台で，裾部が拡がり，口径よりも底径が大きい鼓形の形状をもつ弥生後期前半期の資料である。線刻文様は，焼成前に鋭く施文されており，笠が開いたキノコ形の文様が２ヶ所認められる。１ヶ所は全形が残っているが，もう一方は胴部が１／３ほど欠損しているため右半分を欠失している。全形が分かる線刻の大きさは，長さ4.2cm，幅3.3cmである。工楽善通氏によれば，岡山県上東遺跡（註２）で出土している資料に類似しており，「龍」の文様が簡略化したものとの指導をいただいた。

２は，平成14年度の原の辻遺跡調査研究事業の発掘調査で，台地北東部の低地（石田高原地区）に

設置した北区の環濠（ＳＤ５）からの出土資料である（註３）。土器は，口径７㎝，高さ10.7㎝の小形の長頸壺で，畿内のＶ様式の壺に類似しており，弥生後期中頃から後葉の時期が推測される。線刻文様は，２匹の龍と卍に似た梯子状文様が焼成前に細い線で描かれ，右端には建物の屋根の一部かとも思える模様も認められる。龍は，梯子状の文様を挟んで，左に伸び上がる龍，右にとぐろを巻いて丸まった龍が描かれている。古代中国の龍はいろんな動物の特徴を寄せた架空の動物であり，二世紀の文献『説文解字』に「龍は鱗のある動物の長である。…春分に天に登り，秋分に淵に潜む。」とあり，雨乞いをする神，水神としての性格をもち，治水に関係するところから，中国では皇帝権力の象徴となっていったが，日本では中国から舶載された方格規矩四神鏡の青龍の文様を真似て弥生後期になって描くようになる。林巳奈夫氏や春成秀爾氏の意見（註４）を参考にすれば，梯子状の文様は稲妻であり，水に潜みとぐろを巻いていた龍（蟠龍）が春の雷雨とともに，とぐろをほどいて天に昇る龍の様子が想像され，神仙思想や龍神などの中国精神文化の日本への定着がうかがわれる。

3は，昭和49年度の石田大原地区の墓域の緊急発掘調査で出土した23号甕棺墓の三連式棺の下ガメとして使用された弥生中期後半の丹塗壺（口径35.6㎝，高さ60.8㎝）である。肩の張る倒卵形の胴部に大きく開く口頸部をもつ広口壺で，胴上部と頸胴界に断面三角形の突帯をめぐらしている。口唇部には，小さな刻目が部分的に施されている。丹塗は，頸内面上部から胴上部にかけて施され，甕棺であるため焼成後の穿孔が１ヶ所認められる。線刻文様は，胴上部に２ヶ所，口頸部内面に１ヶ所が焼成前に施されている。線刻文様については，佐原眞氏（当時国立歴史民俗博物館長）によれば，胴上部の②は鯨の可能性が高く，鯨を手前に船を向こうに描くため船①を倒立させて捕鯨の様子を描いたものであり，口頸部内面の③についてはやはり鯨であろうとされた。②の１頭の鯨には３本の銛が刺さったような線が描かれており，捕鯨絵画としては日本最古の資料である。また，古墳時代の６世紀～７世紀の壱岐市郷ノ浦町鬼屋窪古墳（註５）と北高来郡小長井町長戸鬼塚古墳（註６）の石室の壁面には捕鯨の様子が線刻されており，原の辻遺跡でも鯨骨とそれを利用した製品が出土していることから，弥生時代から九州沿岸部では捕鯨が伝統的に行われていたことが推測されるが，中尾篤志は原の辻遺跡では捕鯨に関わる大形の漁撈具が欠如していることから，積極的な捕鯨活動でなく，座礁した鯨を捕獲する程度の消極的な活動を推定している（註７）。 **（宮崎）**

註１　杉原敦史　2000「線刻絵画土器発見！」『原の辻ニュースレター』７　原の辻遺跡調査事務所
２　下澤公明　1998「弥生時代の波止場の跡か」『所報吉備』第24号　岡山県吉備文化財センター
３　中尾篤志編　2003『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集　長崎県教育委員会
４　林巳奈夫　1993『龍の話』中公新書　中央公論社
春成秀爾　2000「変幻する龍」『ものがたり日本列島に生きた人たち５絵画』岩波書店
５　副島康司・木村幾多郎　1981「鬼屋久保古墳」『郷ノ浦町の古墳』壱岐郷土館
６　川道寛　1998『長戸鬼塚古墳』小長井町教育委員会
７　中尾篤志　2002「捕鯨線刻土器と海人」『発掘「倭人伝」』長崎県教育委員会



第66図　龍と鯨を描いた線刻土器（1／2，1／3，1／8）

・土製品

ここでは1995年から2003年までに出土した土製品について説明する。出土した土製品は，実に52点にのぼる。そのうち，投弾は30点，紡錘車６点，円盤状土製品13点，土錘２点，土玉１点である。投弾の出土時期は，弥生中期から後期にかけてが多い。一部は，覆土からの出土であるために，時期を特定できない。製品のサイズは，平均長4.5cmである。原の辻遺跡の弥生中期というと，多重に環濠を巡らし，大集落として隆盛を極めた時期である。環濠の働きとしては，外敵からの防御の側面もあるので，投弾が出土する背景とも考えられる。土錘・土玉・紡錘車・円盤状土製品についても弥生中期から後期の出土と考えられるが，細かな時期については不明である。錘や紡錘車などは，石製，骨製など素材的には色々なものが出土している。投弾についても，石製のものがあってもおかしくないが，素材そのものが自然石を使用している場合は，判断に苦しむ。投弾は，弥生時代以降には姿を消す遺物であって，弥生時代独自の戦闘具であり，弥生時代の戦闘の特殊性が考えられる。原の辻遺跡で出土した戦闘具には，剣・鏃・戈・鉾などがあるが，戈・鉾は積極的に使用されていたとは考えられず，剣・鏃が主体であったものと考えられる。これに投弾が加わり，飛び道具類が戦いの際において大きな役割を担っていたことを類推させる。 **（西）**

表13　投弾計測表

番号	年度	地区名	種別	法量				形状	色調	胎土	出土遺構	層位
				長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)					
1	1995	高元	投弾	5.11	3.04		41	紡錘形	にぶい赤褐色	石英・黒色・赤色砂粒	１号溝	中層
2	1995	高元	投弾	4.59	2.91		32	紡錘形	灰白色	石英・黒色砂粒・角閃石	１号溝	排土
3	1995	高元	投弾	4.65	2.96		34	紡錘形	にぶい褐色	金砂粒・金雲母	１号溝	上層
4	1995	高元	投弾	4.7	3.06		37	紡錘形	にぶい橙色	石英	１号溝	中層
5	1995	高元	投弾	3.27	2.6		16	紡錘形	にぶい橙色	石英	１号溝	下層
6	1995	石田高原	投弾	4.87	2.96		39	紡錘形	明灰褐色	石英・黒色・赤褐色砂粒	２号溝	上層
7	1995	石田高原	投弾	4.08	2.54		23	紡錘形	明灰褐色	石英	２号溝	中層
8	1995	石田高原	投弾	4.54	2.44		24	紡錘形	赤褐色	石英	３号溝	上層
9	1995	石田高原	投弾	4.63	2.77		32	紡錘形	にぶい橙色	石英多し	３号土拡	覆土
10	1995	石田高原	投弾	4.58	2.89		28	紡錘形	にぶい赤褐色	石英・赤色砂粒	５号溝	上層
11	1995	石田高原	投弾	4.26	2.6		28	紡錘形	明赤褐色	石英・黒色・赤色砂粒	９号溝	排土
12	1995	石田高原	投弾	4.08	2.88		30	紡錘形	にぶい赤褐色	石英・黒色・赤色砂粒	大溝	排土
13	1997	川原畑	投弾	4.7	2.9		33.6				ＳＫ３	
14	1997	川原畑	投弾	3.3	2.1		13.6				ＳＫ３	
15	1998	川原畑	投弾	4.9	3		33	紡錘形			１号旧河道土器溜	
16	1998	川原畑	投弾	5	2.8		32	紡錘形		金雲母	１号旧河道土器溜	
17	1998	川原畑	投弾	4.8	2.9		31	紡錘形			４号旧河道Ｃ２区	
18	1999	11集	投弾	4.7	2.8		32	ラグビー球形			Ｅ区１号溝	14層
19	1999	不條・八反	投弾	5	2.9		32.2	紡錘形			５号溝	１層
20	1999	不條・八反	投弾	5	2.6		24.8	紡錘形			５号溝	
21	1999	不條・八反	投弾	4.5	2.5		25.3	紡錘形			Ｂ区２号土拡	
22	1999	不條・八反	投弾	4.8	2.7		26.9	紡錘形			５号溝	
23	1999	不條・八反	投弾	4	2.3		17.4	紡錘形			２号溝	２層
24	2001	不條・八反	投弾	4.2	2.4		21.6	紡錘形			Ｂ区４号土拡	
25	2001	不條・八反	投弾	3.5	2.1		12.2	紡錘形			Ｅ区	Ｖ層
26	2001	不條・八反	投弾	4.9	3		37.3	紡錘形			Ｆ３区	Ⅳd層
27	2003	石田高原	投弾	4.1	2.8	2.6	30.3	紡錘形			Ⅳ区	４層
28	2003	石田高原	投弾	4.4	2.9	2.9	35.2	紡錘形			古墳落ち込み	
29	2003	石田高原	投弾	4.8	2.8	2.6	31	紡錘形			Ⅳ区	３層
30	2003	石田高原	投弾	3.9	2.1	2	15.8	紡錘形			後期落ち込み	
				4.5	2.7	2.5	28.3					

表14　土製品一覧表

報告年	図版番号	遺物番号	遺物名	掲載報告書	出土遺構	層位	
1995	第57図	1	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	1号溝	中層	弥生中期から弥生後期
1995	〃	2	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	1号溝	排土	
1995	〃	3	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	1号溝	上層	
1995	〃	4	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	1号溝	中層	
1995	〃	5	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	1号溝	下層	
1995	〃	6	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	2号溝	上層	
1995	〃	7	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	2号溝	中層	
1995	〃	8	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	3号溝	上層	
1995	〃	9	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	3号土拡	覆土	
1995	〃	10	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	5号溝	上層	弥生中期から弥生後期，上層からは土師器
1995	〃	11	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	9号溝	排土	
1995	〃	12	投弾	原の辻遺跡調査報告書第124集	大溝	排土	
1997	川畑第28図	3	投弾	原の辻遺跡調査報告書第1集	ＳＫ３		
1997	〃	4	投弾	原の辻遺跡調査報告書第1集	ＳＫ３		
1998	第28図	53	投弾	原の辻遺跡調査報告書第4集	1号旧河道土器溜		
1999	第80図	1	投弾	原の辻遺跡調査報告書第11集	Ｅ区1号濠	14層	弥生中期の土器
1999	第62図	2	投弾	原の辻遺跡調査報告書第16集	5号濠	1層	弥生後期～古墳前期
1999	〃	3	投弾	原の辻遺跡調査報告書第16集	5号溝		
1999	〃	4	投弾	原の辻遺跡調査報告書第16集	Ｂ区2号土拡		
1999	〃	5	投弾	原の辻遺跡調査報告書第16集	5号溝		
1999	〃	6	投弾	原の辻遺跡調査報告書第16集	2号溝	2層	弥生後期～古墳前期
2001	第65図	4	投弾	原の辻遺跡調査報告書第21集	Ｂ区4号土拡		弥生中期後半
2001	〃	5	投弾	原の辻遺跡調査報告書第21集	Ｅ区	Ⅴ層	
2001	〃	6	投弾	原の辻遺跡調査報告書第21集	Ｆ３区	Ⅳd層	
2003	第90図	1	投弾	原の辻遺跡調査報告書第26集	Ⅳ区	4層	弥生時代後期
2003	〃	2	投弾	原の辻遺跡調査報告書第26集	古墳落ち込み		
2003	〃	3	投弾	原の辻遺跡調査報告書第26集	Ⅳ区	3層	
2003	〃	4	投弾	原の辻遺跡調査報告書第26集	後期落ち込み		
2003	〃	5	土玉	原の辻遺跡調査報告書第26集	後期落ち込み		
1998	第28図	6	紡錘車	原の辻遺跡調査報告書第4集	4号旧河道Ｃ２区		
1999	第62図	7	紡錘車	原の辻遺跡調査報告書第16集	Ｅ区 pit		
1999	〃	8	紡錘車	原の辻遺跡調査報告書第16集	5号溝		
2001	第65図	7	紡錘車	原の辻遺跡調査報告書第21集	Ｅ８区	Ⅳb層	
2001	〃	8	紡錘車	原の辻遺跡調査報告書第21集	Ｄ５区	Ⅲ層	
2003	第65図	6	紡錘車	原の辻遺跡調査報告書第26集	ＳＤ３	Ⅰ層	弥生時代後期
2001	第65図	9	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第21集	Ｄ３区	Ⅳ層	
2001	〃	10	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第21集	Ｄ９区	Ⅴ層	
2003	第90図	7	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第26集	ＳＤ11	Ⅱ層	弥生時代後期
2003	〃	8	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第26集	ＳＤ７		
2003	〃	9	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第26集	ＳＤ11	Ⅰ層	
2003	〃	10	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第26集	ＳＤ３		
2003	〃	11	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第26集	古墳落ち込み		
2003	〃	12	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第26集	後期落ち込み		
2003	〃	13	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第26集	後期落ち込み		
2003	〃	14	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第26集	Ⅳ区	4層	
2003	〃	15	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第26集	Ⅳ区	4層	
2003	〃	16	円盤状	原の辻遺跡調査報告書第26集	後期落ち込み		
1995	第57図	13	土錘	原の辻遺跡調査報告書第124集	2号溝	排土	
1995	〃	14	土錘	原の辻遺跡調査報告書第124集	5号溝	上層	弥生中期から弥生後期の土器が，出土，上層からは土師器

2．石　　器（第67図～81図）

遺跡出土の石器素材は黒曜石・頁岩・粘板岩・玄武岩・砂岩を多様している。これらの石器素材となる頁岩や玄武岩については，壱岐島内でも産出するが，出土石器との理化学的照合は未だおこなわれていない。このことから，石器素材の原産地については，現段階では断定的なことは避けなければならない状況にある。遺跡出土の石器としては，弥生時代の通常の石器組成である石斧類・石庖丁・石剣などを中心に出土するが，本遺跡の最大の特徴として，石鎌の量の豊富さが挙げられる。また，石斧類の出土量も多く，その未製品が多いことも特徴的である。石器の出土地点としては，丘陵の北西側の沼・河川の調査で多量に出土しているが，丘陵上からも未製品も含め，散漫的ではあるが出土する傾向にある。沼・河川から出土した石器類については弥生時代前期末から中期後葉の時期に納まるが，特に中期の時期が主体となる。もともと河川周辺からは，石器製作に関わると思われる廃棄土坑がいくつか確認されており，遺跡の中でも石器製作工房跡として位置づけられている地域である。ここでは，沼や河川地域の石器を中心に，石材・石器製作技術，一部大まかな編年的位置づけについても触れていくこととする。

・石　斧　類（第67・68図）

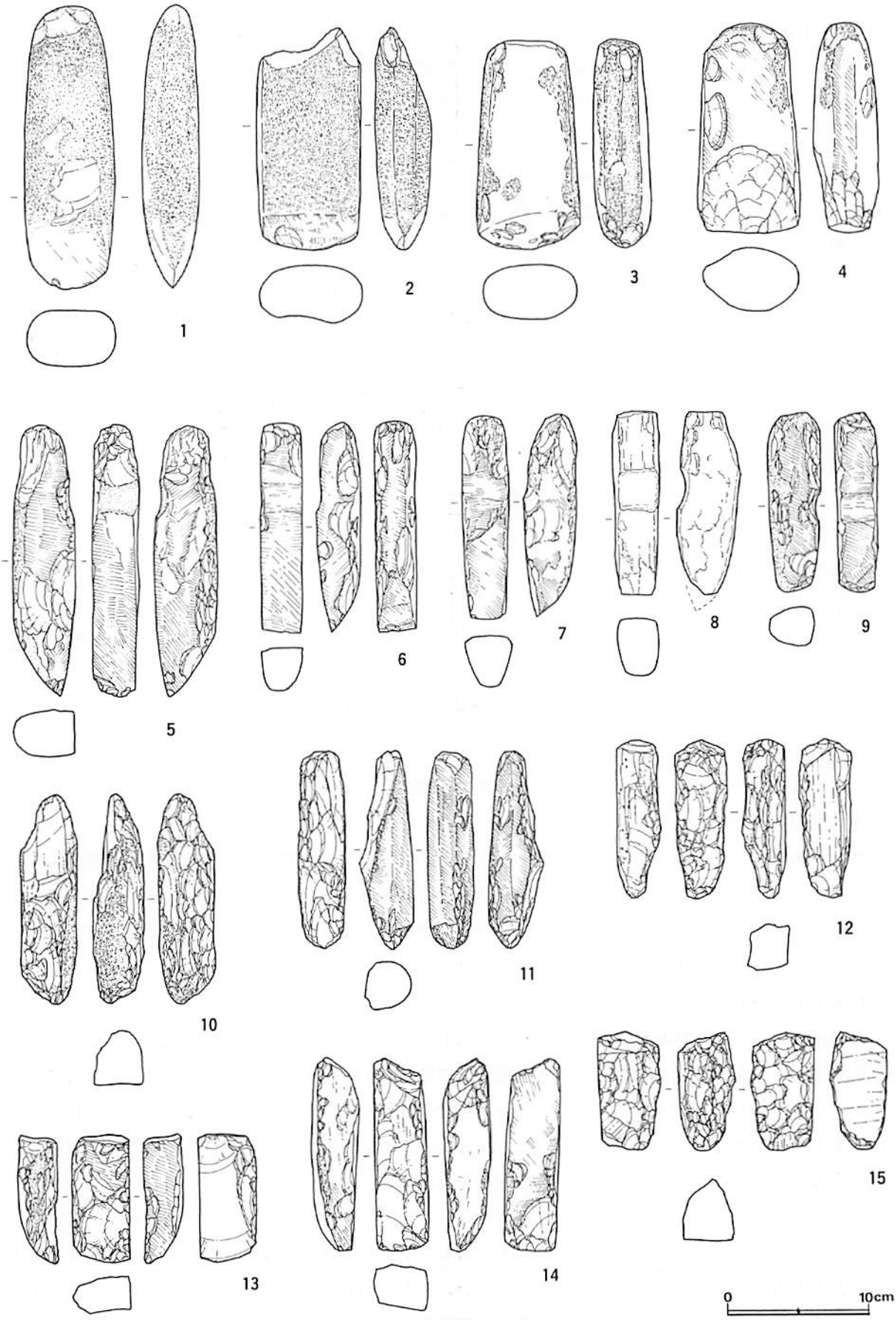
石斧類は，扁平片刃石斧・抉入方柱状片刃石斧・扁平打製石斧がある。出土点数から言えば，小型の扁平片刃石斧が圧倒的に多く，次に抉入方柱状片刃石斧・太形蛤刃石斧，扁平打製石斧と続く。これらの出土比率については，伐採具と２次加工具という機能的な部分や，破損率などを考慮しなければならないが，扁平片刃石斧については先述したように，製作途中の未製品が非常に多く，その製作過程を看取できうる資料が土坑等からも出土している。扁平片刃石斧類が多量に出土することについては，扁平片刃石斧製作に係わる石材が豊富であった可能性や，木製品の加工量が多かったことなどを暗示するものであるが，これらの石斧を製作し，他に搬出する意図があったものと思われる（註１）。

太型蛤刃石斧（第67図１～４）

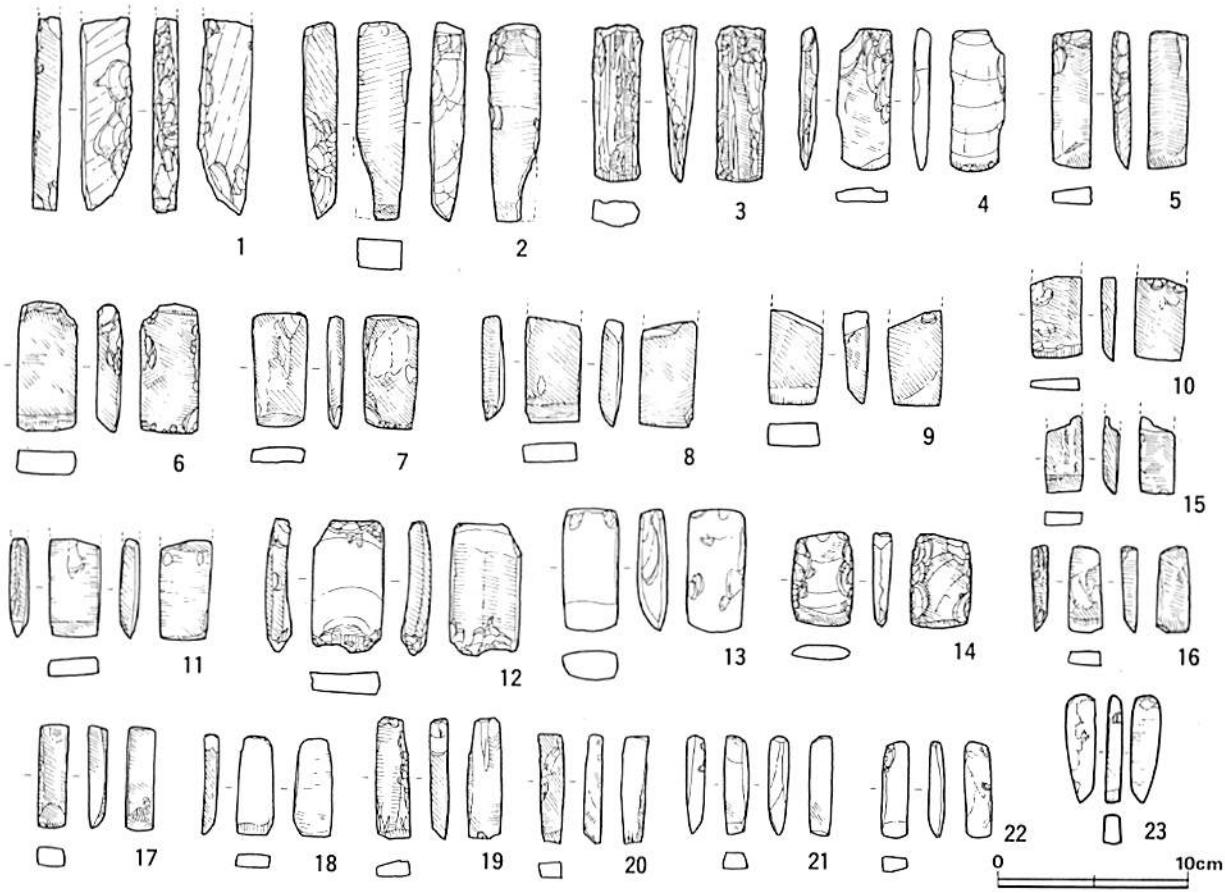
断面が円形で大型になるものは少数であることから，やや小振りで扁平気味の伐採具も掲載した。今山産の石斧も１点看取できるものの，多くは地元の玄武岩を使用している。全面研磨することを基本とするが，大形のものになると，敲打と研磨を併用する。本来の太型蛤刃と呼べるものは少なく，やや小型で断面が四角張った石斧が多い。

抉入方柱状片刃石斧（第67図５～15）

重量感のある黒色頁岩や軟質の頁岩を多様するが，ホルンフェルス状の石材も使用している。ここで黒色頁岩としたものは，ほかの頁岩と相違し，重量感があり粒子が緻密なものを指す。この石材については，小形の石錘や紡錘車などにも使用され，黒色頁岩についてはある一時期に使用された可能性もある。断定的なことはさけなければならないが，対馬に良質な黒色頁岩があることから対馬からの素材搬入も視野に入れておきたい。**第67図５～８**については完形品で，**10～15**については，未製品を掲載した。断面三角形を呈するように敲打によって整形し，裏面は素材から剥離された段階の平坦面を活かして上部に抉りを入れることを基本とする。扁平片刃石斧についてもいえることだが，節理と刃部とが直行するように製作することを意図している。扁平片刃石斧と同様，遺跡内での製作がおこなわれていたものと思われるが，素材が島内か搬入かは判然としない。



第67図　石斧類実測図①（1／4）



第68図　石斧類実測図②（1／4）

扁平片刃石斧（第68図）

頁岩やホルンフェルスを多様している。頁岩については壱岐島内でも産出するものの，良質の頁岩の存在については定かではない（註2）。扁平片刃石斧の素材は，石剣にも多様される節理が発達したものを意図して使用している。対馬や韓国，北部九州の石器にも節理の入る石器を多く見ることができ，この石材の流通については，韓国・対馬・壱岐・北部九州という広い流通を考慮しなければならないであろう。また，地元にも頁岩やホルンフェルスがあることから壱岐島内に原産地を求めることも考えなければならない。また，規格製があり，刃部幅が狭い小型のものが主体であり，刃部幅が広い扁平片刃石斧は数点の出土でしかないという大きな特徴を示している。

第68図1・16・19～20については，全長に対し刃部が狭く，細長いことから鑿状のものと考えられる。**20**は城ノ越～須玖Ⅱ古段階の資料である。他の資料は，遺跡で多く出土するタイプのもので，刃部幅や厚み，全長がほぼ一定している。全体研磨することによって仕上げているが，製作工程の中では，研磨と細かな剥離を繰り返して仕上げている。大きさはほぼ規格性があることから，一定の製作工程を踏む物ものと考えられ，このことについては後述する。

・石　庖　丁

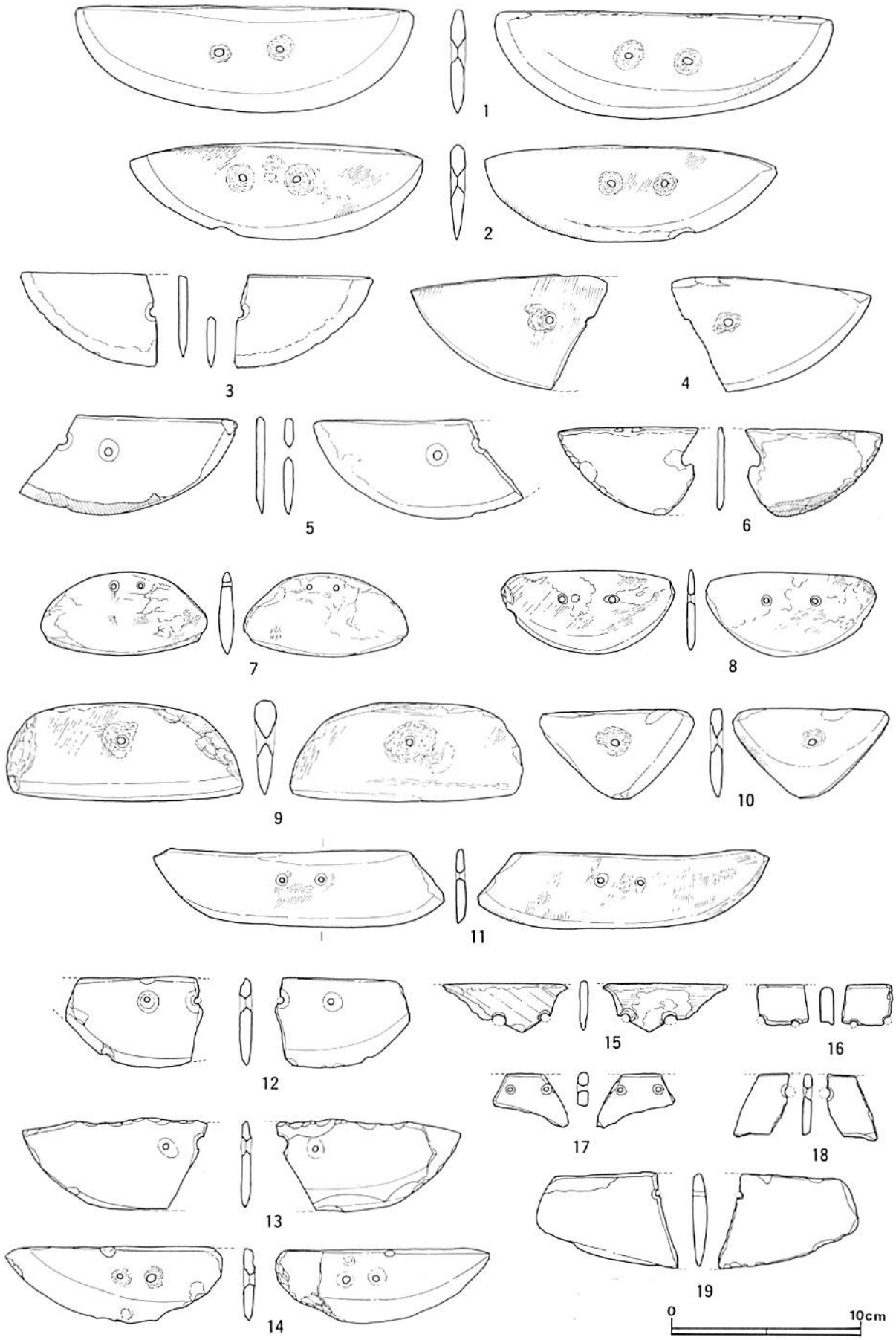
石庖丁の石材は頁岩が多様されるが，立岩産の石庖丁の他，頁岩以外の石材も数点認められることから，北部九州からの石材が幾らか搬入されていたことが理解できる。本遺跡での立岩産の石庖丁と頁岩製の石庖丁の違いは，立岩産石庖丁が頁岩製の石庖丁に比べ，小振りで丸みを持つことにある。

遺跡出土の石庖丁は，**第69図1～7，13～15**のように半月形を呈するものが主体である。この中でも1・2のように分厚い素材を使用する大形のものと，薄い剥片を使用し，やや短くなるものとがある。この他のタイプとして，**8～10，16～20**などが挙げられるが，石材的にも相違し，搬入品の可能性が高い一群である。頁岩を素材にするものと，搬入品との2種の石庖丁の製作技術で特異な点は，孔を穿孔するときに，特別な穿孔具（金属器）を使用するタイプと，敲打だけによって穿孔するタイプがある。穿孔具を使用するタイプは，石材的に見て硬質のもので，搬入品と思われる石材に対しては穿孔具を使用したケースが多い。ある程度軟質の頁岩に対しては，細かな敲打によって穿孔しているケースが多く，遺跡の主体となるタイプに多い。敲打による穿孔は，孔がやや不規則であることからも，敲打だけで穿孔していることは明瞭である。これについては未製品との見方もあるが，刃部には使用痕が残っており，製品として使用されていたことは間違いない。これに対し特別な穿孔具を使用したものについては，孔が真円に近い。**第69図1・2・4・10・11・15**などは敲打だけで穿孔したもので，**12・13，16～20**については穿孔具（金属器）を使用したものである。穿孔具を使用するものについては，2孔間の幅が小さいこと，先述したように石材がかなり硬質であることなどの特徴をもっている。**10・11**は，穿孔が1つしかないタイプで，特に**10**は，石材が砂岩であることを特徴としており，穿孔は敲打によっておこなわれている。**11**は三角形を呈し，穿孔は敲打による。

先述したように，素材は頁岩を使用し，形態的には外湾刃の半月形のものが圧倒的に多い。これに対し，**15～18**の搬入されたと思われる素材のものは，穿孔法が相違することと，小型で背はほぼ平坦に研磨するなど遺跡主体のものと相違が見られる。ここに提示した石庖丁は，中期，須玖Ⅱ式段階を上限とする河道からの出土品が主体である。この河道からは，立岩産の石庖丁の出土はないことから，遺跡出土の立岩産の石庖丁が中期以降のものである可能性が高い。原の辻遺跡では，中期段階までは積極的に頁岩の素材で石庖丁を製作し，後期になると搬入品が認められる傾向にある。また，石庖丁の出土が環濠や河道からの出土が多く，細かな時期設定までにはいたっていないことから後期のものと断定される石庖丁の特徴は掴めていない。このことは，北部九州と同様に，後期には中期まで主体であった石器製作が，鉄器化の進行にともないその立場を後退させた結果と理解することことが可能であろう。これは立岩産石庖丁の石器工人集団の解体とも良く合致しており，弥生時代中期から後期の大きな変化を示しているのであろう。ややもすれば，原の辻遺跡の鉄器化は他よりは早いのではという意見を聞くこともあるが，その実状は北部九州とあまり変化がないと認識している。

・石剣・石戈（第70図）

丘陵北西側の河道周辺，東側の環濠内から多く出土しており，河道の帰属時期からみて中期に属するものが多いと思われる。他には，西側丘陵沿いの環濠周辺からも出土している。丘陵上，丘陵の東側でも出土しているものの，数量的には少ないのが現状である。また，後期のものと断定できる資料については現在のところ見当たらない。石剣の素材としては頁岩・粘板岩系が多く，形態的には，茎が短く刃部が長いことを特徴とする鉄剣形のみで構成される。ここでは，長沼の形態分類に沿って説明する（1986，長沼）。**1～3**は茎があまり発達せず，身に対して並行するように側片を研ぎ出すタイプで，**5**もやや小振りだがこのタイプのものであろう。長沼のⅠaに分類されるもので，20cmを超える大形品が多いとされ，前期末～中期後葉のものとしている。**4・6～10**については，長沼分類のⅠbで，茎の幅が広く，身に対して茎が短いタイプである。**6・7**のように短剣状のものもあるが，**18**



第69図　石庖丁実測図（1／3）

のように大形のものも見られる。ちなみに18は未製品で，両側片から剥離を加えながら研磨し，その繰り返しによって最終的に薄身に仕上げていくという工程をとっている。石剣の製作工程の一部を表している。14〜16は，Ⅱｂに分類され，抉りを基部の両側につけるタイプで，小型のもので構成される。この他に11や12などのように茎お丁寧に造り出すものもある。茎の両側片は，穿孔によって調整していき，独特な茎の形態を有するものである。

石戈の出土は10点程度で，完形品は存在しない。砂岩・頁岩・蛇紋岩を使用しており，特に蛇紋岩を使用する資料は特筆される。蛇紋岩と滑石は同じ岩脈から採取されることから，石材の入手先としては西彼杵半島の蛇紋岩地帯が有力視される。ただし，間接的に北九州から搬入されたことを考慮しなければならないであろう。

・石　　鏃（第71図）

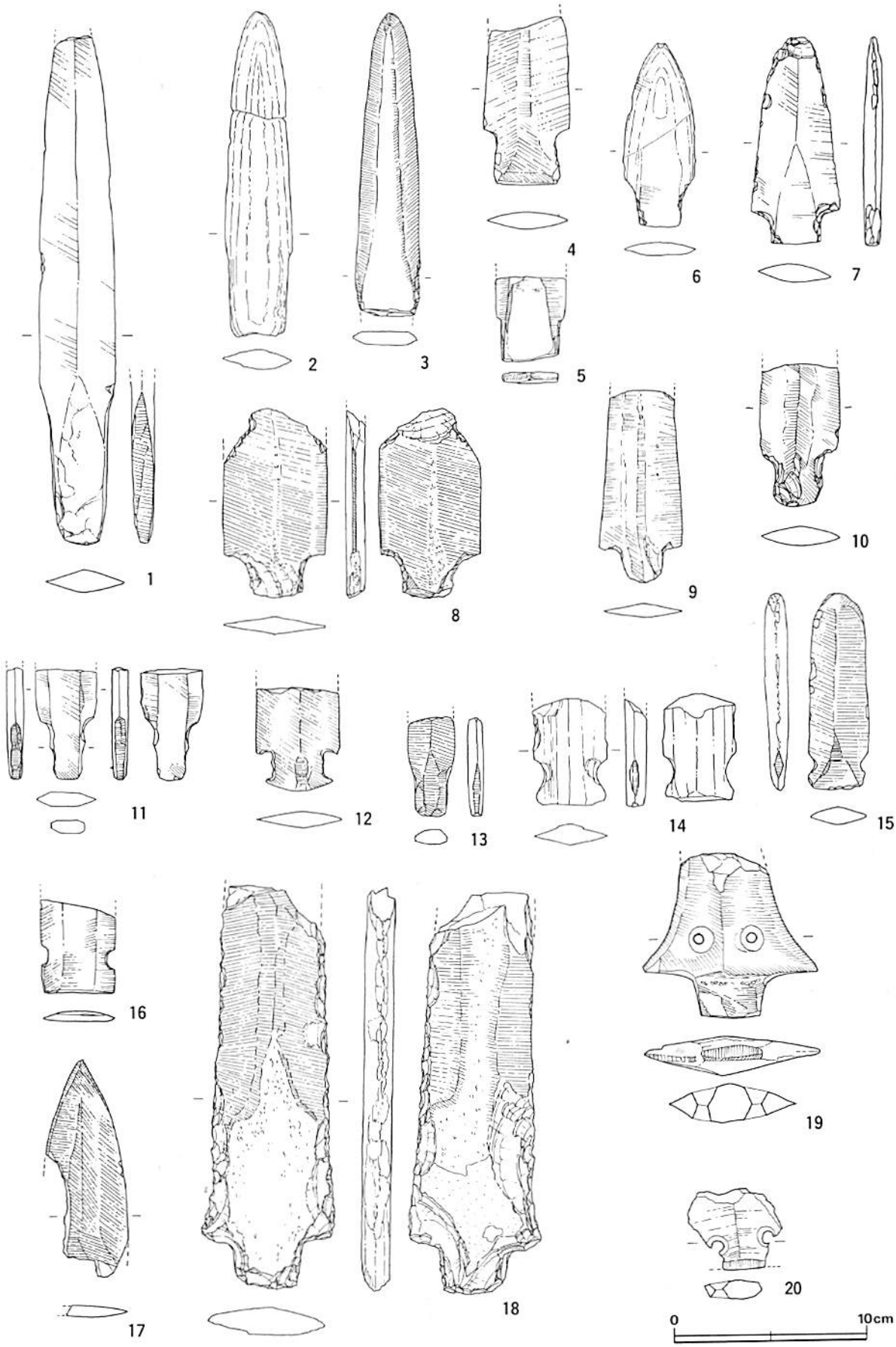
打製鏃

石鏃の素材は大きく２種に大別される。ホルンフェルス・頁岩・粘板岩系の石材を使用した磨製鏃と，黒曜石を使用した打製鏃である。打製鏃について特筆されることは，素材として黒曜石だけを使用するという点にある。壱岐島内では玄武岩が産出するが玄武岩製の石鏃は現在未確認である。打製石鏃の素材については，北部九州などを見れば安山岩・玄武岩の使用例も多く，本遺跡のように黒曜石だけを使用するケースは異質である。遺跡出土の黒曜石製の石鏃は，縄文時代早期や後期の石鏃に近い緻密な加工を施した例が多い。鍬形鏃や剥片鏃の出土もあることから縄文時代の石鏃があることは確かであるが，技術的な側面から見れば，出土したすべての石鏃は縄文的な様相を呈していると言える。出土した石鏃がすべてが縄文時代の石鏃とするならば，原の辻遺跡には打製石鏃は存在しないことになり無理があるが，パティナの在り方や，製作技術を見る限り，原の辻遺跡出土の黒曜石製石鏃は，縄文時代のもの，あるいは，縄文的であるという見解を持っている。原の辻遺跡では縄文時代の伝統的な石器製作技術を踏襲していることも考慮しなければならないであろう。

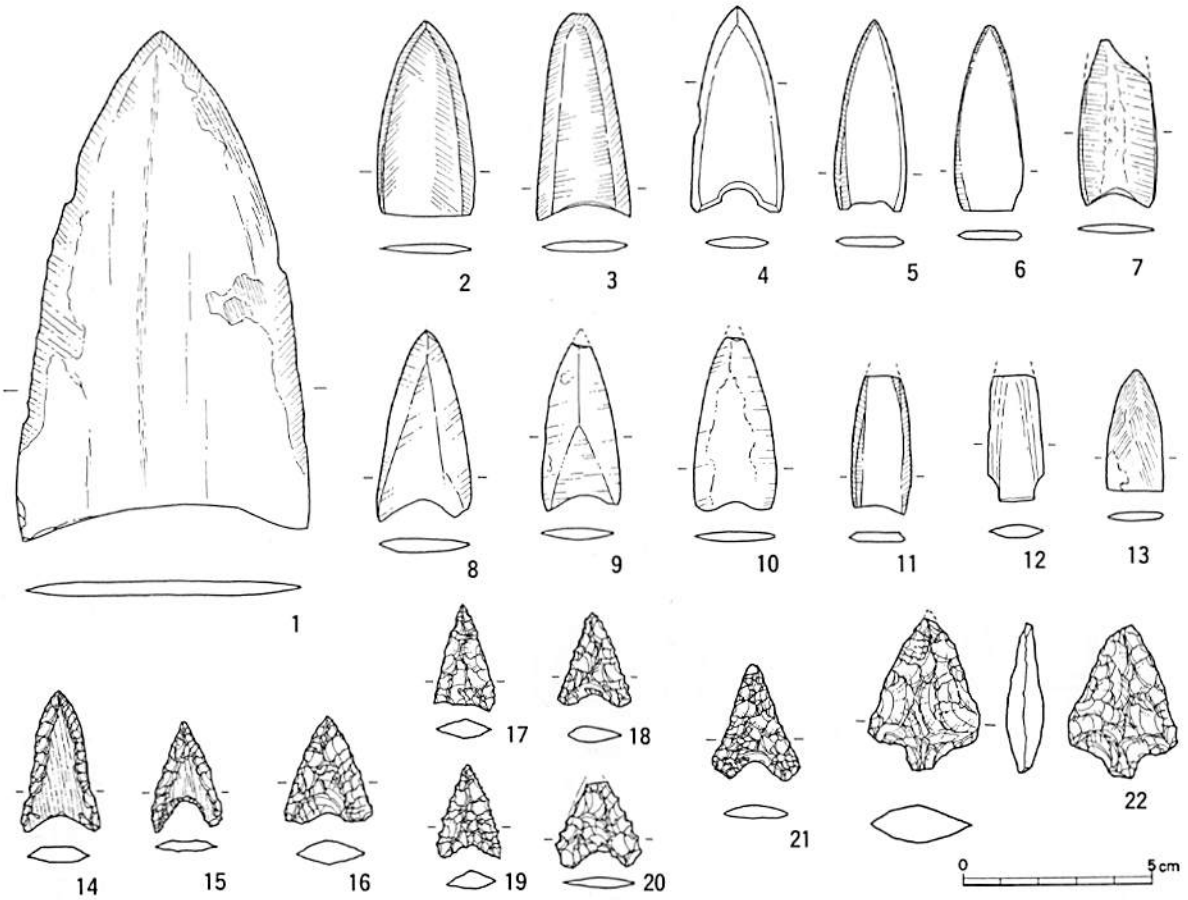
第71図に挙げた打製石鏃は，本遺跡を代表する鏃で，形態的には凹基鏃が主体となる。**14・15**は局部磨製石鏃で，中央部をかなり研磨している。特に**15**は，根挟みを意識してか中央部を縦方向に研磨することによって窪ませている。矢の根挟みは環濠内より出土していることから，このような石鏃が弥生時代の可能性をもっている。**19・20**などは側片を鋸歯状に加工した鏃で，西北九州の縄文後期初頭の鏃となんら遜色がない。この中にあって**22**は安山岩を使用した唯一の有茎鏃である。厚みがあり，ほかの鏃に比べ重量があり，石材としては安山岩を使用している。瀬戸内系・関西系の土器が搬入されていることからおそらくは，瀬戸内あるいは畿内の石鏃が持ち込まれたものと判断する。

磨製石鏃

磨製石鏃は先述したように，頁岩系，フォルンフェルス系の石材を多様する。形態的には，凹基鏃が多く，茎部を造り出すものは稀である。１については薄い頁岩を素材としており，側片部と凹基内部を研磨するに止めている。中央部縦方向に擦痕が認められ，刃部先端部に縦方向に擦痕が観察され，切るような動作が考えられることから，形態的に石鏃を意識しながらも，切るための要素が強い。**4**については城ノ腰から須玖Ⅰ古段階の土坑から出土している。**5・6・11**などは形態的には基部は短い脚が付くように整形され，側片に沿って研磨をおこない中央部については素材面を残存させている。**4**と同じ様な整形手法をとっており，古い段階の磨製鏃と認識している。**5・6**については蛇紋岩製



第70図　石剣・石戈実測図（1／3）



第71図　石鏃実測図（2／3）

であることが大きな特徴である。先述したが，石戈においても蛇紋岩を使用している例があることは素材の入手先を考える上で興味深い。

・頁岩・フォルンフェルスを素材とする石器の製作工程（第72図）

遺跡出土の石器素材は，節理の発達した石材を多様することはすでに述べた。特に石斧類・石剣・石鎌・石庖丁はこの傾向が強い。これらの石器について節理の方向を観察すると，同じ器種においては器体に同じ方向の節理が走ることが確認できる。石庖丁・石鎌・石剣などについては，器体の長軸方向と並行に節理が走ることで共通する。これは節理に沿った盤状の素材剥片から石器が造り出されていることを示している。ただし，石斧類については，先述した石器と比較すると石器製作段階での素材の獲得方法に違いがみられる。この違いは，石器の対象物への力の加わり方が相違するということに起因する。ここでは，節理を持つというかなり特徴的な素材に対し，どのような製作技術で石器製作をおこなったのかについて論じたい。

節理が発達する石材は，節理に並行する力には弱く，節理に直行する方向の力には強いという特性を持つ。裏を返せば，剥離の段階で，節理と並行するような剥離は板状の剥片を獲得するには無理がなく，節理に直行するような剥離は剥離が難しいということになる。石器にはそれぞれの機能があり，力の作用も同一ではない。石斧類について言えることは，刃部に直行する力に対して強いことが一番の条件である。石器の刃部が対象物にどのように作用するかは，機能と大きく関わる問題であり，製作技術の段階からその機能を想定しておかなければならない。片刃石斧は，節理をもつ素材では刃と

節理が直行するように作ることが必然的と言えよう。節理と刃部が並行するならば，使用の際に節理に沿って剥落する可能性が高いからである。実際，出土した片刃石斧類は，すべて節理と刃部が直行することからも検証できる。また他の石器も踏まえて言えば，節理と直行する刃部をもつ石器は抉入方柱状片刃石斧と扁平片刃石斧以外にない。それでは，このような石材からどのような製作技術で片刃石斧を製作するのかについて，検討してみる。節理を持つ石材は，先述したように節理に平行な加撃を加えると剥離が容易である。このことを利用すると板状の素材獲得は容易である。この板状素材を第74図のように剥離することによって剥片の幅は限定され，連続して素材剥片を獲得することができる。この幅を規制する素材を獲得することによって縦長剥離が可能となる。幅が長すぎると一定の剥離は困難となろう。第74図に示した剥片は，上段に縦長剥片を，下段に横長剥片を示した。上段の縦長剥片は，上部に打面を残存させ，幅においてもほぼ一定のものが多い。製品である扁平方刃石斧の幅とほぼ同一であることや，側面に節理面を残すことも共通している。一部の剥片の側片には執拗に剥離を加えたものが見受けられるが，これについては幅の調整をおこなうことを意図し，側面の節理面を剥離した結果だと考えられる。**第72図a**に示したように，節理の発達する石材においては，節理の横方向から加撃を加えた場合，寸詰まりの横長剥片が剥離される。この現象については，節理によって加撃方向に障害がおこり，多くのヒンジが形成されたことによる。これらの剥片が**第72図**下段の横長剥片である。方柱状片刃石斧の背面は，横からの粗い整形を行ない，扁平片刃石斧も側片から調整をおこなうが，その結果大小の横長剥片となる。扁平片刃石斧の素材の剥離方法は，長方形の素材の小口から，節理と直行させることで長方形の素材に幅が規制され，縦長剥片状の素材を獲得する。

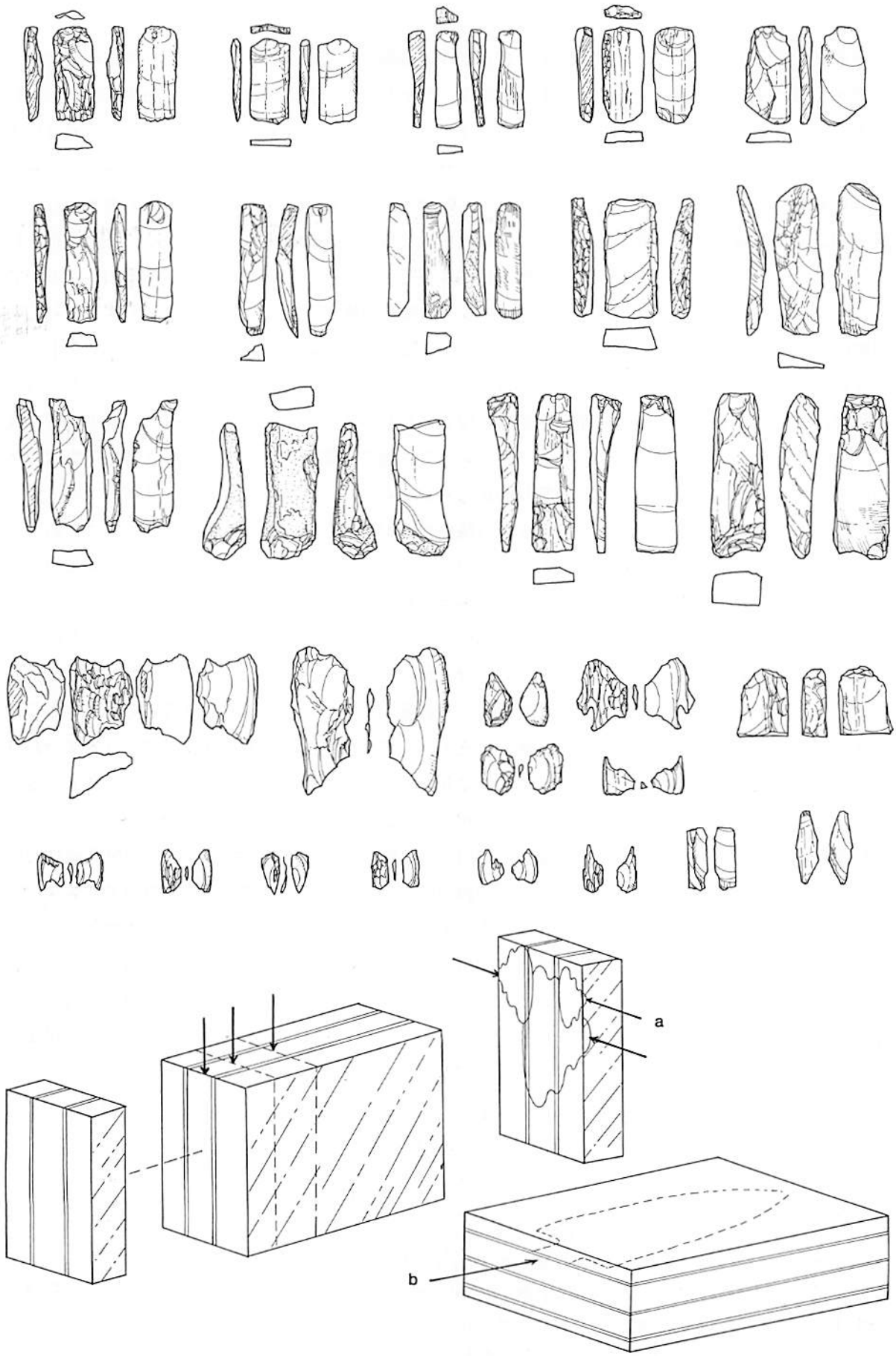
このような剥離技術の中で，縦長剥片を連続して剥離することにより安定した素材を獲得することが可能になるのである。他の石庖丁・石鎌・石庖丁の素材獲得方法は，**第72図b**のような剥離をおこない，節理に逆らわずに剥離をおこなうことができ，力に左右されずにスムーズに剥片を剥離することができる。石庖丁や石剣のように，刃部が長く対象物に垂直に力を加えないものについては，この素材獲得方法が理にかなっている。本遺跡から出土した縦長剥片及び横長剥片は，先の縦長剥片剥離技術を端的にあらわしており，板状の素材から扁平片刃石斧までの一連の工程を遺跡内でおこなったことが如実に理解できる。この一連の工程，素材獲得（素材の原産地については今後の検討が必要）→剥片剥離→研磨→製品までの工程が遺跡内でおこなわれていたことは，石器製作集団の存在を伺わせる。また，その石器の量の多さについては，交易品として意図的に作られたことも視野に入れる必要がある。

（福田）

註1　木製品の出土量が多い青谷上寺地遺跡では，扁平片刃石斧や方柱状片刃石斧が多く出土するという傾向は見られない。また，扁平片刃石斧の中でも刃部幅が広いものが主体のようだ。

【参考文献】

長沼　孝　1986「1.石の武器」『弥生文化の研究』9　－弥生人の世界－　雄山閣
武末純一　1987「石庖丁の計測値」『東アジアの考古と歴史』同朋者出版
下條信行　1995「大陸系磨製石器の時代色と地域色」『考古学ジャーナル』No391
山口譲治　1995「北部九州の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル』No391
北條芳隆・禰冝田佳男編　2002『考古資料大観』第9巻
弥生・古墳　石器・石製品・骨角器　小学館



第72図　剥片類実測図（1／4）と扁平片刃石斧の素材獲得模式図

・石　　鎌（第73図～第75図）

石鎌とは，平面長方形で長軸の一辺に刃部を持ち，短軸の一端が嘴状になる石器である。原の辻遺跡出土の石鎌は，時期を問わなければ管見に触れただけでも470点以上と，石製収穫具としては石庖丁を遙かにしのぐ出土量を誇り，原の辻遺跡における農耕活動を特徴づける石器として重要な位置を占めている（中尾2004ａ・2004ｂ）。ここでは，基本的な形態分類を中心に，若干の分析を加えることにする。

石鎌の分類は，これまで整形技術（磨製・局部磨製・打製）および刃部形態（内湾刃・直線刃）を中心に，法量や基部の形態（繰り込みの有無）を加味して行われてきた（藤田1964，松尾1984，水島1985）。原の辻遺跡出土の石鎌は，石材の特徴から局部磨製を基本とし，刃部形態では内湾刃と直線刃が認められるものの，特に内湾刃は研ぎ減りによる変形の可能性も捨てきれない。また，原の辻遺跡出土例は破片資料が多く，全体的なプロポーションから刃部形態について検討できる資料はごく少量にすぎない。したがって，ここでは使用による変形が比較的少ないと考えられる基部形態に着目して分類を行い，刃部形態については二次的な特徴として分析することにする。

基部形態に着目すると，原の辻遺跡出土の石鎌は以下の３つに分類できる。

・Ａ類　背面と基部側面の角度が鈍角になるもの。

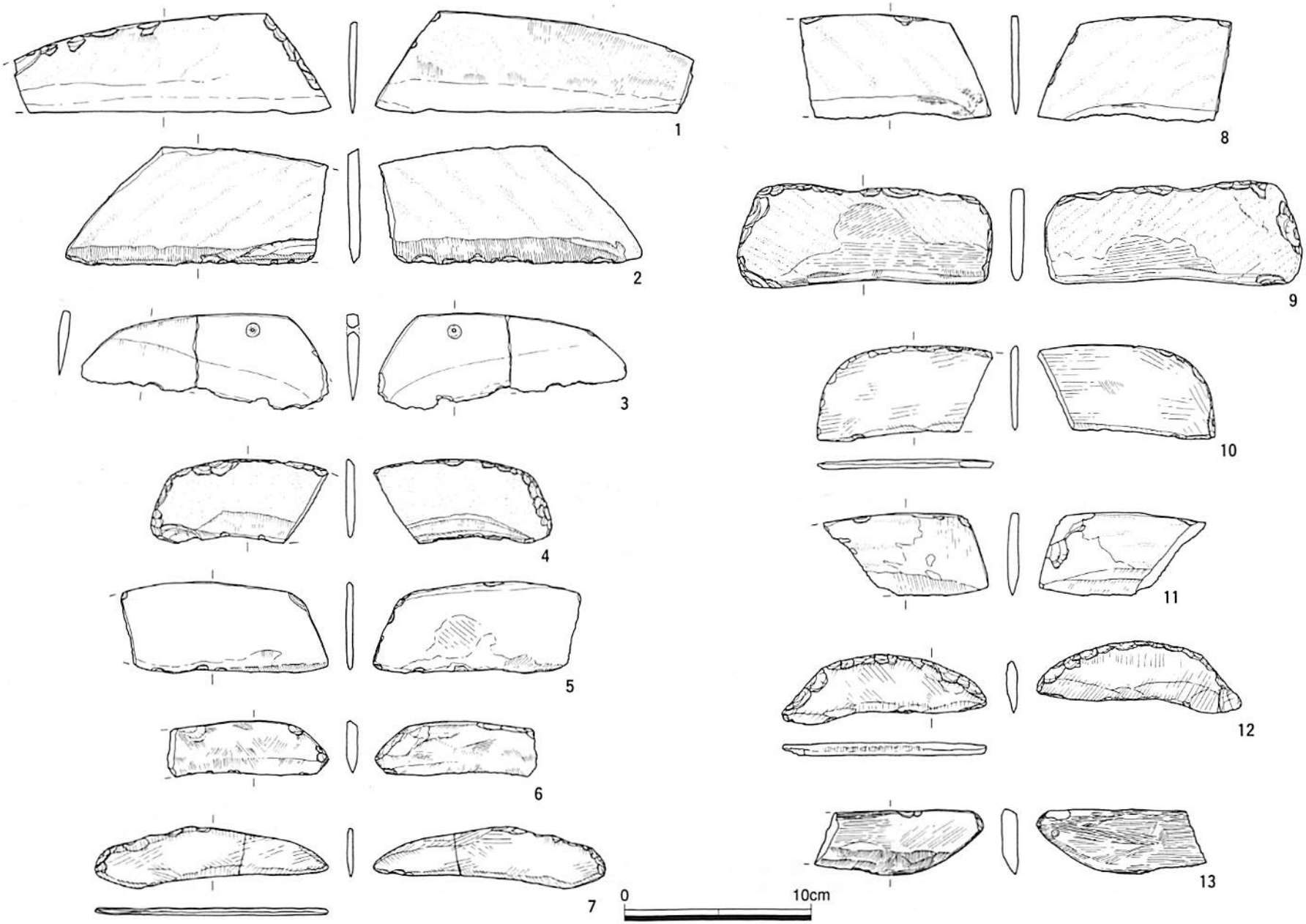
・Ｂ類　背面と基部側面の角度がほぼ直角になるもの。

・Ｃ類　背面と基部側面の角度が鋭角になるもの。

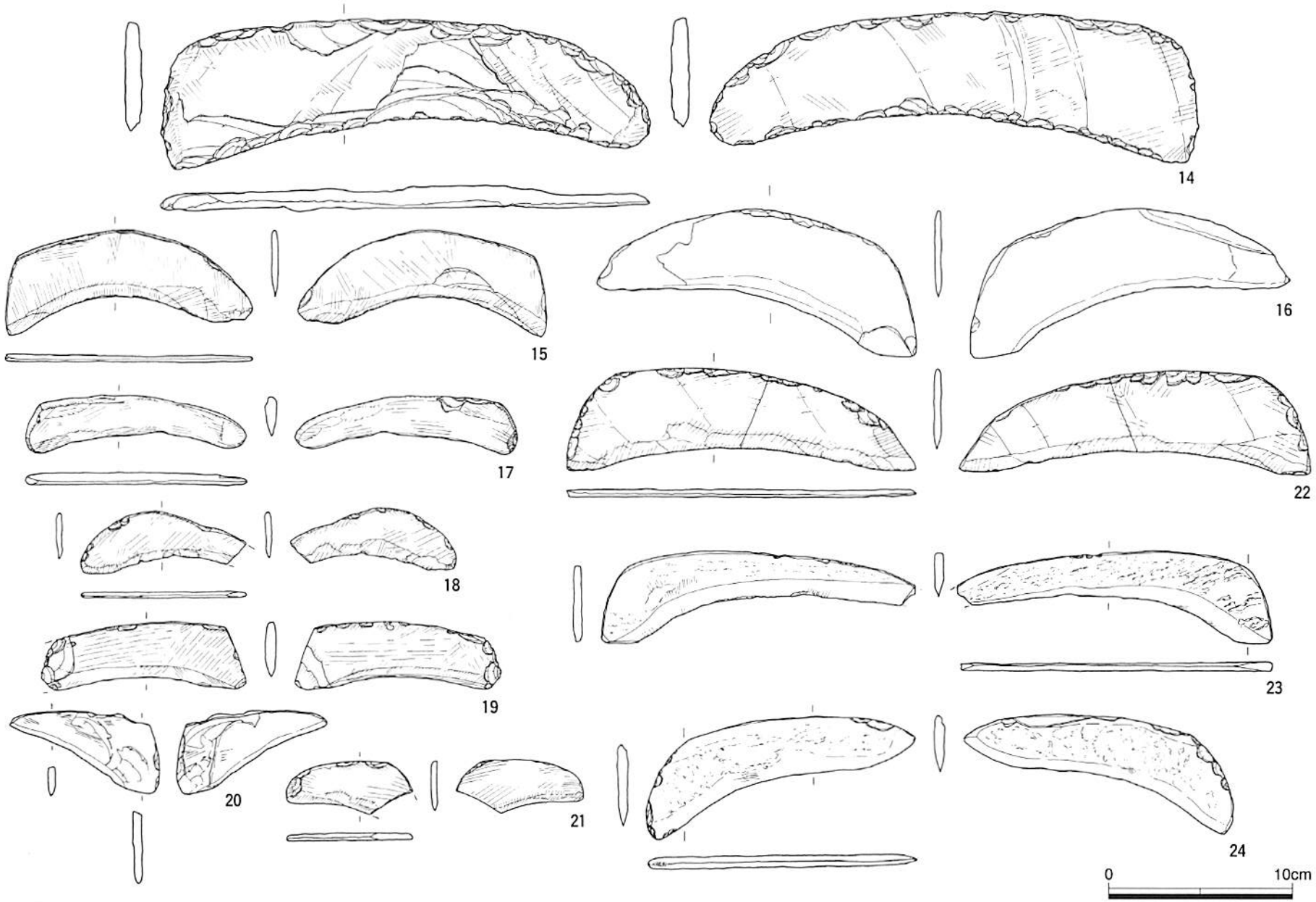
刃部形態に着目すると，**直線刃**と**内湾刃**に分けられる。

石鎌の石材は頁岩が主体となるものの，色調や材の細かな特徴で複数に分けられる。これらの頁岩を節理に沿って剥離し，長方形の板状素材に整えた後，長軸両側縁を中心に調整剥離を加え，剥離部分を中心に研磨して仕上げている。刃部の加工は基本的に両刃であるが，片刃に近い偏刃のものも認められる。各類別の特徴としては，Ａ類には直線刃と内湾刃があり，それぞれ大型（全長20cm以上）・中型（全長15cm～20cm）・小型（全長15cm未満）に分かれる。内湾刃のものは中型～小型が主体で，直線刃のものは中型を主体とするものの，欠損品の在り方から大型のものもかなりの割合で含んでいたものと推測される。Ｂ類も同じく直線刃と内湾刃が認められるものの，数量的には圧倒的に直線刃が多い。大きさは中型を主体としながらも，大型もかなりの割合で認められる。Ｂ類の特徴は，刃部を中心に粗い剥離痕をとどめる例が多い点にある。未成品の可能性もあるが，局部磨製のＢ類がごく少量であることから，ここでは打製石鎌として使用されていた可能性を指摘しておく。Ｃ類は出土例が少なく，確認できたのは３点にすぎない。大型と小型があり，いずれも内湾刃である。

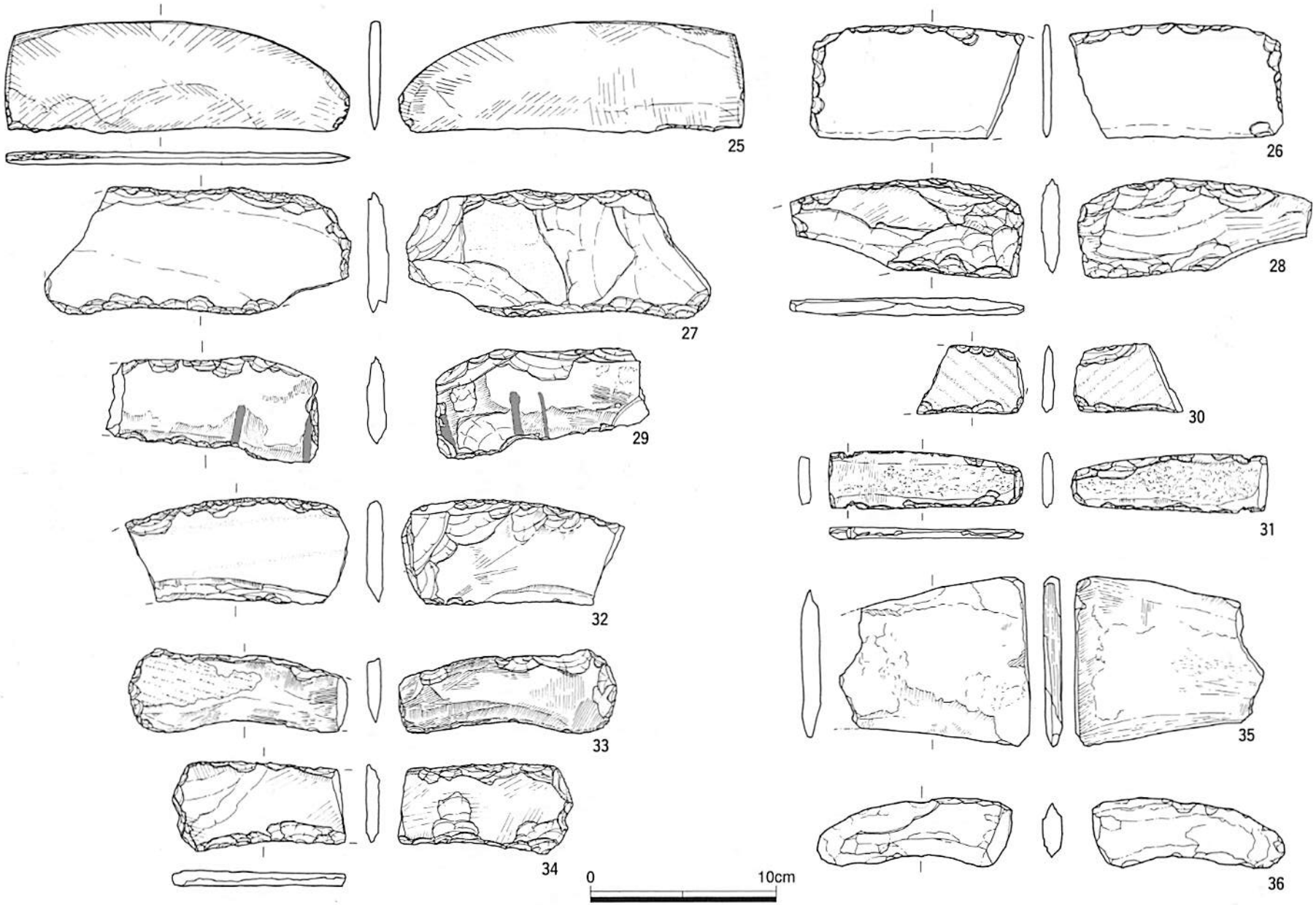
これらの石鎌は弥生時代中期を中心に使用され，前期まで遡る確実な資料は現在のところ確認できない。弥生時代中期には，Ａ類～Ｃ類までが出そろい，竪穴住居跡内からは中型のＡ類直線刃とＡ類内湾刃が共伴した例もあることから，これらがさまざまに組み合わさって使用されたものと考えられる。弥生時代後期以降は出土数が減少するものの，Ａ類を中心に利用され続け，古墳時代前期の住居跡からは直刃の鉄鎌と共伴している。刃部形態や大きさ，および原の辻遺跡出土植物種子の在り方から，Ｂ類は現在の鉈鎌のような機能，Ａ類・Ｃ類は穀物（特にコムギ・ヒエなどの雑穀類）の収穫具であった可能性が考えられる。



第73図　石鎌実測図①（S＝1／3）



第74図　石鎌実測図②（S＝1／3）



第75図　石鏃実測図③（S＝1／3）

・石製支脚（第76図・第77図）

石製支脚とは，玄武岩や流紋岩を円柱状に加工したもので，煮炊きの際に移動式の支脚として用いられたものである。壱岐島内の弥生時代遺跡からは，この種の石器が大量に出土しており，「支脚形石製品」・「烏帽子形石製品」などの名称で報告されてきた。ここでは，後述する被熱痕の分析から，この石器が複数組み合って支脚として利用されたことが明確なことから，「石製支脚」と呼称する。

石製支脚の特徴は，烏帽子形とでも称すべき特徴的な平面形態のみならず，背面に「つまみ」を持つ例が認められる点にある。この「つまみ」の付けかたに着目して分類を行う。

・A類　背面に突起を削りだしてつまみとしたもの。

・B類　背面に突起を持たず，体部を削ってつまみを付けたもの。

背面から体部にかけて面的に削ることでつまみをつくるものを**B1類**，背面付近に溝を彫り込んでつまみとするものを**B2類**とする。

・C類　背面につまみを持たないもの。

また，石材の面でも**Ⅰ）多孔質で比較的軽量なあずき色の玄武岩，Ⅱ）あずき色の玄武岩である点は石材Ⅰと共通するが，緻密で比較的重量感のある玄武岩，Ⅲ）緻密で重量感のある灰白色の流紋岩，**に分けることができる。

石製支脚のなかには，使用の結果ついたと考えられる被熱痕の残る例がある。特に，石材Ⅲでは比較的明瞭に観察できる例が多い。被熱痕は，火を受けることで赤褐色に変色した部分と，煤がついて黒色になった部分で構成される。石製支脚は，腹部を中心に赤褐色の被熱痕が，側面から頭部にかけて黒色の煤が付着する例が多い。このことから，石製支脚の利用方法としては，腹部が向かい合うように3個体以上配置し，その上に土器をおいて下から火をかけていたものと推測できる。

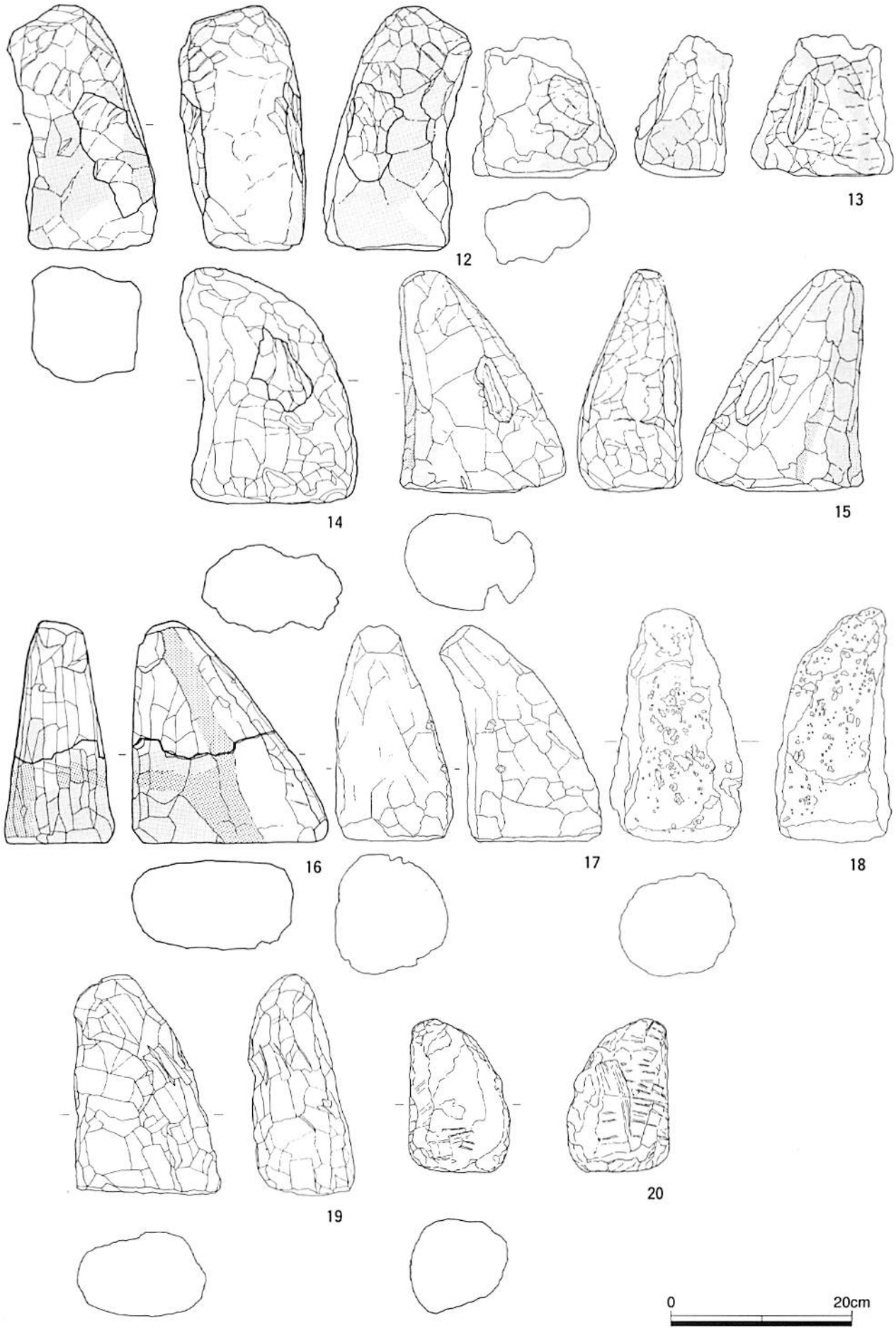
石製支脚の器高に着目すると，20cm以上の大型品と15cm前後の小型品に分けられる。大型品はA類～C類全てが存在し，量的にも多くこの石器の主流となるものである。小型品については，C類が多い傾向にあるものの，A類～C類全てが認められる。支脚の高さの違いは，使用する際の燃料の量，ひいては火力の差と相関するものと考えられ，時期差や調理による使い分けなどが存在した可能性が考えられる。

石製支脚は環濠の上層から出土する例が多く，ほぼ弥生時代後期後葉～古墳時代前期に限定できる。この時期は，甕・壺などの器種において底部の丸底化が著しい時期であり，石製支脚の登場もこれと連動していることが想定される。また，先述の通りつまみの付け方や石材，大きさなどにさまざまなバリエーションが認められ，弥生時代後期後葉から古墳時代前期という短期間のうちに形態的にも機能的にもさまざまな変遷を遂げている可能性が考えられる。土製支脚との関連性も含めて，原の辻遺跡における調理形態の変遷を探る上で重要な遺物である。

・磨石類・石皿類（第78図）

磨石・敲石・凹石（以下「磨石類」と称す）および石皿類は，原の辻遺跡で最も出土数の多い石器である。これらの石器は，磨る・砕く・割るといった機能を担ったと考えられ，対象は穀物や堅果類といった植物種子に限らず，赤色顔料の精製や石器・鉄器の製作時にも使用された可能性がある。ここでは，実際の使用の場と考えられる竪穴住居跡出土資料を中心に，その特徴について概観する。

第76図　石製支脚実測図①（1／6）（※アミカケは被熱痕）



第77図　石製支脚実測図②（1／6）（※アミカケは被熱痕）

原の辻遺跡住居跡出土の磨石類・石皿類は，平面形態や使用痕の特徴から次のように分類できる。

・磨石類Ａ類　平面形が円形もしくは楕円形のもの。

Ａ１類　平坦面に摩耗痕が面的に残るもの。

Ａ２類　平坦面に敲打痕が残るもの。面的に敲打痕が広がるものを**Ａ２－Ⅰ類**，敲打痕が集中するものを**Ａ２－Ⅱ類**とする。

Ａ３類　平坦面に摩耗痕と敲打痕が併存するもの。Ａ２類と同様，敲打痕の広がりで**Ａ３－Ⅰ類**と**Ａ３－Ⅱ類**に細分する。

Ａ４類　平坦面の中央部が円形に窪むもの。敲打痕や摩滅痕が伴うものもこれに含める。

・磨石類Ｂ類　平面形が棒状となるもの。

扁平なものや円柱状のものもあるが，基本的に端部と稜線部分を中心に敲打痕が認められる例が多い。

※Ａ類には側面に敲打痕もしくは摩耗痕を持つものもあるが，これらもそれぞれの類別に含める。

・石皿類Ⅰ類　扁平な礫を利用するもの。

Ⅰ－ａ類　機能面にフラットな摩耗痕もしくは敲打痕が広がるもの。

Ⅰ－ｂ類　機能面全体が緩やかに湾曲するもの。

・石皿類Ⅱ類　厚みのある円礫を用いるもの。

Ⅱ－ａ類　機能面にフラットな摩耗痕もしくは敲打痕が広がるもの。

Ⅱ－ｂ類　機能面全体が緩やかに湾曲するもの。

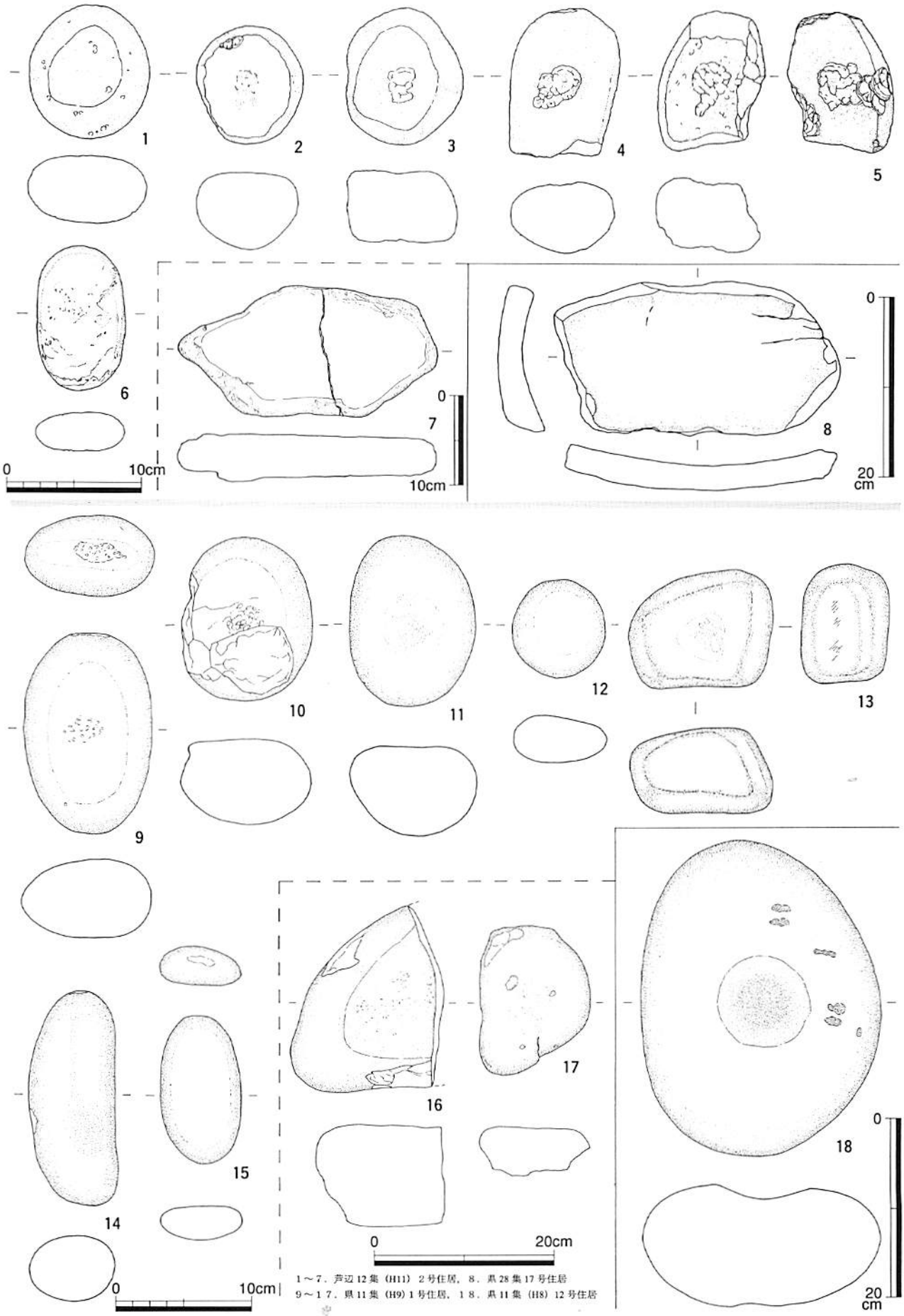
Ⅱ－ｃ類　機能部が円形に窪むもの。

以上の分類に基づくと，住居跡出土資料の組み合わせは以下の通りとなる。

表15　竪穴住居跡出土磨石類・石皿類の組成表

遺構名	時期	報告書	磨石類Ａ類						磨石類Ｂ類	石皿類Ⅰ類		石皿類Ⅱ類		
			Ａ１	Ａ２		Ａ３		Ａ４		Ⅰ－ａ	Ⅰ－ｂ	Ⅱ－ａ	Ⅱ－ｂ	Ⅱ－ｃ
				Ａ2-Ⅰ	Ａ2-Ⅱ	Ａ3-Ⅰ	Ａ3-Ⅱ							
12号住居	中期後葉	芦辺12集（H11）		1	1	1			1					
11号住居	中期後葉				1				1					
6号住居	中期中葉				1	1								
16号住居	古墳前期					1	1		1					
14号住居	中期								2					
2号住居	中期中葉～後葉		1	1	2	1	1	1		1				
7号住居	中期？				1		3		4			1		
1号住居	中期～後期	芦辺12集（H12）	1				1							
4号住居	中期		2											
6号住居	後期？	芦辺13集								1				
3号住居	後期前葉						1							
2号住居	終末							1	1					
1号住居	後期～古墳前期	芦辺15集	1	1	2	1	2	1	6	1		2		
7号住居	中期～古墳前期		1		2	1	1		2					
6号住居	古墳前期				2		1		1			1		
1号住居	古墳前期	県11集（Ｈ８）			1				1					
7号住居	後期後葉～終末				1							1	1	
12号住居	古墳前期													1
10号住居	古墳前期			1	2	1			1			1		
5号住居	古墳前期		1	1		2								
11号住居	後期		1									1		
2号住居	古墳前期				1	1			1					
1号住居	古墳前期	県11集（Ｈ９）	1		2	1	1		3	1		3		
13号住居	古墳前期											1		
3号住居	古墳前期		1									2		
14号住居	後期後葉～終末				1									
1号住居	古墳前期	県26集			2					1				
8号住居	古墳前期	県28集			1							1		
17号住居	中期中葉～後葉										1			

両者の組み合わせは，磨石類Ａ類に石皿類Ⅱ－ａ類もしくはⅠ－ａ類が伴うパターンを基本とする。Ｂ類には石器製作用の叩き石や，顔料をすりつぶす石杵なども含まれており，ほとんどが植物加工以外の用途に供されたものであろう。植物加工具と考えられるＡ類は，Ａ２－Ⅱ類が最も多く出土し，



第78図　磨石類・石皿類実測図（1／4）

ついでＡ３－Ⅱ類・Ａ３－Ⅰ類・Ａ１類がほぼ同数出土している。このことから，石皿の平坦面に対象物をのせて集中的に敲打したり，磨石の平坦面ですりつぶす作業が中心であったと考えられる。住居跡内での構成をみると，多様な属性を持つ磨石類を満遍なく装備しており，この点は弥生時代中期～古墳時代前期にかけて共通する特徴である。

原の辻遺跡からは，粉食を前提とするコムギが少なからず出土しており（中尾2004ａ・2004ｂ），磨石類Ａ類や石皿類Ⅱ－ａ類はコムギの粉砕・製粉において重要な役割を果たしたものと考えられる。

・漁　撈　具（第79図～第81図）

原の辻遺跡出土の石製漁撈具には，石錘・碇石および双角状礫器がある。

4-1. 石錘（第79図・第80図22～31）

石錘には，緊縛のためのこしらえによって多くのバリエーションが認められる。ここでは，この縄かけ部の作出技術によって分類を行う。

・Ａ類　溝によって緊縛部を作り出すもの。

Ａ１類　長軸に１条溝を巡らすもの（**第79図１～11**）。

Ａ２類　長軸に１条，短軸に１条溝を巡らすもの（**第79図12～17**）。

Ａ３類　長軸に２条，短軸に１条溝を巡らすもの（**第79図18**）。長軸方向に多条に巡らすものもこれに含める（**第79図21**）。

Ａ４類　長軸に１条，短軸に多重に巡らすもの（**第79図19・20**）。

・Ｂ類　穿孔によって緊縛部を作り出すもの。

Ｂ１類　上下端部に１孔ずつ平行に穿孔するもの（**第80図24～26**）。

Ｂ２類　上下端部に１孔ずつ垂直方向に穿孔するもの（**第80図22・23**）。

・Ｃ類　溝と穿孔によって緊縛部を作り出すもの（第80図27～29）。

Ｃ１類　体部に１孔を施し，表裏の穿孔部をつなぐように体部上半から頭部にかけて溝が巡るもの。

Ｃ２類　体部に上下２孔を施して表裏の穿孔部を溝でつなぐもの。

・Ｄ類　端部を粗く打ち欠いて緊縛部を作り出すもの（第80図30・31）。

Ｄ１類　長軸両端を打ち欠いて緊縛部とするもの。

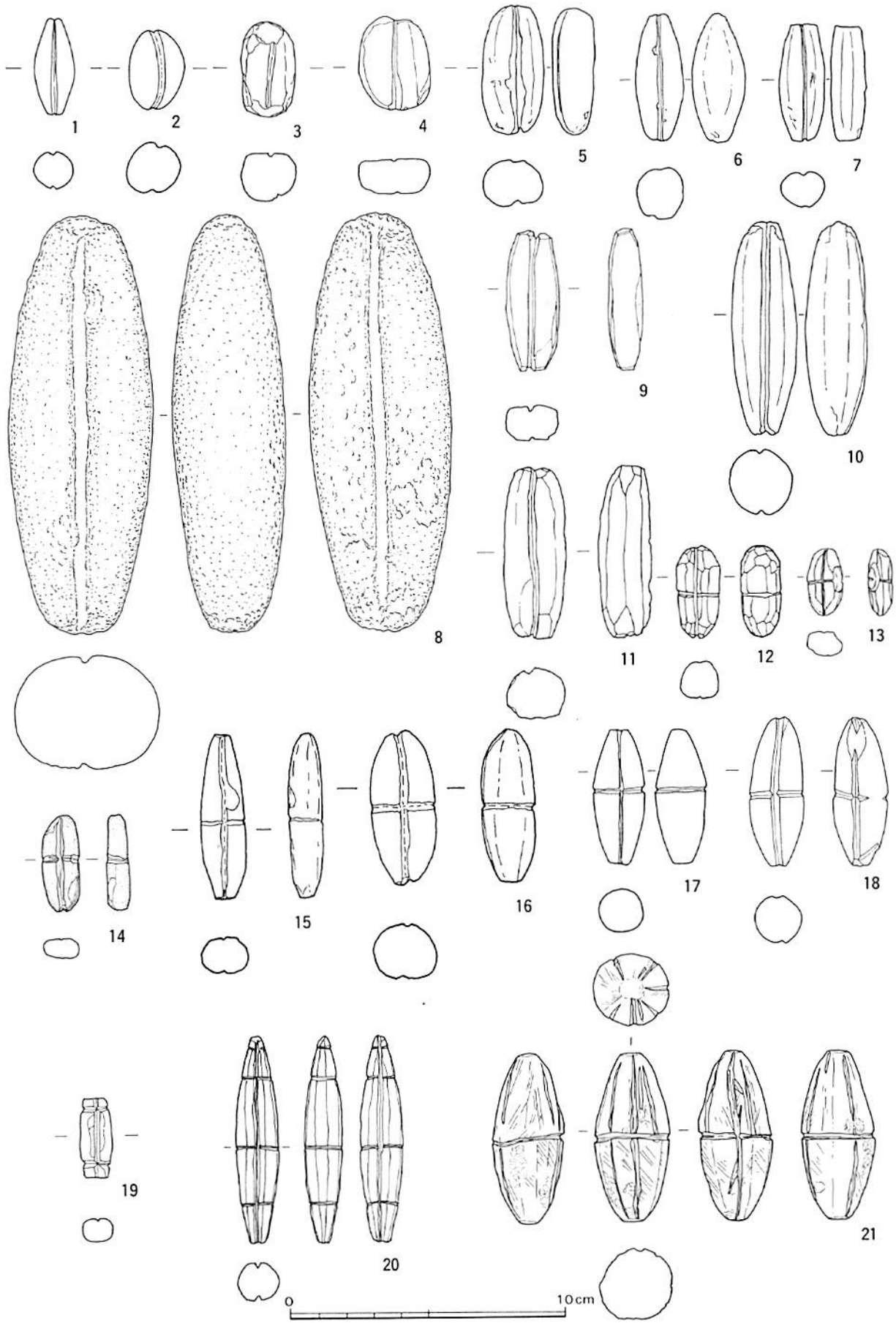
Ｄ２類　短軸両端を打ち欠いて緊縛部とするもの。

Ｄ３類　長軸両端および短軸両端を打ち欠いて緊縛部とするもの。

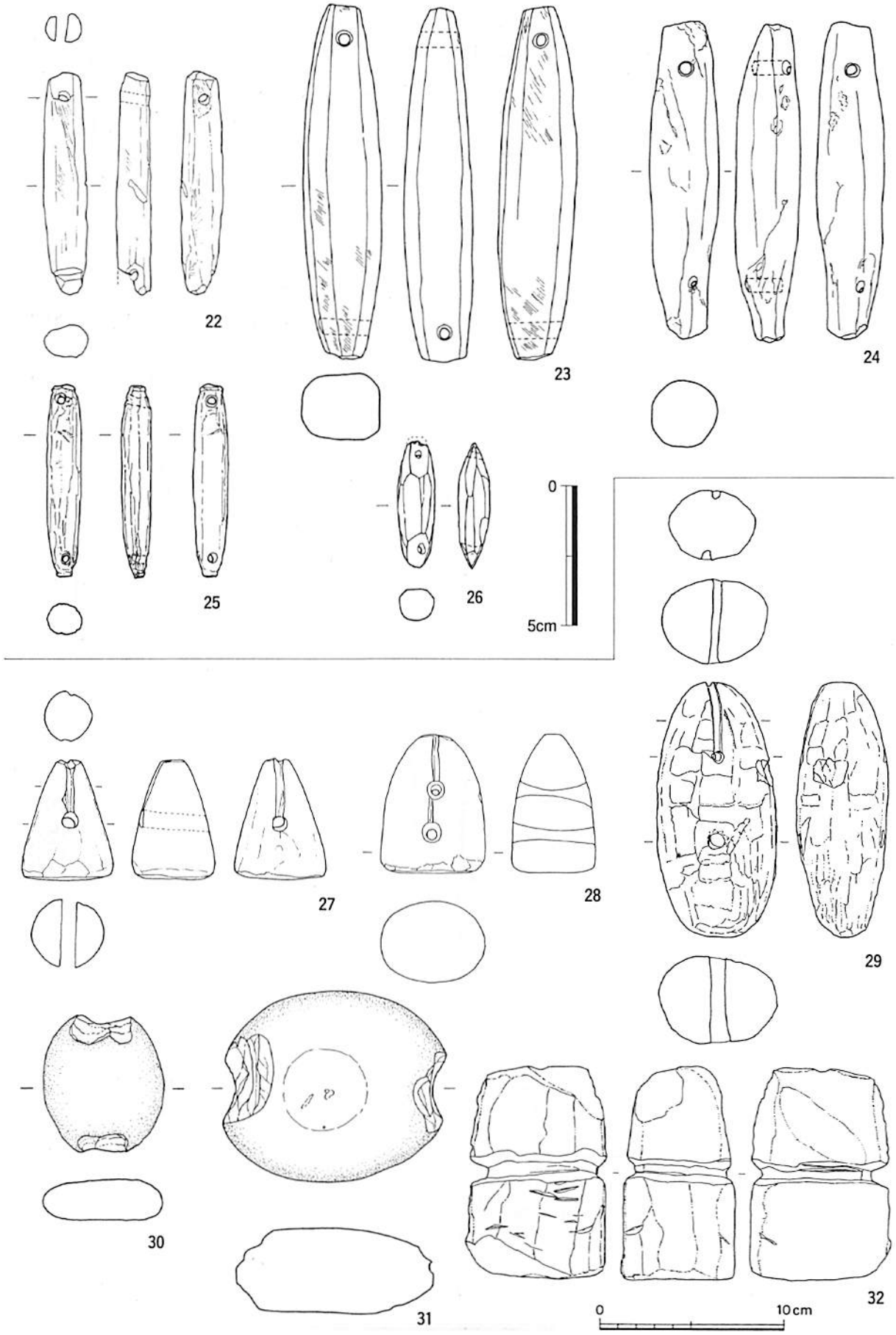
Ａ類は「有溝石錘」，Ｂ類は「有孔石錘」である。Ｃ類は滑石製を主体とし，いわゆる「九州型石錘」と呼ばれる一群に相当する（下條1984）。Ｄ類は「礫石錘」もしくは「打ち欠き石錘」と呼ばれるもので，縄文時代からの流れをくむものである。

重量に着目すると，Ａ類はいずれも100ｇ未満の小型に属し，Ｂ類～Ｄ類については100ｇ未満の小型と100ｇ以上の大型に分けられる。石錘は釣漁や網漁といった用途に応じて多様に利用されたことが考えられ，このような重量の違いもこれを反映したものと考えることができる。

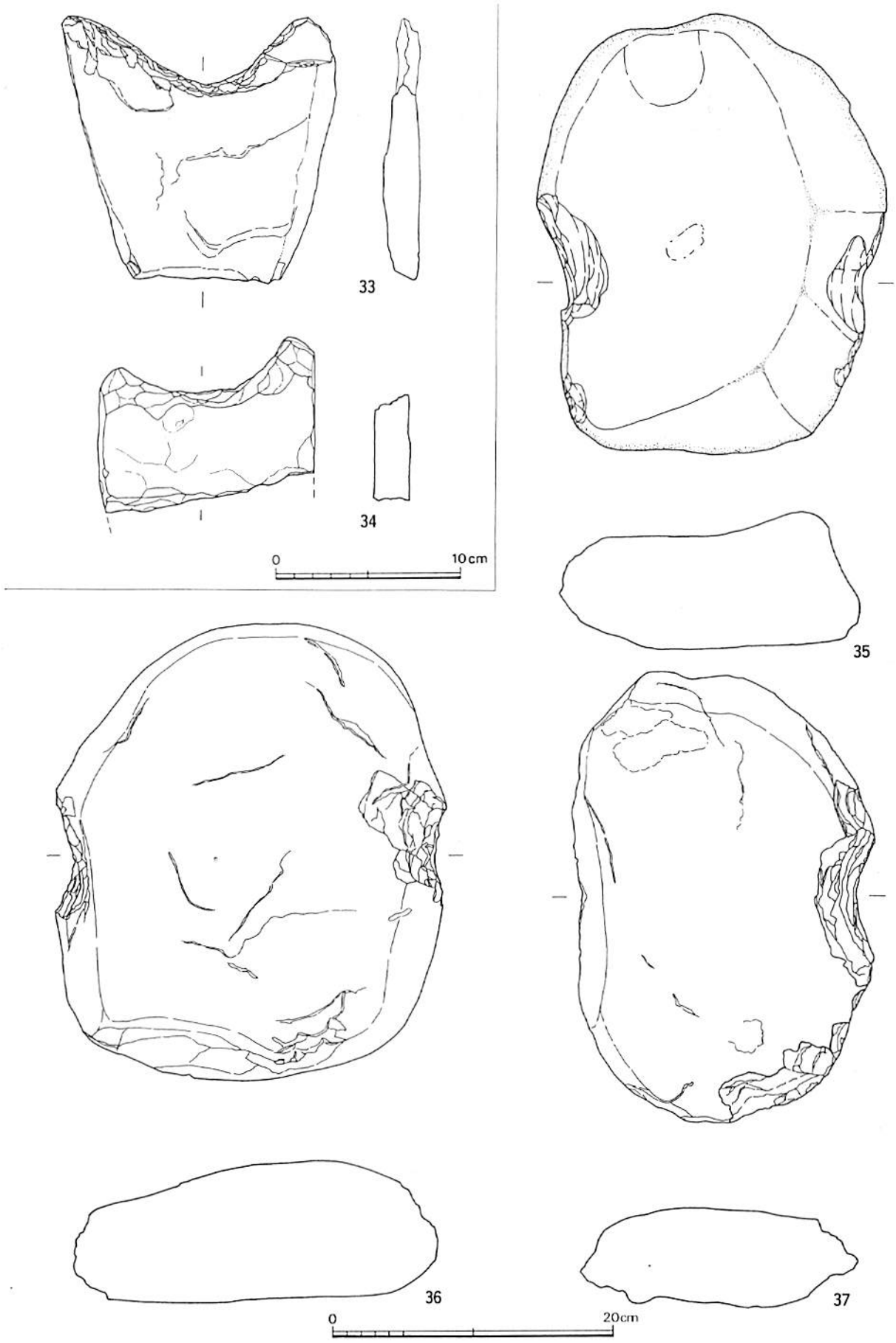
時期が比較的限定できる資料としては，弥生時代中期～古墳時代前期のものが認められる。弥生時代中期には，Ａ類を中心に100ｇ未満の小型が主として利用され，弥生時代中期末～後期初頭にＣ１類が登場して以降，大型が加わる。特に弥生時代後期後葉以降は，緊縛部の作出方法に多様なバリエー



第79図　石製漁撈具実測図①（1／2）



第80図　石製漁撈具実測図②（1／2，1／3）



第81図　石製漁撈具実測図③（1／3，1／4）

ションが認められるとともに，500ｇを超えるＤ２ａ類をはじめとして，大型が主体となっていく。また，縄文時代に主体であったＤ類もこの時期に復活し，大型として組成に加わることになる。

このように，石錘は重量化と緊縛部の複雑化という２つの方向性が看取される。

4-2. 浮　　子（第80図32）

軽石製で緊縛のための溝を有するものをこれに含めた。**第80図32**は，角柱状で短軸に溝が一周する。弥生中期末～弥生終末の環濠内からの出土で，同様の環濠からは，ややいびつではあるが，短軸に一周溝を巡らす同様の製品が出土している。

4-3. 碇　　石（第81図35・37）

形態としてはＤ類石錘に類似するものの，他の石錘に比べて重量が非常に重い一群に相当する。ここでは，５kgを超える重量の石錘を碇石とした。

碇石も石錘と同様，綱に緊縛して使用されたものと考えられる。したがって，石錘と同様に緊縛部の作出技術に着目して分類すると，短軸を粗く打ち欠く例が圧倒的に多い。これは，緊縛部の作出技術としては石錘Ｄ２類と共通するものである。また，このほかにも，人為的に緊縛部を作らない自然礫を用いたと考えられる例もあるが，短軸に緊縛部を持つ点は共通している。

時期の明確なものは，弥生時代中期に集中する傾向にある。特に西側低地部一帯の環濠や河道内から出土する例が多く，時期的にも地理的にも船着き場遺構との関連が注目される。

4-4. 双角状礫器（第81図33・34）

扁平な礫の一辺を打割によって大きく抉り，２つの突起を作り出したものである。原の辻遺跡では２例確認されている。いずれも突起の先端部から内湾部にかけて摩滅痕が観察できる。いずれも時期は限定できないものの，弥生時代中期～後期と考えられる。この石器は貝類の採取や処理に関わる遺物と考えられ，弥生時代後期を中心に島原半島を中心とする有明海沿岸で大量に出土することが指摘されているが（松藤1987），壱岐ではあまり使用頻度は高くなかったようである。　　**（中尾）**

【文献】

藤田等　1964「大陸系石器－とくに磨製石鎌について－」『日本考古学の諸問題』考古学研究会十周年記念論文集

松尾泰子　1984「弥生時代の磨製石鎌について」『西部瀬戸内における弥生文化の研究』山口大学人文学部考古学研究室研究報告第３集，山口大学人文学部考古学研究室

水島稔夫　1985「石鎌」『弥生文化の研究』５，道具と技術１，雄山閣

中尾篤志　2004ａ「「一支国」における生産基盤－原の辻遺跡出土農耕関連遺物の検討を通して－」『考古論集』河瀬正利先生退官記念論文集　広島大学

中尾篤志　2004ｂ「弥生時代における植物利用－原の辻遺跡におけるケーススタディー－」『日・韓交流の考古学』九州考古学会・嶺南考古学会第６回合同考古学大会発表要旨集

松藤和人　1987「双角状石器小考」『考古学と地域文化』同志社大学

下條信行　1984「弥生・古墳時代の九州型石錘について」『九州文化史研究所紀要』29

・砥　　石

1．はじめに

今回報告するのは，平成６年度調査からの10カ年分の中から所属時期が特定できるものを抽出し，54点を取り上げた。時期的には弥生時代前期末から古墳時代前期までの資料がある。出土地点は，低地部及び丘陵部と広範囲にわたっている。

砥石の考察をおこなうにあたっては，さまざまな文化現象を考える必要があり，「物質文化の分類体系」（註１）について，今一度考察し，整理をして稿を進めたい。現在我々が目にする砥石は，製作され使用された結果の形態であるが，砥石はそれ自体が目的物ではなくて，なにか他の利器（磨製石斧等の石製品等の他，銅製品，鉄製品等）を製作するための工具である。おそらくは，目的物をより早く製作し良いもの手に入れるために砥石には合理的なものが求められたであろうから，制作者自身の体の動きも考慮したものになるだろう。これは「身体技法」の考慮といえる。また，途中で壊れた砥石を利用できる時には再利用する場合もあっただろう。この場合は最初に想定していたものとは違うのでバリエーションの変化ともいえる「変異」である。いくつかのタイプの違う砥石をうまく利用して生産性をあげたかもしれないし，状況によりシステムを「変異」させたかもしれない。粗砥・中砥・仕上砥とそれぞれ分けて効率化したことも考慮しなければならない。

また，製作については，「製作場所」，「製作時期」，「製作者」を考慮しなければならないだろう。「製作場所」については，基本的に砥石が発掘された所は，砥石が使用済みになり廃棄ないしは遺棄されたところであり，「製作場所」そのものをあらわすものではないが，その近くで製作されたと考えてもいいのではないだろうか。「製作時期」については，供伴する土器により時期を類推しているが土器のバリエーションにより，短期間に限定できることもあれば，比較的長い期間を想定せざるを得ない場合もある。「製作者」については，遺跡内に生活していた人々ということになるが，国産の弥生土器の他，朝鮮半島からの搬入土器も認められるので，彼の地の人々もその対象となる。

最後に「使用寿命」について，基本的には機能を果たさなくなれば廃棄されると思われるが，今回あげた中には，まだ使えるものも混ざっていることも考えられる。同一タイプでも最後まで使用され壊れたもの，まだ使用可能であり原型を保っているものの２種類があることも考えられるだろう。

2．弥生時代前期末～中期初頭のもの（第82図１～７）

１～３は，丘陵北西部の低地，不條地区の平成12年度特定調査区Ｂ区２号溝から出土したものである。**１**と**２**は別個体であるが，おそらく**41**の資料と同一種であると考えられ，中間部が欠損しているのであろう。上で述べた最後まで使用され壊れたものと，まだ使用可能なものとの違いの代表例ではないか。ちなみに**41**も側面図で見た細くなった中央部で一度折れており，細くなった故に折れやすかったものと考えられる。**１・２**ともに５面体の砥石面をもっている。**１・２・41**の使用方法については，他の砥石とは別の方法を考慮した方がよさそうで，一つの可能性としてこの砥石を立てて使ったかもしれない。**41**の場合砥石面の長さが46.4cmと長く，砥石で研ぐ場合，人間の腕の１回の運動量としては一番多くの仕事量が可能で，「身体技法」的に優れているのではないか。**３**は，７面の砥石面をもつものである。**４～７**も**１～３**と調査区は違うが連続する同じ２号溝から出土したもので，これも**１～３**と同一時期のものである。**７**も11面の多くの砥石面をもつものである。**１～７**の砥石に伴って石鑿・石斧等が出土しているので，それらのものを７で粗加工し，**１・２・41**等で仕上げを行うという

システムを考えてみたいところではあるが，積極的に実証できる証拠があるわけではない。

3．弥生時代中期前葉～中期前半（第82図８～11）

8は，丘陵部高元地区の平成６年度調査に12号住居跡から出土した。**9～11**は，不條地区平成12年度調査区出土のものである。上記の**4～7**と同一の調査区であるが，こちらは**9・10**が１号土壙からの出土，**11**が22号土壙からの出土である。砥石自体は，特に特徴を持つようなものではない。供伴遺物として，石鑿未製品・磨製石鏃・石庖丁等があるので，それらの製作，特に未製品が石鑿の製作に関係したことも考えられるが，この**9～11**の砥石のみで製作したとは考えにくいので，他に補完する砥石があったのかもしれないし，別の考えとしては，仕上げは別の場所で仕上砥石でおこなったかもしれない。

4．弥生時代中期中頃～後半（第82図12～17）

丘陵中心部の原地区で，平成15年度に実施した調査で確認された。砥石・玉砥石の他に原の辻遺跡では初めてである青銅製品の鋳型も出土している。弥生時代中期中頃までは，不條地区などの低地で行われていた石鑿・磨製石斧・磨製石鏃等の製作が，弥生時代中期後半は，丘陵部に上がり青銅製品の製作等も行われるようになる。**12・13**は，ともに尖端が尖ったものを研いだ痕跡が残っている。**13**は，砥面が窪んでおり，鏃を研いだものか。**14～16**は，不定形のもので，**16**は，石皿状の砥石である。**17**は，玉砥石である。**12・13**は，41のタイプの破損品（２を想定）の再利用も考えられる。

5．弥生時代中期末～後期初頭（第82図18～26）

丘陵北側低地，幡鉾川の河川改修に伴う平成６～８年度の調査時に出土したものである。**23～26**の不定形で比較的大きいものと，形を整えるもの**19～22・18**は，石材も細粒砂岩を用いており仕上げに使ったものか。それぞれ粗砥，中砥，仕上砥に分類可能である。

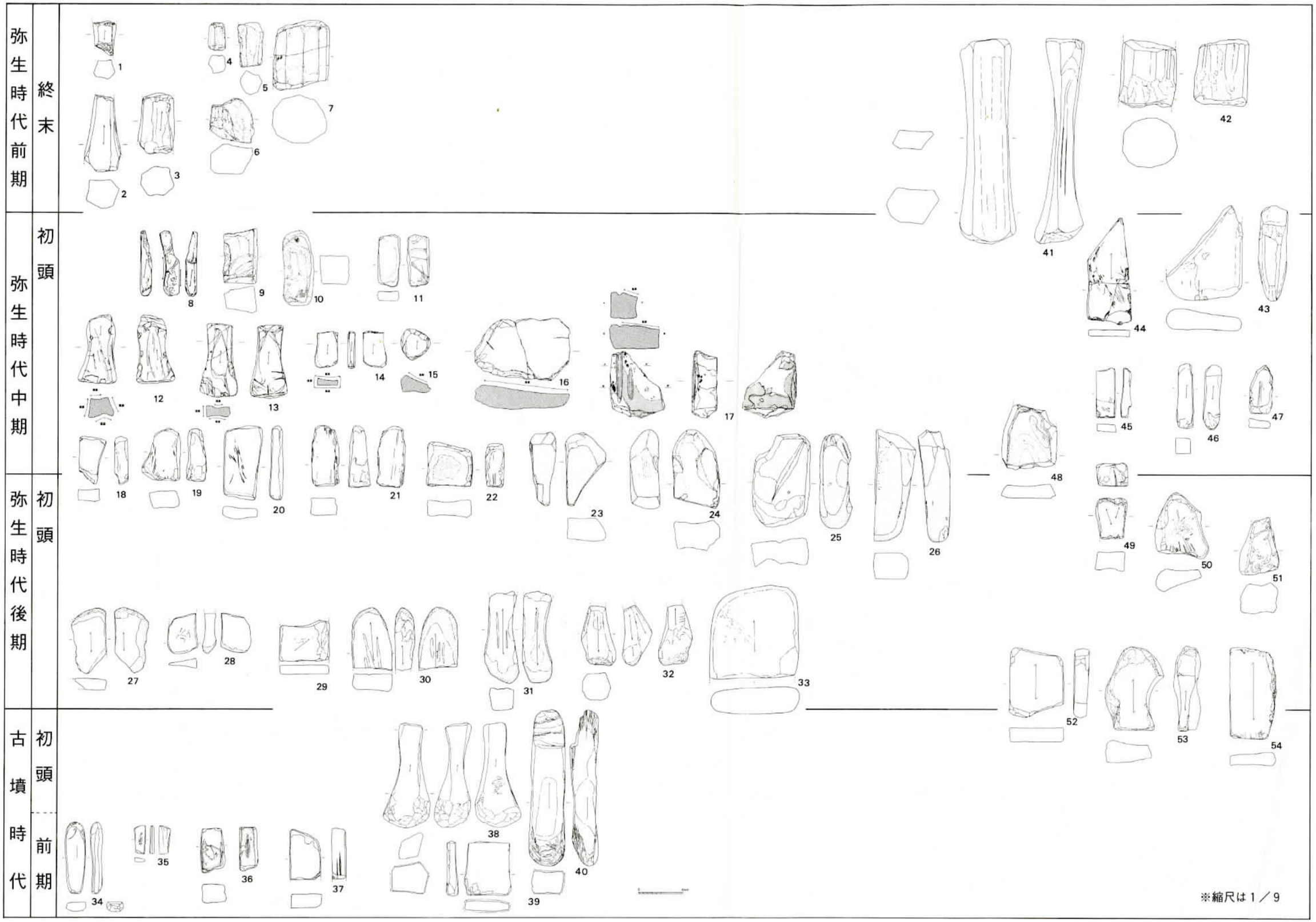
6．弥生時代終末～古墳時代前期（第82図27～33）

丘陵西側低地部八反地区で，平成14年度の調査で出土したもので，破損品が多く一概には述べることはできない。しかし、出土した７点に同型のものはないが，個々を細かにみていくそれぞれの特徴も認められる。**27・29**は，砥石面が平たく断面は長方形である。**28**は断面が三角形。**30**は，半欠品であるが，厚みがあり線状の条痕が残っている。**31**は，断面が正四角形に近くこれにも線条痕がついている。**32**は，２の資料と同一種類のものかもしれない。**33**は，石皿状の砥石である。

7．古墳時代初頭～前期（第82図34～40）

38～40は，古墳時代初頭のもので，丘陵西側低地部八反地区の平成14年度の調査時に出土したものである。**38**は，５面の砥石面をもち，長さ23.7cmで，**41**や**1**と**2**の合体したものと同一タイプだと考えれれる。ただ長さが**41**に比して短く年代が新しくなるにつれ短くなるのかもしれない。**40**は重さが２kgを越え地面に置いて使用するものであろう。基本的にほとんどのものが地面に置いて使用するものであろうが，**1・2・38・41**が立てて使用する可能性があるのは先述したとおりである。**34・35**は丘陵高台の祭儀場跡の調査時に出土したもので，**34**は，２号竪穴住居跡からの出土である。きれいに面取りしてあり，この砥石だけは手に持って対象物である道具の刃を研いだのではないか。**（村川）**

註１　後藤明　今月の言葉「考古学的なモノの見方」月刊考古学ジャーナル№513



第82図　原の辻遺跡出土砥石一覧

表16　砥石計測表

No	出土遺構名	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	供伴遺物	所属時期	文献	備　考
1	B区2号溝	砂岩	7.0	5.4	8.8	185.3	石鑿・石斧未製品	前期末～中期初頭	原21集	
2	B区2号溝	砂岩	17.8	8.4	6.7	1,020.5	石鑿・石斧未製品	前期末～中期初頭	原21集	
3	B区2号溝	砂岩	14.2	8.6	6.8	992.3	石鑿・石斧未製品	前期末～中期初頭	原21集	
4	2号溝	砂岩	6.6	4.0	4.2	140	片刃石斧　抉入石斧	前期末～中期初頭	原22集	
5	2号溝	砂岩	10.3	5.8	5.5	420	片刃石斧　抉入石斧	前期末～中期初頭	原22集	
6	2号溝	砂岩	10.3	10.2	7.0	820	片刃石斧　抉入石斧	前期末～中期初頭	原22集	研ぎ面11ヶ所
7	2号溝	砂岩	16.5	12.7	15.1	7,440	片刃石斧　抉入石斧	前期末～中期初頭	原22集	
8	12号住居跡	砂岩	14.9	4.2	3.1	180	磨製石斧・石庖丁等	中期前葉～中葉	芦9集	
9	1号土壙	砂岩	12.8	7.8	6.3	840	石鑿未製品・磨製石鏃	中期前半	原22集	石鑿工房跡？
10	1号土壙	砂岩	17.3	7.4	6.6	1,420	石鑿未製品・磨製石鏃	中期前半	原22集	石鑿工房跡？
11	22号土壙	砂岩	12.2	5.3	2.3	220	石鑿未製品・石庖丁	中期前半	原22集	石鑿工房跡？
12	SD－01	細粒砂岩	16.0	8.0	4.1	990		中期中頃～後半	芦17集	尖端尖ったものを研いだか
13	1号不明遺構	砂岩	17.0	8.1	2.5	490	ガラス玉・蔵石	中期中頃～後半	芦17集	尖端尖ったものを研いだか
14	1号不明遺構	砂岩	8.2	5.3	1.5	91.5	ガラス玉・蔵石	中期中頃～後半	芦17集	
15	1号不明遺構	砂岩	7.2	6.7	3.7	170	ガラス玉・蔵石	中期中頃～後半	芦17集	
16	1号不明遺構	砂岩	13.0	21.5	4.7	1,770	ガラス玉・蔵石	中期中頃～後半	芦17集	
17	1号土坑	砂岩質	15.5	12.4	5.6	1,380		中期中頃	芦17集	玉砥石
18	南側包含層Ⅴ層	細粒砂岩	11.0	6.1	3.2	260	磨製石鏃・磨製石斧	中期末～後期初頭	原9集	
19	土器溜Ⅶ層	砂岩	12.2	8.8	4.9	540	石鏃	中期後半～後期初頭	原9集	
20	南側包含層Ⅴ層	砂岩	17.1	9.0	3.2	680	磨製石鏃・磨製石斧	中期末～後期初頭	原9集	
21	南側包含層Ⅴ層	砂岩	14.2	6.3	5.2	600	磨製石鏃・磨製石斧	中期末～後期初頭	原9集	
22	南側包含層Ⅴ層	砂岩	10.3	10.8	4.5	750	磨製石鏃・磨製石斧	中期末～後期初頭	原9集	
23	土器溜Ⅶ層	砂岩	16.8	9.4	6.2	900	石鏃	中期後半～後期初頭	原9集	
24	土器溜Ⅶ層	砂岩	18.3	10.7	6.8	1,770	石鏃	中期後半～後期初頭	原9集	
25	土器溜Ⅶ層	砂岩	21.7	13.4	7.8	2,640	石鏃	中期後半～後期初頭	原9集	
26	南側包含層Ⅴ層	砂岩	25.8	9.2	7.8	2,040	磨製石鏃・磨製石斧	中期末～後期初頭	原9集	
27	SD－3	砂岩	14.8	8.8	2.7		蔵石	弥生終末～古墳前期	原27集	
28	SD－3	砂岩	9.1	7.0	3.2		蔵石	弥生終末～古墳前期	原27集	
29	SD－3	砂岩	9.4	12.4	2.2		蔵石	弥生終末～古墳前期	原27集	
30	SD－3	砂岩	14.6	9.1	4.6		蔵石	弥生終末～古墳前期	原27集	
31	SD－3	砂岩	21.0	8.0	6.8		蔵石	弥生終末～古墳前期	原27集	
32	SD－3	砂岩	13.8	8.0	6.9	1,600	蔵石	弥生終末～古墳前期	原27集	
33	SD－3	頁岩	21.3	20.6	6.0	4,900	蔵石	弥生終末～古墳前期	原27集	
34	A区2号竪穴住居	粘板岩	16.4	4.7	2.9	300	鉄鏃・鉄鏃・石鏃	古墳時代前期	原11集	
35	A区1号濠	粘板岩	6.7	2.6	1.2	22	石製紡錘車	古墳時代前期	原11集	
36	2号濠上層	砂岩	10.3	5.6	4.2	358		古墳時代前期	原11集	
37	10号竪穴住居	砂岩	12.7	7.1	3.3	440	磨石	古墳時代前期	原11集	
38	落ち込み	砂岩	23.7	10.4	6.8	1,719.4		古墳時代初頭	原26集	
39	落ち込み	細粒砂岩	12.4	10.5	2.3	591.7		古墳時代初頭	原26集	
40	落ち込み	細粒砂岩	35.4	8.3	6.6	2,735.4		古墳時代初頭	原26集	
41	3号旧河道C7区	砂岩	46.4	13.9	11.2	4,580	石鏃・石庖丁・磨製石斧・石剣・石戈	前期末～中期後半	原9集	朝鮮半島系の無文土器
42	3号旧河道C8区	砂岩	15.6	13.4	12.9	3,300	石鏃・石庖丁・磨製石斧・石剣・石戈	前期末～中期後半	原9集	朝鮮半島系の無文土器
43	3号旧河道C8区	砂岩	22.8	17.7	7.7	2,400	石鏃・石庖丁・磨製石斧・石剣・石戈	前期末～中期後半	原9集	朝鮮半島系の無文土器
44	I区2号住居跡	頁岩	24.9	10.3	1.7	550	石鏃・紡錘車	後期～古墳前期	芦12集	
45	E区2号濠	砂岩	11.4	4.5	2.5	188		弥生時代中期	原11集	
46	原5.6区	粘板岩	14.5	4.0	3.3	320	石庖丁・石剣	中期前葉～後葉	原18集	
47	原5.6区	砂岩	11.1	5.2	2.0	180	石庖丁・石剣	中期前葉～後葉	原18集	
48	F区土器溜Ⅳ層	頁岩	15.4	12.7	3.3	1009.4	貨泉・馬車具・卜骨	中期前半～後期初頭	原21集	
49	F区土器溜Ⅲ層	砂岩	9.7	7.3	9.2	439.4	貨泉・馬車具・卜骨	中期中葉～後期初頭	原21集	
50	F区土器溜Ⅲ層	砂岩	15.4	12.3	5.5	930.4	貨泉・馬車具・卜骨	中期中葉～後期初頭	原21集	
51	B区1号濠	砂岩	13.2	9.2	7.1	854.4		中期後半～後期後半	原21集	
52	Ⅲ区19号住居跡	砂岩	16.1	12.6	3.5	1,140		後期～古墳前期	芦12集	
53	Ⅲ区19号住居跡	砂岩	19.3	13.7	6.2	1,430		後期～古墳前期	芦12集	
54	Ⅲ区16号住居跡	砂岩	20.9	10.8	3.1	1,200	鉄鏃・鉄鏃	後期～古墳前期	芦12集	

・鋳　　型

はじめに

平成15年度に旧芦辺町教育委員会（現壱岐市教育委員会）が行った原地区の発掘調査において鋳型の破片が出土した。出土地点は原の辻遺跡丘陵部分の一番高い高台の北側約60mの場所で，弥生時代中期から後期にかけての居住区が広がる所である。鋳型は包含層からの出土であるが原の辻遺跡では初めてのものである。鋳型は砥石として再利用されて原型を留めていない。残存状態で大きさは縦3.5㎝，横2.7㎝，厚さ2.3㎝，重さ30.5ｇである。色調は乳白色で，石材は石英長石斑岩を使用している。中央に溝があり，そのまわりは鋳型として使用した際に熱を受けて黒く変色したものと思われる。包含層からは弥生時代中期中葉から弥生時代後期前葉の時期の遺物が出土していることから鋳型もこの時期範囲内のものであると考えられる。しかしながら遺構に伴う遺物でないことより明確な時期については不明である。

1）鋳型出土地点周辺の概要

丘陵高台部分の北側で出土した鋳型の周辺について概要に触れておきたい。関連が考えられる遺構としては同調査区内で鋳型の出土地点のすぐ北側からは側壁をオーバーハングさせた焼土坑が検出されている。側壁から床面にかけて熱を受けて土が赤く変色した痕が確認されている。また焼けて黒く変色した玉砥石も遺構内から出土しており，時期は供伴する遺物から弥生時代中期後葉のものである。青銅器は同調査区の出土地点のすぐ北側の住居の床面からは中広形銅矛の破片が出土している。中広形銅矛は壱岐島内では天ヶ原セジョウ神遺跡の祠に埋納された３本のみで破片であるが壱岐では４本目，原の辻遺跡では初めて出土した遺物である。同調査区のすぐ南側の調査区内で検出された住居跡の埋土内からは青銅製のヤリガンナの一部が出土している。時期は供伴する遺物から弥生時代中期後葉のものである。同調査区の南東側の調査では包含層から弥生時代後期の青銅製の権（重量を量る秤に用いられた錘）も出土している。同調査区の東側の調査では青銅製の鋤先が出土している。この出土地点の周りからは原の辻遺跡では出土例がないような青銅器が多くみつかっている。原の辻遺跡で150本以上みつかっている銅鏃も鋳型が出土した場所及びその周辺の調査で数十点みつかっている。青銅器だけでなく鉄器もこの場所を中心に数多く出土している。同調査区内の包含層からは鉄器を生産する原料として使われる鋳造鉄斧の破片が数点出土している。周辺の調査でも住居跡の埋土内から鉄鎌や鉄製ヤリガンナをはじめ鉄鏃や鍛造製に袋状鉄斧などが数多く出土している。

2）鋳型の出土意義

今まで「一支国」の拠点として栄えた原の辻遺跡から鋳型は見つかっていなかったため交流の拠点として栄えた原の辻遺跡で青銅器を生産していたことを裏付ける資料がなかった。今回の鋳型の出土で関連遺構や他に鋳型も出土していないことから規模や何を生産していたかはまだ不明な点が多いものの原の辻遺跡でも青銅器を生産していた可能性が高まった。今後の発掘調査で関連遺構や鋳型の発見が重要な課題となるが，現地生産を裏付ける資料として貴重な発見となった。

3）鋳型の種類について

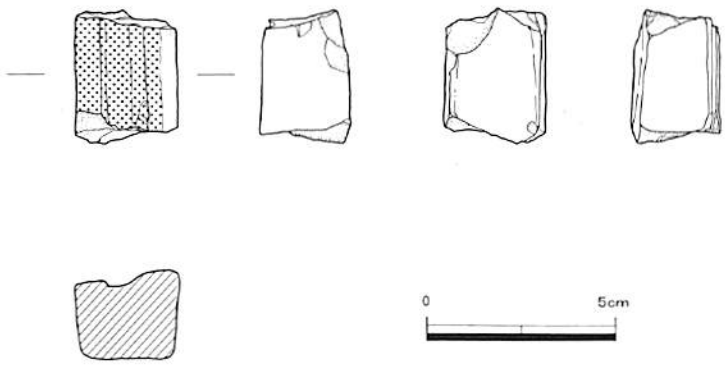
使用痕から鋳型として使用していたことは疑う余地がないものの，鋳型面以外は砥石として再利用されてほとんど原型を留めていないが残存状態から推測するに何らかの武器具（銅剣類）の鋳型である可能性が高い。

4）考　察

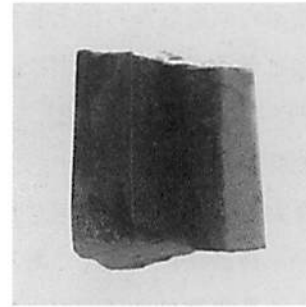
鋳型の出土は原の辻遺跡において現地生産を裏付ける貴重な資料になったが，出土したのが１点だけであること，その１点も原型はほとんど残しておらず砥石として再利用され小破片になっていること，周辺から関連遺構や生産を裏付ける遺物がまだ発見されていないことなど不明な点が多い。関連が考えられる３基の焼土坑が丘陵部分から検出されている。しかし埋土内から鉄滓や銅滓などの生産時に伴う遺物や関連遺物などが出土していないことから関連性を結び付けることは難しい。しかしこの場所及びこの周辺部に密集して青銅器や鉄器がみつかっていることから，中広形銅矛の破片や青銅製ヤリガンナ及び鋤先などは青銅器生産に必要な原材料として鋳造鉄斧の破片などは鉄器生産に必要な原材料と考えると，この場所の周辺部に青銅器や鉄器を加工・製作する場所が存在した可能性が高い。青銅器を生産するにあたって鋳込みの段階では水分を含む低地部より水分をあまり含まない丘陵部が適していたと考えられること，原の辻遺跡の丘陵頂部では風が強く吹くことが多いことなどを考えると作り方一つで自然の風を利用した工房も製作可能であったと考えられる。

今回出土した鋳型に直接関係は薄いと思われるが，原の辻遺跡からは対馬や北部九州であまり出土しない銅鏃が150本以上みつかっていることが特徴である。まだわからないが青銅器が生産していたならば製作していたものの一つとして銅鏃が候補として挙げられる。

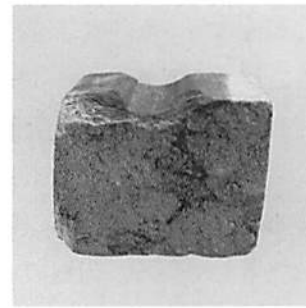
現時点で考えられることは青銅器生産が行われていたとするならば組織的に大規模に行われていたというより小規模で行われていた可能性が高い。生産していたものの少量の銅素材を原材料として主に銅鏃を作っていたのではないだろうか。まだまだ推測の域を越えることができないが，この鋳型の出土で原の辻遺跡での青銅器生産を立証するための扉が開かれたのである。この鋳型から色々なことが想像され夢は膨らむ一方だが，まだまだ実態解明に向けて始まったばかりである。これから青銅器生産に関係する遺構や遺物が発見されるのを待って再検討していかなければならない。　**（松見）**



第83図　鋳型実測図



PL. 4　鋳型表面写真



PL. 5　鋳型側面写真

表17　挿図に使用した遺物の一覧表

遺物名	掲載報告書	報告年	出土地点
鋳　型	芦辺町文化財調査報告書第17集	2004	包含層

3．金　属　器

・鉄　　器

1．鉄　製　品

原の辻遺跡の鉄製品は，カラカミ遺跡出土品とともに，早くから弥生時代の鉄研究で注目されてきた。特に，1956年の岡崎敬氏の論文で，原の辻遺跡出土の鉄素材と考えられる鉄片から，弥生時代の鉄器生産は素材を大陸や朝鮮半島に依存していた可能性が指摘され，以後の鉄研究に大きな影響を与えることになる（岡崎1956）。近年の調査でも多くの鉄製品が出土しており，ここでは先行研究に導かれながら原の辻遺跡出土の鉄製品を概観してみたい。

(1) **鉄製工具**（第84図～第86図）

1-1. 鋳造鉄斧

形態から２つに分類できる。

・**A類**　基部の下に突帯を有するもの。

・**B類**　基部の下に突帯を持たないもの。

A類は基部の横断面は長六角形で刃部は基部よりも幅広になる。B類は基部の横断面が長方形で，刃部は基部と同幅のもの（**第84図２**）と幅広のもの（**第84図１・３**）がある。これらは全て戦国時代～漢代にかけて中国および朝鮮半島で製作された製品である。

このほか，鋳造鉄斧の破片および再加工品も出土している。破片には袋部付近の体部片（**第84図10～12**），袋部側面（**第84図６～９**），および刃部付近（**第84図13～15**）がある。袋部付近の破片は二重突帯を有するものが多く，A類の破片であろう。再加工品には，袋部側面を鉄鏨に転用したもの（**第84図６**）や，体部片を板状鉄斧に転用したもの（**第84図12**）がある。袋部側面を転用した鉄鏨は，幅広の側面を有し徐々に先細りとなる形態の鋳造鉄斧を転用しており，弥生時代後期終末から古墳時代初頭の河道内から出土している点を考慮すると，原三国時代の朝鮮半島製梯形鋳造鉄斧を転用したものと考えられる。詳細に観察すると，先端部付近を両側面から鍛打してやや先細りにし，頭部には潰れの痕跡が明瞭に残る。この鉄器が出土した河道内の周辺からは，鉄素材と考えられる板状鉄斧と鍛冶具である鉄槌が出土していることから，この鉄鏨も鉄器製作工具としての位置づけが可能であろう。なお，側面付近を利用した**第84図８・９**も，体部から側面にかけて鈍角に折れる点から，朝鮮半島製梯形鋳造鉄斧の破片である可能性が考えられる。

鋳造鉄斧および破片・再利用品は，環濠内から出土する例が多く，時期は限定できないものの，いずれも弥生時代後期～古墳時代前期のものが主体となる。

1-2. 袋状鉄斧

伐採斧と考えられる大型（**第85図16・17**）と加工斧と考えられる小型（**第85図18～22**）が出土しているが，数量的には加工斧と考えられる小型の出土例が圧倒的に多い。伐採斧は14cm以上で，２点の完形品が出土している（**第85図16・17**）。いずれも袋部断面は楕円形で，丁寧に突き合わせておりほぼ密着している。刃部の形態は**16**が直刃，**17**が円刃である。袋部に比べて刃部付近が非常に厚みがあり，重厚な作りである。なお，**17**は表面に鉄滓が付着しており，未使用品と考えられる。

加工斧は10cm未満で，袋部から刃部にかけて緩やかに幅広になる形態が多く，一部袋部と体部の境

第84図　鉄器実測図①（工具１）（１/３）

に段を持つ有肩の鉄斧も存在する（第85図20）。また，第85図21は袋部端部を折り返して厚みを持たせており，北部九州に特徴的な袋の作りである。なお，20の袋部上半には，植物性の繊維が巻き付いた痕跡が確認できる。

時期的には，中期末～後期初頭に小型の加工斧が現れ（第85図20），後期以降加工斧の出土量が増加するとともに，後期終末～古墳時代前期にかけて大型の伐採斧が出現する（第85図16・17）。原の辻遺跡では，繊維の堅牢な針葉樹が弥生中期から木製品に利用されており，これらの加工や伐採に袋状鉄斧は大いに活用されたものと考えられる。

1-3. 板状鉄斧

2点を図化した。第85図23は大型品で，刃部が撥形に開き，体部中央から刃部にかけて徐々に厚みを減じる。刃部は明確な刃の研ぎ出しが認められず，実際に斧として機能したかは疑問が残る。この鉄斧は，弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の河道内から鉄槌と共伴しており，鉄素材である可能性が高い。24はヤリガンナと板状鉄斧が接着したものである。板状鉄斧は長さ5.8cmで片刃に研ぎ出した刃部が観察できる。扁平片刃石斧を材質転換したものであろう。このほか，鋳造鉄斧片を再利用した板状鉄斧も存在する（第84図12）。

原の辻遺跡では，板状鉄斧の出土例は少なく圧倒的に袋状鉄斧が多い。23のように鉄素材と考えられるものもあり，実際に斧として使われた板状鉄斧の数はさらに少ないであろう。また，時期は弥生時代後期以降が主体で，この時期にはすでに袋状鉄斧が出現していることから，板状鉄斧は袋状鉄斧の補完的役割を果たしていたものと考えられる。

1-4. ヤリガンナ

原の辻遺跡出土のヤリガンナは，いずれも側面観が直線的で，先端部と体部の区別がなく，断面U字形になるタイプである。やや幅広のもの（第85図25）と幅狭のもの（第85図26～28）がある。

ヤリガンナの初現は弥生時代中期末で，その後も住居内や環濠内から出土するが，弥生時代後期終末には副葬品も現れる（第85図28）。

1-5. 刀　　子

原の辻遺跡出土の刀子は，関の有無や形状から，次のように分類できる。

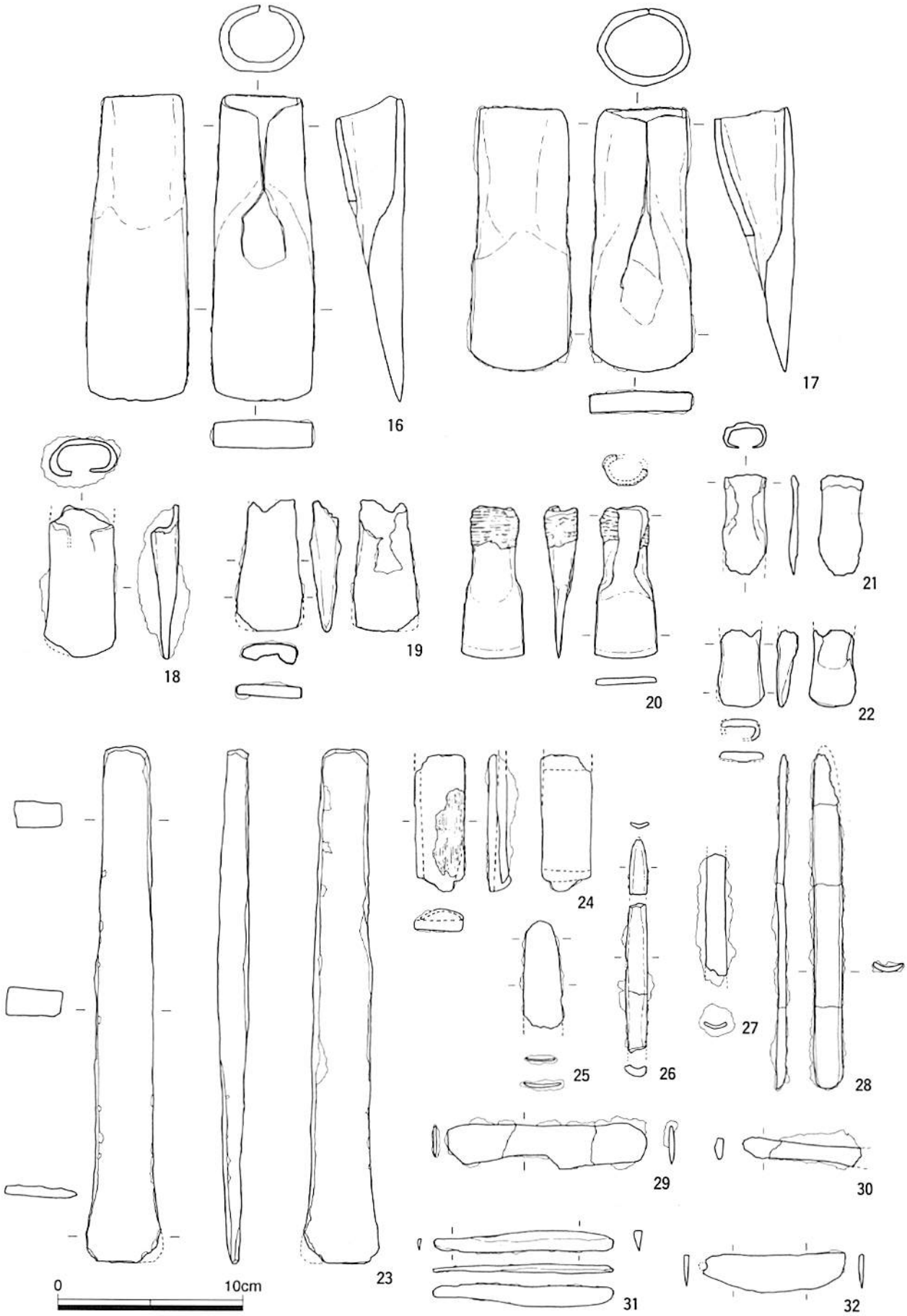
A，刃関で斜め関のもの（第85図29）。

B，刃関でなで肩関のもの（第85図30・32）。

C，無関のもの（第85図31）。

斜め関の29は，断面レンズ状で非常に薄手である。身幅に比べて茎幅が広い。30は茎のみであるが，身部にかけて徐々に厚みを増すことから，なで肩関と判断した。32も同様になで肩関であるが，茎に目釘穴の痕跡が残る。非常に薄手である。31は無関で厚みがあり，直線的な刃部を持つ。

主として環濠内から出土しているため，時期の明確な資料は少ないものの，弥生時代中期以降古墳時代前期にかけて出土例がある。



第85図　鉄器実測図②（工具２）（１/３）

1-6. 鉄　　鑿

鉄鑿は，袋部の有無から２つに分けられる。

・Ａ類　袋部を有するもの。

・Ｂ類　袋部を持たず棒状のもの。

原の辻遺跡ではＡ類が圧倒的に多く，Ｂ類は１点のみである（**第86図39**）。Ａ類は，体部の横断面が長方形で，刃部にかけて徐々に厚みを減じる。刃部形態を確認できる例を欠くものの，類例から片刃直刃であったものと考えられる。袋部は断面楕円形のものが多く，突き合わせも比較的丁寧で，**33**のように密着するものの一部は大陸から招来されたものであろう。**36**は袋部から体部にかけて先細りとなる点から鉄鑿としたが，袋部に厚みがあり，小型の袋状鉄斧の可能性もある。袋が開いていることを考慮すると，体部以下を欠損するものの，あるいは鉄鑿の未成品とも受け取れる。**39**はＢ類で，角柱状の素材の一端に直刃の片刃がつく。細身であるが，幅の割りに厚みもしっかりしている。鳥取県青谷上寺地遺跡出土例のように，直線的な鹿角柄に装着して使用したのであろう。

鉄鑿は弥生時代中期中葉～後葉にＢ類が出現し，後期以降Ａ類が量的に圧倒していく。Ａ類はほぞ穴をあける「叩き鑿」，Ｂ類は材を削る「削り鑿」として機能したと考えられるが，原の辻遺跡では弥生時代中期の床大引材が出土しており，木製品の在り方からは，Ａ類もしくはこれに代わる「叩き鑿」が中期まで遡る可能性を考える必要がある。

(2) 農　　具（第86図～第87図）

2-1. 鉄鋤・鍬先

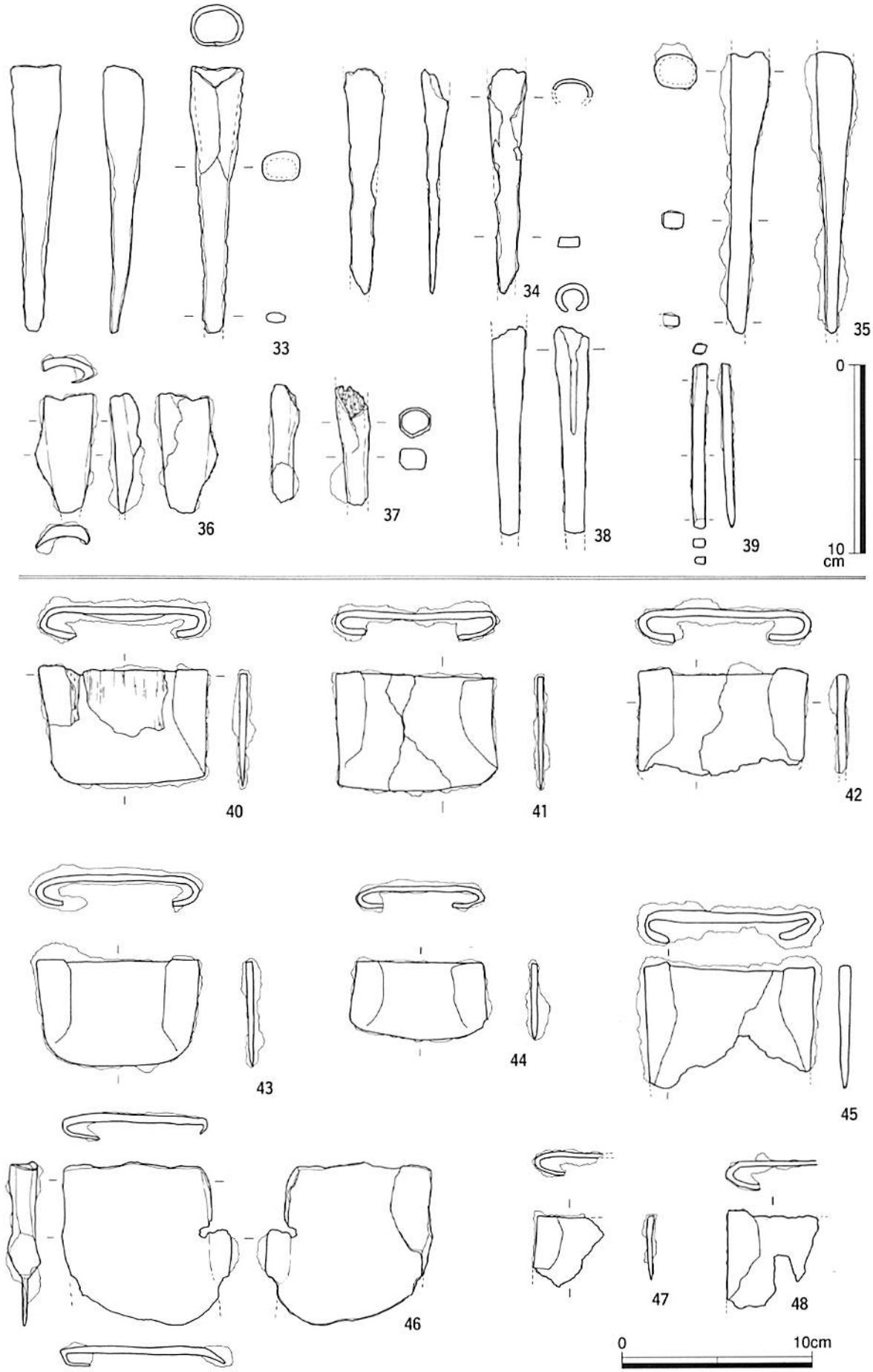
鉄鋤・鍬先は，長方形鉄板の短軸両端を折り曲げてソケットにしたもので，木製耕起具の先に装着したと考えられるものである。ここでは平面形態から２つに分ける。

・Ａ類　平面形が縦長のもの。

・Ｂ類　平面形が横長のもの。

Ａ類とＢ類の区別は，研ぎ減りを考慮すると必ずしも有効な分類基準とはならない。しかし，折り返し部分の長さから大まかに６㎝以上のもの（**第86図45・46**）と５㎝未満のもの（**第86図40～44・47・48**）の２者があることは明らかで，前者をＡ類，後者をＢ類とした。刃部形態は外湾刃が基本で，一見直線刃に見えるものも両サイドは湾曲しており，本来外湾刃であったものが研ぎ減りにより直線化したものである。また，基部と刃部がほぼ同長のもののほか，基部が狭いもの（**第86図44**），刃部が狭いもの（**第86図43**）があるが，ソケット製作時の折り曲げのくせで特に機能差は見いだしがたい。**40**は木質部分が遺存しているが，木目はソケットと平行に走っており，木製耕起具を装着したことは疑いない。**46**は破損品と考えられるが，折り曲げ部の側面を鍛打した痕跡が残っており，**40**と同じく木製耕起具に装着したものであろう。

時期は弥生時代終末から古墳時代前期にかけて認められる。出土状況も墓坑もしくは墓域に関連する土坑内から出土した例（**第86図40～42・47**）や環濠内から出土した例（**第86図45**），竪穴住居から出土した例（**第86図46・48**）などがあり，墓坑や環濠の掘削，竪穴住居の掘削，畑作の耕起作業など日常的なあらゆる用途に利用されていたことがうかがえる。



第86図　鉄器実測図③（工具，農具１）（１/３）

2-2. 鉄　　鎌

鉄鎌の出土例は比較的多いものの，破片資料が多く全体の形状を想定できるものは多くない。ここでは大きさと刃部の形状から分類する。

大きさでは，**①全長25cm以上の大型**，**②全長15～24cmの中型**，**③全長10cm未満の小型**に分けられる。また，刃部形態には**内湾刃**と**直刃**の２者がある。

大型は**第87図51**の１例のみで，全長26.1cmの内湾刃である。中型は最も出土例が多く，破片資料の中にもこれに含まれると推定されるものが多数出土しており，鉄鎌の主体をなすものである。曲刃もしくは内湾刃のもの（**第87図49・50・52・53**）と直刃のもの（**第87図55・56**）がある。小型は直刃に近い内湾刃が１例出土している（**第87図60**）。

基部はいずれも端部を折り曲げている。折り曲げの角度は，直角に折り曲げるもの(**第87図50・56・57・59・60・62**）と，U字状に折り曲げるもの（**第87図49・52・53・55・58**）の２者がある。これらの中には，欠損品や錆により観察が困難なものも含まれるが，川越氏がすでに指摘しているように(川越1993)，木柄への装着方法の違いを概ね反映しているものと考えてよいであろう。また，基部幅全体を刃部に対して直角に折り曲げるもの（**第87図49～52～60・62**）と，基部全体を鈍角に折り曲げるもの（**第87図55**），基部の上端の一部を鈍角に折り曲げるもの（**第87図53・56**）がある。**55**は弥生終末期の土坑墓副葬品である。**53**は基部の大半を欠損するものの，現存する基部のやや上位に鈍角に折り曲げた痕跡がわずかに確認でき，上端を鈍角に折り曲げていたものと考えられる。これは弥生中期～古墳前期の土器を含む環濠内からの出土で，時期は特定できないものの，他の遺跡での出土例から弥生後期後葉以降と考えられる。

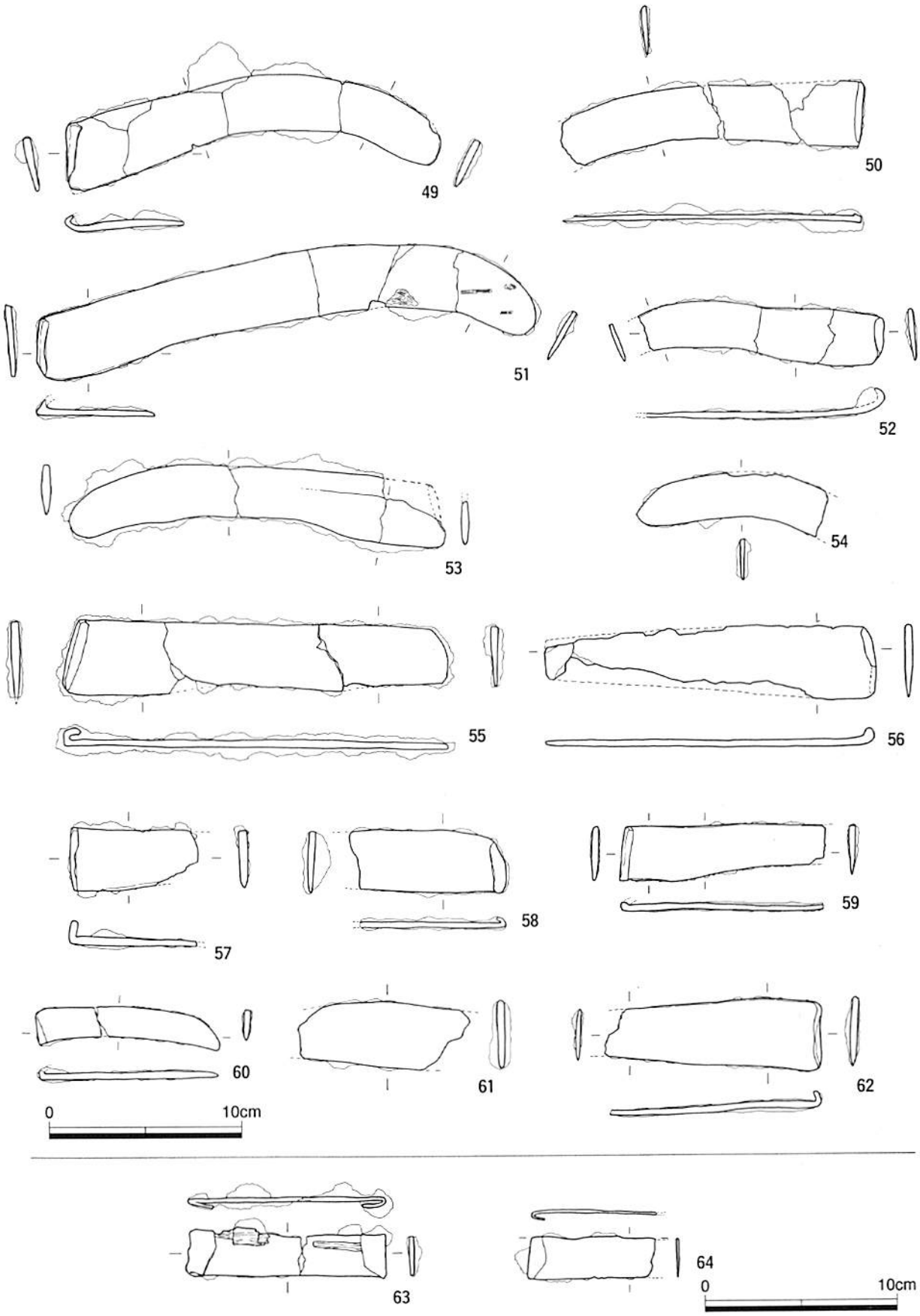
鉄鎌の初現は弥生中期後葉である。最古の例は切先片で刃部形態や大きさはうかがえないものの，出土状況から弥生中期の可能性がある**第87図51**からすると，出現当初から大型内湾刃が存在したものと考えられる。出土例が増加するのは弥生後期以降で，特に中型直刃鎌は終末期以降に出現して主体となり（**第87図55・62**），古墳時代まで引き継がれる（**第87図57**）。弥生中期にみられた内湾刃鉄鎌も後期後葉～終末にも認められるものの（**第87図54**），中型となっており中期に比べて小型化している。

鉄鎌の機能は，柄と刃部の角度が鈍角になるものが払う鎌，直角になるものが刈る鎌と推測される。基部の折り曲げと刃部のなす角度から着柄の角度を推測すれば，ほとんどの内湾刃鎌と**第88図55・56**の直刃鎌が鈍角鎌となる。いずれも中型～大型で現在のなぎ鎌もしくは鉈鎌として使用されたと考えられる。一方，直角鎌は**57～60**のように小型～中型が主体で，これらは下草刈や一部はイネやコムギなどの収穫にも利用されたであろう。

2-3. 鉄製摘み鎌

現在２点確認されている（**第87図63・64**）。長方形の鉄板の短軸両端を折り曲げ，長軸の一辺を刃部としており，鉄製鋤・鍬先と製作技術の点で非常に類似する。しかし，鉄製鋤・鍬先に比べて非常に薄手である点や，**第87図63**のように木質が遺存する例では，木目が刃部と並行するように走る点が大きな相違点である。

時期は限定できないものの，いずれも弥生後期以降の例である。



第87図　鉄器実測図④（農具２）（１/３）

(3) 漁 撈 具（第88図）

漁撈具には釣針と銛もしくはヤスと考えられる刺突具がある（**第88図65～67**）。**65**は釣針で，昭和26年の東亜考古学会の調査で出土したものである（岡崎，1956）。細長い鉄棒を折り曲げて整形している。**66・67**は刺突具で，先端部にかえしがつく。**67**の観察では，断面方形の鉄棒の先端部を単打してやや扁平にし，かえしの部分を鏨で折り取っている。いずれも弥生時代後期以降のものである。

(4) 鉄製武器（第89図）

4-1. 鉄　　剣

鉄剣は剣身部分と考えられる破片は出土するものの，装着方法の分かる茎の出土例は少ない。**68**は弥生時代後期後半の土坑墓副葬品で，先端部を欠損するものの現存長22.6cm・刃部幅2.8cmの短剣である。茎は幅広の短茎で，茎尻に１ヶ所と剣身下端２ヶ所に目釘孔があく。把の痕跡は確認できないが，剣身下端部に目釘孔があることから，剣身下端部まで把で覆う日本風の拵えが施されたのであろう。**71**も同様に幅広短茎の鉄剣であるが，錆のため目釘孔の有無は確認できない。

時期の明確なものは少ないが，いずれも弥生後期以降と考えられる。出土状況としては，**68**のような副葬品のほか，環濠内から出土する例（**69・70**）も認められる。

4-2. 鉄　　鉾

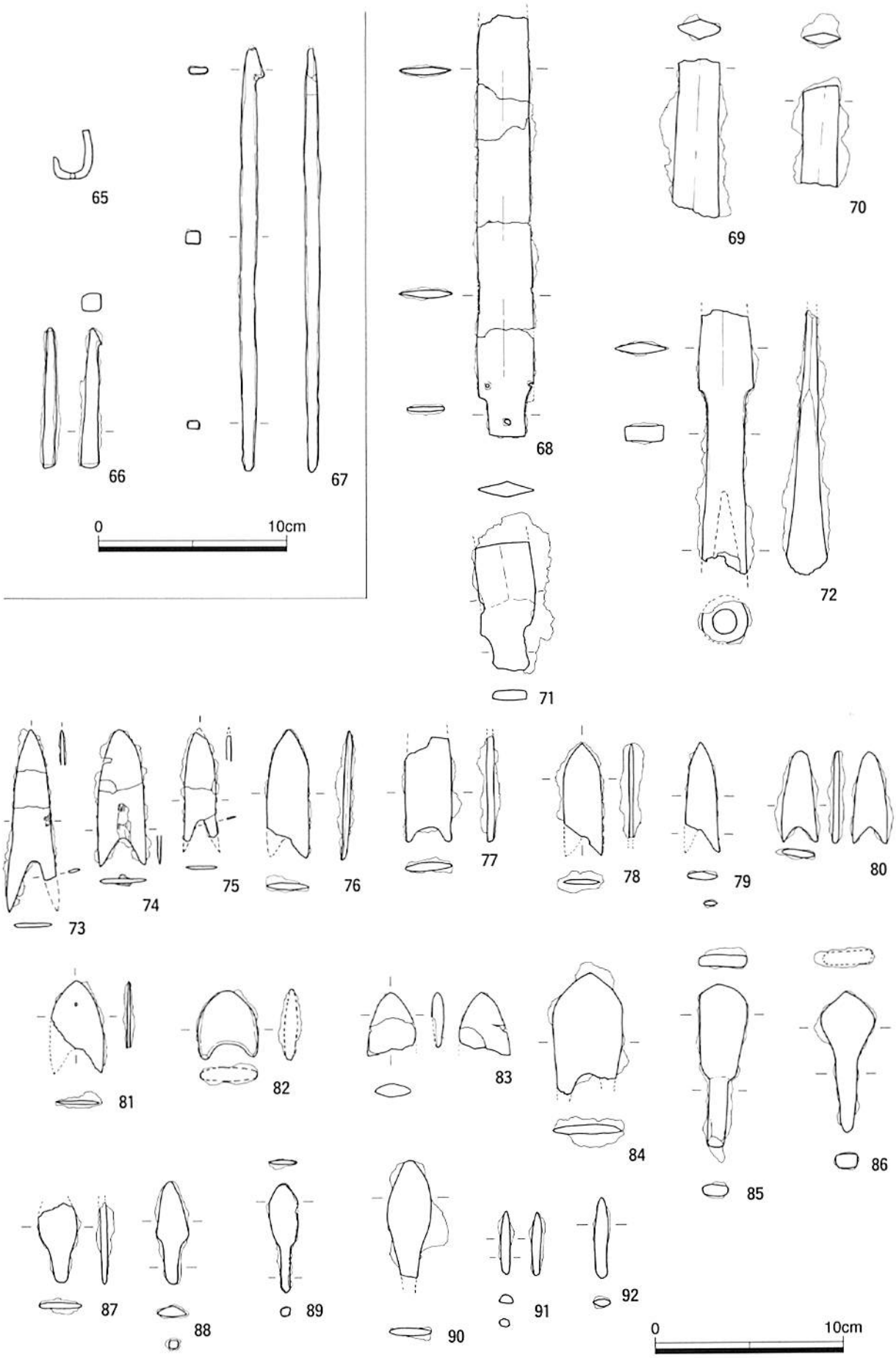
１例のみである。**第88図72**は，弥生後期を中心とする大川地区の墓域表採品である。同墓域では，鉄剣（**第88図68**）をはじめとして，鉄製武器を副葬する例が認められることや，他の遺跡での出土例も副葬例があることから，本例も本来は埋葬施設に伴うものであったと考えられる。先端部および袋部下端を欠損するものの，現存長14cmで本来は30cm以上の長鋒式の可能性もある。剣身中央に鎬があり，関は斜め関，袋部付け根の横断面は長方形で袋部断面は円形である。

4-3. 鉄　　鏃

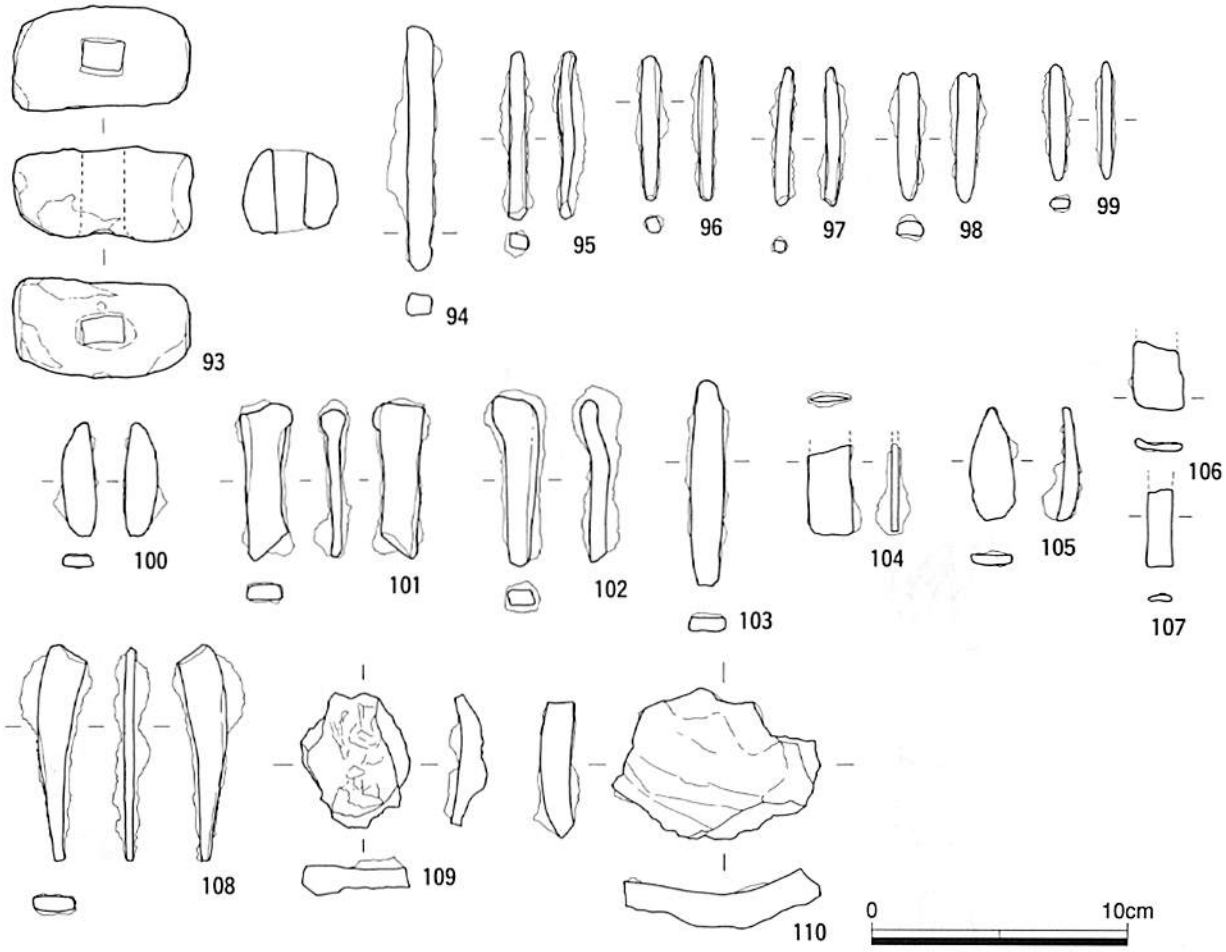
鉄鏃は大きく**Ａ：無茎**と**Ｂ：有茎**に分けられる。無茎のものは全て凹基鏃で，**Ａ１：抉りが浅いもの（第88図76～78・80・82・83）**と，**Ａ２：深いもの（第88図73～75・79・81・84）**に二分できる。有茎のものは，**Ｂ１：身部から基部にかけて柳葉形となるもの（第88図87・89・90）**，**Ｂ２：頭部が三角形のもの（第88図88）**，**Ｂ３：頭部が五角形のもの（第88図85・86）**，**Ｂ４：茎と身の区別のない直線的なもの（第88図91・92）**に分けられる。大きさは，５cmを境に**大型**と**小型**に二分できる。

鉄鏃の初現は弥生中期中葉の竪穴住居址から出土したＡ１大型（**第88図77**）である。後期に至っても依然Ａ類大型が主体であり，Ｂ類は弥生終末～古墳前期に大型が出現する。（**第88図86・89**）。また，この時期にはＡ類でも小型のものが現れ（**第88図82**），最もバリエーションが豊富になる。

原の辻遺跡で出土する鉄鏃は，銅鏃と比べると出土量が格段に少なく，金属製鏃の主体が銅鏃であることは明白である。鉄鏃に多いＡ類は，形態的特徴から打製石鏃や磨製石鏃を模倣したもので，これらの石製鏃をモデルに，銅鏃の不足分を補うために適宜製作したものと考えられる。また，Ｂ類のうちＢ２類は形態的に銅鏃と類似しており，銅鏃をモデルに製作された鉄鏃も存在する。



第88図　鉄器実測図⑤（漁撈具・武器）（1／3）



第89図　鉄器実測図⑥（鉄器製作関連遺物）（1／3）

(5)　**鉄器製作関連遺物**（第89図）

鉄器製作関連遺物には，鍛冶具・鉄素材・鉄滓がある。

第89図93は，弥生後期～古墳前期の河道内から出土した鉄槌である。全長7.00cm，重量231.0gで鋳造品と考えられるが，鋳あがりが悪く大きな空隙も複数認められるため，実用品として供されたかどうか疑問が残る。楽浪郡もしくは朝鮮半島南部から招来されたものであろう。

鉄素材と考えられるものはいずれも棒状で，幅に対して**厚みがあるもの**と**扁平なもの**に二分できる。初現は弥生中期後葉で（**第89図97～99・101**），その後も弥生中期末～後期初頭（**103**），弥生終末（**102**），古墳前期（**107・108**）と連綿と出土例がある。大きさはいずれも全長10cm未満と小型である。

鉄滓はいずれも小型の椀形滓で，小鍛冶に伴う副産物である（**第89図109・110**）。**109**は古墳時代前期の竪穴住居址から出土し，**110**も近隣の包含層中から出土したものである。

原の辻遺跡での鉄器製作は，基本的に棒状素材から鍛打整形・鏨切りによって，鉄鏃や鉄鑿・ヤリガンナなどの小型鉄器を製作するという初歩的な作業に終始しており，弥生後期後半～古墳時代前期にいたって，鍛冶具および鉄滓の伴う本格的な鉄器生産が開始されたと考えることができる。**（中尾）**

【参考文献】

岡崎敬　1956「日本における初期鉄製品の問題」『考古学雑誌』第42巻1号
川越哲志　1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
松井和幸　2001『日本古代の鉄器文化』雄山閣
村上恭通　1999『倭人と鉄の考古学』青木書店

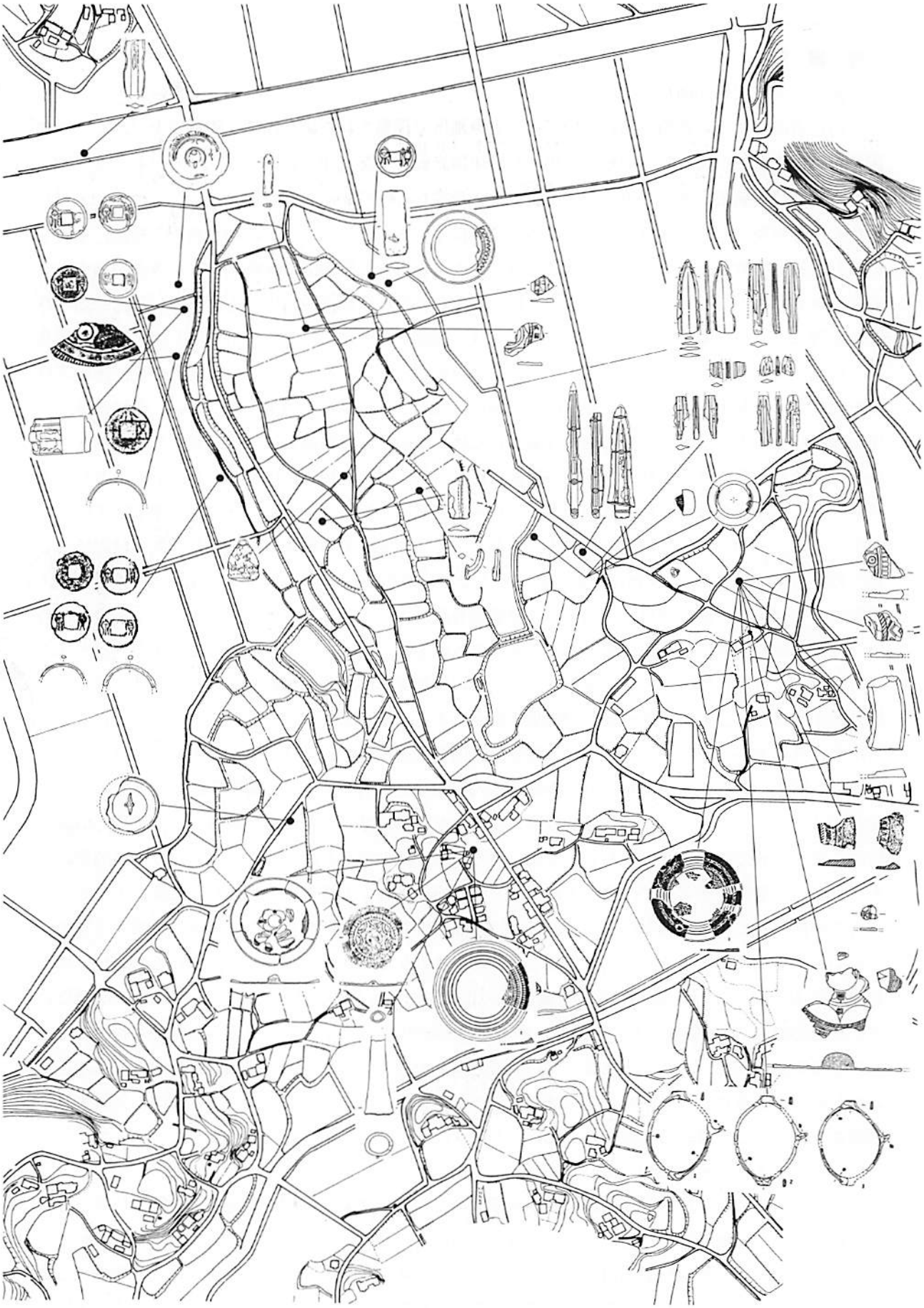
・青　銅　器

青銅器の分布（第90図）

原の辻遺跡における青銅製品については，大原地区で採集された細形銅剣・細形銅戈（註１）や昭和49年の調査時に中期前葉の壺棺から出土した中国式銅剣などが知られている。細形銅剣・細形銅戈については畑の拡張に伴う採集品であるが，その形式から前期末から中期初頭に位置づけられており，これらの青銅製品が原の辻遺跡の中でも古い段階に属する資料である。その後の調査で種類，量ともに増し，後期の青銅製品も遺構から確認されるようになった。**第90図**に採集品を含む青銅製品の出土地点を示したが，分布からの所見について幾つか触れてみる。地点的には大きく西側・東側低地の環濠，丘陵上，４つの墓地群に分かれる。つまりは，環濠あるいは，川からの出土のもの・居住域・墓域とに分けられる。西側低地では車馬具・貨泉・銅釧が，東側低地では，貨泉・鏡片の他，銅の素材と思われるものが出土しているが数量的に西側の河道からの青銅製品の出土量が多い。西側低地での出土状況は，河道の西側から河道内に投棄された状況を呈し，青銅器とともに鉄製品も多く出土している。平成15年度の調査の結果，近くに祭祀に伴うと思われる土坑を検出しており，祭祀にともなう道具として金属器が使用された結果と考えられる。東側低地では，環濠内から貨泉・銅素材？の２点が出土するだけだが，銅鏃がかなり出土しており，その状況や遺物構成から見ると西側は祭祀にともなった行為の結果であり，東側は武器に集中するなど対照的である。丘陵上では，鏡片・小銅鐸の舌・銅製のヤリガンナ・権・銅釧片・銅矛片・銅製鋤等が出土している。低地の出土品に比べ実用品が多いことが特徴的である。後期に属すると考えられる銅矛は，壱岐島内でも今までに４本だけしか確認されておらず，居住域で出土した銅矛をどのように評価するか問題を提起している。墓地に関しては，鏡の出土が目立ち，他に銅剣や銅釧が採集や調査によって出土している。銅剣の出土は墓地以外では，河川で１点出土した以外他に例がなく，墓域出土例も大原墓域に限られている。大原墓域は，前期後半から中期までを主体とする墓域で，中期までの墓域は他に閨繰墓域，と鶴田墓域に存在するが，副葬品には恵まれていない。また，後期の墓地群からも出土がないことから，銅剣が大原墓域と中期の時期に限定されて副葬されていたことを裏付けており，他の墓域との階層的，あるいは集団的相違があったことを想起させる。この他，大原墓域では多紐細文鏡や方格規矩鏡と思われる鏡が１点づつではあるが出土している。後期になると，外側に墓域が広がるようになり，大川地区の墓域で後期の鏡を中心に採集品が多数ある。有鈎銅釧なども採集されるなど，大川地区は後期の他の墓域に比べ物が豊富である。原の久保Ａ地区でも，青銅製品の出土はあるものの，大川地区に比べ数的には少ない。原の辻遺跡では，既に破壊された可能性もあるが，北九州のように，王墓と言えるほどの副葬品をもった墳墓は確認されていない。現段階において言えば，中期では大原地区の墓域，後期では大川地区の墓域が原の辻遺跡における中心的な墓域であったと考えられる。青銅品について言えば，青銅製品の種類の豊富さがこの遺跡の特徴と言ってよいだろう。

出土，採集された銅鏡について

遺跡出土あるいは，採集された鏡は，多鈕細文鏡，内行花文鏡，方格規矩鏡，獣帯鏡，仿製鏡で，前漢鏡がないことが特徴的である。主に墓域からの出土が多く，他に環濠や丘陵上からも数点出土している。中期における銅製品の出土の主体が大原墓域であったのが，後期には鏡という副葬品にとって代わり大川地区に青銅製品が集中するようになる。ただし，大原地区でも多鈕細文鏡（**第91図13**）



第90図　青銅製品出土及び表採地点（銅鏃を除く）

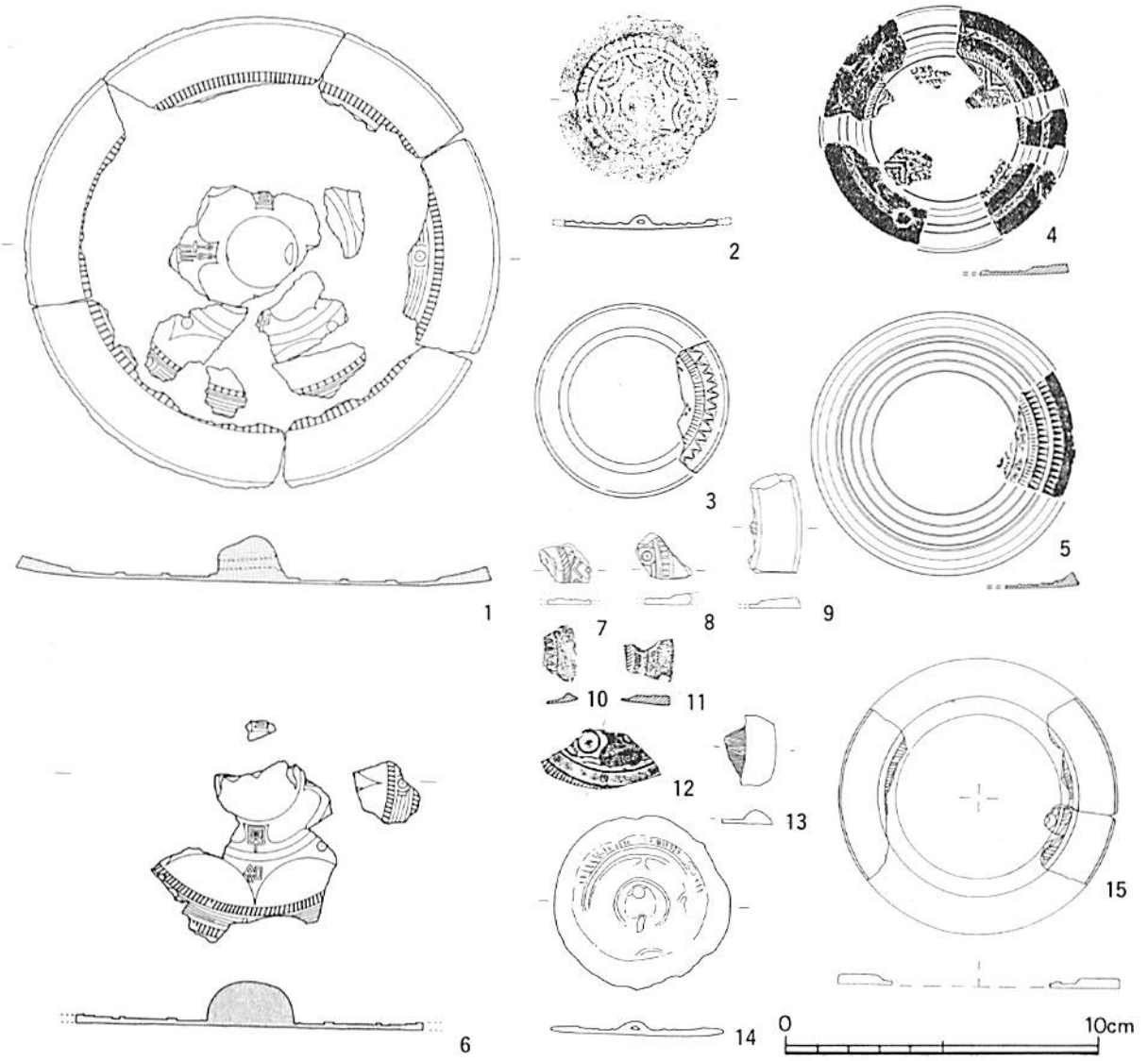
が小片ながら１点確認されており，方格規矩鏡も１点出土している（**第91図15**）。中期の他の墓域を見ても鏡の出土はないことや，墓域での銅鏃の出土などを考慮すると，原の辻遺跡での中期の段階は，武器を中心とした副葬がおこなわれていたと考えられる。

大川墓域の鏡（第91図４・６・９～11）

大川墓域は，大川墓域の西側に位置し範囲確認調査によって後期の石棺墓・甕棺墓が確認されている。鏡は表採品で占められているが，副葬品が遊離したものと思われる。後期の他の墓域に比べ，青銅品が豊富であり，後期でのこの墓域の優位性を物語る。未だ，王墓と呼べる墓域の存在が確認されていない中において，鏡片や有鉤銅釧が表採されていることから，大川地区は後期の王墓の可能性をもった地域と言える。出土した鏡は，**６**の「長宣子孫」銘内行花文鏡と方格規矩鏡（**４・10・11**）からなる。

原ノ久保Ａ墓域の鏡（第91図１・２・５）

１は「長宣子孫」銘内行花文鏡で，原ノ久保墓域の９号土坑から出土している。紐座の四葉文の弁間に「子孫」の銘が見え，「長宣子孫」銘と判断される。櫛歯文が垂直になり，葉状文が退化して円

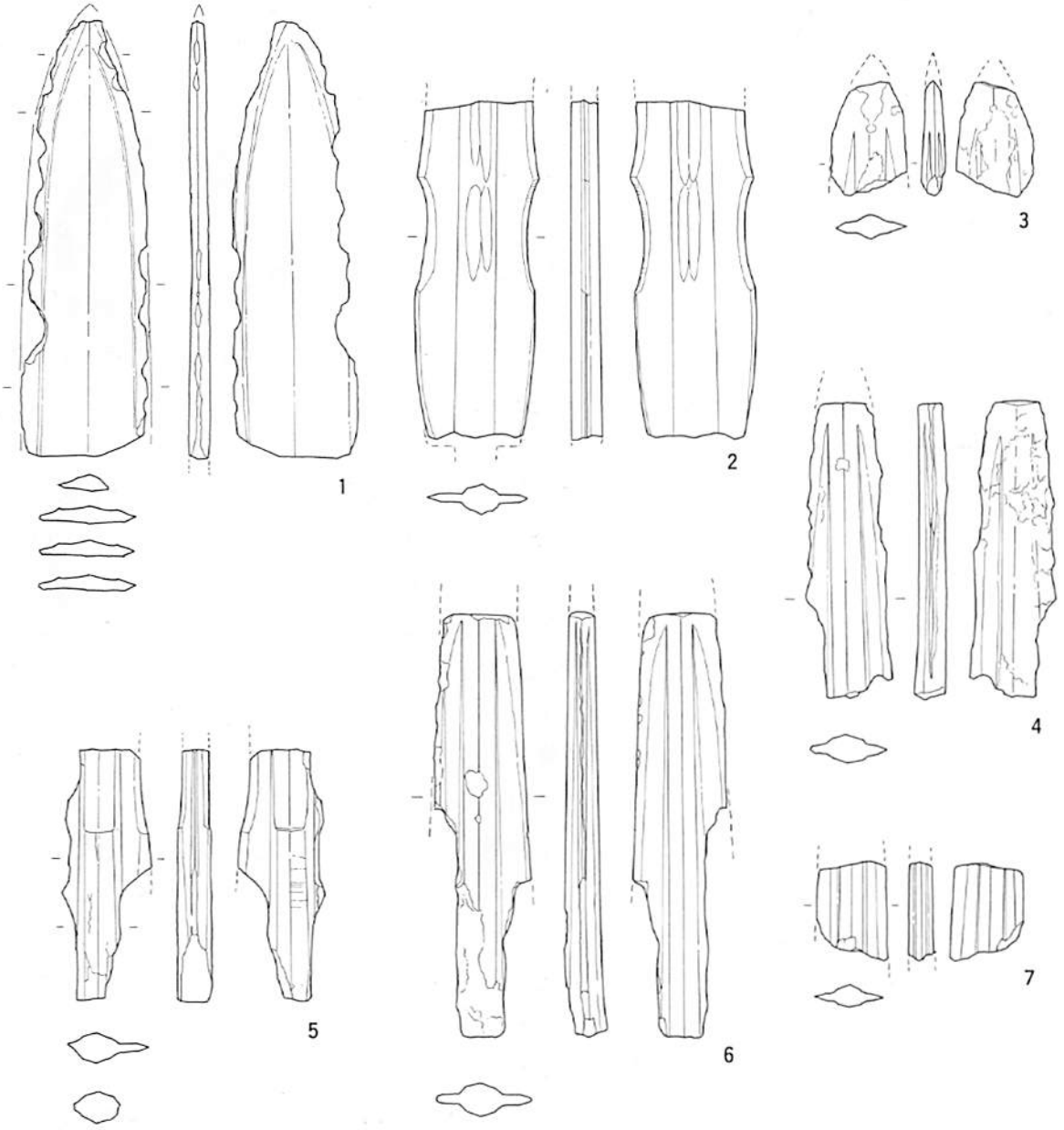


第91図　青銅鏡実測図（１/４）

文になるなど，新しい要素が見てとれる。岡村分類の「漢式Ⅴ期の四葉座Ⅳ式」(1999，岡村)，高橋分類のⅣ式に相当するもので（1986，高橋)，弥生時代終末から古墳時代の初頭に位置づけられる。

2は8号石棺墓から出土した小形仿製鏡で，内行花文日光鏡系と思われる。田尻による分類によれば，第3型b類に属するものと思われ，須玖遺跡群産の鏡として捉えることが可能という(2004田尻)。14も仿製鏡でかなり腐食が進んでいるが，同じく田尻分類の第3型b類に属するものであろう。2は直径7.6cmを測る。弥生時代の終末から古墳時代に時期設定しており，遺跡での出土状況から考えると弥生時代終末と考えられる。この他5の獣帯鏡片1点が出土している。

この他の鏡片は10・11が丘陵上からの出土で，方格規矩鏡か？。12は獣帯鏡で，内区に乳が配置されており六乳六像式のものと想定されている。古墳時代前期の溝内から出土している。穿孔の跡があり，紐を通していた可能性が指摘されている。14については説明については先述したが，西側低地部



第92図　銅剣実測図

の河道際から出土している。

銅剣（第92図）

銅剣は小片を含めて７点発見されている。この内，幡鉾川の河川改修に伴う調査の３号旧河道で１点出土しているが，その他のものは，大原地区の墓域周辺に限られる。大原地区の墓域は，時期的には前期末から後期まで存続するが，主体は前期末～中期であり，銅剣の副葬が中期末で終焉を迎えることと対応する。河川で出土した銅剣（**第92図２**）は，朝鮮半島系の細型銅剣で，岩永分類のＩ類に属し（1980，岩永），遺跡出土の銅剣の中では古い形式のものである。河川周辺から始まる遺跡形成期の青銅器として捉えられよう。**１**は戦国式の銅剣で，須玖Ｉ式古段階の壺棺の副葬品である。断面菱形を呈すが，上下の関はややずれており，先端の刃部にはバリ状のものが観察できる。ただし，刃部は研ぎ出していることから，実用品であった可能性が高い。**３～７**は，平成13年の調査で表土から採集されたものだが，本来甕棺内の副葬品が遊離したものであろう。**４**については，刳り方付近まで残存しており，刳方より下に刃部を形成し，鎬が茎まで及ばないことから，岩永分類のⅡｂ式に属するものと判断する。他の銅剣については，茎付近が破損していることから分類困難であるが，特徴として**３・４**は緑青色を呈するのに対し，**５・６**は深緑色を呈し，**５・６**に比べ身幅が細いことで共通する。**７**については，色調は**５・６**と共通するが，樋の部分を丸く造りだすことに特徴がある。いずれも細型銅剣の範疇に入るものである。この他に，過去に大原墓域の畑の造成時に表面採集された細形銅剣２点が存在するが，今回実測図については割愛した（註１）。

銅鏃（第93・94図）

銅鏃についての論攷は，80年代に大村，田中，柳田が全国の銅鏃についての集成，分類をおこなっており，いずれも有茎・無茎を大分類とし，石鏃や朝鮮半島の銅鏃との比較もおこなっている（1984，大村・1981，1986，田中・1986，柳田）。また，東日本に多く出土し，西日本に少ないという見解で共通しており，この現象について柳田や田中は，九州においては鉄鏃が普及していたことによるとの共通理解を示している。近年では，北九州地域で銅鏃の鋳型が検出されるようになり，以前よりは「北部九州での銅鏃生産が決して軽視できない」状況になってきている（2001，高田）。出土数が多いとされる関西地方でも，１遺跡からの出土点数は多くても20点台の出土でしかないが，原の辻遺跡ではこれまでに140点近く出土しており，全国でも突出した出土量をほこっている。本遺跡出土の銅鏃は大原地区の墓域を除いて，環濠や溝，居住空間域からも出土しており，他の遺跡同様万遍なく出土している。ここでは，まず，遺跡出土の銅鏃の形態分類と，遺跡における大まかな編年案を示し，原の辻遺跡の銅鏃の在り方に注目していきたい。

第93図の**２～12**は，大原地区の墓域で出土したものである。大原地区は弥生時代前期末から後期までの墓域として知られているが，**２～12**の銅鏃については，その出土状況から，中期の後葉の時期として捉えられるものである。銅鏃の多くは水銀朱が塗られ，茎に漆を塗った痕跡が伺われる。中期後葉の丹塗りの高坏に数点貼りついて出土した状況もあり，墓前祭祀あるいは棺外副葬に伴うものと考えられる。これらの銅鏃の特徴として，次のことが挙げられる。

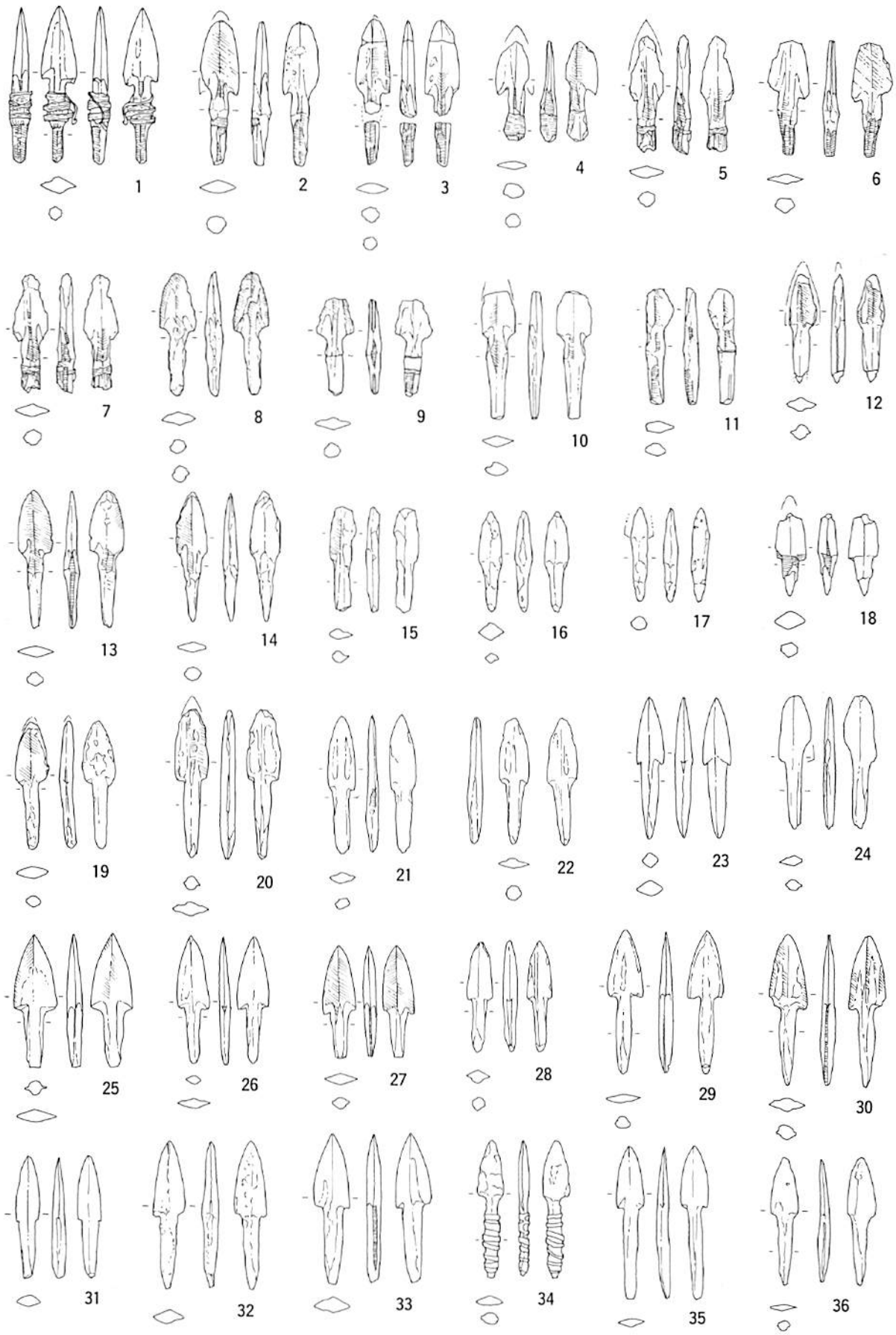
①５cmを越す鏃身長をもち，逆刺は短いが鋭利である。

②茎上部に箆被（註１）と思われる膨らみがあり，それを中心に樹皮を巻き付けていることから，シャフトと鏃とのストッパー的役割を重視した造りとなっている。

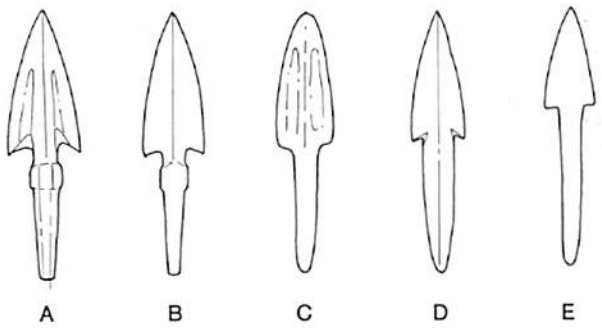
③茎はかなり研ぎ出したあとがあり，六～八角形を呈する。

これら①～③と同様な特徴を持つものに，丘陵西側低地から出土した1がある。茎中央部の膨らみに樹皮を巻き付けており，先の一群の全容が良く解る例である。2～12の一群は原の辻遺跡の中でも形態的に統一性があり，原の辻遺跡の弥生時代中期後葉の銅鏃の形態的特徴として捉えられ，原の辻型銅鏃とも言うべき一群である（以下原の辻型と呼称する）。今回墓域から25点以上を確認したが，調査者の話ではほぼ同じ地点から出土しているとのことであった。大原地区は，原の辻遺跡の中でも最大級の墓地であるが，副葬品として銅鏃の出土はないことから，棺外副葬された可能性が高いことを強調したい。大原地区以外で出土した銅鏃については，包含層出土のものが多い。13～18は高元地区（丘陵上北側）出土である。すべて包含層からの出土で，帰属時期については中期から後期とされるだけで判然としない。13・14については，先の原の辻型銅鏃のような重厚感はないが，篦被に名残が見受けられる。また，茎における研磨面も見受けられるなど，原の辻型銅鏃の系統を引くものと判断している。19～28は，丘陵東側低地の環濠から出土したものである。中期から後期後葉のものと考えられる。特徴的なものとして，20～22が挙げられ，樋が両面に通るタイプである。茎は鋳型のズレがみられ，その後の研磨もなく丁寧さには欠ける。先の原の辻型からはかなり変貌している。樋が通ることについては，ある程度古い様相も考えなければならないかもしれない。25～26は逆刺が明瞭であるが，バリが残り整形をおこなっていない。先端部が先鋭であるのが特徴的である。29～34については，丘陵西側低地の環濠上から出土したものである。環濠の確認面からの出土が多く，その状況からすれば古くても後期終末の段階のものと考えられる。29・30については先の20～22の樋が通るものと25～27の先端部が先鋭になるものとの折衷様式と捉えることもできよう。34については，先端部が茎に対し小さいことと，茎に螺旋状の凹凸をもつことで，他の銅鏃とは明らかに相違する。原の辻型の茎が膨らみを持つことで，シャフトとのストッパー的な役割を果たすことを，茎に螺旋状の凹凸を付けるという段階にまで発展させたものであろう。このような複雑な茎を持つ銅鏃の鋳型としては，土型か単体の型を想定しなければならないであろう。35・36は丘陵部先端部側の調査で出土したものである。茎の長さが異常に長いことと，扁平なことを特徴とし，遺跡出土の銅鏃が全体的に刃部と茎の長さが1対1の割合であるのに対し，茎が異常な長さであることがわかる。この他，23や31についても原の辻型とは相違する形態であることが理解できよう。これらの銅鏃について形態分類をおこなうと，第94図のようになる。時間軸上での形態変化については定かではないが，概ね原の辻型のような丁寧な造りのものから篦被や，茎の面取りが退化していき，全体的に扁平になる傾向にあるようだ。とはいえ，これだけの銅鏃の数がありながら，遺跡出土の銅鏃の基本的な形態はかなり統一性があるといってよいだろう。

以上，原の辻遺跡の銅鏃について説明したが，大きな特徴として一部の銅鏃は墓地から出土し，墓前祭祀，あるいは棺外副葬に用いられていた可能性が非常に高いこと，その出土総数から考えると，遺跡での銅鏃に対する意識が高かったことを表している。他の遺跡では見られない原の辻遺跡の特筆として評価できる。また，銅鏃の形態変化が他の遺跡に比べ顕著でないことから，原の辻型の銅鏃を規範として，中期末から後期にかけて銅鏃生産がおこなわれていた可能性が高い。青銅生産に関する遺構は未だ発見されていないが，現状から考えると銅鏃の生産に関わる遺構や鋳型などが今後発見される可能性は十分ある。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

第93図　銅鏃実測図



第94図　銅鏃形態分類

銅鏃の形態分類

A類・・・原の辻を代表する中期後葉の銅鏃

B類・・・A類からやや退化傾向をみせ，箆被の造りが雑でやや扁平となる。

C類・・・逆刺の造りが弱く，箆被が消滅する。樋が特徴である。

D類・・・断面三角形を呈し，逆刺は短いが鋭い。逆刺は，茎の側面から削り出す。

E類・・・茎が刃部よりも長くなる。造りも概ね雑となる。

・その他の銅製品について

原の辻遺跡では銅製品の種類が豊富であることについては先述した。ここでは，その他の銅製品として紙面の都合上，主な遺物の出土場所と簡単な説明に止める。

貨幣（第95図－２～７）

平成５年からの調査で貨泉９枚，五銖銭１枚，大泉五十１枚が出土しているが，この他に過去の調査でも出土例があると聞く。地点的には，丘陵の西側低地の環濠や溝内からの出土が多い傾向を示し，丘陵上からの出土はない。貨泉のうち１点は後期中頃後半の壷内から検出されているが，壷そのものは，土器溜に廃棄された状況にあることは間違いない。宮崎は，「・・地鎮のためのまじない具，やカミへの奉献・贈与品として使用された可能性・・」を指摘している（2004宮崎）。状況的なものを見ると，ほぼ河川，溝等から出土し，他からの出土がないことから通貨として流通していたと言うよりは，宮崎の見解のように祭りなどの道具として使用されていたと考えるほうが妥当であろう。

銅釦（第95図－１）

苣ノ木地区の石棺墓の副葬品として出土している。遺跡内ではこの１例だけである。

不明銅器（第96図－11）

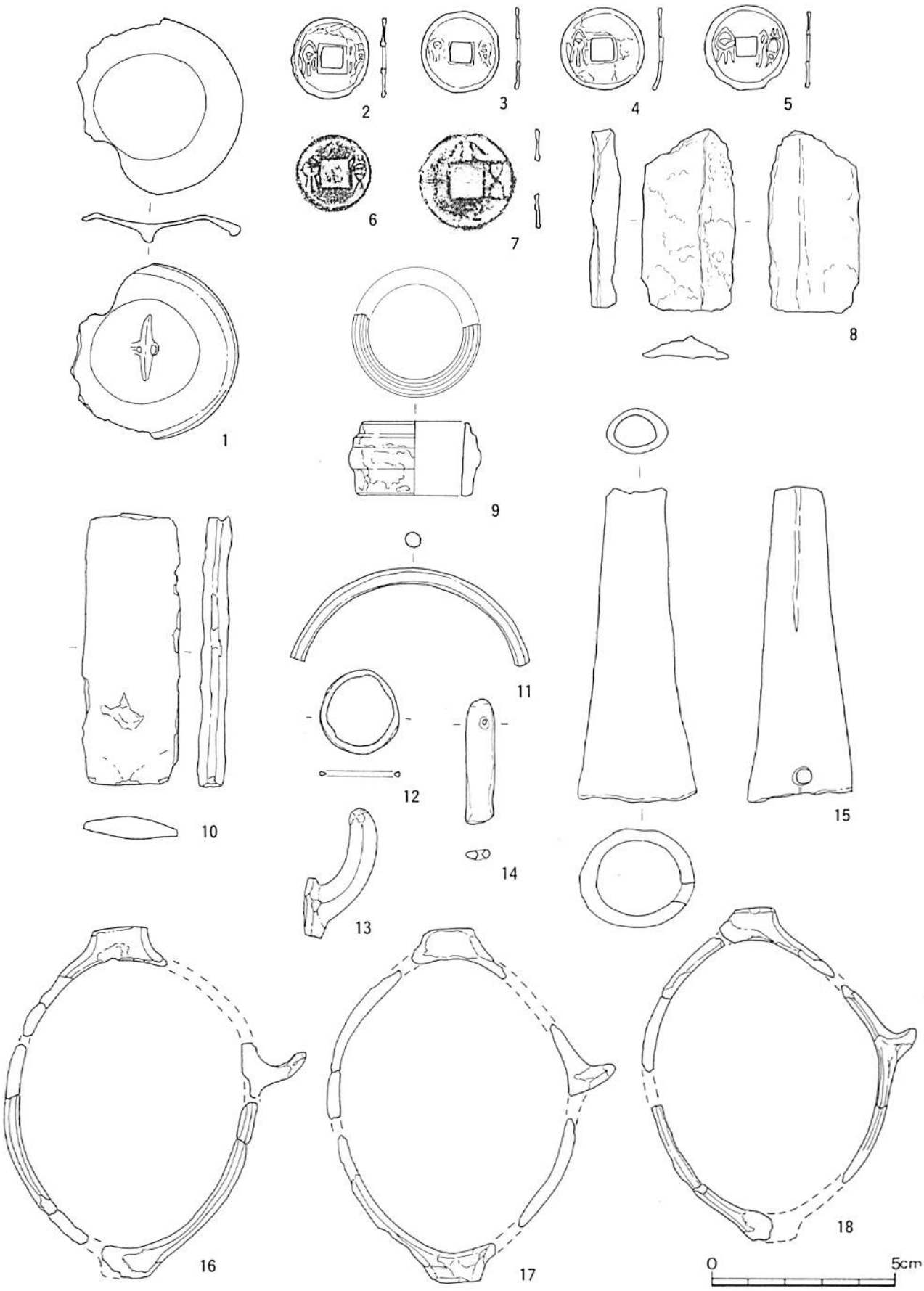
原ノ久保Ａ地区の土坑から出土している。この土坑からは他に，鏡・勾玉が出土している。他の墓からは円柱状の筒型の銅製品で，石突の可能性も考えられる。この手の銅製品は，対馬や北九州にも出土例はあるが，１遺跡での出土は少ないことから，実用品的なものではないだろう。

銅製鉋（第96図－８）

祭儀場跡の東側，2000年の芦辺町の調査で中期後葉の住居址から出土している。先端部が全体に火を受けたように火ぶくれ状になり，先端部は欠損する。

銅素材（第96図－８）

丘陵東側の溝から出土している。剣状に断面菱形を呈すが，鋭さが無く両側辺も直線状に延びることから，板状の銅素材と考えられる。



第95図　その他の青銅製品実測図（2/3）

銅釧（第95図－11・16～18）

西側低地から円環状のものが4点出土しており，この内楽浪系の釧路とされるものが2点（内1点は11），不明が2点出土している。大川地区の墓域で有鉤銅釧が3点表採されているが**16～18**，本来は副葬品であった可能性が指摘できる。丘陵上でも有鉤銅釧の鉤の部分1点**13**が出土しており，墓域・居住域・溝からの出土がある。柳田によれば，釧は，特定個人の所有物と共同体社会の共有物に大別されるという（1986柳田）。つまりは，墓地に副葬品として埋納される場合と，居住域から出土する場合の2つのケースからの判断である。大川地区の有鉤銅釧は，後期に属するものと判断され，墓地への副葬品と考えてよいものと思われる。**第96図13**は，大川地区の釧よりも鉤の部分が鋭角で断面菱形を呈し，大川地区のものより古い様相をもつ。丘陵上では後期の墓地は確認されていないことから，後期のものとするならば，居住域内のものと考える。また，環濠内から出土するものは円環状を呈していることから，祭りに関連して投げ入れられた可能性が高い。このような状況から，特定個人の所有物としては有鉤銅釧，共同体の共有物としては円環状の釧が使用されていた可能性が高いと判断する。

車馬具（第96図－9）

西側丘陵低地部の土器溜より出土している。楽浪郡でつくられた馬車の部品の一部であるが，かなり小型であることから，ミニチュアと考えられている。車馬具例は他にも出土例が数例あるが，車軸頭の出土は本品のみである。多くの鉄製品，貨泉などともに出土していることから，最終的に祭祀具として投げ入れられたものであろう。

銅舌（第96図－14）

丘陵の北側から出土。小銅鐸の舌と思われるものが丘陵上より出土している。小銅鐸本体の出土はない。

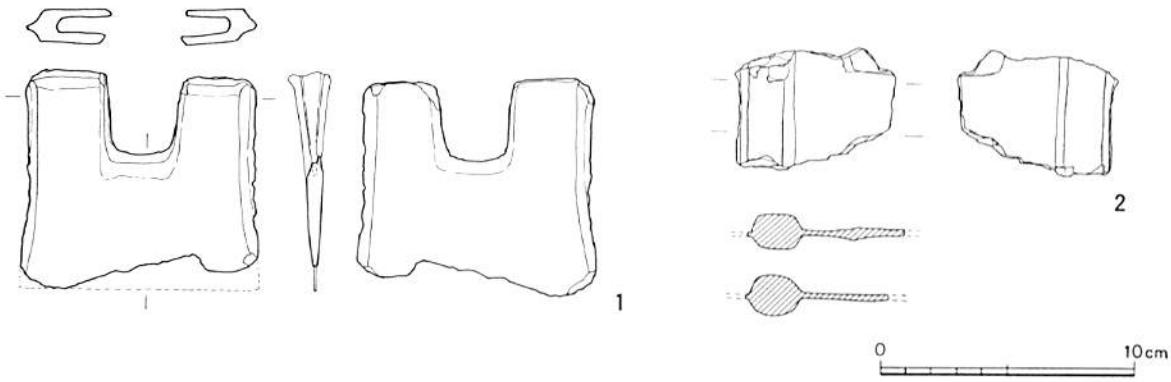
銅鉾（第96図－2）

丘陵中央部付近の表土から出土した，中広銅矛の身の部分である。対馬と違って壱岐での銅矛の出土は僅かに本例を加えて5本である。この内3本は，壱岐島北部の海岸部から出土しており，その出土状況が極めて対馬と似ていることから，航海祈願のために埋納されたものと考えられている。その埋納に携わったのは原の辻遺跡の有力者ではなかったのではないだろうか。3本の銅矛は中広銅矛で，遺跡出土の銅矛と同じである。ただし，本例は中央部のみを残すだけで，かなり破損しており，最終的に銅の素材として残存した可能性も指摘されるところである。

銅鋤先（第96図－1）

丘陵中央部の表土から出土している。銅鋤先については，柳田による分類がある。これによると突帯をもたないⅡ型になるが，外側に開き気味であることなどから極めてⅠ型に近いものと思われる。本例は，袋部頂部の片方側（図では手前側）が肥厚することに大きな特徴をもつ。また，側縁はバリがあり，あまり使い込まれていないものと考える。銅鋤先の性格については，柳田がいうように普及率が少ないことや，材質から考え儀式的性格の強い掘削に使用したものと考えられる。柳田はⅠ型の製作時期を中期後半頃としている。

青銅製品は，中期に武器を中心とする，棺内副葬や祭祀を伴う例が多いのに対し，後期では鏡を中



第96図　その他の青銅製品（鋤先・銅鉾）

心とした副葬がおこなわれるとともに，鏡以外の青銅品は祭祀具として盛んに環濠・河道・溝などに投げ入れられる状況が見受けられる。祭祀具といっても，本来個人の所有物が共同管理されたものへと変化したものもあるであろう。銅鏃は，中期後葉の段階で墓域から集中して出土しているが，河道，環濠等からもかなりの数出土しており，武器型祭祀の一端を担っていたことが考えられる。この他丘陵上から出土した権や破損した銅鉾の出土は，銅の取引などを想定させる遺物で，交易の中の遺物として位置づけられよう。　（福田）

註1　採集された細形銅剣，銅矛については大原地区の墓域周辺の畑の削平にともなって出土しているが，実見していないことから，今回は地点をおさえることに終止し，報告中では特に触れていない。

註2　箙被付きの銅鏃は福岡市井尻遺跡，雀居遺跡において見られるが，形態的には相違する。箙被の発達は，古墳時代以降の鏃において発達をみせるが，多くは段を付けて箙被としている。原の辻型銅鏃は，箙被をもった鏃としては，古い段階のものと思われる。

【参考文献】

大村直　1981「石鏃・銅鏃・鉄鏃」『史館』17

田中勝弘　1981「弥生時代の銅鏃について」『滋賀考古学論叢』1

高倉洋彰　1981「弥生時代の鏡とその年代」『考古学ジャーナル NO185』

高倉洋彰　1985「弥生時代の小形仿製鏡」『考古学雑誌』第70巻第3号

高橋　徹　1986「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学第60号』九州考古学会

田中勝弘　1986『弥生文化の研究』9　－弥生人の世界－

柳田康雄　1986「青銅器の創作と終焉」『九州考古学』第60号

武末純一　1987「壱岐対馬の青銅武器」『考古学ジャーナル10』NO.282－特集・西日本における弥生時代の青銅武器－　ニューサイエンス社

岡村秀典　1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告　第55集』

高田浩司　2001「弥生時代銅鏃の二つの性格とその特質」－石鏃・鉄鏃との比較を通じて－『考古学研究』第47巻第4号

安藤広道　2003「やよい・古墳時代の各種青銅器」『考古資料大観　第6巻』小学館

宮崎貴夫　2004「長崎県壱岐出土の弥生時代中国銭貨」『出土銭貨』第20号

4．器種[註1]別木製品と所属時期について

(1) 梯　子　類（第97図１～３）

いずれの梯子も１木から削りだしている。表面の足掛けは１がやや鋭角となるが，２・３は身に対してほぼ直角とし，下部は傾斜させた削り加工をほどこしている。

１は12号環濠内の壁に立てかけられた状態で出土。身の２箇所に階段を作り出している。長さ74cm，幅14.5cm，厚味３cmを測る。所属時期は弥生中期～後期。２は３号旧河道から出土。長さ60.5cm，幅11.5cmが残存する。所属時期は弥生中期～後期。３は旧河道出土で，長さ73cm，幅27cm，厚味11cmを測る。所属時期は，弥生中期後半～後期初頭。

(2) 斧　柄　類（第97図１～６）

柄の主軸と平行する縦斧で棒状の頭部に孔をあけて石斧を付けるものを直柄とし，柄の主軸と直行するものを横斧とし，斧台を作り出したものが曲柄とした。

１は，石斧を着装するために柄の頭部先端から５～20cm基部寄りに装着孔や装着溝をあけた直柄となる資料で，全長78cmを測る。弥生前期末の大溝から出土している。２は斧台を作り出しているものの，袋状の鉄斧を装着するために，斧台後ろ面に厚味と丸味を持たせ先端部に向けてすぼまる作りにしている。弥生前期末の大溝から出土している。３は扁平片刃石斧や板状鉄斧の柄として使用することを想定。斧台が薄く，後ろ面を平坦に仕上げて深さ５mm弱の浅い装着溝を穿った横斧の曲柄の未製品である。２号溝から出土で全長81.5cmを測る。４は柱状石斧の頭部を挿入して緊縛するために，斧台を抉り端部から柄の上部４cmの切り込みを入れている。所属時期は弥生前期末の大溝から出土している。５・６は，斧台を厚くし，後ろ面を平坦に仕上げた曲柄に柱状片刃石斧を装着することが想定される未製品の斧の柄である。５は大溝からの出土で，弥生前期末にあたる。６は長さ57.35cm，斧台の長さ約19cm，厚味が５cmで弥生後期末～古墳初頭に所属する。

(3) 鍬　　類（第97図１～13）

１～７を直柄鍬とした。また，８～10が直柄又鍬とし11～13を鋤とした。１は，隆起のある面を中心に内湾し上下ともに均整に尖った紡錘形の枘孔の隆起を作出している。２は，直柄鍬泥除装着装置のある広鍬で上部端に突帯と下部に穿孔を施している。３は直柄鍬泥除装着装置のある広鍬で上部両端に穿孔を施し，枘穴は方形となす。４は広鍬Ⅱ式Ｂ型で鍬の周囲から枘穴に向けて徐々に厚味を増す。５～７は広鍬Ⅴ式Ｂ型で５世紀前半から多くなる資料である。８は直柄又鍬の横鍬で，上端面から左右にかけて弧を描き刃部が鋸歯状となる。９は曲柄又鍬で着柄軸の下部が緩やかに広がって，刃部にいたる。軸部と刃部との境が不明瞭である。10は直柄又鍬で刃先の歯数２本。頭部長方形とし枘穴は歯と歯の間に方形の枘孔を設けている。11は一木の角肩で直柄鋤で身と柄が一直線となる。肩幅が刃部の最大幅と大差がなく，屈曲点から緩やかに刃縁にいたる資料である。12は一木の角肩で直柄鋤。長い身を持ち，柄との幅にさほどの違いがない。13は，里田原遺跡で出土した組み合わせ鋤と類似する鋤である。身の中央近くの左右２箇所に方形の穿孔を施している。孔の間に柄を添えて緊縛する方法で「紐結合法」としている。

(4) 柄　杓　類（第98図１～７）

１は柄と身からなり，厚手での身を刳り込んでいる。身が浅く平面形が柄の軸方向に長い楕円形をなしている。身の口縁を柄の付け根の上面よりも一段高く作る匙である。２は身の口縁に対して柄が

直角に近い鈍角となった柄杓。身の刳り込みは匙よりも深く，平面は円形に近い。3は口縁に対して柄が直角に近い鈍角となる柄杓の未製品。4は身の口縁を柄の付け根の上面よりも一段高く作り，身と柄が水平となす柄杓。5は身の口縁と柄の付け根の上面よりも一段高く作り，身と柄が水平となす柄杓。6は身の口縁と柄の付け根の上面との間に段差がなく，両者が鈍角をなしている柄杓である。7も4・5同様に身と柄が水平となす柄杓。

(5) **容　器　類**（第98図1～12）

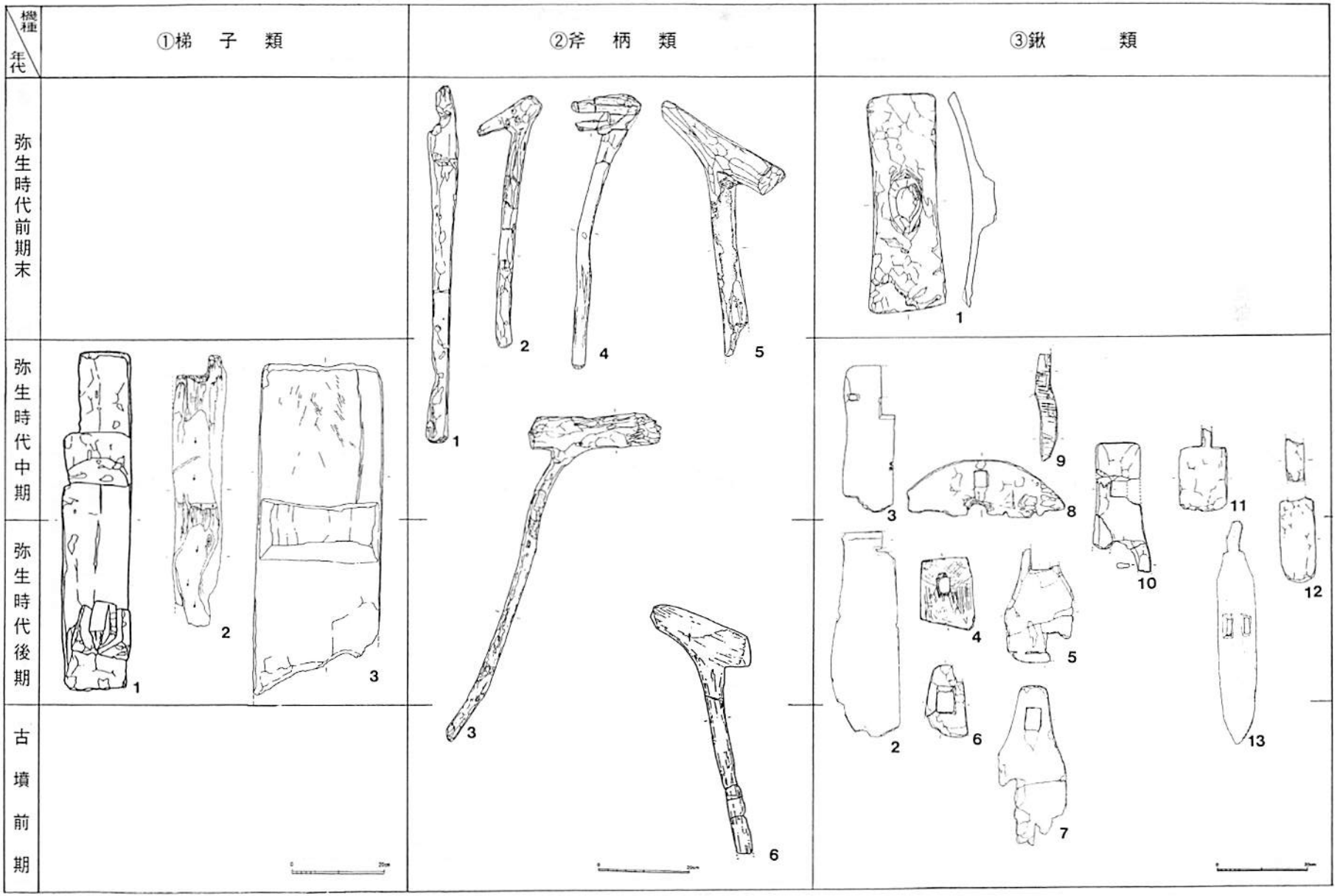
1は4号旧河道のD5区から出土している。脚台付きの椀。内外面ともに黒漆を塗布している。所属時期は弥生時代前期末～中期後半。2は平成5年度の調査で出土している。把手付の容器で器高9cm，深さ約5cmの釣瓶に分類される。3は底部の4箇所に半円形の足付けている。器形は馬蹄形を呈した容器としている。平成6～8年度調査の3号旧河道B8区で出土している。4は平成5年度12号溝から出土している。口縁部径32cm，深さ17.5cm，底径12.5cm，器肉1cm。底部を平底とし，口縁部は平坦口縁としている。5は平成11年度の緊急雇用対策事業に伴う調査で出土している。全長56.8cm，幅13.5cm，高さ13.05cmを測る。6は平成11年度E区3号旧河道から出土。7は平成11年度E区3号旧河道で出土している。8は平成11年度E区3号旧河道で出土している。長さ31cm，幅16cm，高さ4cmを測る。9は，平成6年～8年度の旧河道調査で出土している。底部の4箇所に径2.5cm，高さ1cm程の足を付けている。10は平成10年度B区2号濠から出土している。長さ40cm，幅15cm，高さ8cm。11・12は木製高坏の組み合わせ部品。11は3号旧河道C7区で出土している。12は1号旧河道包含層で出土している。いづれも黒漆の上に赤漆で文様を描く。

(6) **案　　類**（第98図1～4）

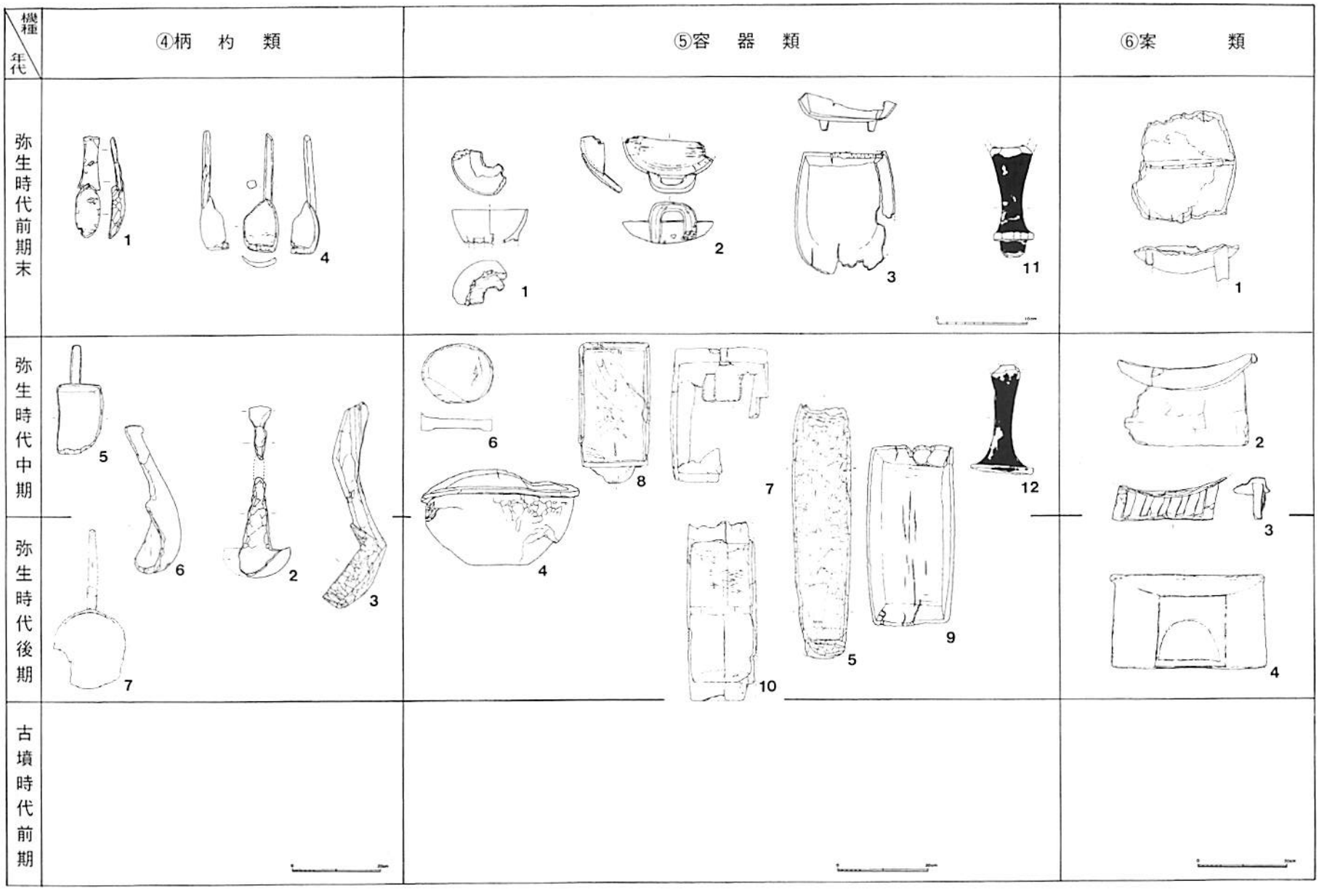
1は平成6～8年度の調査で3号旧河道C7区で出土している。透かしを入れた黒漆塗りで，中央に仕切板をもけている。2は6～8年度の調査の4号旧河道で出土している。楕円形の身で，厚い脚を1木で刳り貫いている。3は平成5年度調査の1号溝から出土している。脚に斜行の長方形透かしを5箇所作出している。身は浅い楕円形を呈する。器高8cmを測る。4は平成11年度の緊急雇用対策事業の3号溝から出土している。脚を半月型に刳り貫いている。高さ20.8cm，脚幅34.6cm，身は楕円形を呈する。

(7) **杵・臼・横槌類**（第99図1～14）

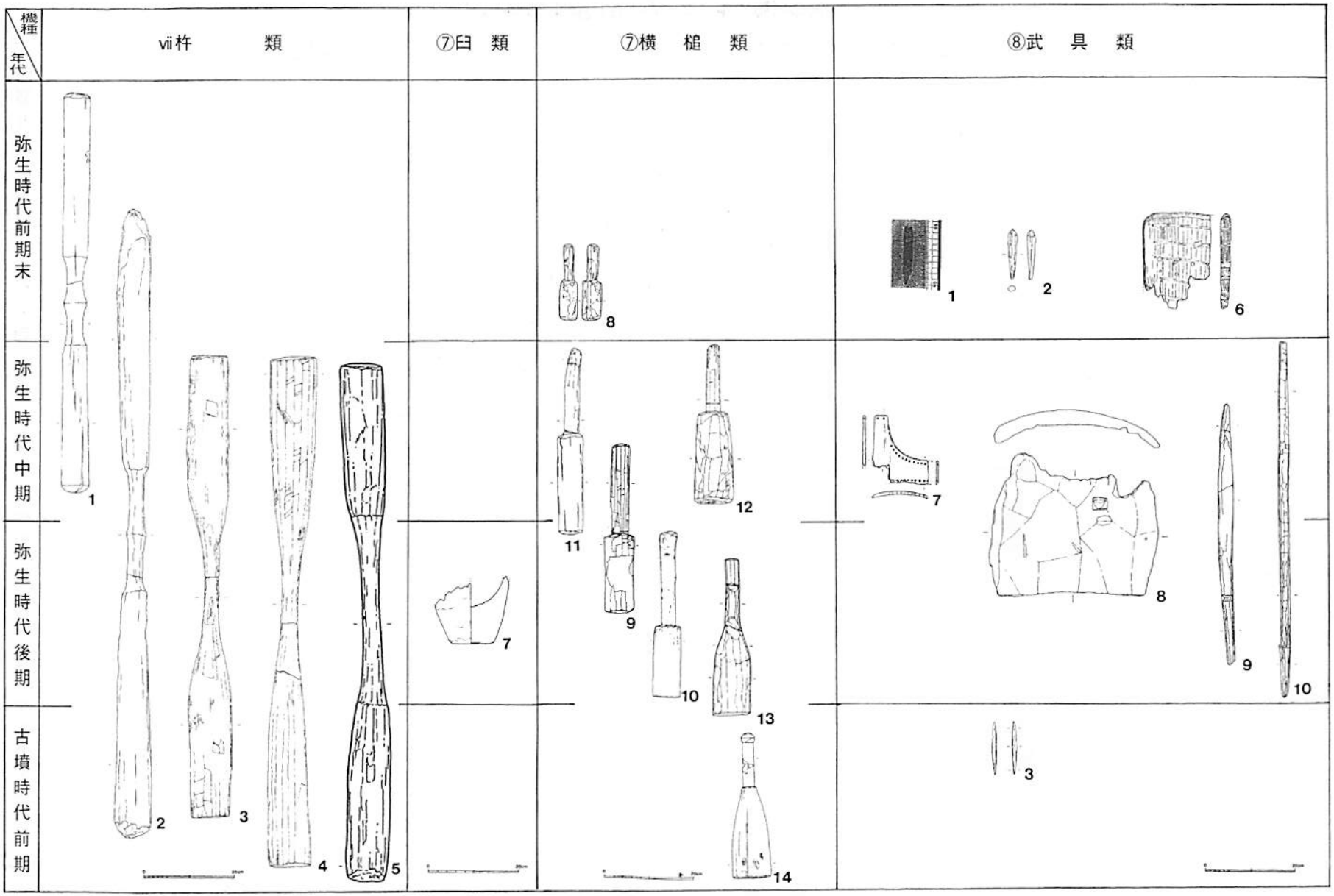
1は平成6～8年度の調査で3号旧河道C8区で出土している。中央の握り部に隆起帯を巡らしている。2は竪杵で，平成6～8年度の調査の1号旧河道土器溜まりから出土している。搗き部は両端近くの径が最大で，握り部に近づくに従って径が小さくなり，中央の握り部に隆起帯を巡らす。長さ139cmの大型品。3は平成10年度E区の5号濠から出土している。長さ101.5cmを測る。4は平成12年度B区1号濠から出土している。長さ113cmを測る。5は，平成14年度の調査で出土している。3～5は竪杵の節帯のないもので，搗き部が円柱状をなし，くびれた握り部となっている。弥生V期～古墳時代に盛行する。6は搗き部と柄とが1木の横杵。枝分かれした木を伐採し，幹を搗き部とし，枝を柄としている。この資料については，検出遺構及び時期が不明であるため図の掲載をしていない。7は小型の臼。平成11年度の緊急雇用対策事業に伴う調査で2号溝から出土している。底径6.7cm，残存高11.0cmを測る。8は小型の横槌で，藁細工に伴う工具タイプにあたる。9・10・11は身が細く豆打ち用の工具用に適したタイプにあたる。12～14は，身が太く藁打ち用に適したタイプの横槌であ



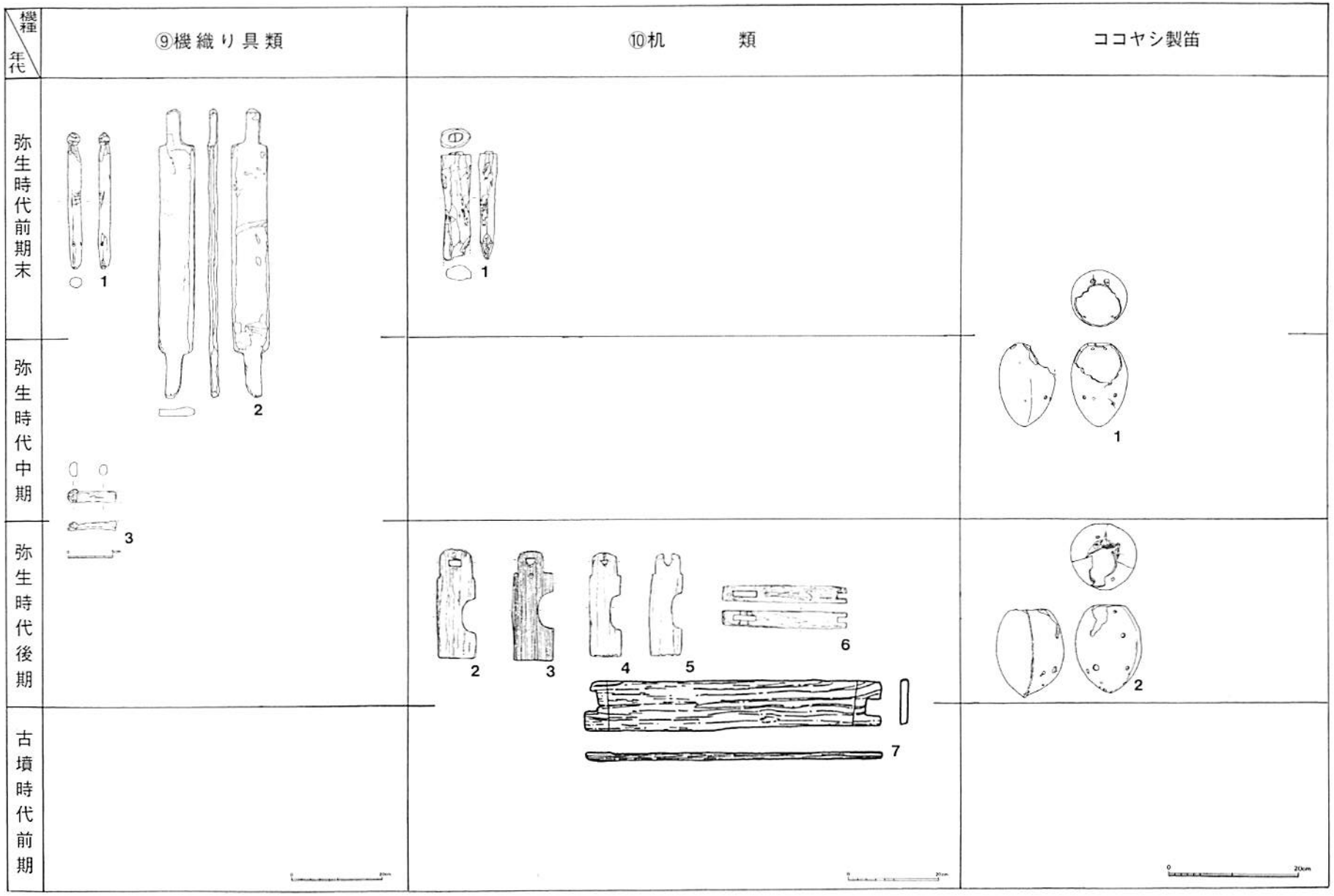
第97図　梯子・斧柄・鍬類の編年案



第98図　柄杓・容器・案の編年案



第99図　杵・臼・横槍・武具の編年案



第100図　機織り具・机・ココヤシ製笛の編年案

る。14は，柄の端部にグリップエンドを作出したタイプである。

(8) **武　具　類**（第99図１～３）

１は組み合わせ式の根挟みで，先端を桜の樹皮で巻き付けている。茎の長さ0.8cm，径0.5cm。２は木鏃。先端を６面に削り，身も同様に削り込んでいる。３は木鏃。長さ11.4cm，幅１cm，厚さ0.6cmで断面は中央部で三角形を呈する。全体にシャープな削り込みを行っている。４は長さ13.3cm，幅1.9cmの木鏃。刃部先端を鋭く削り尖らせるが，身は丸味を持つ。５は長さ13.1cm，幅1.8cmの木鏃で４と同様に身は丸味を持つ。４・５は検出遺構及び時期不明のため図の掲載を行っていないが分類上は栓状鏃にあたる。６は木製の楯で，出土資料は，紐列で楯面を覆うものの例で「紐列式楯」である。７は鉄製三角板革綴短甲を真似た木製短甲で表に黒漆を塗っている。８は身の幅が36.5cm，高さ31.5cm，厚さ１～３cmの短甲未製品。弦走りの部分にあたる。９は木剣形製品で長さ57.7cm，幅2.88cm，刃部にあたる部分は断面長方形で，切先は尖り気味となっている。刃と柄との境に節帯の突起を作出している。10は木剣形製品で長さ78.8cm，幅2.3cm。刃部にあたる部分は，柄に近い部分が丸味を持ち，先端部は長方形の断面を呈している。刃部と柄の境は横に節帯の突起を作出している。

(9) **機織り具類**（第100図１～３）

１は，上端部を削り込んで丸味のある突起状の加工を行っている。２は全長63cm，幅7.8cm両端に切り込みを入れて枘状の柄を付けている。断面は両面を平坦とし，下面をやや尖り気味としている。

３は残存長で5.5cm，幅1.5cm，厚さ１cm。経巻具（たてまきぐ）・布巻具のどちらかにあたるものであろう。原始機で布を織る場合の経巻具・布巻具は先端部を丁寧に加工し裏面を半裁する例が多い。

(10) **机　　類**（第100図１～７）

１は現存長で23cm，幅５cm～6.2cm，厚さ3.3cmの脚。上部に2.7×1.8×0.6cmの枘を作り出しており，組み合わせ式の机の脚としている。２～６は平成14年度の弥生後期の溝落ち込みから出土した資料。２～４は天板４隅に枘孔を開けて４脚を枘組みするタイプの脚である。５は上部を欠損してしている資料でなければ，枘を２箇所作出脚で天板と枘結合するタイプである。６は天板と脚を挟み込むための板材で，両端部近くに枘孔を設けている。７は組み合わせ式の木製板材で，長さ65cm，幅10cm，厚さ1.7cm，両端部に方形の切り込を入れ枘を作出する。　**（町田）**

註１文献：木器機種別については，「木器集成図録近畿原始篇」による。
木器集成図録近畿原始篇（解説）
奈良国立文化財研究所史料第36冊　発行　奈良国立文化財研究所　1993年３月30日
執筆者　上原真人・監修　佐原眞

参考文献：弥生の布を織る　ＵＰ考古学選書９
竹内晶子著　1989年５月　東京大学出版会発行

表18　図版にした遺物の一覧表①

図版番号	遺物番号	遺物名	掲載報告書	報告年	出土遺構	層位
第97図	1	梯子類	長崎県第124集	1995	12号溝	
〃	2	梯子類	原の辻遺跡調査報告書21	2001	E区3号旧河道	
〃	3	梯子類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	旧河道	
〃	1	斧柄類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	2	斧柄類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	3	斧柄類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	4	斧柄類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	5	斧柄類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	6	斧柄類	原の辻遺跡調査報告書27	2004	SD－2	
〃	1	鍬類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	2	鋤類	原の辻遺跡保存等協議会1	2000	SD3	
〃	3	鍬類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	1号旧河道土器溜	
〃	4	鍬類	原の辻遺跡調査報告書26	2003	溝落ち込み	
〃	5	鍬類	原の辻遺跡保存等協議会3	2002	SD5	
〃	6	鍬類	原の辻遺跡保存等協議会2	2001	SD02溝2号	下層
〃	7	鍬類	原の辻遺跡保存等協議会3	2002	SD6	
〃	8	鍬類	長崎県第124集	1995	2号溝	
〃	9	鍬類	原の辻遺跡調査報告書21	2001	E区2号旧河道	
〃	10	鍬類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	1号旧河道土器溜	
〃	11	鍬類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	1号旧河道土器溜	
〃	12	鍬類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	1号旧河道土器溜	
〃	13	鍬類	原の辻遺跡保存等協議会1	2000	SD3	
第98図	1	柄杓類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	2	柄杓類	長崎県第124集	1995	1号溝	
〃	3	柄杓類	長崎県第124集	1995	5号溝	
〃	4	柄杓類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	3号旧河道B8区	
〃	5	柄杓類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	2号旧河道B11区	
〃	6	柄杓類	長崎県第124集	1995	4号溝	
〃	7	柄杓類	原の辻遺跡保存等協議会1	2000	SD03	
〃	1	容器類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	4号旧河道D5区	
〃	2	容器類	長崎県第124集	1995		
〃	3	容器類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	3号旧河道B8区	
〃	4	容器類	長崎県第124集	1995	12号溝	
〃	5	容器類	原の辻遺跡保存等協議会1	2000	SD5	
〃	6	容器類	原の辻遺跡調査報告書21	2001	E区3号旧河道	
〃	7	容器類	原の辻遺跡調査報告書21	2001		
〃	8	容器類	原の辻遺跡調査報告書21	2001		
〃	9	容器類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	1号旧河道	
〃	10	容器類	原の辻遺跡調査報告書21	2001		
〃	11	容器類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	3号旧河道	
〃	12	容器類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	1号旧河道	包含層
〃	1	案類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	3号旧河道7区	
〃	2	案類	原の辻遺跡調査報告書9下	1998	4号旧河道	
〃	3	案類	長崎県第124集	1995	1号溝	
〃	4	案類	原の辻遺跡保存等協議会1	2000	SD－3	

表19　図版にした遺物の一覧表②

図版番号	遺物番号	遺物名	掲載報告書	報告年	出土遺構	層位
第99図	1	堅杵類	原の辻遺跡調査報告書９下	1998	３号旧河道Ｃ８区	
〃	2	堅杵類	原の辻遺跡調査報告書９下	1998	１号旧河道土器溜	
〃	3	堅杵類	原の辻遺跡調査報告書21	2001	５号濠	
〃	4	堅杵類	原の辻遺跡調査報告書21	2001	Ｂ区１号濠	
〃	5	堅杵類	原の辻遺跡調査報告書27	2004	Ｓｄ－４・５	
〃	6	横杵類	原の辻遺跡調査報告書９下	1998	?	
〃	7	臼類	原の辻遺跡保存等協議会１	2000	２号溝	
〃	8	横槌類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	9	横槌類	原の辻遺跡保存等協議会２	2001	旧河道	上層
〃	10	横槌類	原の辻遺跡保存等協議会１	2000	ＳＤ01	
〃	11	横槌類	原の辻遺跡調査報告書９下	1998	１号旧河道	包含層
〃	12	横槌類	原の辻遺跡調査報告書21	2001	Ｅ区３号旧河道	
〃	13	横槌類	原の辻遺跡保存等協議会２	2001	ＳＤ02	下層
〃	14	横槌類	原の辻遺跡保存等協議会３	2002	ＳＤ８	
〃	1	根挟み類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	2	木鏃類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	3	木鏃類	原の辻遺跡保存等協議会２	2001	ＳＤ02	中層
〃	4	木鏃類	原の辻遺跡調査報告書９下	1998	?	
〃	5	木鏃類	原の辻遺跡調査報告書９下	1998	?	
〃	6	楯類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	7	短甲類	原の辻遺跡調査報告書９下	1998	１号旧河道土器溜	
〃	8	短甲類	長崎県第124集	1995	５号溝	
〃	9	木剣類	原の辻遺跡調査報告書９下	1998	１号旧河道土器溜	
〃	10	木剣類	原の辻遺跡調査報告書９下	1998	１号旧河道土器溜	
第100図	1	機折具類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	2	機折具類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	3	機折具類	原の辻遺跡調査報告書21	2001	Ｂ区１号旧河道	
〃	1	机類	長崎県第124集	1995	大溝	
〃	2	机類	原の辻遺跡調査報告書26	2003	溝落ち込み	
〃	3	机類	原の辻遺跡調査報告書26	2003	溝落ち込み	
〃	4	机類	原の辻遺跡調査報告書26	2003	溝落ち込み	
〃	5	机類	原の辻遺跡調査報告書26	2003	溝落ち込み	
〃	6	机類	原の辻遺跡調査報告書26	2003	溝落ち込み	
〃	7	机類	原の辻遺跡調査報告書27	2004	ＳＤ－４・５	
〃	1	笛類	原の辻遺跡調査報告書９下	1998	３号旧河道Ｃ７区	
〃	2	笛類	原の辻遺跡調査報告書26	2003	溝落ち込み	

5．骨　角　器

1-1. 刺　突　具（第101図１～８，第102図23）

鹿角や四肢骨を素材とし，先端が鋭利に尖るものを一括した。基部の形態から３種に分けられる。

・**A類**　体部から基部が一直線で明瞭な基部を作り出さないもの。

・**B類**　体部から基部にかけて緩やかにすぼまるもの。全体として柳葉状の形態となる。

・**C類**　体部と基部の間に明瞭な段を持つもの。

A類は最も一般的な刺突具で，全長10cm前後のもののほか，イルカ類の下顎骨を素材とした20cmを超える大型のものも存在する（**第102図23**）。B類は10cm未満の小型で，四肢骨を利用したものが多い。体部断面は矩形もしくは円形が主体となるが，稀に三角形になるものも存在する（**第101図５**）。C類は，いわゆる骨鏃で体部断面は三角形となる。シカもしくはイノシシの四肢骨を素材とする製品のほか，鯨骨製で直箭刃のものもある（**第101図７**）。

時期の明確なものはほとんどなく，いずれも弥生時代前期後葉～後期に該当する。

1-2. 離　頭　銛（第101図９・10）

大きくは刺突具に含まれるが，中子を挿入するソケットを持ち，機能として明確に離頭銛と判断できる資料に限定した。現在のところ２点のみ出土している。いずれも鹿角製で，二股の尾部を有し長軸方向にソケットを持つ雌型離頭銛に分類できる。ただし，一本づくりのもの（A類）と２個体を組み合わせて使うもの（B類）があり，B類については先端部に幅1.5mmのスリットが認められることから，磨製石鏃もしくは鉄鏃と組み合わせて使用されたものと考えられる（**第101図９**）。また，B類の体部下半には索綱を緊縛した際の痕跡が残っている。

いずれも弥生時代中期～後期の環濠内から出土している。

1-3. 結合式釣針（第101図11）

１点のみの出土である。**第101図11**は軸部の結合部で，下面を断面U字状に刳り抜いている。結合部の先端に段を持つ点が特徴で，類例は鳥取県青谷上寺地遺跡でまとまって出土している。弥生時代中期後半～末のブロック貝層からの出土である。

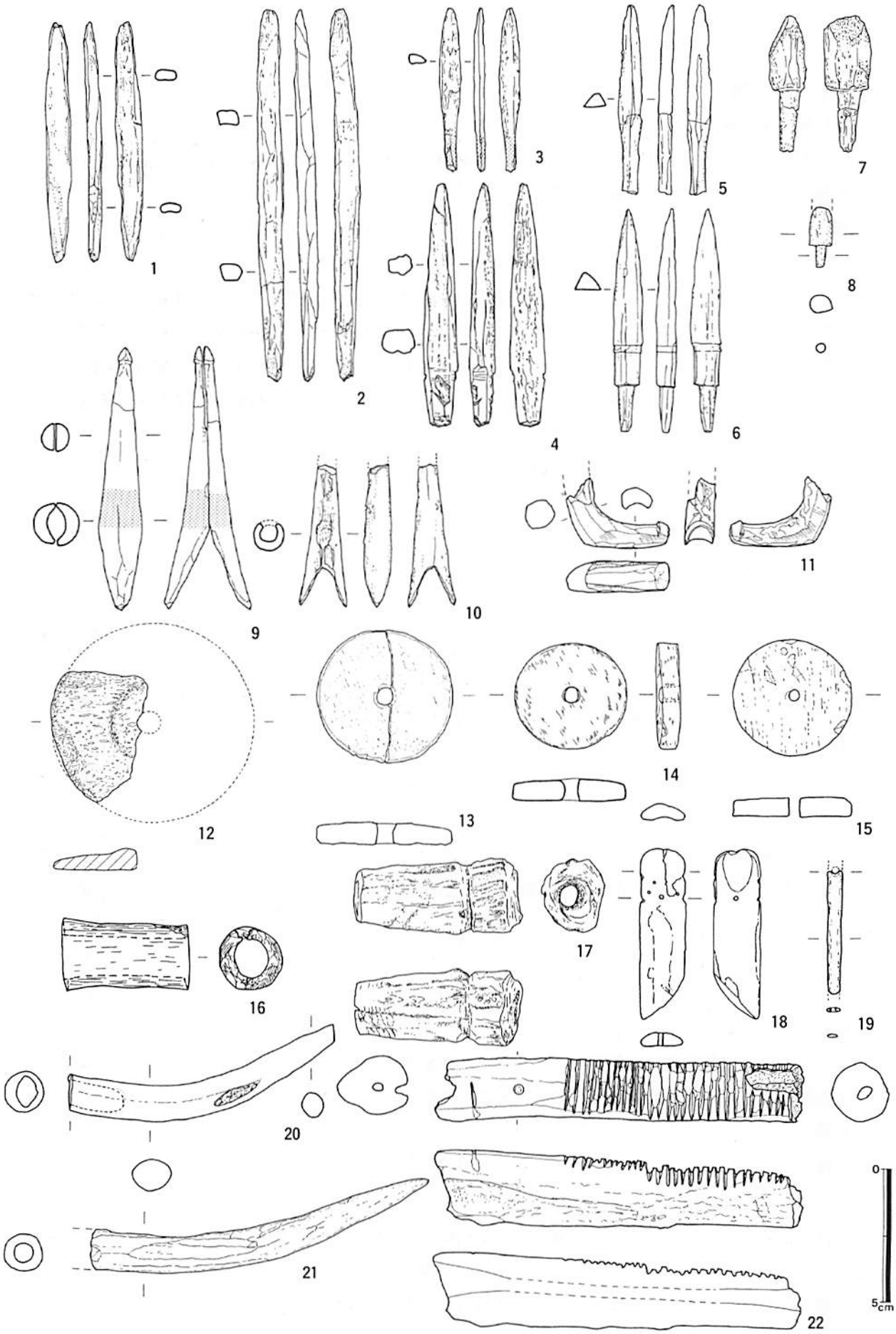
1-4. アワビオコシ（第101図24・27・28）

扁平・棒状の鯨骨製品で，短軸の一端に片刃状の刃部を持つものをアワビオコシとした。破片で出土する例が多く，完形のものは１例のみである。基部の特徴で２つに分けられる。

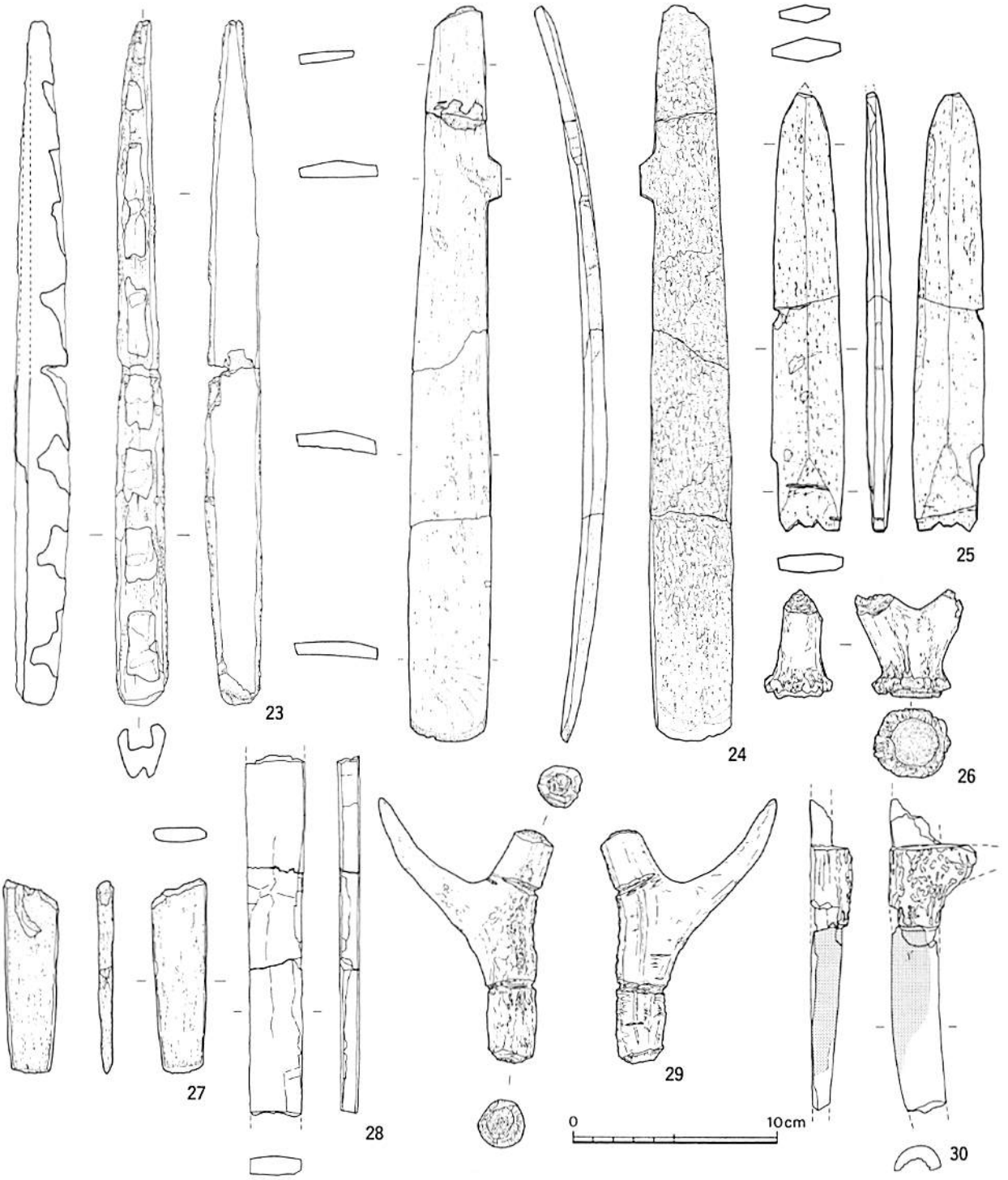
・**A類**　基部から刃部にかけて両側縁が平行となるもの。

・**B類**　基部の一端に突起を持つもの。

A類は中尾分類Ⅰ類に相当する（中尾2005）。破片資料のみでB類体部との区別は困難であるが，両側縁が平行である点で区分した（**第102図27・28**）。B類は中尾分類Ⅱ－b類であるが（中尾2005），完形での出土例があり，細部の特徴が観察できる（**第101図24**）。鯨類の肋骨を素材とし，全長35.95cm，最大幅4.0cm，最大厚0.8cmで，両側縁は基部から刃部にかけて緩やかに開く形態となる。



第101図　骨角器実測図①（1/2）



第102図　骨角器実測図②（1/3）

側面観は素材の形状を反映して大きく湾曲している。基部の片側には矩形の突起を削りだし，刃部は片刃状に研磨している。

時期の明確な資料は，弥生中期末～後期初頭の土坑上層から出土したB類のみである（**第102図24**）。その他は弥生中期～後期に該当する。

1-5. 紡　錘　車（第101図12～15）

紡錘車は一般に石製もしくは土製であるのが一般的であるが，原の辻遺跡では鯨骨製品も出土している。鯨骨製紡錘車は断面の形状から２つに分類できる

・**A類**　断面が矩形となるもの。

・**B類**　穿孔部が周辺よりもふくらみ，断面凸状となるもの。

直径を比較すると，A類は4.5cm前後であるのに対して，B類は復元径7.5cmとなり，A類に比べて大型である。繊維の種類や製品の違いを反映して使い分けられていた可能性が考えられる。

時期の明確な資料はないが，いずれも弥生中期～古墳前期のものである。

1-6. 柄（第101図16・17・20～22）

鉄製工具の柄と考えられるものである。いずれも鹿角製で形状により２つに分けられる。

・**A類**　鹿角の先端部を利用したもので，体部から端部にかけて湾曲するもの

・**B類**　角幹部を利用したもので，平面形が矩形となるもの。表面に刻みを入れ，従来「刻骨」とされていたものもこれに含める（**第101図22**）。

A類については刀子を装着したままでの出土例があり，刀子柄と考えることができる。B類については，鳥取県青谷上寺地遺跡で鉄製鑿を着柄した例がある。原の辻遺跡出土の鉄製鑿には，後述するように棒状で頭部の潰れが認められないものがあり，B類はこのような棒状の鑿を装着したものと推測される。

時期が明確なものはごく少数である。B類は弥生後期以降のものが主体であるのに対して，A類は弥生中期～古墳前期にかけて出土例がある。

1-7. 骨　　剣（第102図25）

１例のみ出土している。鯨骨製で，全長21.5cm，最大幅3.5cm，最大厚1.2cmである。体部中央に鎬が認められるが，両側縁は面取りして刃の研ぎ出しは認められない。基部付近を平坦にカットしており，磨製石剣を模倣したものと考えられる。包含層中からの出土であるが，周辺の遺構の在り方から弥生中期のものと考えられる。

1-8. そ　の　他（第101図18・19，第102図26・29・30）

第101図19は簪と考えられる。扁平な素材の一端を穿孔する。**第101図18**は弭（ゆづか）である。鹿角を扁平に加工し，端部をやや窪ませて穿孔する。**第102図26・29・30**は未成品である。**26・29**は鹿角製で骨幹部に擦り切りの痕跡を残す。**30**も鹿角製であるが，従来「角戈」とされてきたものである。ここでは鹿角を半裁し，分岐部からＬ字形の素材を取った残角と考えた。全体に被熱痕が残る。　　**（中尾）**

【文献】

中尾篤志　2005「鯨骨製アワビオコシの拡散とその背景」『西海考古』第６号　西海考古同人会

6．その他の遺物

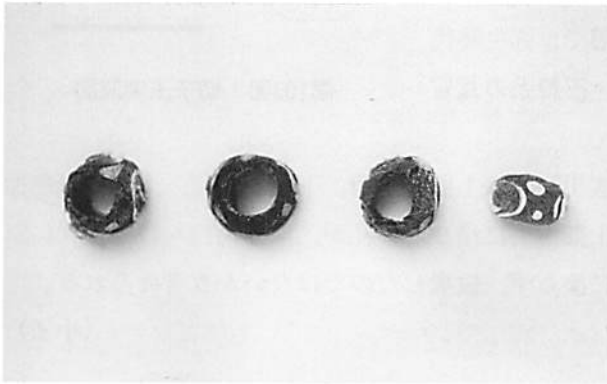
・装　飾　品

玉類（トンボ玉・勾玉・管玉・ガラス小玉）

原の辻遺跡から出土した装身具のうち「玉類」については，トンボ玉・ガラス製勾玉・硬玉製勾玉・碧玉製勾玉・ガラス小玉などが見られる。これらの遺物は首長クラスの人の威信財として副葬されることが多いが，集落の中から出土したものもあり，まつりなどに使用されたものと推定される。また，溝や環濠の上部でも検出される例があるが，威信材としての役割をなくし，低地部に廃棄されたか，あるいは丘陵上から流れ込んだものと思われる。ここではまとまった数量の出土が見られる，墓域を中心に「玉類」について，まとめてみたい。

トンボ玉

昭和49年の大原地区の墓域の発掘調査の際に検出した３号甕棺墓（弥生時代前期末）から出土している。トンボ玉は４個あり，３個は完形品で１個は約３／５の破片である。本体の色は青色で，文様は白色である。文様は玉の周囲三カ所に二重楕円文が施され，その間に２個の円点文が上下に位置を違えて配置されている。二重楕円文の中心にはやや淡い青色ガラスが加飾されている。弥生時代前期の甕棺墓からの出土ということで，現在においては日本でも最古の出土例として注目に値する。甕棺墓の被葬者が，ある程度の身分をもっていたことや，交易に関係した人物と判断できよう。



PL. 6　トンボ玉写真

勾玉・管玉・小玉

各種素材のものが出土しているが，平成６年度調査の石田高原地区検出で，多重環濠の一部と考えられる９号溝状遺構より翡翠製の勾玉が出土している。透明感のある緑色で部分的に白色が混じる。また同調査で，碧玉製と思われる管玉が高トンボ玉写真（昭和49年度出土）元地区検出１号溝より３点，２号溝より１点，計４点出土している。小玉は40点出土している。

平成７年度には大川地区の発掘調査を行った。これは昭和51年度に県文化課により実施された範囲確認調査の際に墓域が認められたことをうけ，墓域の範囲確認と墳墓の内容・構成を究明するために実施された。遺物はガラス製勾玉・管玉・小玉・鉄製ヤリガンナ等が出土している。

平成７年度の調査でも弥生中期後半から後期の時期の墓域より，碧玉製管玉・硬玉製勾玉片・150点を超えるガラス小玉が出土した。

平成８年度には原ノ久保Ａ区の発掘調査を行った。この地は昭和52年の調査で墓域であることが確認されていたが，墳墓の構成や墓域の拡がりを調べるために調査を行っている。遺物としては，土壙より，まき技法によって作られたガラス製勾玉が出土している。その他，箱式石棺墓より出土した硬玉製勾玉が１点，碧玉製管玉が５点，土壙よりガラス製丸玉が３点，箱式石棺墓よりガラス製小玉が６点出土している。また同年度に遺跡中央部高台付近の原地区の調査も行われ，ガラス製勾玉14点，ガラス製管玉１点が出土している。

平成10年度には原地区の丘陵部西側の調査を行った。調査で墓域は確認されなかったが弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての多量の土器と共に，1㍍以内の範囲より270点余りのガラス製小玉が出土している。祭祀に関係することも予想される。

平成13年度には，平成6年度の調査で確認された墓域が，どのような広がりを見せるのかを確認するために苣ノ木地区の調査を行った。遺物は石蓋土壙墓よりガラス製小玉151個が弥生後期の丹塗り袋状口縁の破片とともに副葬されていた。また，4号甕棺墓からガラス製小玉が216個，5号甕棺墓から青銅製釦と共にガラス製小玉が107個出土した。時期は共に中期中葉頃と考えられる。

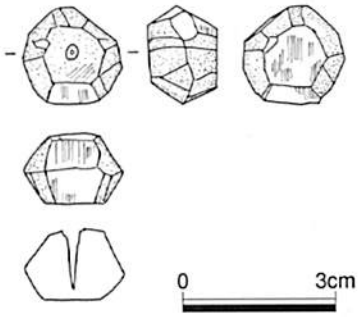
また，平成13年度に石田町（現在合併し壱岐市）主体で石田大原地区の調査が行われ，2号甕棺墓からガラス製小玉が12点，5号甕棺墓から管玉が4点，10号甕棺墓からガラス製小玉が54点，11号甕棺墓から11点の管玉，17号甕棺墓からガラス製小玉が2点，2号石棺墓から勾玉が2点・管玉が8点出土している。

ガラス製小玉は遺構外からも53点出土しており，合わせてガラス製小玉は合計121点出土した。その他，数量的に僅かな場合や出土地点が不明瞭な場合は省略している。

その他（切子玉）

平成13年度に遺跡西側の低地部の溝より切子玉が出土した。

溝は大量の土器が出土している状況から，濠としての機能を備えていたと考えられる。切子玉が出土した層はⅡ層で，弥生時代終末期から，古墳時代前期の土器が出土しており，三韓系の瓦質土器や人面石が出土した層と同じである。



第103図　切子玉実測図

切子玉の形状はそろばん玉形を呈している。研ぎ出し面は上部が1面，下面が2面，上部は自然面，下部1面の4面の研ぎ出しを行っている。穿孔は上部中央に径3㍉の孔が，深さ約14㍉に螺旋状に穿たれている。穿孔工程で下部にヒビが入り，完成に至らず，放棄したのではないかと考えられる。

（小玉）

【参考文献】

藤田　等　1994『弥生時代ガラスの研究』－考古学的方法－　株式会社名著出版
由水常雄　1997『ガラスと文化』その東西交流　日本放送出版協会
1995『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書　第124集　長崎県教育委員会
1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第11集　長崎県教育委員会
2000『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第18集　長崎県教育委員会
2002『特別史跡　原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書　第15集　長崎県芦辺町教育委員会
2002『原の辻遺跡』石田町文化財調査報告書　第5集　長崎県石田町教育委員会
2002『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第24集　長崎県教育委員会
2002『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第25集　長崎県教育委員会

・人面石製品

平成13年度特定調査（環濠等状況調査）で出土した。出土場所は，遺跡中央の台地の西側の現水田部にあたる壱岐郡（現壱岐市）芦辺町深江鶴亀触字八反地区。

人面石製品が出土したＳＤ２は平成13年度の調査段階では溝の東岸のみを検出し，溝の幅，深さ，溝の性格などの全容は明らかではなかった。しかし，平成14年度の県道付け替えに伴う緊急発掘調査（原の辻遺跡調査報告書第27集）で，平成13年度の調査区に隣接する地区の調査を行っている。その結果，ＳＤ２の溝の幅は，約３ｍ，深さ約1.2mで，２段掘りの様相を呈していることが明らかになった。この掘方から，ＳＤ２は人為的に掘削された濠（環濠の一部）であると確認された。遺物の出土状況から，ＳＤ２は弥生時代後期の段階に造られ，後期以後自然に埋没し，後期終末から古墳時代前期に溝として再利用されていたが，溝として機能しなくなった段階で遺物が大量に破棄された状況が伺える。人面石製品はⅡ層（黒色砂質土）内から，弥生時代終末から古墳時代前期の土器に混じって出土した。またすぐ隣からは，大韓民国金海市良洞里古墳に類例が見られる，三耳付三韓系瓦質土器が出土している（『金海良洞里古墳文化』東義大學校博物館）。

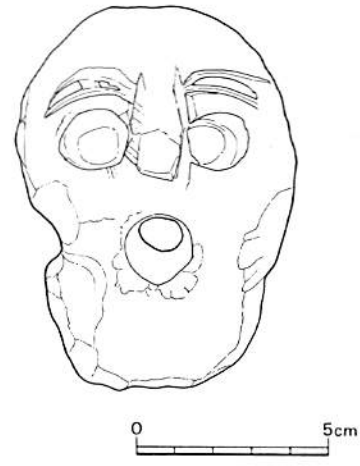
人面石製品の形状は長軸10.2㎝，短軸7.4㎝，厚さ4.5㎝の楕円形をしており，重さは（316.5）ｇ。凝灰岩製で，口は裏側まで貫通しているが，両目は途中まで彫り込み貫通していない。眉，鼻はその輪郭を細い線で彫り浮き上がらせている。また，両頬を削って窪ませ，より人間の顔に近い感じを出している。顔全体の細部に剥離調製を行い全体に丸みを持たせている。

類例としては，弥生前期の鹿児島県山ノ口遺跡で軽石製の人形，古墳時代中期から後期の鹿児島県辻堂遺跡出土の軽石製人面岩偶がある程度で，大変珍しい遺物である。

この人面石製品は当時の原の辻遺跡で行われた何らかの祭祀に使用された可能性が高いと考える。人面石製品が出土した地点の西側は，畦畔遺構などが検出され原の辻遺跡の生産地帯と考えられている。春に稲の豊作を祈り，秋にその豊穣の恵みに感謝する祀りに使用されたのもか，はたまた祖先の霊を祀る古代人の精神生活を表現した遺物であろうか。

さらに興味深いことに前述した平成14年度の緊急発掘調査で，ＳＤ２の同じ層位から，入れ子状態でピッタリと重なりあった鉢が出土している。このような例は水場の祭祀に関係があるのではないかと考えられている。この遺物と祭祀的な意図で作られた可能性が高い人面石，この両者には何らかの関係があったのかもしれない。

（藤村）



第104図　人面石製品実測図

・ココヤシ製笛（第100図１・２）

１．ココヤシ製品の出土概要

①平成７・８年度事業（原の辻遺跡調査報告書第９集上・下）

平成７～８年度にかけての調査で濠２条，溝１条，旧河道３条を確認し，この遺構の３号旧河道内から弥生時代前期末～弥生時代中期中頃の土器に伴ってココヤシ製笛が出土している。

②平成９年度圃場整備に伴う緊急調査（原の辻遺跡調査報告書第５集）

床大引材等の建築部材や柄杓，容器，案，砧，漆塗り容器と共にココヤシの実の容器が出土している。

③平成14年度調査研究事業（原の辻遺跡調査報告書第26集）

Ｖ区の弥生時代後期の溝落ち込みから，木製品と共にココヤシ製笛が出土している。

２．ココヤシ製笛の形状について

①平成７・８年度事業（第９集上・下）

ココヤシ製笛１が長さ12.8cm，幅8.7cmの卵形をなす。一部欠損する。上方に径４cmほどの吹口があり，表面に指孔が３ヶ所，裏面に吹口付近に２孔と下端に２孔の指孔がある。貫通していない虫食状の小孔が数ヶ所ある（３号旧河道Ｃ７区）。

②平成14年度調査研究事業（第26集）

ココヤシ製笛２が長さ13.5cm，幅9.8cm。９ヶ所の穿孔と７ヶ所の穿孔配置を意識した凹みが見られる。

３．ココヤシ製笛の時期について

平成16年までにココヤシ製笛が出土している遺跡は原の辻遺跡以外にないので，比較できないが，弥生時代前期末の資料として**第100図１**があり後期の資料として**第100図２**が出土している。

４．ココヤシ出土の弥生時代の遺跡

弥生時代のココヤシの実が出土した遺跡として，長崎県里田原遺跡[註1]で弥生時代前期後半のココヤシ製の容器と兵庫県神戸市玉津田中遺跡[註2]から弥生時代中期上層から出土したココヤシの実で，下面を打ち欠き，側面に２～４mmの穿孔が１ヶ所付いた資料が確認されているがココヤシ笛としての機能は持ち合わせていないようである。　**（町田）**

【註文献】

１田平町広報誌　2004，８

２兵庫県教育委員会　兵庫県文化財調査報告書第135－５冊　神戸市「玉津田中遺跡」1996，３

【参考文献】

１弥生文化の研究第８巻　祭と墓と装い「２楽器の世界」水野正好1996，11

２弥生時代の知識考古学シリーズ５　甲元真之・山崎純男著

・木　製　櫛

芦辺町教委は，平成５年度に原の辻遺跡の舌状に延びる台地の裾部を巡る環濠の確認調査を実施した際に，西側の調査区で発見されたものである。発見時から木製の為保存状態が極めて厳しい状況であったので，先に真空凍結乾燥法を用いて保存処理処置を行った。

原の辻遺跡出土の櫛は，半円形状を呈し，端部に櫛の歯の部分を作り出している。櫛の歯の先端部分を除きほぼ原形を保っていると考えられる。

櫛は，半円形状の長さは26㎜，最大幅37㎜，櫛の歯の部分の幅は31㎜，現存する歯の長さは３～７㎜である。また，櫛の歯の両端は櫛の歯幅に比べて幅広くなっている。厚みは，２～３㎜である。櫛の歯部分は，残存長が３～７㎜で歯数は24本である。歯の作りは，木目の硬い部分を利用して作り出しているために，半円形の胴部に対して直線でなく斜めで，斜めに並行して歯を付けている。全体の長さは，櫛の用途や他の類例からして，約６㎝程度と推察される。

櫛の材質は，楽浪郡との関係を考慮して鑑定を実施したが，特定できなかったので詳細は不明である。

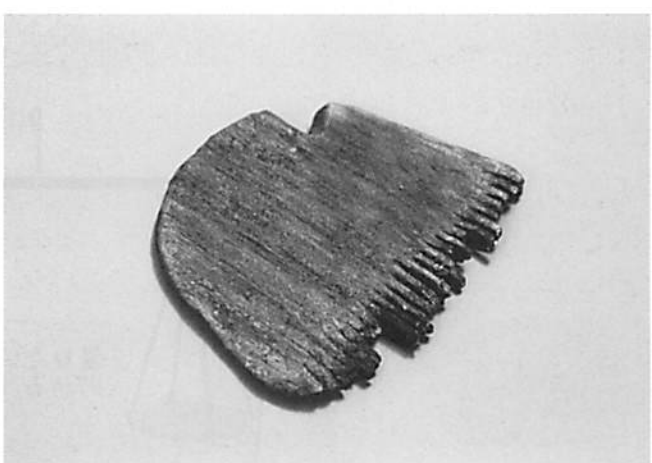
日本列島では，櫛は装身具の一つとして縄文時代前期から利用され，赤色漆塗りの櫛が出土しているが，ほとんどが結歯式竪櫛で，原の辻遺跡出土の櫛とは技法的に相違しており，同様な形態は楽浪漢墓出土の櫛以外には類似品は見られない。

櫛の形態については，２世紀頃の中国大陸の楽浪の王肝（おうく）を埋葬した王肝墓である平安南道石厳205号墳の副葬品の一つである木製櫛や他の楽浪漢墓からはたいまい製の櫛が発見されている櫛の形態に類似している。また，化粧道具を納めた円形の鏡奩（きょうれん）の中に，半円形の小箱が１つ発見されているが，その中身は空であったとされている。その他の遺物から櫛の収納箱ではないかと推察されている。

日本の弥生文化のなかで，一支国の中心集落である原の辻遺跡では，中国大陸及び朝鮮半島との交流を示す遺構や遺物が数多く出土しており，今後の調査による新たな発見及び本土部の遺跡からの類例の発見を待ちたい。　　（副島）

【参考文献】

大阪府立弥生文化博物館　平成５年度秋季
特別展「弥生人の見た楽浪文化」
大阪府立弥生文化博物館図録７　1933



PL. 7　木製櫛

・**青銅製権**

権とは，棹秤の錘のことである。祭儀場北端部にほど近い原地区の包含層中から出土した。現存高4.3cm，幅3.49cm，厚さ2.85cm，重量150ｇである（**第105図**）。平面形は釣鐘状で横断面は楕円形，頂部には半円形の鈕の痕跡がわずかに残る。また，体部側面には長軸方向に伸びる鋳合わせの痕跡が確認できるとともに，径５～６㎜の孔が貫通している。底面中央には円形の浅い凹みがある。

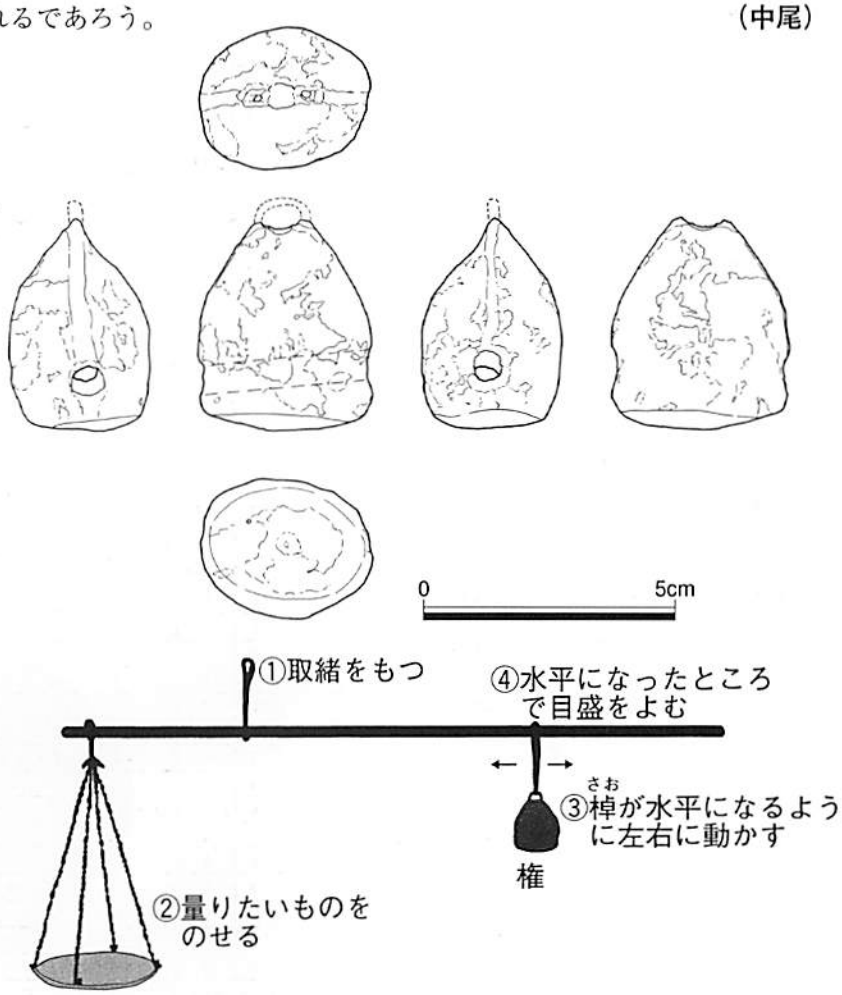
所属時期は，出土状況から特定には至らなかったが，鉛同位対比法による産地推定の分析の結果，素材の鉛が中国産であること，また弥生時代後期の国産青銅器である三遠式銅鐸や広形銅矛などに近い鉛であることが明らかになった。このことから，青銅製権は弥生時代後期の所産である可能性が高くなった（中尾編2002）。

青銅製権の位置づけについては，青銅器生産の素材として搬入された可能性と，交易に関わる実用品として使用された可能性いずれにも解釈することができる。しかし，原の辻遺跡の交易拠点としての性格を考慮すると，交易を円滑に行うための実用品として捉える方が自然であろう。体部側面の穿孔も鋳造後に規定の重さに調整するためのものであって，鈕は欠損するものの，非常に実用的な状態で出土していることも根拠の一つである。いずれにしても，『魏志倭人伝』に描かれた交易を行う「市」の存在や，交易を監督する機関「大倭」の存在の可能性を示唆しており，原の辻遺跡の性格を反映する重要遺物として位置付けられるであろう。

（中尾）

【参考文献】

中尾篤志編2002『特別史跡　原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第14集　芦辺町教育委員会



第105図　権実測図

・ト　　骨

獣骨を焼き，骨の表面にできる亀裂によって吉凶を占うト占骨は中国の東北地方から朝鮮半島を経てもたらされたものであり，弥生時代の日本ではシカやイノシシなどの骨を焼いて生じたヒビ割れ・色調の変化を見て吉凶を占う風習があったことが『魏志倭人伝』や『後漢書東夷伝』に記されている。

倭人伝には「其の俗挙事往来に，云為する所有れば，輒ち骨を灼きてトし，もって吉凶を占い，先ずトする所を告ぐ。其の辞は令亀の法の如く，火坼を視て凶を占う」とあり，ト占の内容がト骨と亀トがあったことが窺え，帯方郡は亀ト，倭人は骨トであったと解釈されている（註１）。

いまのところ，朝鮮半島から日本に受容されたことは間違いないところであるし，半島南岸に位置する全羅南道海南郡の郡谷里貝塚や泗川市勒島遺跡の近年の調査からは，多量のト骨が出土している。日本では最も近い位置にある対馬島からは発見されていないが，壱岐島では出土している。出土遺跡の多くは近畿・東海・関東地方に及び，特に神奈川県三浦半島の海蝕洞窟遺跡に集中している。

しかし，鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡からは227点のト骨が出土し，これまでの全国の遺跡の総出土数を一遺跡で上回っている。

原の辻遺跡のト骨（第106図・表20）

原の辻遺跡のト骨は1951年東亜考古学会が行った調査で９点が出土，ほとんどがシカでイノシシは１点だけである。

1994年の調査では，台地上の９ｃ－７号住居跡から大小６点の肩甲骨片が出土した。そのうち４点がイノシシ・１点がシカ・不明２点である（註２）。比較的良好な２点を図示したが，**1**はイノシシ右側肩甲骨で長さ22.5cm，幅14.5cm，関節径4.0cm×2.6cmを測る。焼灼痕は背側面に相当する棘上窩に１列４点，棘下窩に２列６点の焼灼痕が見られる。焼灼の位置する部分の厚みは0.13～0.25cmと比較的薄いが，人為的な調整は見られない。整治は肩甲棘部を行っている。関節窩より8.0cmの位置から約12cm，外側面より1.5cm程残して削られている。

2は**1**より一回り小さく，長さ17.4cm，幅12.0cm，関節径3.35cm×2.35cmを測る。イノシシ右側肩甲骨で尾側部分を一部欠く。焼灼痕は前縁中央部より尾側中央部に向け一列に４点，この列左右の前縁に各１点が見られる。生治は認められないが，肋骨面側縁に長さ４cmと３cmの筋状の傷が２条みられるが，解体痕と思われる。

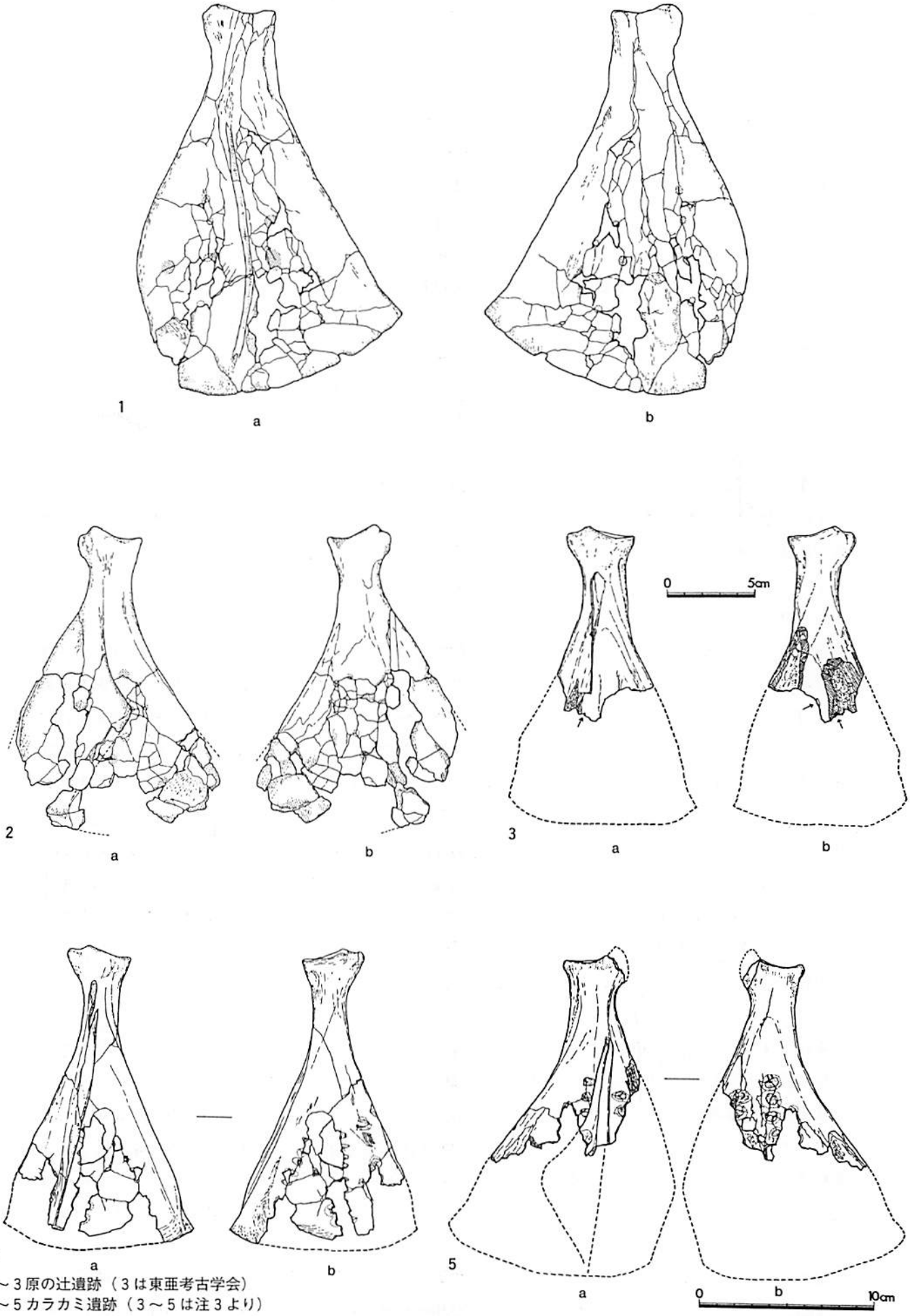
表20　壱岐島出土ト骨一覧表

項目／番号	遺跡名	出土区層	使用動物	使用部位	残存焼灼痕	保存状態	整治
1	唐　神	6 T － 黒 色	シ　カ	肩甲骨(r.)	12		ナシ
2	〃	7 T － 1	〃	〃 (l.)		肩甲下窩欠	〃
3	〃	7 T － 5	イノシシ	〃 (r.)	?	尾側1/2 欠	〃
4	〃	7 T － 6	〃	〃 (l.)	6	〃	〃
5	〃	東亜考古学会1952	シ　カ	〃 (l.)	6	前 縁 破 片	〃
6	〃	松　永　氏	〃	〃 (r.)	3	〃	〃
7	原の辻	東亜考古学会1951	〃	〃 (l.)	1	尾側2/3 欠	〃
8	〃	〃	〃	〃 (l.)	1	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃 (r.)	6	尾側1/2 欠	〃
10	〃	〃	〃	〃 (l.)	3	前　縁　欠	アリ
11	〃	〃	〃	〃 (r.)	2	尾側1/2 欠	〃
12	〃	〃	〃	〃 (r.)	2	後縁のみ残	〃
13	〃	〃	〃	〃 (l.)	ナ　シ	尾側1/2 欠	〃
14	〃	〃	イノシシ	〃 (l.)	ナ　シ	〃	〃
15	〃	〃	〃	〃 (l.)	1		ナシ
16	唐　神	W －15 上 層	〃	〃 (l.)	3	尾側1/4 欠	〃
17	原の辻	9 C-7号住居跡	〃	〃 (r.)	10	ほ ぼ 完 形	アリ
18	〃	〃	〃	〃 (r.)	6	尾側一部欠	ナシ
19	〃	〃	〃 ?	〃 (r.)	3 ?	前後縁棘残	アリ
20	〃	〃	〃	〃 (r.)	不　明	不　明	
21	〃	〃	シ　カ	〃 (l.)?	不　明	尾側4/5 欠	
22	〃	〃	イノシシ?	〃 (r.)	不　明	尾側3/4 残	アリ

1～4　九大発掘分（1977年）　5～15　東亜考古学会（1951・1952年）他発掘分
16　静本町教育委員会（1985年）　17～22　芦辺町教育委員会（1995年）
註3 木村幾多郎「長崎県壱岐島出土の卜骨」『考古学雑誌』第64巻　第４号より転載、一部加筆

東亜考古学会調査の原の辻遺跡出土ト骨（表20・第106図）

表１の７～15は1951年東亜考古学会調査の内訳である。九州大学保管のト骨を木村幾太郎がまとめた記述によれば次のとおり



1～3原の辻遺跡（3は東亜考古学会）
4～5カラカミ遺跡（3～5は注3より）

第106図　壱岐島出土ト骨

である。「原の辻遺跡からは9点のト骨及び加工骨が検出された・・・焼灼はいずれも，今回発掘した鹿肩甲骨と似た焼灼痕を示すが，唐神遺跡ほど焼灼点が規則的ではない。(15) のイノシシ肩甲骨の焼灼痕も，唐神遺跡のイノシシ肩甲骨ト骨のように漆黒色を呈さず，痕跡も小さくシカのそれと似る。原の辻遺跡出土ト骨で注目されることは，ト骨に整治が加えられていることである (10～14)。整治は，肋骨面の後縁寄りの肥厚した部分を刀子のようなもので削平し，その部分は海綿質が露出している。シカ肩甲骨前縁は肥厚せず薄いので整治は行われないが，肩甲棘の反対側の肩甲下窩の部分を削り整治を行っているものがある。」以上のト骨は「東亜考古学会1951」のラベルの箱に入っていた獣骨の中から抽出されており，この時の調査では貝塚も発見されず，貝層が検出された1939年の鴇田忠正調査資料ではないかと考えられているが，原の辻遺跡では貝層以外のところからも獣骨やト骨が出土しており，前者の出土と考えてよいと思われる。いずれにしても時期的には弥生後期後半に属する。

九州大学及び東亜考古学会調査のカラカミ遺跡出土のト骨

1977年九州大学考古学研究室の行った調査で貝層及び包含層と溝状遺構内貝層中よりシカのト骨2点，イノシシのト骨2点の計4点が出土，このほか1952年東亜考古学会の調査でシカのト骨1点，松永氏採集のシカのト骨1点の合計6点が出土している。

その中で保存状態のよい2点について観察が述べられている。要約すれば**第106図4**は「肩甲骨は事前に整治は行われず，鑽鑿もない。・・・焼灼痕は明確なものが，外側面より見ると棘下窩に2列（9個と5個の焼灼痕あり），棘上窩に1列焼けて変色した所が観察される。焼灼痕は肋骨面と外側面に認められるが，その焼け方よりすれば，肋骨面に棒状の物で点状に焼灼を加え，外側面にそれによる変化が現れた物である。3列の焼灼は肩甲骨の内・外の緻密質が直接合わさり，間に海綿質の認められない薄い所に行われている。」**第106図5**については，肋骨面より点状の焼灼を加えたと思われ，肩甲骨棘下窩に漆黒色の痕跡がある。外側面棘上窩に1列2ヶ所，棘下窩に1列4ヶ所の明確な肋骨面焼灼による変色が現れている。・・・シカの例と同じく肩甲骨棘・前縁・後縁・肩甲頸など熱い部分は避けており，棘上窩・棘下窩に相当する肋骨面（厚さ2～1.2㎜）の薄い部分に焼灼を加えていて，事前の整治・加工痕は認められない。」とした上で，出土状態からト骨はほかの物と区別されて処理されたのではなく，他の土器片，獣魚骨，貝類と同様に溝内に廃棄されたものと考えられ，イノシシ肩甲骨は破損したまま廃棄された可能性が指摘されている。

壱岐島出土のト骨は，原の辻遺跡とカラカミ遺跡だけに限られており，時期的には前者が弥生中期（**第106図1，2**）なのに対して，後者は弥生後期に限られるようである。

弥生時代のト骨出土地は現在33遺跡337例以上が知られている。地域によって使用する動物種に違いがあり，近畿以西ではイノシシとシカの58：42で東海以東では84：16とイノシシの比率が高くなっている（註4）。現在壱岐島にはイノシシもシカも生息していないが，出土ト骨でみるかぎり比率は55：45とシカが若干多い。このシカの多い傾向は，朝鮮半島でも同じであり，半島からの伝播を裏付ける要因となっている。

ト骨・ト甲の種類については神澤勇一によって第Ⅰ形式から第Ⅴ形式に分類されており，弥生時代の形式は「骨面を一部鋭利な刃物（刀子状鉄製工具と推定）でわずかに削り，その部分を点状に焼灼

したもの。焼灼は骨の幅の広い部分に多いが，肩胛骨の胸縁，頸縁ときに肩胛棘側面をはじめ，肋骨その他の骨の湾曲が強く，かつ厚い部分にも認められる例も少なからず存在する。・・・」と第Ⅱ形式で述べている。また，新田栄治によれば，世界各地のト占の風習を大別すれば，Ⅰ無灼法，Ⅱ全面有灼法，Ⅲ点状有灼法に分けられ，Ⅲについては中国・朝鮮・日本の地域に限られると指摘している。神澤分類によれば，原の辻遺跡出土ト骨は第Ⅱ形式に属するが，1点はⅢ式に近い形状を示す。カラカミ遺跡出土ト骨は，「整形を全く施さず，肩胛骨中最も薄い棘下窩の片面を点状に焼灼したもの。」とする神澤Ⅰ式に属する。

しかし，先にも述べたように鳥取県の青谷上寺地遺跡からは，弥生中期後葉～古墳前期初頭の保存状態もよくかつ膨大な量の刻骨やト骨の出土があり，計測法に基づいて各属性がパターン化されている。壱岐に見られないものとして焼灼痕を明瞭にするためにミガキが加えられているものも多く出土している。また，焼灼痕でいえば肩甲棘上窩，肩甲棘下窩に見られるものが多い。そして，ト骨の変遷については，古いものは焼灼痕が少なく，新しいほど多くなる傾向が指摘されている。その点では原の辻遺跡のト骨は，青谷上寺地遺跡Ⅲｃ（中期後葉～古墳前期初頭）にあたると考えられる。

朝鮮半島では咸鏡北道の虎谷遺跡のト骨の発見以来，全羅南道郡谷里貝塚や勒島遺跡などの多くの遺跡が報告されているが，とりわけ原の辻遺跡と関係深いと思われるのが，弥生土器を多量に出土した勒島遺跡であろう。ここでもト骨を多く出土しており，今後の交流関係の比較が望まれる。

壱岐のト部

1988年勝本町串山ミルメ浦遺跡から亀ト骨が発見された。『延喜式』臨時祭，宮主ト部の条に「凡そ宮主はト部の事に堪えうる者を取りて，之に任ず。そのト部は三国にてト術に優良なる者を取る。伊豆五人，壱岐五人，対馬十人。若し都に在る人を取るは，ト術群に絶するに非ざれば，輙く充つるを得ず。」とあり，壱岐からもその任にあたっていたことがわかる。そのほかにも『新撰亀相記』や『令集解』にも壱岐から京に出たト部の記述がみられる。これら古墳時代以降は亀（アカウミガメ）の腹甲を整形して鑽孔を焼いて，裏面に生じた焼けひびの形で吉凶を占っている。

壱岐のト部の存在については，『万葉集』巻15の遣新羅使として壱岐で不慮の死をとげた雪連宅満を悼む挽歌に「…壱岐（ゆき）の海人（あま）の上手（ほって）のト部をかた焼きて…」と歌われている。また『壱岐名勝図誌』には「ト骨の事」として伊伎挙政の名もみえる。壱岐のト部の消長については，伊伎氏を継いだ吉野氏が社家として存続するが，ト部としての痕跡は絶ってしまう。　**（安楽）**

【註】

1 渡辺誠　1990『日韓交流の考古学』名古屋大学出版会
2 松永泰彦　1995『原の辻遺跡』芦辺町文化財調査報告書第9集
3 木村幾太郎　1979「長崎県壱岐島出土のト骨」考古学雑誌第64巻第4号
4 神澤勇一　1987「日本のト骨」考古学ジャーナル281
5 鳥取県教育文化財団　2001『青谷上寺地遺跡3』鳥取県教育文化財団調査報告書72
6 山口麻太郎　1982『壱岐國史』長崎県壱岐郡町村会

Ⅵ　自然科学分析

1．原の辻遺跡下層（幡鉾川層）の後期更新世哺乳類化石

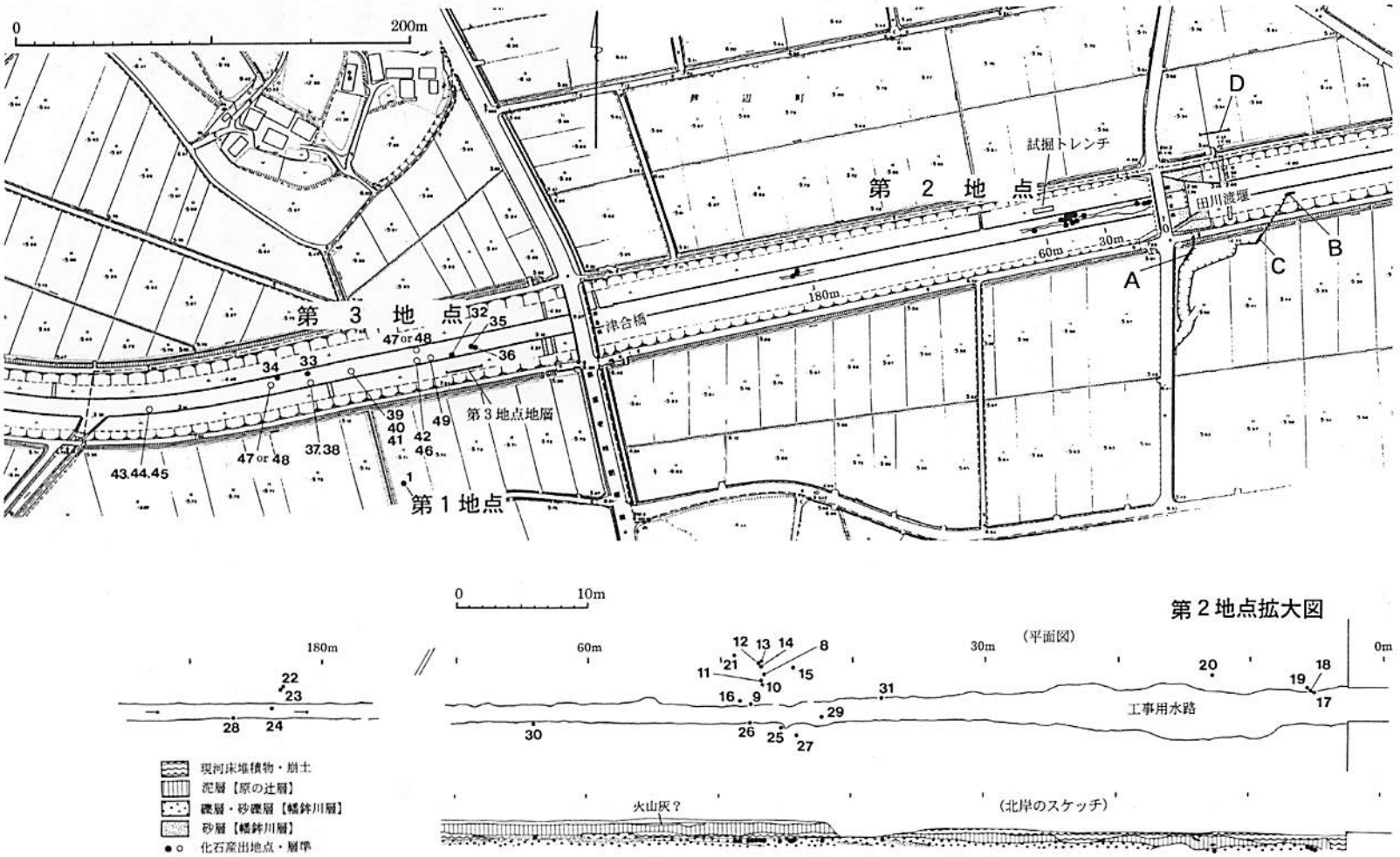
(1) 調査の経過

長崎県壱岐市原の辻遺跡下層の後期更新世哺乳類化石は，長崎県教育委員会教育庁原の辻遺跡調査事務所が幡鉾川改修に伴う発掘調査を実施した際に1992年から1996年にかけて発見され（長崎県教育委員会編1998；PL. 8），それら化石の産出層，産状および古生物学的な研究を第四紀哺乳類化石と人類史とのかかわりに関する共同研究を進めてきた筆者らが行ったものである（稲田編1998）。

当地における最初の後期更新世哺乳類化石の発見は，原の辻遺跡調査事務所が1992年２月17日から29日までの間に実施した「幡鉾川流域総合整備事業に係わる埋蔵文化財範囲確認調査」にさかのぼる（副島和明ほか担当）。この時の49カ所におよぶ試掘地点のうち，Ｋ１試掘地からほぼ完全な形のゾウの臼歯化石が出土した（第107図の第１地点，表21の標本番号01）。同地点は，原の辻遺跡中心部がのる台地の北端から西へ約120m，幡鉾川南岸堤防の端から南へ約50mにあたり，現在は原の辻展示館敷地となっている。

同調査事務所は，1995年度に幡鉾川改修工事にともなって河床面の発掘調査を実施したが，1995年７月，津合橋と田川渡堰との間で弥生時代文化層の調査後，その下位にある地層（後述の幡鉾川層）から多数の化石骨片を発見した（PL. 8の上の写真；第107図の第２地点）。そこで同年９月４日から８日までの５日間，稲田と河村が同調査事務所調査員および岡山大学学生であった高田貫太と米倉佐和子の協力を得て，発見された化石骨の出土地点と産状を調査し，その産出地点を記録した（第107図及び表21の02～31）。あわせて田川渡堰より下流側において河川改修の掘削で露出した地層を調査し（第107図のＡ・Ｂ・Ｃ地点），化石とほぼ同層準の地層に薄い火山灰層が挟まれているのを発見した（第107図のＡ地点；第108図の１）。その後，河川改修に伴う発掘調査は津合橋より上流へ進み，ここでも弥生時代文化層の下位にある地層から化石骨が発見されたので，1996年３月14日から16日まで稲田と河村が現地で調査を行った（第107図の第３地点；第108図の６；表21の32～36）。また，田川渡堰下流側北岸の貯水池建設で露出した地層（第107図のＤ地点，第108図の４）を調査するとともに，壱岐島南部の広い範囲で地形及び地質の調査を行った。津合橋より上流側の発掘調査は1996年度にも継続され，1996年４月から同年12月までの間に県調査事務所によりゾウの臼歯やオオツノジカの角など良好な化石標本が発見された（第107図の第３地点；表21の37～49）。

PL. 8　原の辻遺跡下層（幡鉾川層）の化石産出地と化石の産状
上：東から見た第２地点，下：第３地点，ゾウ臼歯化石（標本番号ー32）の産状



第107図　原の辻遺跡下層(幡鉾川層)から産出した後期更新世哺乳類化石の分布
番号は表１の標本番号に対応する。黒丸の産出地点は正確な位置，白丸はおおよその位置を示す。

さらに，2001年７月には河村が地層と化石の補足調査を行い，2004年８月と10月には樽野が中心となって原の辻遺跡調査事務所保管資料と岡山大学で整理中の資料の全体を再点検し，原の辻遺跡下層の後期更新世哺乳類化石のリストを作成した（表21）。完形の骨から小さな骨片までを含めると全体の標本数は49点となり，動物種としてはナウマンゾウとヤベオオツノジカが含まれることが明らかとなった。

(2) 化石産地と周辺の地質

化石産地とその周辺の地質は，幡鉾川の河川改修工事に伴ってできた露頭と原の辻遺跡の発掘地の堆積物断面で観察されたものであるが，これらの露頭や断面は現在すべて消滅してしまっている。これらの露頭や断面では，明瞭に岩相の異なる２つの地層が観察され，それらがこの地域の幡鉾川沿いの沖積面下に広く分布すると考えられる。それらの層は上下に重なっており，その境界は明瞭な不整合面となっている。下位の層は，主に中礫大の火山岩礫を主体とする礫層や砂礫層で構成されていて，比較的硬いので，河川改修以前には自然の状態でも幡鉾川の河床の所々に露出していた。この層は，原の辻遺跡の遺物包含層の下位にある地層（原の辻遺跡下層）で，後期更新世の哺乳類化石を含み，ここで新たに**幡鉾川層**と呼ぶことにする。上位の層は主に軟らかい泥層からなり，材化石や原の辻遺跡に関係した弥生時代の哺乳類遺体を含むことがあって，ここで新しく**原の辻層**と呼ぶことにする。以下では，これらの層を露頭での観察にもとづいて詳しく記載する。

幡鉾川層（新称：Hatahokogawa Formation）

模式地：長崎県壱岐市深江鶴亀触の津合橋周辺から田川渡橋にかけて

分布：模式地周辺の沖積面下に伏在

層厚：３ｍ以上（下限は不明）。

時代：後期更新世。本層最上部から得られた木片の^{14}Ｃ年代は39920±440yBP(Beta-91193)。

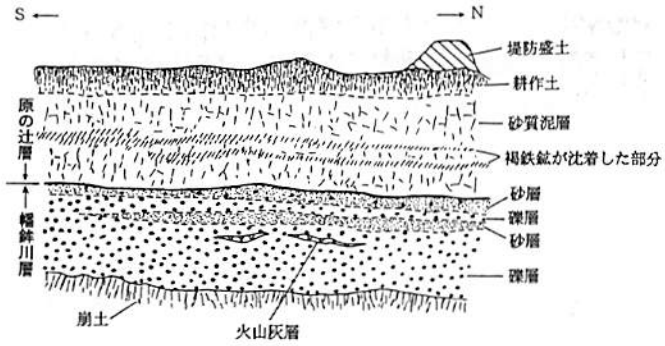
岩相：礫層ないし砂礫層で，一部砂層。

第２地点で本層は，中礫大の亜円～亜角礫からなる淡灰褐色の礫層が主体で，一部に砂の多い部分をラミナとして挟んでいる（第107図の第２地点拡大図；第108図の５）。このようなラミナはゆるく東に傾斜しており，この礫層を作った流れが西から堆積物を運んできたことを示している。礫層の礫は径１㎝程度のものが多く，礫種としては玄武岩が最も多いが，他に安山岩や凝灰岩あるいはスコリアなどが見られる。本層の上面は軽微な浸食面となっており，この面が上位の原の辻層との不整合面である。ゾウ化石や他の骨片はこの面の直下から産出した（第107図の第２地点拡大図）。

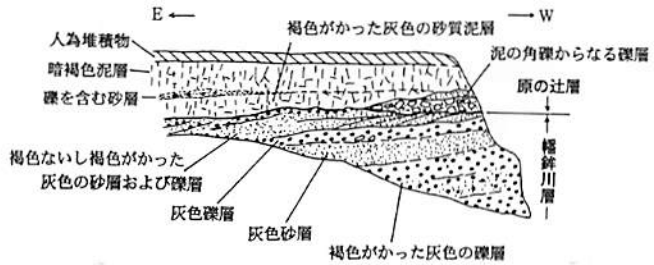
第３地点で本層は，厚さ50㎝以上のやや硬い中～粗粒砂からなり，一部に細礫大の礫を含む。この砂は新鮮なところでは青灰色で，風化すると黄褐色になる。本層の上面は浸食面になっており，その直下からゾウ臼歯化石が産出した（第108の６）。

Ａ～Ｃ地点は，河川改修工事に伴う橋の架け替え工事の際に，田川渡堰南側にできた露頭である（新しく建設された橋の名称は田川渡橋）。Ａ地点の露頭では，下半部に本層の礫層と砂層が見られ，軽微な浸食面を境に主に泥層からなる原の辻層が重なっている（第108図の１）。このような層序は上記の第２，第３地点と同じである。Ａ地点の本層の最下位は，中礫～細礫大の亜角礫～亜円礫からなる

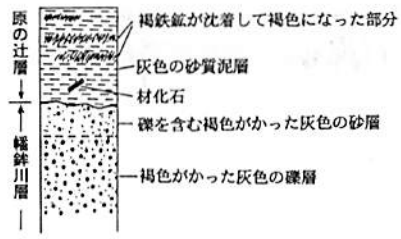
1．A地点の露頭



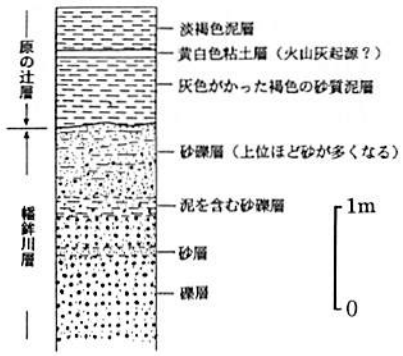
2．B地点の露頭



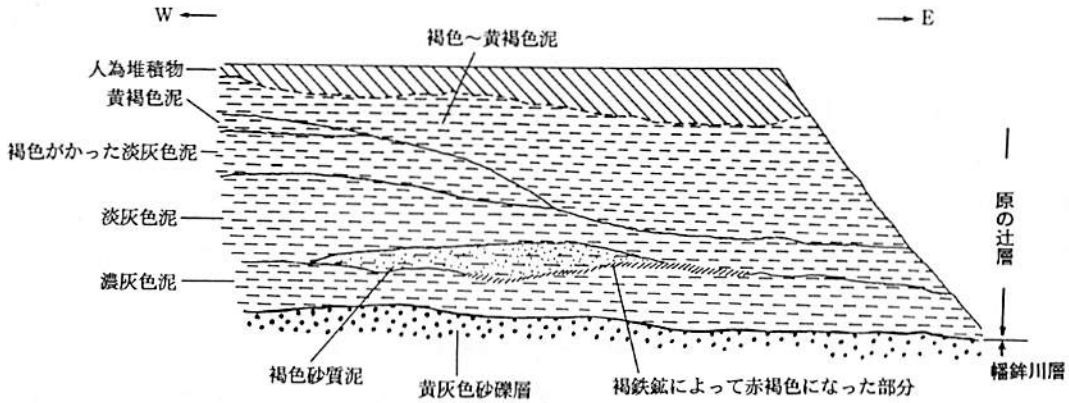
3．C地点の露頭



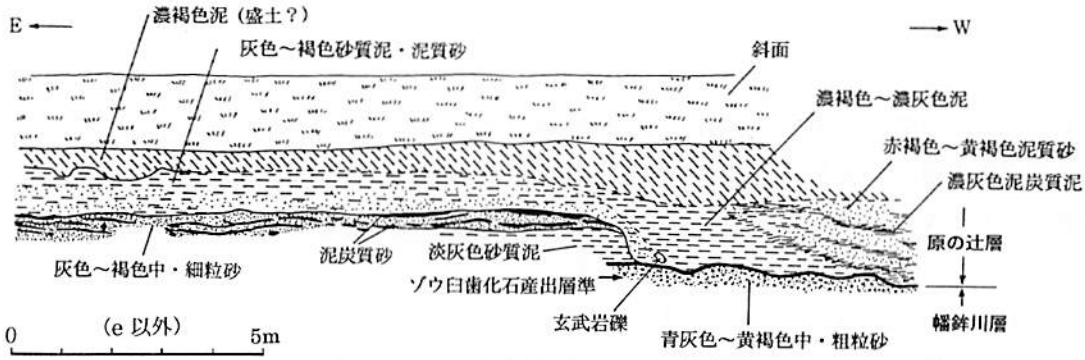
5．第2地点試掘トレンチ



4．D地点の露頭



6．第3地点幡鉾川南岸の露頭



第108図　原の辻遺跡下層（幡鉾川層）の化石産地とその周辺の露頭スケッチと地質柱状図

厚さ１ｍ以上の礫層で，径１㎝程度の玄武岩礫を多く含む。この層の上面から約10㎝下位に厚さ０～５㎝の黄白色ガラス質火山灰層が挟まれている。礫層の上位には最大層厚15㎝の砂層があるが，この層は露頭の南端で尖滅している。砂層の上位には厚さ約10㎝の中礫～細礫大の礫層があるが，これは最下位の礫層と同じ岩相を持ち，それと連続するものである。さらにその上位には厚さ約20㎝の中粒砂層があり，中礫大の礫をわずかに含む。Ｂ地点やＣ地点の露頭で見られる幡鉾川層も同様の岩相を持つが，火山灰層は見られなかった（第108図の２，３）。また，Ｂ地点では本層最上部の砂層に東に傾斜した明瞭なラミナが見られた。

Ｄ地点は貯水池工事によって田川渡堰北東側にできた露頭で，その最下部に見られる幡鉾川層は厚さ１ｍ以上で，細礫大の礫からなる黄灰色砂礫層からなる（第108図の４）。

原の辻層（新称：Harunotsuji Formation）

模式地と分布：上記の幡鉾川層と同じ

層厚：１～４ｍ

時代：完新世

岩相：主に軟らかい泥層からなる

第２地点で本層は，灰色がかった褐色の砂質泥ないしは泥質細粒砂からなる。植物片を多く含み，一部は泥炭質になっていたり，大きな材化石を含んでいることがある。観察される限りの層厚は２ｍで，基底の不整合面の上位0.8ｍのところに，厚さ10㎝の黄白色の粘土を挟んでいる（第107図の第２地点拡大図）。この粘土は火山灰起源のものであろう。

第３地点の幡鉾川南岸露頭の西側では，本層は不整合面を覆った濃褐色～濃灰色の泥層と赤褐色～黄褐色泥質砂を挟む濃灰色泥炭質泥層からなる。露頭の東側で本層は，下位から厚さ約80㎝の淡灰色砂質泥層，厚さ約50㎝の泥炭質砂を挟む灰色～褐色砂層，厚さ約１ｍの灰色～褐色の砂質泥層・泥質砂層の順に重なっている。露頭西側の泥層は，東側のこれらの地層を削り込んで堆積している。これら全体を覆って濃灰色泥層が堆積しているが，これは盛土の可能性がある（第108図の６）。

Ａ地点での本層は，不整合面から上にある厚さ1.4ｍの植物片を多く含む灰色～淡灰色の砂質泥層である。この泥層の中部には，褐鉄鉱が沈着して黄灰色～オレンジ色になった部分が２層見られる。この泥層は上位へ厚さ0.5ｍの耕作土に移り変わり，耕作土の上面は水田の平坦面になっている（第108図の１）。

Ｂ地点やＣ地点でも同様の岩相の原の辻層が見られるが，Ｃ地点では本層の砂質泥層の中に材化石が含まれていた（第108図の２，３）。

Ｄ地点の本層は，厚さ４ｍ程度の灰色の泥層になっている。この泥層の下部には褐色砂質泥のレンズを挟み，泥層上部は次第に褐色になり表土（人為推積物）に移り変わる（第108図の４）。

(3) 化石の分布と産状

化石産出地点は西から東へ流れる幡鉾川に沿って東西約500ｍ，南北約100ｍの広い範囲に分布する（第107図）。筆者らは1992年の最初のゾウ臼歯発見地を第１地点，1995年夏に調査した津合橋と田川渡堰との間を第２地点，1996年調査の津合橋より上流を第３地点と呼んでいる。これら３地点のうち

表21　原の辻遺跡下層（幡鉾川層）から産出した哺乳類化石のリスト

標本番号	種類	部位	発掘年月日	仮番号	備考
01	ナウマンゾウ	右上顎第３大臼歯	1992年2月17-29日	92-1	
02	ナウマンゾウ	上顎臼歯（咬板２～３枚）	1995年7-8月	95県-1	ラベルなし
03	ヤベオオツノジカ	右踵骨	1995年7-8月	95県-2	ラベルなし
04	ヤベオオツノジカ	下顎骨片	1995年7-8月	95県-3	ラベルなし
05	ナウマンゾウ	咬板片	1995年7-8月	95県-4	ラベルなし
06	不明	骨片	1995年7-8月	95県-5	ラベルなし
07	ヤベオオツノジカ	角片（指状突起）	1995年8月29日	95県-6	田川渡堰西
08	ナウマンゾウ	上顎第２大臼歯	1995年9月4日	95-1	
09	不明	骨片	1995年9月4日	95-3	
10	不明	骨片？（藍鉄鉱の塊）	1995年9月4日	95-4	
11	不明	骨片	1995年9月4日	95-5	
12	ナウマンゾウ	咬板片	1995年9月4日	95-6	
13	長鼻類	臼歯片（象牙質のみ）	1995年9月4日	95-7	
14	不明	骨片？（藍鉄鉱の塊）	1995年9月4日	95-8	
15	不明	骨片	1995年9月4日	95-9	
16	不明	骨片	1995年9月4日	95-12	
17	不明	骨片	1995年9月5日	95-15	
18	不明	骨片	1995年9月5日	95-16	
19	不明	骨片	1995年9月5日	95-17	
20	不明	骨片	1995年9月5日	95-18	
21	不明	骨片	1995年9月5日	95-19	
22	ナウマンゾウ	上顎臼歯咬板片	1995年9月5日	95-28	
23	ナウマンゾウ	上顎臼歯咬板片	1995年9月5日	95-29	
24	ナウマンゾウ	上顎臼歯咬板片	1995年9月5日	95-30	
25	不明	骨片？（藍鉄鉱の塊）	1995年9月6日	95-21	
26	ヤベオオツノジカ	掌状角片	1995年9月6日	95-22	
27	不明	骨片	1995年9月6日	95-24	
28	長鼻類	四肢骨片	1995年9月6日	95-31	
29	不明	骨片	1995年9月7日	95-20	
30	ナウマンゾウ	咬板片	1995年9月7日	95-25	
31	ヤベオオツノジカ	角片（指状突起）	1995年9月7日	95-27	
32	ナウマンゾウ	左下顎第３大臼歯	1996年3月14-16日	96-1	
33	不明	骨片	1996年3月14-16日	96-2	取り上げ不能
34	長鼻類	四肢骨片	1996年3月14-16日	96-3	
35	ナウマンゾウ	上顎臼歯咬板片	1996年3月14-16日	96-4	
36	ナウマンゾウ	上顎臼歯咬板片	1996年3月14-16日	96-5	
37	ナウマンゾウ	左下顎第２大臼歯	1996年4月11日	仮-4	CD5区
38	ナウマンゾウ	咬板片	1996年4月？	仮-11	仮４と同じ箱
39	ナウマンゾウ	左上顎第２大臼歯	1996年7月3日	仮-6	C6区
40	ナウマンゾウ	咬板片	1996年7月？	仮-12	仮６と同じ袋
41	不明	骨片	1996年7月？	仮-13	仮６と同じ袋
42	ナウマンゾウ	右上顎第３大臼歯	1996年11月7日	仮-5	C8区
43	ヤベオオツノジカ	右角幹と掌状角の一部	1996年11月13日	仮-9	D1区
44	ヤベオオツノジカ	右眉枝	1996年11月13日	仮-10	D1区
45	長鼻類	骨片	1996年11月？	仮-14	仮９と同じ箱
46	ナウマンゾウ	下顎骨結合部	1996年11月20日	仮-8	C8区
47	ナウマンゾウ	右上顎第３大臼歯	1996年	仮-2	CD4またはBC8区
48	ナウマンゾウ	左下顎第２大臼歯	1996年	仮-3	CD4またはBC8区
49	ナウマンゾウ	下顎骨結合部	1996年	仮-7	C8区？

化石数がもっとも多いのは第２地点で，河床流水部が幡鉾川層の上面まで掘り下げられた際に（PL８の上の写真），その中央部に設けられた幅１ｍ～３ｍの工事用水路に沿って多くの化石が多く発見された（第107図の第２地点拡大図）。大部分は小さな骨片で，化石に藍鉄鉱が付着して保存状態はきわめて悪い。化石を含む幡鉾川層最上部には径１㎝ほどの玄武岩礫が多く，木片や貝の砕片がまばらに含まれていた。化石を含む層準の標高は，田川渡堰水門から西へ180m付近で2.975m（標本番号-22）から2.941m（標本番号-28），50m付近で2.721m（標本番号-21）から2.439m（標本番号-９），10m付近で2.581m（標本番号-20）から2.205m（標本番号-17）である。

第３地点の化石数は少ないが，化石の保存状態は良好で完形かそれに近いゾウ臼歯６点のほか，ゾウ下顎骨結合部２点，オオツノジカの角幹や掌状部破片など保存の良好な標本が出土した（PL８の下）。化石を含む幡鉾川層はやや硬い中粒～粗粒砂からなり，一部に細礫大の礫を含んでいる。

第１地点のゾウ臼歯は「淡い青灰色砂礫層」の上面において単独で発見され，その層準は幡鉾川層最上部に相当すると推定される。周辺の他の試掘区から動物化石は発見されていない。

(4) 標本の記載

ここでは産出した化石のうち，保存状態が良好なものを選んで記載する（表21）。記載用語は長鼻類団体研究グループ（1977）に従い，計測方法は古脊椎動物グループ（1975）にほぼ従った。臼歯の計測値は，表22に示した。

(1) ナウマンゾウ　*Palaeoloxodon naumanni*（Makiyama）

ナウマンゾウの化石のなかで，比較的保存のよいものは臼歯６点と下顎骨２点である。これらの他に臼歯の破片14点，長鼻類と思われる骨片３点が産出している。

【臼歯】

標本番号-01（PL. ９の１）

ナウマンゾウとしては大型の臼歯である。標本は３部分に分かれ，もっとも大きな主要部分は13枚の咬板と遠心副咬板からなる。その近心端は破損しており，咬板のエナメル質の遠心側の一部が見られる。残りの２部分は，それぞれ１枚の咬板のエナメル質の遠心側の一部と，その遠心側に続く咬板のエナメル質の近心側の一部よりなる小片である。これら２小片の近・遠心側ならびに主要部分の近心端では象牙質が脱落しているため，これら３部分は互いに接合できないが，それぞれの大きさから，互いに隣接していたと推定されるので，本標本の咬板式は＋15×とすることができ，保存されている咬板すべてを合わせて，近心側から順次第１咬板，第２咬板，…，第15咬板と呼ぶことにする。

象牙質とセメント質のかなりの部分が藍鉄鉱で置換されており，保存処理はされているが，乾燥による変形が進んでいる。そのため，最大長（ただし接合できない第１咬板から第３咬板の近心部を含まない）の値は正確ではなく，発掘当時に稲田が描いた実測図で計測すれば現在の標本より約20㎜短い。第６咬板と第８咬板のエナメル環の近心側では，明瞭な loxodont sinus が観察される。第５咬板のエナメル環の近心側では，弱い loxodont sinus が観察される。

標本番号-47（PL. ９の２～４）

15咬板が保存されている。歯根の形状から近心部で摩耗し尽くしているのは，近心副咬板のみであると推定される。近心面では吸収窩が観察される。近心部では歯根がよく発達しているが，保存され

ている部分の中程から遠心では，歯頸部は破損しており歯根の形態は不明である。咬板は薄く上下にまっすぐのびており，遠心に向うにしたがって，次第に近・遠心方向に薄くなるほか，頬舌径も狭くなる。摩耗面において，第１咬板から第６咬板までのエナメル質は長楕円形のエナメル環を形成しており，それらのうち第３咬板から第６咬板のエナメル環では近・遠心の両側に弱い loxodont sinus が観察される。第５・６咬板のエナメル環は頬側でくびれる。第７咬板では頬側のエナメル輪が分離し，第８咬板ではそれに加えて舌側のエナメル輪も分離する。これらのエナメル輪は楕円形である。第９咬板と10咬板の摩耗面ではエナメル輪のみが見られ，中央のやや舌側のものは楕円形であるが他はほぼ円形でる。第11咬板では mammillae の先端のみがわずかに摩耗している。

標本番号-42（PL. ９の５～７）

わずかに摩耗した右上顎第３大臼歯であり，全体として緩く右にねじれる。歯頸部は破損しているが残存部から，第３咬板と第４咬板間はエナメル質でつながり，それより遠心の咬板間では分離していたと推定される。近心副咬板はきわめて薄く，その頬側は一部吸収されている。摩耗面において，第１咬板のエナメル環は両端の丸い菱形，第２咬板のそれは長楕円型である。第３咬板と第４咬板のエナメル環は両端でくびれ，２または３部分に分れるが，いずれも中央のエナメル環が大きい。これら第１咬板から第４咬板では，loxodont sinus が観察される。セメント質は未萌出の咬板の歯冠頂を覆うが，歯冠側面ではあまり発達してない。

標本番号-48（PL. 10の１～３）

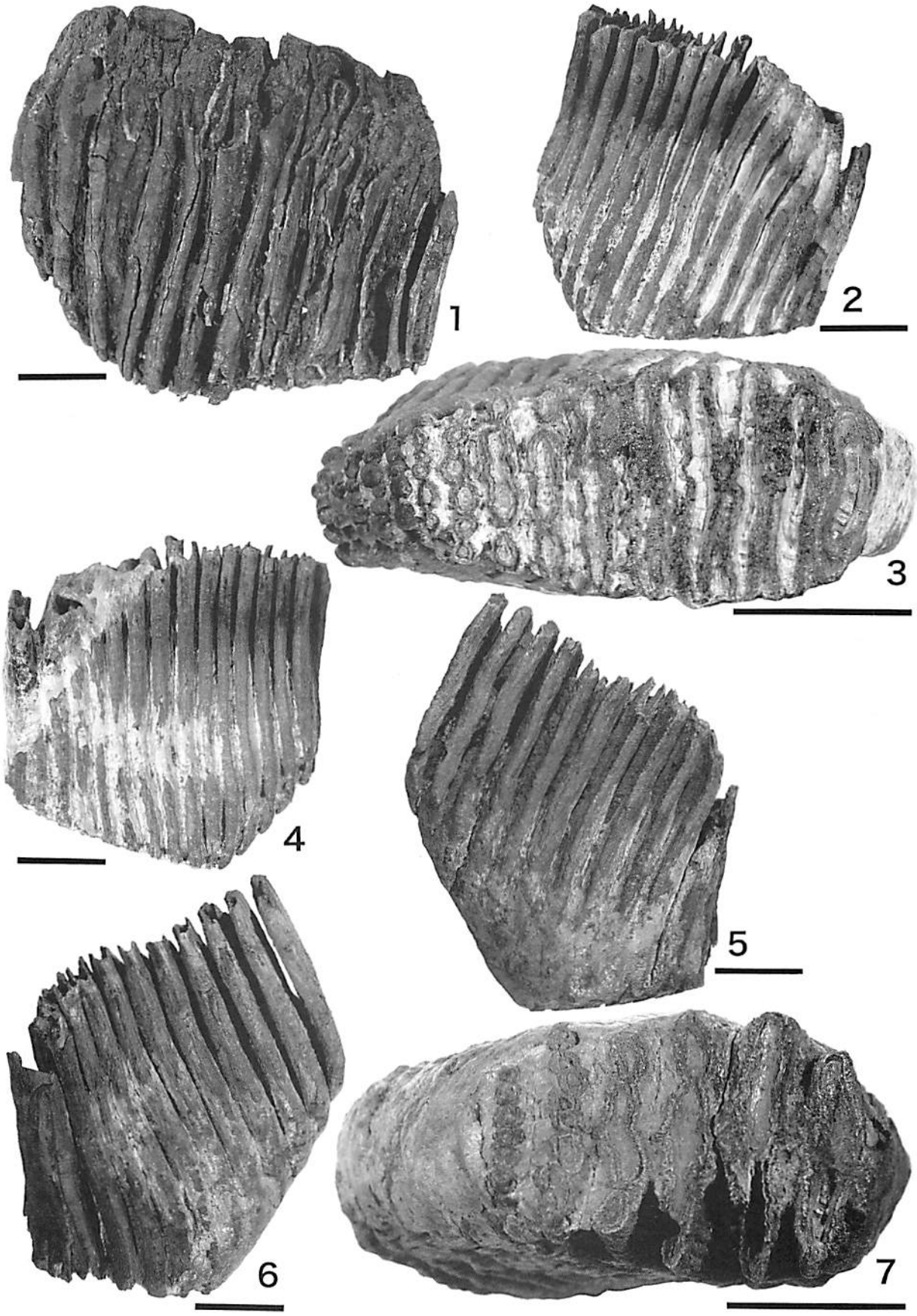
摩耗が進んだ左下顎大臼歯で，近心のいくつかの咬板が摩耗し尽くし，13咬板と遠心副咬板が保存されている。そして遠心副咬板以外はすべて摩耗し始めている。全体として左ネジ方向にねじれ，咬合面観ではわずかに舌側に向って凸に曲がる。また，咬板の頬舌径は遠心部でも副咬板を除きあまり小さくならない。このような特徴から，本標本は第３大臼歯ではなく第２大臼歯と考える。第１咬板はその遠心側のエナメル質のみが保存されている。摩耗面で，第２咬板から第５咬板までのエナメル質は，長くのびて両端の丸い菱形のエナメル環を形成している。それに続く第６咬板から第８咬板では，エナメル環は中央部の膨らみが小さく，長楕円形になる。そしてこれらのエナメル環は近心に向って凹に曲がる。第１咬板の遠心側，第２から第６咬板の近・遠心側そして第７・８咬板の近心側には，

表22　ナウマンゾウ臼歯化石の計測値

歯冠長，最大歯冠長，摩耗面長，歯冠高，最大歯冠高，歯冠幅，摩耗面幅，エナメル厚の単位は㎜。萌出角，摩耗面角の単位は度。HL：歯冠高を計った咬板の番号。WL：歯冠幅を計った咬板の番号。

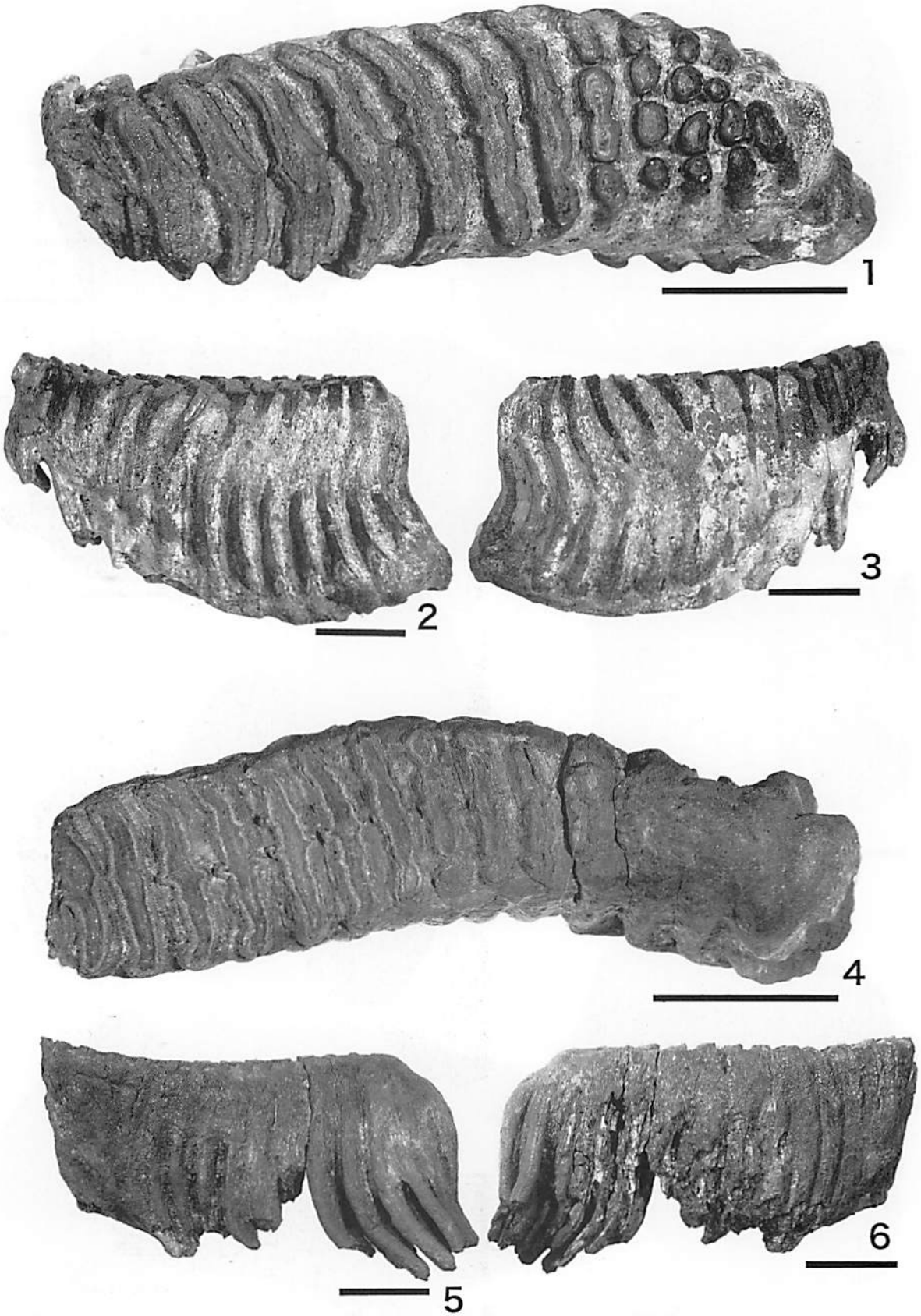
標本番号	歯種	咬板式	咬板数	使用咬板数	歯冠長	最大歯冠長	摩耗面長
01	右上顎第３大臼歯	+15×	16+	12+	263+	263+	−
42	右上顎第３大臼歯	×12+	13+	7	221+	221+	109
47	右上顎第３大臼歯	∞15+	15+	11	195+	195+	134
39	左上顎第２大臼歯	∞７×	8+	8	121+	121+	110+
37	左下顎第２大臼歯	×14×	16	13	215	247	166
48	左下顎第２大臼歯	∞13×	14+	13	217+	241+	196+

歯冠高	HL	最大歯冠高	歯冠幅	WL	摩耗面幅	エナメル厚	咬板頻度	萌出角	摩耗面角
210+	10	210+	97	6	−	2.8	5	50	71
219+	6	219+	85	6,7	75±	2.8	5.8	−	59
191+	9	191+	74	9	67±	2.2	8	68	68
98+	8	98+	64	7	59±	2.6	6.5	45	55
141	12	128+	61	8	53	2.4	6.5	−	−
125+	10	125+	72	8	68	2.4	6	−	−



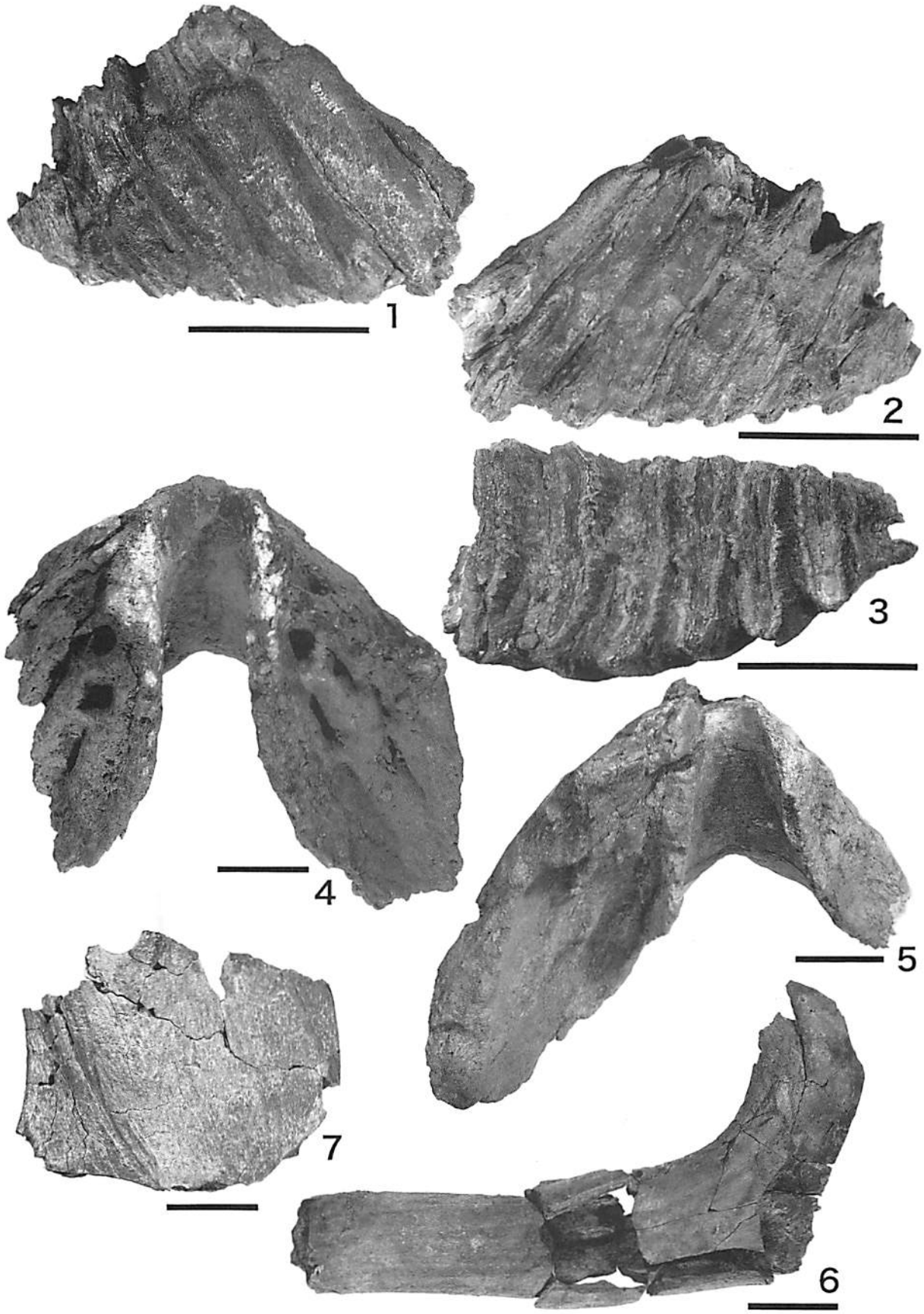
PL. 9　原の辻遺跡下層(幡鉾川層)の哺乳類化石(1)

ナウマンゾウ *Palaeoloxodon naumanni* (Makiyama). 1：右上顎第3大臼歯（標本番号-01)、頬側面観. 2～4：右上顎第3大臼歯（標本番号-47)、2は頬側面観, 3は咬合面観, 4は舌側面観. 5～7：右上顎第3大臼歯（標本番号-42)、5は頬側面観, 6は舌側面観, 7は咬合面観. スケールは5cm.



PL. 10　原の辻遺跡下層(幡鉾川層)の哺乳類化石(2)

ナウマンゾウ *Palaeoloxodon naumanni* (Makiyama). 1～3：左下顎第2大臼歯（標本番号-48)，1は咬合面観，2は頬側面観，3は舌側面観．4～6：左下顎第2大臼歯（標本番号-37)，4は咬合面観，5は頬側面観，6は舌側面観．スケールは5㎝．



PL. 11　原の辻遺跡下層(幡鉾川層)の哺乳類化石(3)

ナウマンゾウ *Palaeoloxodon naumanni* (Makiyama). 1～3：左上顎第2大臼歯（標本番号-39)，1は頬側面観，2は舌側面観，3は咬合面観．4：下顎骨（標本番号-49)，背側面観．5：下顎骨（標本番号-46)，背側面観．ヤベオオツノジカ *Sinomegaceros yabei* (Shikama). 6：右角幹と掌状角の一部（標本番号-43)，外側面観．7：右眉枝の破片（標本番号-44)．前面観．スケールは5㎝．

明瞭な loxodont sinus が観察される。第９咬板の摩耗面では，エナメル質は中央の亜鈴型のエナメル環と，頬・舌側の小さな楕円形のエナメル環に分かれる。さらに遠心の摩耗があまり進んでいない咬板では，１～４個のエナメル環またはエナメル輪と，摩耗していない mammillae が見られる。歯根はよく発達しており，その近心面では吸収窩が見られる。

標本番号-37（PL.10の４～６）

やや摩耗が進んだ下顎臼歯である。中程よりやや遠心部で，歯頸に近い部分の特に舌側が破損している。咬合面観で，臼歯は全体として緩く頬側に向って凹に曲がり，弱く左にねじれる。側面観では，各咬板は弱く近心に向って凸に曲がる。遠心の咬板ではこの曲がり方がやや強く，さらに歯冠頂部はわずかに近心に向って凹に曲がる。第14咬板の頬側には高さが第14咬板とほぼ同じ付加咬頭が見られ，その頂部は第13・第14咬板間に挟まれている。

標本番号-39（PL.11の１～３）

よく摩耗しているため，７咬板と遠心副咬板のみが残されている上顎臼歯であるが，歯冠幅や咬板頻度から第２大臼歯と推定した。すべての咬板で loxodont sinus が観察される。

【下顎骨】

２点の標本（標本番号-46，-49）が発掘されている（PL.11の５，４）。いずれもが下顎結合部と左右の下顎体の一部が保存された標本であり，保存状態から埋没前に風化し破損したことが明らかである。下顎結合部の先端も失われているが，残存部分からは，その前下方への突出は弱かったと推定される。また，結合部の後面の水平面に対する傾斜は，それぞれの標本で47°と42°である。

【比較】

ナウマンゾウの臼歯化石は日本各地から数多く産出しているが，１カ所から多くの化石が産出している長野県野尻湖層産（野尻湖哺乳類グループ，1980）と瀬戸内海備讃瀬戸海底産（樽野，1988）の臼歯と比較すると，標本番号-01の歯冠幅はきわめて大きく，いずれの産地の最大のものより大きい。それに関連して，咬板頻度は両方の産地の最小のものより小さい。ところが一方で，標本番号-47は両産地のナウマンゾウのなかでも小型のグループに入る。つまり，本報告で扱かった化石は少数であるが，ナウマンゾウの上顎第３大臼歯の変異幅の大きさを示していると言える。

(2) ヤベオオツノジカ　*Sinomegaceros yabei*（Shikama）

比較的大きな角片が３点，角の指状突起のみの破片が２点，そして右踵骨と下顎骨の一部が出土している。

角片のうち保存状態のよいものは２点で，標本番号-43（PL.11の６）は右角幹の一部とそれに続く掌状角の一部からなる。残存している角幹の背腹径は57㎜，内外径は分岐に近い部分と遠い部分でそれぞれ46㎜と44㎜である。また標本番号-44（PL.11の７）は右の眉枝の一部に同定される。

下顎骨片（標本番号-04）は下顎体の一部で，オオツノジカ類に特有の頬舌方向への肥厚が観察される。

(5) ま と め

1992年から1996年に原の辻遺跡の弥生時代文化層の下位から哺乳類化石49点が産出した。化石産地

の沖積面下には岩相の異なる２つの地層が観察され，火山岩礫を主体とする礫層や砂礫層で構成される下位の層を幡鉾川層と呼び，弥生時代の文化層を含み主として軟らかい泥層からなる上位の層を原の辻層と命名した。哺乳類化石が産出したのは下位の幡鉾川層の最上部であり，化石に伴った材の^{14}C年代等などから，これら本哺乳類化石は後期更新世のものと考えられる。

哺乳類化石は幡鉾川に沿って東西約500m，南北約100mの広い範囲に分布していた。多くの化石は小片となって拡散した状態で埋もれており，保存状態も一般に不良でしばしば藍鉄鉱に置換されていた。しかし第３地点では保存良好な化石が比較的多く得られた。

哺乳類化石にはナウマンゾウとヤベオオツノジカが含まれていた。ナウマンゾウの上顎第３大臼歯にはきわめて大型なものと小型なものが含まれ，大きな変異幅がみとめられた。

（稲田孝司・河村善也・樽野博幸）

化石および化石産地の調査とその後の研究のまとめには，次の科学研究費補助金を用いた。稲田が代表の基盤研究（B）（２）（課題番号07459015），基盤研究（B）（２）（課題番号13410117）及び基盤研究（B）（２）（課題番号16320109），河村が代表の基盤研究（B）（１）（課題番号14390027）と名古屋大学大学院の小澤智生教授が代表の基盤研究Ｓ（課題番号13854001）である。

引用文献

長鼻類団体研究グループ　1977「長鼻類の頭蓋と歯についての用語」『化石研究会会誌』特別号，pp. 1-15.

稲田孝司編　1998『旧石器時代動物化石共伴遺跡の探索とタフォノミー研究』平成７年度－９年度科学研究費補助金研究成果報告書

古脊椎動物グループ　1975「ナウマンゾウの化石」野尻湖発掘調査団著『野尻湖の発掘1962－1973』共立出版株式会社，pp. 124-153.

長崎県教育委員会編　1998『原の辻遺跡（上巻）』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第９集，長崎県教育委員会

野尻湖哺乳類グループ　1980「野尻湖層産のナウマンゾウ化石」『地質学論集』19号，pp. 167-192.

樽野博幸　1988「備讃瀬戸海底の脊椎動物化石－その１－長鼻類ほか」『備讃瀬戸海底産出の脊椎動物化石－山本コレクション調査報告書Ⅰ－』pp. 11-61，1-148図版.

2．植物遺体群からみた原の辻遺跡の植生と人間・植物関係史

(1) はじめに

原の辻遺跡の発掘調査に伴って実施された植生復元および植物利用に関するこれまでの調査は，主に西側と東側低地および幡鉾川沿岸の低地での弥生時代から古墳時代にかけての花粉分析・種実分析・木材樹種同定をあげることができる。これらのうち東側低地および幡鉾川河川地区の環濠あるいは溝内の資料がすでに報告されているが（古環境研究所，1995；1998），他の約20地点におよぶ資料は未報告で，記載や標本資料登録と標本資料の所在が未だ明確でなく，第三者の検討に耐えうる状態にはなっていない。弥生時代の植物利用について論述した中尾（2004ａ,2004ｂ）で引用された花粉分析・種実分析・木材樹種同定の結果には原の辻遺跡調査事務所資料提供とあるだけのものが含まれており，第三者の検討に耐えうる資料として扱えない。そのため未報告資料を含む中尾(2004ａ,2004ｂ）の記述と図表をそのまま引用することは慎むべきである。未公表資料については原の辻遺跡整備事業の環境復元に関する基礎調査として筆者らを中心に現在検討を加えているところで，早期に公表できるよう推し進めたい。

ここでは，筆者らが原の辻遺跡調査事務所と共同で新たに調査できた保存資料とＨ１・Ｈ２・Ｈ３地点の種実群・花粉群の検討結果の概要を報告し，植生と人間・植物関係史を先述の未公表資料とを総合して論じるための基礎としておきたい。なお，人間・植物関係史については木材の樹種同定を対応させることが不可欠であるが，今回は便覧的に別途記述されるので，機会を改めたい。

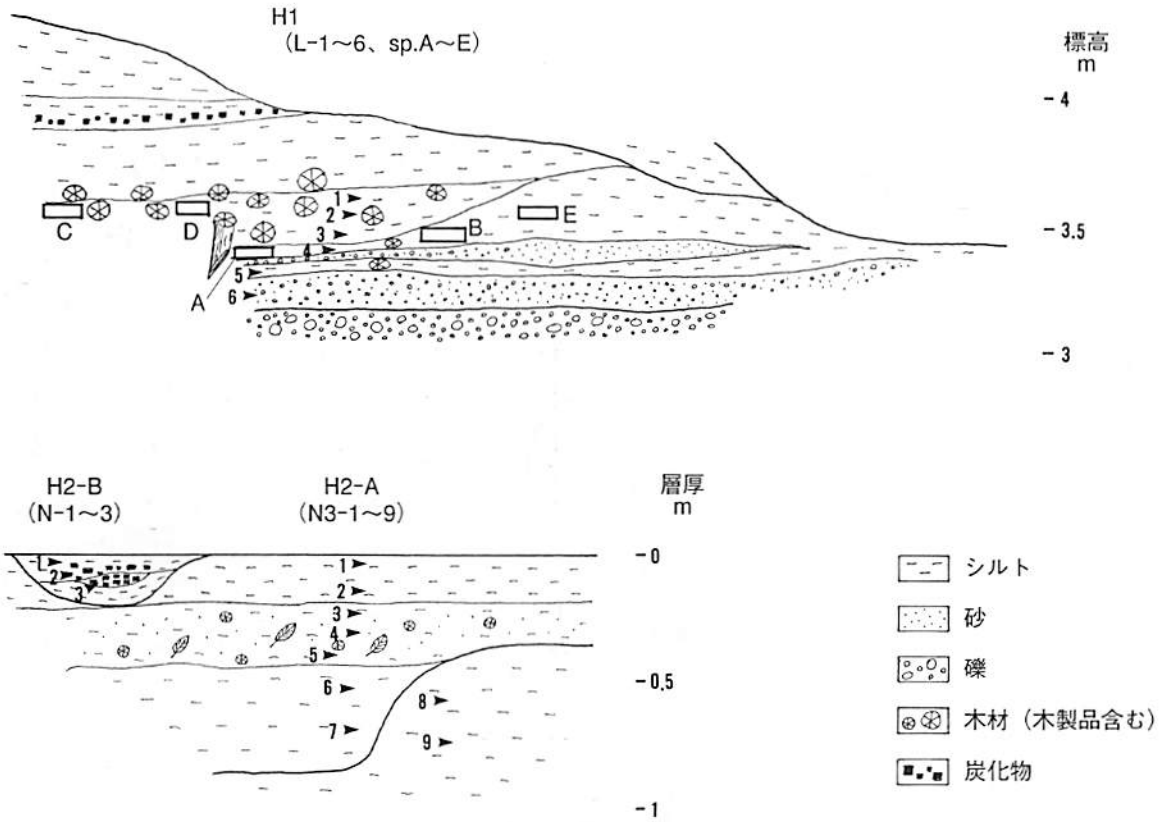
(2) 種実を主とした遺体群

一般に大型植物遺体と呼ばれてきた種実を主とする遺体群の調査は，二通りの試料について行なわれてきた。一つは，これまでの発掘調査において現地で取り上げられ，原の辻遺跡調査事務所に保存されていた試料についてである。もう一つは，幡鉾川川岸のＨ１地点で新たに採取した堆積物についてである。

現地取り上げ試料は定量堆積物を水洗処理して得られたものではなく，産状記載も行われていないので，堆積・出土状態や種実以外の遺体との関係は不明である。試料数は56である。原記載情報と同定分類群および部位などを第１表に示した。最多はモモ核で，19試料から同定された。長さ×幅は19×15から27×23㎜で変化するが，少なくとも大小の２型が識別できる。燃焼によって炭化した核が数点ある。ヒョウタン種実が６試料から同定され，うち１試料は種子・果実同伴であった。これらについては別途記載し，果実形態の復元を行った。

幡鉾川川岸のＨ１地点で採取した水路内堆積物はＡ～Ｅの５試料で弥生中期の遺物包含層である（第110図）。ＡとＢは各々16㍑を，Ｃ～Ｅは各々１㍑を５㎜で水洗篩別し，室内で種実類を選別した。ＡとＢはともに種実類が密集する部分で廃棄単位を含むものであった。同定できた分類群と産出状態を第２表に示した。分類群は57におよんだ。大量の堆積物を処理したＡとＢからは多種多量の種実類が得られた。特徴的なことは，カシ類の果実（いわゆるドングリ）の圧搾片が多量であったことである。また試料Ａからはヤブツバキ種子やエゴノキ核の圧搾・破砕片も多産し，人為が加わった廃棄遺物をかなり含んでいることを示唆した。コウホネやヒルムシロの完形種実も多産したが，これらは水路内に生育していた水生植物とみられる。このことから，種実群は人為による廃棄遺物および生育植

第109図　原の辻遺跡の植物遺体群の資料地点（Ａ区：古環境研究所，1998，Ｂ区：古環境研究所，1995）および調査地点（新たなＨ１～Ｈ３地点）



第110図　幡鉾川川岸（Ｈ１地点）および西側低地17調査区 SD６N（Ｈ２地点）の地質断面と試料層準

物の遺物を混在して含むものと考えられる。

出土種実群のうち産出状況の特異なものについて記載しておきたい。

イヌガヤ：種子の長さは16㎜，幅10㎜ほどの狭楕円形で，種子表面に樹皮状の凹凸が認められることからイヌガヤと同定できる。

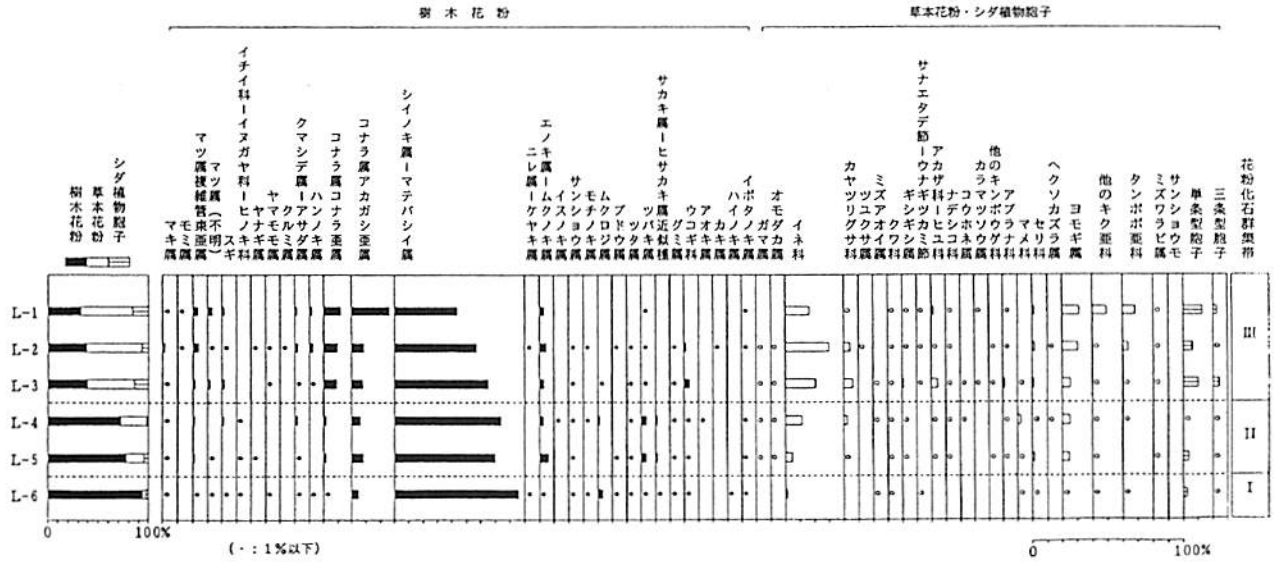
カヤ：種子の長さは30㎜，幅13㎜ほどの狭楕円形で，硬く，表面に弱い肋状の隆起文が認められることからカヤと同定される。

エゴノキ：果実と核が産出した。核は狭楕円形で，基部に斜切面，腹部に浅い１～２本の溝があり，表面は弱い光沢があることから，エゴノキと同定される。果実の長さは15～18㎜と大きさにばらつきがある。果実で産する場合は果皮がついたままで産出することもある。核で産出する場合，半分に割れた状態のものがかなりあり，人の利用が考えられる。

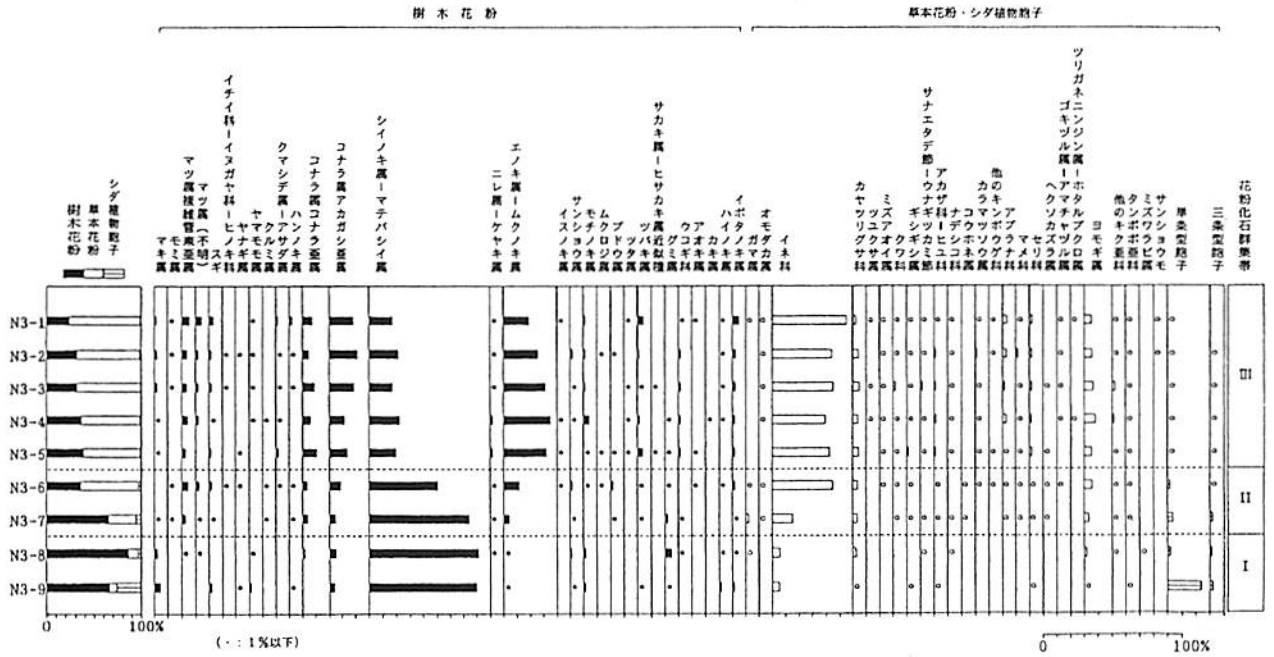
ヤブツバキ：種皮は厚く，不定形，表面は光沢もなく滑らかで，ヘソの部分が円形をしていることからヤブツバキと同定される。種子の大きさは10～20㎜とばらつきが多い。潰れているように産するものがあるが利用して廃棄されたものか検討を要する。

センダン：果実と核が産出した。特徴的な鋭い稜をもち，基部に嘴状のとんがりを持つことからセンダンと同定される。果実の大きさは10～15㎜とばらつきがあり，核の稜も４～５稜とあり，稜が深い刻みのなる５稜のものと，稜が浅く大きさが小さい４～５稜のものとがある。

シイノキ属・コナラ属：果実片が産出した。殆どが破片状態になっていて，種の同定まではいたらなかった。破片状態といっても，裂かれたようなものから押し潰されたものまで産出した。現地取り



第111図　幡鉾川川岸（Ｈ１地点）の主要花粉組成図
樹木花粉はその総数を基数とし，草本花粉・胞子は花粉と胞子総数を基数として百分率で算出

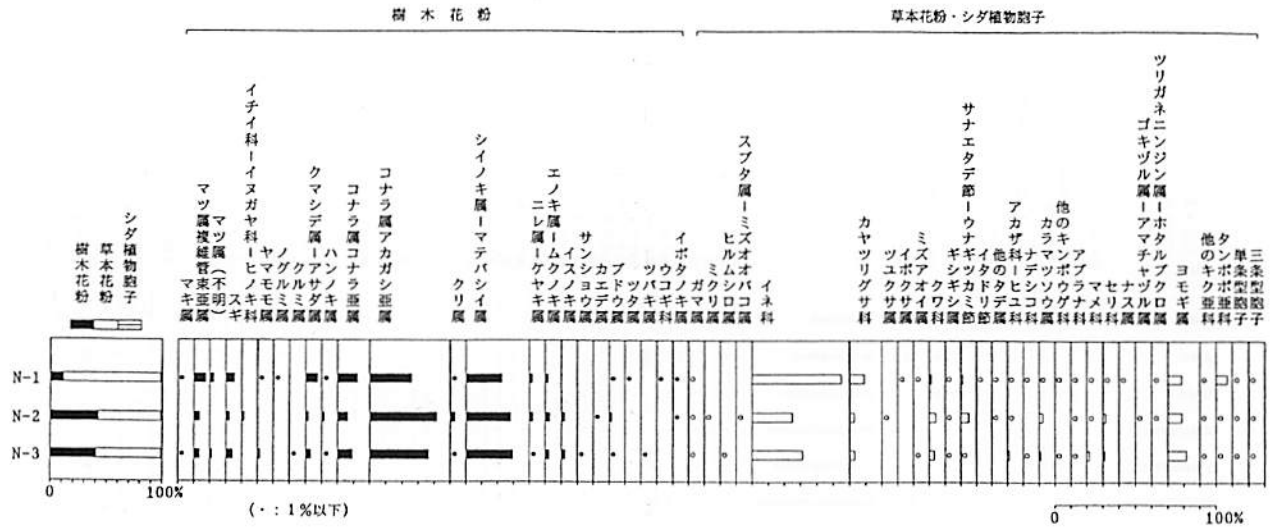


第112図　西側低地17調査区 SD６N（Ｈ２地点）におけるＨ２－Ａの主要花粉組成図
樹木花粉はその総数を基数とし，草本花粉・胞子は花粉と胞子総数を基数として百分率で算出

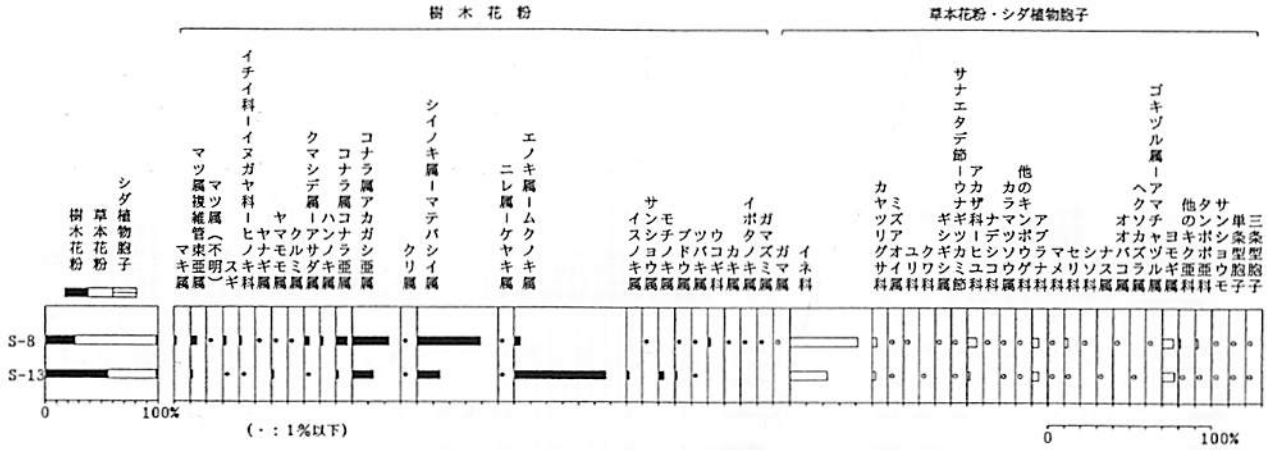
上げの試料からはツブラジイ，イチイガシ，コナラ属が同定されている。

ムクロジ：果実が産出した。俗称フグ太郎にふさわしく果実の基部に特徴的な膨らみを持ち，一部果皮が残る核では，ほぼ球状の光沢ある黒色の核で，基部のところだけに毛があることからムクロジと同定された。大きさは14～16㎜のほぼ球形である。

ホルトノキ：核の一部が産出した。特徴的な瘤状の表面模様と不規則な割れ方からホルトノキと同定された。長さは20㎜ほどである。



第113図　西側低地17調査区 SD６N（Ｈ２地点）におけるＨ２－Ｂの主要花粉組成図
樹木花粉はその総数を基数とし，草本花粉・胞子は花粉と胞子総数を基数として百分率で算出



第114図　西側低地15調査区 S-T２（Ｈ３地点）の主要花粉組成図
樹木花粉はその総数を基数とし，草本花粉・胞子は花粉と胞子総数を基数として百分率で算出

ウドカズラ：原の辻遺跡ではブドウ科のなかで，ブドウ属，ノブドウ属のノブドウとウドカズラが産出した。ウドカズラは広倒卵形でへら形のカラザを呈し，カラザの周辺にカラザを中心に持つ半円形の模様が種子表面に見られることからウドカズラと同定される。

メロン：種子の大きさが５㎜以下で種子の基部と最大部との幅の比がメロン種子の中でかなり大きいザッソウメロン，大きさが５㎜以上で幅の比が小さいマクワ・シロウリタイプのメロン種子が産出した。大きさにばらつきがあるものの，種子の大きさが８㎜以上となるモモルディカタイプのメロンは認められなかった。

マメ科：炭化子葉が産出した。種子の表面の模様は燃焼によって不明瞭となっているが，ヘソのカラザの占める割合が大きく，子葉の断面に見られる幼根がU字に伸びていることからササゲ属に近似すると思われる。

(3) 花 粉 群

新たに花粉分析を行なったのは，種実類を調査した幡鉾川川岸のＨ１地点，西側低地の17調査区のＨ２地点と15調査区のＨ３地点から採取した計20試料についてである（第110図）。Ｈ１地点の試料６は弥生中期以前の無遺物層，５と４は弥生中期初頭の遺物包含層，３～１はそれ以降古墳前期の遺物包含層である。Ｈ２地点Ａの９と８は無遺物包含層，７～１とＢの１～３は弥生中期から古墳期にかけての包含層である。Ｈ３地点の２試料は古墳期と考えられている。

検出された花粉・胞子の分類群数は，樹木花粉51，草本花粉37，形態分類を含むシダ植物胞子４の総計92である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を第24表に，それらの層位分布を第111図（幡鉾川川岸Ｈ１地点），第112図（17調査区Ｈ２―Ａ地点），第113図（17調査区Ｈ２―Ｂ地点）および第114図（15調査区Ｈ３地点）に示した。なお樹木花粉については樹木花粉総数を基数として，草本花粉，シダ植物胞子については全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また，表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

幡鉾川川岸Ｈ１地点：樹木花粉化石の産出傾向にもとづいて，図示するように３つの花粉化石群集帯を設定する。

Ⅰ帯はシイノキ属－マテバシイ属の圧倒的な優占で特徴づけられる。１％を越える分類群はアカガシ亜属とムクロジ属のみである。草木類とシダ類は非常に少なく，検出分類群数も少なくなっている。

Ⅱ帯は引き続きシイノキ属－マテバシイ属の優占で特徴づけられるが，出現率は70％を越える程度に低下する。アカガシ亜属は10％に達しない。マツ属複維管束亜属，コナラ亜属，エノキ属－ムクノキ属が本帯より１％を越えるようになっており，ツバキ属やサカキ属－ヒサカキ属近似種も本帯のみで１％以上となる。草木類ではイネが科増加傾向を示す。ガマ属，オモダカ属，ミズアオイ属，コウホネ属といった水生植物が産する。

Ⅲ帯もシイノキ属－マテバシイ属が最優占しているが，出現率は低下する。アカガシ亜属はⅡ帯と同様であるが最上部はやや突出した産状を示す。また，マツ属複維管束亜属が上部に向かい若干ではあるが増加する。草木類ではイネ科が増加する。またヨモギ属を除く他のキク亜科やタンポポ亜科も多く，これらキク科が目立って検出されている。

17調査地区Ｈ２－Ａ地点：樹木花粉化石の産出傾向にもとづいて図示するように３つの化石花粉群集帯（下位からⅠ～Ⅲ帯）を設定する。

Ⅰ帯はシイノキ属－マテバイシ属の圧倒的な優占で特徴づけられる。他はいずれも低率であるが，マキ属，コナラ属アカガシ亜属，モチノキ属が１％を越える。草木類の占める割合は低く，１％を越えるのはイネ科のみである。

Ⅱ帯においてもシイノキ属－マテバシイ属が最優占しているが上部への急減で特徴づけられる。代わってエノキ属－ムクノキ属が増加する。アカガシ亜属にも増加傾向が認められ，マツ属複維管束亜属も本体より上位で１％を越えて検出されている。草木類ではイネ科の急増が特徴的である。本帯より水生植物がやや目立って検出されており，ガマ属，オモダカ属，ミズアオイ属，コウホネ属などの抽水植物が検出されている。

Ⅲ帯はエノキ属－ムクノキ属の優占で特徴づけられる。シイノキ属－マテバシイ属は激減する。アカガシ亜属の漸増傾向がみられ，上部試料では20％前後を示している。その他マツ属複維管束亜属，

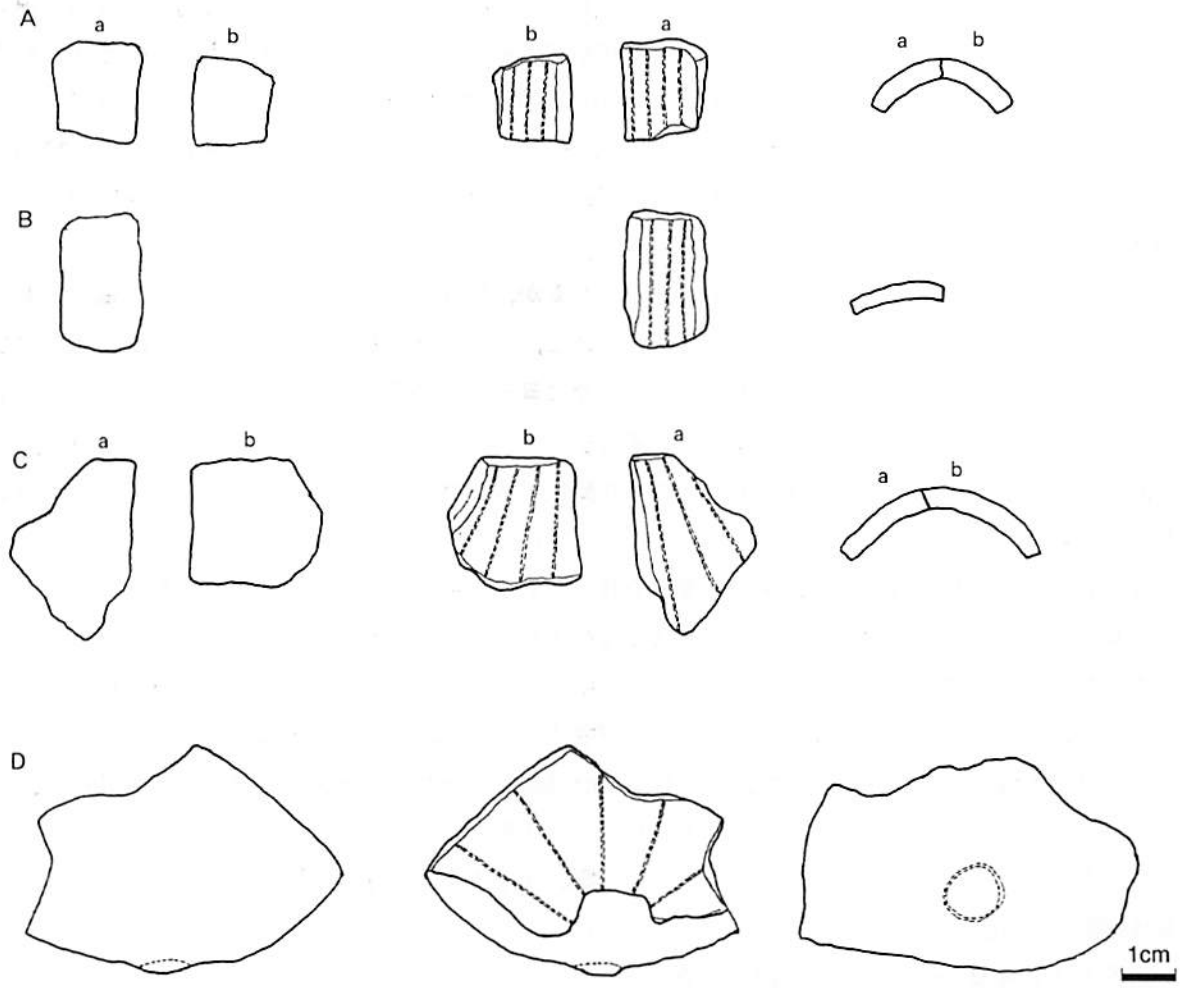
スギ，モチノキ属，ツバキ属，ウコギ科，イボタノキ属などがほぼ全試料で１％を越える。草木類ではイネ科が40％前後と安定した出現率を示す。その他はⅡ帯同様低率で，その中でカヤツリグサ科とヨモギ属に加えてセリ科が全試料で１％を越え，アカザ科－ユヒ科やアブラナ科も多くの試料で１％を越えている。また水生植物のミズアオイ属が連続して検出されており，オモダカ属も試料５を除き観察されている。

17調査区Ｈ２－Ｂ地点：Ａ地点のⅢ帯の花粉群に類似するが，エノキ属－ムクノキ属が低率であることと，ツバキ属やイボタノキ属も目立たないことで異なる。

15調査区Ｈ３地点：下位の13ではエノキ属－ムクノキ属が優占し，アカガシ亜属とシイノキ属－マテバシイ属がこれに次ぐが，上位の８では後２者が高率となる。

(4) ヒョウタン種実遺体

出土資料は02コクホ石田高原Ｖ区15Ｈｊ南北トレンチ　021017である。果実と種子が同時に採集された。果実は取り上げられた状態は分からないが，座の部分がかすかに円形に膨らみ，その内側に胎座の跡が残る。果実の内側には放射状に伸びる維管束の跡が見られることからヒョウタンの果実と同定される。破片に残る維管束の跡を照合しながらもとの果実の形態を復元するとクビナガヒョウタン



第115図　02コクホ石田高原Ｖ区15Hj 南北トレンチから出土したヒョウタン果実遺体

に近い形となった。クビの太さは付け根付近で直径4㎝，途中で2.5㎝，下部の球形の部分は直径7㎝位のヒョウタンが復元できる。同時に採集された種子は69粒で，長さは10～14㎜で13.5㎜にモードがある。幅は5.5～7.5㎜で6㎜にモードがある。ヒョウタンは完形のまま廃棄された可能性が高い。果実と種子が同時に採集されている事例は多くなく，ヒョウタンの系譜を考える上で重要な出土といえる。

(5) 復元植生と景観の変化

植生を復元したり景観の変化を明らかにするのに有効な方法は，調査対象とする時代の前後を含み，できるだけ時間幅の長い連続的な花粉群の変化を複数地点において捉えることである。堆積物が均質ではない沖積平野では，ひとまず相対的な出現率変動と堆積相を捉えることが生態系変化の作業仮説を立てる上で有効なことが多い。ここでは新たに得られた幡鉾川川岸Ｈ１地点と西側低地の17調査地区Ｈ２地点の花粉群変化から植生と景観の変化を考えておこう。

両地点とも花粉群の層位に沿った変化にもとづいて下位から上位へⅠ～Ⅲ帯に分帯され，イネ科を主とする草木花粉の割合が樹木花粉の割合を大きく上まわるようになり，樹木花粉ではシイノキ属―マテバシイ属の減少とアカガシ亜属とコナラ亜属の増加という共通の現象が認められる。ここで，Ｈ２地点でシイノキ属－マテバシイ属の減少に対するエノキ属－ムクノキ属の増加を局所的現象と捉えるか地域的現象と捉えるかによって，両地点の３帯が各々対比されるか，Ｈ１地点のⅠ帯とⅡ・Ⅲ帯がＨ２地点のⅠ帯とⅡ帯に対比されることになる。既報の幡鉾川川岸で得られたＡ区（第109図）の資料（古環境研究所，1998）や，東側低地で得られたＢ区（第109図）の資料（古環境研究所，1995）をも比較地点に加えると，エノキ属－ムクノキ属の変動は共通せず，場所によって異なる局所的なものと捉えることができ，前者の考えが支持される。

その考えに立って植生変化がどのようであったかを考えてみよう。イネ科を主とする一年生草本の大半はイネやムギ類など穀類に並存することが多い分類群からなるので，耕作地あるいはそれに伴なう人為的攪乱域の植生に由来すると考えることができる。樹木で最優占したシイノキ属－マテバシイ属の減少は，原植生がシイノキ属－マテバシイ属を主体とし，それが集落形成と農耕地を含めた人為的攪乱域の形成でかなりの林分が失われたことを反映したものと考えられる。アカガシ亜属の増加はこれに替わるものではなく，周辺の山地部に定着していたカシ林に由来する花粉の比率が見かけ上高くなっているとみなせる。これに対してエノキ属－ムクノキ属は著しいコントラストを成し，コナラ亜属もその傾向にあるので，開発域内での実質的な拡大を示すと考えられる。

ここで森林構成種を絞り込んでおこう。シイノキ属－マテバシイ属は木材や種実で同定されたスダジイ，エノキ属－ムクノキ属も同様にムクノキが主体と考えられる。したがって，遺跡一帯に成立していた原植生はシイ林であり，これに替わり局所的に成立したのはムクノキ林であったと考えることができる。

原植生がシイ林であったのは，壱岐島が海の影響を強く受ける環境に見舞われ，先駆的植生にとどまらず更新が維持されたからである。したがってカシ林の成立は山地部に限られたと考えられ，花粉群の産状とも調和する。

原植生改変後も認められる樹木のうち，産状が不安定か産状が目立つツバキ属，モチノキ属，イボ

タノキ属，ウコギ科は二次林要素として拡大し人為的攪乱域で生育しつづけた可能性がある。一方の種実で目立った産状を示すヒサカキ，サカキ，カラスザンショウ，イヌザンショウ，ニワトコ，アカメガシワもその仲間と考えることができる。針葉樹のマツ属とスギも幾分目立つが，この程度の出現率は九州島からの飛来が考えやすい。

(6) 人の植物利用

種実遺体群の分類群と産状から植物利用について考えておこう。

食料資源としては燃焼によって炭化した遺体として産出したイネ，コムギ，アワ，エノコログサ，マメ科があげられる。圧搾片としてまとまって産出したドングリ（今のところカシ類としておくが，大半はスダジイの可能性が高い）は，その産状から澱粉供給源とされたであろう。

圧搾片として産出したヤブツバキや破砕片として産出したエゴノキやカヤは油資源として利用されたと考えられる。エゴノキ果実は魚毒としての利用も考えられる。

モモも多数採取されており，食料資源として栽培されていたとみられるが，炭化したものがあり，祭祀にかかわった可能性がある。メロンも同様で，朝鮮半島から伝播したザッソウメロンが含まれるので，食用としてでなく祭祀の供物として利用された可能性がある。ヒョウタンも同様である。カラスウリなどウリ科分類群が多いが，これらも精神世界でのかかわりが深いもので，祭祀との関係を検討する必要がある。

キイチゴ属，シマサルナシ，ニワトコ，キハダ，ブドウ属など利用の可能性はあるものの，廃棄単位や利用状況をとどめる産状が観察されていない。発掘調査で産状をいかに捉えていくかが植物利用を解明する上で最大の課題といってよいだろう。

付記：この報告では植物名の正式名称である学名での表記をすべて削除した。これまでの未公表資料の扱いや記載が不充分であり，しっかりした調査研究と記述が求められるからである。原の辻遺跡は弥生時代の人と植物関係史および海外交流史を解明する上で重要拠点であり，今後の研究に耐えうる資料の蓄積を期したい。

（辻誠一郎，辻圭子，鈴木茂）

引用文献

古環境研究所（1995）自然化学分析調査報告.「原の辻遺跡－幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ」p.221-273, 長崎県教育委員会.

古環境研究所（1998）長崎県，原の辻遺跡（河川地区）における自然科学分析「原の辻遺跡—幡鉾川流域総合整備計画に係る幡鉾科川河川改修に伴う緊急発掘調査報告書，上巻」p.47-69, 長崎県教育委員会.

中尾篤志（2004 a）「一支国」における生産基盤—原の辻遺跡出土農耕関連遺物の検討を通して「考古論集（川瀬正利先生退官記念論文集）」p.463-478, 川瀬正利先生退官記念事業会.

中尾篤志（2004 b）弥生時代における植物利用－原の辻遺跡におけるケーススタディー「日・韓交流の考古学」p.223-236, 九州考古学会・嶺南考古学会

表23　原の辻遺跡から出土した現地取り上げ種実遺体

調査区	日付		遺　構	出　土　種　実　類
02-県道 第1調査区	021018	C－2	02キ-20pd ハ-SD 3 -①	イヌガヤ種子16×10㎜
	021018	C－3	02キ-20pd ハ-SD 3 -①	不明果実核 9 × 9 ㎜
	021028	C－4	ポイント採集	モモ一部炭化核27×23×18μ㎜完形
	021028	C－5	ポイント採集	ツブラジイ炭化子葉 2 分 1 片13×19㎜子葉
	021028	C－6	ポイント採集	コナラ属炭化子葉 2 分 1，16×11㎜
	021028	C－7	ポイント採集	コナラ属炭化子葉 2 分 1，15×10㎜
	021028	C－8	ポイント採集	コナラ属炭化子葉15× 9 ㎜
	021030	C－9	ポイント採集	モモ核23×20×15㎜完形
	021029		02キ-20Pd ハ-SD 3 -②	バラ科核 9 × 9 ㎜
	021030	C－10	ポイント採集	コゴノキ現生
	021031	C－11	ポイント採集	ムクロジ炭化果実破片
	021107		02-20Lx ハ-SD 2 -②	冬芽
	021114	C－12	ポイント採集	モモ核27×20×15㎜
	021115		02キ-20Lx ハ-SD 2 -③Ⅲ	エゴノキ核12× 6 ㎜完形，4 個
02-県道 第2調査区	021206		02キ-20Pd ハ-SD 3 -③	モモ核25×25×15㎜完形
	021112		02キ-20Lq ロ-SD 3 -③	モモ核19×15×12㎜完形
	021115		02キ-20Lx ハ-SD 2 -③	エゴノキ核12× 6 ㎜，12個
	021118	C－13	SD- 3 内ポイント取り上げ	加工痕ありモモ笛か。現地保管未計測
	021118	C－14	SD- 3 内ポイント取り上げ	不明
	021118	C－15	SD- 3 内ポイント取り上げ	モモ核27×21×16㎜完形。グミ属果実13× 4 ㎜
	021118	C－16	SD- 3 内ポイント取り上げ	モモ核 2 分 1 片24×21㎜，22×18㎜
	021118	C－17	SD- 3 内ポイント取り上げ	エゴノキ核12× 6 ㎜，11× 7 ㎜
	021118	C－18	SD- 3 内ポイント取り上げ	ヒョウタン種子13×6.5㎜
	021106		02キ-20Pd ハ-SD 3 -②	不明果実
	021210		02キ-20Lr ニ-SD 3 -②	モモ核25×22×20㎜完形
	030116		02キ-20Lr ニ-SD 2 -③	モモ核26×22×18㎜完形
02-県道 第5調査区	020912	表土		モモ炭化核19×17×14㎜完形
	021202		02キ-20Lr ニ-SD- 3 -③-Ⅱ	エゴノキ炭化核，完形 8 。ヒョウタン種子14
02-県道 第6調査区	021209		02キ-20Hf ハ- 3 a 層	モモ核24×19×15㎜完形
	021119	C－20	ポイント採集	モモ核25×16×13㎜完形
	021120	C－21	20Hf ハ-ポイント採集	モモ核一部炭化21×18×15㎜完形
02-県道 第7調査区	021125	3 a 層一括	02キ-20ct ニ- 3 a	不明炭化果実 7 × 4 ㎜
	021119	C－19	ポイント取り上げ	加工痕ありモモ笛か。現地保管未計測
02-県道 第13調査区	030218	SD 7 － 6 層	02キ-14Kk ハ	ヤブツバキ種子18×12㎜つぶれている。不明炭化果実31個
	032019		02キ-14Kf-SD 7 -⑤	不明炭化果実 9 × 5 ～ 8 × 4，不明果実片
	030227			エゴノキ核10× 5 ㎜，不明炭化果実10× 2 ㎜，2 個
	030317		02キ-14kkD-Ⅵ	エゴノキ炭化核15× 7 ㎜
	030319	②層	SD- 9	不明果実
02-コクホ 石田高原 Ⅴ区	20927	4 層	16Ea ハ	モモ核23×18×15㎜完形
	021016	4 層	16Ef イ	モモ核25×17㎜，27×23×18㎜完形
	021017		15Hj ロ南北トレンチ	ヒョウタン果実，種子
	021017	4 層	15Hj ロ	イチイガシ果実
	021024		西壁壁面清掃	ヒョウタン種子，カヤ種子25×13㎜，15×11㎜，17×15㎜ 炭化イチイガシ20×15㎜，コナラ属18×13㎜， エゴノキ炭化核片，不明果実 9 × 3， ムクロジ果実15㎜，6 個，ムクロジ種子16×14㎜
	021107	4 層貝層	16Ef イ	ヒョウタン種子，カラスザンショウ，サンショウ属核，ブドウ属種子，カジノキ属核，チシャノキ属種子，炭化マメ科子葉，炭化イネ科胚乳，炭化果実，シロウリ・マクワウリ種子，ザッソウメロン種子，スズメウリ種子
02-コクホ 石田高原 Ⅵ区	020925	3 層		カナムグラ種子 4 × 4 ㎜
	021009	4 層	16Ef イ	モモ核25×21×18㎜完形。不明果実
	21009	4 層	16Ef イ	不明炭化果実 9 × 3，5 個
	21114		15Hj ハ-SD12	モモ核23×21×15㎜，22×19×16㎜完形
	021226	落ち込み	15He ハ	ヒョウタン種子，カナムグラ種子
02-コクホ 高元	021009	①層	16Ef イ　1 号住居址	現生
	021022	②層	15Ij ハ　1 号住居址	イネ炭化胚乳 5 × 2 ㎜，マメ科炭化子葉 4 × 3 ㎜
	021022	5 層 P50	16Ef イ　1 号住居址	現生
	21023	②層	15Ij ハ　1 号住居址	不明種

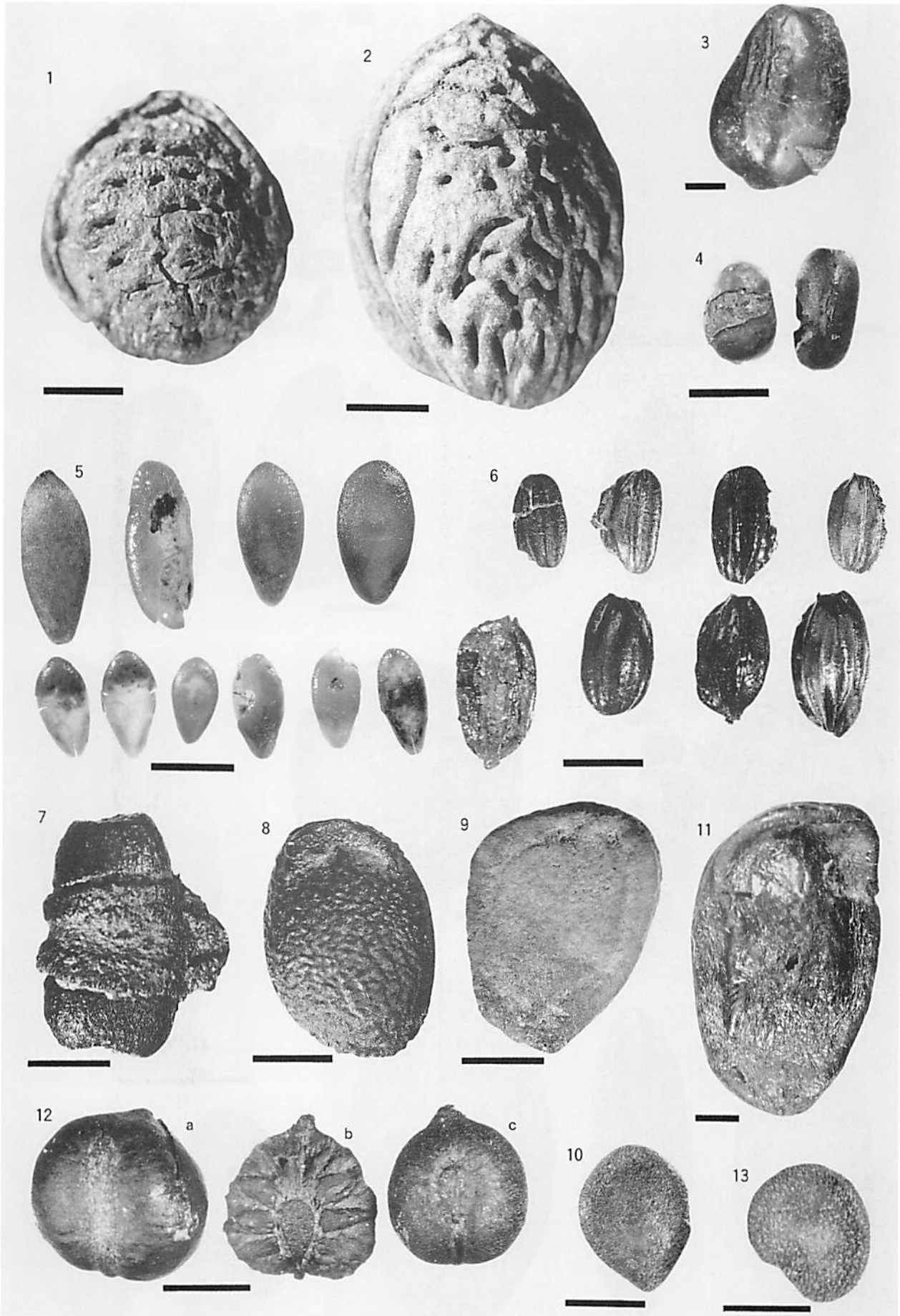
表24　幡鉾川岸（Ｈ１地点）から水洗によって検出した種実遺体

		H1，sp.A	H1，sp.B	H1，sp.C	H1，sp.Db	H1，sp.E
分類群	産出部位	16リットル	16リットル	1リットル	1リットル	1リットル
イヌガヤ	種子	完形1				
カヤ	種子	破砕片2	破砕片1			
ヤマモモ	核	完形3	完形1			完形1
カシ類	果実	圧搾片◎	圧搾片◎	破砕片		破砕片8
ヤマグワ	核	完形57	完形13		完形2	完形20
キイチゴ属	核	完形1				完形1
シマサルナシ	核		完形1			
ヒサカキ	核	完形◎	完形○	完形36	完形◎	完形◎
ヤブツバキ	種子	圧搾片○	完形○			
アカメガシワ	核	完形◎	完形14，破砕片5	破片1	完形3，破砕片3	完形3，破砕片3
キハダ	核	完形◎	完形7			
カラスザンショウ	核	完形◎		完形2	完形1，破砕片1	
イヌザンショウ	核				完形4	
サンショウ属	核		完形20，破砕片10		完形3，破砕片3	完形4，破砕片5
センダン	種子	完形28	完形7			完形1
ウルシ属	果実	完形2				
ムクロジ	種子	完形3，破砕片3	完形1，破砕片3			
モチノキ属	種子	完形9	完形7，破砕片5	完形2		完形1
ゴンズイ	核	完形20	完形1		完形1	
ブドウ属	種子	完形◎	完形30	完形10	完形2	完形8，破砕片1
ウドカズラ	種子	完形16	完形1			
ホルトノキ	核	破砕片1				破砕片1
グミ属	核	完形1				
タラノキ	核	完形5				完形1
ミズキ	核	完形9，破砕片3	完形4	完形1，破砕片2		
クマノミズキ	核	完形32，破砕片2	完形3，破砕片1			完形2
カキノキ属	種子		完形1			
エゴノキ	核	完形◎，破砕片◎	完形核◎，完形果実◎	完形2，破砕片1	完形4	完形5，破砕片1
チシャノキ	核	完形◎	完形33	完形13	完形23	完形23
クサギ	核	完形4，破砕片3				
ニワトコ	核	完形55	完形26	完形19	完形14，破砕片8	完形21，破砕片14
不明果実	果実	完形◎	完形16			
スズメウリ	種子	完形3，破砕片2		完形3		
オオカラスウリ	種子	完形4，破砕片1	完形1			完形1
カラスウリ	種子	完形4，破砕片2	完形1			破砕片2
キカラスウリ	種子		完形1			
ミヤマニガウリ	種子					破砕片1
ヒョウタン	種子		完形2			完形5，破砕片1
ザッソウメロン型	種子		完形10	完形4	完形7	完形25，破砕片18
マクワ・シロウリ型	種子		完形5	完形1	完形13	完形13，破砕片6
カナムグラ	果実	44	破砕片3			完形1
タデ科	種子	完形4	完形○			完形○
カタバミ	核				完形9	完形15
マメ科	子葉	炭化ほぼ完形1	炭化ほぼ完形2		炭化ほぼ完形2	
ノブドウ属	種子	完形◎	完形○			完形4，破砕片12
ナス属	種子	完形1		完形2	完形7	完形12
シソ科	果実					完形6
アオツヅラフジ	果実	完形15	完形3，破砕片2	完形1	完形1	
コウモリカズラ	果実	完形1				
ナデシコ科	果実					完形4
カヤツリグサ科	果実	完形◎	完形◎			完形○
イネ	胚乳	炭化ほぼ完形4	炭化ほぼ完形10，穎1		炭化ほぼ完形20	炭化11，破砕片15
アワ	果実					炭化ほぼ完形3
コムギ	胚乳				炭化ほぼ完形1	炭化ほぼ完形2
エノコログサ	胚乳				炭化完形1	炭化完形2
コウホネ	種子	完形15	完形10			完形4
オナモミ	果実		完形2，破砕片1			破砕片1
ヒルムシロ		完形◎	完形◎	完形◎	完形◎	完形○
炭化材		○		○	◎	○
小枝・樹皮		○		◎		◎
トゲ			○	○		○
葉				◎		
冬芽			○	○	○	○
花芽				○	◎	
昆虫			○	◎	○	○

表25　幡鉾川川岸（Ｈ１地点），西側低地（Ｈ３地点），17調査区（Ｈ２地点）の花粉組成表

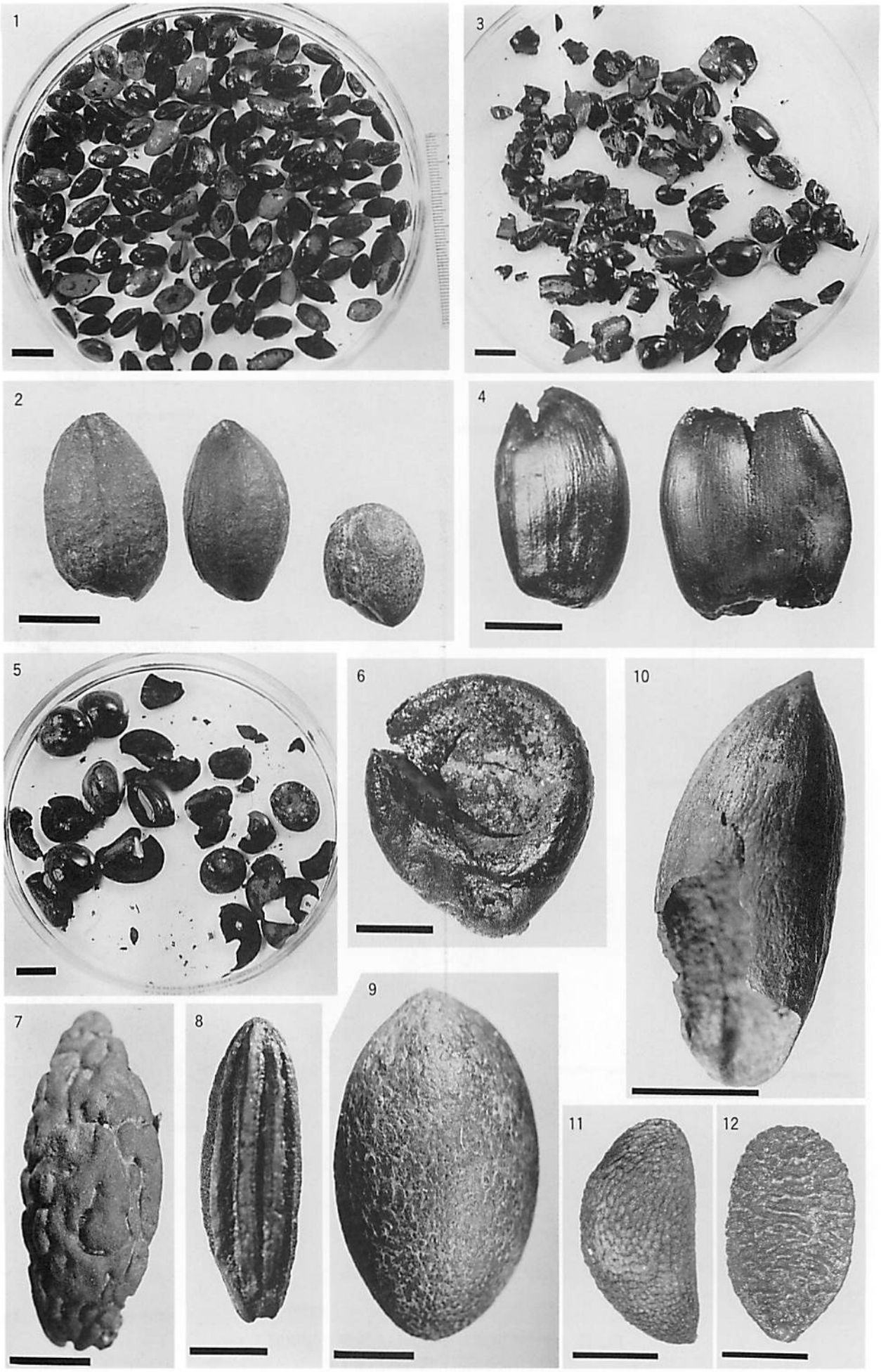
	N3-1	N3-2	N3-3	N3-4	N3-5	N3-6	N3-7	N3-8	N3-9	L-1	L-2	L-3	L-4	L-5	L-6	S-8	S-13	N-1	N-2	N-3
樹木																				
マキ属	3	4	4	2	2	–	2	9	10	1	4	2	1	2	2	3	–	1	–	1
モミ属	1	1	2	–	–	1	1	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–
ツガ属	2	1	–	1	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	1	–	1	–	–
トウヒ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–		1	–	–	–	–	–	–
マツ属複維管束亜属	12	9	8	10	6	9	6	2	–	4	9	3	3	3	1	9	3	8	5	9
マツ属（不明）	10	4	4	4	—	5	1	1	–	4	2	4	–	1	1	2	–	3	–	3
コウヤマキ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–
スギ	7	4	4	2	3	4	1	–	4	2	1	3	3	–	4	4	2	6	3	10
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	–	2	2	–	–	2	–	–	–	–	–	–	1	2	2	3	1	–	2	–
ヤナギ属	–	2	–	–	1	2	–	–	2	–	1	–	–	1	–	1	–	–	–	–
ヤマモモ属	2	1	1	1	–	–	–	1	3	–	1	2	–	–	3	1	3	1	–	4
ノグルミ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
クルミ属	–	–	–	2	–	1	1	–	–	–	1	–	–	–	–	2	–	–	–	1
クマシデ属－アサダ属	3	2	2	1	4	1	–	–	–	2	5	2	5	1	1	7	1	8	2	8
カバノキ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	1	–	1	2	–	2
ハンノキ属	4	2	2	–	–	1	1	–	2	2	6	2	–	–	1	4	–	1	2	2
コナラ属コナラ亜属	16	11	20	14	24	7	8	7	–	16	24	20	5	4	2	15	3	13	8	22
コナラ属アカガシ亜属	39	49	41	28	31	18	9	18	8	35	21	18	18	20	36	47	32	28	57	89
クリ属	–	–	–	–	–	2	2	–	–	–	1	–	1	1	–	2	1	1	4	2
シイノキ属－マテバシイ属	36	49	37	52	44	103	156	309	172	58	143	151	216	176	658	81	34	25	39	72
ニレ属－ケヤキ属	1	1	1	4	4	2	1	1	–	–	1	–	–	–	2	1	2	2	3	2
ハリゲヤキ属	–	–	2	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
エノキ属－ムクノキ属	41	59	69	81	72	24	9	1	1	4	12	7	8	16	2	8	136	2	4	6
シキミ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
イスノキ属	2	–	–	1	1	1	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	4	–	3	6
ジャケツイバラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
サンショウ属	–	4	1	2	–	3	1	4	1	–	1	2	1	1	5	1	–	–	–	2
キハダ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–	–
ユズリハ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	1	–	–	1
アカメガシワ属	–	2	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–
シラキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
モチノキ属	3	3	3	10	1	1	–	6	3	–	1	–	1	–	2	–	8	–	–	–
ニシキギ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	2	–	–	–	–
カエデ属	2	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	1	1	–	–	–	–	1	–
ムクロジ属	–	1	–	–	2	2	–	–	–	–	–	1	3	–	25	–	–	–	–	–
ブドウ属	–	1	–	–	1	4	2	–	–	–	1	–	–	2	2	2	3	1	2	1
ツタ属	1	–	1	1	1	–	–	–	–	–	1	1	1	1	1	–	–	1	–	–
シナノキ属	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
マタタビ属近似種	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	3	1	–	–	–	–
ツバキ属	10	3	2	4	9	2	2	–	1	1	1	1	10	8	1	1	1	–	–	1
サカキ属－ヒサカキ属近似種	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–	3	3	3	–	–	1	–	–
グミ属	–	–	–	1	1	1	4	17	1	–	1	2	2	1	2	–	–	–	–	–
ウコギ科	1	4	4	3	3	–	1	2	–	–	3	8	1	1	2	3	–	1	–	–
アオキ属	1	–	–	–	2	1	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
ミズキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
カキ属	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–
ハイノキ属	1	1	2	1	–	1	–	1	3	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
イボタノキ属	11	6	5	4	4	4	1	1	3	1	2	4	1	2	2	2	–	1	1	–
ティカカズラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ムラサキシキブ属	1	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ニワトコ属近似種	–	1	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	3	–	–	–
ガマズミ属	1	–	–	–	1	–	–	–	1	–	–	–	1	1	–	1	–	–	–	–
スイカズラ属	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	–	–
草木																				
ガマ属	1	–	–	–	–	3	7	1	–	–	1	2	1	1	–	1	–	3	1	4
ミクリ属	1	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
ヒルムシロ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
サジオモダカ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
オモダカ属	5	2	2	5	–	3	2	–	–	–	3	1	2	1	–	–	–	–	–	–
スブタ属－ミズオオバコ属	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
イネ科	506	328	325	259	246	269	48	24	16	67	193	122	46	16	10	316	96	528	80	188
カヤツリグサ科	21	31	34	24	25	20	10	10	3	2	29	36	10	2	–	25	9	87	9	19
ツユクサ属	1	–	2	1	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	1	–
イボクサ属	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	5	–	–
ミズアオイ属	2	3	2	2	3	2	–	–	–	–	–	1	1	–	1	3	1	1	–	1
ユリ科	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
クワ科	2	6	12	3	2	5	3	–	–	1	3	4	1	2	1	17	3	11	13	19
ギシギシ属	5	3	2	3	7	3	1	–	1	1	1	6	3	1	–	6	–	3	2	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	9	7	8	6	1	–	1	1	–	1	1	3	–	–	1	4	1	13	17	3
イタドリ節	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
他のタデ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–
アカザ科－ヒユ科	8	8	8	9	6	4	1	–	2	7	3	28	1	1	–	46	7	8	3	8
ナデシコ属	3	5	2	2	1	–	1	2	–	3	2	5	1	2	–	3	–	1	–	1
コウホネ属	–	–	–	–	–	3	1	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–
カラマツソウ属	2	8	5	6	1	2	–	–	–	1	–	2	–	–	–	5	1	4	8	7
他のキンポウゲ科	6	3	–	–	3	1	–	–	–	–	3	4	–	1	–	6	1	3	–	1
アブラナ科	29	21	11	19	4	5	3	–	–	4	6	7	2	1	–	33	18	4	2	4
ユキノシタ科近似種	–	3	–	–	–	–	–	–	1	–	1	3	1	–	3	–	–	–	–	–
ワレモコウ属	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
他のバラ科	1	–	–	2	–	2	1	–	–	–	–	1	1	5	1	1	–	–	2	2
マメ科	2	9	4	2	4	4	1	–	–	–	–	1	8	3	2	5	3	4	1	10
ゼニアオイ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ミソハギ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
ミズユキノシタ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
セリ科	17	13	12	10	11	5	2	–	1	6	9	6	2	4	2	16	3	9	6	7
シソ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
ナス属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
オオバコ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
フタバムグラ属	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
アカネ属－ヤエムグラ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
ヘクソカズラ属	–	–	1	–	3	2	1	–	–	–	1	–	2	–	–	–	1	–	–	–
オミナエシ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	4	–	–
ゴクツル属－アマチャヅル属	2	1	2	1	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	1	–
ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属	1	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
ヨモギ属	48	42	49	54	31	35	11	8	2	46	68	32	21	15	6	53	32	82	28	69
他のキク亜科	5	3	14	8	4	3	1	1	–	39	5	2	1	2	2	8	4	5	1	3
タンポポ亜科	9	3	2	5	2	6	1	–	1	34	20	4	1	–	1	13	1	66	3	1
シダ植物																				
ミズワラビ属	–	–	–	–	–	–	–	1	–	1	1	1	–	1	–	–	–	–	–	–
サンショウモ	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–
単条型胞子	8	6	1	5	1	11	11	8	77	53	40	59	3	12	22	5	3	3	1	5
三条型胞子	–	3	1	3	3	6	6	5	7	11	6	23	3	3	2	4	2	6	2	1
緑藻類																				
クンショウモ属	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
黄緑色藻類																				
Botryococcus braunii Kutzing	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
樹木花粉	215	228	220	231	222	204	209	380	215	132	249	235	293	252	769	206	238	108	137	244
草木花粉	690	505	497	422	355	379	96	47	27	212	352	271	106	58	32	565	181	845	181	349
シダ植物胞子	9	10	2	8	4	17	17	14	84	65	47	83	6	16	24	10	6	9	3	6
花粉・胞子総数	914	743	719	661	581	600	322	441	326	409	648	589	405	326	825	781	425	962	321	599
不明花粉	34	24	23	9	19	20	9	18	19	31	38	32	12	21	19	19	11	18	7	11

T. － C.はTaxaceae－Cephalotaxaceae－Cupresaceaeを示す



PL. 12　原の辻遺跡から出土した主要な種実類Ⅰ

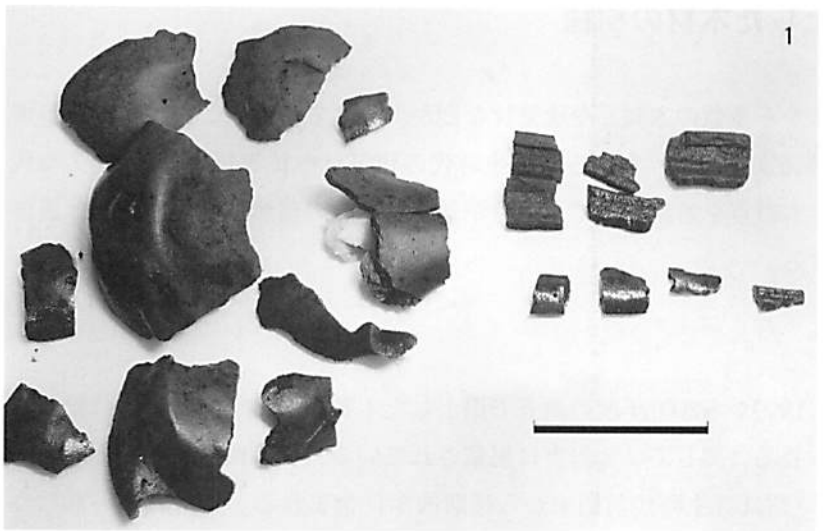
1．モモ核（02県道第５調査区）２．モモ核（02県道第１調査区）３、４．マメ科炭化種子（H1, sp. B）５．メロン種子　６．イネ炭化胚乳（H1, sp. B）７．カラスウリ種子（H1, sp. A）８．オオカラスウリ種子（H1, sp. A）９．キカラスウリ種子（H1, sp. B）10．スズメウリ種子（H1, sp. A）11．カキノキ属種子（H1, sp. B）12a．ノブドウ種子（H1, sp. A）12b．ウドカズラ種子（H1, sp. A）12c．ブドウ属種子（H1, sp. A）13．ナス属種子（H1, sp. B）（１～10のスケールは0.5㎜、11～13のスケールは１㎜）

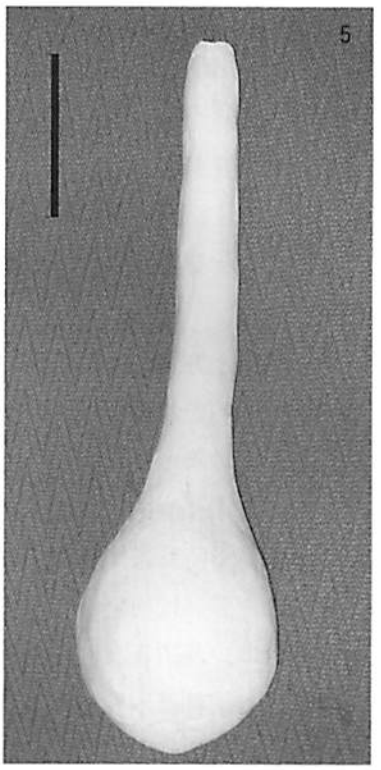


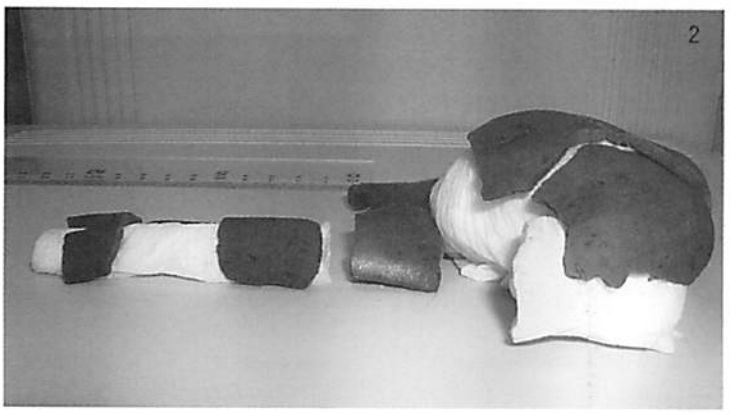
PL. 13　原の辻遺跡から出土した主要な種実類Ⅱ

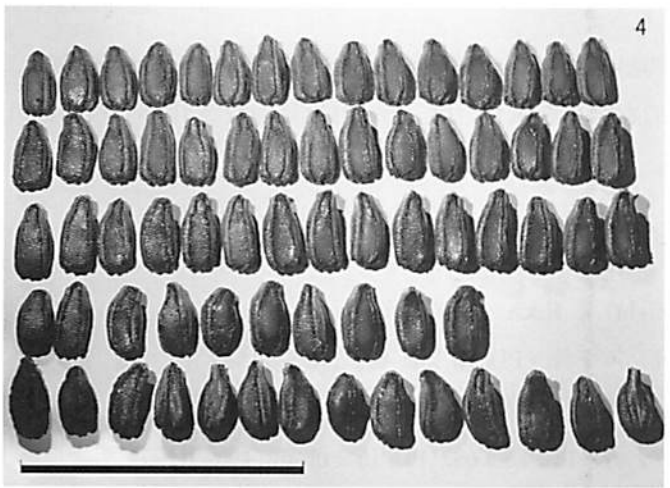
1，2．エゴノキ核（H1, sp. A）3，4．カシ類果実（H1, sp. B）5，6．ヤブツバキ種子（H1, sp. A）7．ホルトノキ核（H1, sp. A）8．グミ属核（H1, sp. A）9．イヌガヤ種子（H1, sp. A）10. カヤ種子（H1, sp. A）11. キハダ核（H1, sp. A）12. ニワトコ核（H1, sp. A）

（1，3，5のスケールは1cm，2，4，6～10は0.5cm，11，12は1mm）









PL. 14　原の辻遺跡から出土したヒョウタン遺体

出土地点：02コクホ石田高原Ⅴ区15Hj 南北トレンチ

1．果実の破片（保管されていた状態）　2．果実の復原作業過程（側面）

3．果実の復原作業（上面）　4．果実とともに出土した種子

5．復原された果実の実物大模型

1・4・5のスケールは5㎝

3．原の辻遺跡から出土した木材の樹種

(1) はじめに

原の辻遺跡からは溝や流路などから多数の木製品や建築材などが出土している。ここでは史跡整備の基礎的な資料とするために樹種識別（同定）を行った弥生時代の建築材や杭等130点と，縄文時代後・晩期の流路内に埋積した自然木71点を対象として，遺跡が営まれる前の自然植生の復元と，遺跡における木材利用について概観する。

(2) 試料と方法

同定を行った木製品は，おもに1999から2001年度の調査で出土した木製品で，実測リストに記載された製品を対象とした。一部の木製品に関しては報告書に掲載されている（長崎県教育委員会2001，原の辻遺跡保存等協議会2002）。時期は弥生時代前期末から後期後半に含まれる。建築材の一部については遺構や時期に関係なく形状から建築材と思われるものを抽出し，同定を行った。ただし，保存処理された製品は同定を行っていない。

自然木は，芦辺新溜池の壁面に見いだされた浅い流路を埋積する堆積物中に含まれていた。

同定用の試料は木製品および自然木から直接剃刀を用いて横断面（木口と同義），接線断面（板目と同義），放射断面（柾目と同義）の切片を作製した。切片はガムクローラルで封入し，永久標本とした。作製したプレパラートはすべて標本番号をつけて（NGS-1～203），森林総合研究所で保管している。同定は現生樹木の標本と対照して行った。また，切片採取時に木取りを確認し，器種名が不明なものについては一部形態観察を行った。

(3) 結　　果

合計201点の試料中には37の分類群の樹種が見いだされた。紙面の都合上分類群の記載は省略し，1分類群につき代表的な標本1点の木材解剖的な写真を示す（PL. 15～21）。見いだされた分類群は以下である。

1．カヤ　Torreya nucifera (L.) Sieb. et Zucc.　イチイ科　PL. 15：1a-1c（NGS-73）

2．マキ属　Podocarpus　マキ科　PL. 15：2a-2c（NGS-44）

3．イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia (Knight) K. Koch　イヌガヤ科　PL. 15：3a-3c（NGS-82）

4．スギ　Cryptomeria japonica (L.f.) D. Don　スギ科　PL. 15：4a-4c（NGS-54）

5．マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　PL. 15：5a-5c（NGS-179）

6．クリ　Castanea crenata Sieb. Et Zucc.　ブナ科　PL. 15：6a，PL. 16：6b-6c（NGS-197）

7．スダジイ　Castanopsis sieboldii (Makino) Hatusima ex Yamazaki et Mashiba　ブナ科　PL. 16：7a-7c（NGS-134）

8．コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　PL. 16：8a-8c（NGS-72）

9．コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　PL. 16：9a-9c（NGS-10）

10．ムクノキ　Aphananthe aspera (Thunb.) Planch.　ニレ科　PL. 16：10a-10c（NGS-61）

11．エノキ属　Celtis　ニレ科　PL. 16：11a-11b，PL. 17：11c（NGS-130）

12．クワ属　Morus　クワ科　PL. 17：12a-12c（NGS-131）

13. シキミ　Illicium anisatum L.　シキミ科　PL. 17：13a-13c（NGS-81）
14. クスノキ　Cinnamomum camphora（L.）Presl　クスノキ科　PL. 17：14a-14c（NGS-8）
15. タブノキ属　Machilus　クスノキ科　PL. 17：15a-15c（NGS-150）
16. クスノキ科　Lauraceae　クスノキ科　PL. 17：16a-16c（NGS-145）
17. ツバキ属　Camellia　ツバキ科　PL. 18：17a-17c（NGS-50）
18. サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科　PL. 18：18 a-18 c（NGS-71）
19. モッコク　Ternstroemia gymnanthera（Wright et Arn.）Beddome　ツバキ科　PL. 18：19a-19c（NGS-142）
20. イスノキ　Distylium racemosum Sieb. et Zucc.　マンサク科　PL. 18：20a-20c（NGS-57）
21. アジサイ属　Hydrangea　ユキノシタ科　PL. 18：21a-21c（NGS-31）
22. バクチノキ　Prunus zippeliana Miq.　バラ科　PL. 18：22a，PL. 19：22b-22c（NGS-59）
23. フジキ　Cladrastis platycarpa（Maxim.）Makino　マメ科　PL. 19：23a-23c（NGS-20）
24. キハダ　Phellodendron amurense Rupr.　ミカン科　PL. 19：24a-24c（NGS-101）
25. センダン　Melia azedarach L. var. subtripinnata Miq.　センダン科　PL. 19：25a-25c（NGS-75）
26. ムクロジ　Sapindus mukorossi Gaertn.　ムクロジ科　PL. 19：26a-26c（NGS-88）
27. モチノキ属　Ilex　モチノキ科　PL. 19：27a-27b，PL. 20：27c（NGS-164）
28. ニシキギ属　Euonymus　ニシキギ科　PL. 20：28a-28c（NGS-26）
29. クスドイゲ　Xylosma congestum（Lour.）Merr.　イイギリ科　PL. 20：29a-29c（NGS-133）
30. キブシ　Stachyurus praecox Sieb. et Zucc.　キブシ科　PL. 20：30a-30c（NGS-46）
31. タイミンタチバナ　Myrsine seguinii Lev.　ヤブコウジ科　PL. 20：31a-31c（NGS-40）
32. ハイノキ属　Symplocos　ハイノキ科　PL. 20：32a-32c（NGS-181）
33. イボタノキ属　Ligustrum　モクセイ科　PL. 21：33a-33c（NGS-39）
34. モクセイ属　Osmanthus　モクセイ科　PL. 21：34a-34c（NGS-114）
35. チシャノキ　Ehretia ovalifolia Hassk.　ムラサキ科　PL. 21：35a-35c（NGS-4）
36. ニワトコ　Sambucus racemosa L. subsp. sieboldiana（Miq.）Hara　スイカズラ科　PL. 21：36a-36c（NGS-43）
37. ガマズミ属　Viburnum　スイカズラ科　PL. 21：37a-37c（NGS-99）

このうち明らかに常緑性のものは，カヤ，マキ属，イヌガヤ，スギ，マツ属複維管束亜属の針葉樹5分類群と，スダジイ，コナラ属アカガシ亜属，シキミ，クスノキ，タブノキ属，ツバキ属，サカキ，モッコク，イスノキ，バクチノキ，クスドイゲ，タイミンタチバナ，モクセイ属の広葉樹13分類群である。明らかに落葉性のものは，クリ，コナラ属クヌギ節，ムクノキ，エノキ属，クワ属，アジサイ属，フジキ，キハダ，センダン，ムクロジ，キブシ，チシャノキ，ニワトコの広葉樹13分類群である。常緑性か落葉性か不明のものは，クスノキ科，モチノキ属，ニシキギ属，ハイノキ属，イボタノキ属，ガマズミ属の6分類群である。

(4) 考　　察

同定された樹種は常緑性の分類群が半数を占めるほか，落葉性の分類群でもムクノキやセンダン，

ムクロジ，チシャノキといった暖温帯に分布する樹種を含んでおり，樹種構成はいわゆる照葉樹林の要素が多く見いだされていることに特徴がある。

芦辺新溜池の自然木は縄文時代後・晩期に形成された浅い流路に埋積したもので，ごく短期間に埋積したと思われる。この自然木71点中には19分類群が認められ，この中ではスダジイが22.5%ともっとも多く，クスノキ科（12.7%），マキ属（9.9%），クワ属（9.9%），ツバキ属（9.9%），ムクロジ（8.5%），カヤ（5.6%）と続く（表26）。試料の中には，半径26cmのスダジイや，直径45cmのムクロジ，直径26cmのマキ属，直径25cmのクスノキ科，幅25cmのカヤ，幅22cmのクワ属などが含まれており，ある程度発達した大径木が生育する森林が成立していたことが想定できる。樹種同定を行った点数が少ないので断定はできないが，多様な樹種をまじえたスダジイ林が遺跡周辺に成立していたと想定できる。現在の照葉樹林の主要な要素であるコナラ属アカガシ亜属や，クスノキ，タブノキ属，イスノキがまったく見いだされていないことも特徴的である。

宮脇（1981）によると，壱岐は，人間の干渉のない自然状態であるとシイ－タブ林に覆われるはずである。しかし，現在タブ林は残っているものの，シイ林は県指定天然記念物である石田町の白沙八幡神社社叢や郷ノ浦町鏡岳神社社叢以外（長崎県教育委員会，2001），人間によって伐採・開発しつくされて残っていない。芦辺新溜池の自然木の組成は，縄文時代後・晩期のある時期に，現在の自然植生とされているシイ林が壱岐に成立していたことを示している。

遺跡が営まれるようになると，遺跡周辺の樹木を利用して多くの建築物や木製品が製作された。試料130点中には28分類群が認められたが，その樹種は芦辺新溜池の自然木との共通性は少なく，両者に見いだされるのは，カヤ，マキ属，スダジイ，コナラ属クヌギ節，クワ属，クスノキ科，ツバキ属，モッコク，ニワトコ，ガマズミ属の10分類群にすぎない（表26）。これが，植生の変遷を示しているのか，あるいは試料点数が少ないことによるバイアスによるのかは，今後の検討を待ちたい。

器種ごとに樹種をみると，建築材では46点中33点をマキ属が占め，その他の樹種は３点以下と，圧倒的にマキ属が選択されている。日本に生育するマキ属にはイヌマキとナギの２種がある。いずれも樹高20m，幹径60cm以上となる常緑高木である。イヌマキは現在，壱岐と対馬に分布するが，韓半島にはない（林，1960；倉田，1968）。ナギは現在，壱岐にはなく，五島列島に点々と分布しており，かつてはイヌマキだけでなく，ナギも壱岐に生育していた可能性が考えられる。松尾（1982）によると，イヌマキ林は，長崎県内では現在，壱岐と平戸島，北松浦半島にとくに多い。イヌマキの材は保存性が高く，水湿と白蟻に強く，琉球列島では現在建築構造材として賞用されるほか，縁板や天井板などの部材としても使われる（平井，1996）。壱岐でもイヌマキは建築材として利用されている。ナギは材質的にはイヌマキと同等である。ナギは熊野権現信仰と結びついて各地の神社に植えられたが天然木は少なく，利用法は不明である。原の辻遺跡では，垂木，柱，大引材など丸木の建築材にマキ属が使用され，ねずみがえしにはクスノキ科タブノキ属の板目材，板材などにはスギやクリといったその他の樹種が利用される傾向がある。マキ属の材は材質がやや堅く切削等に手間がかかるため，丸木のまま使用する大引材や受け柱，垂木などには用いられるが，板材などには割裂性と加工性の良い他の樹種（スギやカヤなど）を利用したと考えられる。

杭でも，マキ属がもっとも多用され37点中９点を占めるが，スダジイやクスノキ科，ツバキ属，イボタノキ属なども３，４点ほど使われており，樹種選択が建築材よりは緩やかである。

その他の木製品類でも47点中11点とマキ属がもっとも多く，ツバキ属８点がそれに次ぎ，スギ，スダジイ，クスノキが４，５点使われる。ツバキ属は竪杵や楔？に使用されていた。ツバキ属は強度があり，竪杵や楔などねばりの必要な製品の用材として選択的に用いられたと推定できる。

しかし，その他のものは器種が不明のものが多く，樹種選択については明瞭な議論はできない。今後器種名を与えた上で，製品と樹種との対応関係を論じていきたい。

(5) ま と め

建築材は，小型の木製品とくらべて遺物として残りにくく，他の遺物と比べると同定例が少ない(山田，1993)。建築材にマキ属が多い傾向は本州中部の数遺跡で認められているものの，北九州地方にも韓半島の同時期の樹種構成にもみられず，原の辻遺跡の特徴といえる。山田（1993）は日本列島における出土木材を総覧して，弥生時代には近隣の高木を建築材に用いていると判断した。原の辻遺跡でも，遺跡周辺に多量にあったマキ属材が使用されたと想定されるが，より多くの資料の樹種を検討することによって，今後，検証していきたい。

（能代修一・佐々木由香）

文 献

倉田　悟　1968「原色日本林業樹木図鑑」地球社

長崎県教育委員会　2001『長崎県の文化財』長崎県教育委員会

長崎県教育委員会　2001『原の辻遺跡　原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書？（環濠等状況調査２）』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第21集

林　弥栄　1960「日本産針葉樹の分類と分布」農林出版

原の辻遺跡保存等協議会　2002『原の辻遺跡　長崎県緊急雇用対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第３集

平井信二　1996「木の大百科」朝倉書店

宮脇　昭編　1981「日本植生誌　九州」至文堂

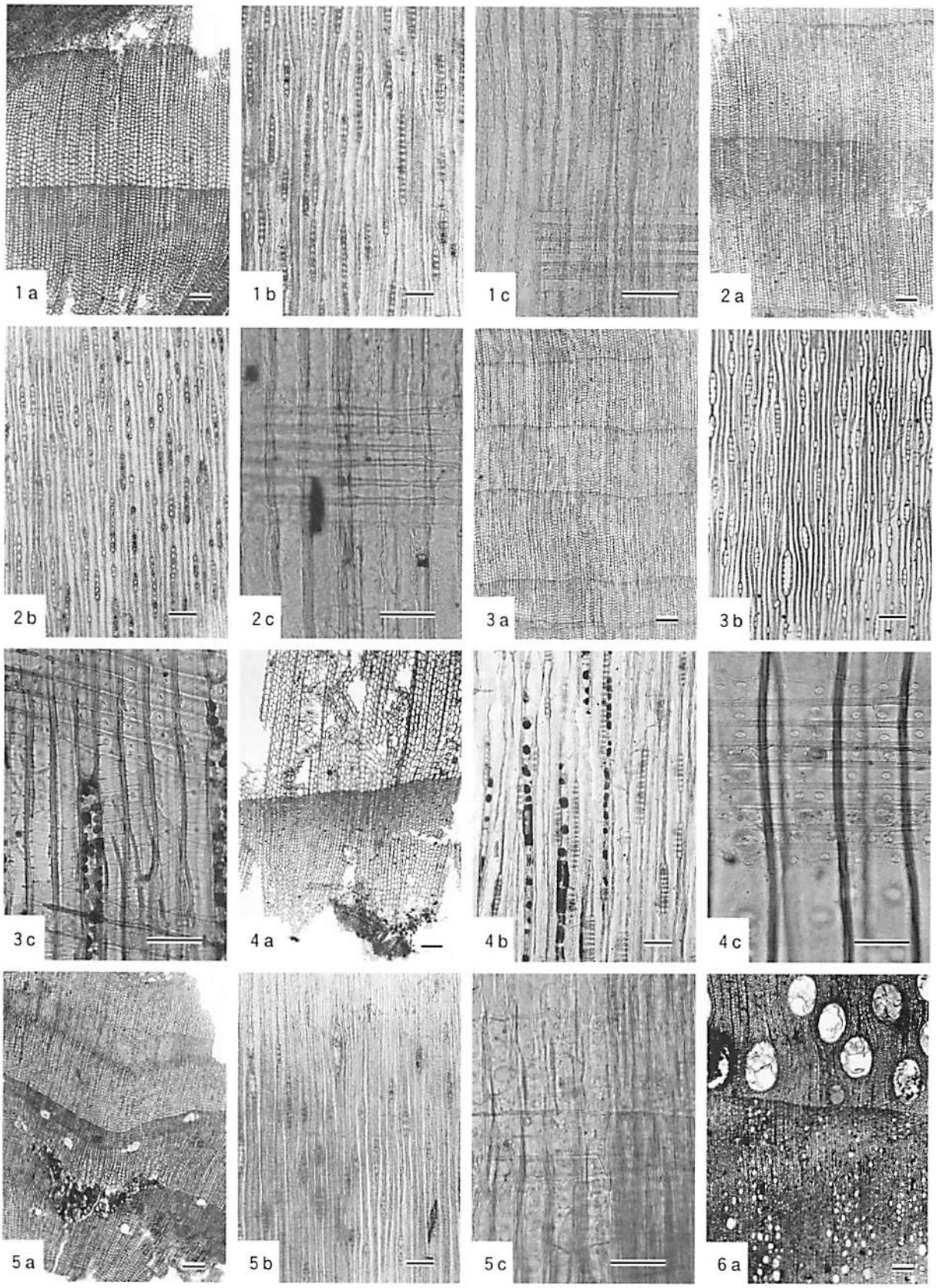
松尾俊彦　1982「イヌマキに関する研究（Ⅰ）－長崎県下に存立するイヌマキ林について－」長崎県総合農林試験場研究報告（林業部門）No.13：20-31

山田昌久　1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用から見た人間・植物関係史」植生史研究特別第１号

表26　原の辻遺跡出土木材の樹種

樹種	芦辺新溜池		遺　跡　内				
	自然木		建築材	杭	その他	合　計	
カヤ	4	5.6%			1	1	0.8%
マキ属	7	9.9%	33	9	11	53	40.8%
イヌガヤ	2	2.8%					
スギ			1		4	5	3.8%
マツ属複維管束亜属				1		1	0.8%
クリ			3			3	2.3%
スダジイ	16	22.5%	2	4	5	11	8.5%
コナラ属クヌギ節	1	1.4%		1	1	2	1.5%
コナラ属アカガシ亜属					1	1	0.8%
ムクノキ					2	2	1.5%
エノキ属	2	2.8%					
クワ属	7	9.9%	1	1		2	1.5%
シキミ	1	1.4%					
クスノキ					4	4	3.1%
タブノキ属			1			1	0.8%
クスノキ科	9	12.7%	1	4	1	6	4.6%
ツバキ属	7	9.9%	2	4	8	14	10.8%
サカキ					1	1	0.8%
モッコク	1	1.4%		1	1	2	1.5%
イスノキ				1	2	3	2.3%
アジサイ属				1	2	3	2.3%
バクチノキ				1		1	0.8%
フジキ					1	1	0.8%
キハダ	1	1.4%					
センダン	2	2.8%					
ムクロジ	6	8.5%					
モチノキ属			1			1	0.8%
ニシキギ属				2		2	1.5%
クスドイゲ	1	1.4%					
キブシ					1	1	0.8%
タイミンタチバナ				1		1	0.8%
ハイノキ属			1	1		2	1.5%
イボタノキ属				3		3	2.3%
モクセイ属	1	1.4%					
チシャノキ	1	1.4%			1	1	0.8%
ニワトコ	1	1.4%		2		2	1.5%
ガマズミ属	1	1.4%					
総　計	71		46	37	47	130	

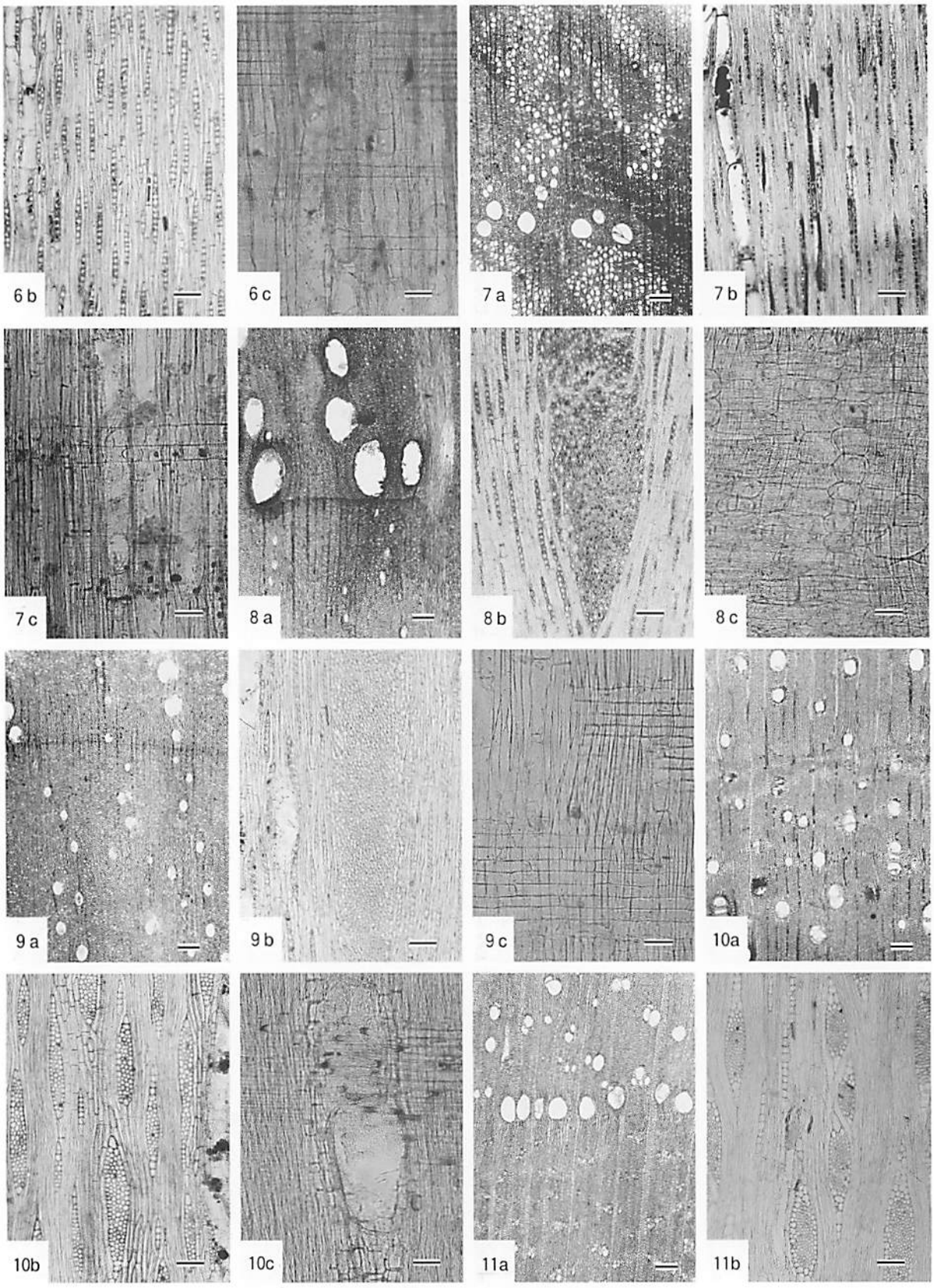
建築材と杭材には，現時点で疑問符がついているものも含む。



PL. 15　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(1)

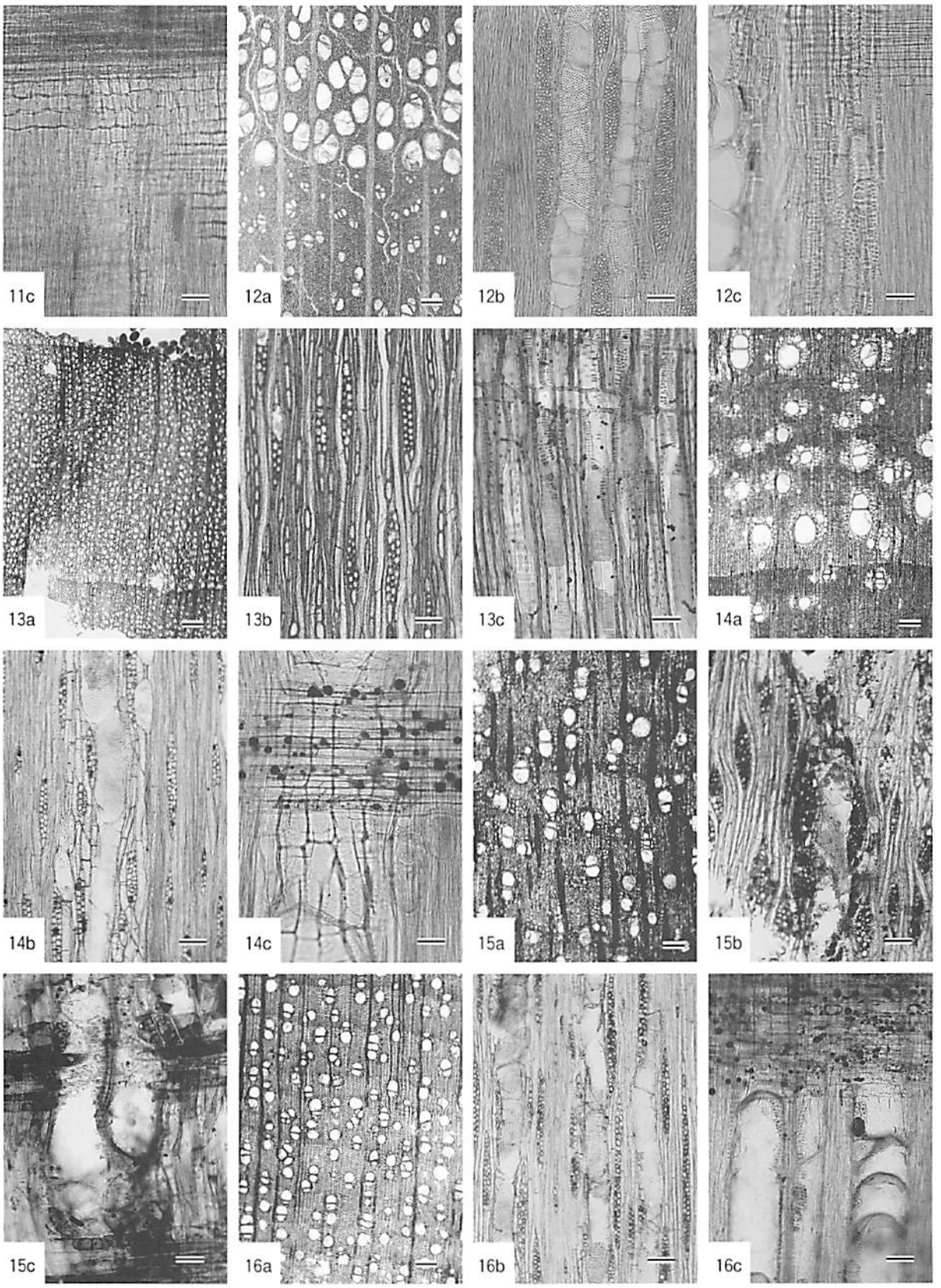
1a-1c：カヤ（NGS-73），2a-2c：マキ属（NGS-44），3a-3c：イヌガヤ（NGS-82），4a-4c：スギ（NGS-54），5a-5c：マツ属複維管束亜属（NGS-179），6a：クリ（NGS-197）.

a：横断面（スケール＝200μm），b：接線断面（スケール＝100μm），c：放射断面（スケール＝50μm）.



PL. 16　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(2)

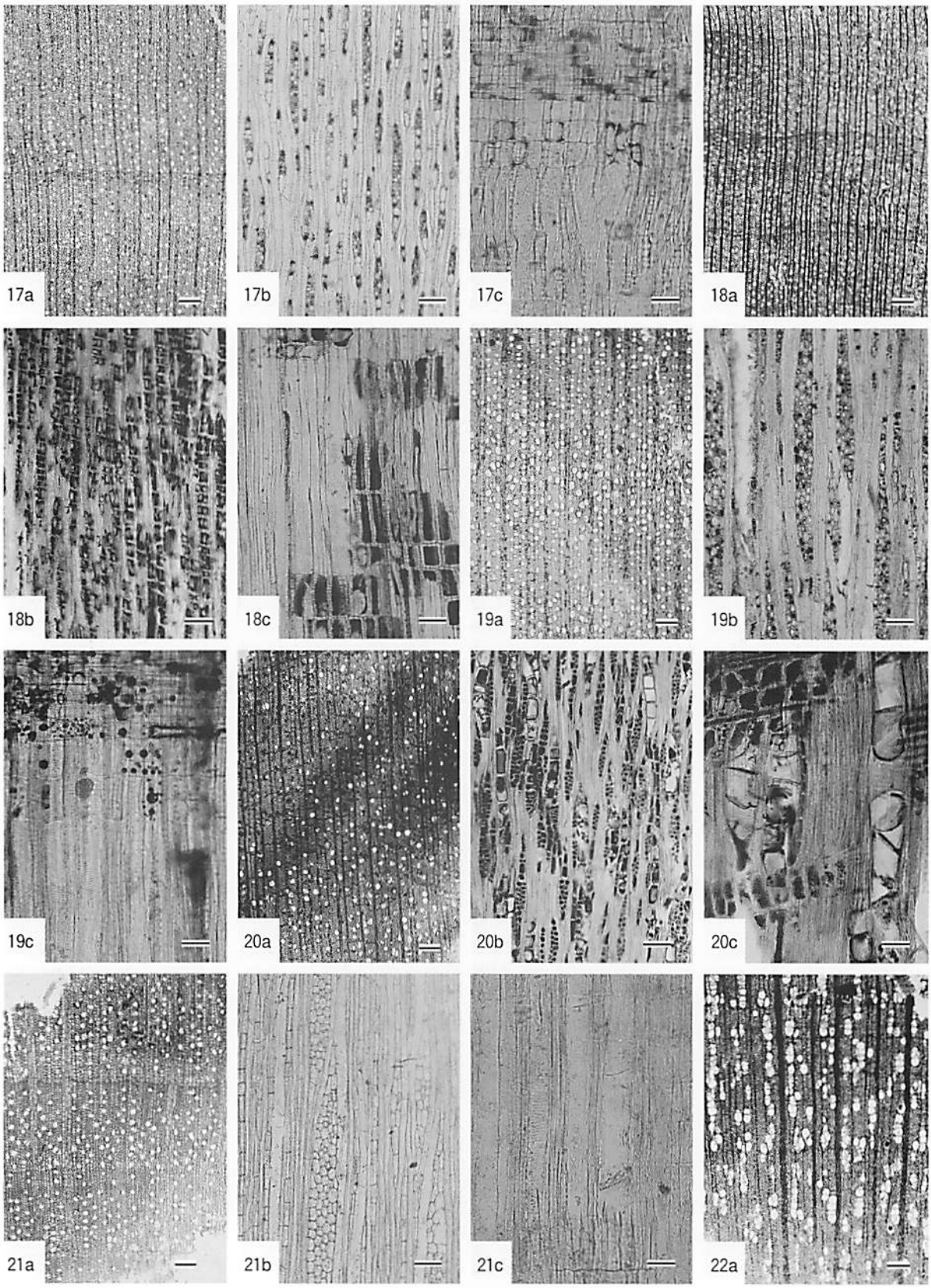
6b-6c：クリ（NGS-197）、7a-7c：スダジイ（NGS-134）、8a-8c：コナラ属クヌギ節（NGS-72）、9a-9c：コナラ属アカガシ亜属（NGS-10）、10a-10c：ムクノキ（NGS-61）、11a-11b：エノキ属（NGS-130）.
a：横断面（スケール＝200μm）、b：接線断面（スケール＝100μm）、c：放射断面（スケール＝50μm）.



PL. 17　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(3)

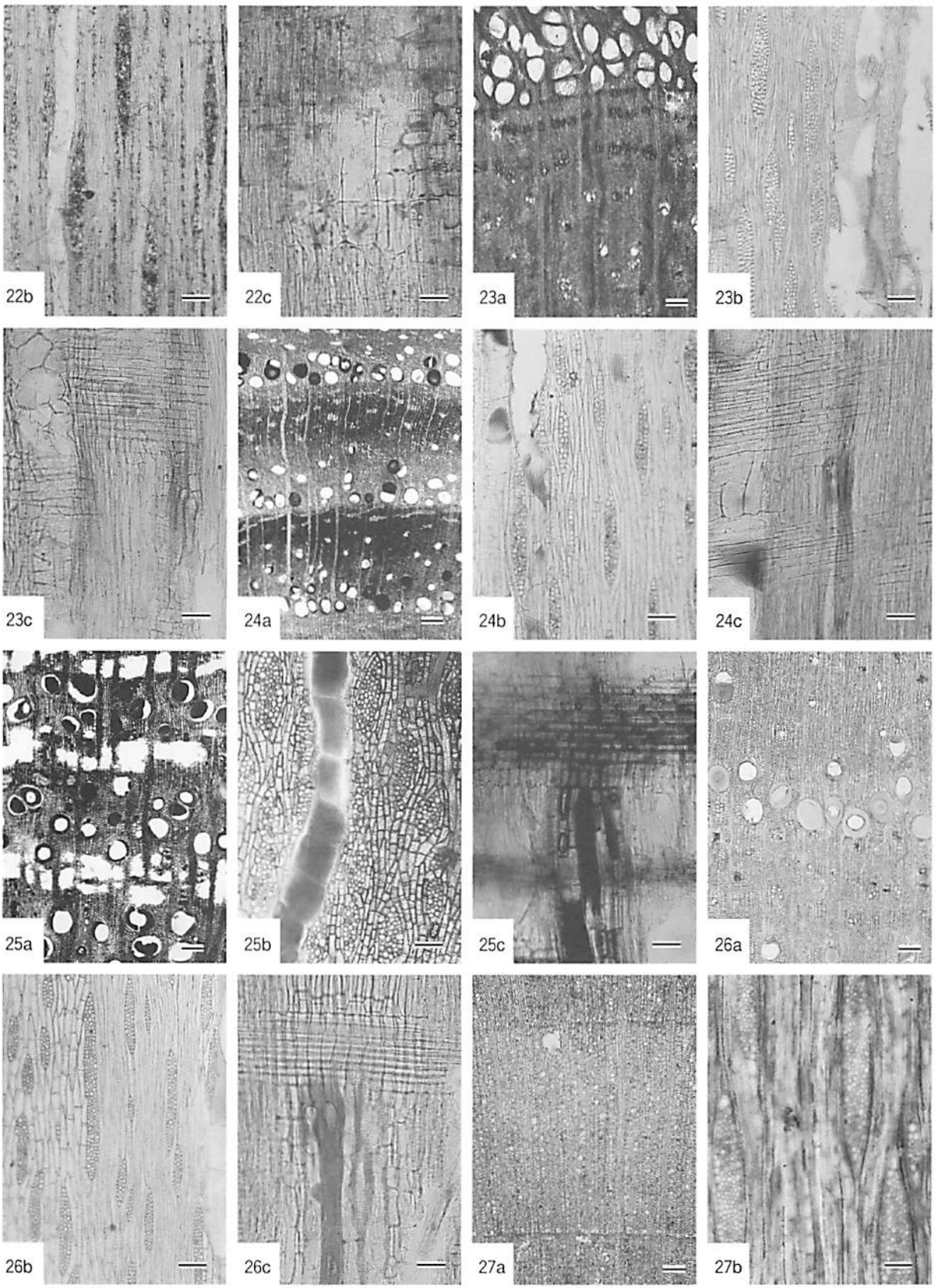
11c：エノキ属（NGS-130），12a-12c：クワ属（NGS-131），13a-13c：シキミ（NGS-81），14a-14c：クスノキ（NGS-8），15a-15c：タブノキ属（NGS-150），16a-16c：クスノキ科（NGS-145）.

a：横断面（スケール＝200μm），b：接線断面（スケール＝100μm），c：放射断面（スケール＝50μm）.



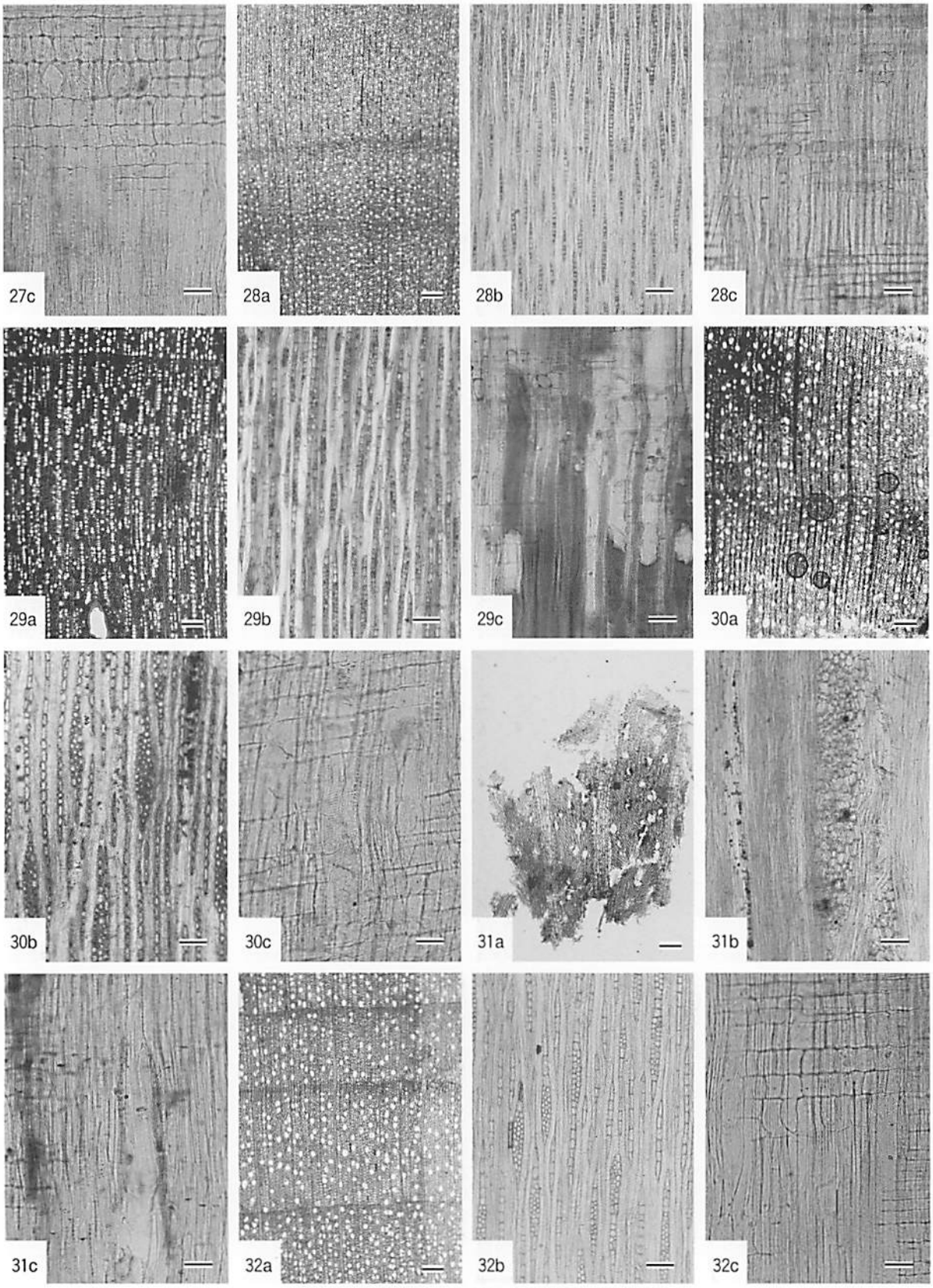
PL. 18　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(4)

17a-17c：ツバキ属（NGS-50），18a-18c：サカキ（NGS-71），19a-19c：モッコク（NGS-142），20a-20c：イスノキ（NGS-57），21a-21c：アジサイ属（NGS-31），22a：バクチノキ（NGS-59）．
a：横断面（スケール＝200μm），b：接線断面（スケール＝100μm），c：放射断面（スケール＝50μm）．



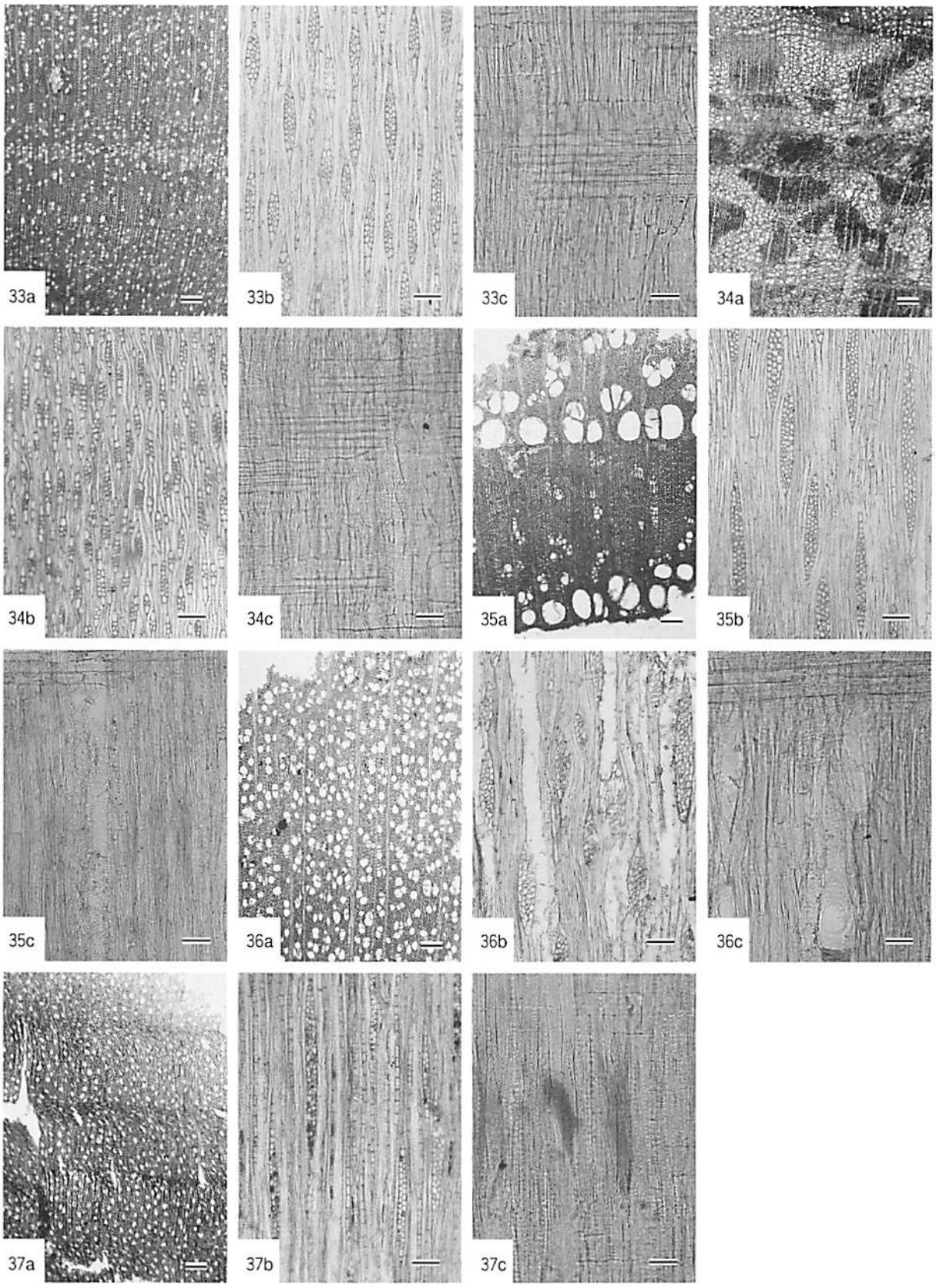
PL. 19　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(5)

22b-22c：バクチノキ（NGS-59），23a-23c：フジキ（NGS-20），24a-24c：キハダ（NGS-101），25a-25c：センダン（NGS-75），26a-26c：ムクロジ（NGS-88），27a-27b：モチノキ属（NGS-164）．
a：横断面（スケール＝200μm），b：接線断面（スケール＝100μm），c：放射断面（スケール＝50μm）．



PL. 20　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(6)

27c：モチノキ属（NGS-164），28a-28c：ニシキギ属（NGS-26），29a-29c：クスドイゲ（NGS-133），30a-30c：キブシ（NGS-46），31a-31c：タイミンタチバナ（NGS-40），32a-32c：ハイノキ属（NGS-181）．
a：横断面（スケール＝200μm），b：接線断面（スケール＝100μm），c：放射断面（スケール＝50μm）．



PL. 21　原の辻遺跡から出土した木材の顕微鏡写真(7)

33a-33c：イボタノキ属（NGS-39）、34a-34c：モクセイ属（NGS-114）、35a-35c：チシャノキ（NGS-4）、36a-36c：ニワトコ（NGS-43）、37a-37c：ガマズミ属（NGS-99）.

a：横断面（スケール＝200μm）、b：接線断面（スケール＝100μm）、c：放射断面（スケール＝50μm）.

4．原の辻遺跡出土の動物遺存体

(1) 概　　要

長崎県原の辻遺跡調査事務所および旧芦辺町で行ってきた原ノ辻遺跡の発掘調査では，これまで，1993年度，1995年度，1996年度，1999年度，2000年度，2003年度の各年度で動物遺存体が出土したが，本稿ではこれらをまとめて概観する。動物遺存体の大部分は，弥生時代前期から古墳時代前期のものであるが，古代から近世のものも若干含まれ，紙数の制約により，主体となる弥生時代から古墳時代の環濠部，旧河道，土坑などの遺構から出土した動物遺存体を中心に報告する。

出土した動物遺存体は，破片点数にして総計2,258点，そのうち種，部位などを同定できたのは1,479点である。その内訳は，貝類10点，魚類130点，両生類１点，爬虫類７点，鳥類８点，哺乳類1,323点である。哺乳類については，イヌが最多で521点(39%)，イノシシ459点(35%)，ニホンジカ93点(４%)と続く。これらの多くは，1993年度の環濠部の調査により出土している。今回報告する動物遺存体は，大部分が発掘中に肉眼で確認されたもののみで，水洗篩別を行ったのは2002年度の調査で検出された貝層のみにとどまる。

(2) 種類ごとの特徴

A　ウニ類

石田高原Ⅴ区貝層ブロック及び２号溝からウニの棘が多数出土している。

B　貝類

ハマグリと思われる細片が多数出土している。特定調査区２号旧河道（弥生後期～古墳前期）から，サザエのフタが７点，マルタニシが１点出土している。アワビが，９号土坑(弥生前期末～中期中葉)から１点出土している。

C　魚類

サメ類

1993年度の２号溝（弥生中期～古墳前期）から大型のサメ類の椎骨が１点出土している。３号旧河道（弥生前期後葉～中期末）から椎骨，遊離歯が１点ずつ，計２点が出土している。特定調査区２号旧河道から遊離歯１点が出土している。1999年度の１号溝（古墳前期）から椎骨２点が出土しており，うち１点は人為的な穿孔と思われるが，明確ではない。石田高原地区の環濠部からサメ類の椎骨６点，遊離歯２点が出土している。そのうち１点は，ネザミザメの特徴である蛇腹状側面を持つ大型の椎骨である。

フサカサゴ科の一種

カサゴ，メバル，ソイの仲間である。石田高原Ⅴ区貝層ブロックから主鰓蓋骨１点が出土している。フサカサゴ科は種類が多く，それぞれの種が類似しているため区別が難しい。

マダラ

石田高原Ⅴ区貝層ブロックから前上顎骨を２点採集した。現在，日本海では島根県が南限とされ，北海道や東北地方以外の遺跡からの出土は少ない。

コチ科の一種

1995年度の9号土坑から椎骨が3点出土している。

サバ属の一種？

1995年度の9号土坑から椎骨が5点出土している。

マダイ

1995年度の9号土坑から歯骨（右），遊離歯，角骨が各1点，1号溝から歯骨（右），角骨（右），方骨（左），主鰓蓋骨（右），間鰓蓋骨（右）が各1点，計5点が出土している。石田高原地区の環溝部から主上顎骨1点が出土している。いずれも体長30cm以上の個体ばかりである。

タイ科の一種

1995年度の9号土坑から歯骨（左右不明），主鰓蓋骨（左）が各1点，椎骨が2点，遊離歯が20点出土している。特定調査区2号旧河道から，上擬鎖骨が1点のみ出土している。

タイ類

マダイやクロダイといったタイ科以外にも類似する歯を有する種があることからタイ類と総称した。1995年度の9号土坑から遊離歯8点，特定調査区2号旧河道から遊離歯1点が出土している。

フエダイ科の一種

石田高原V区貝層ブロックから小型のフエダイ科の前上顎骨が1点出土している。

ヒラメ

1995年度の9号土坑から椎骨が1点のみ出土している。現生標本との比較から60cm以上の大きな個体と推測される。

ハタ科の一種

特定調査F区から歯骨1点（左）が出土している。現生標本との比較から体長40cm以上の個体と推測される。

ブリ層の一種？

1995年度の9号土坑からブリ属と思われる前上顎骨1点（右）が出土している。小片となっており，種を同定するには至らない。

フグ科の一種

1995年度の9号土坑から歯板が1点，椎骨4点が出土している。石田高原V区貝層ブロックの水洗選別試料から，前上顎骨3点と歯骨1点が採集された。歯骨はかなり小型の個体である。

ヘダイ

1995年度の9号土坑から遊離歯が2点出土している。

ベラ科の一種

1995年度の9号土坑から咽頭骨が6点，前上顎骨が3点（右1，左1，左右不明1）出土している。

コブダイ

特定調査区2号旧河道から下咽頭骨1点，特定調査F区から下咽頭骨1点が出土している。

D　爬虫類

ヘビ類の椎骨が1点出土しているが，出土地点，層位は不明である。イシガメあるいはクサガメと

思われる淡水産のカメが，1996年度の２号旧河道からほぼ一個体分の腹甲板と背甲板が出土している。また大腿骨１点（左）も出土している。４号旧河道（近世）からもカメ類の腹甲版が３点出土している。

E　両生類

石田高原Ｖ区貝層ブロックからカエル類の上腕骨１点が出土している。大きさからアマガエルのような小形の種と推測される。

F　鳥類

1996年度の３号旧河道からカラス属の一種の上腕骨１点（左）が出土している。ガン・カモ科の一種は，特定調査区Ｅ区土器溜（弥生中期中葉～終末）から手根中手骨１点（左），1999年度の１号溝から尺骨１点（右），計２点が出土している。高元地区からアホウドリと思われる尺骨（左）が１点出土している。長さの割に細く華奢な印象を受け，アホウドリ類に類似するが，手許に現生標本が無く，今後，現生標本をもとに種を確定したい。

E　哺乳類

ネズミ類

1993年度の２号溝（弥生中期～古墳前期）から遊離歯が３点，出土地点および層位不明で，上腕骨が２点（右１左１），出土している。

イヌ

1993年度の１号溝（弥生中期～古墳前期）から頭蓋骨が14点，下顎骨が４点（左３不明１），尺骨が３点（右２左１），上顎骨が２点（右１左１），大腿骨が３点（右１左１不明１），椎骨４点（腰椎２頸椎１胸椎１）など，計88点が出土している。２号溝から椎骨60点（環椎３頸椎２胸椎23腰椎４仙椎２不明26点），下顎骨14点（右５左９），上腕骨14点（右５左９），大腿骨12点（右６左４不明２），脛骨11点（右２左８不明１），寛骨10点（右５左５），尺骨10点（右４左５不明１），肩甲骨が９点（右２左７）など，計248点が出土している。下顎骨１点に，歯槽嚢胞が認められる。もう１点の下顎骨に，数条の解体痕が残る。脛骨１点の近位部は，打ち割られている。上腕骨１点の骨頭に，鋭利な刃器により解体痕が残るもの，近位部を打ち割ったものがある。もう１点の脛骨は骨幹部で切断され，さらにもう１点は遠位端が切断され，イヌによる咬痕が見られる。大腿骨１点は，骨幹部で打ち割られている。４号溝（弥生中期～古墳前期）から上腕骨３点（右１左１不明１），椎骨３点（頸椎１胸椎２），尺骨（右）２点，大腿骨が２点（右１左１），脛骨が２点（右１左１）など，計24点が出土している。５号溝（弥生中期～古墳前期）から下顎骨が９点（右４左５），寛骨が５点（右２左３），肩甲骨（右）が２点，尺骨が６点（右３左３），上顎骨が２点（右１左１），上腕骨が７点（右２左３，左右不明２），大腿骨が10点（右４左５，左右不明１），中手骨または中足骨（左右不明）が２点，遊離歯が５点，肋骨が５点，橈骨が９点（右５左４），脛骨が９点（右３左４，左右不明２），頸椎が４点，環椎，胸椎，腰椎，陰茎骨，第二中手骨（右），第三中足骨（右），不明が各１点，計78点が出土している。上腕骨（右・左），大腿骨（左）の遠位，寛骨（左）に，数条の切痕が残る。脛骨（左）

は近位および遠位端が打割され，骨髄が抜かれている。7号溝（弥生中期～後期）から下顎骨（左）が1点，出土している。8号溝（弥生中期～後期）から肩甲骨（左）が1点，出土している。大溝もしくは1号溝（弥生前期後葉～古墳前期）から大腿骨が4点（右2左2），下顎骨（右），上顎骨（左），遊離歯，橈骨（左），脛骨（右）が各1点，計8点が出土している。大溝もしくは2号溝（弥生前期後葉～古墳前期）から寛骨（左），上腕骨（右），椎骨，遊離歯，橈骨（左），脛骨（右）が各1点，計6点が出土している。大溝もしくは4号溝（弥生前期後葉～古墳前期）から下顎骨（左），寛骨（右），尺骨（左），上腕骨（右），大腿骨（右），踵骨（右），遊離歯，頸椎，肋骨が各1点，橈骨（右）が2点，計11点が出土している。特定調査区2号旧河道から尺骨（左），大腿骨（右）が1点ずつ，計2点が出土している。大腿骨は骨端部が未癒合の幼獣である。3号旧河道から下顎骨（右），遊離歯1点，計2点が出土している。1996年度の3号旧河道の近世層から下顎骨（左），近世旧河道から下顎骨（左）が1点ずつ，計2点が出土している。1999年度の1号溝から環椎，脛骨（右）が1点ずつと脛骨と思われるものが2点，計4点が出土している。石田高原地区の環濠部から下顎骨1点，脛骨1点，遊離歯1点が出土している。

タヌキ

1993年度の1号溝から下顎骨（右）が2点，2号溝から遊離歯が4点，5号溝から上腕骨（右）が1点，出土地点および不明で，下顎骨（右）が1点，計8点が出土している。1995年度の9号土坑から脛骨2点（左1右1）が出土している。1996年度の3号旧河道から遊離歯1点が出土している。いずれも癒合していない近位端で，若い個体である。特定調査区E区土器溜（弥生中期中葉～終末）から，下顎骨（左）1点が出土している。1999年度の1号溝から頭蓋骨2点，下顎骨1点，遊離歯1点，計1点が出土している。頭蓋骨は同一個体と思われる。

イヌ科の一種

特定調査区F区4層，石田高原地区から下顎犬歯が1点ずつ，計2点出土している。いずれも，縄文，弥生犬には見られない大型の個体で，イヌ，もしくは小型のオオカミと考えられるが，どちらの可能性もあるため，種の同定には至らなかった。

カワウソ

1996年度の3号旧河道から上腕骨1点（左）が出土している。肉のほか毛皮としての利用が考えられる。

ニホンアシカ

1999年度の1号濠（弥生中期中葉～終末）から上腕骨（右）が出土している。骨幹部に金属器によると考えられる解体痕と抉りの痕跡が多数確認される。解体痕は，骨に刃部を往復する切傷と，叩き切りの傷の2種類が見られる。両骨端を欠き，骨幹部から遠位部に向かって抉っている。同様の事例が，長崎県伊木力遺跡のイノシシやニホンジカに見られ，骨髄食が指摘される（松井1990）。アシカは，近年まで日本海沿岸に多く生息し，島根県竹島で営巣し，毛皮の目的として盛んに狩猟されていた。韓国の釜山市東三洞貝塚（韓国新石器時代）や，鳥取県青谷上寺地遺跡（弥生後期）を始め，対馬海峡を挟む日本海沿岸の遺跡からの出土が多く，近年では愛媛県宮前川遺跡群（弥生末～古墳初頭），同県阿方貝塚（弥生前期）などからも出土が知られており，薬用などの単なる食料以上の価値があったとも考えられる。

鰭脚類

アシカ，トド，オットセイ，アザラシを含む。いずれも雌雄差が大きい上，それぞれの大きさが重なってくるので，椎骨，四肢骨の破片では同定が困難である。1993年度の１号溝から部位不明が２点，２号溝から９点，４号溝から上腕骨（右），大腿骨（左），橈骨（右）が各１点，指骨と思われるものが２点，５号溝から橈骨（右）２点，尺骨（左）２点，他11点，７号溝から６点，出土している。1996年度の２号旧河道から遊離歯２点（左２），頭蓋骨１点（右），計３点が出土している。いずれも，現生標本のゼニガタアザラシよりかなり大型であり，ニホンアシカの可能性があるが決定はできなかった。他にも鰭脚類の指骨と思われるものが，３号旧河道から１点，肩甲骨と思われるものが1999年度の１号濠から１点（左右不明１）出土している。石田高原地区の環濠部から大きさがアシカに相当する大腿骨が１点出土している。骨端部が化骨化していない若い個体である。

ウマ

1996年度の２号旧河道から上腕骨１点（左）が出土している。３号旧河道から下顎骨１点，上顎骨１点，遊離歯５点，計７点が出土している。４号旧河道から橈骨２点（右），遊離歯１点，計３点が出土している。1999年度の１号溝から遊離歯11点が出土している。その内，10点は同一個体である。中世層から遊離歯６点，近世層から遊離歯４点，橈骨（左），中手骨（左），大腿骨（左），中足骨（右）が１点ずつ，計８点が出土している。石田高原地区の環濠内から遊離歯が17点出土しており，そのうち２点が切歯で，その他はすべて臼歯である。年齢査定できたものは13点で，５歳～10歳のものが５点，10歳～18歳のものが６点，18歳以上のものが２点である。出土状況は，環濠の３層から４層，トレンチ部からで，層序的には後世の混入をうかがわせる要素はない。他の廃棄された動物遺存体と同様に環濠からの，歯のみの出土なので，それ自体，埋葬や祭祀に伴うものと考えることはできない。現在，放射性炭素年代を測定中である。

ウシ

1996年度の２号旧河道から大腿骨１点（左）が出土している。４号旧河道から，橈骨（右），中手骨（右？）が１点ずつ，計２点が出土している。１号溝から指骨４点（不明４），中足骨１点（右），中手骨あるいは中足骨１点（不明），計６点が出土している。中世層から，遊離歯５点，近世層から遊離歯６点，橈骨（右），中手骨（右），脛骨（右），中足骨（右）が１点ずつ，計10点が出土している。石田高原地区の環濠部から，遊離歯が２点出土している。いずれも同地点から出土した大臼歯であるが，別個体ものである。

イノシシ

1993年度の１号溝から上腕骨が３点（右１左２），下顎骨（右），肩甲骨（右），指骨（左右不明），中手骨または中足骨（左右不明），椎骨が各１点，遊離歯が11点，脛骨（左）が３点，計22点が出土している。２号溝（弥生中期～古墳前期）から下顎骨が８点（左右共２右３左３），寛骨が２点（右１左１），肩甲骨が２点（右１左１），後頭骨が３点，指骨が２点，尺骨が６点（右２左４），上顎骨が８点（右４左３左右不明１），上腕骨が10点（右６左２左右不明２），大腿骨が４点（右１左１左右不明２），中手骨または中足骨（左右不明）が４点，椎骨が３点，頭蓋骨（破片）が２点（右１左右不明１），遊離歯が29点，脛骨が６点（右１左４左右不明１），橈骨（左），前頭骨，環椎，第五中手骨，距骨（左右不明），腓骨（左右不明），腰椎が各１点，計88点が出土している。肩甲骨（左）に，

数条の切痕が残る。4号溝から中足骨（左右不明）が2点，上腕骨（左），椎骨，頭蓋骨（破片）が各1点，計5点が出土している。5号溝から下顎骨が7点（右2左1左右不明4），寛骨（左）が2点，環椎が2点，肩甲骨が5点（右1左4），距骨（右），尺骨が3点（右1左2），上顎骨が4点（右3左1），上腕骨が6点（右1左4左右不明1），大腿骨が2点（右1左1），中手骨または中足骨（左右不明）が3点，頭蓋骨（破片）が2点，遊離歯が9点，橈骨が4点（右1左3），脛骨が3点（右2左1），頬骨，側頭骨，後頭骨，腰椎，指骨，踵骨（右），軸椎，第一中手骨（右），肋骨が1点，が各1点，計60点が出土している。7号溝から後頭骨，上顎骨（左）が各1点，計2点が出土している。8号溝から脛骨（右）が1点，出土している。大溝から肩甲骨（左右不明），上腕骨（右）が各1点，計2点が出土している。大溝もしくは1号溝から上腕骨が3点（右2左右不明1），遊離歯が4点，橈骨（右）が1点，脛骨（右），腓骨（右），踵骨（右），距骨（右），大腿骨（左），椎骨が各1点，計14点が出土している。大溝もしくは2号溝から，環椎が2点，肩甲骨(右)が4点，尺骨(右)が2点，上腕骨が3点（右2左1），下顎骨（左右共），上腕骨（右），頭蓋骨（破片）が各1点，遊離歯が5点，計21点が出土している。大溝もしくは4号溝から，脛骨が2点(右1左1)，下顎骨(左)，上顎骨（左）が各1点，計4点が出土している。1996年度の2号旧河道から遊離歯4点，尺骨（左），脛骨（右）が1点ずつ，計6点が出土している。3号旧河道から下顎骨3点（左2右1），寛骨3点（左1右2），上顎骨2点(左1右1)，上腕骨6点(左2右4)，遊離歯15点，肩甲骨(右)，指骨(不明1)，頭蓋骨（右），大腿骨（左），中手骨（左），尺骨（左），橈骨（左），脛骨（右），椎骨各1点，計38点が出土している。大腿骨には石器によると思われる解体痕が見られる。遊離歯の中には未萌出の第3大臼歯など若い個体のものが含まれる。特定調査区2号旧河道から下顎骨6点（左1右4結合1），遊離歯6点，肩甲骨5点（左2右3），上腕骨4点（左3右1），椎骨3点，脛骨（左2），距骨（左2），指骨が2点ずつ，中手骨(左1)，頭蓋骨(左1)，上顎骨8（右1），尺骨(右)，橈骨(左1)，腓骨（右1）が各1点，計36点が出土している。9号土坑から椎骨2点，肋骨（左），指骨（不明）が1点ずつ，計4点が出土している。4号旧河道（弥生前期末～中期中葉）から遊離歯1点のみが出土している。1999年度の1号溝から遊離歯9点，頭蓋骨4点，上顎骨4点（左2右2），下顎骨（左1右2不明1），寛骨4点（左3右1），肩甲骨（右3），椎骨がそれぞれ3点ずつ，上腕骨（右2），尺骨（左2），中手骨（左1右1），肋骨（右1不明1），距骨（右2）がそれぞれ2点ずつ，橈骨（不明），大腿骨（左），脛骨（左），腓骨（左），踵骨（左），中足骨（左）がそれぞれ1点ずつ，計47点が出土している。特定調査区D区4層（弥生後期前半）から上腕骨（左），寛骨（左）が1点ずつ，計2点が出土している。特定調査区E区土器溜から，遊離歯13点，上顎骨（左），肩甲骨（右），上腕骨（左），尺骨（左），腓骨（左），椎骨が1点ずつ，計19点出土している。特定調査区F区土器溜から遊離歯3点が出土している。特定調査区F区4層から中手骨（左），距骨（左）が1点ずつ，計2点出土している。

これらのイノシシの遺伝子解析を行った結果，すべてがニホンイノシシに属し，他の国内の遺跡で見られた東アジア系のブタの遺伝子が見られなかった（渡部ほか2003）。また南川による炭素・窒素同位対比による食性分析によっても，原の辻遺跡出土のイノシシ属の炭素・窒素同位対比は，純粋な草食獣であるシカや，関東地方の縄文貝塚から出土した典型的な野生イノシシと考えられる値と同様の値を示し，沖縄諸島などで見られた海産物や人間の食料残滓や排泄物を摂食していた可能性のある

窒素同位対比の高いものや，アワ・ヒエなどのＣ４植物を摂食していたものは見られなかった（松井ほか2001）。これらの結果から，現時点では，原ノ辻遺跡から出土したイノシシ属が野生で，ブタではなかった可能性が高いことを示唆する。しかし環濠部で出土した下顎に穿孔された成熟したオスのイノシシは，ニホンイノシシに比べて小型で，今後，さらなる研究を要する。

ニホンジカ

1993年度の１号溝から上腕骨（右）が１点，出土している。２号溝から鹿角が４点，上腕骨（左）が１点，中手骨または中足骨が２点，脛骨が２点（右１左１），計９点が出土している。２号溝上層から出土した脛骨（右）には，金属器で付けられたとみられる鋭利な傷が認められる。角座から切り離すために，回転させながら刃器を叩きつけ，切り込みを入れた痕跡が残る。また角幹の両端を切断し内部を穿孔したものがある。５号溝から鹿角が35点，尺骨（左），中足骨（左），腓骨（左右不明）が各１点，計38点が出土している。鹿角先端部を刃器によって切断後，表面を研磨し，内部を刳り抜いた未製品（刀子柄の未製品？）が３点ある。７号溝から上腕骨（右）が１点，出土している。９号溝から尺骨（左右不明）が１点，出土している。大溝から，大腿骨（右）が１点，出土している。大溝もしくは１号溝から上腕骨（右），中手骨（左右不明）が各１点，計２点が出土している。大溝もしくは２号溝から鹿角が２点，中手骨（左右不明）が８点，計10点が出土している。1996年度の２号旧河道から寛骨（左）１点が出土している。３号旧河道から枝角３点，寛骨（左），大腿骨（右），中足骨（不明），踵骨（左）が１点ずつ，計７点が出土している。枝角のうち２点は，刃器を叩きつけ切断しようとした痕跡が見られる。特定調査区２号旧河道から枝角（右），大腿骨（右），脛骨（左），中足骨（不明），踵骨（左）が１点ずつ，計５点が出土している。1999年度の１号溝から枝角８点，尺骨１点（右），計９点が出土している。枝角のうち５点は，いずれも刃器が叩きつけられた加工痕が残される。近世旧河道（近世）から枝角１点が出土している。石田高原地区から寛骨が１点と高元地区から枝角が２点出土している。枝角のうち１点には，加工痕が見られる。落角を使用したもので，数回切ろうとした痕跡があるが風化しているため明瞭ではない。

アカシカ？

1993年度の２号溝から鹿角が１点出土している。ニホンジカをはるかに凌ぐ大きさの大陸系のアカシカの可能性が高い。

イルカ類

1993年度の１号溝から椎骨が２点，２号溝（弥生中期～古墳前期）から，後頭骨が１点，椎骨が25点，計26点，４号溝から椎骨が２点，５号溝から頭蓋骨が４点，椎骨が２点，肋骨が１点，計６点，６号溝から椎骨が１点，大溝もしくは１号溝から椎骨が１点，出土している。特定調査区２号旧河道から椎骨１点，特定調査区Ｅ区土器溜（弥生中期中葉～終末）から椎骨１点が出土している。高元地区から３点と石田高原地区から４点，いずれも椎骨が出土している。

クジラ類

1993年度の大溝もしくは１号溝から上顎骨もしくは下顎骨，大型の肋骨の破片が，各１点，計２点が出土している。２号溝から椎骨が１点，部位不明が１点出土している。椎骨は，ハナゴンドウの現生標本より少し大きな個体である。５号溝から肋骨などが２点，出土している。２号旧河道から椎骨１点，部位不明１点，計２点が出土している。３号旧河道から椎骨３点が出土している。うち１点に

は刃器を叩きつけた，深く鈍い傷が見られる。4号旧河道から部位不明1点が出土している。特定調査区2号旧河道（弥生後期～古墳前期）から部位不明1点が出土している。1号溝から椎骨1点が出土している。

ヒト

1996年度の3号旧河道から，尺骨（右）1点が出土している。石田高原地区から前頭骨と頭頂骨が1点ずつ出土した。接合しないが，おそらく同一個体と思われる。

(3) 骨角器の廃材

1993年度の5号溝からニホンジカの鹿角を加工した未製品が出土している（表30）。ニホンジカの鹿角および中手骨および中足骨には，加工の際に付けられた傷が残る。中でも，2号溝上層から出土した脛骨（右）には，鋭利な金属器によって付けられたとみられる傷が認められる。一方，5号溝上層他から出土した鹿角には，刃器による加工痕が多数認められる。2号溝中層から出土した鹿角は，角座から切り離すために，回転させながら切り込みを入れた痕跡がある。5号溝からは，鹿角先端部を石器によって切り落とした後，研磨した骨角器（刀子柄の未製品？）が出土している。

(4) 遺構ごとの特徴

環濠部において，1，2，5号溝の出土量が多い。いずれの遺構もイヌの出土比率が最も高く，イノシシが続くことが特徴的である。そのなかで，他に比べ5号溝のみ，ニホンジカの出土比率が高い。但し，出土したニホンジカは枝角が最も多く，イヌやイノシシの四肢骨が多いことに対して，食料としてより骨角器の素材として搬入された可能性が高い。環濠部では，イルカ類，鰭脚類などの海棲哺乳類も出土している。

一方，環濠部以外では，イヌの出土量は少数にとどまり，イノシシの比率が高い。1995年の9号土坑は，ベラ科の一種やサメ類をはじめとする魚類が多く出土し，食料となった魚類が，イヌの餌となったか，住居近くのゴミ穴に廃棄されたことをうかがわせる。このような出土傾向を示す遺構は，他に石田高原地区の貝層で，数種の魚類が出土している。また，環濠部ではウシやウマが出土していないが，旧河道（弥生～古墳）から特にウマの歯が顎骨から遊離した状態で出土している。それらのうち，同一個体の歯がまとまって出土していることや四肢骨が出土していることが特筆される。

(5) 考　　察

A　イヌについて

環濠からイヌが多量に出土した（茂原・松井1995）。出土したイヌの大きさや形態は様々で，下顎が細身で湾曲の強い北方系の特徴を持つ個体も含まれ，縄文犬の系統に属す個体だけでなく，朝鮮半島や沿海州の系統に属す可能性を指摘した（茂原・松井　前掲書）。そうしたイヌの出土は環濠部に集中し，その他の旧河道や土坑などからの出土はわずかである（第117図－図6～7）。環濠部2号溝の一角には，貝層を伴う食料残滓の集中的な投棄が見られ，イヌの多くはそこから出土したものである。その他に，1号溝，5号溝からの出土も多い。上記3遺構から出土したイヌは，各部位がほぼ均等に出土し，特定の部位への偏りは見られない（表28）。出土した部位のうち，頭蓋骨，下顎骨，上

腕骨，橈骨，尺骨，大腿骨，脛骨，計41点について計測を行い，山内（1958）に基づき体高を求めた結果，最小36.3cm，最大47.1cm，平均体高42.3cmを得ることができた。この結果は，長谷部の分類によると，中小級が最多で，中級がそれに続く（長谷部1952）（第116図）。縄文時代は小級，中小級が多く，弥生時代になると，大阪府亀井遺跡の例など中級のイヌが出現し，やや大型化することが指摘されており（茂原1991），本例も同様の傾向が伺える。これらのイヌの骨は，散乱状態で出土し，四肢骨には解体痕や肉を削ぎ落とした痕跡，打ち割られた痕跡が見られるものが少なくなく，食用にされた可能性が高い。他に同一個体と考えられる一群があり，肉が付いた状態で破棄されたものと考えられる。

B　原の辻遺跡の動物利用と廃棄

原の辻遺跡の人々は，イヌの他に，イノシシ，イルカ，クジラ，アシカなどの哺乳類に動物性タンパク質を頼っていたと考えられる。一般的に，本州，四国，九州の縄文，弥生遺跡から出土する哺乳類は，イノシシとニホンジカが大部分を占める傾向が強い。しかし島嶼である壱岐では，野生の大型哺乳類に乏しく，逆に海棲哺乳類を捕獲することができた。哺乳類に比べて魚類の出土は少数に限られるが，出土魚種から見ると，沿岸だけでなく，積極的に沖へ進出していたと考えられる。また，出土量の少なさはゴミ穴や環濠部に投棄されることが少なく，おそらくイヌの餌になって集落内に食べ散らかされた結果，出土量が少なくなったと考えたい。それに対して，ニホンジカに代表されるシカ科は出土量が少なく，しかもその部位は鹿角や中手骨，中足骨に偏り，それらは骨角器の素材として使われ，加工痕を伴うものが多い。ニホンジカの大きさを凌駕する，アカシカと考えられる大きな鹿角も存在し，九州や朝鮮半島などから骨角器の素材として搬入されたものが多かったと考えられる。小型の中手骨，中足骨も出土し，ノロジカの可能性もあるが，顎骨が出土していないので，判別することができなかった。

一方，貝類や魚類は，海棲哺乳類と同様に，食料資源として獲得しやすかったと考えられるが，出土量はそれほど多くない。それは，消費量が少なかったと考えるよりも，遺構に残されなかったと考える方が妥当であろう。原ノ辻遺跡から出土した魚類は，環濠内部のゴミ穴や廃棄された住居跡床面であることから，大型の哺乳類が環濠部に捨てられたことが多かったことに対して，魚類は居住部に捨てられたり，集落内で多く飼われていたイヌの餌になっていたことが考えられる。淡水産のオイカワが出土していることから，島内で淡水漁労も行っていたことが言える。また，哺乳類でもカワウソが出土しており，海浜部のみならず，河川部における食料獲得活動が見られる。これら魚類やカワウソ，鳥類などは，イヌが環濠部に集中するのに対して，環濠部以外で出土する傾向にある。

他の弥生遺跡から出土した，従来イノシシとされていた個体に，ブタが含まれていた可能性が指摘されている。そこで原ノ辻遺跡出土試料について，遺伝子解析や安定同位体による食性分析を行ったが，ブタの存在を示唆する証拠は得られなかった。しかし，島嶼という環境や他の大陸との交流を示す遺物の存在から見て，原ノ辻でブタが飼われていた可能性を否定することはできず，今後のわれわれの課題としたい。

まとめ

原の辻遺跡から出土した動物遺存体は，イヌが最も多く，イノシシがそれに次ぐ。多くのイヌが外敵の侵入を知らせるために飼われ，時には人々の食料となっていたことも解体痕などから明らかである。魚骨の出土量が少なかったことは，多くの魚骨がイヌの餌となって集落内に散らばった結果と考えられよう。

環濠部ではイヌが多いのに対して，集落内の土坑では魚類が多くなることは，原の辻遺跡の人々が，ゴミの廃棄に空間的な使い分けをしていた可能性が高いことを示している。一ヶ所からの動物遺存体の出土で，集落全体の動物利用を論じることは，このような空間の使い分けがあったことを考えると，慎重にならざるを得ない。

シカ科が鹿角や中手骨，中足骨に集中することは，壱岐ではシカの生息が無かったか，あるいは少数で，食料としてより，骨角器の素材として集落内に搬入されたことを反映すると考えられよう。

（宮地淳子・松井章・丸山真史）

参考文献

近藤恵・松浦秀治・中井信之・中村俊夫・松井章　1992「出水貝塚縄文後期貝層出土ウマ遺存体の年代学的研究」『考古学と自然科学』第26号 pp. 61-71

茂原信生　1991「日本犬に見られる時代的形態変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第29集　国立歴史民俗博物館 pp. 89-108

茂原信生・松井章　1995「原の辻遺跡出土の動物遺存体」『原の辻遺跡　幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書１』長崎県教育委員会 pp. 189-208

武末純一　1995「朝鮮半島系の土器」『原の辻遺跡　幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書１』pp. 165-178

直良信夫　1970『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』日本中央競馬会 pp. 17-18

長谷部言人　1952「犬骨」『吉胡貝塚』文化庁 pp. 146-150

林田重幸　1974「日本在来馬の源流」『馬　日本古代文化の探究』社会思想社 pp. 215-262

松井章　1990「伊木力遺跡出土の動物遺存体」『伊木力遺跡』多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室 pp. 390-425

松井章・石黒直隆・本郷一美・南川雅男　2001「野生のブタ？飼育されたイノシシ？－考古学からみるイノシシとブタ」『イノシシと人間－共に生きる』古今書院 pp. 45-78

山内忠平　1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第７号　鹿児島大学 pp. 125-131

渡部琢磨・石黒直隆・森井泰子・中野益男・松井章・本郷一美・西本豊弘　2003「弥生時代の遺跡から出土したイノシシの遺伝的解析－AncientDNA 解析に基づく考察」『動物考古学』第20号　動物考古学研究会 pp. 1-14

表27　原の辻遺跡出土動物遺存体の種名表

棘皮動物門　Echinodermata
ウニ綱　Echinoidae
　ウニ類　Echinoidae gen. et sp. indet.

脊椎動物門　Vertebrata
軟骨魚綱　Chondrichthyes
　ネズミザメ目 Lamniformes
　　ネズミザメ科　Lamnidae
　　ネズミザメ　*Lamna ditropis*
　　サメ類　Lamniformes fam., gen. et sp. indet
　　エイ類　Rajiformes fam., gen. et sp. indet

硬骨魚綱　Osteichthyes
　コイ目　Cypriniformes
　　コイ科　Cyprinidae
　　オイカワ　*Zacco Platypus*
　カサゴ目　Scorpaeniformes
.et sp. indet るが、すると…、
　　フサカサゴ科　Scorpaenidae
　　フサカサゴ科の一種　Scorpaenidae gen. et sp. indet.
　　コチ科　Platycephalidae
　　コチ科の一種　Platycephalidae gen. et sp. Indet.
　タラ目　Gadiformes
　　タラ科　Gadidae
　　マダラ　*Gadus macrocephalus*
　スズキ目　Perciformes
　　フエダイ科　Lutjanidae
　　フエダイ科の一種　Lutjanidae gen. et sp. indet.
　　サバ科　Scombridae
　　サバ属の一種　Scombridae gen. et sp. indet.
.et sp. indet るが、すると…、
　　タイ科　Sparidae
　　マダイ　*Pagrus major*
　　ヘダイ　*Sparus sarba*
　　タイ科の一種　Sparidae gen. et sp. Indet.
　　ベラ科　Labroide
　　ベラ科の一種　Labroideigen. et sp. indet.
　フグ目　Teraodontoidae
　　フグ科　Teraodonidae
　　フグ科の一種　Teraodonidae gen. et sp. indet.
爬虫綱　REPTILIA
　ヘビ目　Serpentes
　　ヘビ目の一種　Serpentes, fam., gen. et sp. indet.
　カメ目　Chlonia
　　バタグールガメ科　Bataguridae
　　バタグールガメ科の一種
　　Bataguridae gen. et sp. indet.
両性綱　Urodela
　無尾目　Anura
　　カエル類　Anura, gen. et sp. indet.

鳥綱　Aves
　スズメ目　Passeriformes
　　カラス科　Corvidae
　　カラス属の一種　*corvus* sp.
　カモ目　Anseriformes
　　ガン・カモ科　Anatidae
　　ガン・カモ科の一種　Anatidae gen. et sp. indet.
　ミズナギドリ目　Procellariiformes
　　アホウドリ科　diomedidae
　　アホウドリ科の一種？
　　Diomedidae gen. et sp. indet.

哺乳綱　Mammalia
　齧歯目　Rodentia
　　ネズミ科　Muridae
　　クマネズミ属の一種　*Rattus* sp.
　　ネズミ科の一種　Muridae gen. et sp. indet.
　霊長目　Primates
　　ヒト科　Homonidae
　　ヒト　*Homo sapiens*
　食肉目　Carnivora
　　イヌ科　Canidae
　　イヌ　*canis familiaris*
　　イヌ科の一種　Canidae gen. et sp. indet.
　　タヌキ　*Nyctereutes procyonoides*
　　イタチ科　Mustelidae
　　カワウソ　*Lutra lutra*
　鰭脚目　Pinnipedia
　　アシカ科　Otariidae
　　ニホンアシカ　*Zaloplus californianus japonicus*
　　鰭脚目の一種　Pinnipedia fam., gen.et sp. indet.
　奇蹄目　Perissodactyla
　　ウマ科　Equidae
　　ウマ　*Equus caballus*
　偶蹄目　Artiodactyla
　　イノシシ科　Suidae
　　イノシシ　*Sus scrofa*
　　シカ科　Cervidae
　　ニホンジカ　*Cervus Nippon*
　　アカシカ？　*Cervus slaphus?*
　　ウシ科　Bovidae
　　ウシ　*Bos Taurus*
　クジラ目　Cetacea
　　イルカ科　Delphinidae
　　イルカ科の一種　Delphinidae gen. et sp. inde.
　　クジラ目の一種　Cetacea fam. et gen. Indet.

表28　集計表（哺乳類）

1993年度調査		頭蓋骨	上顎骨	下顎骨	椎骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	寛骨	大腿骨	脛骨	踵骨	中足骨	その他	計
		L M R	L R	L M R		L R	L R	L R	L R	L R	L R	L R	L R	L R	L R		
1号溝	イヌ		1 1	5 2	4		3 2	1 1	1 2		1	1 1	2		1	頭蓋骨7下顎骨1大腿骨1遊離歯48肋骨2	98
	タヌキ			2													2
	イノシシ			1	1	1	2 1					1	3			距骨(L)1指骨1中手骨／中足骨1遊離歯11	24
	ニホンジカ						1										1
	鰭脚類															不明2	2
	イルカ類				2												2
大溝／1号溝	イヌ		1	1 3				1				2 2	1			遊離歯1	12
	イノシシ				1		2	1				1	1	1		上腕骨1距骨(R)1遊離歯4腓骨(R)1	14
	ニホンジカ						1			1							2
	クジラ類				1											上顎骨もしくは下顎骨1	2
	イルカ類				3												3
2号溝	イヌ	4	1 1	15 8	60	7 2	10 5	2 4	7 4	2 1	5 5	5 7	9 6	1 2	3 3	頭蓋骨3尺骨1大腿骨2脛骨1腓骨1距骨(R)1中手骨／中足骨3除茎骨1指骨1遊離歯24肋骨46	26 4
	タヌキ															遊離歯4	4
	イノシシ	1 3 1	3 4	3 1 3	4	1 1	2 6	1	4 2	1	1 1	1 1	4 2			頭蓋骨2上顎骨1下顎骨1上腕骨2大腿骨2脛骨1腓骨1距骨1指骨2中手骨／中足骨4遊離歯29	97
	ニホンジカ						1						1 1			枝角4中手骨／中足骨2	9
	アカシカ？															枝角1	1
	ネズミ類															遊離歯3	3
	鰭脚類															不明9	9
	イルカ類	1			25												26
	クジラ類															不明1	1
大溝／2号溝	イヌ			1	1		1	1			1		1			遊離歯1	7
	タヌキ			1													1
	イノシシ	1	1 2	1	2	4	1		2					2		距骨(L)1遊離歯8	25
	ニホンジカ															枝角2中手骨8	10
4号溝	イヌ				3	1	1 1		2		1	1 1	2 1			上腕骨1腓骨(L)1肋骨7遊離歯1	24
	イノシシ		1		1											頭蓋骨1中足骨2	5
	鰭脚類						1	1				1				指骨2	5
	イルカ類				2												2
大溝／4号溝	イヌ			2 2	1		1	2	1		1	1		1		肋骨1遊離歯1	14
	イノシシ		1	1									1 1				4
5号溝	イヌ		1 1	8 5	11	2	6 8	5 6	3 3	1	3 2	5 4	6 4		1	上腕骨2大腿骨1脛骨2中手骨／中足骨2除茎骨1肋骨5遊離歯5	10 2
	タヌキ						1										1
	イノシシ	1 1 1	2	1 2	7	4 1	4 2	3 1	2 1	1	2	1 1	1 2	1		頭蓋骨2上顎骨1下顎骨4上腕骨1距骨(R)1中手骨／中足骨3肋骨1指骨1遊離歯9	65
	ニホンジカ								1						1	枝角35腓骨1	38
	鰭脚類							2	2							肋骨1不明11	16
	イルカ類				5											頭蓋骨1肋骨1	7
	クジラ類															肋骨？1不明1	2
6号溝	イルカ類				1												1
7号溝	イヌ			1													1
	イノシシ	1	1														2
	ニホンジカ						1										1
	鰭脚類															不明6	6
8号溝	イヌ					1											1
	イノシシ												1				1
9号溝	ニホンジカ															尺骨1	1
1995年度調査																	
7号土坑	ニホンジカ															枝角1	1
9号土坑	タヌキ												1 1				2
	イノシシ				3								1			指骨2肋骨1遊離歯1	8

		頭蓋骨			上顎骨		下顎骨			椎骨	肩甲骨		上腕骨		橈骨		尺骨		中手骨		寛骨		大腿骨		脛骨		踵骨		中足骨		その他	計
1996年度調査		L	M	R	L	R	L	M	R		L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
2号旧河道	イノシシ																1								1						遊離歯4	6
	ニホンジカ																				1											1
	ウシ																						1									1
	ウマ												1																			1
	クジラ類									1																					不明1	2
3号旧河道	イヌ						1		1																						遊離歯1	3
	タヌキ																														遊離歯1	1
	カワウソ												1																			1
	イノシシ			1	1	1	2		1	1		1	2	4	1		2		1		1	2	1			1					指骨1遊離歯18	41
	ニホンジカ																					1		1				1			枝角3中足骨1	7
	ウマ				1		1								1																遊離歯15	18
	海棲哺乳類																														不明1	1
4号旧河道	イノシシ																														イノシシ1	1
	ウシ															1															中手骨(R?)	2
	ウマ															1							1							1	遊離歯3	6
	クジラ類																														不明1	1
近世旧河道	イヌ						1																									1
	ニホンジカ																														枝角1	1
	ウシ															1				1						1				1	遊離歯1	5
	ウマ																		1												遊離歯1	2
1999年度調査																																
1号溝	イヌ									1															1							2
	タヌキ			2					1																						遊離歯1	4
	イノシシ	1	2	4	2	2	1		1	3		3		2			2		1	1	3	1			1		1		1		下顎骨1橈骨1腓骨(L)1距骨(R)2遊離歯11	48
	ニホンジカ																	1													枝角9	10
	ウシ																													1	指骨4中手骨／中足骨1	6
	ウマ																														遊離歯11	11
1号濠	ニホンアシカ													1																		1
2号旧河道	イヌ																1							1								2
	タヌキ									1																						1
	イノシシ	1				1	1	1	4	3		2	3	3	1	1		2	1						2	1					腓骨(R)1距骨(L)2指骨1遊離歯10	41
	ニホンジカ																							1	1		1				枝角1中足骨1	5
	ネズミ科																1														遊離歯1	2
	鰭脚類			1																											遊離歯2	3
	イルカ類									1																						1
	クジラ類																														不明1	1
	海棲哺乳類																														不明2	2
土器溜まり	イヌ				1																											1
	タヌキ						1																									1
	イノシシ				1					1		1	1				1														腓骨(L)1遊離歯16	22
	イルカ類									1																						1
2000年度調査																																
2号旧河道	イノシシ																														指骨1	1
土器溜	イノシシ																														遊離歯3	3
2002年度調査																																
高元	イノシシ																														下顎骨1遊離歯2	3
	ニホンジカ																														枝角2	2
	イルカ類									3																						3
石田高原	イヌ								1							1									1						遊離歯1	4
	イヌ科																														遊離歯1	1
	イノシシ			1			1							2	1	2		1			1				3						頭蓋骨1下顎骨1脛骨1遊離歯9	25
	ニホンジカ																					1										1
	ウシ																														遊離歯2	2
	ウマ																														遊離歯17	17
	鰭脚類																							1						1		2
	イルカ類									3																					不明1	4

表29　集計表（哺乳類以外）

1993年度調査		歯骨	主鰓蓋骨	擬鎖骨	椎骨	遊離歯	棘	計
集計表（哺乳類以外）		R	L	L/R		L/R		
1号溝	マダイ					1		1
2号溝	ウニ類						1	1
	サメ類				5			5
	タイ科					19		19
大溝／2号溝	サメ類				1			1
	タイ科		1		1			2
7号溝	サメ類					1		1

1995年度調査		貝殻	前上顎骨			歯骨		角骨	下咽頭骨	椎骨	遊離歯	計
集計表(哺乳類以外)		L/R	L	L/R	R	L	L/R	R		M	L/R	
7号土坑	サメ類									1		1
9号土坑	アワビ	1										1
	サメ類									9	1	10
	カサゴ類					1						1
	コチ									3		3
	ブリ属？				1							1
	マダイ							1				1
	ヘダイ										2	2
	タイ科						1			1		2
	サバ属									5		5
	ベラ科		2	1	1				8			12
	ヒラメ									1		1
	フグ科						1			4		5
	ヘビ類									1		1

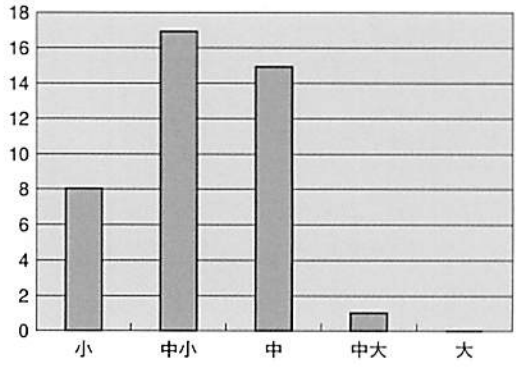
1996年度調査		上腕骨	大腿骨	椎骨	背甲板	腹甲板			遊離歯	計
集計表（哺乳類以外）		L	L	M	M	L	M	R	L/R	
2号旧河道	イシガメ／クサガメ		1		1		1			3
3号旧河道	サメ類			1					1	2
	カラス属	1								1
4号旧河道	イシガメ／クサガメ					1		2		3

1999年度調査		フタ	貝殻	歯骨	方骨	下咽頭骨	主鰓蓋骨	間鰓蓋骨	上擬鎖骨	尺骨	中手骨	椎骨	遊離歯	計
集計表（哺乳類以外）			L/R	R	L		R	R	L	R	L		L/R	
1号溝	ハマグリ		1											1
	サメ類											2		2
	マダイ			1	1		1	1						4
	ガン・カモ科									1				1
2号旧河道	マルタニシ		1											1
	サザエ	7												7
	サメ類												1	1
	タイ科								1					1
	コブダイ					1								1
土器溜	ガン・カモ科										1			1

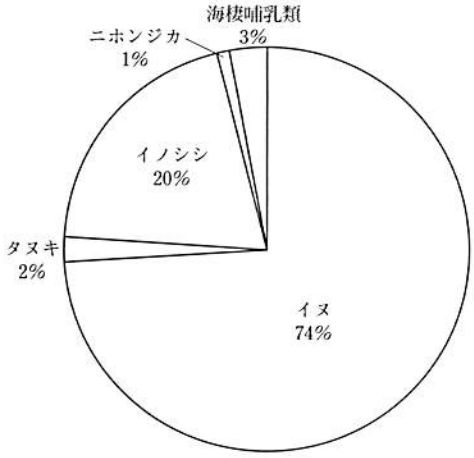
2002年度調査		前上顎骨		主上顎骨	歯骨	主鰓蓋骨	上咽頭歯	下咽頭骨		上腕骨	尺骨	椎骨	遊離歯	計
集計表（哺乳類以外）		L	R	R	L	L	L/R	R	M	R				
高元	サメ類												1	1
石田高原	サメ類											5	1	6
	ネズミザメ類											1		1
	エイ類											1		1
	オイカワ							1						1
	フサカサゴ科					1								1
	フエダイ科			1										1
	ベラ科						1		6					7
	マダイ			1										1
	マダラ		2											2
	フグ科	1	2		1									4
	カエル類									1				1
	アホウドリ？										1			1

表30　加工痕観察表

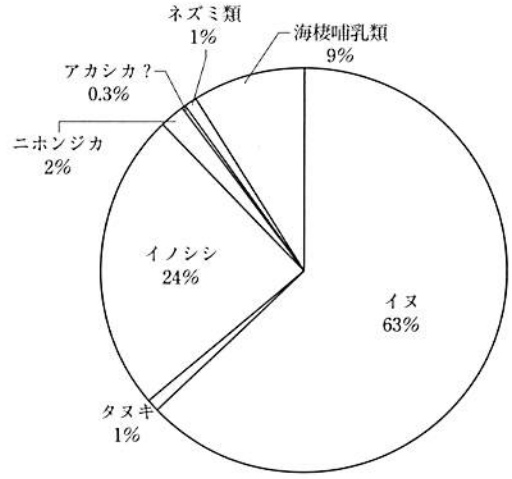
年次	遺構	時期	種	部位	部分	左右	備考	観察
1993	2号溝	弥生中期～古墳前期	ニホンジカ	角	第三分枝部	－		角幹を刃器で切断
		弥生中期～古墳前期	ニホンジカ	角	枝部	－		両端を切断・内部を穿孔
		弥生中期～古墳前期	ニホンジカ	角	角幹	左		角座から刃器で数回叩いて切断・分枝部も同様に切断
	4号溝	弥生中期～古墳前期	ニホンジカ	中手骨／中足骨	骨幹	－	未製品石鏃？	打ち割り後基部を削り出し
	5号溝	弥生中期～古墳前期	ニホンジカ	角	角座骨～第一分枝部	－		角座骨は刃器で叩いて切断・分枝部も数回叩いて切断
		弥生中期～古墳前期	ニホンジカ	角	先端部	－	未製品工具の柄？	刃器で分枝部を数回叩いて切断・表面は研磨・内部刳り抜こうとしている？
		弥生中期～古墳前期	ニホンジカ	角	先端部	－	未製品工具の柄？	表面を研磨・内部刳り抜き
		弥生中期～古墳前期	ニホンジカ	角	第一分枝部～第二分枝部	左		角座から刃器で切断・小型（幼獣？）
		弥生中期～古墳前期	ニホンジカ	角	角幹	－	未製品工具の柄？	第一分枝部直下を刃器で数回叩いて切断・先端部は・内部を穿孔
		弥生中期～古墳前期	ニホンジカ	角	角幹	－		刃器で切断・先端部は欠損・内部を刳り抜き
	5号溝排土	弥生中期～古墳前期？	ニホンジカ	角	角幹	－		刃器で数回叩いて切断
		弥生中期～古墳前期？	ニホンジカ	角	角幹	－		刃器で数回叩いて切断・一部が被熱し黒色化
	大溝／2号溝	弥生前期後葉～古墳前期	不明	四肢骨	骨幹	－	未製品	扁平に整形・表面に縦方向14条横3条の細い平行な線刻
		弥生前期後葉～古墳前期	ニホンジカ	角	先端部	－	未製品	刃器で枝がうち割られている・表面にも叩いた傷が残る
		弥生前期後葉～古墳前期	ニホンジカ	角	角座骨	－		頭蓋骨から刃器で切断
1996	3号旧河道	弥生前期後葉～中期末	ニホンジカ	角	角幹	左		叩き切りによる切断？・打ち割り？
		弥生前期後葉～中期末	ニホンジカ	角	先端部	－		刃器で数回叩いて切断
1999	1号溝	古墳前期	ニホンジカ	角	角幹	右	未製品？工具の柄？	刃器で数回叩いて切断
		古墳前期	ニホンジカ	角	角幹～先端部	－		刃器で叩き切り・片側端部にくびれを作る
		古墳前期	ニホンジカ	角	角座	－	落角	刃器で数回叩いて切断・縦方向にも切断途中
		古墳前期	ニホンジカ	角	角幹	－		縦割り？・一部刃器で叩く



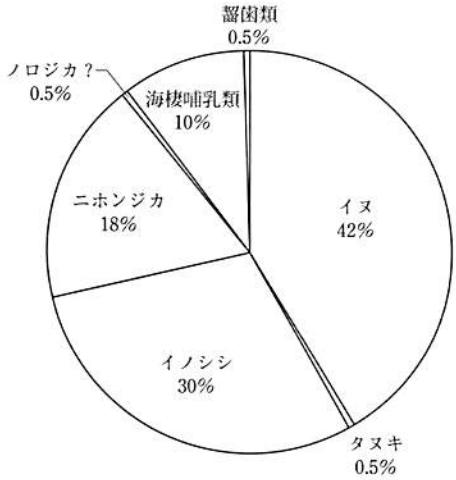
第116図　イヌのサイズ別出土量



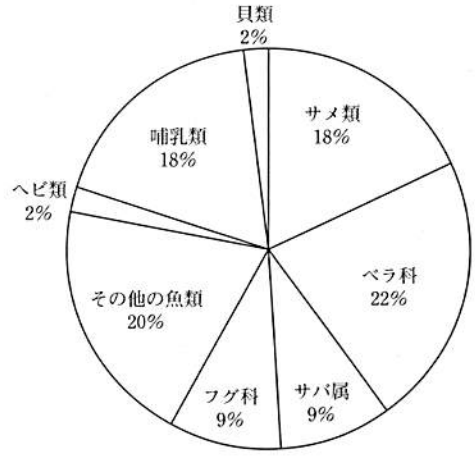
1号溝（N＝119）



2号溝（N＝398）



5号溝（N＝215）



9号土坑（N＝55）

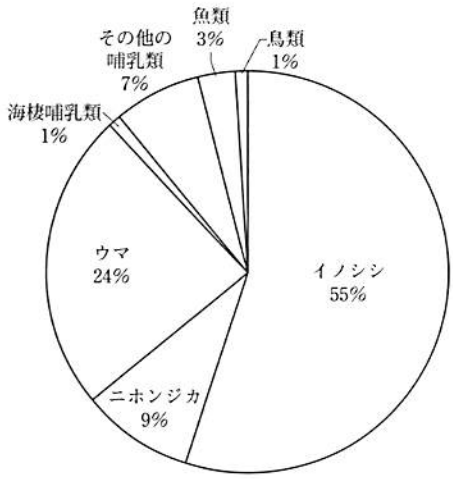
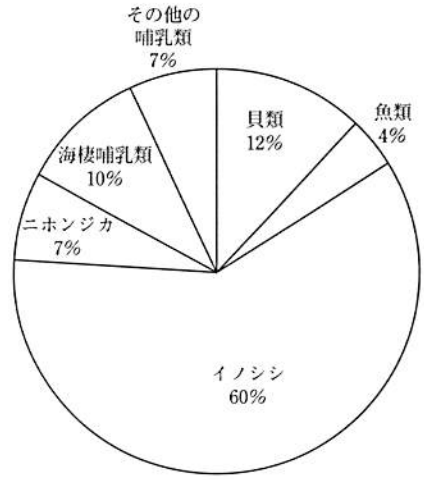
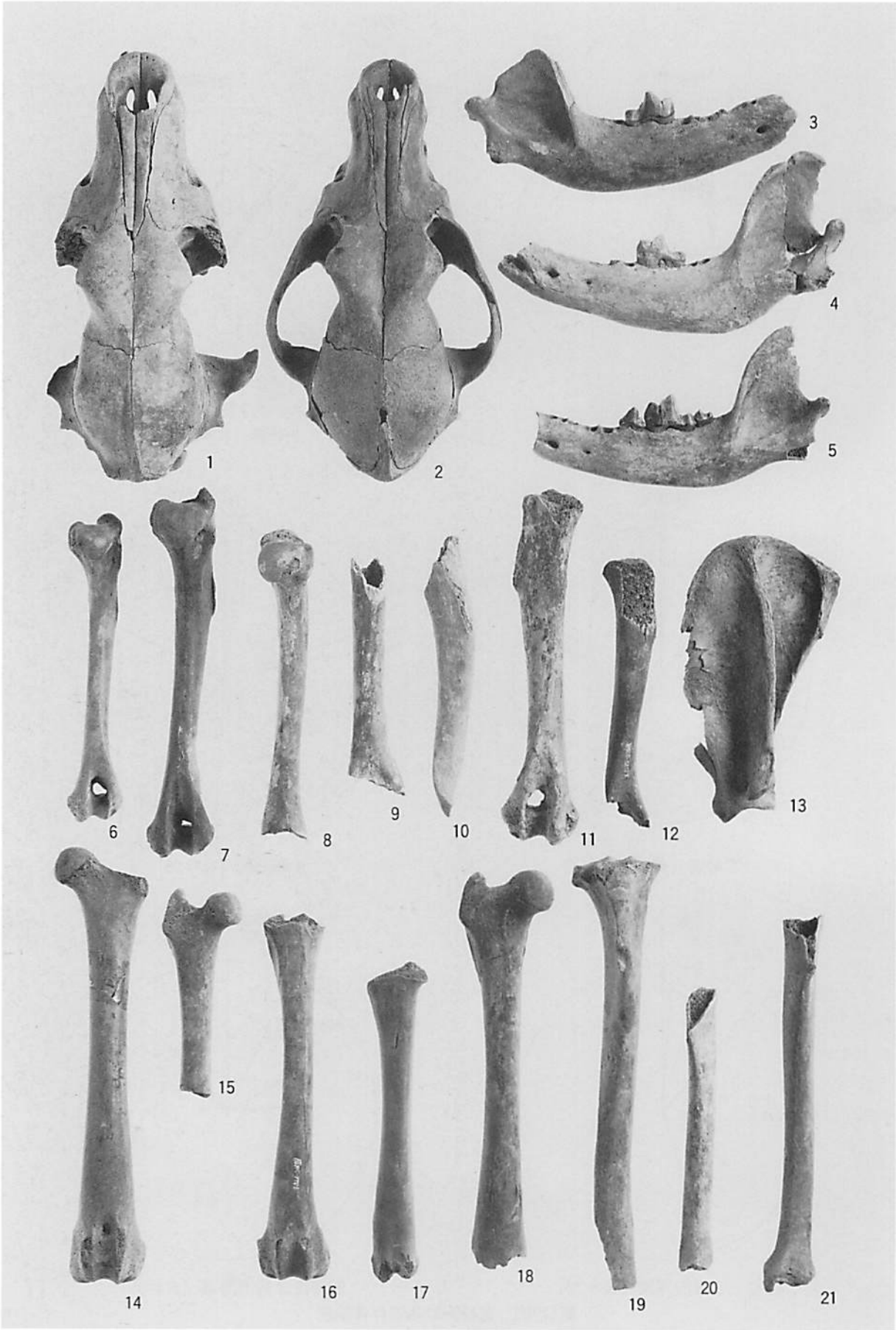


図6　3号旧河道（N＝75）



99年度2号旧河道（N＝69）

第117図　遺構別動物遺存体組成



PL. 22　イヌ

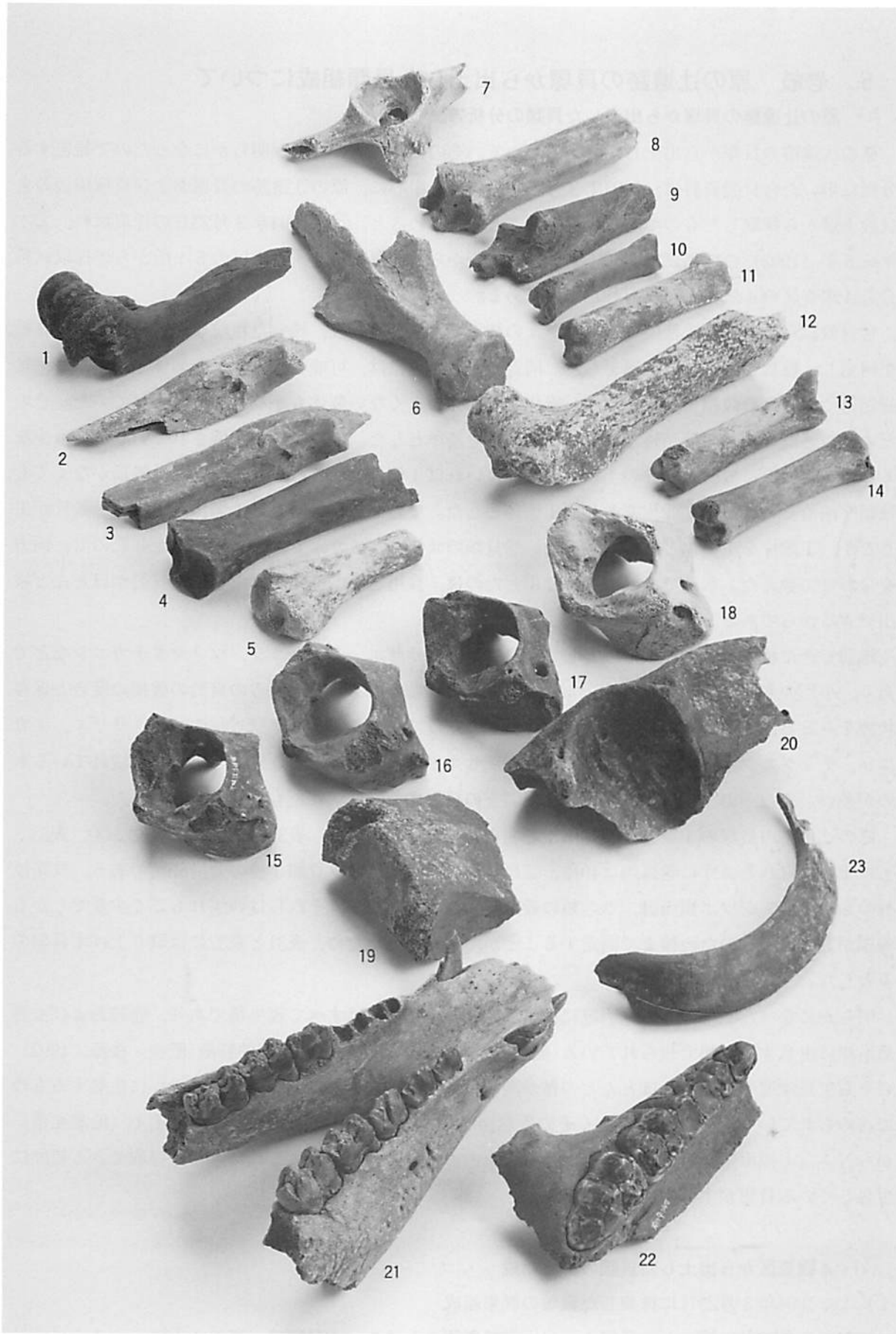
1・2頭蓋骨、3下顎骨（右）、4・5下顎骨（左）、6・7上腕骨（右）、8・12上腕骨（左）、13肩甲骨（左）、14大腿骨（左）、15～18大腿骨（右）、19・20脛骨（右）、21脛骨（左）

PL. 23　鹿角加工

1・2加工痕、3・6刀子柄？未製品、7端材、8～14未製品、15骨鏃未製品

PL. 24　鰭脚類

13橈骨（右），4・5上腕骨（右），6・7尺骨（左），8・9大腿骨（左），10・11指骨，12・13肋骨



PL. 25　イノシシ

1・8・12上腕骨（右）、2・3尺骨（右）、4・5橈骨（右）、6肩甲骨（左）、7寛骨（右）、9踵骨（左）、10・11・13・14中手骨、15～18環椎、19後頭骨、20前頭骨（右）、21下顎骨、22上顎骨（右）、23犬歯

5．壱岐　原の辻遺跡の貝塚から出土した貝類組成について

(1) 原の辻遺跡の貝塚から出土した貝類の分析方法

原の辻遺跡の貝塚から出土した貝類について，その種類組成の特徴が明らかになったので報告する。分析に用いた含貝殻資料は，1994年３月23日の資料を中心に，原の辻遺跡の貝塚および貝塚周辺の含貝殻土層から採取したものである。調査区ごとにまとめると，①：1994年３月23日の採取試料，②：平成５年（1993）の採集試料，③：Ｐ区の８ヶ所からの採取試料，④：Ｔ区の５ヶ所からの採取試料，合計４調査区の４試料から得られたものである。

含貝殻試料は自然乾燥後，４㎜メッシュの篩上で水洗・乾燥後，残った粗粒な試料に含まれて貝殻を同定し，種類ごとに計数処理をした。同定や計数処理には，可能な限り完全な個体を用いたが，貝殻が薄く弱いため破損をしていたり，風化して保存のよくない個体もかなり多く含まれていた。そのため計数処理には，殻頂が残されていた個体数を基準とした。中には殻頂が壊されている個体も少なくなかった。そこで殻が５分の１以上残されていれば１個体として計数した。また，殻頂がなくても種類を決める特徴を残す殻片であれば１個体とした。なお，二枚貝類では１個体から左右２殻片が生じるが，１殻片を１個体として計数した。巻貝類のサザエとスガイでは殻と蓋が出土したので，両方を合わせて数えた。水洗で４㎜の篩を使用したのは，食用として採集された小形の貝殻がほとんど検出できるからである。

識別できた種類は，大形のものとしてクロアワビ，サザエ，テングニシ，ツノマタナガニシなどであり，小形のものとしてムギガイ，ミツカドカタビラなどである。それらの貝殻の破損の度合と保存状態をみると，大形のものほど殻の破損が激しくなっていた。例えばアワビ科の一種，サザエ，アカニシ，テングニシ，イガイ，イタヤガイ，ムラサキガイなどでは殻が５分の１以下まで壊れているものが多い。また，中～小形の巻貝には発掘調査の採取する際に壊れたものが多くみられた。

原の辻遺跡の貝塚の４調査区から出土し明らかになった貝類は，表31：①，②と表32：③，表33：④にまとめられるように巻貝類は40種，二枚貝類が24種とヒザラ貝類１種の合計65種である。貝類以外のものではフジツボ類の殻，ウニ類の殻と棘片が出土したが，それらはいずれもごく少量でしかも破損が著しい。そのため種まで同定することができなかったため，表31と表32には取り上げず貝類のみとした。

明らかになった65種のうち，明瞭に種まで確認できた59種はすべて現生種であり，壱岐および玄界灘沿岸に生息する貝類で知られている（奥谷編，2000）。しかも各種の生態的特徴（肥後・後藤，1993）のうち生息深度をみると，ほとんどの種が潮間帯（Ｔ１－３）から上浅海帯（Ｎ１）に生息するもので占められている。もう少し詳しくその生息深度をみると，第118図に示すようにＴ１（低潮亜帯）からＮ１（上浅海帯）に生息する種が過半数を占めていて，干潮時になれば容易く採取できる範囲に生息している貝類が主体となっている。

(2) ４調査区から出土した貝類の群集組成

１）①：1994年３月23日に採集した貝類の群集組成

1994年３月23日に採集した貝塚より出土資料で明らかになった貝類は，表31：①に示すように巻貝類34種，二枚貝類19種，ヒザラ貝類１種の合計54種であった。

それぞれの種の生態的な特徴（生息域，生息深度，底質）を検討すると，松島（1984）が記載した海成沖積層中の内湾から外洋沿岸に分布する貝類群集に，それぞれ対応する群集構成種であることが明らかになった。すなわち，(a)沿岸岩礁性群集，(b)沿岸砂底群集，(c)内湾砂底群集，(d)干潟群集，(e)淡水域群集を構成する貝類の遺骸よりなっている（第119図：①）。

以下に各貝類群集の構成種とその特徴を記す。

(a)沿岸岩礁性群集

クロアワビ，マツバガイ，イシダタミ，クボガイ，クマノコガイ，ヘソアキクボガイ，サザエ，スガイ，イボニシなどの巻貝類が圧倒的に多く，数は少ないが二枚貝類のコベルトフネガイ，カリガネエガイ，イガイ，オハグロガキとヒザラガイ類のヒザラガイの１種などが明らかになった。これらの貝類は，外海に面した岩礁海岸の潮間帯（Ｔ１～３）から潮下帯（Ｎ１）に生息する種である。

(b)沿岸砂底群集

タマキガイ，チョウセンハマグリ，ミツカドカタビラ，ヒメツメタ，テングニシ，ツノマタナガニシの６種が外海に面した沿岸砂質底に生息する貝類である。小形のミツカドカタビラ以外の貝類は，いずれも大形で食べることができる。中でもチョウセンハマグリとタマキガイは食用に適しているがわずか数個体しかなく，普通に採取出来るような砂浜がなかったことが考えられる。

(c)内湾砂底群集

内湾砂底群集はハマグリ，カガミガイ，サルボウ，アサリ，バカガイ，ムラサキガイなどの種で構成する内湾を代表する貝類群集である。内湾の砂浜では最も普通に分布する貝類群集であるが，原の辻遺跡の貝塚の調査区①からは，前述の沿岸砂底群集と同様にその出土が少ない。壱岐には内湾砂底群集の生息するような典型的な砂浜の発達する内湾が形成されなかったことを示唆する。

(d)干潟群集

内湾の湾奥部の泥質干潟に分布する貝類群集で，マガキ，ハイガイ，オキシジミ，ウネナシトマヤガイ，イボウミニナ，ウミニナなどの貝類で構成される。原の辻遺跡の貝塚の調査区①からは，オキシジミ，イソシジミ，ウミニナ，カワアイ，ヘナタリなどは出土しているが，主要な構成種のマガキとハイガイが見られず，上述のように典型的な内湾干潟の形成がなかったことを物語っている。

(e)淡水域群集

マルタニシ，カワニナなど水田や湖沼，河川に生息する貝類で構成する群集である。原の辻遺跡周辺を取り囲むように発達する，低地の水田や河川に分布していたことを示している。

以上(a)～(e)の貝類群集の出土組成をみると，(a)沿岸岩礁性群集は30種で56％，(b)沿岸砂底群集は６種で11％，(c)内湾砂底群集は６種で11％，(d)干潟群集も６種で11％，(e)淡水域群集は２種で４％，その他が４種で７％となる（第119図：①）。したがって，沿岸岩礁性群集の貝類が最も大量に採取され食用となっていたことを示す。

２）②：平成５年（1993）に採集した貝類の群集組成

平成５年度に採集した貝塚資料で明らかになった貝類は，表31：②に示すように巻貝類21種，二枚貝類９種の合計30種であった。

それぞれの種の生態的な特徴を①と同様に検討すると，海成沖積層中の外海沿岸から内湾に生息する貝類群集にそれぞれ対応する(a)沿岸岩礁性群集，(b)沿岸砂底群集，(c)内湾砂底群集，(d)干潟群集，

(e)淡水域群集を構成する貝類の遺骸であることが明らかになった（第119図：②）。

(a)沿岸岩礁性群集

クロアワビ，マツバガイ，クボガイ，クマノコガイ，ヘソアキクボガイ，サザエ，スガイ，イボニシなどの巻貝類が圧倒的に多く，二枚貝類ではイガイ，オハグロガキなどが明らかになった。これらの貝類の出土状態は調査区①とほぼ同様な傾向を示す。

(b)沿岸砂底群集

わずかイタヤガイの１種１個体だけを確認した。貝殻は大きく破損している。出土した資料全体から判断して，偶然に採取されたイタヤガイと考えられる。

(c)内湾砂底群集

明らかになった種類はハマグリ，バカガイ，ムラサキガイの３種である。小規模な内湾の砂浜で生息していた内湾砂底群集構成種の一部であろう。原の辻遺跡の貝塚の調査区①と同様な出土状態を示し，内湾砂底群集が分布するような典型的な砂浜の発達する内湾は形成されなかったことを示唆する。

(d)干潟群集

出土した干潟群集の構成種は，マガキ，オキシジミ，イボウミニナ，ウミニナ，カワアイの５種である。主要な構成種のマガキ，オキシジミはわずかしか出土していないが，イボウミニナとウミニナはかなりの数が確認できた。小規模な内湾のわずかに存在する干潟で密集して生息していたのを採取した可能性も考えられる。

(e)淡水域群集

カワニナとカワニナの一種を確認した。原の辻遺跡周辺の低地の河川に生息していたものを採取したと考えられる。

以上(a)～(e)の貝類群集の出土組成をみると，(a)沿岸岩礁性群集は17種で57%，(b)沿岸砂底群集は１種で３%，(c)内湾砂底群集は３種で10%，(d)干潟群集は５種で17%，(e)淡水域群集は１種で３%，その他が３種で10%となる（第119図：②）。したがって，①と同じ沿岸岩礁性群集の貝類が最も大量に採取されて食用となっていたことを示す。

３）③：Ｐ区で採集した貝類の群集組成

Ｐ区で採集した貝塚資料で明らかになった貝類は，表31：③に示すように巻貝類20種，二枚貝類９種の合計29種であった。

それぞれの種の生態的な特徴を①と同様に検討すると，海成沖積層中の外海沿岸から内湾に生息する貝類群集にそれぞれ対応する(a)沿岸岩礁性群集，(b)沿岸砂底群集，(c)内湾砂底群集，(d)干潟群集，(e)淡水域群集を構成する貝類の遺骸であることが明らかになった（第119図：③）。

(a)沿岸岩礁性群集

マツバガイ，クボガイ，クマノコガイ，ヒメクボガイ，ヘソアキクボガイ，サザエ，スガイ，イボニシ，イボニシなどの巻貝類が圧倒的に多く出土し，二枚貝類ではイガイ，ケガキ，キクザルなどが明らかになった。これらの沿岸岩礁性群集の出土状態は調査区①や②とほぼ同様な傾向を示す。

(b)沿岸砂底群集

わずかチョウセンハマグリ，キイロダカラの２種４個体を確認した。出土した資料全体から判断して，②と同様にわずか採取されたに過ぎない。

(c)内湾砂底群集

明らかになった種類はハマグリ，サルボウ，ツメタガイ，アカニシの４種である。小規模な内湾の砂浜で生息していた内湾砂底群集の構成種の一部であろう。出土状況は調査区①や②と同様であり，内湾砂底群集が分布するような典型的な砂浜の発達する内湾は形成されなかったことを示唆する。

(d)干潟群集

出土した干潟群集の構成種は，オキシジミ，オオノガイ，ウミニナ，ヘナタリの４種である。本群集主要な構成種のオキシジミとウミニナは少ししか出土していない。調査区②と同様に小規模な内湾の干潟から採取した可能性も考えられる。

(e)淡水域群集

マルタニシとカワニナを確認した。原の辻遺跡周辺の低地の河川に分布していたことを採取したものと考えられる。

以上(a)～(e)の貝類群集の出土組成をみると，(a)沿岸岩礁性群集は15種で51％，(b)沿岸砂底群集は２種で７％，(c)内湾砂底群集は４種で14％，(d)干潟群集も４種で14％，(e)淡水域群集は２種で７％，その他が２種で７％となる（第119図：③）。したがって，調査区①と②同じ沿岸岩礁性群集の貝類が過半数を占め，大量に採取され食用となっていたことを示す。

４）④：Ｔ区で採集した貝類の群集組成

Ｔ区で採集した貝塚資料で明らかになった貝類は，表33：④に示すように巻貝類17種，二枚貝類５種の合計22種であった。

それぞれの種の生態的な特徴を①と同様に検討すると，海成沖積層中の外海沿岸から内湾に生息する貝類群集にそれぞれ対応する(a)沿岸岩礁性群集，(b)沿岸砂底群集，(c)内湾砂底群集，(d)干潟群集を構成する貝類の遺骸であることが明らかになった（第119図：④）。

(a)沿岸岩礁性群集

マツバガイ，クボガイ，クマノコガイ，ヘソアキクボガイ，サザエ，スガイ，イボニシ，レイシガイなど巻貝類が圧倒的に多く，二枚貝類ではイガイ，オハグロガキが明らかになった。これらの貝類の出土状態は調査区①や②，③とほぼ同様な傾向を示す。

(b)沿岸砂底群集

わずかにチョウセンハマグリとナガニシ？の２種２個体だけを確認した。出土した貝類の全体からみて，偶然に採取されたものと考えられる。

(c)内湾砂底群集

明らかになった種類はカガミガイ，バイ，アカニシの３種である。小さな内湾の砂浜で生息していた砂底群集構成種の一部であろう。原の辻遺跡の貝塚の調査区①や②，③と同様な出土状態を示し，典型的な内湾砂底群集が分布するような砂浜の発達する内湾ではなかったことといえよう。

(d)干潟群集

出土した干潟群集の構成種は，ウミニナ，カワアイの２種12個体である。わずかな出土からみて小規模な内湾の干潟でもの生息していたのを採取した可能性も考えられる。

(e)淡水域群集

調査区①や②，③では出土していた本群集の貝類がここではまったく確認できなかった。

以上(a)～(d)の貝類群集の出土組成をみると，(a)沿岸岩礁性群集は14種で64％，(b)沿岸砂底群集は２種で９％，(c)内湾砂底群集は３種で14％，(d)干潟群集は２種で９％，その他が１種で４％となる（第119図：④)。したがって，調査区①や②，③に比べて沿岸岩礁性群集の貝類がより大量に採取されて食用となっていたことを示す。

以上，原の辻遺跡の貝塚４調査区から出土した貝類の群集組成をまとめると，第119図：①～④のようになる。４調査区とも沿岸岩礁性群集が全体の51～64％で，平均すると57％となっていて過半数を占める。沿岸砂底群集は３～11％となり，平均では7.5％となる。内湾砂底群集は10～14％となり，平均では12.5％である。干潟群集は11～17％となり，平均では14％を示す。淡水域群集は④のＴ区では欠き，０～７％となり，平均では3.5％とわずか含まれる。このような貝類組成から判断して壱岐は玄界灘に位置し，岩礁海岸のよく発達する海岸環境を示しているといえよう。

現在の壱岐の海岸を眺めたとき，大部分は岩礁海岸が発達している。わずかに幡鉾川が注ぐ内海や谷江川が流れ込む瀬戸浦，さらに半城湾や湯本湾などの湾奥には小規模な砂浜が，さらにその浜奥の河口にはわずかな泥質な干潟がみられる程度である。そのため内湾砂底群集と干潟群集にとって生息しにくい環境となっていたものといえよう。まして外海に面した砂浜海岸は筒城浜が知られる程度で，ほとんど分布してなく，沿岸砂底群集にとってまったく恵まれない海岸環境となっていたと考えられる。

(3) ４調査区から出土した貝類の種組成

次に４調査区から出土した貝類の中で，種まで確認できた59種にうち出土した個体数の多い貝類に注目し，各調査区で全体の２％以上となった種類をまとめると第120図のようになる。

１）①：1994年３月23日に採集した貝類の種組成

最も多く出土した種はスガイの490個で44％，つぎにサザエの175個で16％，ついでウミニナの141個で13％，ヘソアキクボガイの41個で４％，イボニシの30個で３％，クマノコガイの25個で２％，イガイの18個で２％となる。この中でウミニナ以外の種はすべて沿岸岩礁性群集の構成種となり71％に達し，わずかに干潟群集構成種のウミニナが13％を占めている。なお，アワビ科の一種が多数破片として混じり出土している。アワビの仲間は岩礁種であることから，この種類が確認できれば本地点の種類組成は，これ以上に沿岸岩礁性群集が大部分を占めることになる。

２）②：平成５年（1993）に採集した貝類の種組成

最も多かった種はスガイの932個で51％，つぎにサザエの225個で12％，ついでウミニナの145個で８％，クマノコガイの88個で５％，クロアワビの55個で３％，レイシガイの55個で３％，コシダカガンガラの53個で３％，イボウミニナの45個の２％，イガイの41個で２％の順となる。この中でウミニナとイボウミニナを除く，他の種はすべて沿岸岩礁性群集の構成種となり79％を占め，わずかに干潟群集構成種のウミニナとイボウミニナが10％となっている。なお，本調査区でもアワビ科の一種の破片が多数出土している。アワビの仲間は岩礁種であることから，この種類が確認できれば本地点の種類組成は，いま以上に沿岸岩礁性群集がほとんどを占めることになる。

３）③：Ｐ区で採集した貝類の種組成

最も多かった種はサザエの107個で37％，スガイの73個で26％，つぎにクマノコガイの19個で７％，

ついでウミニナの15個で５％，マツバガイの11個で４％，イガイの９個で３％，ヒメクボガイの６個で２％の順となる。この中でウミニナを除く，他の種はすべて沿岸岩礁性群集の構成種で79％となり，干潟群集のウミニナがわずか５％混じっている。なお，本調査区でも上述の調査区①と②と同様にアワビ科の一種の破片が出土していて，沿岸岩礁性群集の貝類が卓越して出土している。

４）④：Ｔ区で採集した貝類の種組成

最も多く出土した種はスガイの39個で40％，つぎにサザエの14個で14％，ついでウミニナの11個で11％，イボニシの６個で６％，ヘソアキクボガイの５個で５％，マツバガイの５個で５％，クボガイの４個で４％，クマノコガイの３個の３％，イガイの２個で２％の順となる。この中でウミニナを除く，他の種はすべて沿岸岩礁性群集の構成種となり80％を占める。わずかに干潟群集のウミニナが含まれる。

以上，４調査区から出土した貝類の種組成は，第120図：①～④のようになる。４調査区とも共通して沿岸岩礁性群集の構成種が大半の80％を占めており，常に食用に採集された貝類はスガイ，サザエ，アワビの仲間とニシキウズガイ科の仲間のコシダカガンガラ，オオコシダカガンガラ，ヒメクボガイ，クマノカガイ，クボガイ，ヘソアキクボガイなどで，それらが大量に採られていたことが分る。このような種組成から壱岐の海岸は，岩礁海岸の発達する海岸環境であったことを具体的な数値で示すことができた。

⑷ まとめにかえて

原の辻遺跡の貝塚を中心に４ヶ所の調査区から出土し明らかになった貝類は，巻貝類は40種，二枚貝類が24種とヒザラ貝類１種の合計65種である（表31～33）。

この65種のうち，明瞭に種まで確認できた59種はすべて現生種であり，壱岐および玄界灘沿岸に生息する貝類である。しかも各種の生態的特徴のうち生息深度をみると，ほとんどの貝類は第118図に示すようにＴ１（低潮亜帯）からＮ１（上浅海帯）に生息する種が過半数を占めている。そのため食用になる貝類が，干潮時になれば簡単に採取できる。

同定できた59種の生態的特徴をまとめると，松島（1984）が記載した海成沖積層の内湾から外洋沿岸に分布する５つの貝類群集の沿岸岩礁性群集，沿岸砂底群集，内湾砂底群集，干潟群集，淡水域群集の構成種であることが明らかになった（第119図）。各群集の組成は沿岸岩礁性群集が全体の57％となっていて過半数を占める。沿岸砂底群集は7.5％，内湾砂底群集は12.5％，干潟群集は14％，淡水域群集は3.5％となる。このような貝類組成から判断して，壱岐は玄界灘に位置し岩礁海岸のよく発達する海岸地形を生みだしていた。砂浜や泥質干潟の広がる内湾環境はほとんど形成されなかった。

４ヶ所の調査区から出土した59種の種組成は，第120図に示すように４調査区とも共通して沿岸岩礁性群集の構成種が大半の80％を占める。その中で食用に採集された貝類はスガイ，サザエ，アワビの仲間とニシキウズガイ科の仲間のコシダカガンガラ，オオコシダカガンガラ，ヒメクボガイ，クマノカガイ，クボガイ，ヘソアキクボガイなどであり，それらが大量に採られていた。このような貝類の種組成からみて壱岐の海岸は，広く岩礁海岸の発達する環境となっていたことを示している。

謝辞：本稿をまとめるに当たり原の辻遺跡の発掘調査によって出土した貝類資料と関連資料を提供頂き，発表の機会を与えて下さった長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所の福田一志氏と中尾篤志氏，

奈良文化財研究所埋蔵文化財センターの松井章氏に対し，記して，深く感謝するしだいである。本報告に用いた貝類の撮影及び引伸ばしをして下さった神奈川県立生命の星・地球博物館の田口公則氏と貝類の資料整理をして下さった同博物館古生物ボランティアの川名ひろみ氏には大変お世話になり，記して，謝意を申し上げる。

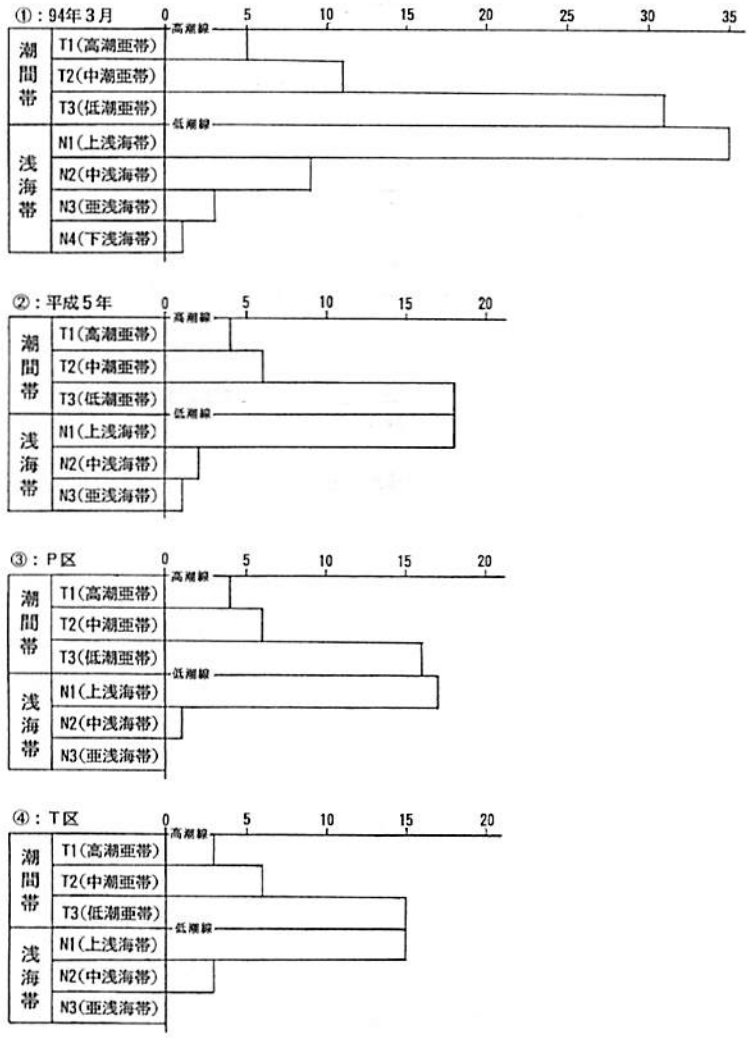
（松島義章）

文献

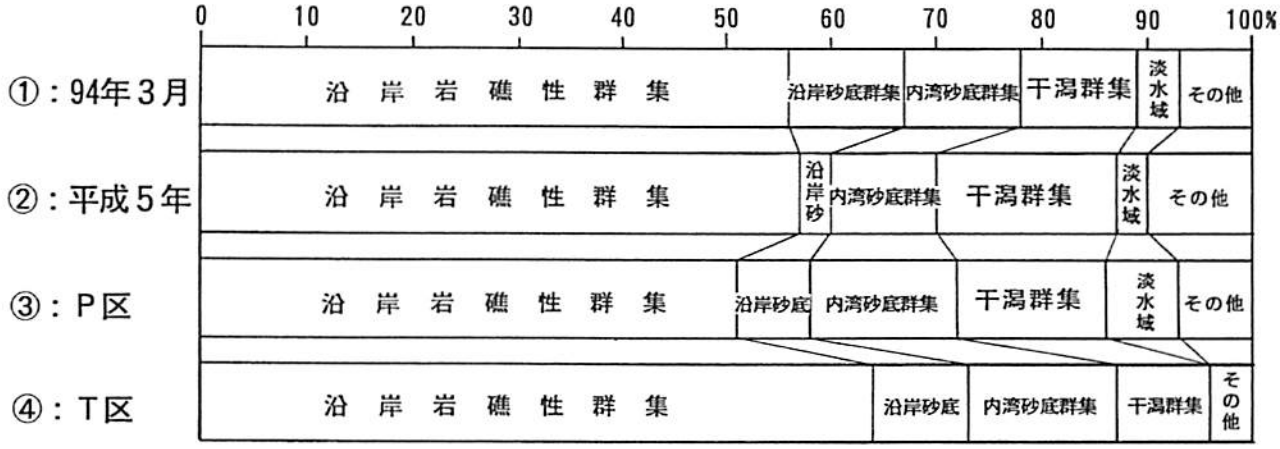
肥後俊一・後藤芳央（編著）1993．日本及び周辺地域産軟体動物総目録．693pp，エル貝類出版局．

松島義章　1984．日本列島における後氷期の浅海性貝類群集—特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷—．神奈川県立博物館研究報告（自然科学），(15),37-109.

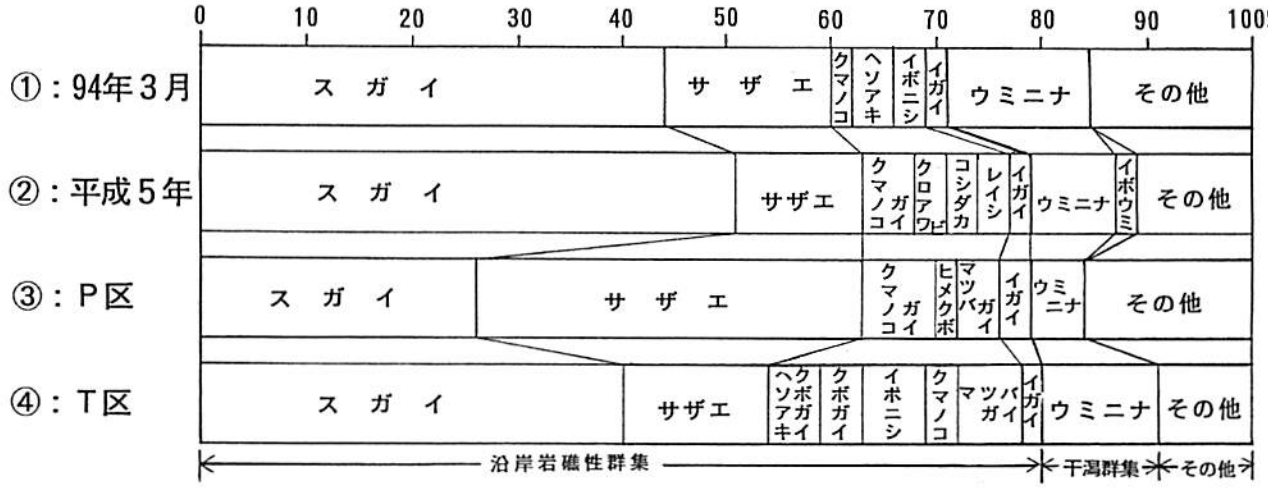
奥谷喬司（編著）2000．日本近海産貝類図鑑．1173pp，東海大学出版局．



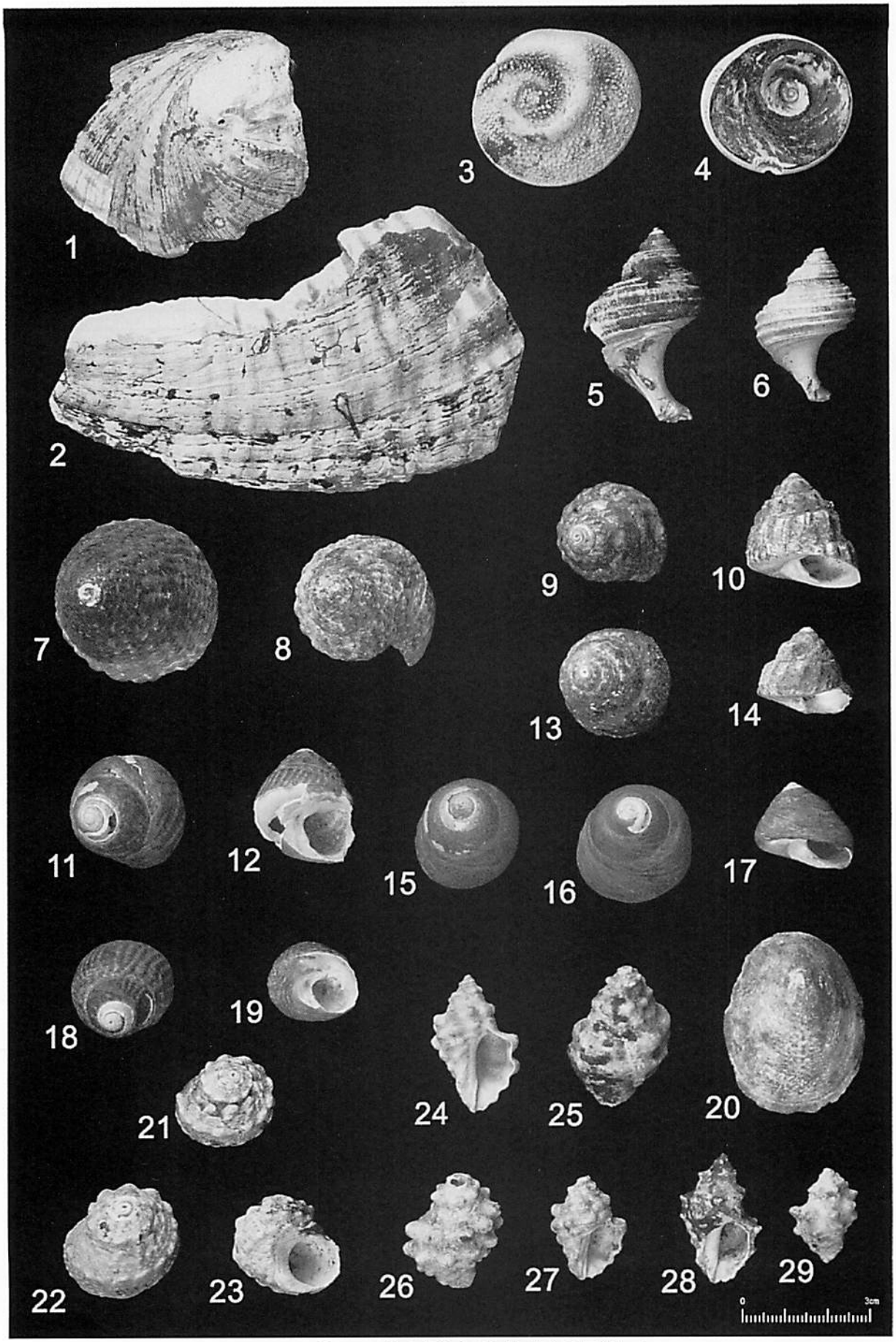
第118図　原の辻遺跡の4か所の調査区から出土した貝類の生息深度



第119図　原の辻遺跡の４ヶ所の調査区から出土した貝類の群集組成

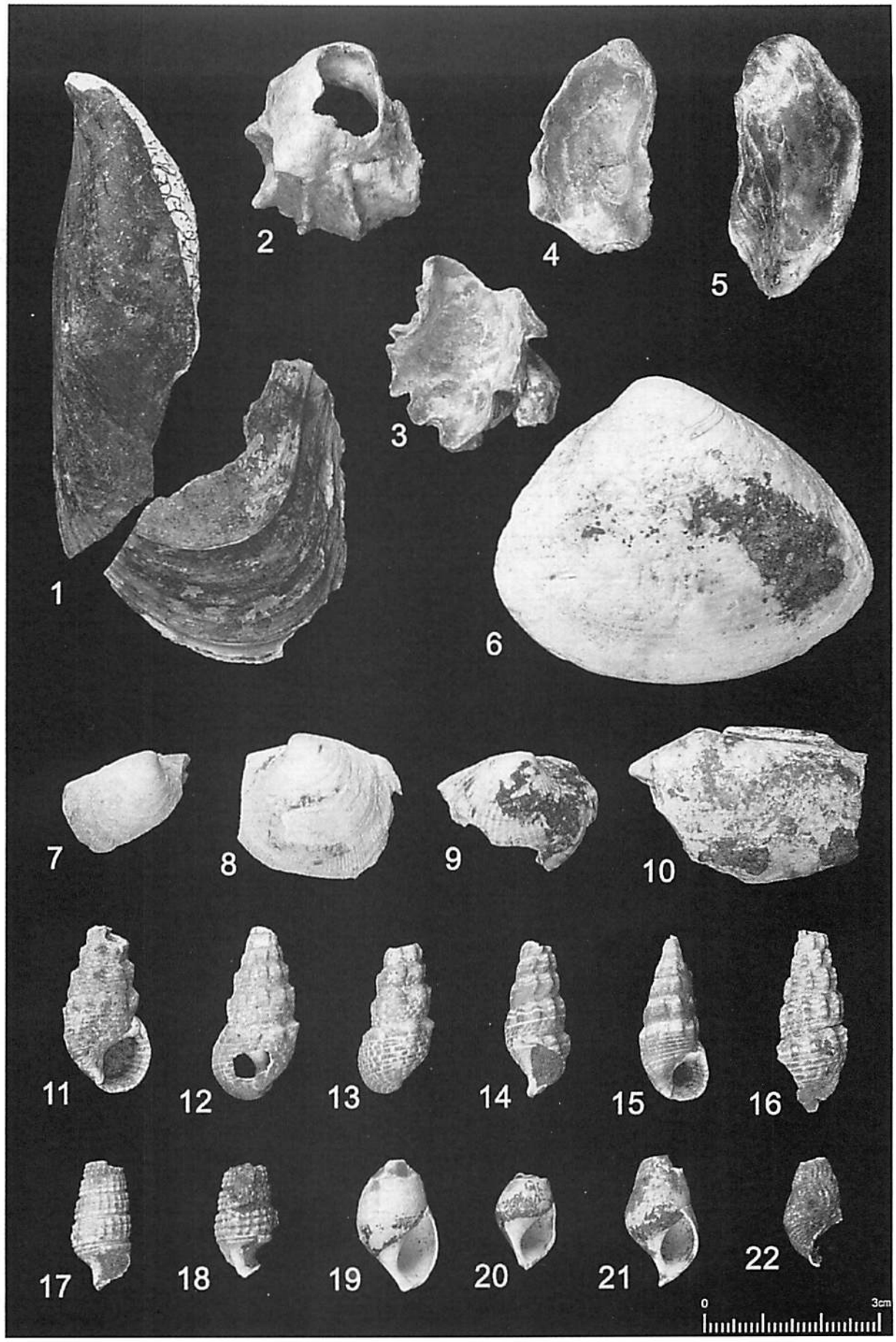


第120図　原の辻遺跡の４ヶ所の調査区から出土した主要貝類の種組成



PL. 26　②：Ｈ５年に採取した貝塚出土の貝類－１

1、2：クロアワビ（cf. *Nordotis discus*）、3、4：サザエの蓋（*Batillus cornutus*）、5、6：サザエ（*Batillus cornutus*）、7、8：オオコシダカガンガラ（*Omphalius pfeiffericorpenteri*）、9、10：ヘソアキクボガイ（*Chlorostoma turbinate*）、11、12：クボガイ（*Chlorostoma lischkei*）、13、14：コシダカガンガラ（*Omphalius rusticus*）、15～17：クマノコガイ（*Chlorostoma xanthostigma*）、18、19：ヒメクボガイ（*Omphalius nigerrima*）、20：マツバガイ（*Cellana nigrolineate*）、21～23：スガイ（*Lunella coronata coreensis*）、24、25：イボニシ（*Thais clavigera*）、26、27：レイシガイ（*Thais bronni*）、28、29：ウニレイシ（*Mancinella echinata*）



PL. 27　②：Ｈ５年に採取した貝塚出土の貝類－２

１：イガイ（*Mytilus coruscus*）、２、３：オハグロガキ（*Saccostrea mordax*）、４、５：マガキ（*Crassostrea nippona*）、６：ハマグリ（*Meretrix lusoria*）、７、８：オキシジミ（*Cyclina sinensis*）、９：オニアサリ（*Protothaca jedoensis*）、10：ムササキガイ（*Soletellina diphos*）、11～13：ウミニナ（*Batillarea multiformis*）、14～16：イボウミニナ（*Batillaria multiformis*）、17、18：カワアイ（*Cerithidea diadjariensis*）、19～21：カワニナ（*Semisulcospira libertina*）、22：カワニナの一種（*Semisulcospira* sp.）

表31　原の辻遺跡の①：1994年３月と②：Ｈ５年に採取した貝塚出土の貝類リスト

	①	②	生息範囲	生息深度	生息地(沿岸、内湾)	学　　名
	'94/3/23	H5貝類	P:太平洋,J:日本海			
巻貝類						Gastropoda
クロアワビ？	1	55	P:31-37,J:-36	N1(上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	cf. *Nordotis discus*
アワビ科の一種	多数	多数				*Nordotis* sp.
マツバガイ	8	15	P:-0-39,J:-43	T1-T2(高潮亜帯～中潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Cellana nigrolineata*
イシダタミ	2	−	P:-0-42,J:-43	T2-T3(中潮亜帯～低潮亜帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Monodonta labio confusa*
コシダカガンガラ	7	53	P:31-51,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Omphalius rusticus*
オオコシダカガンガラ	12	10	P:31-35,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Omphalius pfeifferi corpenteri*
ヒメクボガイ	1	5	P:22-35,J:-37	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Omphalius nigerrima*
クマノコガイ	25	88	P:23-39,J:-37	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Chlorostoma xanthostigma*
クボガイ	14	35	P:26-41,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Chlorostoma lischkei*
ヘソアキクボガイ	41	24	P:31-38,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Chlorostoma turbinata*
サザエ(殻と蓋)	175	225	P:26-35,J:-41	T3-N2(低潮亜帯～中浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Batillus cornutus*
スガイ(殻と蓋)	490	932	P:31-41,J:-41	T2-T3(中潮亜帯～低潮亜帯)	GR(礫地、岩礁)	*Lunella coronata coreensis*
アマガイ	1	−	P:-0-35,J:-37	T1-T3(潮間帯)	R(沿岸の岩礁)	*Norita japonica*
マルタニシ	4	−			水田、沼	*Cipangopaludina chinensis malleata*
カワニナ	9	4			河川、湖沼、池	*Semisulcospira libertina*
カワニナ科の一種	5	1				*Semisulcospira* sp.
ウミニナ	141	145	P:14-46,J:-46	T1-T2(高潮亜帯～中潮亜帯)	SM(内湾の砂泥底)	*Batillaria multiformis*
イボウミニナ	−	45	P:-0-41,J:-40	T1-T2(高潮亜帯～中潮亜帯)	SM(内湾の砂泥底)	*Batillaria zonalis*
カワアイ	11	2	P:-0-39,J:-37	T1-T2(高潮亜帯～中潮亜帯)	Br,Es,SM(汽水域～湾奥砂泥地)	*Cerithidea diadjariensis*
ヘナタリ	3	−	P:-0-35,J:-37	T1-T2(高潮亜帯～中潮亜帯)	Br,SM(汽水域湾奥の砂泥地)	*Cerithidea cingulata*
オオヘビガイ	3	−	P:30-42,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(内湾～沿岸の岩礁)	*Serpulorbis imbricatus*
キクスズメ	15	1	P:28-42,J:-42	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	Sh(Turbo,Haliotisの殻表)	*Sabia conica*
ツメタガイ	1	−	P:-0-42,J:-45	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	SM(内湾～沿岸の砂泥底)	*Glossaulax didyma*
ヒメツメタ	1	−	P:31-35,J:-37	N1-N2(上浅海帯～中浅海帯)	SM(沿岸の砂泥底)	*Glossaulax vesicalis*
アクキガイ科の一種	2	1				Muricidae
ヒメヨウラク	1	−	P:-0-35,J:-38	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Ergalatax contractus*
ウニレイシ	3	17	P:-0-35	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Mancinella echinata*
クリフレイシガイ	1	−	P:14-41,J:-42	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Thais luteostoma*
レイシガイ	11	55	P:31-41,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Thais bronni*
イボニシ	30	18	P:25-42,J:-41	T2-T3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Thais clavigera*
アカニシ	1	−	P:31-42,J:-43	N1-N2(上浅海帯～中浅海帯)	SM(内湾の砂泥底)	*Repana venosa*
ムギガイ	2	−	P:-0-41,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Mitrella bicincta*
イソニナ	1	−	P:30-35,J:-36	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Japeuthria ferrea*
テングニシ	3	−	P:-0-35,J:-40	N1-N2(上浅海帯～中浅海帯)	SM(沿岸の砂泥底)	*Hemifusus tuba*
ツノマタナガニシ	4	−	P:33-35,J:-37	N1-N2(上浅海帯～中浅海帯)	SM(沿岸の砂泥底)	*Fusinus nigrirostratus*
二枚貝類						Bivalvia
コベルトフネガイ	1	−	P:30-42,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Arca boucardi*
カリガネエガイ	12	−	P:-0-39,J:-43	T2-T3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Barbatia virescens*
サルボウ	1	−	P:26-36,J:-40	N1(上浅海帯)	SM(内湾の砂泥底)	*Scapharca subcrenata*
タマキガイ	1	−	P:31-36,J:-40	N1-N3(上浅海帯～亜浅海帯)	S(沿岸の砂底)	*Glycymeris vestita*
イガイ	18	41	P:31-42,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Mytilus coruscus*
イタヤガイ	−	1	P:28-42,J:-43	N1-N3(上浅海帯～亜浅海帯)	S(沿岸の砂底)	*Pecten albicans*
ナデシコガイ	1	−	P:-0-39,J:-43	N1-N3(上浅海帯～亜浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Chlamys irregularis*
ケガキ	7	−	P:-0-35,J:-41?	T2-T3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Saccostrea kegaki*
オハグロガキ	15	21	P:-0-34,	T2-T3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Saccostrea mordax*
イワガキ	2	−	P:32-40,J:-41	T2-T3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Crassostrea nippona*
マガキ?	1	2	P:26-43,J:-46	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R,GS,M(内湾岩礁、泥砂礫地)	cf. *Crassostrea gigas*
キクザル	2	−	P:-0-39,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(内湾～沿岸の岩礁)	*Chama reflexa*
イソシジミ	1	−	P:30-41,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	Es,M(河口～湾奥の泥地)	*Nuttallia japonica*
オニアサリ	2	2	P:31-39,J:-42	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GS(沿岸の礫地、砂地)	*Protothaca jedoensis*
カガミガイ	2	−	P:31-42,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	S(内湾の砂底)	*Phacosoma japonicum*
アサリ	5	−	P:23-45,J:-46	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	SGM(内湾の泥砂礫地)	*Ruditapes philippinarum*
オキシジミ	9	6	P:24-41,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	SM (内湾の砂泥地)	*Cyclina sinensis*
ハマグリ	7	4	P:31-39,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	S(内湾の砂底)	*Meretrix lusoria*
チョウセンハマグリ	3	−	P:18-36,J:-37	N1(上浅海帯)	S(沿岸の砂底)	*Meretrix lamarckii*
バカガイ	−	1	P:31-41,J:	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	S(内湾の砂底)	*Mactra chinensis*
ムラサキガイ	−	1	P:10-35,	N1(上浅海帯)	S(内湾の砂底)	*Soletellina diphos*
ミツカドカタビラ	1	−	P:32-42,J:-41	N1-N4(上浅海帯～下浅海帯)	S(沿岸の砂底)	*Myadora fluctuosa*
ヒザラガイ類						Loricata
ヒザラガイ科の一種	3	−				*Liolophura* sp.

表32　原の辻遺跡の③：P区から採取した貝塚出土の貝類リスト

調査区	③P区,西,貝塚	③P区,中央,石敷横	③P区,中央,石敷横	③P区,西端,貝塚	③P区,貝塚	③P区,中央	③P区	③P区	③P区合計	生息範囲(緯度)	生息深度	生息環境	学名
土質	黒褐色土	黒褐色土	黒褐色土緑砂	黒褐色土緑砂	黒褐色土	排土表採	排土表採	排土表採		P:太平洋,J:日本海			
採取日	1994/8/5	1994/8/4	1994/7/28	1994/7/30	/6/7		1993/11/4	/7/20					
巻貝類											T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)		Gastropoda
アワビ科の一種	4	1	-	-	2	2	-	-	9				*Nordotis* sp.
トコブシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P:30-?44,J:-37	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Haliotis diversicolor aquatilis*
マツバガイ	-	4	1	-	-	-	6	-	11	P:-0-39,J:-43	T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Cellana nigrolineata*
クマノコガイ	6	1	3	8	-	1	-	-	19	P:23-39,J:-71	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Chlorostoma xanthostigma*
クボガイ	-	-	-	-	-	1	2	-	3	P:26-41,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Chlorostoma lischkei*
ヘソアキクボガイ	1	-	-	-	-	1	-	-	2	P:31-38,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Chlorostoma turbinata*
ヒメクボガイ	6	-	-	-	-	-	-	-	6	P:22-35,J:-37	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Omphalius nigerrima*
オオコシダカガンガラ	-	3	-	-	-	1	-	-	4	P:31-35,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Omphalius pfeifferi corpenteri*
サザエ(殻と蓋)	25	18	15	15	10	18	6	-	107	P:26-35,J:-41	T3-N2(低潮亜帯～中浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Batillus coornutus*
スガイ(殻と蓋)	35	8	10	16	-	-	4	-	73	P:31-41,J:-41	T2-3(中潮亜帯～低潮亜帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Lunella coronata coreensis*
マルタニシ	-	-	-	-	1	-	-	-	1			水田、沼	*Cipangopaludina chinensis malleata*
カワニナ	1	-	-	-	-	-	-	-	1		T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)	河川、湖沼、池	*Semisulcospira libertina*
ウミニナ	4	3	2	1	-	5	-	-	15	P:14-46,J:-46	T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)	SM(内湾の砂泥地)	*Batillaria multiformis*
ヘナタリ	-	-	1	-	-	-	-	-	1	P:-0-35,J:-37	T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)	Br,SM(汽水域湾奥の砂泥地)	*Cerithidea cingulata*
カワアイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P:-0-39,J:-37	T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)	Br,Es,SM(河口汽水域～湾奥砂泥地)	*Cerithidea diadjariensis*
オオヘビガイ	2	-	-	-	-	-	-	-	2	P:30-42,J:-42	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(内湾～沿岸の岩礁)	*Serpulorbis imbricatus*
ツメタガイ	1	-	-	-	-	1	-	-	2	P:-0-42,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	SM(内湾～沿岸の砂泥底)	*Glossaulax didyma*
バイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P:25-35,J:-42	N1-2(上浅海帯～中浅海帯)	SM(内湾～沿岸の砂泥底)	*Babyronia japonica*
レイシガイ	-	2	1	-	-	1	-	-	4	P:31-41,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Thais bronni*
イボニシ	2	-	-	-	-	-	-	-	2	P:31-42,J:-41	T2-3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Thais clavigera*
アカニシ	-	-	-	-	-	1	1	-	2	P:31-42,J:-43	N1-2(上浅海帯～中浅海帯)	SM(内湾の砂泥地)	*Repana venosa*
ナガニシ?	-	-	2	-	-	-	-	-	-	P:31-42,J:-42	T3-N2(下部潮間帯～中浅海帯)	S(沿岸の砂底)	cf. *Fusinus perplexus*
キイロタカラガイ	1	-	-	-	-	-	-	-	1	P:-0-35,J:-36?	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	S(沿岸の砂底)	*Monetaria moneta rhomboides*
タカラガイの一種	-	-	-	-	-	-	-	1	1				*Erosaria* sp.
二枚貝類													Bivalvia
サルボウ	1	-	-	-	-	-	-	-	1	P:26-36,J:-40	N1(上浅海帯)	SM(内湾の砂泥底)	*Scapharca subcrenata*
ケガキ	1	-	-	-	-	-	-	-	1	P:-0-35,J:-41?	T2-3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Saccostrea kegaki*
オハグロガキ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P:-0-34,	T2-3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Saccostrea mordax*
トマヤガイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P:23-41,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Cardita leana*
イガイ	3	2	1	-	1	1	1	-	9	P:31-42,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Mytilus coruscus*
キクザル	-	-	-	-	1	-	-	-	1	P:-0-39,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(内湾～沿岸の岩礁)	*Chama reflexa*
オキシジミ	-	-	-	-	-	1	1	-	2	P:24-41,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	SM(内湾の砂泥地)	*Cyclina sinensis*
ハマグリ	-	-	-	-	1	-	-	-	1	P:31-39,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	S(内湾の砂地)	*Meretrix lusoria*
チョウセンハマグ	1	1	1	-	-	-	-	-	3	P:18-36,J:-41	N1(上浅海帯)	S(沿岸の砂地)	*Meretrix lamarckii*
カガミガイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	P:31-42,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	S(内湾の砂地)	*Phacosoma japonicum*
オニアサリ	-	-	-	-	1	-	-	-	1	P:31-39,J:-42	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GS(沿岸の礫地、砂地)	*Protothaca jedoensis*
オオノガイ	-	-	-	-	1	-	-	-	1	P:31-72,J:-46	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	SM(内湾の砂泥地)	*Mya arenaria oonogai*

表33　原の辻遺跡の④：T区から採取した貝塚出土の貝類リスト

調査区	④T区, 9-9.1号	④T区, 9-9 pit	④T区, 9-14	④T区, 9-14	④T区, 9-15	④T区, 合計	生息範囲(緯度)	生息深度	生息環境	学 名
土質	黒色土排土	緑灰色砂	黒褐色土 緑砂	黒色土	黒褐色土 緑砂		P:太平洋,J:日本海			
採取日	1993/8/23	1993/8/23	1993/8/2		1994/8/4					
巻貝類										Gastropoda
アワビ科の一種	-	-	1	-	-	1				*Nordotis* sp.
トコブシ	-	-	1	-	-	1	P:30-?44,J:-37	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Haliotis diversicolor aquatilis*
マツバガイ	2	-	-	-	3	5	P:-0-39,J:-43	T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Cellana nigrolineata*
クマノコガイ	1	-	2	-	-	3	P:23-39,J:-71	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Chlorostoma xanthostigma*
クボガイ	3	-	1	-	-	4	P:26-41,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Chlorostoma lischkei*
ヘソアキクボガイ	4	-	1	-	-	5	P:31-38,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Chlorostoma turbinata*
ヒメクボガイ	-	-	-	1	-	1	P:22-35,J:-37	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Omphalius nigerrima*
オオコシダカガンガラ	-	-	-	-	-	-	P:31-35,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Omphalius pfeifferi corpenteri*
サザエ(殻と蓋)	4	4	4	-	2	14	P:26-35,J:-41	T3-N2(低潮亜帯～中浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Batillus coornutus*
スガイ(殻と蓋)	17	3	19	-	-	39	P:31-41,J:-41	T2-3(中潮亜帯～低潮亜帯)	GR(礫地、岩礁地)	*Lunella coronata coreensis*
マルタニシ	-	-	-	-	-	-			水田、沼	*Cipangopaludina chinensis malleata*
カワニナ	-	-	-	-	-	-		T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)	河川、湖沼、池	*Semisulcospira libertina*
ウミニナ	7	1	3	-	-	11	P:14-46,J:-46	T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)	SM(内湾の砂泥地)	*Batillaria multiformis*
ヘナタリ	-	-	-	-	-	-	P:-0-35,J:-37	T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)	Br,SM(汽水域湾奥の砂泥地)	*Cerithidea cingulata*
カワアイ	1	-	-	-	-	1	P:-0-39,J:-37	T1-2(高潮亜帯～中潮亜帯)	Br,Es,SM(河口汽水域～湾奥砂泥地)	*Cerithidea diadjariensis*
オオヘビガイ	1	-	-	-	-	1	P:30-42,J:-42	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(内湾～沿岸の岩礁)	*Serpulorbis imbricatus*
ツメタガイ	-	-	-	-	-	-	P:-0-42,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	SM(内湾～沿岸の砂泥底)	*Glossaulax didyma*
バイ	-	-	-	-	1	1	P:25-35,J:-42	N1-2(上浅海帯～中浅海帯)	SM(内湾～沿岸の砂泥底)	*Babyronia japonica*
レイシガイ	-	-	1	-	-	1	P:31-41,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Thais bronni*
イボニシ	6	-	-	-	-	6	P:31-42,J:-41	T2-3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Thais clavigera*
アカニシ	-	-	1	-	1	2	P:31-42,J:-43	N1-2(上浅海帯～中浅海帯)	SM(内湾の砂泥地)	*Repana venosa*
ナガニシ?	-	-	1	-	-	1	P:31-42,J:-42	T3-N2(低潮亜帯～中浅海帯)	S(沿岸の砂底)	cf. *Fusinus perplexus*
キイロタカラガイ	-	-	-	-	-	-	P:-0-35,J:-36?	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	S(沿岸の砂底)	*Monetaria moneta rhomboides*
タカラガイの一種	-	-	-	-	-	-				*Erosaria* sp.
二枚貝類										Bivalvia
サルボウ	-	-	-	-	-	-	P:26-36,J:-40	N1(上浅海帯)	SM(内湾の砂泥底)	*Scapharca subcrenata*
ケガキ	-	-	-	-	-	-	P:-0-35,J:-41?	T2-3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Saccostrea kegaki*
オハグロガキ	-	-	1	-	-	1	P:-0-34,	T2-3(中潮亜帯～低潮亜帯)	R(沿岸の岩礁)	*Saccostrea mordax*
トマヤガイ	-	-	-	-	1	1	P:23-41,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Cardita leana*
イガイ	1	-	-	-	1	2	P:31-42,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(沿岸の岩礁)	*Mytilus coruscus*
キクザル	-	-	-	-	-	-	P:-0-39,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	R(内湾～沿岸の岩礁)	*Chama reflexa*
オキシジミ	-	-	-	-	-	-	P:24-41,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	SM(内湾の砂泥地)	*Cyclina sinensis*
ハマグリ	-	-	-	-	-	-	P:31-39,J:-41	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	S(内湾の砂地)	*Meretrix lusoria*
チョウセンハマグリ	-	-	1	-	-	1	P:18-36,J:-41	N1(上浅海帯)	S(沿岸の砂地)	*Meretrix lamarckii*
カガミガイ	1	-	-	-	-	1	P:31-42,J:-43	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	S(内湾の砂地)	*Phacosoma japonicum*
オニアサリ	-	-	-	-	-	-	P:31-39,J:-42	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	GS(沿岸の礫地、砂地)	*Protothaca jedoensis*
オオノガイ	-	-	-	-	-	-	P:31-72,J:-46	T3-N1(低潮亜帯～上浅海帯)	SM(内湾の砂泥地)	*Mya arenaria oonogai*

6．長崎県壱岐原の辻遺跡環濠内出土の弥生時代人骨

はじめに

長崎県壱岐市芦辺町と石田町の両町に所在する原の辻遺跡は，長崎県緊急雇用対策事業の一つとして，平成11，12年度に続いて平成13年（2001年）7月から14年（2002年）1月にかけて原の辻遺跡保存等協議会によって発掘調査がなされた。平成13年度の調査区は芦辺町深江鶴亀触字八反地区に設定され，地理的には原の辻遺跡のほぼ中心に位置し丘陵の西側裾部の低湿地にあたる区域(コヨウ4区)が調査されたが，その際，環濠の濠内より多数の弥生時代の人骨および獣骨が検出された。

本遺跡は中国の史書「魏志倭人伝」に記された『一支国』の中心地と想定されている遺跡であり，また，環濠内という一般の埋葬とは異なる状態で出土していることから，このような人々がどのような形質を備えていたかを探ることは興味がもたれるところである。今回の出土人骨に関する形質人類学的調査の結果について報告しておきたい。

資料及び研究方法

原の辻遺跡コヨウ4区から検出された人骨および獣骨は，1番から282番までの番号を付け取り上げられ，番号別に整理復元作業がなされた。人骨については正常な埋葬の位置をとどめていないので，本文の記載はこの番号をそのまま使用して標記した（詳細は2002年の報告書を参照)。考古学的所見による人骨および獣骨の所属時代は，それらとともに主として弥生時代後期の土器破片が検出されることと人骨及び獣骨包含層の上に弥生時代後期から古墳時代前葉にかけての層があることから，人骨群は後期前半に属するものと推定されている。

骨の計測は Martin-Saller（1957）の方法で行い，主として津雲縄文人（清野，宮本；1925，清野，平井；1928)，縄文人の継続とされる西北九州地域弥生人(内藤，1971)及び大友弥生人(松下，1981)，大陸からの渡来系とされる北部九州地域弥生人(中橋他，1989)及び山口地域弥生人(中橋他，1989)の計測成績を用いて直接比較し，計測値の有意差の検定にはスチューデントの T-test を実施した。また，この他に九州の現代人，中国の弥生相当期の人骨資料及び北部九州の各遺跡から出土した弥生人の計測値を用いて統計的検査及び多変量解析（共立出版のソフトウエアー及び Esumi エクセル多変量解析）を行なった。なお，既報告の中で上顔高が n-pr'(AV)間ではなく，n-pr 間で計測してある資料については，上顔高に2.5㎜を加算して計算を施した。

結果

1．出土状態・人骨体数

環濠内から検出された今回の人骨群は散乱に近い状態で出土していたので，骨形態から左右が対になるものは，同種の骨ごとに右側・左側が同列となるように性別及び年齢とともに記載し，表34に示した。それぞれの骨の位置を発掘記録図と照合した結果，以下のことが示唆される。

(1)右上肢骨の249，243及び左上肢骨の258，257は同一個体と推測され，それぞれの肘関節の連結は正常位にあるが，左右の肩関節部は65㎝の間隔で離れている。また，左右の位置関係から両上肢は背面を上にしている。(2)右下肢骨の178，175，176及び左下肢骨の211，170，177は同一個体と推測され，それぞれの膝関節の連結は正常位に近いが，左右の位置関係から両下肢は背面を上にしている。(3)小児骨は，上腕骨から腓骨まで同一個体と推測されるが，約160㎝の範囲に散在している。(4)その他の対となっている四肢骨は両者が比較的近い位置にあるが，上下の向きが逆であったりして正常な位置

関係にない。(5)解体痕は残存する骨には見いだせない。以上から，本遺跡で検出された遺骸は，軟部が付着した状態で堆土に覆われたことをうかがわせる部分もあり，また，それぞれが異なった場所から出土して対となっている上肢骨と下肢骨は，伏臥であったものと考えられる。したがって，一端骨となったものを環濠内に投棄あるいは再葬したというよりは，遺体そのものが環濠内に乱暴に遺棄され，腐敗の進行した種々の段階において撹乱を受けると同時に土砂などが堆積したものと考える方が自然であろう。人骨の体数については，骨種ごとで最も多いのが大腿骨である。これからは成人男性８体，成人女性２体，小児１体となり，少なく見積もっても11体の遺骸が存在する。

表34　原の辻コヨウ４区出土主要人骨一覧

骨部位		骨番号					
頭蓋	脳頭蓋	25	183	225	233		277
	顔面頭蓋	25				253	
	性別・年齢	男・壮	男・壮	不・小	男・熟	不・成	男・熟
下顎骨	右下顎枝	20	144			261	
	左下顎枝	20	144		203	261	
	下顎体	20	144	183	203	261	
	性別・年齢	男・熟	男・壮	不・成	不・小	男・壮	
上腕骨	右側	8(21)				191	219
	左側		18	119	147	179	
	性別(年齢)	不(成)	男(成)	男(成)	男(成)	男(成)	男(成)
	右側		249		279		
	左側	225	258	254			
	性別(年齢)	不(小)	男(成)	男(成)	男(成)		
橈骨	右側			208	206	243	
	左側	23	147	181		257	
	性別(年齢)	男(成)	男(成)	男(成)	不(小)	男(成)	
尺骨	右側			208	206	243	
	左側	23	147	181		257	
	性別(年齢)	男(成)	男(成)	男(成)	不(小)	男(成)	
大腿骨	右側	16(41)			40		178
	左側	15	36	39	152	185	211
	性別(年齢)	女(成)	男(成)	女(成)	男(成)	男(成)	男(成)
	右側	196			272		
	左側	225	214	222	250	273	
	性別(年齢)	不(小)	男(成)	男(成)	男(成)	男(成)	
脛骨	右側			175	202	218	220
	左側	14	27	170			221
	性別(年齢)	不(成)	男(成)	男(成)	不(小)	男(成)	男(成)
	右側		252				
	左側	226	259				
	性別(年齢)	女(成)	男(成)				
腓骨	右側	176	202	229	271		
	左側	177	192		251	280	
	性別(年齢)	男(成)	不(小)	男(成)	男(成)	男(成)	

不：不明，成：成人，小：小児，壮：壮年，熟：熟年
□は同一個体がない。

２．計測的特徴

(1)　頭蓋

頭蓋について全体的な特徴が分かるのは番号25（男性，壮年）のみであり，主要計測値を表35において比較する。本人骨の脳頭蓋は津雲縄文人（岡山県）よりやや小ぶりである。頭蓋長幅示数による頭型は中頭型の中位に属し，やや短頭に傾く西北九州弥生人（長崎県）とはやや異なる。

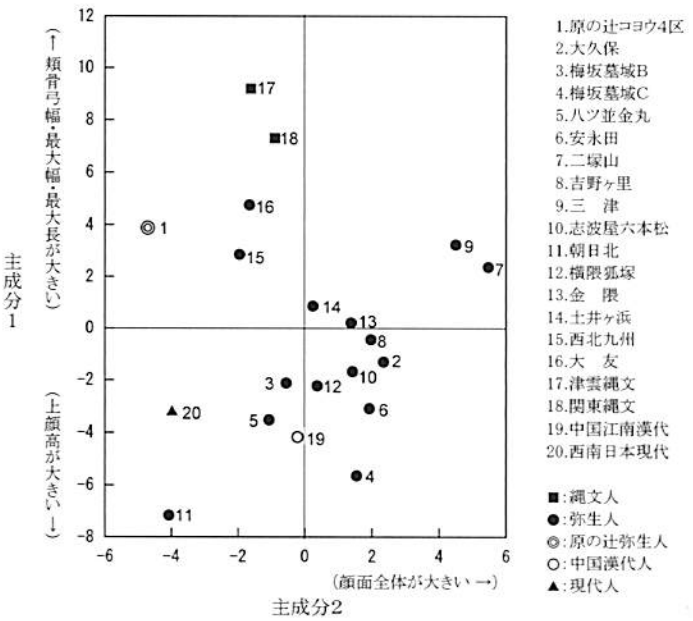
顔面では顔面の幅を示す頬骨弓幅は北部九州（主として福岡県）及び山口の弥生人とほぼ同じであるが，高さを示す上顔高は後者に比べてかなり小さい。したがって，Kollmann 氏及び Virchow 氏の上顔示数値は北部九州及び山口弥生人に比して非常に小さく，津雲縄文人及び西北九州弥生人よりもさらに低顔傾向が顕著である。また，眼窩の幅は高さに比してやや小さいが，鼻部の梨状口の幅は鼻高に対して広い。鼻骨の幅は小さいが，鼻根は広い。

次いで，第121図は男性の頭蓋最大長，頭蓋最大幅，頬骨弓幅，上顔高，眼窩幅，眼窩高，鼻幅，鼻高の主要８項目の計測平均値を用いて，関東縄文人，図中 No. 2から No. 11までの佐賀県平野部出土の弥生人，No. 12と13の福岡県平野部出土の弥生人，No. 14の山口県海浜部弥生人，No. 16の佐賀県の玄海灘海浜部弥生人，No. 19の中国江南地域漢代人及び No. 20の北部九州を主とした西南日本現代人を加えて主成分分析を行った。この分析図の見方として各集団は主成分１の要素として頬骨弓幅や頭蓋最大幅といった幅径が大きいほどプラス側，顔面（上顔高）が高いほどマイナス側，主成分２では顔面全体の各径が大きいほどプラス側に位置する。また，各集団の位置関係が近いほど類似関係

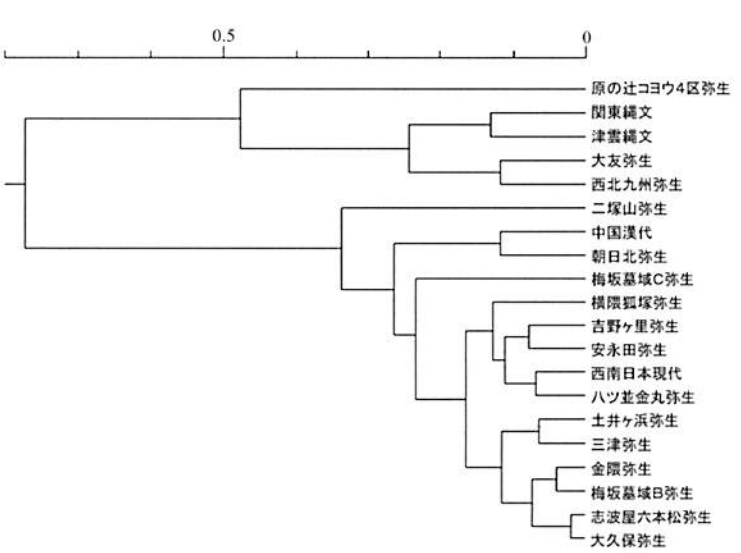
表35　原の辻コヨウ４区出土頭蓋の計測値比較（男性、mm）

Martin's No.		原の辻コヨウ4区（弥生）		津雲（縄文）		西北九州（弥生）		北部九州（弥生）		山口（弥生）	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	1	182	16	186.4	21	182.8	118	183.7	61	182.9
8	頭蓋最大幅	1	141	18	144.4	20	144.9	117	142.4	66	142.0
8/1	頭骨長幅示数	1	77.5	16	77.7	20	79.2	104	77.7	59	77.8
45	頬骨弓幅	1	140	6	143.2	12	138.4	103	140.0	44	139.2
46	中顔幅	1	106	9	103.6	17	105.0	114	104.7	46	104.2
47	顔高		－	11	115.8	14	117.1	80	123.8	27	121.4
48	上顔高［n-pr'(av)］	1	67	13	67.0	17	68.1	114	74.8	38	72.7
48/45	Kollmann 氏上顔示数	1	47.9	6	48.3	12	49.3	95	53.3	34	52.1
48/46	Virchow 氏上顔示数	1	63.2	8	67.7	17	64.8	105	71.5	37	69.4
51	眼窩幅(左)	1	41	14	43.5	15	43.1	89	43.2	39	43.6
52	眼窩高(左)	1	34	12	33.5	15	32.8	93	34.5	41	34.6
52/51	眼窩示数(左)	1	82.9	12	76.5	15	76.2	86	79.9	38	79.4
54	鼻幅	1	28	13	26.6	16	27.8	117	27.1	43	26.9
55	鼻高	1	51	14	48.6	16	51.0	116	52.8	42	52.8
54/55	鼻示数	1	54.9	12	54.5	16	54.4	113	51.4	41	51.1

の強いことを表している。本人骨の頭蓋形態は，西南日本現代人，中国江南地域漢代人，大陸からの渡来系と称される北部九州及び山口県の弥生人とは大きく異なり，縄文系とされる西北九州及び大友弥生人と近い関係にあることが示されたが，後者よりもさらに顔面全体の径が小さい。同じ計測値を用いて各集団間の Penrose の形態距離を算出し，これに基づくクラスター分析を行った（第122図）。これによると本男性頭蓋の形質は縄文系の西北九州及び大友弥生人ほどではないが，明らかに縄文人に近い関係がみられる。



第121図　主成分分析による比較（男性，頭蓋８項目）



第122図　ペンローズの形態距離に基づくクラスター分析（男性，頭蓋８項目）

(2)　四肢骨

男性の上腕骨，大腿骨及び脛骨の計測平均値（左側）を表36に，これを視覚的に見るための北部九州弥生人計測値を基準とした偏差折線図を第123図に示した。

原の辻コヨウ４区出土の上腕骨は，骨体の中央周は比較群と大差ないが，最小周が小さい。また，骨体中央の断面示数はかなり小さくて骨体に扁平傾向を認める。これらは中央部では筋の付着部がよく発達しているが，骨体そのものは細いことを示したものといえる。４例中１例は最大長が計測されるが，この例は群を抜いて長く，且つ細い傾向（長厚示数）を示した。大腿骨では，原の辻コヨウ４区の骨体中央周は縄文人及び大友弥生人よりかなり大きく，北部九州及び山口弥生人に近似する。骨体中央の断面示数はかなり小さくて柱状形成は弱いが，骨体上部には扁平傾向を認める。２例で最大長が計測され，１例は408㎜（左），１例は455㎜（左）と短いものと長いものが存在する。また，それぞれの長厚示数は21.1と19.6となるが，平均的に見れば骨体は長さの割にやや細い。また，この２例の最大長から Pearson の公式を用いて算出した推定身長値は，159.0㎝と167.6㎝となり，前者は縄文人及び縄文系弥生人の平均値に近く，後者は北部九州弥生人の平均をはるかに越える高身長である。脛骨では，原の辻コヨウ４区の骨体は全体的に北部九州及び山口弥生人に比して小さい。また，骨体中央及び栄養孔位での断面示数は大きく，骨体に扁平傾向は認められない。１例では最大長が計測され，この例は長く，且つ細い傾向（長厚示数）を示した。骨体の周径を全体的に見ると脛骨も長さの

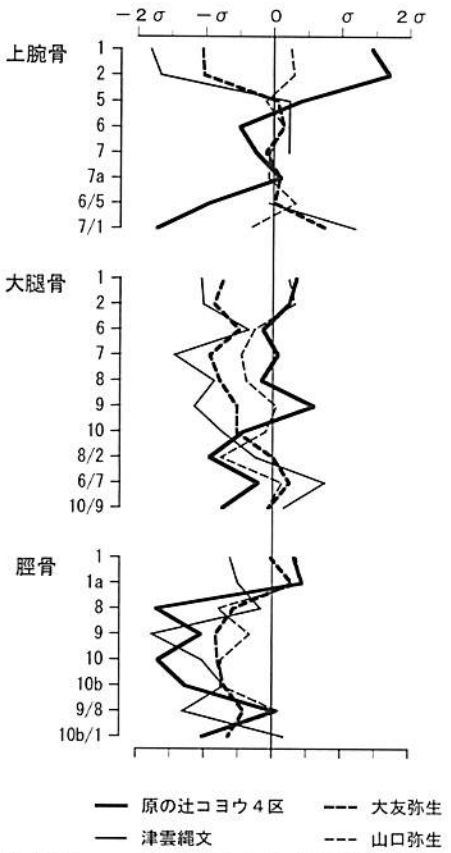
表36　主要四肢骨計測値比較（男性，左，㎜）

		原の辻コヨウ４区（弥生）			津雲（縄文）		大友（弥生）		北部九州（弥生）		山口（弥生）	
		N	M	SD	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨	1.上腕骨最大長	1	318	－	15	283.3	11	291.4	22	302.6	29	305.3
	2.上腕骨全長	1	315	－	15	279.0	8	285.8	17	296.8	23	300.0
	5.中央最大径	4	24.0	2.94	20	23.7	34	23.4	76	23.3	61	23.1
	6.中央最小径	4	16.8	1.50	20	17.7	33	17.6	76	17.4	61	17.6
	7.骨体最小周	4	63.0	4.97	21	64.7	33	63.5	81	63.9	66	63.7
	7a.中央周	4	68.3	6.85	－	－	33	68.2	75	67.8	57	67.5
	6/5骨体断面示数	4	70.2	6.29	20	74.6	33	75.0	76	74.9	61	76.5
	7/1長厚示数	1	18.9	－	15	23.0	11	22.4	22	21.3	28	20.8
大腿骨	1.最大長	2	436.0	－	11	415.2	15	420.1	60	430.9	37	434.4
	2.自然位全長	2	431.5	－	11	411.3	17	413.9	18	427.7	26	432.8
	6.骨体中央矢状径	8	29.4	2.92	20	28.9	41	28.6	162	29.7	72	29.1
	7.骨体中央横径	8	28.1	1.46	20	25.5**	42	26.4**	166	28.0	72	27.2
	8.骨体中央周	8	90.0	6.07	20	86.6	41	87.0	161	90.8	72	88.9
	9.骨体上横径	8	33.8	2.31	19	30.4**	38	31.6**	115	32.6	74	32.7
	10.骨体上矢状径	8	25.4	2.56	19	24.8	38	25.2	115	26.2	74	26.0
	8/2長厚示数	2	20.3	－	11	21.1	16	21.4	18	21.4	26	20.5
	6/7骨体中央断面示数	8	104.4	8.91	20	113.2	41	108.6	162	106.4	72	107.6
	10/9上骨体断面示数	8	75.2	6.48	19	81.7	39	80.1	115	80.5	74	80.0
脛骨	1.脛骨全長	1	350	－	10	337.0	10	345.3	27	345.6	19	350.5
	1a.脛骨最大長	1	357	－	10	343.0	11	354.8	52	350.5	21	356.9
	8.中央最大径	4	29.0	2.58	21	31.7	43	31.0	74	32.0**	36	30.6
	8a.栄養孔位最大径	4	33.5	3.32	19	34.7	35	34.5	153	36.5*	60	35.7
	9.中央横径	4	21.0	2.94	21	19.7	43	21.4	75	22.9	36	22.3
	9a.栄養孔位横径	4	23.3	2.87	19	21.5	36	23.3	153	25.3	59	25.1
	10.骨体周	4	80.0	6.78	20	82.5	41	83.4	74	86.5**	36	83.6
	10a.栄養孔位周	4	88.5	7.94	19	90.7	34	92.6	151	96.9**	58	95.5*
	10b.最小周	3	73.3	2.89	17	75.6	38	75.6	122	78.4*	63	75.4
	9/8中央断面示数	4	72.4	7.67	21	62.4	43	69.1	74	72.2	36	73.0
	9a/8a 栄養孔位断面示数	4	69.4	4.55	19	62.0	35	67.7	152	69.5	59	70.5
	10b／１長厚示数	1	21.4	－	10	22.9	10	21.9	26	22.7	19	21.5

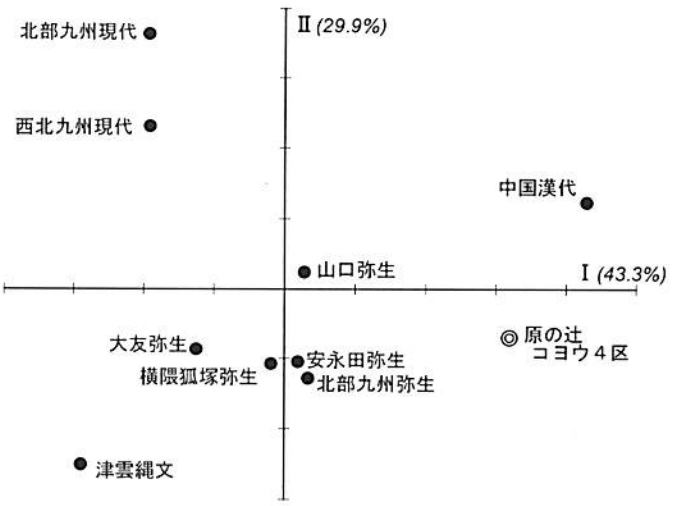
有意差　*：P＜５％，　**：P＜１％

割にやや細い傾向にあるものと思われる。

男性の上腕骨，大腿骨，脛骨各５項目の計測・示数平均値を用いて，10集団間の Penrose の形態距離を算出し，これに基づく主座標分析を行ってみた（第124図）。Penrose の形態距離は掲載していないが，原の辻コヨウ４区出土四肢骨からの距離は、津雲縄文人及び現代人とは非常に遠く，各弥生人集団及び中国江南漢代人に近い値が示された。主座標分析における集団の位置関係では、日本列島の各集団は津雲縄文人から現代人へとⅡ軸に沿って位置している。また，これに対峙して中国江南漢代人があり，原の辻コヨウ４区四肢骨は両者のほぼ中間に位置している。原の辻コヨウ４区四肢骨は少なくとも縄文系の形態にはほど遠いことが推察される。



第123図　北部九州弥生人を基線とした四肢骨計測値の偏差折線図



第124図　ペンローズの形態距離に基づく主座標分析（男性，上腕骨・大腿骨・脛骨各５項目）

３．特殊所見

写真図版（PL28）の５に示すように，骨 No. 220右側脛骨の骨体中央位前縁部に利器によると思われる鋭い創痕（矢印部）が見られた。今回の発掘資料の中で利器による損傷と推測されたのは本例のみである。

おわりに

原の辻遺跡からは1993年度と2000年度に弥生時代の人骨が出土している。1993年度に環濠内から出土した四肢骨及び2000年度に土壙墓から側臥状態で出土した男性人骨１体は，『土井ヶ浜タイプ弥生人』に近いもの（松下；1995，2001）と分析されている。

今回原の辻遺跡コヨウ４区から出土した人骨ついては，骨に見いだされた創痕は１例のみであった

ので，集団間での大規模な闘争のための戦死者とは考え難い。また，形態的分析から頭蓋は縄文系に近く，四肢骨の形態は渡来系弥生人や中国江南地方漢代の資料に近い結果となった。1例の頭蓋がどの四肢骨と同一固体なのかは分からないが，数からして後者に類似するものが多いと考えられる。人骨群は弥生後期前半に葬られたものと推測されている。考古学的には当時本遺跡において生活した人々は，この地を中継基地として大陸及び九州近隣と盛んに交易を担った集団と想像されている。したがって，このような状況下においては人骨形態に多様性があっても不思議ではないと考えられるし，一方で異常な葬られ方（遺棄に近い）をされていることから，身分・階層的な側面も考慮に入れて考える必要があろう。

〔紙面の都合から各集団間の Penrose の形態距離及び長崎大学が関係する人骨資料の参考文献の一部を割愛いたしました〕

（分部哲秋，佐伯和信，岡本圭史，長島聖司）

【参考文献】

1）金関丈夫（1956）；人種の問題，日本考古学講座4，河出書房，東京：238-252.

2）金関丈夫（1966）；弥生時代人．日本の考古学Ⅲ，河出書房，東京：460-471.

3）清野謙次，宮本博人（1925）；津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第2部頭蓋骨の研究，人類学雑誌．41.

4）清野謙次，平井隆（1928）；津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第3部上肢骨の研究，第4部下肢骨の研究，人類学雑誌．43　第3付録，第4付録.

5）九州大学医学部解剖学第二講座（1988）；古人骨資料集成，日本民族・文化の生成．六興出版.

6）Martin, R. and Saller, K.(1957)；Lehrbuch der Anthropologie,Bd.T.Gustav Fischer Verlag Stuttgart.

7）松下孝幸（1995）；長崎県壱岐・原の辻遺跡出土の弥生時代人骨，「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書124：209-220.

8）松下孝幸（2001）；長崎県壱岐原の辻遺跡出土の弥生人骨，「特別史跡原の辻遺跡」長崎県芦辺町文化財調査報告書12：127-149.

9）内藤芳篤（1971）；西北九州出土の弥生時代人骨，人類学雑誌　79：236-248.

10）内藤芳篤（1981）；4弥生時代人骨　日本人Ⅰ，人類学講座，雄山閣：57-99.

11）内藤芳篤，長島聖司，分部哲秋（1997）；古人骨，原始・古代の長崎県，長崎県教育委員会編，長崎：625-655.

12）中橋孝博，土肥直美，永井昌文（1985）；金隈遺跡出土の弥生時代人骨，福岡市埋蔵文化財調査報告書123：43-145.

13）中橋孝博，永井昌文（1989）；形質，弥生文化の研究1：3弥生人，雄山閣，東京：23-51.

14）T.Nakahashi, L. Minchang and B.Yamaguchi（2002）Anthropological study on the cranial measurements of the human remains from Jiangnan region, China. Ancient people in the Jiangnan region, China edited by T.Nakahashi & L. Minchang, Kyushu Univ. Press, 17-34.

15）Wakebe T.(2002) Morphological characterristics of the limb bones of human skeletal remains excavated from Jiangnan area in China. Ancient people in the Jiangnan region, China edited by T.Nakahashi & L. Minchang, Kyushu Univ. Press, 35-49.

16）Wakebe T., Saiki K.. and Nagashima S.（1994）；Human skeletal remains of the Yayoi period from the Yoshinogari site, Saga prefecture (Abstract), Anthropol. Sci., 102, 198.

17）分部哲秋，佐伯和信，岡本圭史，長島聖司（1997）；長崎大学出展人骨資料．Anthropol. Sci., 105：267-271.

附表1　原の辻コヨウ4区・脳頭蓋計測値（mm）

Martin's No.	人骨番号 / Sex (M:Male)	25 M	183 M	233 M	277 M	Male N	Male M	Male SD
1	頭蓋最大長	182				1	182	
8	頭蓋最大幅	141				1	141	
17	バジオン・ブレグマ高							
8/1	頭骨長幅示数	77.5				1	77.5	
17/1	頭骨長高示数							
17/8	頭骨幅高示数							
9	最小前頭幅	93				1	93	
10	最大前頭幅	120				1	120	
5	頭骨底長							
11	両耳幅	127				1	127	
12	最大後頭幅	118				1	118	
13	乳突幅	102				1	102	
14	最小頭骨幅							
7	大後頭孔長							
16	大後頭孔幅							
16/7	大後頭孔示数							
23	頭蓋水平周	522				1	522	
24	横弧長							
25	正中矢状弧長	378				1	378	
26	正中矢状前頭弧長	126				1	126	
27	正中矢状頭頂弧長	138	128	133	126	4	131.3	5.38
28	正中矢状後頭弧長	114				1	114	
29	正中矢状前頭弦長	110				1	110	
30	正中矢状頭頂弦長	121	115	118	113	4	116.8	3.50
31	正中矢状後頭弦長	93				1	93	
26/25	前頭矢状弧示数	33.3				1	33.3	
27/25	頭頂矢状弧示数	36.5				1	36.5	
28/25	後頭矢状弧示数	30.2				1	30.2	
29/26	矢状前頭示数	87.3				1	87.3	
30/27	矢状頭頂示数	87.7	89.8	88.7	89.7	4	89.0	
31/28	矢状後頭示数	81.6				1	81.6	

附表2　原の辻コヨウ4区・顔面頭蓋計測値（mm，度）

Martin's No.	人骨番号 / Sex (M:Male)	25 M
40	顔長	
41	側顔長	72
42	下顔長	
43	上顔幅	104
44	両眼窩幅	98
45	頬骨弓幅	140
46	中顔幅	106
47	顔高	
48	上顔高[n-pr'(av)]	67
47/45	Kollmann 氏顔示数	
47/46	Virchow 氏顔示数	
48/45	Kollmann 氏上顔示数	47.9
48/46	Virchow 氏上顔示数	63.2
50	前眼窩間幅	21.5
51	眼窩幅(右)	42
	眼窩幅(左)	41
52	眼窩高(右)	33
	眼窩高(左)	34
52/51	眼窩示数(右)	78.6
	眼窩示数(左)	82.9
54	鼻幅	28
55	鼻高	51
54/55	鼻示数	54.9
55(1)	梨状口高	
56	鼻骨長	
57	鼻骨最小幅	
57(1)	鼻骨最大幅	
60	上顎歯槽長	
61	上顎歯槽幅	65
62	口蓋長	
63	口蓋幅	39
64	口蓋深	13
72	全側面角(度)	
73	鼻側面角(度)	90
74	歯槽側面角(度)	

附表3　原の辻コヨウ4区・下顎骨計測値（mm）

Matin's No.	人骨番号 / Sex (M:Male)		20 M	144 M	261 M	Male N	Male M	Male SD
65	下顎関節突起幅							
65(1)	下顎筋突起幅							
66	下顎角幅							
67	前下顎幅		50			1	50	
68	下顎長							
68(1)	下顎長							
69	オトガイ高		34		28	2	31	
66/65	下顎幅示数							
68/65	幅長示数							
68(1)/65	幅長示数							
69(1)	下顎体高	(右)			28	1	28	
		(左)	32		28	2	30.0	
69(2)	下顎体高	(右)		28	28	2	28.0	
		(左)	31	28	28	3	29.0	1.73
70	枝高	(右)			60	1	60	
		(左)			58	1	58	
70(1)	前枝高	(右)			65	1	65	
		(左)			62	1	62	
70(2)	最小枝高	(右)		49	55	2	52.0	
		(左)			52	1	52	
70(3)	下顎切痕高	(右)			13	1	13	
		(左)			12	1	12	
71	枝幅	(右)			37	1	37	
		(左)			35	1	35	
71a	最小枝幅	(右)			36	1	36	
		(左)			35	1	35	
71(1)	下顎切痕幅	(右)			32	1	32	
		(左)			32	1	32	
79	下顎枝角(度)	(右)			118	1	118	
		(左)						
69(2)/69	下顎高示数	(右)			100.0	1	100	
		(左)	91.2		100.0	2	95.6	
71/70	下顎枝示数	(右)			61.7	1	62	
		(左)			60.3	1	60	
71a/70(2)	下顎枝示数	(右)			65.5	1	65	
		(左)			67.3	1	67	
70(3)/71(1)	下顎切痕示数	(右)			40.6	1	41	
		(左)			37.5	1	38	

附表４　原の辻コヨウ４区・上腕骨計測値（mm）

	右側(骨番号)		191	219	249		279			
	左側(骨番号)	147	179		258	254		Male		
	Sex(M:Male)	M	M	M	M	M	M	N	M	SD
1	上腕骨最大長(右)				318			1	318	
	(左)				318			1	318	
2	上腕骨全長 (右)				315			1	315	
	(左)				315			1	315	
4	下端幅 (右)				48			1	48	
	(左)									
5	中央最大径 (右)			23	23			2	23.0	
	(左)	28	23		21	24		4	24.0	2.94
6	中央最小径 (右)		16	17	16			3	16.3	0.58
	(左)	18	15		16	18		4	16.8	1.50
7	骨体最小周 (右)		59	59	60		65	4	60.8	2.87
	(左)	70	59		60	63		4	63.0	4.97
7a	中央周 (右)			66	64			2	65.0	
	(左)	78	64		63	68		4	68.3	6.85
9	頭最大横径(右)				44			1	44	
	(左)				44			1	44	
10	頭最大矢状径(右)				46			1	46	
	(左)				46			1	46	
11	滑車幅 (右)									
	(左)									
12	小頭幅 (右)				18			1	18	
	(左)									
12(a)	滑車及び小頭幅(右)									
	(左)									
12(b)	小頭幅 (右)				23			1	23	
	(左)									
13	滑車深 (右)				14			1	14	
	(左)				14			1	14	
6/5	骨体中央 (右)			73.9	69.6			2	71.7	
	断面示数 (左)	64.3	65.2		76.2	75.0		4	70.2	6.29
7/1	長厚示数 (右)				18.9			1	18.9	
	(左)				18.9			1	18.9	

附表５　原の辻コヨウ４区・橈骨計測値（mm）

	右側(骨番号)			208	243			
	左側(骨番号)	23	147	180	257	Male		
	Sex(M:Male)	M	M	M	M	N	M	SD
1	最大長 (右)							
	(左)							
2	機能長 (右)							
	(左)							
3	最小周 (右)			40	41	2	40.5	
	(左)	44	45		40	3	43.0	2.65
4	骨体横径 (右)			17	16	2	16.5	
	(左)	18	20	17	15	4	17.5	2.08
4a	中央横径 (右)			16	15	2	15.5	
	(左)	17	20		14	3	17.0	3.00
5	骨体矢状径(右)			11	12	2	11.5	
	(左)	13	13	11	13	4	12.5	1.00
5a	中央矢状径(右)			12	13	2	12.5	
	(左)	13	13		12	3	12.7	0.58
5(5)	骨体中央周(右)			44	42	2	43.0	
	(左)	47	51		41	3	46.3	5.03
3/2	長厚示数 (右)							
	(左)							
5/4	骨体断 (右)			64.7	75.0	2	69.9	
	面示数 (左)	72.2	65.0	64.7	86.7	4	72.1	10.28
5a/4a	骨体中央 (右)			75.0	86.7	2	80.8	
	断面示数 (左)	76.5	65.0		85.7	3	75.7	10.38

附表６　原の辻コヨウ４区・尺骨計測値（mm）

	右側(骨番号)			208	243			
	左側(骨番号)	23	147	181	244	Male		
	Sex(M:Male)	M	M	M	M	N	M	SD
1	最大長 (右)							
	(左)							
2	機能長 (右)							
	(左)							
3	最小周 (右)			36	37	2	36.5	
	(左)			36	36	2	36.0	
11	尺骨矢状径(右)			13	13	2	13.0	
	(左)	13	15	14	13	4	13.8	0.96
12	尺骨横径 (右)			16	17	2	16.5	
	(左)	18	20	16	16	4	17.5	1.91
S	中央最小径(右)			13	13	2	13.0	
	(左)	13	13	13	12	4	12.8	0.50
L	中央最大径(右)			16	17	2	16.5	
	(左)	17	20	16	17	4	17.5	1.73
C	中央周 (右)			47	49	2	48.0	
	(左)	48	56	45	46	4	48.8	4.99
3/2	長厚示数 (右)							
	(左)							
11/12	骨体断 (右)			81.3	76.5	2	78.9	
	面示数 (左)	72.2	75.0	87.5	81.3	4	79.0	6.81
S/L	骨体中央 (右)			81.3	76.5	2	78.9	
	断面示数 (左)	76.5	65.0	81.3	70.6	4	73.3	7.06

附表 7　原の辻コヨウ 4 区・大腿骨計測値（mm）

右側(骨番号)			40	178				272					16			
左側(骨番号)		36	152	211	185	214	222	250	273	Male			15	39	Female	
Sex(M:Male, F:Female)		M	M	M	M	M	M	M	M	N	M	SD	F	F	N	M
1 最大長	(右)			411				458		2	434.5					
	(左)			413				459		2	436.0					
2 自然位全長	(右)			406				453		2	429.5					
	(左)			408				455		2	431.5					
6 骨体中央矢状径	(右)		25	27				29		3	27.0	2.00				
	(左)	28	25	28	33	30	29	28	34	8	29.4	2.92	26	21	2	23.5
7 骨体中央横径	(右)		27	27				27		3	27.0	0.00				
	(左)	27	27	28	30	26	30	28	29	8	28.1	1.46	26	26	2	26.0
8 骨体中央周	(右)		82	83				88		3	84.3	3.21				
	(左)	87	82	86	98	88	90	89	100	8	90.0	6.07	81	76	2	78.5
9 骨体上横径	(右)		33	31				34		3	32.7	1.53				
	(左)	31	33	32	37	31	35	35	36	8	33.8	2.31		32	1	32
9' 骨体上最大径	(右)		33	31				34		3	32.7	1.53				
	(左)	32	33	32	37	32	35	36	37	8	34.3	2.25		32	1	32
10 骨体上矢状径	(右)		21	23				25		3	23.0	2.00				
	(左)	26	21	23	28	25	26	25	29	8	25.4	2.56		19	1	19
10' 骨体上最小径	(右)		20	23				24		3	22.3	2.08				
	(左)	25	20	23	28	25	26	24	28	8	24.9	2.64		19	1	19
18 頭垂直径	(右)							48		1						
	(左)			44				48		2	46.0					
19 頭横(矢状)径	(右)							47		1						
	(左)															
21 上顆幅(顆幅)	(右)															
	(左)			78						1						
8/2 長厚示数	(右)			20.4				19.4		2	19.9					
	(左)			21.1				19.6		2	20.3					
6/7 骨体中央断面示数	(右)		92.6	100.0				107.4		3	100.0	7.41				
	(左)	103.7	92.6	100.0	110.0	115.4	96.7	100.0	117.2	8	104.4	8.91	100.0	80.8	2	90.4
10/9 上骨体断面示数	(右)		63.6	74.2				73.5		3	70.5	5.91				
	(左)	83.9	63.6	71.9	75.7	80.6	74.3	71.4	80.6	8	75.2	6.48		59.4	1	59.4
10'/9' 上骨体断面示数	(右)		60.6	74.2				70.6		3	68.5	7.04				
	(左)	78.1	60.6	71.9	75.7	78.1	74.3	66.7	75.7	8	72.6	6.12		59.4	1	59.4
推定身長値（P式：cm）	(右)			158.6				167.4		2	163.0					
	(左)			159.0				167.6		2	163.3					

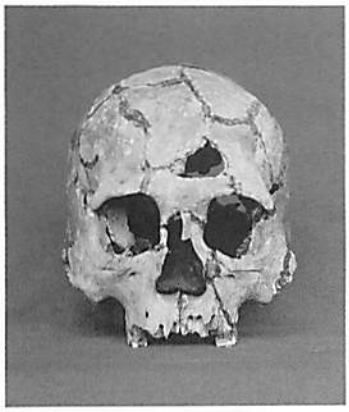
P:Pearson

附表 8　原の辻コヨウ 4 区・脛骨計測値（mm）

右側(骨番号)		175	218	220	252				
左側(骨番号)		170		221	259	226	Male		
Sex(M:Male)		M	M	M	M	M	N	M	SD
1 全長	(右)				348		1	348	
	(左)				350		1	350	
1a 最大長	(右)				355		1	355	
	(左)				357		1	357	
1b 脛骨長	(右)				341		1	341	
	(左)				345		1	345	
2 顆距間距離	(右)	307			327		2	317.0	
	(左)				332		1	332	
3 最大上端幅	(右)				76		1	76	
	(左)								
8 骨体中央	(右)	31	28	26	30		4	28.8	2.22
最大径	(左)	32		28	30	26	4	29.0	2.58
8a 栄養孔位	(右)	34	33		35		3	34.0	1.00
最大径	(左)	36		33	36	29	4	33.5	3.32
9 骨体中央	(右)	21	21	21	25		4	22.0	2.00
横径	(左)	21		20	25	18	4	21.0	2.94
9a 栄養孔位	(右)	23	26	24	25		4	24.5	1.29
横径	(左)	23		23	27	20	4	23.3	2.87
10 骨体中央周	(右)	83	78	76	87		4	81.0	4.97
	(左)	83		76	88	73	4	80.0	6.78
10a 栄養孔位周	(右)	90			92		2	91.0	
	(左)	93		87	96	78	4	88.5	7.94
10b 最小周	(右)	75	74	70	74		4	73.3	2.22
	(左)	75		70	75		3	73.3	2.89
10b/1 長厚示数	(右)				21.3		1	21.3	
	(左)				21.4		1	21.4	
9/8 骨体中央	(右)	67.7	75.0	80.8	83.3		4	76.7	6.92
断面示数	(左)	65.6		71.4	83.3	69.2	4	72.4	7.67
9a/8a 栄養孔位	(右)	67.6	78.8		71.4		3	72.6	5.67
断面示数	(左)	63.9		69.7	75.0	69.0	4	69.4	4.55

附表 9　原の辻コヨウ 4 区・腓骨計測値（mm）

右側(骨番号)		176	229	271				
左側(骨番号)		177		251	280	Male		
Sex(M:Male)		M	M	M	M	N	M	SD
1 最大長	(右)							
	(左)							
2 中央最大径	(右)	14	15	16		3	15.0	1.00
	(左)			16	18	2	17.0	
3 中央最小径	(右)	11	10	10		3	10.3	0.58
	(左)			10	10	2	10.0	
4 中央周	(右)	42	40	42		3	41.3	1.15
	(左)			42	49	2	45.5	
4a 最小周	(右)	40		30		2	35.0	
	(左)			31		1	31	
4a/1 長厚示数	(右)							
	(左)							
3/2 骨体中央	(右)	78.6	66.7	62.5		3	69.2	8.34
断面示数	(左)			62.5	55.6	2	59.0	



1．コヨウ４区出土頭蓋(No.25)
［男性、壮年］

〔右側←〕〔→左側〕
2．コヨウ４区出土上腕骨

〔右側←〕〔→左側〕
3．コヨウ４区出土大腿骨

〔右側←〕〔→左側〕
4．コヨウ４区出土脛骨

5．創痕のある右側脛骨(No.220)

PL.28　原の辻コヨウ４区出土の人骨

7．壱岐市原の辻遺跡出土土器に付着した炭化物の炭素14年代測定

(1) 調査概要

原の辻遺跡から出土した弥生時代前期末から古墳時代前期までに比定された弥生土器・古式土師器に付着した炭化物15点の炭素14年代を測定した結果，次の点が明らかになった。

調査したのは，板付Ⅱｃ式３点，須玖Ⅰ式２点，須玖Ⅱ式６点，高三潴式１点，下大隈式１点，布留Ⅰ式併行の土器２点である。基本的に胴部の外面，底部内面に付着した炭化物を試料とした。

調査の結果，板付Ⅱｃ式と須玖Ⅰ式は従来の年代観より200年近い古い較正年代，須玖Ⅱ式以降は従来の年代観を含み込んだ較正年代が得られた。また，須玖Ⅱ式の中には韓国後期の無文土器である勒島式との折衷土器が含まれていることから，勒島式の較正年代を知る手がかりが得られたとともに，須玖Ⅰ式の底部内面の付着炭化物の一つに，ヒエ・アワなどのC_4植物起源のものが混入している可能性を得るなど，これまでにない成果を得ることができた。

(2) 調査の経緯と資料の選定

試料採取は2004年８月に藤尾慎一郎が現地に赴き行った。これまでに調査された土器が納められている収蔵庫内の約半分のコンテナから，51点の資料を抽出した。そのうち，2004年12月までに測定値が得られた15点について報告する。

研究グループではこれまで弥生時代開始期の土器に付着する炭化物を中心に年代測定を進めてきたが，弥生前期末～中期初頭の測定数が絶対的に不足していたのと，前漢鏡が副葬されることを根拠に前１世紀後半を上限とすることがわかっている須玖Ⅱ式の較正年代がどうなるかなど，弥生中期の試料調査の必要性に迫られていた。ところが福岡平野ではこの時期，集落が台地上に占地することが多いため，土器の遺存状況がきわめて悪く，炭化物がほとんど見いだせない状態であった。そんな折，おもに遺構が現水田の下からかなり見つかっている原の辻遺跡の弥生土器には，炭化物が多く付着しているとの情報に接したので，長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所にお願いして調査を行うことができたのである。

(3) 測定した土器の考古学的位置づけ（第125・126図）

詳細は表37をみていただくとして，各資料の特徴を弥生前期末から順に説明する。土器の時期比定は，板付Ⅱ，須玖Ⅰ，須玖Ⅱ，弥生後期，布留系という長崎県教育委員会の時期比定にしたがった。それ以上の細分は，福岡市埋蔵文化財センターの常松幹雄氏の教示を得ている。

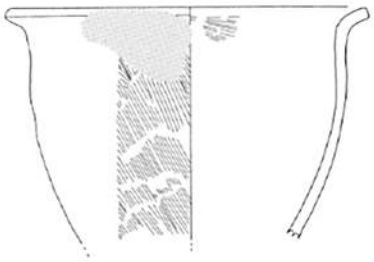
１～３が前期末の外反口縁をもつ板付Ⅱｃ式である。口縁端部は隅丸の方形，無刻で，口縁下に一条のヘラ描き沈線，粗い刷毛目調整もつなど，前期末の様相を呈している。

４・５が中期前葉の須玖Ⅰ式である。４は甕の底部内面に付着した炭化物を測定した。５は中期の中頃に近い，須玖Ⅰ式でも新しい様相をもつ土器である。

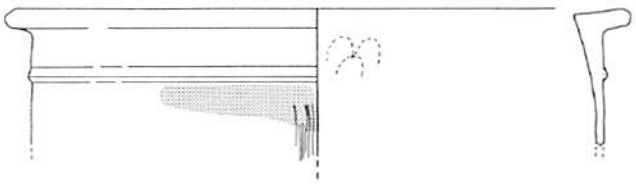
６～11が中期後葉から末にかけての須玖Ⅱ式である。６～８は古い様相，９は新しい様相，10は口縁部が「く」字状になった中期末の様相，そして11が１号旧河道跡土器溜から出土した韓国後期無文土器・勒島式との折衷土器としてすでに報告されているものである〔宮崎編1998：図３－26〕。

12・13は弥生後期の土器である。12は跳ね上げ口縁をもつ。13は下大隈式の複合口縁壺の底部内面付近に炭化物が遺っていた珍しい資料である。

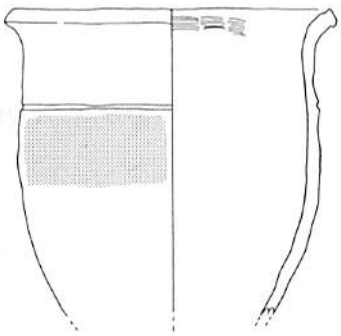
資料14・15は布留系の口縁部破片である。



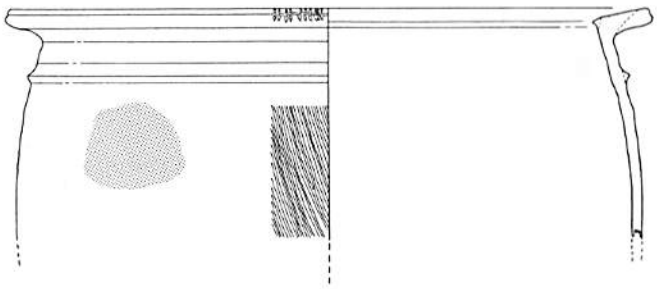
1．FJ527　板付Ⅱc式



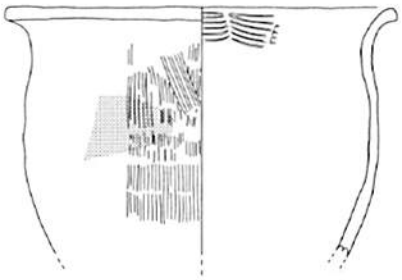
5．FJ526　須玖Ⅰ式末



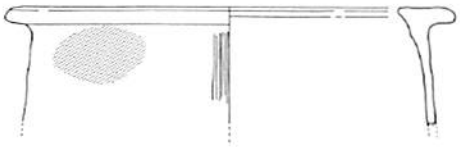
2．FJ532b　板付Ⅱc式



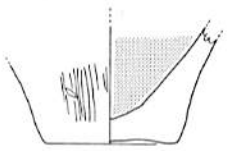
6．FJ537　須玖Ⅱ式古



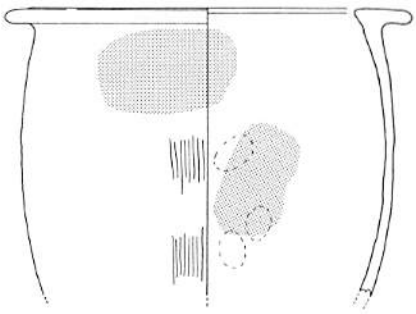
3．FJ533b　板付Ⅱc式



7．FJ552　須玖Ⅱ式古

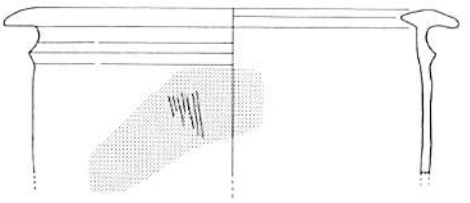


4．FJ554　須玖Ⅰ式

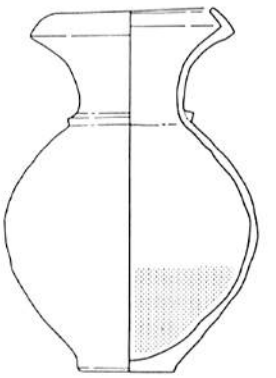


8．FJ556　須玖Ⅱ式

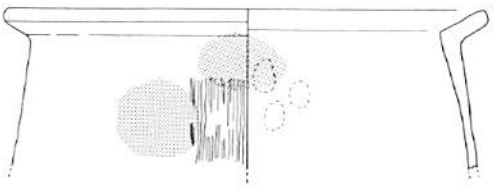
第125図　測定した弥生土器１（縮尺不同，FJ番号は資料番号，アミかけの部分は試料採取部位）



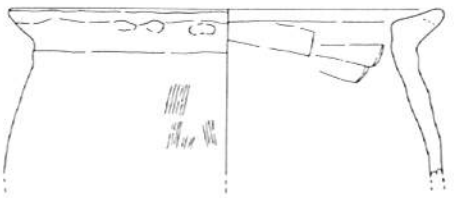
9．FJ544　須玖Ⅱ式中



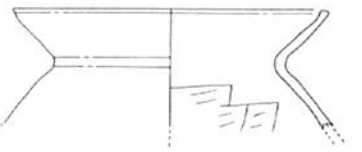
13．FJ542　下大隈式



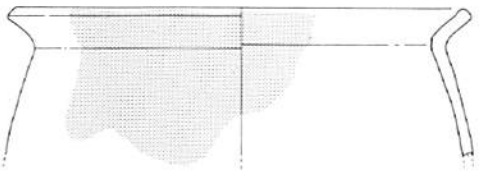
10．FJ545　須玖Ⅱ式新



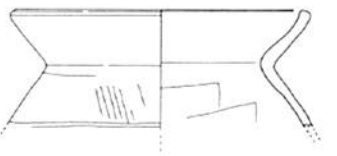
11．FJ557　須玖Ⅱ式古



14．FJ558　布留系



12．FJ550　高三潴式



15．FJ559　布留系

第126図　測定した弥生土器２（縮尺不同，FJ 番号は資料番号，アミかけの部分は試料採取部位）

(4) 炭化物の処理

試料については，以下の手順で試料処理をおこなった。①の作業は，国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林・新免，②③は，坂本・尾嵜が行った。

① 前処理：酸・アルカリ・酸等による化学洗浄（AAA 処理）。

AAA 処理は，土器付着炭化物については，アセトンで洗浄し，油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA 処理として，80℃，各1時間で，希塩酸溶液（1N-HCl）で資料などに含まれる可能性のある炭酸カルシウム等を除去（2回）し，さらにアルカリ溶液（NaOH，1回目0.001N，4回目以降0.01N，7回目以降0.1N）でフミン酸等を除去する。7～8回行い，ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（240分以上）を2回おこない中和後，純水により洗浄した（4回）。

試料は，AAA 前処理を行った量（処理量），処理後回収した量（回収量），二酸化炭素化精製に供した量（精製），精製した二酸化炭素の炭素相当量（ガス）の重量（mg）を表38に記す。処理した量に対する AAA 処理後に回収された試料の重量による重量比を含有率1，二酸化炭素に精製した際の炭素含有率を含有率2，含有率1と含有率2を掛けて求められるところの処理した量に対する炭素量の重要比を含有率3として表38に付す。

② 二酸化炭素と精製：酸化銅により試料を酸化（二酸化炭素化），真空ラインを用いて水，チッ素イオンなどの不純物を除去する。

AAA 処理のすんだ乾燥試料を，500mgの酸化銅および銀線とともに石英ガラス管に投じ，真空に引いてガスバーナーで封じきった。このガラス管を電気炉で850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので，ガラス真空ラインを用い，液体チッ素等による昇華・凝縮操作によってこれを分離・精製した。

③グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換し，アルミ製カソードに充填する。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し，水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で650℃で12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり，グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラフィトは鉄粉とよく混合したあと，穴径1㎜のアルミニウム製カソードに600N の圧力で充填した。

表37　試料一覧と測定結果

資料番号	歴博番号	機関番号	出土地点	器種・付着炭化物サンプリング箇所	型式名	時期	炭素14年代 ^{14}C BP	較正年代 cal BC，cal AD	%	δ^{13}C
1	FJ0527	IAAA-40810	2原地点河川197	甕・口縁部外面	板付Ⅱc式	弥生前期末	2410±40	760cal BC-680cal BC	22.6%	−23.9
								665cal BC-630cal BC	4.7%	
								590cal BC-575cal BC	1.8%	
								555cal BC-395cal BC	66.3%	
2	FJ0533b	IAAA-40812	2原地点河川c 7ヤⅢ P5977・No.458	甕・胴部最大径部外面	板付Ⅱc式	弥生前期末	2250±40	395cal BC-335cal BC	30.2%	−25.8
								320cal BC-200cal BC	64.9%	
3	FJ0532b	IAAA-40811		甕・胴部外面	板付Ⅱc式	弥生前期末	2270±40	395cal BC-345cal BC	37.3%	
								320cal BC-225cal BC	50.8%	
								220cal BC-200cal BC	7.1%	
4	FJ0554	IAAA-40817	タメSRベ9 P51	甕・底部内面	須玖Ⅰ式	弥生中期前葉	2380±30	755cal BC-700cal BC	9.6%	−23.2
								535cal BC-530cal BC	1.2%	
								520cal BC-390cal BC	84.4%	
5	FJ0526	IAAA-41096		甕・口縁下突帯	須玖Ⅰ式末	弥生中期中頃	2250±60	400cal BC-170cal BC	95.2%	
6	FJ0537	IAAA-40813	2原地点CD5ヤⅡ P1486	甕・胴部突帯下外面	須玖Ⅱ式古	弥生中期後葉	2160±40	355cal BC-270cal BC	33.5%	
								260cal BC- 90cal BC	60.2%	
								75cal BC- 60cal BC	1.8%	
7	FJ0552	IAAA-41098		甕・口縁部外面	須玖Ⅱ式古	弥生中期後半古	2150±40	355cal BC-280cal BC	26.5%	
								255cal BC-240cal BC	2.6%	
								230cal BC- 85cal BC	61.3%	
								80cal BC- 50cal BC	4.8%	
8	FJ0556	IAAA-40818	タメC2SR9 P570	甕・胴部上位外面	須玖Ⅱ式	弥生中期後葉	2150±30	350cal BC-290cal BC	25.7%	
								255cal BC-245cal BC	1.3%	
								230cal BC-215cal BC	5.2%	
								210cal BC- 90cal BC	61.6%	
								70cal BC- 60cal BC	1.1%	
9	FJ0544	IAAA-41097		甕・胴部上位外面	須玖Ⅱ式中	弥生中期後葉新	2260±40	395cal BC-345cal BC	32.6%	
								320cal BC-200cal BC	62.2%	
10	FJ0545	IAAA-40815	タメSR0ベ9 P726	甕・胴部上位外面	須玖Ⅱ式新	弥生中期末	2240±30	385cal BC-340cal BC	24.9%	
								320cal BC-200cal BC	70.3%	
11	FJ0557	IAAA-41099		甕・胴部外面	須玖Ⅱ式古	弥生中期後葉	2090±40	335cal BC-330cal BC	0.5%	
								200cal BC- 35cal BC	88.1%	
								30cal BC- 15cal BC	2.8%	
								10cal BC-cal AD 5	3.3%	
12	FJ0550	IAAA-40816	タメP2SR9 P786	甕・胴部上位外面	高三潴式	弥生後期前葉	2130±40	350cal BC-290cal BC	14.3%	−25.5
								255cal BC-250cal BC	0.5%	
								230cal BC-215cal BC	3.0%	
								210cal BC- 45cal BC	77.6%	
13	FJ0542	IAAA-40814	10原 No.122	複合口縁壺・底部内面	下大隈式	弥生後期中頃古	1920±30	cal AD 5-cal AD 10	0.8%	−25.9
								cal AD 20-cal AD135	91.6%	
								cal AD160-cal AD175	1.6%	
								cal AD200-cal AD210	1.0%	
14	FJ0558	IAAA-40819	11ト7E-19落3-Ⅱ.11特42	甕・口縁部外面	布留系	古墳前期	1710±30	cal AD260-cal AD315	31.6%	−26.7
								cal AD320-cal AD415	63.3%	
15	FJ0559	IAAA-40820	11ト7E-落3・Ⅱ.11特18	甕・口縁部外面	布留系	古墳前期	1750±30	cal AD220-cal AD390	95.1%	

表38　試料の重量と炭素含有率

No.	試料番号	採取量mg	処理量mg	回収量mg	含有率1％	精製mg	ガスmg	含有率2％	含有率3％
F J 526	5	123.1	51.6	26.1	50.5	4.3	2.7	61.8%	31.2%
F J 527	1	97.3	46.9	17.5	37.2	5.2	3.2	61.6%	22.9%
F J 532 b	3	65.7	46.8	3.7	8.0	3.3	2.1	64.1%	5.1%
F J 533 b	2	83.8	36.1	9.9	27.4	5.1	3.1	60.1%	16.5%
F J 537	6	96.3	44.2	3.2	7.3	2.6	1.6	60.2%	4.4%
F J 542	13	96.8	49.5	34.0	68.6	5.4	3.5	65.4%	44.8%
F J 544	9	106.2	43.2	21.6	50.1	5.6	3.8	68.6%	34.4%
F J 545	10	233.8	52.0	2.9	5.6	2.3	1.4	61.3%	3.4%
F J 550	12	102.7	60.0	32.1	53.5	5.6	3.3	59.1%	31.6%
F J 552	7	148.7	49.8	12.7	25.5	5.5	3.5	62.5%	15.9%
F J 554	4	363.5	70.3	27.7	39.4	5.6	3.1	54.9%	21.6%
F J 556	8	63.1	40.7	3.3	8.0	2.5	1.8	72.7%	5.8%
F J 557	11	56.0	56.0	25.2	45.0	4.1	2.7	64.6%	29.1%
F J 558	14	108.1	57.3	10.7	18.7	5.2	3.6	69.2%	12.9%

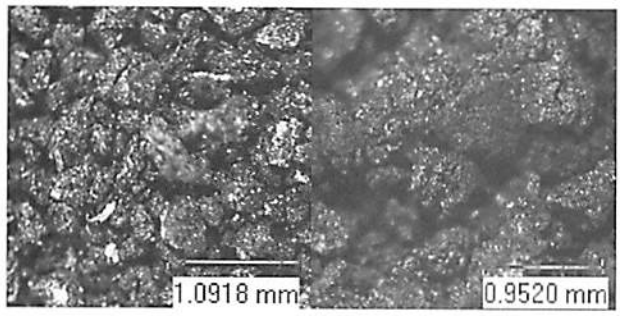
(5)　測定結果と暦年較正

AMSによる^{14}C測定は，加速器分析研究所（測定機関番号IAAA）に依頼して，標準試料8試料とともに測定した。標準試料はNIST標準（HO_xI）で前節の②～③の操作を行って歴博で作成したものである。

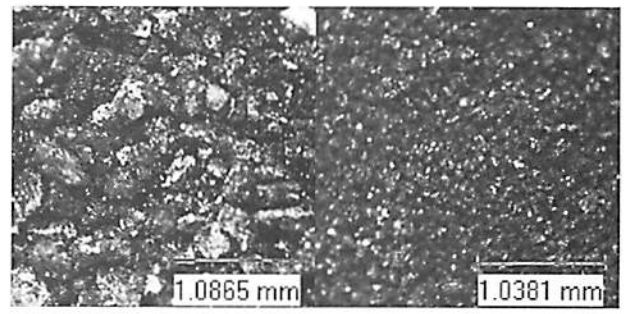
年代データの^{14}C BPという単位は，西暦1950年を基点にして計算した^{14}C年代（モデル年代）であることを示す。(BPまたやyr BPと記すことも多いが，本稿では^{14}C BPとする)。^{14}Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差，68%信頼限界）である。

AMSでは，グラファイト炭素試料の^{14}C／^{12}C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには，試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C／^{12}C比により，^{14}C／^{12}C比に対する同位体効果を調べて補正する。^{13}C／^{12}C比は，標準体（古生物blemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}C／^{12}C比）偏差値に対する千分率δ^{13}C（パーミル，‰）で示され，この値を－25‰に規格化して得られる^{14}C／^{12}C比によって補正する。補正した^{14}C／^{12}C比から，^{14}C年代値（モデル年代）が得られる（英語表記ではConventional　Ageとされることが多い)。加速器分析研究所によるδ^{13}C値は，試料のδ^{13}C値としては，正確ではないため報告しない。あらためて試料の1部について，明昭通商（株）に委託して安定質量分析計で測定した結果を表37に記す。

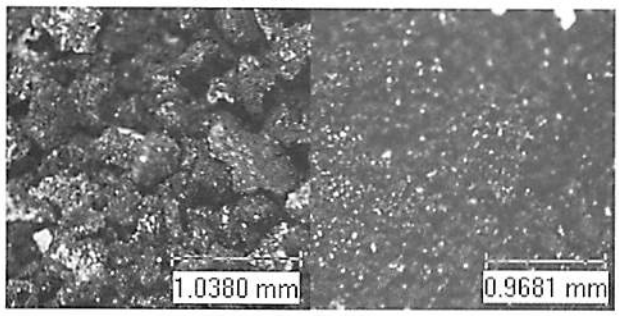
測定値を較正曲線INTCAL98（暦年代と炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース，1998年版）〔Stuiver,M.,et.al. 1998〕と比較することで実年代（暦年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため，統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち，測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより，暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムには，オックスフォード大のOxCal Programに準じた方法で歴博が作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する。95%信頼限界で計算した。年代は，較正された西暦calBCなどと表す。括弧内は推定確率である。第127・128図は，各試料の暦年較正の確率分布である。



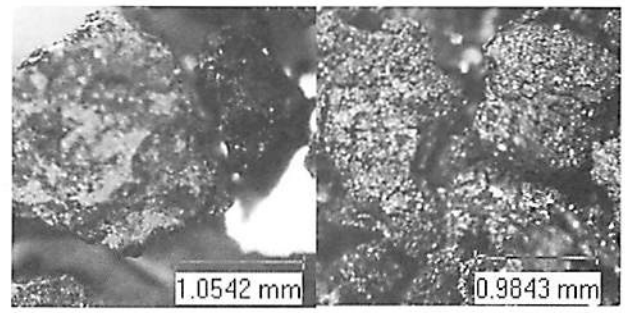
1　FJ527　　AAA 処理前　　処理後



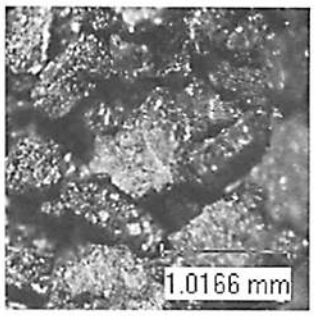
2　FJ533　　AAA 処理前　　処理後



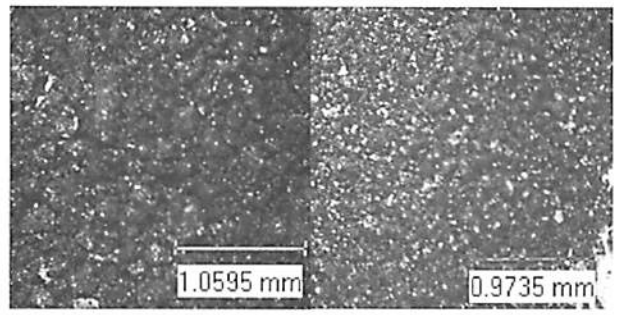
3　FJ532b　　AAA 処理前　　処理後



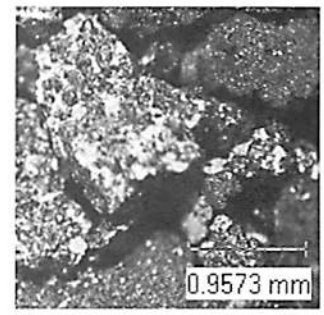
4　FJ554　　AAA 処理前　　処理後



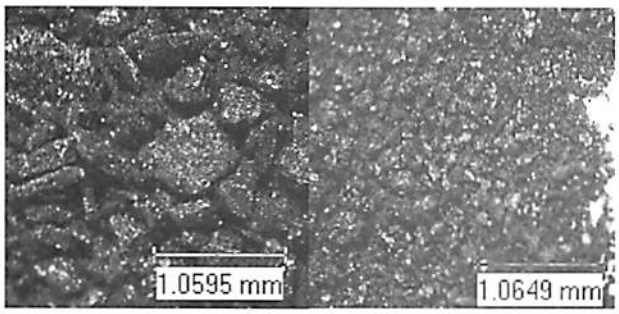
5　FJ526　　AAA 処理前



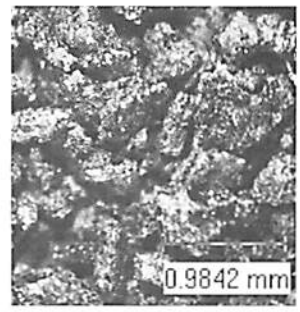
6　FJ537　　AAA 処理前　　処理後



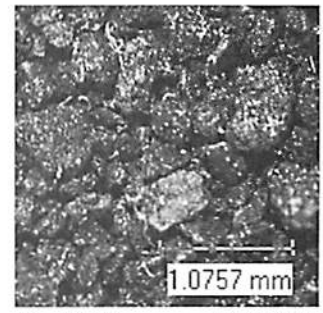
7　FJ552　　AAA 処理前



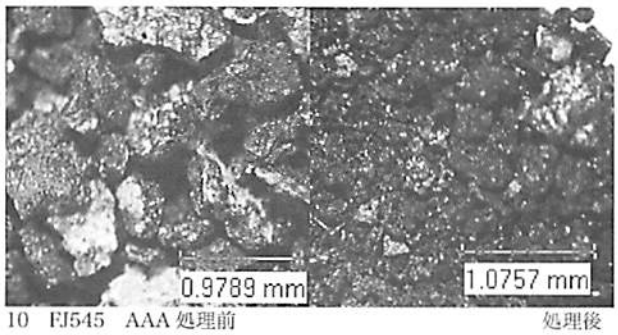
8　FJ556　　AAA 処理前　　処理後



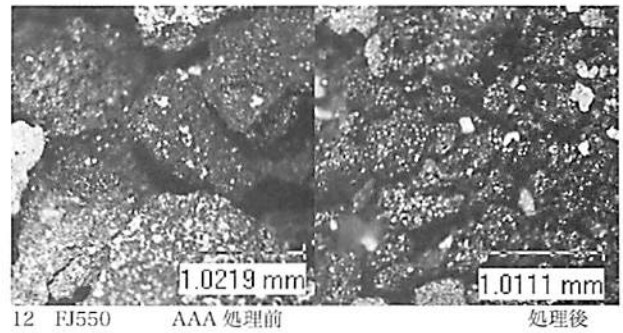
9　FJ544　　AAA処理前



11　FJ557　　AAA処理前

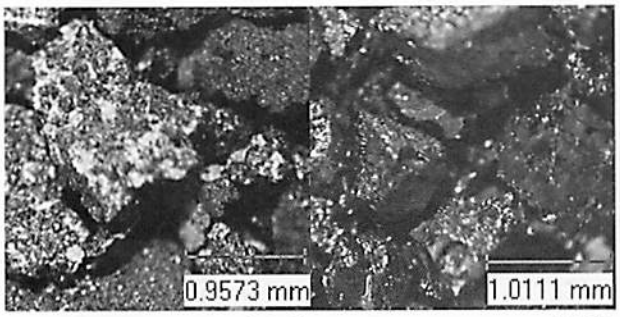


10　FJ545　AAA 処理前　　処理後

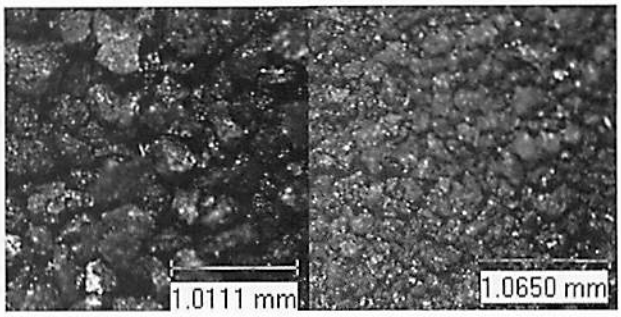


12　FJ550　　AAA 処理前　　処理後

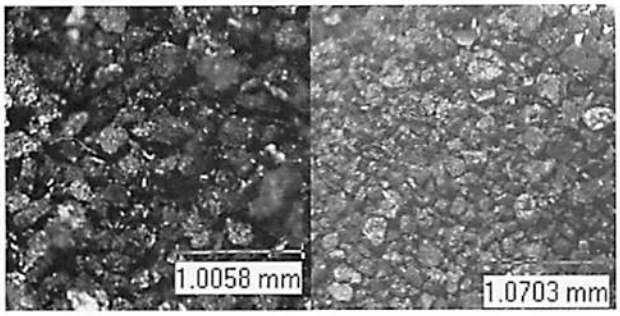
PL.29　試料の炭化物写真 1（24倍：FJ 番号は試料番号）（約16倍）



13　FJ542　　AAA 処理前　　処理後



14　FJ558　　AAA 処理前　　処理後



15　FJ559　　AAA 処理前　　処理後

PL.30　試料の炭化物写真２（24倍：FJ 番号は試料番号）（約16倍）

(6)　年代的考察

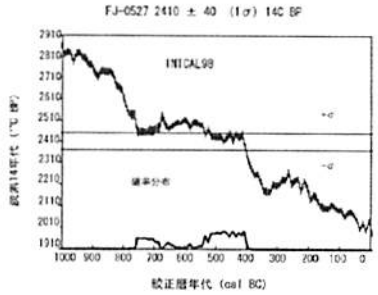
３つの点で成果が得られたので考察する。

①　較正年代（第129図）

第129図に今回測定した較正年代をおとした年表を示した。すでに報告済みの福岡市雀居遺跡12次の較正年代値や，未報告の中で当該期の較正年代値を県名で表示した。人骨は田中良之氏のデータの内，２σで処理されている分を用いた〔田中ほか2004〕。棒線の太さは確率密度をあらわす。

前期末の年代は，今回の３点を加えてもまだ４例しか測定例がないことから，絞り込むことができない。雀居12－２は，2003年５月に括弧つきの前400年として報告した試料で，前期末が前400年までさかのぼるという衝撃的な報告のもととなった試料である〔春成他2003〕。特に原の辻１はδ^{13}C値，および炭素と窒素の同位体比から海洋リザーバー効果の影響を受けている可能性が高いと考えた試料であった。さらなる試料の増加が必要である。原の辻２・３は，他遺跡の須玖Ⅰ式とも重複しているところから，前期末の年代として新しめに出ていることがわかる。中期初頭の可能性も含めて検討する必要がある。その中で，前期末の甕棺（金隈）から見つかった人骨が１と２・３の中間にきていることが注目される。これが前期末の真の較正年代を示すかどうかは現時点でわからないが，今後注目していきたい試料である。

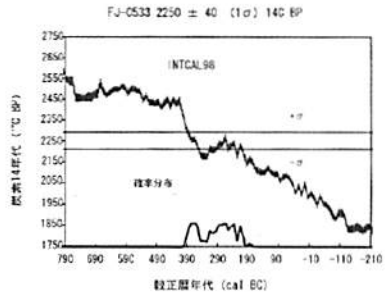
中期前葉，須玖Ⅰ式の試料として，茶色の白抜きであらわした原の辻４があり，C_4植物起源の植物が混入している炭化物とみなしたものである。本来C_4植物起源であっても古く出ることはないが，本試料はやや古く出ている。したがって須玖Ⅰ式に属する木製品に塗られていたウルシの較正年代からみて，原の辻５の試料が，本来の須玖Ⅰ式の較正年代と整合性をもつことになる。これは汲田式（津古片曽葉）の甕棺から見つかった人骨の較正年代とも整合性をもっている。以上，福岡や熊本の試料などを加えた総数11点の試料から統計的に得られた須玖Ⅰ式の較正年代は前300年から前200年である。



解析結果

t_{median} =	500 cal BC
95% range	
760 cal BC ~	680 cal BC (22.6%)
665 cal BC ~	630 cal BC (4.7%)
590 cal BC ~	575 cal BC (1.8%)
555 cal BC ~	395 cal BC (66.3%)

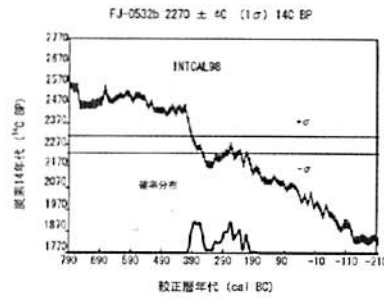
1　FJ527　板付Ⅱｃ式



解析結果

t_{median} =	290 cal BC
95% range	
395 cal BC ~	335 cal BC (30.2%)
320 cal BC ~	200 cal BC (64.9%)

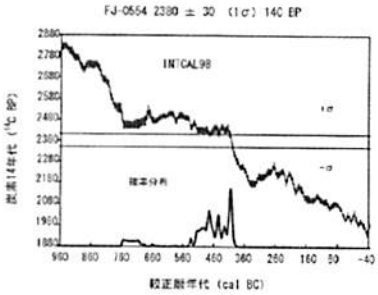
2　FJ533b　板付Ⅱｃ式



解析結果

t_{median} =	290 cal BC
95% range	
395 cal BC ~	345 cal BC (37.3%)
320 cal BC ~	225 cal BC (50.8%)
220 cal BC ~	200 cal BC (7.1%)

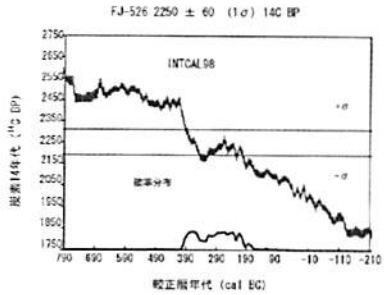
3　FJ532ｂ　板付Ⅱｃ式



解析結果

t_{median} =	430 cal BC
95% range	
755 cal BC ~	700 cal BC (9.6%)
535 cal BC ~	530 cal BC (1.2%)
520 cal BC ~	390 cal BC (84.4%)

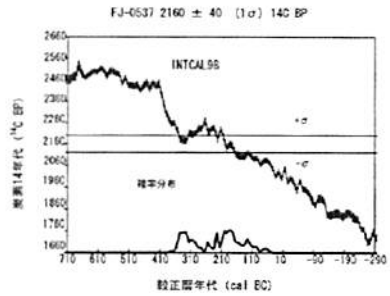
4　FJ554　須玖Ⅰ式



解析結果

t_{median} =	290 cal BC
95% range	
400 cal BC ~	170 cal BC (95.2%)

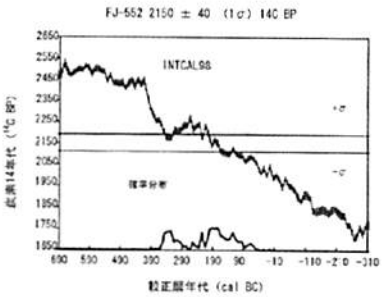
5　FJ526　須玖Ⅰ式末



解析結果

t_{median} =	210 cal BC
95% range	
355 cal BC ~	270 cal BC (33.5%)
260 cal BC ~	90 cal BC (60.2%)
75 cal BC ~	60 cal BC (1.8%)

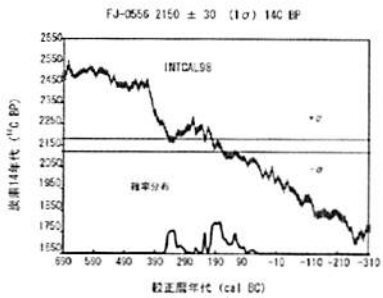
6　FJ537　須玖Ⅱ式古



解析結果

t_{median} =	190 cal BC
95% range	
355 cal BC ~	230 cal BC (26.5%)
255 cal BC ~	240 cal BC (2.6%)
230 cal BC ~	85 cal BC (61.3%)
80 cal BC ~	50 cal BC (4.8%)

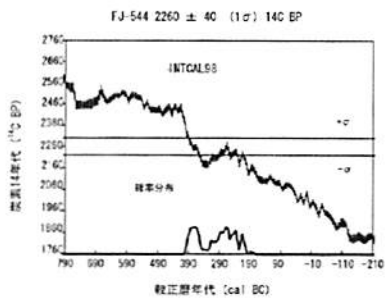
7　FJ552　須玖Ⅱ式古



解析結果

t_{median} =	190 cal BC
95% range	
350 cal BC ~	290 cal BC (25.7%)
255 cal BC ~	245 cal BC (1.3%)
230 cal BC ~	215 cal BC (5.2%)
210 cal BC ~	90 cal BC (61.6%)
70 cal BC ~	60 cal BC (1.1%)

8　FJ556　須玖Ⅱ式

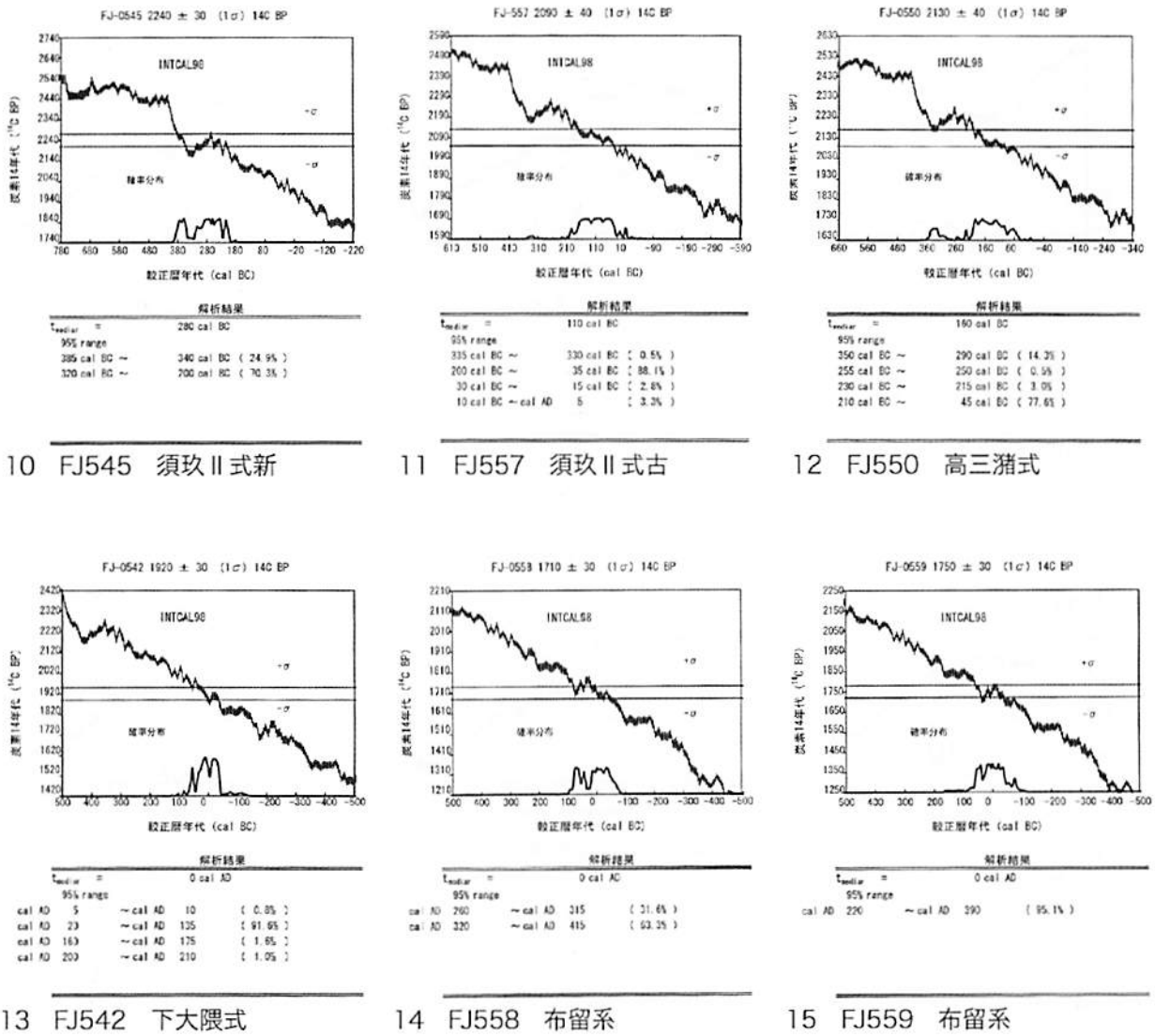


解析結果

t_{median} =	290 cal BC
95% range	
395 cal BC ~	345 cal BC (32.8%)
320 cal BC ~	200 cal BC (62.2%)

9　FJ544　須玖Ⅱ式中

第127図　暦年較正の確率分布図１（数字は資料番号）



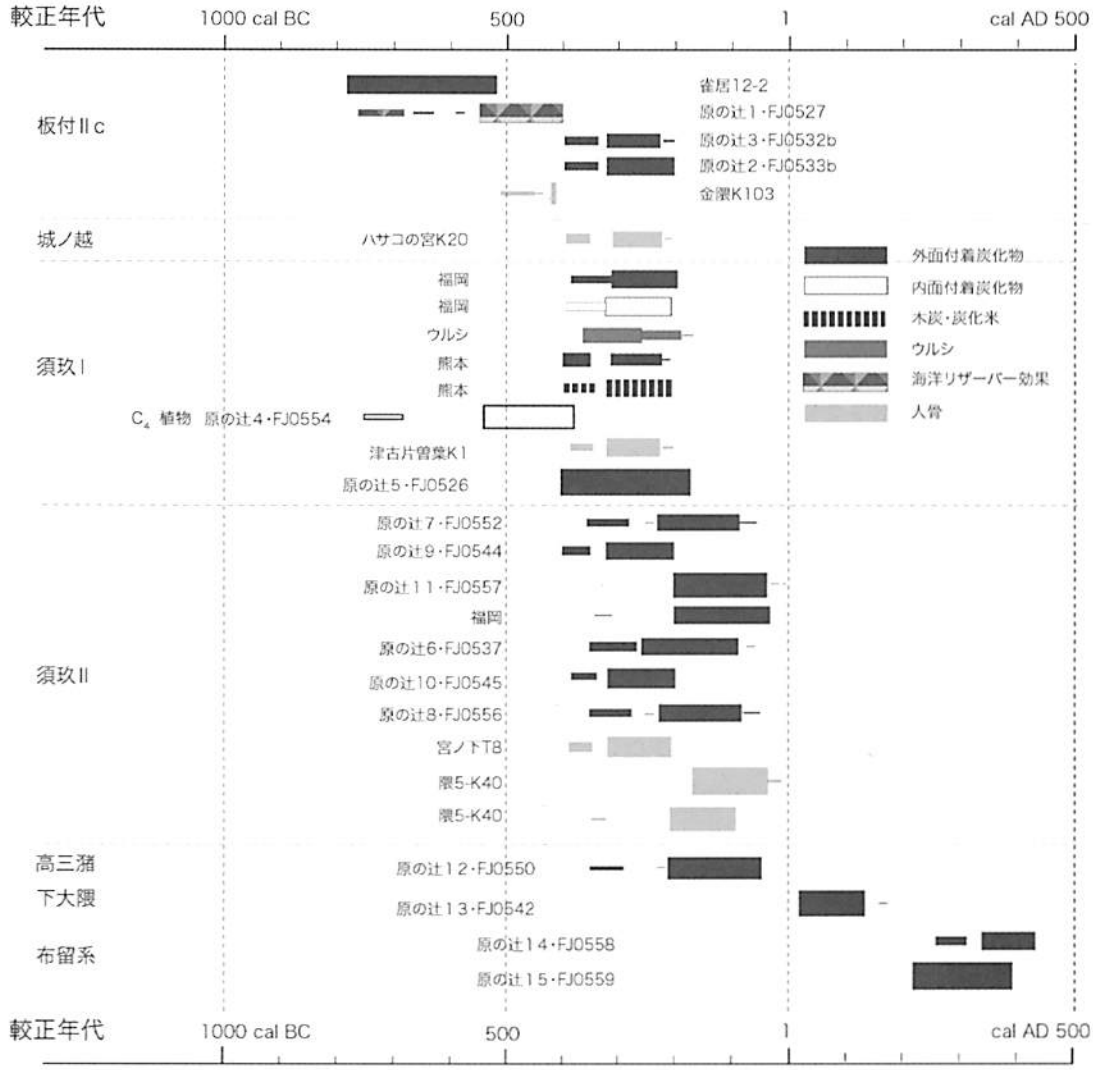
10　FJ545　須玖Ⅱ式新　　11　FJ557　須玖Ⅱ式古　　12　FJ550　高三潴式

13　FJ542　下大隈式　　14　FJ558　布留系　　15　FJ559　布留系

第128図　暦年較正の確率分布図２（数字は資料番号）

今回の試料の中でもっとも数が多かったのが須玖Ⅱ式である。須玖Ⅱ式とした試料のなかでも，９・10のように須玖Ⅰ式の較正年代に分布の中心があるものもあるが，先の須玖Ⅰ式に比定されたウルシの較正年代からみて，原の辻６，８，11などの較正年代が須玖Ⅱ式本来の年代に近いものと予想される。原の辻の６点を加えた総数11点の試料から統計的に得られた須玖Ⅱ式の較正年代は，現在のところ前200年から前40年の間に収まるものと考えている。この年代は，須玖Ⅱ式に併行する甕棺である須玖式（宮ノ下）や立岩式（隈５）から見つかった人骨の較正年代とも整合性もつ。前漢鏡が副葬されることから，以前より前１世紀後半を上限とすると考えられてきた須玖Ⅱ式であるが，炭素14年代の測定の結果をみる限り須玖Ⅱ式の上限は前200年までさかのぼることになる。今後の測定数の増加が期待される。

後期については，高三潴式，下大隈式を１点ずつしか測定してないのに加え，ほかの遺跡を加えてもまだ測定数が少ないので，年代を絞り込むことができない。布留式併行期についても同様である。弥生後期の較正年代については，日本のスギを用いた前240～後900年の較正曲線からみると，後80～



第129図　原の辻遺跡出土土器の較正年代分布図

200年頃に30年のずれがあることをすでに報告しているので〔Sakamoto M.et.al 2003〕，この点も含めて今後，試料を増やして精査していく必要がある。

② C_4植物

試料4の内面試料は，$\delta^{13}C$が−23.2‰と重く，海洋リザーバー効果も疑われるが，C／Nの元素比は29.2，チッ素15と14の比，$\delta^{15}N$が4.79と得られて，海洋の値とは大きく異なるので，むしろC_4植物が20%ほど混入した結果である可能性がある。植物には光合成のメカニズムの違いからC_3植物とC_4植物があり，前者はコメやドングリ，後者がヒエやアワといわれている。炭素13と12の比，すなわち$\delta^{13}C$の値が−10‰台のものは，C_4植物である可能性を疑う必要がある。韓国早・前期無文土器や中国・近畿地方の弥生土器の内面付着炭化物からはその存在を確認できていたが，もし本資料をC_4植物によるものとすると九州では初の検出例となる。これまで行ってきた九州の試料には中国・近畿に比べて内面付着炭化物の試料が少なかったためで，もともと九州にC_4植物自体が少なかったことを意味するわけではない。なお九州のC_4植物の導入時期を知るには，より確実な例のデータを

増やす必要がある。

ヒエ・アワ類は明治以来，縄文農耕の有力な作物として想定されながら，縄文時代の遺跡からの植物遺体の確実な出土例はいまだなく，弥生時代に入ってもわずかしか見つかってこなかったので，弥生時代は水稲中心の農耕社会として描かれる主な原因となってきた。今回，炭素14年代測定の副産物として，ヒエ・アワ類が存在した可能性が得られたことは，今後の縄文・弥生農耕の実態を知る上であらたな学問分野創成の可能性を期待できる。

③　勒島式の較正年代

試料11は，口縁断面三角形の，いわゆる粘土紐口縁をもつ後期無文土器として知られる慶尚南道勒島遺跡出土土器を標識とする勒島式と，須玖Ⅱ式との折衷土器と考えられているものである。須玖Ⅱ式自体は，前200～前40年という較正年代であったが，試料11も前200～前35年の間に88.1％の確率で入っていることから，整合性のある年代である。

勒島式の較正年代はまだ本試料以外に歴博で測っていないものの，従来の考古学的な併行関係とも整合性をもっているので考古学的にも妥当な年代と考えている。

本稿は，１～３を藤尾，４・５を小林，６を藤尾が執筆し，今村峯雄の校閲を受けた。なお本稿を草するにあたり，長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所の安楽勉，村川逸朗さんをはじめ，冷房の効かない蒸し風呂のような収蔵庫の中で，立ちくらみにあいながらもお手伝いいただいた作業員のお二人には大変お世話になった。また常松幹雄氏には弥生土器の細別についてご教示を得た。試料調整には新免歳靖氏のご協力もえた。記して感謝の意を表したい。

この報告は，平成16年度文部科学省・科学研究費補助金学術創成「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」（研究代表西本豊弘）の成果の一部である。

（藤尾慎一郎・小林賢一・今村峯雄・坂本　稔・尾嵜大真）

【参考文献】

田中良之・溝口孝司・岩永省三・Tom　Higham　2004：弥生人骨を用いたAMS年代測定（予察）．第６回九州考古学会・嶺南考古学会合同学会発表要旨，pp.245-251.

春成秀爾・藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔　2003：弥生時代の開始年代－^{14}C年代の測定結果について－．日本考古学協会第69回総会研究発表要旨，pp.73-76.

宮崎貴夫編　1998：原の辻遺跡．原の辻遺跡調査事務所報告書第９集．

Sakamoto M.Imamura I.Van der Plicht,J.,Mitsutani T.and Sahara M.2003：*Radiocarbon* 45, pp.81-89.

Stuiver,M.et.al. 1998：I NTCAL98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0cal BP.*Radiocarbon*, 40(3), pp.1041-1083.

Ⅶ 総　　括

ここでは，原の辻遺跡全体の遺構・遺物をとおして，遺跡の変遷・特徴について記していく。遺跡の全体像を捉えるために工房址・環濠・住居址について，第134図～第137図でゾーニングをおこなった。ゾーニングをおこなうにあたっては，本文中で特に取り扱っていない，工房址について説明を加えていく。

工房址について

石器工房址について

石器については，丘陵北側で剥片類の廃棄土坑（第130図）が確認されると共に，製品や未製品が同じく北側を中心に多数出土していることからも，素材から製品までの製作工程がこの場所でおこなわれていたことは間違いない。石器の中でも，扁平片刃石斧・抉入方柱状片刃石斧・石鎌・石庖丁といった石器類の製作がおこなわれていたものと考えられ，北部九州での石器工人集団と同様に，原の辻遺跡でも，石器製作に関わる工人集団の存在が指摘されるところである。また，この工人集団は弥生時代中期後葉までは組織だったものが存在したものと考えられるが，後期の石器については積極的に語れる発見例に乏しいことから，現在の段階では，後期にはこれらの石器製作にかかわった工人集団は，解体した可能性を指摘しておく。このような例は北部九州の今山産の石斧や，立岩産石庖丁に

第130図　剥片廃棄土坑実測図

ついても同じ状況があることから，石器製作についても北部九州と同じ様な流れの中で捉えることができるものと考える。しかしながら，北部九州との相違は，生産をおこなっていたと考えられる石器の器種が多種にわたることから，他の遺跡以上に石器生産に力を入れていた状況が見て取れる。

石器の素材については，搬入品なのか，現地調達かは今後の課題であるが，石鎌や扁平片刃石斧の出土数から考えると，交易品として取引されていたことが十分考えられる。これらの石器がどことの交易で取引されたのかは原の辻遺跡を考える上で大きな課題である以上，今後のさらなる分析が必要となるであろう。

青銅製品の工房址

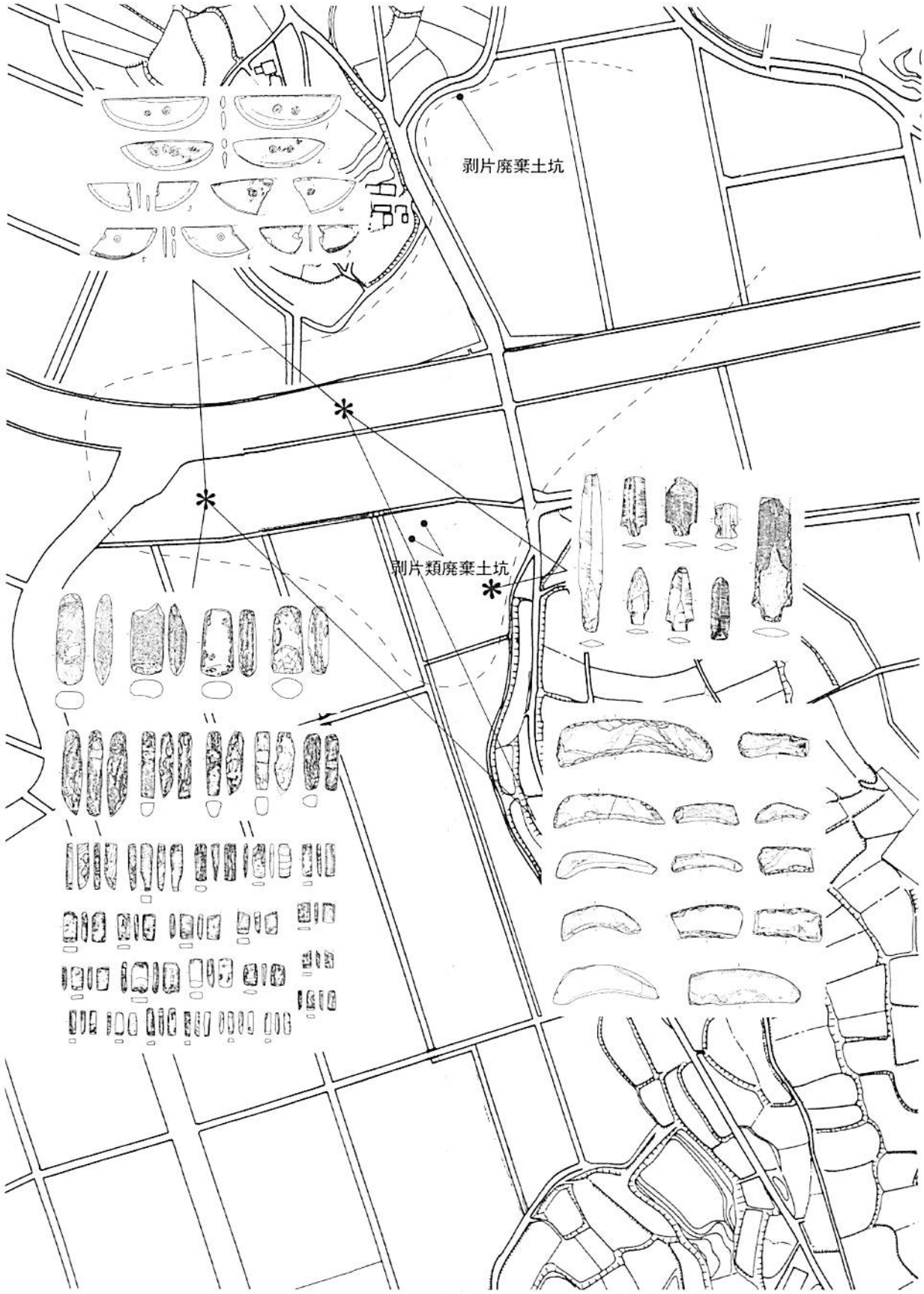
青銅器は，楽浪系・朝鮮半島系のものが多く，遺跡内で製作されたと考えられるものは数少ない。その中にあって，銅鏃の出土は群を抜いており，百数十点の出土がある。形態的にも統一化されており，遺跡内で製作された可能性が高い資料である。銅鏃が遺跡内で生産されていたとするならば須玖Ⅱ段階の高坏に貼りついた資料から，中期後葉頃には生産されていたものと考える。青銅製品の工房址については，未だ未発見ながら，丘陵上から鋳型が１点出土しており，鋳造をおこなっていた可能性が指摘される。この鋳型についてもその出土状況から，中期後葉の可能性が指摘されている。丘陵上からは，焼土をともなう土坑が幾つか発見されており，これらが銅生産に関わる遺構であるかどうかについては定かではないが，その可能性として挙げておく。

後期については銅生産に関連すると思われる遺構・遺物を積極的に見出すことはないが，中広形銅矛の破片や，銅製ヤリガンナなどは銅素材として持ち込まれた可能性もある。ただし，後期には銭貨や車馬具・楽浪系の銅釧・三翼鏃などの楽浪系の青銅製品の出土が多く，銅生産を積極的におこなっていたと考えるよりは，楽浪系の遺物が朝鮮半島南部を経由して舶載されたものが多かったと考える。

特に後期の銅製品は，実用品というより，祭祀や副葬品に利用するためにわざわざ朝鮮半島に求めた可能性が高いと思われ，直接搬入されたと思われる遺物が多い。また，国産の青銅製品としては，有鉤銅釧や不明銅製品（石突様銅製品）などの副葬品と思われ遺物があるが，これらについても北部九州産の可能性が高いと考えられ，後期に遺跡内で銅の生産がおこなわれていたと考えるには現段階では無理がある。後期には，金属器の生産は鉄器の生産に重点がおかれていたと考えられる。

金属製品については，推定の域を超えないが，丘陵上に工房址の存在を推定し，石器については，低地部にその工房址があることが明確である。時期的には，石器が中期前半から中期後葉の間，青銅器については不明な点が多いが銅鏃が遺跡内で生産されていたとすれば，中期後葉，青銅器については，後期の製品からみれば，楽浪系や朝鮮半島系のものが多く，後期の段階で銅生産をおこなっていた形跡は少なく，生産がおこなわれていたとしても小規模なものであった可能性が指摘される。ほとんどの青銅製品は交易の中で舶載されたものと理解する。

金属製品の工房が丘陵上に存在し，石器が低地部に存在することは，両者において住み分けが行われていた可能性が指摘できる。石器が集中して出土する地域は，原の辻遺跡の中でも古い段階の土器が確認されており，原の辻遺跡の形成期の居住域として捉えられている。また，朝鮮半島系の無文土器の出土もこの地域に集中していることから，石器を製作する集団は，朝鮮半島系の人達の技術指導のもと，石器製作に携わっていた可能性がある。このことに関しては，朝鮮半島の石器について同じ様な石器製作技術があるかどうかを検討しなければならないであろう。



第131図　溜池・河道出土の石器（縮尺不同）（破線内は工房址の範囲）

鉄器工房の推定

原の辻遺跡では，工具類を中心に農具・漁撈具・武器などあらゆる用途に鉄器が採用されている。このことを反映して，鉄器の出土状況は，生活の中心域と考えられる低台地上に限らず，東西低地部から墓域まで幅広く分布している。ここでは，鉄器製作の素材と考えられる棒状鉄製品や鍛冶具と考えられる鉄製品に注目して，原の辻遺跡における鉄器製作の在り方と工房域の推定を行う。

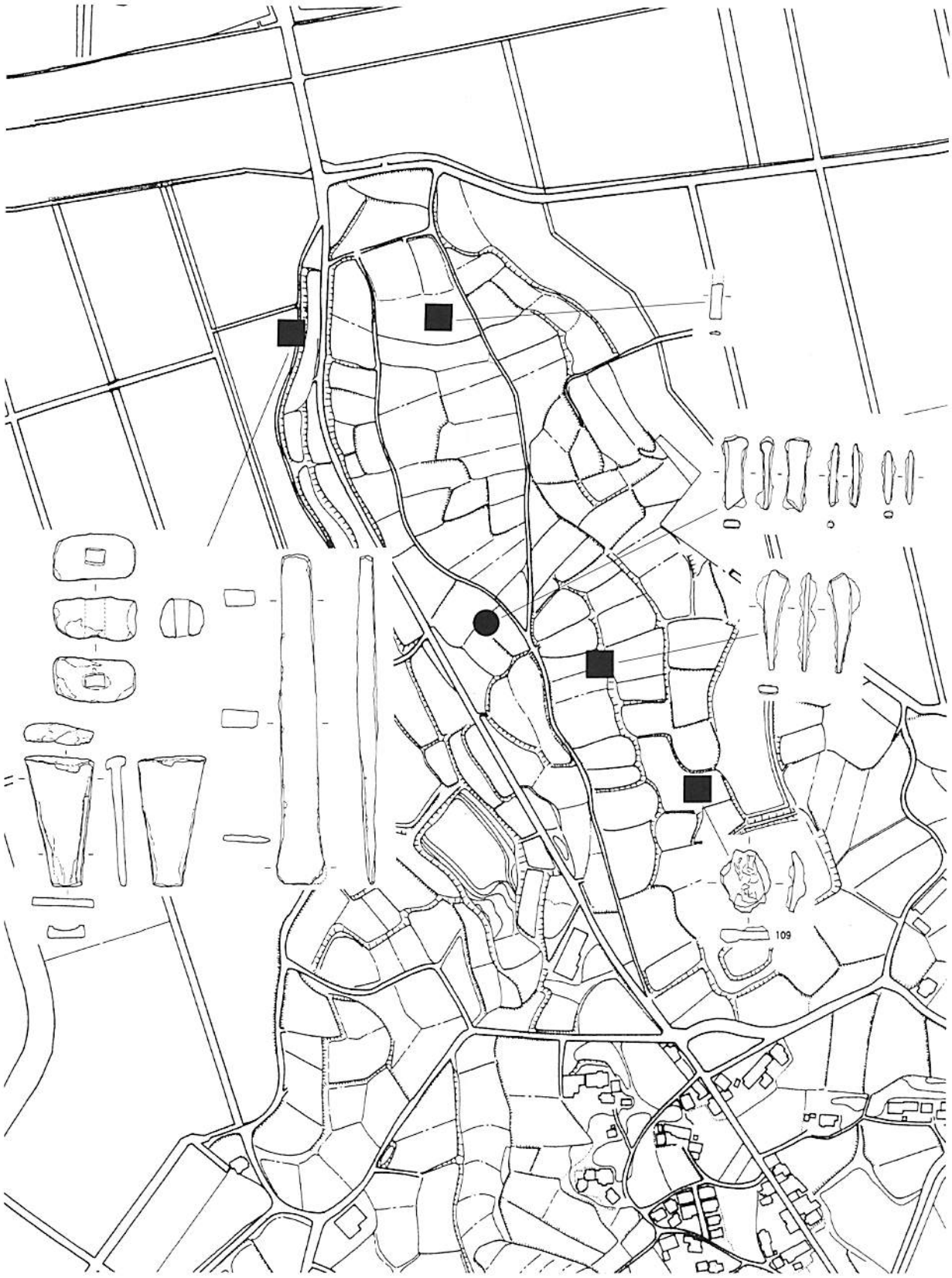
鉄器素材および鍛冶具の出土状況

原の辻遺跡で鉄器素材が出土するのは，弥生時代中期後葉以降である。平成11年度の芦辺町教育委員会（現壱岐市教育委員会）による調査の際，祭儀場にほど近い調査区の12号住居とした竪穴住居内から，２点の鉄器素材が出土している（**第132図**）（芦辺町報告第12集）。いずれも10cm未満で棒状を呈すが，細身で比較的厚みのあるものと，幅広で扁平なものの２者がある。12号竪穴住居はほぼ同時期の竪穴住居に切られており，住居内の施設の構造については不明であるが，鉄器素材の出土状況から住居内で鉄器製作が行われていた可能性が高い。原の辻遺跡での鉄器の初現は弥生時代中期中葉であるが，鉄器の導入からそれほど間をおかずに，鉄器製作を開始していたことになる。この時期の鉄製品には鉄鑿・鉄鎌・鉄鏃などがあるが，原の辻遺跡で製作の対象となったのは鉄鑿・鉄鏃などの小型鉄器と考えられ，棒状素材を加熱・鍛打し，鏨切りで整形して製作していたものと推測される。

弥生時代後期の鉄器素材は今のところ確認できない。弥生時代後期には，袋状鉄斧や刀子，ヤリガンナ，鉄鑿，鉄鎌，鉄鋤・鍬先，摘み鎌など，明らかに国産品と考えられる鉄製品が多く出土しており，これらの中には原の辻遺跡で製作したものも含まれているであろう。

古墳時代前期には，低台地上の竪穴住居内から鉄器素材を出土する例が増加し，祭儀場周辺から北端部にかけて散漫な分布を示す。竪穴住居址から出土する鉄器素材は，いずれも10cm未満で，幅広扁平な素材が中心となる。また，祭儀場東側に隣接する１号住居（Ｈ９年度調査，調査事務所報告書第11集）からは小型の椀形滓が出土しており，鉄滓の伴う小鍛冶が住居址内で行われていたことが確実である。低地部に目を転じると，北西低地部の河道内から，鉄槌をはじめ鋳造鉄斧転用の鉄鑿，鉄素材と考えられる板状鉄斧がセットで出土している。河道内からは，弥生時代後期後葉～古墳時代前期にかけての土器が出土しており，鉄素材および鍛冶具が伴う本格的な鉄器製作は，弥生時代後期後葉まで遡る可能性もある。これらの鍛冶具および板状素材からは，袋状鉄斧や鉄鋤・鍬先など，比較的大型の鉄製品も製作されたであろう。このように，弥生時代後期後葉には鍛冶具が出そろうとともに，古墳時代前期には鉄滓が出土することから，この時期以降，本格的な鉄器生産が行われたものと推測される。

工房については，基本的に竪穴住居内での製作が一般的であったと考えられる。鉄器製作関連遺物を出土した竪穴住居の分布は，弥生時代中期後葉には祭儀場北部に点在するのみである。鉄器製作の痕跡を残す竪穴住居の検出数自体が少なく，このエリアが工房として捉えうるかどうか疑問は残るが，他の時期と比べて，鉄器製作が特定の住居に限定されていた可能性は指摘できよう。一方，古墳時代前期には，祭儀場周辺に加えて台地北端部まで拡大しており，調査の進捗状況を加味すれば，この時期には住居内で個別に鉄器製作を行っていた可能性が高い。このように，鉄器製作址の分布は，集約→分散という大まかな流れをうかがうことができる。



第132図　原の辻遺跡出土鉄素材，鍛冶具分布図（●弥生時代中期 ■古墳時代前期）

第133図　原の辻遺跡出土木製品分布図（弥生時代中期、弥生時代後期）

木器工房の推定

木製品の工房を推定する方法としては，未成品の出土状況に着目する方法が最も有効である。しかし，木製品の取り上げに関しては調査によって精粗があり，未成品の出土状況は報告書掲載分だけでは必ずしも実情を反映していない可能性もある。特に，木製品が大量に出土した箇所では，調査現場で製品のみを取り上げる場合が多く，残りは取り上げずに埋め戻す例が多い。このため，取り上げていない木材の中に，木製品の未成品が含まれている可能性もあろう。このような問題はあるものの，現状での出土傾向を時期別にまとめてみたい。

木製品は，低地部一帯の河道や環濠内から出土している。未加工品も含めて，木製品が集中するエリアを時期別にゾーニングすると，弥生時代前期後葉～中期では東側低地部の沼状落ち込みと北部の河道から大量に出土し，後期には東西低地部に集中している（**第133図**）。未成品の出土状況に着目すれば，弥生時代前期後葉～中期には東側低地部沼状落ち込み内から斧柄未成品がまとまって出土している。弥生時代後期には，東西低地部の木製品集中箇所から斧柄や鍬の未成品が出土している。

木製品は単体で出土することは稀で，流木を含む木材が集中する箇所で，まとまって出土する例がほとんどである。未成品の出土状況も，一見すると時期によって偏りがあるようにも見受けられるが，実際には木製品集中エリアに未加工品から未成品，製品さらには転用品まで含んでいるのが実情である。したがって，木製品集中箇所でそれぞれ木器製作を行っていたと推測することができる。これに則れば，弥生時代前期後葉～中期には，東側低地部や北側低地部において，沼状落ち込みや河道といった自然の水辺で木製品製作を行っている。弥生時代後期には，東西低地部で木製品の製作が行われるが，西側低地部においては河道周辺で製作を行っており，弥生時代中期までの在り方と共通している。一方，東側低地部では環濠内から未成品が出土することから，この時期には環濠周辺でも木製品の製作を行っていた可能性が考えられるであろう。

このように，弥生時代前期後葉～後期にかけて，河道や沼状落ち込みといった水辺周辺で木製品製作が行われており，環濠や河道の展開と連動しながら低地部の各所で製作していたと考えることができる。

・原の辻遺跡の変遷

ここでは，個別にまとめた遺構群と工房群を時系列に沿って配置し，原の辻遺跡全体の集落の変遷についてまとめる。その際，遺構群の展開に基づいて画期を設定し，Ⅰ期～Ⅴ期に分けて詳述する。なお，原の辻遺跡の時期別の変遷については，宮崎貴夫氏によってすでにまとめられている（宮崎2001）。宮崎氏は，東アジアの情勢の中で原の辻遺跡の動向を位置付ける試みをなされており，非常に説得力に富むものである。しかし，その後の調査成果や遺構群の再検討により，画期の設定や遺構の解釈については若干の相違点もある。そのため，宮崎氏の業績に依りつつ，相違点や変更点を明確にしながら，遺構群の変遷にしぼって論を展開することにしたい。

Ⅰ期　弥生時代前期後葉～中期初頭（第134図）

原の辻遺跡の形成期である。この時期の土器は，東側低地部の沼状落ち込み，北西低地部の河道および溝，北部低地部の大溝といった低地部に集中し，後に竪穴住居や土坑が密集する台地上では，北半部を中心に土坑が散在するにすぎない。また，低地部においても河道や沼状落ち込みといった，天

然の水辺を中心に土器が出土しており，後の時期と比べて遺構の構築は低調である。出土遺物は土器が中心で，東側低地部の沼状落ち込み内からこの時期の木製品が若干出土するものの，生業活動の様相は明らかでない。ただし，南西低地部ではこの時期の水田畦畔を検出しており，集落形成時から水稲耕作を行っていたことが分かる。

この時期の遺構として目を引くのが墓域である。台地南東部に位置する石田大原地区では，甕棺墓52基，石棺墓19基，溝状遺構４条を検出している。副葬品には，戦国式銅剣や細形銅剣，細形銅矛，トンボ玉などがあり，集落形成期の特定集団墓と考えられる。また，台地上中央部では，平成15年度の調査でこの時期の石棺墓・甕棺墓が検出された。副葬品は持たず，石田大原地区の集団よりも相対的に下位の集団と考えられる。台地上におけるこの時期の遺構は，先述の通り北端部付近で土坑が散在しており，台地上でも北側と南側で土地利用の在り方が異なっていた点を指摘できる。

Ⅱ期　弥生時代中期前葉～中期末（第135図）

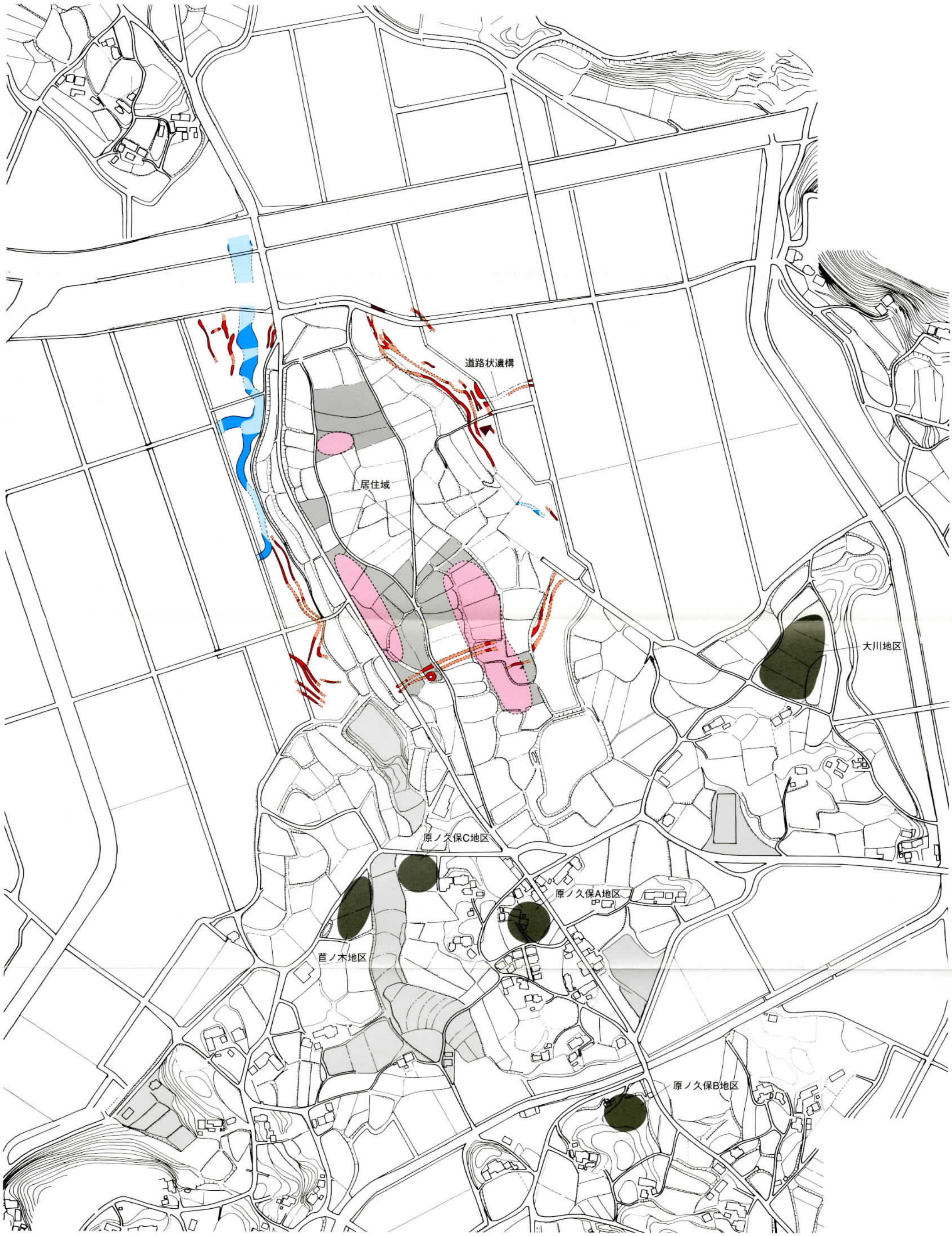
東西低地部で本格的に環濠が掘削され，大規模環濠集落が成立する段階である。環濠群は，東西両低地部で若干様相を異にしている。西側低地部では，台地裾に沿って南北に流れる河道を軸に，これに接続する形で南北に環濠が展開する。環濠は基本的に２条が併走し，これより西側にも展開するものの，途中で止まるものが多く，南北に長く展開することはない。東側低地部では，沼状落ち込みを起点に展開する点が特徴である。東側と同じく２条を基本とするが，複雑に分岐・合流を繰り返しながら南北に展開する。東西低地部におけるこれらの環濠は，台地上を横断して接続するが，最高地点付近では南側に位置する環濠が半円形に南側に張り出し，物見の空間となる。また，この時期の環濠群は南側台地へも展開しており，推定で南北750m，東西300mの範囲を囲む巨大環濠集落となる。

環濠内の遺構には，竪穴住居，土坑，掘立柱建物がある。台地上の調査は調査面積が限られているものの，現在の知見では，台地南半部に竪穴住居群および掘立柱建物群が展開し，台地北半部では竪穴住居も散在するものの，土坑群がまとまる傾向にある。台地北半部の土坑群は廃棄土坑を主体とするが，弥生時代中期中葉の焼土坑が数基確認されており，火を使う何らかの工房が展開する可能性がある。また，台地南半部では，弥生時代中期後葉の竪穴住居内から鉄器素材と考えられる棒状鉄製品が出土しており，小規模な鉄器製作を行っていたことが考えられる。なお，この竪穴住居に近隣する包含層中からは，青銅器の鋳型が出土しており，この段階に伴う可能性が高い。したがって，鉄器製作だけでなく，青銅器の鋳造も付近で行われていた可能性が高く，青銅器工房と鉄器工房が近接して営まれていたことが推測される。

環濠の外側に位置する低地部では，北西低地部や北低地部を中心に土坑群が展開する。これらの土坑群は廃棄土坑が主体であるが，廃棄物の中に土器だけでなく石器製作に伴うチップが多く含まれる点は注目される。これらのチップは乳白色の頁岩が主体であり，扁平片刃石斧を製作する際のチップと考えられる。原の辻遺跡での扁平片刃石斧の製作には，節理と直交するように縦長剥片を作出する技術が伴っており，石材の調達から剥片剥離，研磨に至るまで，北西低地部一帯で行っていた可能性が高い。また，同じく北西低地部一帯では，この段階の無文土器がまとまって出土しており，石器工人とともに渡来人の居住域であった可能性が高い。なお，この段階の低地部一帯では，掘立柱建物が散在する。北西低地部の掘立柱建物は環濠の外側に位置しており，日常的な居住空間もしくは「市」として利用されたものであろう。一方，南東低地部では環濠内で密集して展開する掘立柱建物群を検

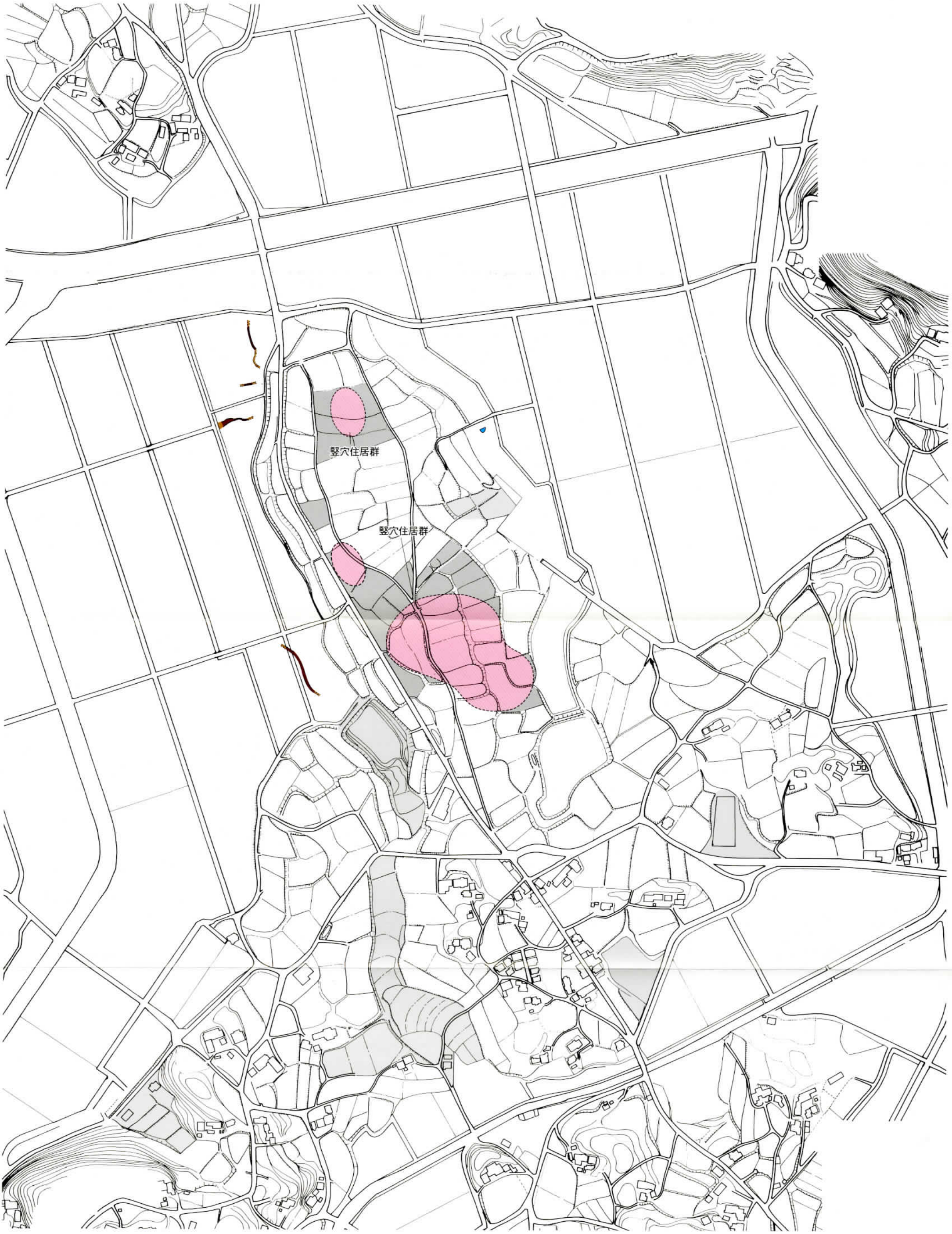
第134図 原の辻遺跡の変遷（弥生時代前期）
（濃いアミカケは墓域，薄いアミカケは谷を示す）

第135図　原の辻遺跡の変遷（弥生時代中期）
（濃いアミカケは墓域，丘陵上のアミカケは調査区域，薄いアミカケは谷を示す）



第136図　原の辻遺跡の変遷（弥生時代後期）

（濃いアミカケは墓域，丘陵上のアミカケは調査区域，薄いアミカケは谷を示す）



第137図　原の辻遺跡の変遷（古墳時代前期）
（丘陵上のアミカケは調査区域，薄いアミカケは谷を示す）

出しており，倉庫群の可能性も考えられる。このほか，河道を中心に丹塗り土器が大量に出土しており，水辺を対象とした祭祀行為が行われていたものと推測される。

北西低地部のこの時期の遺構で重要なのは，船着き場である。内海から小舟に乗り換え，旧幡鉾川を遡ってこの地点まで人と物資を運んだものと考えられ，河岸の荷揚場と考えられる。周辺の低地部には渡来人の居住域が想定されるが，船着き場の存在から同時に「市」の存在も想定され，北西低地部一帯は今日のバザールのような空間であったと想定できよう。

この段階の墓域は，台地の西側・北側・東側で確認できる。Ⅰ期の特定集団墓であった石田大原地区は，この時期まで存続するものの副葬品はガラス小玉などの装身具類に限られ，かわって大川地区に特定集団墓が形成される。この墓域では有鉤銅釧や昭明鏡などが採集されていることから，弥生時代中期末～後期前半期にかけての特定集団墓と考えられる。

なお，この段階の環濠群は弥生時代中期末でいったん埋没する。

Ⅲ期　弥生時代後期初頭～前葉

この時期の遺構群は非常に貧弱である。環濠内から土器が出土するもののごくわずかで，台地上に至ってはほとんど遺構を確認することはできない。墓域では，台地の西側に位置する大川地区，台地南側に位置する原ノ久保Ａ地区，台地の北側に位置する閏繰地区でこの段階の墓を検出しているが，数としては少なく，目立った副葬品も持たない。宮崎氏は，環濠出土土器の中で空白の時期に相当するこの時期を，弥生時代後期における環濠再掘削の時期に充てているが（宮崎2001），台地上遺構群の貧弱な在り方からは，この段階で環濠を再掘削して集落全体を整備したとは考えにくい。現在確認できる遺構群の在り方を素直に捉えるならば，Ⅱ期までの集住的な在り方から，分散化した居住形態を採用し，原の辻遺跡周辺でも小規模な集団が生活するのみであったことが想像できよう。

Ⅳ期　弥生時代後期中葉～終末

いわゆる「原の辻上層式」から西新式に該当する時期である。低地部では環濠が再度掘削され，集落全体の再整備が行われる。Ⅱ期に掘削された環濠群のうち，台地裾に沿って展開する２条の環濠はこの段階で再掘削されるが，北西低地部では土坑群が展開していた河道の西側にも短い環濠が幾重にも掘削される。また，河道内を中心に木製品が大量に出土しており，低地部一帯で木製品の製作が行われていたものと考えられる。環濠群の展開については，東側低地部でも同様の傾向を確認できるが，西側低地部と異なる点は，この時期に東から延びる道路状遺構が形成される点にある。この遺構は，幅約３ｍで環濠が途切れる陸橋と通ってジグザグに折れながら台地上へと至る。環濠の掘肩では，道路状遺構に沿って小規模なピット群が並ぶことを確認しており，環濠への転落を防ぐために柵列など何らかの構築物が存在したものと考えられる。

東西低地部の環濠は，Ⅱ期と比較して南側台地への展開がなく，２条の環濠とも台地最高地点にむけて伸びる点が特徴である。そのため，環濠に囲まれた範囲は推定で南北480m，東西300mとなり，Ⅱ期と比較して狭い範囲を囲むことになる。この環濠の南端部に位置し，台地上の最高地点に構築されるのが周溝状遺構である。弥生時代終末のこの遺構は，南北に長い隅丸長方形で，周溝内からは壷を主体とする土器や鉄鎌・鉄剣・袋状鉄斧などの鉄製品が出土している。出土した壷には，口縁部を打ち欠いて胴部を穿孔したものが認められ，鉄製品にも実用に適さない加工が認められることから，これらの遺物が何らかの祭祀行為に供されたことが推測される。この遺構と関連して，北側には２棟

の掘立柱建物が直線上に等間隔で並んでおり，台地上の最高地点周辺が，この段階にいたって明確な祭祀空間＝祭儀場として成立することになる。環濠内の遺構としては，竪穴住居や掘立柱建物が台地南半部を中心に展開するが，特に祭儀場の東側に集中する傾向にある。祭儀場の北部では，ベッド状遺構を持つ大型竪穴住居を検出しており，有力者の居所と考えられる。

この段階の工房は明確でないが，北西低地部出土の鉄製品から，本格的な鉄器製作が行われていた可能性は指摘できる。これは河道内から出土したもので，鉄製金槌，鉄鑿，板状鉄斧（板状鉄素材）がセットとなる。低地部一帯での鉄器製作の可能性は低く，地理的に近い台地北半部に散在する竪穴住居内で鉄器製作が行われた可能性が考えられよう。

Ⅳ期の墓域は，台地南側を中心に展開する点がⅢ期までとは大きく異なる点である。これによって，環濠群の南側台地への展開が抑制されたことが推測できよう。特定有力者の墓域としては，原ノ久保A地点が挙げられ，長宜子孫銘内行花文鏡などが出土している。

なお，環濠群は弥生時代終末を最後に，全域で埋没していく。

Ⅴ期　古墳時代前期

環濠群が完全に埋没した段階である。環濠の一部では，最上層にこの時期の流路が存在するものの非常に浅く，Ⅳ期までの環濠とは明らかに一線を画すものである。このほか，北東低地部や北西低地部では浅い溝が掘削されるが，低地部の排水や水田への給排水が目的であったものと考えられる。なお，北西低地部では河道を埋め立てた痕跡があり，溝の掘削と併せて，低地部での水田経営を示唆するものであろう。

台地上では，全域にわたって竪穴住居群が営まれる。これらの住居群の中には棒状鉄製品や鉄滓を出土するものもあり，小鍛冶を行っていたことは確実であるが，これらは集中することなく，散漫な分布を示す。また，祭儀場では溝状遺構が掘削され，小型丸底壷や低脚高坏，ミニチュア土器などからなる祭祀系土器群やガラス小玉・黒曜石砕片などが出土しており，Ⅳ期に引き続き祭祀空間として機能している。なお，この段階の墓域は確認されていない。

台地上の遺構群は，4世紀中頃を最後に姿を消す。北部低地一帯で4世紀後半の土器がまとまって出土しているものの，ごく短期間で，遅く見積もっても4世紀のうちには原の辻遺跡は解体し，終焉を迎えたものと考えられる。

以上，遺構群を中心に，原の辻遺跡の変遷を概観した。本稿では原の辻遺跡の変遷を5時期に分け，4つの画期を設定したが，各画期の意義や東アジア情勢の中での位置づけは明確にできず，周辺の遺跡との比較も行えなかった。今後の大きな課題である。しかし，これまでの調査で検出した遺構群の大まかな変遷は明らかにできたのではないかと考えている。これをたたき台として，今後も調査を行いながら修正を加えていきたい。

【文献】

宮崎貴夫　2001「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』第4号　西海考古同人会

Ⅷ　附　　編

1．旧石器時代の遺物

壱岐で最初に旧石器時代の遺物が確認されたのは，昭和50年に地元の郷土史家福田敏氏がカラカミ遺跡で採集した遺物中に細石核が確認されたことに始まる。また，同年に，壱岐高等学校教諭岩永司氏が，原の辻遺跡で採集した資料中にもナイフ形石器があることが確認され，原の辻遺跡にも旧石器時代の遺物が存在することが確認された。発見の顛末と周辺採集の旧石器については，昭和50年の調査報告に詳しい（1976，藤田編）。昭和50年の調査報告書は，原の辻遺跡周辺採集の旧石器を掲載した初めての報告書となる。原の辻遺跡の調査が始まるにつれ，旧石器時代の遺物の量も多くなり，その内容も豊富であることが次第に明らかとなった。特に昭和52年の調査では，丘陵南側で比較的まとまった状態で石器が出土し，Ａ地域～Ｄ地域として報告されている（1978，安楽・藤田）。この中で出土した台形石器の調整加工に着目した萩原は，原の辻型台形石器として発表し，その後九州の多くの地域でこの手の台形石器が出土することが知られるようになった（1981，萩原・川道）。それ以後，原の辻遺跡が弥生時代だけではなく，旧石器時代の遺跡としても注目されるようになった。また，河川の調査ではナウマン象やオオツノシカの化石骨が出土しており，この時代の石器の出土が期待されたが，現在のところ古い石器の検出はなされておらず，すべてAT上位の石器群と考えられる。そもそも，丘陵上の土の堆積は薄く，火山灰層の検出を望めるような状況ではないこともあり，積極的に編年案を提示できるような状況ではない。低地部でも旧石器時代の文化層を捉えるには至っていない。

ただし，地点的に石器組成が若干相違することから，この項では地点を主体に相互の石器組成比較を行う。原の辻の丘陵周辺で，まとまって遺物が出土した地点をＡ～Ｅ地点とし，資料的にはこの内のＣ～Ｅ地点の資料を提示しながら比較検討を行う。

第129図に示したように，原の辻遺跡ではＡ～Ｅ地点で遺物が集中的に出土，あるいは採集された地点があるが，この他にも丘陵上や，環濠内からもかなりの遺物が出土している。このような状況から原の辻の丘陵を中心とする台地上は，旧石器時代にはかなりの活動があったものと思われる。今回は，調査によって遺物が特に集中している丘陵の南側の遺物について紹介する。

Ｄ地点（第139図）

昭和50年調査のＢ地域に相当し，台形石器を主体とする一群である。**4～12**は台形石器であるが，**4・6**の原の辻型台形石器の他に，背面が分厚い**7～9**，表裏とも平坦剥離で覆われる**11・12**などの資料も見受けられ，大きく３種類の台形石器が存在する。**17～22**の剥片・石核の状況からは，主要剥離面を打面として剥片を剥離した後，その剥離面をさらに打面として剥片剥離を行うという，剥離面を交互に入れ替える特徴をもった石核・剥片で構成される。この剥片剥離技術の中から原の辻型台形石器の素材が剥離されたと考えられる。このことからも，剥片剥離から石器製作までの工程が把握できる資料がまとまった一群である。この中にあって玄武岩製の尖頭器が一際目立つ存在である。中央部に最大厚をもち，やや丸みがあり上下は薄く整形されている。形態的には柳葉系を呈しており，縄文時代草創期の産物に近いものと判断する。

Ｄ地点については，比較的良好な状態で遺物が出土している。

第141図の土層はＤ地点で多く遺物が出土した調査区の土層である。丘陵南側には土層の堆積条件

第138図　旧石器時代の遺跡分布図

が良いところが部分的に確認されることから，土層について説明する。

3層が旧石器時代の遺物の包含層であるが，4層の明黄褐色粘土層からは基本的に遺物の出土はない。通常，この4層と3層の漸位層から旧石器が出土する例が多い。このことから，4層以下の土層はかなり古い層位と考えられATなどは，この4層内に含まれるものと考えている。また，5層はやや茶色味を帯びた層で，このD地点から南に数百m離れた地点でも検出していることから，遺跡での基本土層となりうる層である。もちろん遺物の出土は認められない。丘陵上では弥生時代には，この4層の明黄褐色の土層までを削りだして住居を構築するなど，丘陵上では地山として判断している土層でもある。

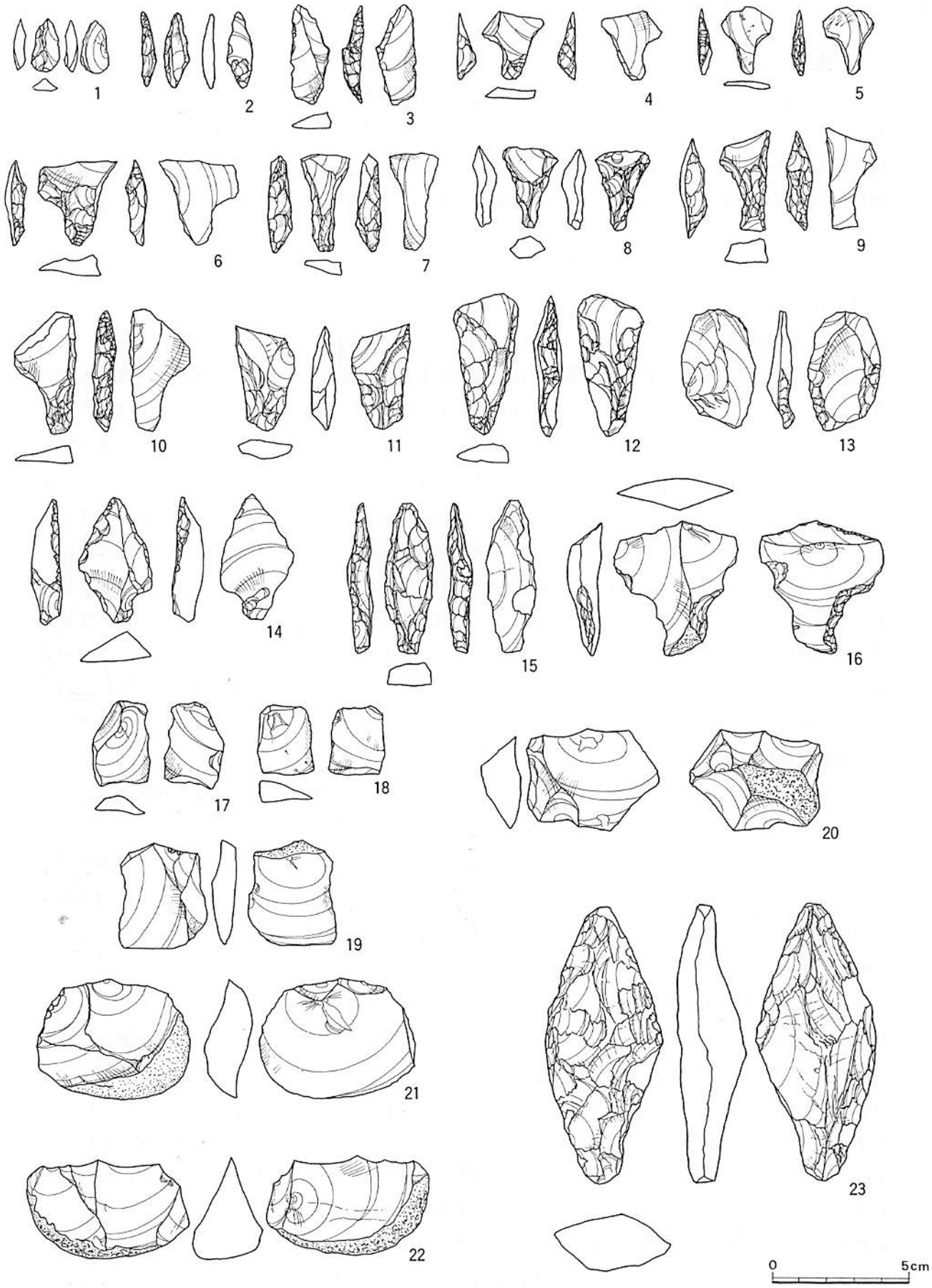
E地点（第140図）

丘陵西側の丘陵端部に位置する。調査では，遺物集中部が確認され，石核と剥片の接合関係も数例認められるなど，状況的には良好な出土状況を呈している。石器としては，薄い剥片の一端のみをブランティング加工するナイフ形石器が主体で，台形石器は認められない。石核は縦長剥片剥離の石核で，いわゆる磯道技法の範疇に含められるものと，方柱状の形態で打面調整を丁寧におこない，上下からの剥離をおこなう石核が認められる。前者は背面に大幅に自然面を残すもので，素材は円礫を使用しており，松浦の牟田産と考えられる。後者は素材が角柱状であることを特徴とする。剥片は幅広の薄い剥片と，石核の角を調整するための調整剥片が認められるなど，いずれも縦長剥片剥離を目的としており，台形石器のみならず，台形石器製作用の剥片も認められないのが特徴的である。横長剥片や横長剥片系の石核，台形石器が認められるないという特徴を備えた遺跡としては，江迎町の根引池遺跡や，平戸市の堤西牟田遺跡，佐世保市の上原遺跡などがあるが，特に根引池遺跡との類似性が高いと思われる。

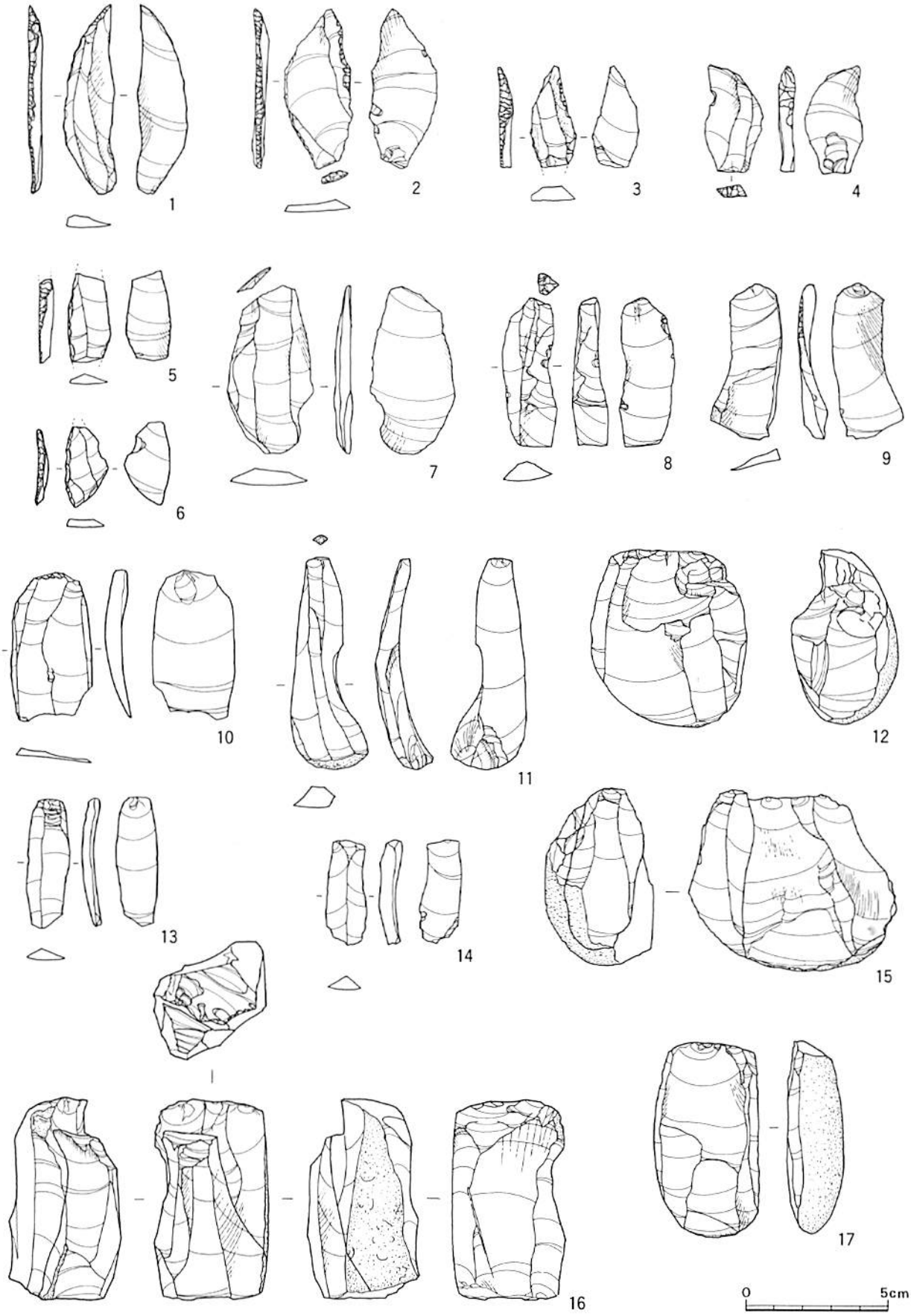
C地点（第141図）

この地点は丘陵の南西側に位置し，やや高い地域にある。遺物は台形石器を主体に角錐状石器，石核などが出土している。台形石器は狸谷型ナイフ形石器が幾つか看取でき，他に背面に自然面を残すタイプなどもあり，バリエーションに富む。石核は背面に大幅に自然面を残し，覆面に縦長剥片を剥離した痕跡を明瞭に残すものが出土しているが，ナイフ形石器の出土はない。打面は前面に調整を施すがほぼ平坦に近い。もう1点は寸詰まりの剥片を剥離するための石核で，台形石器の素材獲得のための石核と思われる。

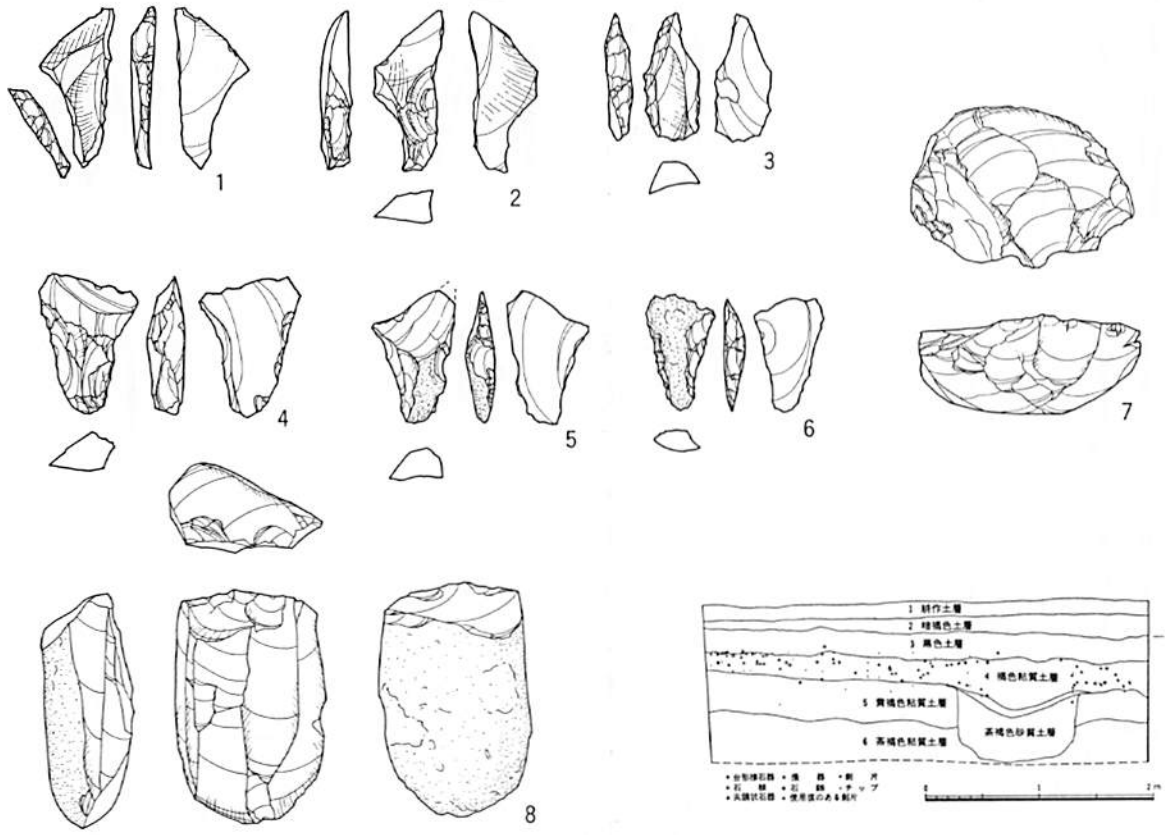
以上，遺跡内の3地点の石器について紹介したが，これらの石器群については剥片剥離技術や，石器組成上の相違が認められる。E地点は縦長剥片剥離技術のみで構成され，石器も薄身の剥片を使用したナイフ形石器で構成される。台形石器が未確認であることから，縦長剥片剥離に主体をおくことが特徴である。C地点では，狸谷型ナイフ形石器が数点看取でき，台形石器としては，背面に自然面を多く残すものが特徴的である。岩谷によれば，狸谷型ナイフ形石器は，九州形ナイフ形石器や原の辻型台形石器とは何らかの影響受けつつ存在したとするように（岩谷，1999），原の辻型台形石器と狸谷型ナイフ形石器は近似している。D地点の石器群については，原の辻型台形石器及び，背面に平坦剥離を伴う台形石器と，九州型ナイフ形石器で代表される一群である。石核の状況からは，横長剥片石核の存在が主体であり，台形石器の素材確保のための剥片剥離がおこなわれていたことは確かのようだ。C地点は横長剥片剥離を主体としつつも，縦長剥片石核の存在から九州型ナイフの存在が想



第139図　D地点遺物実測図



第140図　E地点遺物実測図



第141図　C地点出土遺物実測図とD地点土層図

定される。石器の構成としては，九州型ナイフ形石器・原の辻型台形石器・背面平坦剥離の台形石器で構成される石器群である。石核は縦長剥片石核と横長剥片石核が混在する。

いずれの地点もAT上位の石器群であることは間違いない。この他に細石核が多量に出土しているが紙面の都合上掲載することが出来なかった。細石核については古手のもの（茶園型）はいまのところ存在せず，削片系のものや，西海技法が主体を占める。作業面が大きく長い細石刃を剥離したものなど細石核についても多くの出土があるが，環濠や溝から出土したケースが多い。　（福田）

【参考文献】

藤田和裕　1976『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第26集　長崎県教育委員会
藤田和裕　1977『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第31集　長崎県教育委員会
安楽勉・藤田和裕　1978『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第37集　長崎県教育委員会
萩原博文・川道寛　1981「田助遺跡発掘調査概要」『九州の旧石器文化（Ⅰ）』九州旧石器文化研究会
安楽　勉　1998『鶴田遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第10集　長崎県教育委員会
岩谷史記　1999「長崎県域における狸谷型ナイフ形石器の分布について」『西海考古』創刊号　西海考古同人会

2．古代の遺構・遺物

はじめに

原の辻遺跡および周辺の遺跡では，主体となる弥生時代と重複して古代の遺構や遺物が確認されている。これらは，従来乏しかったこの時代を埋める貴重な考古資料となっている。以下に時期を追って概観し，考古学からみた特質を整理してみたい。

(1) 古代の壱岐とこれまでの発掘調査

律令時代の壱岐は，国郡制の中で下国にあたる「島」の扱いを受け，壱岐郡と石田郡の二郡から成り（延喜式），石田郡に島府が置かれ，時（優）通・伊周という二駅家が置かれている（和名抄）。

その成立は，『続日本紀』慶雲三年（706）七月条に「九国三島」とみえることから，遅くとも八世紀初頭には成立していたものと考えられる。天平十三年（741）の国分寺建立の詔にあたっては，既存の壱岐直の氏寺を島分寺としたという記録がある（延喜式）。

古代の壱岐については，歴史地理学による島府，駅家，官道経路で一定の成果があったほか（木下1973・日野1976・高橋1979），地元の研究者により実証的に島分寺の位置の特定が行われるなどの成果があった（山口1987）。考古学的な発掘調査は，島の北端である勝本の串山ミルメ浦遺跡（勝本町教委1985）に始まり，壱岐島分寺の一連の発掘調査（芦辺町教委1991・1993・1994）によって本格化した。島分寺の調査では平城宮六二八四Ａ型式と同笵の軒丸瓦が確認され，中央政権との強い結びつきが指摘されている（高野1995）。

後述する原の辻遺跡の発掘調査に前後して，周辺の遺跡において古代の遺構や遺物が確認されている。原の辻遺跡の南西側約１㎞にある椿遺跡では，七世紀後半から八世紀前半にかけての土師器・須恵器・瓦のほか石帯が出土し，柱穴も確認されている（石田町教委1996）。遺跡の性格としては，瓦が出土していることから小規模な寺院や草堂などが考えられるほか，石帯の出土から役人などが関係した小規模な施設なども想定される。原の辻遺跡の北西側約２㎞に位置する興触遺跡は，その地名から有力な国府推定地とされているが，発掘調査によって古代の遺物包含層が確認されている。ただし，直接国府に結びつくような遺構や遺物は確認されておらず，今後の調査成果が期待される。また，原の辻遺跡の北側に隣接する安国寺前Ａ遺跡においては，銅製の銙帯や越州窯系青磁が出土している。

後述する川原畑地区検出の道路状遺構から200ｍほど延長した場所であり，関連が推測される。このほか，印通寺港近くの中尾遺跡（石田町教委1998）や島の南央部の大宝遺跡（長崎県教委1999）で初期貿易陶磁が出土している。

(2) 原の辻遺跡

原の辻遺跡において古代の遺構や遺物が確認されたエリアは，北側から川原畑地区，石田高原地区，大川地区である。以下にその様相をまとめてみたい。

(1) 川原畑地区　遺跡の北端で幡鉾川を挟んで北岸に位置する。弥生時代の遺物包含層や遺構を切るかたちで，古代の道路状遺構が検出された。両側に側溝があり，道路面は硬化している。側溝の心々間は約６ｍ，側溝の幅は約60㎝，深さ約５㎝となっており，方向は磁北に対し西側に40度振れる。路面の覆土から八世紀後半頃の須恵器が出土しており，この頃に廃絶したと考えられる。

(2) 石田高原地区　環濠付近にあたり，木簡５点が出土している。「白玉六□」や「赤万呂七八升」

と記されており，物品に関わる貢進・請求木簡と記録木簡であると考えられている（平川1995）。

残念ながら出土状況が明らかでないが，川原畑地区で検出された道路状遺構をそのまま延長すると付近を通過することになり，何らかの公的施設が付近に存在していた可能性もある。

(3) 大川地区　遺跡の南側に位置し，土師器や須恵器と共に初期貿易陶磁や国産施釉陶器がまとまって出土している（長崎県教委1997）。貿易陶磁の内訳は，越州窯系青磁，定・邢州窯系白磁，長沙窯系青磁水注のほかイスラム青釉陶器，華南産白磁（註）となっている。国産施釉陶器の内訳は，洛西タイプを主体とする緑釉陶器と猿投系の灰釉陶器である。初期貿易陶磁と国産施釉陶器は合計百点をやや超える程度出土しており，ほぼ半々の比率となっている。このほか，数は少ないながら墨書土器や円面硯なども出土している。出土地点は台地の縁となっており，台地上が削平された際に二次堆積したものと推測される。

(3) ま と め

これまで発掘調査から，従来不明であった古代壱岐の考古学的様相が徐々に明らかになってきている。まず壱岐島内的な視点からみると，文献史料にみられる島府や駅家および官道などの実際の位置の手がかりが得られたことが大きな成果であると言えるであろう。文献史料に制約のある歴史地理学においては，礎石や瓦から位置が特定された島分寺を除いては発掘成果による実証を待つ状態にあるだけに，その意義は大きい。とくに原の辻遺跡の周辺で役人や役所に関連する資料が出土していることは，付近に何らかの公的な機関があったと推測され，今後の研究の進展が期待される。

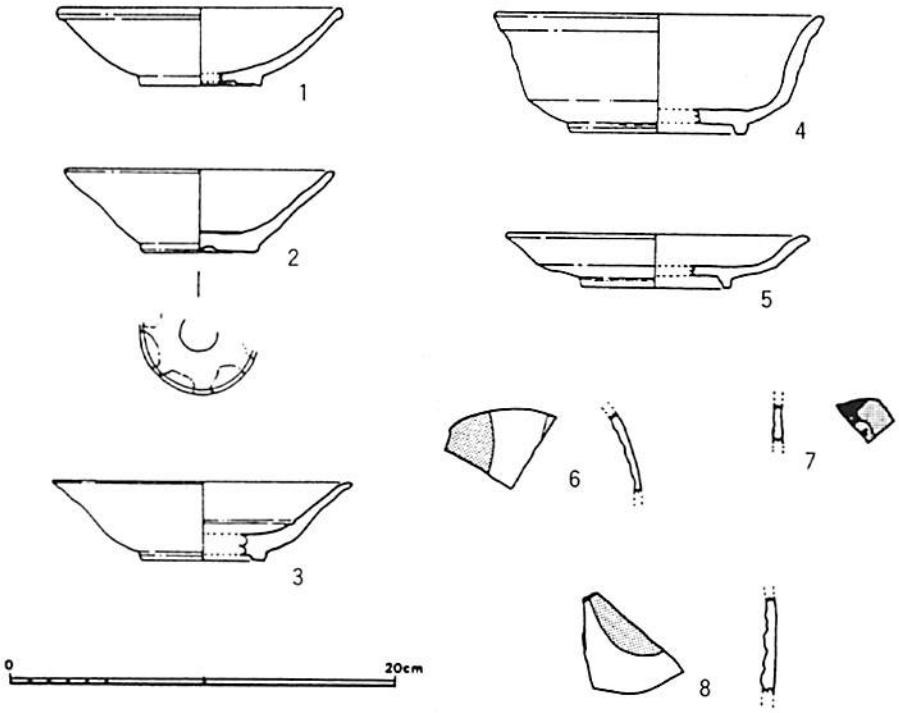
つぎに出土遺物，とくに貿易陶磁の出土状況から古代の壱岐をとりまく様相がおぼろげにながらわかってきたことについて触れておきたい。原の辻遺跡から出土している初期貿易陶磁は，構成要素からみると鴻臚館に共通するものが多い。すなわち，越州窯系青磁，定・邢州窯系白磁，長沙窯系青磁水注，イスラム青釉陶器などであり，このようなセットが出土する遺跡は，北部九州では例えば筑後国府など公的な場所に限られる傾向がある。一方，原の辻遺跡においては，これらに加えて鴻臚館はおろか国内でもほとんど出土が確認されていない華南産白磁が出土していることが大きな特質としてあげることができる。この白磁は胎土が灰色でやや粗く陶器質で，器形には輪花の碗・皿がある。同タイプエジプトのフスタート遺跡からも出土しているとされ（山本2002），東アジアから西アジアに広く流通したと考えられるが，何故か日本ではこれまで確認されていなかったのである。出土した背景としては，壱岐が博多や鴻臚館などの経路上にあたっているために途中で取引がなされたのか，あるいは新羅商人などの独自な活動を示すのかは現段階では不明であるが，少なくとも壱岐に本土部とは異なる経路で貿易陶磁や様々なモノがもたらされたことは明らかである。今後の出土状況を注意深く追っていく必要があろう。　（川口）

【註】この白磁については特徴を整理し，現段階では国内において原の辻遺跡でのみまとまって出土していることから「原の辻タイプ」として紹介を行っている（川口2002）。

【引用参考文献】

芦辺町教育委員会　1991・1993・1994『壱岐嶋分寺跡』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
石田町教育委員会　1996『椿遺跡』

石田町教育委員会　1998『中尾遺跡』
勝本町教育委員会　1985『串山ミルメ浦遺跡』
川口洋平　1999「長崎県における古代遺跡の調査」『古代交通研究』第９号　八木書店
川口洋平　2002「長崎県島嶼部出土の初期貿易陶磁」『貿易陶磁研究』No22
木下　良　1973「印鑰社について」『史元』17　史元会
高野晋司　1995「壱岐嶋分寺と壱岐直」『風土記の考古学』５　同成社
高橋誠一　1979「壱岐国」『古代日本の交通路』Ⅳ　大明堂
長崎県教育委員会　1997『原の辻遺跡・安国寺前Ａ遺跡・安国寺前Ｂ遺跡』
長崎県教育委員会　1999『大宝遺跡』
日野尚志　1976「壱岐島の国府・郡家について」『史学研究』23　広島史学研究会
平川　南　1995「長崎県壱岐郡原の辻遺跡出土の木簡」『原の辻遺跡』長崎県教育委員会
山口麻太郎　1987「壱岐」『新修国分寺の研究』５上　吉川弘文館
山本信夫　2002「日本・東南アジア海域における９～10世紀の貿易とイスラム陶器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集　国立歴史民俗博物館



第142図　原の辻遺跡出土の初期貿易陶磁（１/４）
１　定窯・邢州窯系白磁　　４・５　華南産白磁（原の辻タイプ）
２～３　越州窯系青磁　　６～８　長沙系青磁水注

3．原の辻遺跡出土の建築材

(1) はじめに

原の辻遺跡の弥生時代中期から後期にかけての出土建築材について，同遺跡調査事務所調査報告書記載の実測図と本文を参考にして建築学上の解説を加える。多くの建築材は折損，腐蝕，分割等廃棄後の痕跡が認められ，２次転用後に廃棄されたものである。その形状から当初形式の復原考察を行うが，実測図と写真からの判断には限界があり，材の断面図から多少の推測を加えた面もある。なお，部材番号は年度毎の報告書に準拠した。

(2) 柱　　材

（第143図－１） 平成11年度Ｂ区１号旧河道出土材（弥生中期），全長141cm，径8.4cmの円柱で下端部折損，上端に角柄（径4.4cm×3.5cm，長さ７cm）を造り出し，柄先端は折損。下端の折損端部を尖頭形に切断して杭に転用された可能性がある。円柱側面には２条の溝（幅・深さとも約1.6cm）を平行に穿ち，両溝は１／４円内に納まる。溝の下半部は溝底が僅かに残り，円柱全長を引き通していたと思われる。但し，両溝は直線ではなく屈曲していることから，横板落し込みによる横板壁とは考えられず，両端部を細くした円材を下部から積み上げた簀の子状壁であった可能性がある。簀の子壁の類例は奈良県桜井市纒向遺跡南飛塚地区出土の妻壁材としての出土例がある(註1)。

２条の溝で形成する壁体は，隅柱の柱心より内側で直角となり，内側からは柱側面がわずかに見える程度である。柱の残存長土からみて，高床建築の床面仕口から折損または切断した可能性も考えられるが，簀の子壁であったとすれば，特種な機能－例えば縁屋などの平屋建物の杭材とも考えられる。

（第143図－２） 弥生中期包含層出土材。全長270.2cm，径12.7cm×14.2cmの円柱材で，下端部切断，上端部に欠込仕口（幅7.0cm，高8.0cm）がある。この仕口両側面を尖頭形に削って，杭に転用した可能性がある。下端部は材の長さからみて，掘立柱の地表面部の根腐部分から切断して杭に転用したものと思われる。柱頭欠込仕口と直交する両側面には，柱頭下18cmに円形の浅い窪みがあり，下端部から21cm上方には欠込仕口と同側面に幅３cm程の水平溝を穿つ。上方の円孔は柱間に渡し架けて横桟を受ける桟穴，下方の水平溝は横桟と同方向の横桟を柱側面で受ける仕口とみなして，上下で形式を異にするが平屋建物の側壁仕口と考えられる。

樹種は明らかでないが，広葉樹の場合は材の白太部分が廃棄後にはがれて欠失している例が多く，柱頭部桟穴が浅いのは白太欠失に依るもので，中間部の桟穴は白太部分に穿たれていたものと考えられる。柱頭欠込仕口はしたがって梁端を受ける仕口で，五平梁（幅７cm，成14cm）を縦使いとして，側桁は下面を欠込んで五平梁に渡し架ける折置組と想定される。

五平断面材を水平に使う平桁，平梁は静岡県登呂遺跡高床倉庫などの使用例があり，縦使いの柱仕口を示す出土柱材には，静岡県南谷遺跡（弥生後期～古墳前期）・上土遺跡（弥生後期），大阪府西大路遺跡（古墳前期）などの例がある(註2)。また，古墳時代の家形はにわにも長方形断面の桁や梁を縦使いとする例が多い。

以上の類例から，平桁・平梁は弥生時代後期以後に普及しているが，本例のように弥生中期まで遡るとすれば最古例となる。

（第143図－３～４） 11年度調査旧河道出土材で，いずれも杭状尖端をもち，柱材から杭に転用されたものと思われる。

3の材は全長135.5cm，径33cmの円柱，下端部切断，上端部は成7cm，径3×2cmの角柄を残して，柄下面の柱頭胴付部を殺ぎ落として尖頭形に造り柱に2次転用したものと思われる。

柄造り出し以外の仕口は柱側面に無く，残存長さと柱径からみて，下端部を高床の大引仕口部分で切断したか，あるいは平屋建物の地上部を2等分して転用した可能性も考えられる。いずれにしても，当材を柱材とすれば壁のない開放的な建物と想定される。

4の材は全長115.5cm，径24cmの円柱で，上端部に5×2.6cm，成10cm程の平柄を造り出し，杭転用時に平柄とその胴付部を尖頭形に削った形状を示す，下端部の実測図面からは転用後の腐朽状況を示し，杭側面に壁仕口の痕跡が認められない形状は柱材としてNO.32材より小規模の建物で，同様の機能の建物が想定される。

5の材は全長169cm，径7cmの円杭上端部22cmを半円柱に送り出す形式で，半円柱端部は尖頭形に切断して杭に転用したものと思われる。下端部は円杭残存長さ147cmからみて，半円柱を上層柱，円柱を下層の地上部高とする高床建築の柱材と想定される。

（第144図－6～7） 6・7材は柱頭を木の枝分れを利用した又柱で，8材は6材の下半部で中間部を欠失した同一材である。7材は全長97cm，径5.3cmの円柱で，下端部は尖頭形に切断されて杭に転用されたものと思われる。柱頭枝分れ部は逆台形に整形されて丸太桁を受ける形状を示す。6の柱頭又木には加工痕がなく一方の又木は折損する。8材と合せた残存全長は105.8cm以上，径5cmで，下端部は切損して全長は不明で，7材とともに柱側面に壁仕口痕跡がなく，竪穴住居の主柱である可能性もあるが，杭径が細いことから，当遺跡の住居は壁立式が主流で，6・7材はその側壁支柱とするのが妥当と思われる。

(3) 床大引材

（第144図－10） 旧河道第9層（弥生中期）から出土した床大引完形材で，全長324cm，径18～21cmの丸太材上面を平滑に削って厚16cmとし，両端部に長28～30cm，幅7cm，成13cmの柄を造り出す。柄を含めた両端部の底面50cm程は，厚16cmから柄先端成10cmまで斜めに緩く取り上げており，梁にかかる床加重モーメントが両端部では小さくなることを知った上での仕事であれば，高度な構造力学的知識を備えていたと云える。

柄の中央やや外寄りに方5cm程の小孔がある。この孔心から胴付面まで16cmあり，この孔を側柱心を貫通して大引柄を固定する込栓穴とすれば，側柱径は32cmと想定され，かつ両込栓穴の心々間隔3.05mは，当大引材を用いた梁間・間型高床建築の梁行寸法として認定できる。

大引材上面には中央に棟持柱底の柄を受ける平柄穴（長20cm，幅6cm，深さ6cm）と，この平柄穴と両側柱との間には30～35cm間隔で，各4箇所に径3cm柱の浅い桟穴を設けている。桟穴の配置から草壁と土壁の可能性が考えられるが，桁行方向の壁受けは第144図のように床板で縦材を受ける形式であったとすれば，壁体の軽さや壁下端部の雨仕舞いの良い点で草壁が妥当である。

（第144図－9） コヨウ4区SD5最下層（弥生期）出土材，中央部で折損し，残存長220cm，径22cm弱のアキ属円材で，端部に長さ55cm，成18cm，幅8cmの柄を造出す。

柱との胴付面は柄の付け根から大引両側面に約45度の角度で突出する。柄の中央やや内寄りに角柄穴7×4cmがあり，柄穴心から胴付面までの長さは21cmであるから，柄穴を込栓柄穴とすれば柱径は42cmに想定され，胴付面の突端部は柱側面に喰い込ませて，床加重に対する大引材の応力を高めてい

る。現在の伝統工法では胴付部を柱面に浅く大入れとするのが通例で，本例はその初現的な例である可能性が高い。柄先端部は斜めに切断加工され，円材部の手斧削り痕の残りが良い面を上端とすれば，柄の長辺が上端となる。岡山市津島遺跡出土大引貫材（弥生後期）の木口先端にも，当材と同様の傾斜がある[註3]。柱径を42cmとして柱側面からの柄先突出部10cmは，津島遺跡出土材と同じで，津島遺跡の復原案と同様に，柄上端で根太を側柱に添えて受け，根太上に床板を敷き，床板上に無目敷居を柱間に設置して土壁または板壁を受ける形式と，無目敷居を除いて床板上で縦桟を受けて草壁とする形式が考えられる。

(4) 扉口・窓口

（第144図－11） 蹴放材の完形品で全長101.5cm，幅19.5cm，厚6.5cmである。両端の木口には径10cm前後の円柱胴付のための半円欠込みがあり，円柱間の内法寸法は88.5cm，円柱心々杭寸法は1m弱と想定される。材上面両端の半円欠込みに接して，材の中軸線上には見付幅14～16cm，見込幅3cm，深さ3.6cmの小脇板大入柄穴を穿ち，小脇板柄穴内法寸法は58.5cmである。この小脇板柄穴に接して，一方には径，深さとも3cm，他方には径4cmの扉吊穴が建物内外の位置を異にして穿たれている。小脇板柄穴の内法寸法は58.5cmと狭く，両軸吊穴径が異なることから，その前後関係は明かではないが，片開扉で時期を異にするものと思われる。扉が外開きか内開きであるかの違いは，一般的には扉を境にした蹴放材の凡蝕差により内開きと認められるが，当材の実測図からは凡蝕差が認められないことから，扉の造替時に蹴放材の前後を反転させたものと考えられる。なお，当材を扉に上辺の楯ではなく，下辺の蹴放材とした理由は，楯材の場合には軸吊穴が貫通し，小脇枝間に凸形の造出しがあるのが通例であり，蹴放材には軸吊穴が貫通せず，凸形造出しを設けないことに依る。

（第145図－12・13） 古墳時代前期の板扉材で12は全長107.1cm，幅29cm，厚3cmの完形品，13は12とセットになる両開扉の片方で下半分が折損する。ともに中央部に把手を造出し，把手中央に長方形（6.0×2.5cm）の開穴がある。両材を合わせた扉幅は59cm弱で，前記の蹴放材とは別の扉口に用いたものである。扉口の開口部は，扉板高さ96cmと扉幅からみて，高さ90cm，幅50cm程に想定される。実測図によると把手側には手斧痕がなく，背面の状況は明かではないが手斧痕を残しているとすれば，この扉材は把手側を表にしていたものといえる。また，扉口の小さいことからみて，高床祭殿，あるいは穀物以外の高床倉庫に用いたものと思われる。

（第145図－14） 弥生時代中期後葉～古墳時代初期の旧河道から出土した板蔀軸受け材である。全長14.8cm，軸吊部は方6.4cm，厚2.5cmの中央に径3.6cmの軸坑があり，柄部は長さ8.4cm，幅3.4cm，厚1.5～2.0cmで，柄の中央に方1.5cmの鼻栓穴がある。軸吊部と鼻栓穴の間隔3.6cmは，この軸受材を取付ける窓枠兼用の縦板壁厚を示す。蔀戸軸受けの類例は，島根県三田谷工遺跡（古墳中期），滋賀県下長遺跡（古墳前期），静岡県登呂遺跡（弥生後期）に出土例があり[註4]，その形式は柄部に軸吊穴を設けた釘頭型で，蔀戸を建込みとする。当形式のようなキーホルダー型は本例のみで，釘頭型と異なって取外しが自由であるために，外開きとしていたと思われる。

(5) 鼠 返 盤

（第145図－16） 弥生時代中～後期の旧河道出土材，径44.5×42.5cm，厚3.0～3.2cm，円盤中央の孔は径12×7.3cmの長方形で，孔の形状からみて，柱は下層を円柱上層を五平断面とする造出柱に想定される。孔の形式は弥生時代後期前半頃までは普遍的であるが，弥生後期後半以後の鼠返盤には正

方形孔円形孔とする例が増え，かつ孔周辺の突起をなくして平盤に改めるなどの変化がある。当材は五平柱孔が旧形式を保ち，突起のない形式が親形式を示す点で，弥生時代後期中頃の過渡期の形態を示すものといえる。

（第145図－19） 径30×18cm，厚３～3.5cm，中央孔径3.6×3.2cm。長方形盤の１隅を残して他を弧状に造り，中央孔の断面形状は傾斜孔を直孔に改めた可能性がある。孔径は柱径としては小さ過ぎ，柄穴とするのが妥当であることから，当初は長方形で傾斜孔を備えて梯子上端柄に取付ける鼠返盤で，２次転用材として加工途中に廃棄されたものと思われる。

(6) 梯　子　材

（第145図－17） 残存長73cm，幅27cm，厚11cm，板部厚3.6cm，上端一般のみ残存する。弥生前期末～中期の旧河道出土。踏段造出しの上面は板部と直角に，下面は板部から約120度の傾斜をもつ丁寧な仕上げである。２段目の踏面から切断または折損したものとすれば，踏面間隔は約40cmとなり，踏段内法寸法約30cmは梯子上端板部長さと等しい。当材は梯子としては大形で，径40cm程の針葉樹丸太材を半分割したものと思われ，丁寧な造りであることなどから，高床祭殿に用いたものと考えられる。

（第145図－18） 弥生時代中期から後期中頃の旧河道出土。残存60.5cm，幅10.4～11.5cm，厚８cm，踏面部厚５cm。両端部欠損し，踏段で２段が残存，踏面間隔28cmである。踏段は半円材の円弧面を利用して，踏面をやや傾斜させ，その下面を緩く弧状に削り出す。この形式は持運びに便利なように細く軽い梯子として一般的に普及するもので，高床穀倉などに使用したものと思われる。

（第145図－19） 全長74cm，幅14.5cm，厚10cm，板部厚３cm，17材と同形式の踏段で，踏段間隔40cmも同様であるが，幅は狭く，踏段造出しは丸太芯を板部表面として，半円部を踏段とする。上，下端部を当初からの形式を保つものとすれば，高床ではなく竪深さ50cm程の竪穴住居に使用したものと思われる。但し，踏面は鋭角に切込まれていることから，前記例とは逆に傾斜面を利用したと思われる。

(7) 出土建築材の見方・調べ方

原の辻遺跡出土建築材について，調査報告書の実測図面と写真により考察を行った。一部の部材は実見したが，図面と写真から想像を加えて記述した面が多く，詳細な観察を加えた再検討が望まれる。

建築部材は農耕・家具・食器等の日常生活用具と異なり大型木製品が多く，完形品が少ないために用途不明品の扱いを受ける例が多いが，断片であっても建築史の常識を覆す発見例が多い。本稿に取り上げた例は当遺跡出土建築部材の主要材であり，建築史上の初見例が多いことは既述の通りであるが，全ての出土木材を注意深く観察する必要がある。

これまで他の遺跡の多くの出土木製品を観察した経験から，建築部材の見方・調べ方，記録方法について現存古建築の調査法を参考にして記すことにしよう。

考古学で最も欠如している観察法は風蝕差である。二つの部材が柄と柄穴で接合する仕口をもつ場合，柄を除く材の木口面が接合する部材表面に風蝕差として材断面を残し，これを当り痕跡という。また，建物の内と外で風蝕差が生じるのは当然で，当りと同様に見過ごされる例が多い。但し，風蝕と２次転用後の腐蝕や風蝕の違いを見極める必要があり，実測図では判断できない。

風蝕差に次いで出土建築部材の報告例に欠ける点は，部材の４側面と両端木口面の合計６面を揃えた既述，図面が極めて少ないことである。６面の実測図は必要ではないが，割れ面，手斧痕，風蝕・

腐蝕面，切断，折損面などの観察記録があれば，実測図２面と断面図があれば完形品でなくとも復原可能である。

次に重要な点は，樹種の同定である。縄文時代では工具が石器であるために，石器では加工し難い針葉樹を建築材として用いた例は少ないが，弥生時代に鉄装工具が道具が導入されると，環濠集落の主要建築には杉・檜材を用いる例が増える。一般集落では近世中頃まで全国的に，栗・欅などのいわゆる親木が使用され，針葉樹は質の良い鉄装工具を用いた高度な技術を要する専門大工技術者集団によって使用されてきた事実がある。当遺跡においても針葉樹を用いた建築は祭殿などの一部の主要建築のみであると思われる。但し，広葉樹等の雑木建築材は弥生時代中期の大形祭殿には針葉樹と混合する例（大阪府池上曽根遺跡）があり，弥生時代後期には混用例はない。

なお，雑木建築材で注意すべき点は材木の表皮部分の白太材で，強度のある赤身部分から分離し易く，材の廃棄後に欠落している例が多く，部材表面に風蝕と加工痕のない雑木建築材は白太部分を加えて考察する必要がある。針葉樹建築材の場合は白太部分を除去するのが通例であるが，白太部分を残す場合も雑木のように廃棄後に欠落する例はないようである。

(8) 結　　語

原の辻遺跡は朝鮮半島や中国大陸と日本列島との交流の中継地として，弥生時代には常に外国の先進文化の洗礼を受けていたことが建築部材の形式からも窺える。日本列島に人が住み始めて以来，今日に至るまで絶えることのない交流を通して，異文化を移入しつつ列島の自然・風土に合わせ独自の文化を育んだ歴史である。

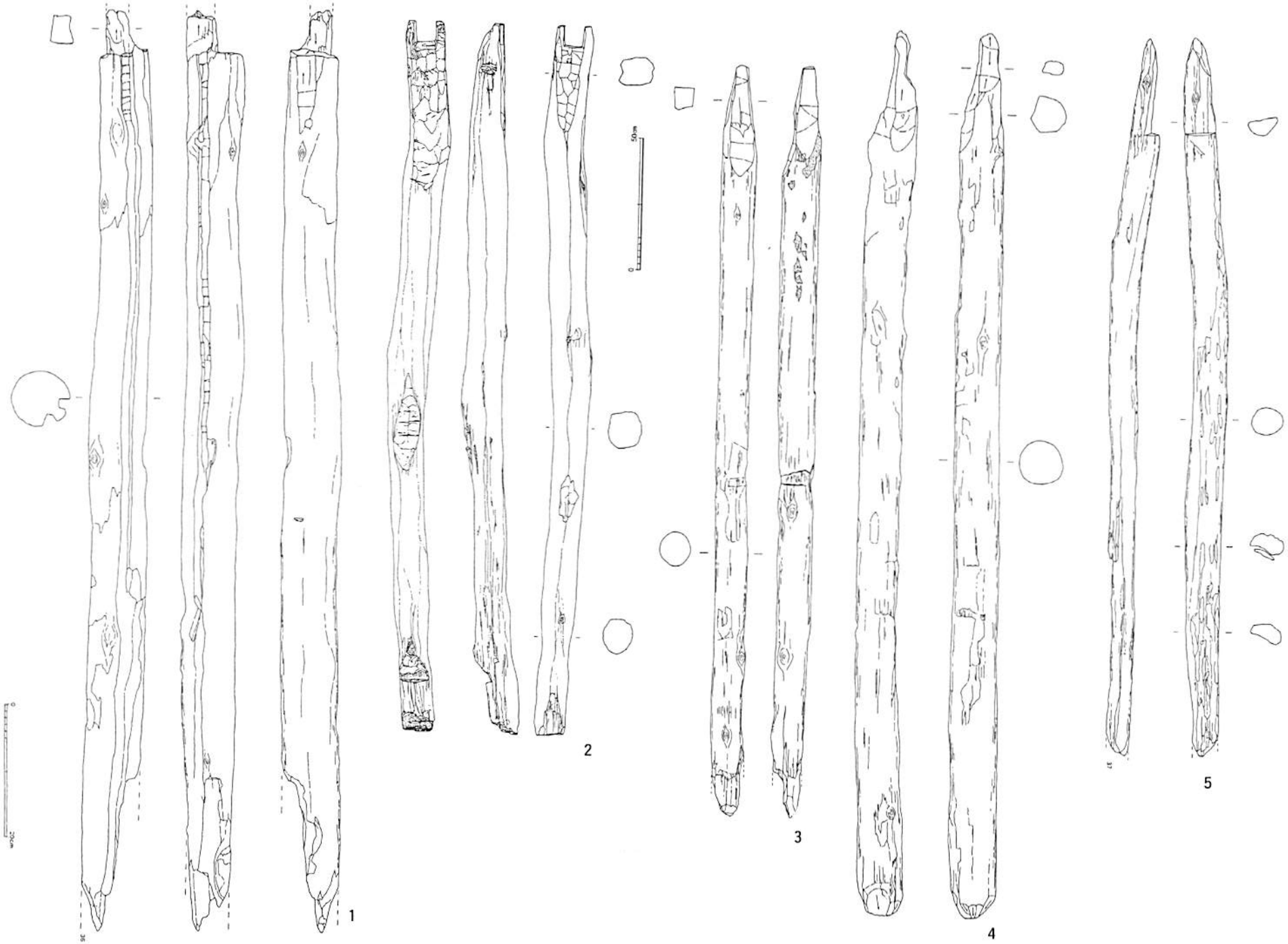
弥生時代の壱岐国の建築文化は高床建築の床大引材にみるように，中国大陸の先進文化が朝鮮半島を経て伝わったと思われるが，床大引材の込栓枘穴のように，中国では礎石建物の技法として，普及していた形式が，掘立柱建物に採用してしたとすれば，建築構造上無意味な形式として採用していたことになり，礎石建てが壱岐国に移入された可能性を否定することはできない。

柱材は５例が出土し，円柱の柱頭仕口は角枘・平枘・五平梁仕口の４例と半円柱造出し柱が１例で，５例中４種類の形式差がある。角枘・平枘の柱頭仕口３例は弥生時代に一般的な形式である。五平梁仕口と半円柱造出しめ柱は弥生時代後期後半以後に出現して，古墳時代に普及する形式である。当遺跡は古墳時代前期に終末を迎えることから，初現期の建築形式を示すものと云える。

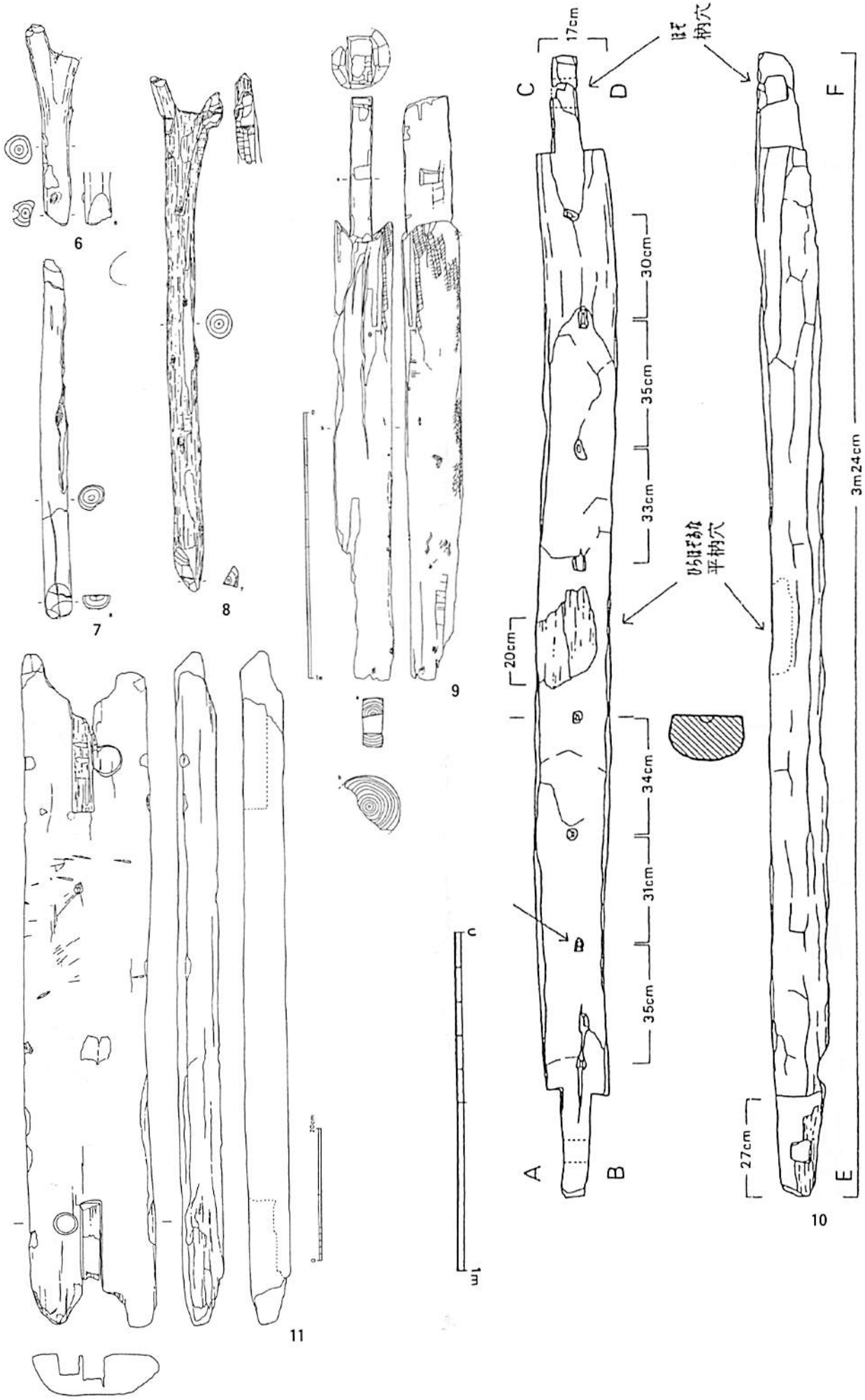
鼠返盤の２例のうち，長方形孔をもつ例から五平柱出しの高床建築柱材の存在が想定され，５種類の柱材が存在していたことになる。弥生時代前期末から古墳時代前期に返る長期間存続した遺跡としても，かような建築形式の多様さを示す例は珍しく，中国大陸と朝鮮半島の異文化に晒される立地条件に依るものとみなさざるを得ない。

（宮本長二郎）

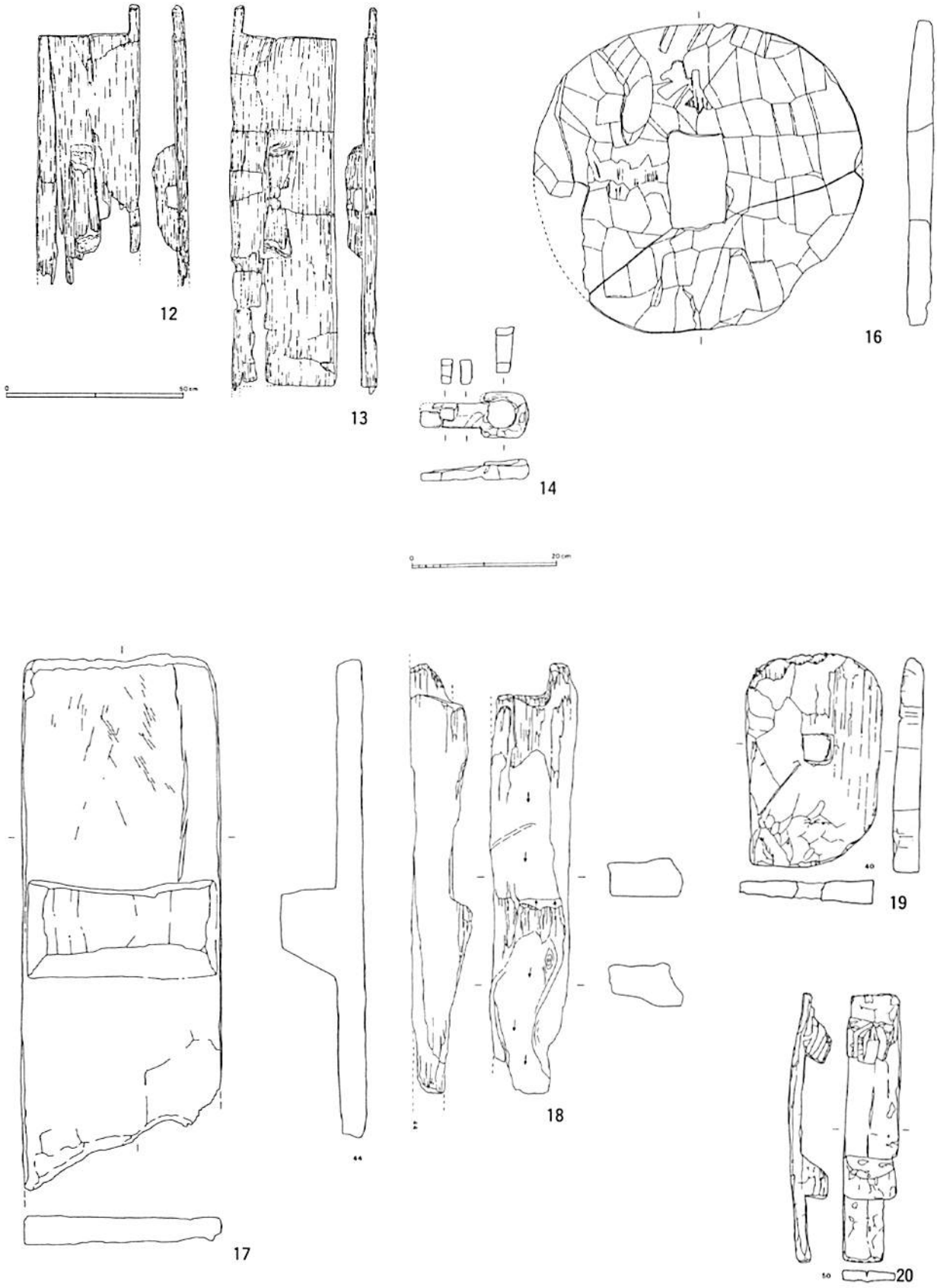
註１．「纏向遺跡南飛塚地地区発掘調査概報」桜井市教育委員会　1988年
註２．「南谷遺跡」静岡県小笠郡浜岡町教育委員会　2001年
「上土遺跡（立石地区）」Ⅱ遺物編－財団法人静岡県埋蔵文化財研究所－　1996年
「西大路遺跡」㈶大阪府埋蔵文化財協会　1998年
註３．「津島遺跡１」岡山県教育委員会　1999年
註４．「三田谷工遺跡 VOL.3」島根県教育委員会　2000年３月



第143図　建築部材実測図



第144図　建築部材実測図



第145図　建築部材実測図

4．原の辻遺跡における発掘調査の課題と問題点

原の辻遺跡は，昭和49年度から現在に至るまでの調査で，約100㌶に及ぶ大規模な遺跡であることが確認されている。最初の範囲確認調査では，遺跡の規模を捉えることが大きな課題であったが，範囲確認調査が進むにつれ，遺跡の構造・内容も徐々に解明されるようになった。途中やむなく調査を中断した時期もあったが，10数年にも及ぶ調査の中で，多くの遺物，遺構が確認されており，遺跡の性格等も徐々に明らかになりつつある。調査は平成16年度までに，全体の約8.7％の調査がおこなわれており，今後も調査は継続していくであろう。ただし，これまでの調査をふまえ，はたして調査面積に合うどれだけの成果が得られたのか疑問がないわけではない。また，遺跡を調査するにあたって，調査成果とはなにかを改めて考え直す必要があることを，遺跡の調査を通して痛感する。この疑問について，過去からの調査の方法，体制などを加味し，これからの原の辻遺跡の調査のあるべき姿を考えていく。

調査体制の変化

平成５年度から県文化課（現学芸文化課）から壱岐教育事務所へ出向し，調査員が常駐して本格的な調査体制が出来上がった。数年間は県主体の調査体制であったが，段階的に石田町・芦辺町も調査員を確保し，調査規模も広がりを見せるようになった。調査の拡大とともにその組織も複雑化したことになる。現在の調査は，基本的に整備に係わる範囲確認調査を壱岐市が担当し，低地部の環濠等の範囲確認調査を県が担当して住み分けをおこなっているが，壱岐市に統合される以前は，石田町と芦辺町とがそれぞれ調査にあたっており，同じ遺跡内を県と２町の三つの調査組織で別々に調査をおこなう状況であった。このような状況の中で，お互いの調査経験や調査技術などに格差があり，その問題点が露呈されることもあった。その後の町村合併により原の辻遺跡の調査に関わる２町は，壱岐市文化財課で１本化され，調整についてはよりスムーズになった。この数年間，共通理解や一定の調査基準を保つために，毎週検討会を開き，調査の方法や遺構の捉え方について話し合う場を設定したことは大きな成果と言えるだろう。検討会によって，お互いの意見を忌憚無く話し合う場ができるようになるとともに，遺跡の共通理解という調査に不可欠な意識を持てる場を設定できたと考える。遺跡整備を前に県と市の新たなスクラムづくりが急務であると考える。

調査の問題点

大規模遺跡の調査については，文化庁の主導で調査と遺跡の保護について考える機会が増え，調査については，保存をおこなうことを目的とした調査をするということが大前提となっている。大規模遺跡調査会議の中でも，議題に上がるのは調査をどこまで行うかという点にあるが，整備を伴う場合には，復元するということが前提に立ち，完掘してより細かな情報を得，本来のものに近づけようとする意識も働く。保存ということとは相対するこの２つを，どのように調整して良好な状態で調査をするのか，調査者にとっても大きな課題である。最小の調査で最大の成果を，これは皆が望む一致した意見であることは確かであろう。原の辻遺跡での調査についても，調査の在り方については，過去と現在では大きく相違しており，それぞれに問題点を残している。具体的に問題点を２・３あげてみたい。

昭和50年代の範囲確認調査は，台地上からの調査に始まり，調査区も２×２ｍのグリッドを基本としていた。この調査の段階では，丘陵上の遺跡範囲を掴むこと，遺跡の内容を確認することを目的と

して調査がおこなわれた。ただし，地権者の同意が得られないケースが多く，初期の目的を十分達成できるだけの素地が整っていなかった。平成５年度からの低地部の調査では，大規模な調査範囲の中で，環濠が発見された時期である。低地部の土層は粘土層で水ハケが悪く，河道・環濠ともに土層堆積について，かなりの神経を使うことになる。充填度が粘土層であれば，遺構の基盤も粘土層で，同じ環濠であるはずのセクションが，数メートル離れると全く違う状況で検出されることもよくある。

遺跡での環濠調査は，まず平面での広がりを確認すること，トレンチをあけることによって，土層の確認と新旧関係を見るための基礎資料とすることで一致している。問題が生じるのは，過去の調査との整合性を取ろうとするときに，特に層位については個々人によってズレが生じるケースが多い。遺構そのものの捉え方も変化する場合がある。調査にあたっては，旧調査区との整合性を見るために，旧調査区と重ねて調査区を設定する必要性を痛感する。丘陵部での調査は，住居址・土壙・墓域の調査が主である。弥生時代の生活面には，多くの古墳時代の住居址や，弥生時代後期の住居址どうしの切り合い，中期との切り合いなど複雑な様相を呈している。上部はかなり削平されており，立ち上がりを掴むこともままならない状況のものもあった。調査当初は，復元のことを考慮して住居址全体を露出し，より多くの情報を掴むという調査をおこなっていたが，現在においては今までの調査の経験から，トレンチを主体に，半裁，１／４発掘など様々なケースでおこなっている。ただし，調査者によって，その判断基準はまちまちであることから，基本的な調査基準作成をおこなう必要があろう。

この他の調査の問題点として，調査当初に基礎資料を得るための調査が少なかったという点があげられる。大規模な遺跡に限らず，基本土層の確認をまずおこなうことが必要不可欠である。遺跡の東西南北にトレンチを設定し，基本となる土層，文化層，生活面を最初に提示し，共通した層位認識のもとに調査をおこなう必要があろう。調査当初の大胆な基礎資料作成のための調査がその後の調査計画に大きく反映されるといえる。先述したように低地での調査は，層位が複雑であることから，一概に基本土層を捉えるのは困難な状況にあるが，調査地点の層位は，別の調査区とどのように相違するのか，あるいは共通するのかという視点の積み重ねが，見えない土層をある程度鮮明なものにするであろう。最終的に誰が調査しても，土層については共通認識の中で捉えることができるものにしたい。

地域との連携について

原の辻遺跡が国特別史跡に指定されて以来，原の辻遺跡を観光の起爆剤として利用しようという思いは大きいものがあった。ところが遺跡整備・埋蔵文化財センター・博物館等の構想が計画される中で，壱岐市民の反応にも徐々に変化がみられるようになった。財政的な面で負担が大きいのではという意見も一部にあることは事実である。この様な疑問に対して，調査者として地元の人たちにどれだけ遺跡の重要性を周知させることができたかという反省がつのる。現在，壱岐市民に対する普及啓発活動としては，講座の開催・事務所での火おこし体験・壱岐市による島ごと発見隊，一支国研究会によるボランティア養成講座などなど多様である。ただし，これらに参加するメンバーがいつも同じであることが多く，広く伝わっているかというと疑問の域をでない。市民に原の辻遺跡の重要性を理解してもらうためにも，我々が汗をかき，市民にどれだけ溶け込んでいくかという努力が必要になる。

Ⅸ　原の辻遺跡の保存活用

原の辻遺跡は1997年に国史跡として指定され，2000年には特別史跡に昇格した。特別史跡とは一地域に限定された財産というばかりではなく，国を代表する歴史遺産であるはずで，その遺産を歴史教材としてあるいは観光資源として広く活用することは遺跡が所在する地域の振興にとっても重要なことと考えられる。原の辻遺跡の場合，史跡指定後これまでも遺跡の普及啓発活動については様々な施策を展開してきたが，今後は本格的な保存整備の実際を含めてその活用を考えていかねばならない。以下，まずこれまで保存にかかわる経過や実施してきた施策を羅列的に説明しておきたい。

遺跡保存に関するこれまでの経過

○「原の辻遺跡保存等協議会」の発足

1993年度以降の調査成果によって生まれた原の辻遺跡の保存整備の気運が高まり，1995年度には郷ノ浦町，勝本町，芦辺町，石田町の地元４町の町長と教育長からなる「原の辻遺跡保存等協議会」が発足した。原の辻遺跡に関する様々な事業に積極的に関わる目的で設立されたものであり，2004年４月に壱岐４町が合併し壱岐市になった現在も構成メンバーを替えて継続している。

○「原の辻遺跡指導委員会」の開催

継続する発掘調査で，類例のないような遺構・遺物等が出土するようになったことから，広く各専門分野の諸先生方の意見を聞く必要が生じ，1995年10月に指導委員会が発足した。委員会は県の補助事業の中に含まれ年に２回ほど開催することとした。1996年度に発見された石積み遺構が「船着き場跡」であるとの指摘も指導委員会での助言であった。委員は考古学，保存科学，古代学，自然科学の各専門家から構成され，その構成員は以下のとおりである。

指導委員：小田富士雄，金関　恕（2003～），工楽善通，佐原　眞（1995～2001），沢田正昭，
西谷　正，日野尚志，松井　章

○「原の辻遺跡保存整備委員会」の開催

調査指導委員会とは別に「原の辻遺跡保存等協議会」の主催によって遺跡の国指定を受けて1997年度に発足した。考古学，保存科学，造園，史跡整備の各専門家からなる。委員は以下のとおり。

保存整備委員：小田富士雄，金関　恕，工楽善通，金関　恕，佐原　眞（1995～2001），沢田正昭，
杉本政美，田中哲雄，辻誠一郎（2003～），西谷　正

本委員会は保存整備のための方針や具体的な施策を検討するもので，1997年から５回開催され，その成果は1999年３月「原の辻遺跡保存整備基本計画」として報告された。この方針に続き，更に具体的な施策策定のため，2000年度から2001年度にかけても委員会を年２回ずつ開催し，2003年３月には「特別史跡原の辻遺跡保存整備実施計画書」が策定された。また，2003年度には具体的な整備設計のための委員会が２回開催され，2004年３月には「特別史跡原の辻遺跡保存基本設計書」が策定され整備の実際の準備が整ってきた。なお，これらの策定作業には（株）文化財保存計画協会が受託しその費用は「原の辻遺跡保存等協議会」が負担している。

○原の辻遺跡の保存整備計画（第１図）

1999年に作成され「原の辻遺跡保存基本計画」では保存整備の根幹となる以下の７つの基本方針が

策定された。

①一支国博物館とする…発掘調査の成果に基づき，弥生時代に環壕などがあった場所に復元ゾーンを設定するなど，遺跡の保存を前提とし「一支国」の遺跡博物館とする。

②変化する遺跡…発掘がどんどん進む状況や建物などが復元されている様子が確認できるなど，いつ遺跡を訪れても常に新しい発見ができる場所とする。

③弥生人の生活を知る・体験学習場…遺跡の発掘体験や古代生活を通し，楽しく遊び学ぶことができる場所とする。

④研究拠点…船着き場など，中国や韓半島などの大陸系技術による遺構や金属器などの遺物が多く出土するなど原の辻遺跡を理解するには東アジア的視点にたった研究が欠かせない。これらの国々との情報を交換しながら研究の成果を世界に向けて発信する。

⑤現代の一支国…原の辻遺跡は学術的に貴重な遺跡であると同時に，壱岐のシンボルでもあることから壱岐島民や壱岐出身者にとって心のよりどころとして整備し，島民の憩いの場，くつろぎの場とする。

⑦振興拠点…遺跡一帯は弥生の風景を残す貴重な場所であり，この景観は大いな財産となっている。この財産を最大限に活かすため，周辺の景観の保全につとめながら心休まる場所として整備する。

これらの方針は2005年度から2009年度まで補助事業として実施する整備の基本となるものであり，その考え方はその後策定された「保存整備実施計画」や「保存整備基本設計」に活かされている。

○県立埋蔵文化財センターと一支国博物館の設置について

長崎県では県の埋蔵文化財保護行政の中心となる埋蔵文化財センターについてその設置を以前から強く要求していたが，結果的に県中央部ではなく壱岐に建設されることとなった。島という特性から交通の利便性では明らかにデメリットが大きいが，東アジアとの交易拠点としての原の辻遺跡を最大限に生かす特色ある施設とすることとなった。その位置づけとして考古・建築・観光・行政の代表者からなる委員会によって「原の辻遺跡・埋蔵文化財センター」整備計画の提言書が策定された。その提言によると，国の特別史跡である原の辻遺跡を更に顕彰する目的と，地元壱岐市が「一支国博物館（仮称）」を建設することによる相乗効果によって壱岐の振興拠点とする目的が書かれてある。そしてこれら新しい施設の建設と遺跡の保存整備によって年間20万人の来館者を目指すこととしている。（現在の原の辻展示館へは年間約８万人の入場者がある）

なお，埋蔵文化財センターには，センター本来の機能に加え最大の特色として東アジア研究室を併設することとしている。現在「一支国博物館」と一体となった基本計画を作成中であり，計画通りに行けば2008年度には両施設が開所することになる。

これまでの普及啓発事業

遺跡そのものの普及啓発事業としては県内外で行ったシンポジウムや講演，及び主に島内の住民に対する啓発事業がある。

○シンポジウムの開催

これまで原の辻遺跡の普及啓発事業としてシンポジウムを４回行っている。

第１回　「魏志倭人伝と一支国　―大陸との交渉―」1997年２月　於長崎市

パネラー：佐原　真，金関　恕，高島忠平，里中満智子，岡村道雄，田川　肇

第２回　「魏志倭人伝と一支国　―大陸との交渉―」1998年１月　於東京

パネラー：佐原　真，金関　恕，沈　奉謹，岡内三真，中山千夏，田川　肇

第３回　「魏志倭人伝と一支国　―弥生の使者達が今ここに集う―」1999年１月　於福岡

パネラー：西谷　正，木下尚子，春成秀爾，柳田康雄，寺沢薫，吉留秀敏，宮崎貴夫

第４回　「発掘倭人伝」2002年10月　於東京

パネラー：金関　恕，高倉洋彰，白井克也，村上恭通，禰宜田佳男，高野晋司，

○普及啓発講座関係

佐原　眞　「弥生人とわたしたち」『長崎県巡回考古学ゼミナール講座－長崎と倭人伝』 1990

小田富士雄「壱岐・対馬と大陸交渉」『長崎県巡回考古学ゼミナール講座－長崎と倭人伝』 1990

西谷　正　「弥生人の大陸交渉」『長崎県巡回考古学ゼミナール講座－長崎と倭人伝』 1990

佐原　眞　「戦い」原の辻大学講座　2001

工楽善通　「環濠」原の辻大学講座　2001

高島忠平　「墓制」原の辻大学講座　2001

寺沢　薫　「弥生都市はあったか」原の辻大学講座　2002

木下尚子　「勾玉のはなし」原の辻大学講座　2002

西谷　正　「東アジアの中の一支国」2002

酒井龍一　「考古学者はいったい何をしてきたのか」原の辻大学講座　2003

佐古和枝　「もうひとつの玄関口～山陰の弥生遺跡と日本海交流～」原の辻大学講座　2003

甲元眞之　「東アジアの初期の農耕文化と原の辻遺跡」2003

○「原の辻大学」講座の開催

本格的な遺跡の保存整備後の史跡の公開にあたってはその活用や管理運営に欠かせない要素としてボランティアの存在が考えられる。このためその養成を目的として平成2002年から歴史に関心のある島民を対象として公開講座を開催することとした。受講生は現在毎回凡そ100名程である。

塩屋勝利　「再発見原の辻遺跡」　Ｄｒ.ハルの「原の辻遺跡を知ろう塾」講座　2002

中尾篤志　「一支国人はグルメだったか」　Ｄｒ.ハルの「原の辻遺跡を知ろう塾」講座　2002

橋口達也　「一支国で戦いがあったか」　Ｄｒ.ハルの「原の辻遺跡を知ろう塾」講座　2002

七田忠昭　「吉野ヶ里遺跡と原の辻遺跡」　Ｄｒ.ハルの「原の辻遺跡を知ろう塾」講座　2002

西谷　正　「邪馬台国と一支国」Ｄｒ.ハルの「原の辻遺跡を知ろう塾」講座　2002

辻誠一郎　「一支国人は焼酎を飲んだか」　Ｄｒ.ハルの原の辻大学講座　2003

沈　奉謹　「韓国から見た原の辻遺跡」　Ｄｒ.ハルの原の辻大学講座　2003

金関　恕　「人面石大いに語る」　Ｄｒ.ハルの原の辻大学講座　2003

高倉洋彰　「一支国の交易」　Ｄｒ.ハルの原の辻大学講座　2003

小田富士雄「なぜ壱岐に巨大古墳が多いのか」　Ｄｒ.ハルの原の辻大学講座　2003

徐　光輝　「中国から見た原の辻遺跡」　Ｄｒ.ハルの原の辻大学講座　2004

木下尚子　「弥生人のおしゃれ関係」　Ｄｒ.ハルの原の辻大学講座　2004

稲田孝司　「壱岐にナウマン象がいた頃」　Ｄｒ.ハルの原の辻大学講座　2004

甲元眞之　「東アジアと一支国人の漁労」　Ｄｒ.ハルの原の辻大学講座　2004
武末純一　「一支国人は何処へ行った」　Ｄｒ.ハルの原の辻大学講座　2004

○「一支国研究会」の発足

2003年11月，「一支国研究会」が発足した。壱岐の歴史・民俗・伝承・地質など何でもどん欲に楽しみながら学ぼうというのが発足の趣旨であるが，同時に本格的なボランティアを養成する役目も担っている。そのため，第１回目の講師として妻木晩田遺跡応援団として保存活動に奔走され，ボランティアガイドの活動を実践されている佐古和枝先生を迎えてボランティアとは何かということや活動の実際についての講義を受けるなど，今後も他遺跡での実践活動を参考としながら来るべき日に備えての用意を続けていくことが必要である。

○姉妹遺跡の締結と活動

以上の活動とは別に1999年，福岡県，佐賀県，長崎県の３県の知事が「地域連携促進による地域の活性化」の一環として九州北部三県懇話会の中で姉妹遺跡の締結を行った。福岡県甘木市平塚川添遺跡，佐賀県吉野ヶ里遺跡，そして本県原の辻遺跡など，我が国弥生時代後期の大規模遺跡である３遺跡が姉妹遺跡として相互に様々な企画や情報交換を通じて地域の活性化を実現しようとする試みである。事業としてはまず，1999年から2001年まで３県の子供達による相互交流を持ち回りで行った他，2003年度には原の辻遺跡と吉野ヶ里遺跡間で遺物交流展を行った。今後も民間の情報を交えながら継続実施して行く予定である。

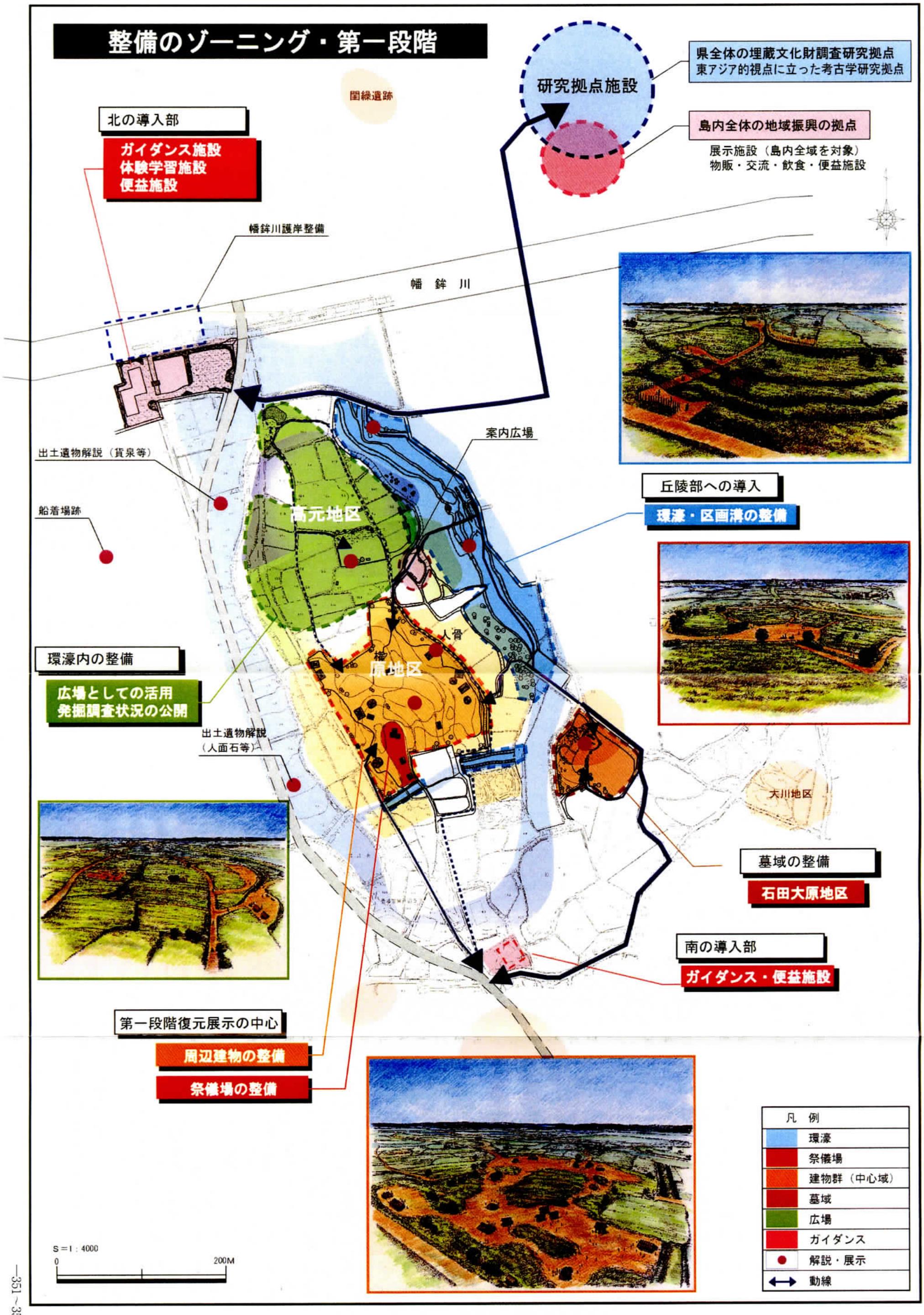
今後の施策と活用

原の辻遺跡とそれを取り巻く今後の施策については，①発掘調査の継続による遺跡内容の確認。②中心集落区域の保存整備。③県立埋蔵文化財センターと地元展示施設の整備。などを一体的に進めることでひいては壱岐の振興拠点とすることを目指している。ただ全国的に見て遺跡の保存整備は何処も同じという印象は免れない。原の辻遺跡の場合，航海を前提とする大陸との交易の拠点という性格が強く，それを特長づける船着き場や旧河川沿いに築かれた石組護岸遺構等を表現すれば他の遺跡に無い大きな強みと成り得るが，当該区域が圃場整備が終わったばかりの第１種農用地であったりするなど，すぐには整備に入れない難しい条件が幾つか指摘されている。しかしながら絶対条件となる地権者の理解を取り付け，少しでも早い整備が必要であるのは疑い無い。丘陵上に立てば弥生時代の風を感じながら一支国の往時の景観が彷彿とする。無事に残ってきた弥生の風景を活かしながら本物の復元整備を行う必要がある。　**（高野）**

最後に原の辻遺跡関係の文献一覧を掲載しておく。

○論文等

八木奨三郎「壱岐に於ける人類学上の調査」『東京人類学雑誌』14-157　1899
永倉松昌　「壱岐国松本考古品陳列室目録」『考古学』第2巻第3号　1922
松本友雄　「壱岐国考古通信(1)」『考古学雑誌』第17巻第2号　1927
松本友雄　『壱岐考古録』1927
松本友雄　「壱岐国考古通信(2)」『考古学雑誌』第17巻第5号　1927
松本友雄　「壱岐国考古通信(3)」『考古学雑誌』第18巻第12号　1928
松本友雄　『先史時代の壱岐研究』1929
松本友雄　「壱岐に於ける弥生式土器遺跡の分布と原包含地」『考古学』第1巻第5・6号　1930
山口麻太郎「使途不明の烏帽子形石に就いて」『考古学』第1巻第5・6号　1930
山口麻太郎「古代のくど石に就いて」『旅と伝説』第36号　1931
山口麻太郎「再び古代のくど石に就いて」『旅と伝説』第43号　1931
松本友雄　『探古目録』2　1931
松本友雄　「雑録・壱岐カラカミ貝塚の骨角器(1)」『考古学雑誌』第23巻第9号　1933
森本六爾　「壱岐島の一甕棺」『考古学』第4巻第10号　1933
松本友雄　「雑録・壱岐カラカミ貝塚の骨角器(2)」『考古学雑誌』第24巻第1号　1934
松本友雄　「記号ある弥生土器」『考古学』第5巻第3号　1934
松本友雄　「貝塚出土の鉄器について」『考古学雑誌』第24巻第6号　1934
松本友雄　「弥生式土器に伴える原始竈」『ドルメン』第3巻第7号　1934
松本友雄　「貝塚で玉」『ドルメン』第4巻第4号　1935
松本友雄　『壱岐史要』長崎県壱岐郡小学校地理歴史研究部会　1935
松本友雄　「壱岐の前方後円墳」『考古学雑誌』第26巻第1号　1936
鴇田忠正　「長崎県壱岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究」『日本文化史研究』1944
水野清一・岡崎敬「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』1954
杉原荘介　「壱岐の考古学調査」『駿台史学』5　1955
山口麻太郎「壱岐島の先史遺跡地帯について」『山口麻太郎郷土研究集』1960
野本政宏　「壱岐島　弥生式文化の意義」『島の科学』9　1972
立平　進　「壱岐原の辻遺跡出土の骨角器から角戈」『長崎県立美術博物館だより』22　1976
芦辺町町史編纂委員会「原の辻における旧石器」『芦辺町史』1978
武末純一　「弥生時代後期の壱岐・対馬」『古代文化研究会』17　1979
高倉洋彰　「原ノ辻上層式土器の検討」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』1982
萩原博文　「原の辻型台形石器について」『人間・遺跡・遺物－わが考古論集1』文献出版　1983
武末純一　「壱岐」「対馬」『3世紀の考古学』下巻　学生者　1983
藤田和裕　「長崎県原ノ辻遺跡－大陸との文化交流」『探訪　弥生の遺跡　西日本編』有斐閣　1987
横山　順　「壱岐の古代と考古学」『玄界灘の島々』海と列島文化3　小学館　1990
片岡宏二　「壱岐原の辻遺跡の朝鮮系無文土器にみる日韓交渉」人類史研究会　1999
副島和明　「壱岐・原の辻遺跡について」考古学ジャーナル　第376　1994
副島和明・山下英明・松永泰彦「大規模な多重環濠集落－長崎県原の辻遺跡」季刊考古学　第49号　1994
副島和明・正林護「一支国－原の辻遺跡とカラカミ遺跡」季刊考古学　第51号　1995
白井克也　「勒島貿易と原の辻貿易」『弥生時代の交易』第49回　埋蔵文化財研究集会　2001
宮崎貴夫　「原の辻遺跡における歴史的契機について」西海考古　第4号　2001



第147図　2004年策定　基本設計

高野晋司　「原の辻遺跡」考古学ジャーナル　2003
高野晋司　「一支国」『古代倭国の研究』別冊歴史読本　新人物往来者　2003
早乙女雅博・鄭仁盛「日本列島と朝鮮半島東南部地域出土の楽浪土器基礎研究」高梨学術奨励基金年報　2003
鐘ヶ江賢二「壱岐・糸島地域出土土器の胎土分析から見た弥生時代中期の土器生産と交流について」2003
宮崎貴夫　「長崎県壱岐出土の弥生時代中国銭貨」『出土銭貨　第20号』出土銭貨研究会　2004
中尾篤志　「弥生時代における植物利用」日・韓交流の考古学　九州考古学会・嶺南考古学会　第6回合同考古学会　2004
中尾篤志　「一支国」における生産基盤　考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）2004
○概報等
藤田国雄　「壱岐・対馬考古調査の記」『国立博物館ニュース』第67号　1952
藤田国雄　「壱岐考古調査記」『国立博物館ニュース』第77号　1953
藤田国雄　「壱岐考古調査記」『国立博物館ニュース』第89号　1954
関　俊彦　「東亜考古学会第5次壱岐（原の辻）調査概報」『弥生解題1963』1965
水野清一・秋山進午「弥生時代　長崎県壱岐郡原の辻遺跡」『日本考古学年報』14　1966
田川　肇　「発掘と調査　原の辻・大原遺跡」『日本考古学年報』27　1976
安楽　勉　「発掘と調査　原の辻遺跡・浜泊遺跡」『日本考古学年報』29　1978
藤田和裕　「発掘と調査　原の辻遺跡（確認）『日本考古学年報』30　1979
長崎県教育庁文化課「原の辻遺跡のあらまし」1977
田川　肇・副島和明「長崎県壱岐郡芦辺町・石田町原の辻遺跡」『日本考古学年報』46　1995
原の辻遺跡調査事務所「原の辻ニュースレター」創刊号（1998）～vol.19（2004）

X まとめ

맺음말

하루노쯔지(原の辻) 유적은 야요이시대 유적임은 물론 더 이른 구석기시대부터 고대 유물까지 출토되는 복합 유적이다. 여러 갈래의 것이 출토되어서 유적 조사에 있어서는 고고학뿐만 아니라 식물학 · 건축학 · 지리학 · 인류학 등 다양한 분야의 선생님들께 도움을 받으며 야요이시대의 현상을 밝혀나가려고 한다. 이번 보고는 어디까지나 도중 경과일 뿐이다. 앞으로 알게 될 더욱 새로운 정보로 인해 현재의 견해가 변화되는 일은 적지 않을 것이다. 총집편(総集編)의 목적은 지금까지의 조사에서 밝혀진 것과 밝혀지지 않은 것을 제시하고 향후의 조사로 이어가는 데 있다.

조사 성과와 향후 과제를 제시하는 것으로서 종합하려고 한다.

조사 성과

· ①유적은 야요이시대 전기 후엽부터 고분시대 전기까지의 대규모 취락지로, 중기 전엽에는 2~3중의 환호로, 후기에는 다중환호로 둘러싼 대환호취락이다. ②유적의 중심인 구릉부에서는 야요이시대 중기부터 고분시대 전기에 많은 취락이 형성되었고, 주위 보다 높은 평지는 제의장소로서의 기능을 했다. 또한 유적 형성기에는 저지부(低地部)에도 취락이 존재했을 가능성이 지적되었다. ③제사는 저지부에서도 이뤄졌는데, 강가에서 빈번하게 제사가 이뤄졌다. ④유물로는 무문토기 · 낙랑계토기 · 삼한계토기가 다량으로 출토됨과 동시에 일본 각지에서도 토기가 운반되어 온 것으로 보아 교역의 최전선이었던 것을 알 수 있다. ⑤선착장 유적과 건축재(床大引材)가 존재하는 것으로 보아 유물뿐만 아니라 토목 · 건축 기술도 대륙으로부터 전해져 있었다. 토기와 금속기를 봐도 반도계 사람들이 하루노쯔지 유적에 거주하면서 토목 · 건축 등의 기술적 지도를 하고 있었다. ⑥금속기 생산은 구릉부, 석기 생산은 저지부로 장소를 구분하고 있었을 가능성도 지적되었다. 석기 중에서도 돌낫(石鎌) · 납작한 외날석기(扁平片刃石器) · 돌칼(石刀) 등은 유적 내에서 석기 제작 집단에 의해 제작되었을 가능성이 있다. 돌낫의 출토량은 벼뿐만이 아니라 밀 등 밭작물에 의존하고 있었다는 것도 고려하지 않으면 안될 상황이다. ⑦묘역은 환호 밖에 몇 개가 존재한다. 이 점으로 미루어 보아 유적을 구성하는 소집단이 여러 개 존재했을 가능성이 있다.

향후의 과제

· ①저지부는 논 정비 관계로 조사가 잘 이뤄지지 않았다. 때문에 저지부 환호의 실태가 완전히 파악되었다고 할 수 없다. 또 구릉 남쪽의 환호에 대해서도 불명확한 점이 있기 때문에 남쪽을 충분히 조사할 필요가 있다. ②2004(헤세16)년도 구릉부 트렌치 조사에서 전기 유물이 출토되어서 유적 형성기의 거주 구역도 구릉 위에 있었다고 생각할 필요가 있다. 하루노쯔지 유적과 가라카미(カラカミ) 유적, 구루마데(車出) 유적과의 관계를 밝혀낼 필요가 있다. 하루노쯔지 유적과 거의 같은 시기에 존재하던 이키섬 내의 유적과의 관계는 각 유적의 성질을 생각하는 데 있어서 중요한 일이다. 그리고 한국 늑도 유적과의 관계를 앞으로 밝혀나가야 한다. 석기에 대해서는 한반도와 규슈 본토부에서 유사한 석기가 출토되지 않았는지 정보교환을 할 필요가 있을 것이다.

마지막으로 옥고를 주신 여러 선생님들께 감사를 드리고 동시에 이 총집편이 야요이시대 연구에 일조할 것과 하루노쯔지가 고고학을 통해 동아시아 연구의 거점이 될 것을 기원하며 맺고자 합니다.

写真図版

原の辻遺跡全景
（西から）

調査区上空より
内海を望む

調査区上空より
印通寺方面を望む

PL. 1　原の辻遺跡全景

Ｈ５年調査
丘陵東側環濠検出状況
（北→南）
丘陵端部

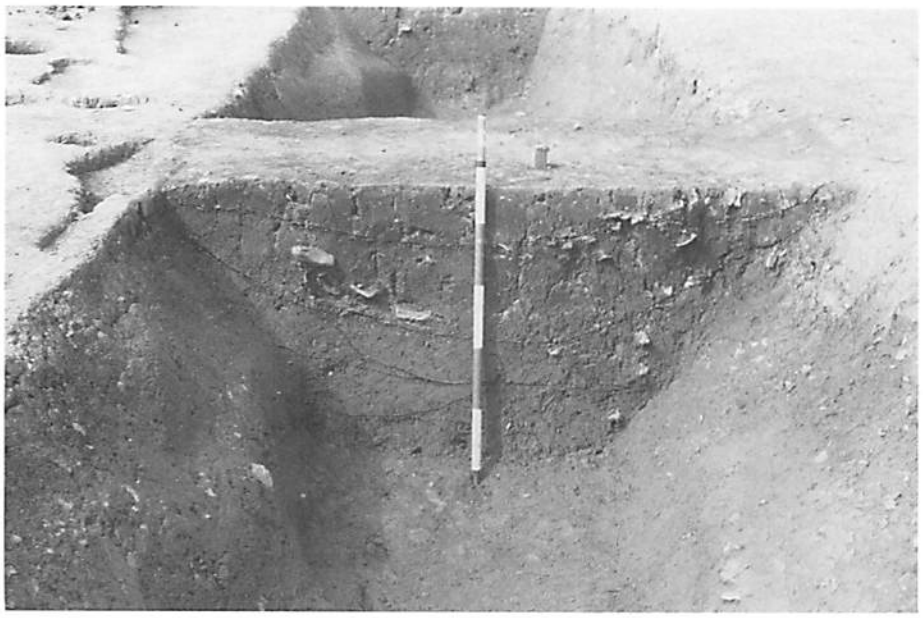
丘陵東側大溝検出状況
（東→西）

丘陵東側を取りまく
環濠検出状況

PL. 2　環濠検出状況

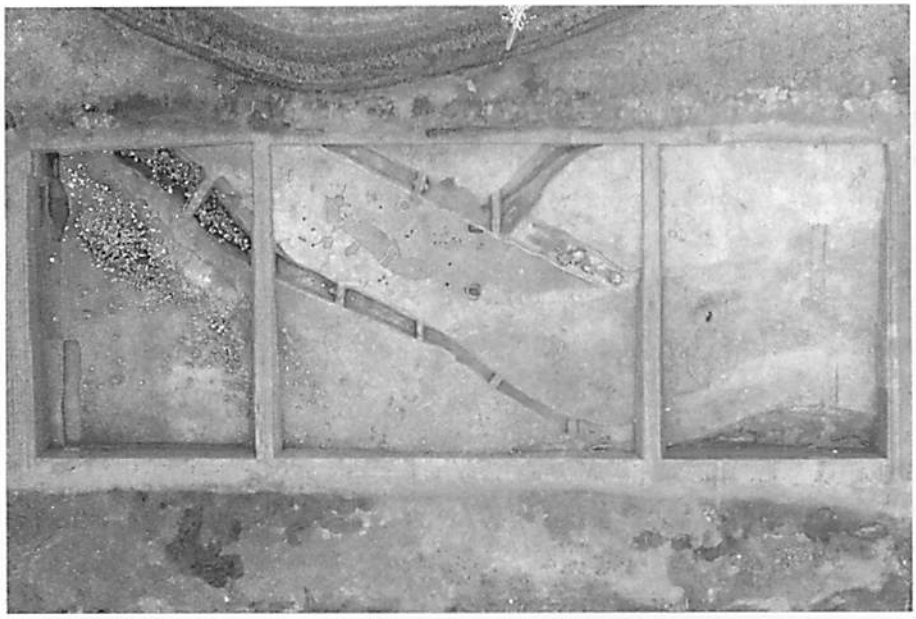
内濠・中濠検出状況

内濠(右)・中濠完掘状況



中濠横断土層

PL. 3　環濠検出状況

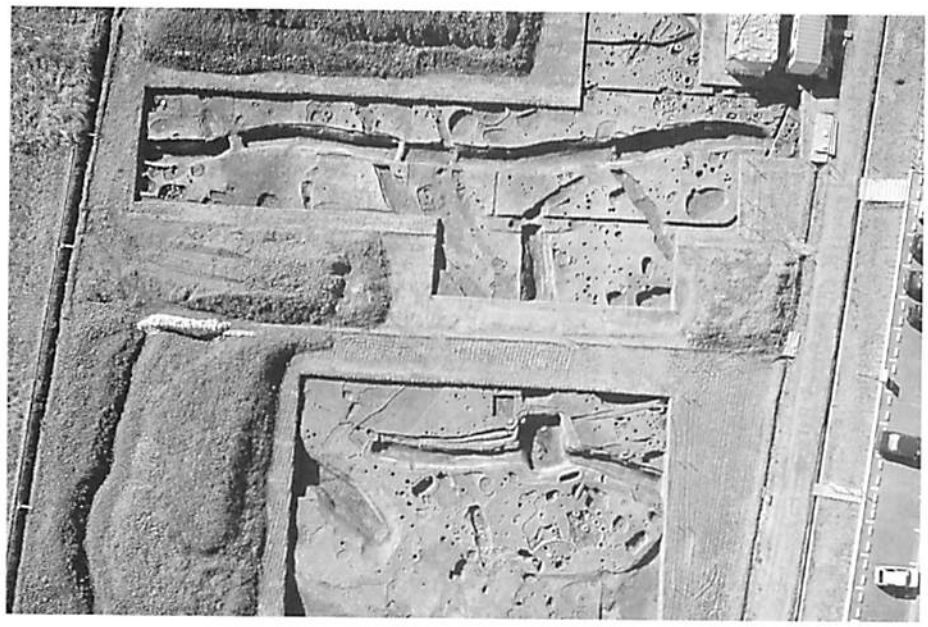


丘陵西側低地南端の
環濠検出状況

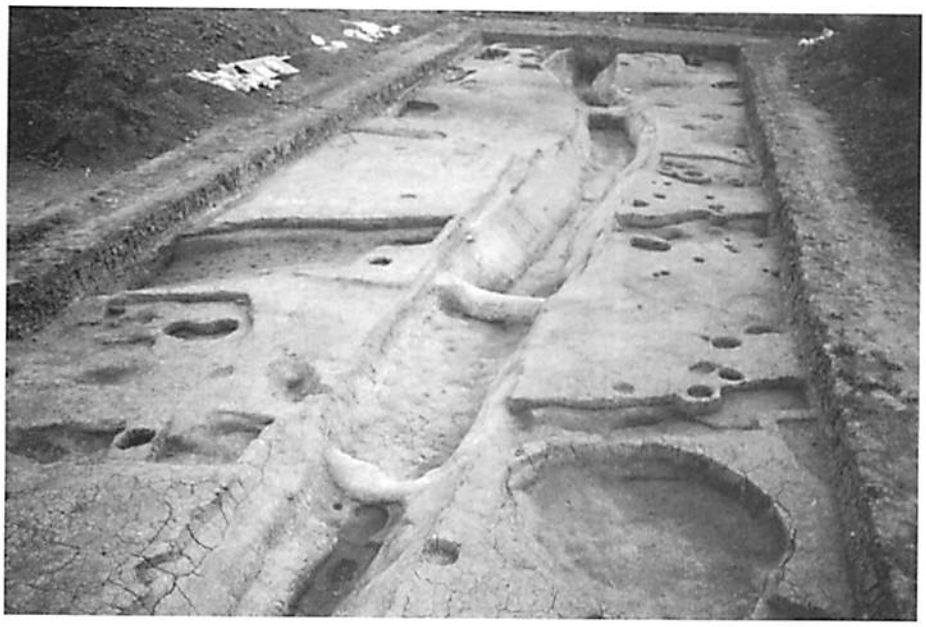
環濠検出状況

環濠横断土層

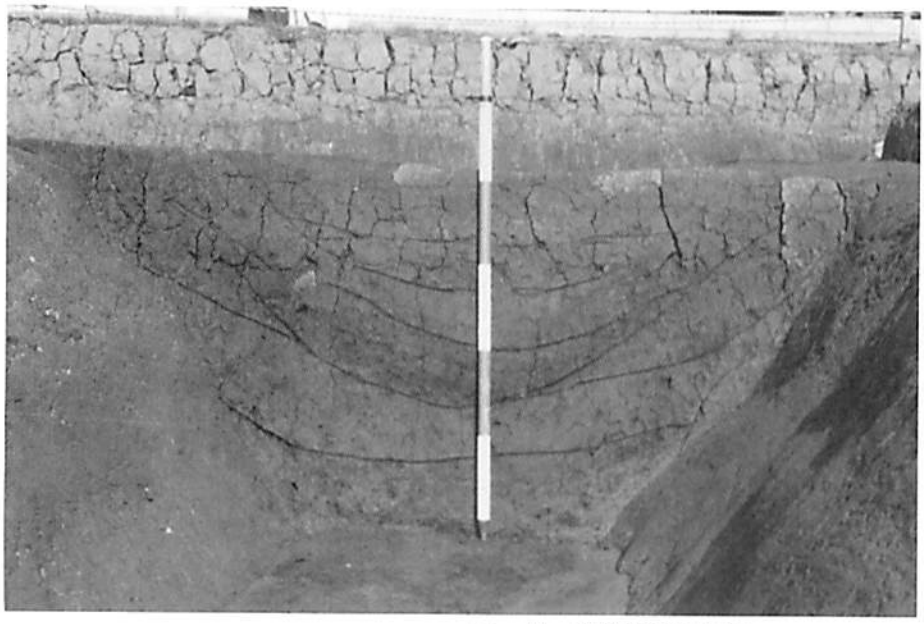
PL. 4　環濠検出状況



弥生後期の環濠検出状況
（右北方向）



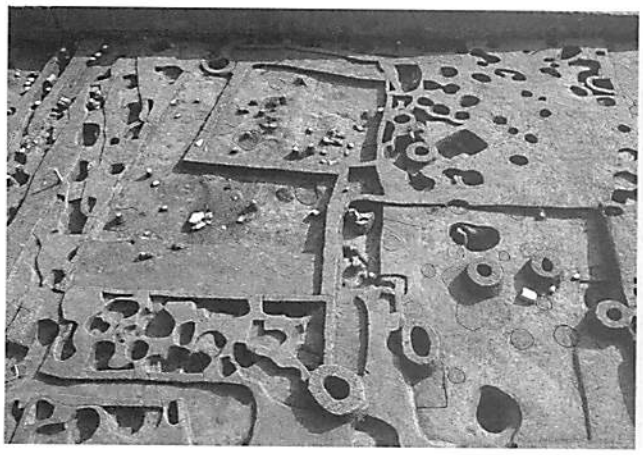
濠内土手状遺構検出状況

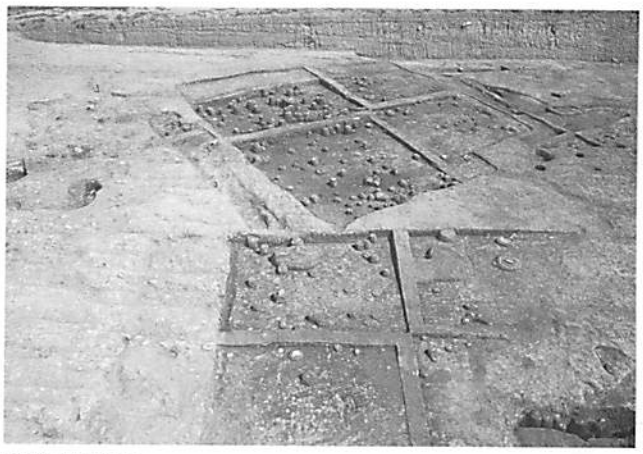


濠横断土層（北部）

PL. 5　環濠検出状況

PL. 6　高台（祭儀場）の調査状況





PL. 7　住居跡検出状況

船着き場跡

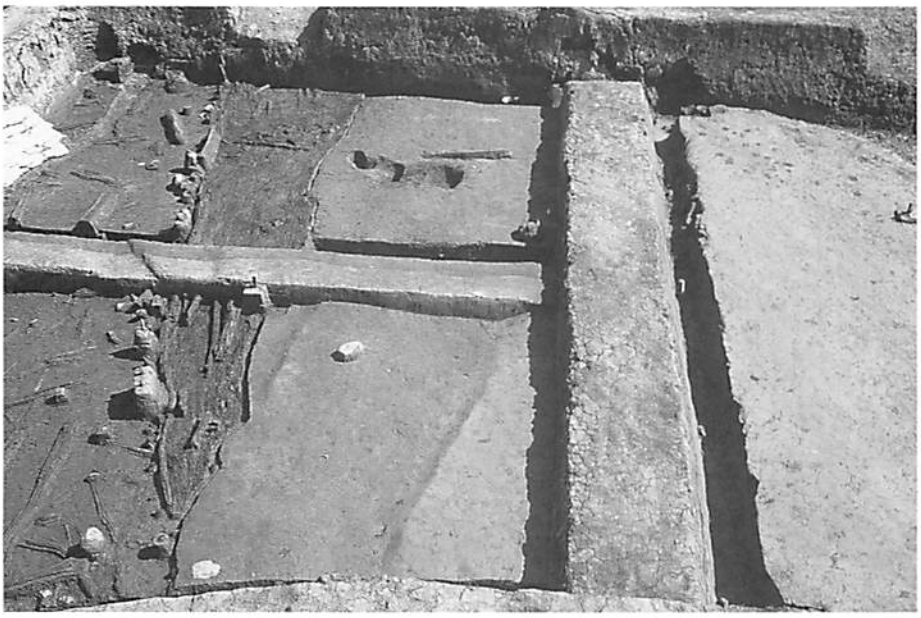
西側突堤

東側突堤

PL. 8　船着き場跡検出状況

護岸遺構南側検出状況

護岸遺構近景（南→北）



樹皮敷遺構検出状況
（西→東）

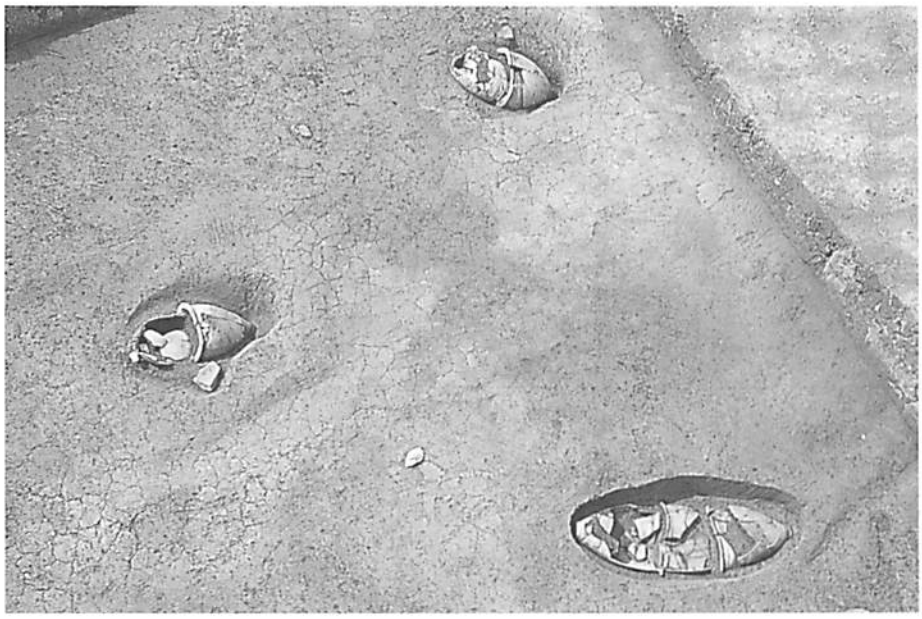
PL. 9　護岸遺構・樹皮敷遺構検出状況

河道調査状況

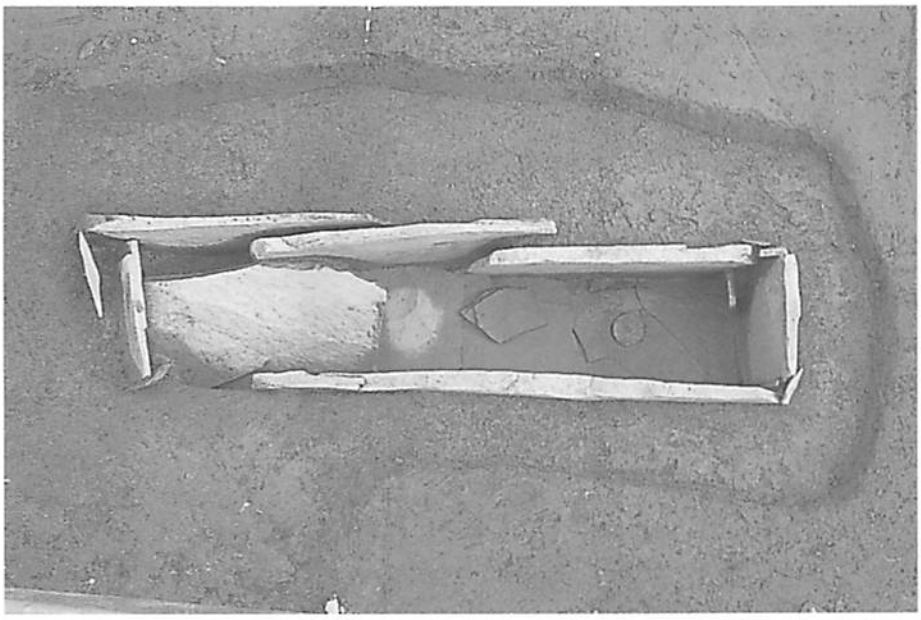
河道内遺物出土状況

河道内遺物出土状況

PL. 10　河道検出状況



鶴田地区甕棺出土状況
弥生時代中期

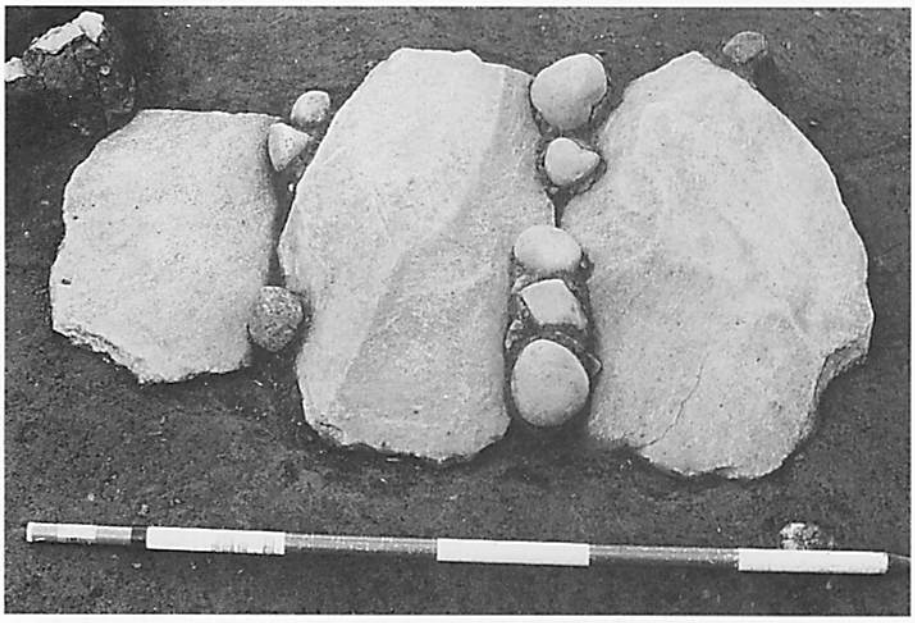


箱式石棺墓検出状況
（原ノ久保Ａ地区）／弥生時代後期

墓域の状況（大川地区）
／弥生時代中期～後期

PL. 11　墓地検出状況

閨繰地区遺構検出状況

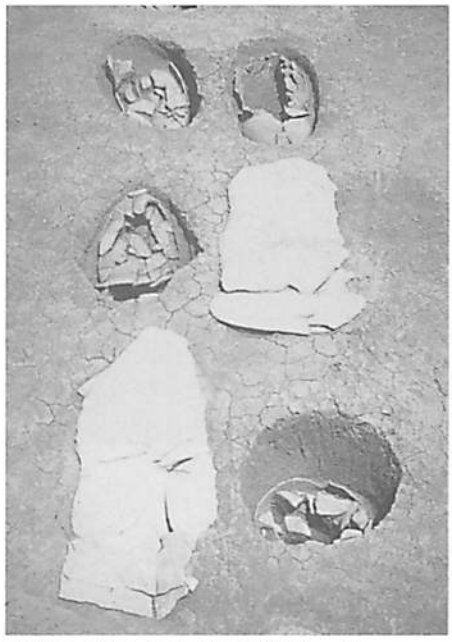


苣ノ木13－１区１号石蓋土壙墓検出状況（上面）

閨繰地区１号石棺墓完掘状況（東から）

PL. 12　墓地検出状況

昭和29年調査　闇繰地区遺構検出状況



墓域の状況（石田大原地区）／
弥生時代前期～中期

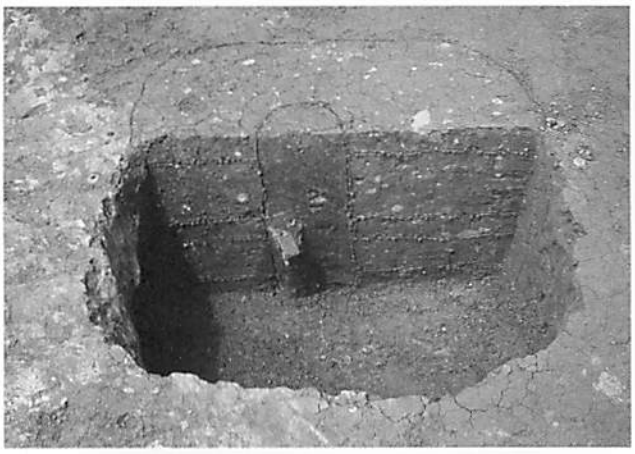
墓域の出土状況（原の久保Ｃ地区）

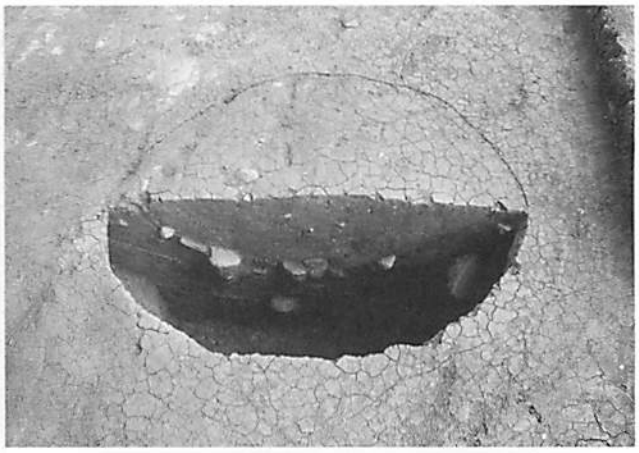
原ノ久保13－１区６号小児甕棺墓検出状況

鶴田地区甕棺出土状況

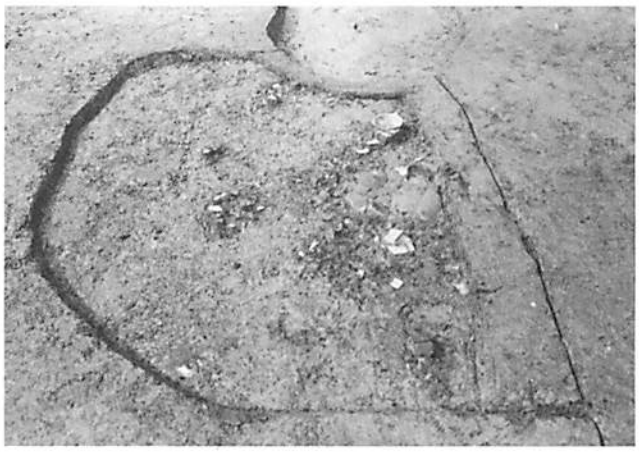
苣ノ木13－１区５号甕棺銅釦出土状況

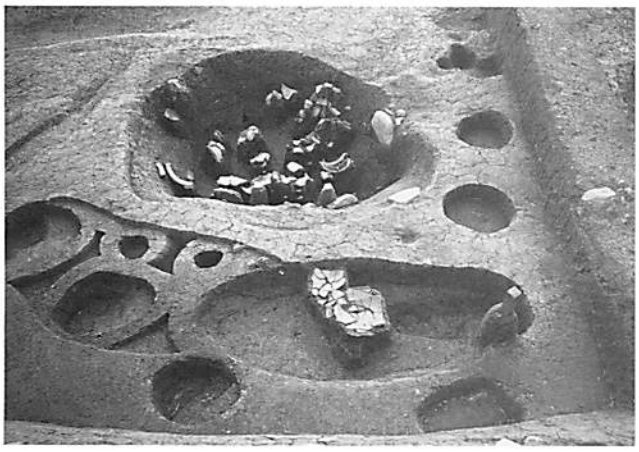
PL. 13　墓地検出状況





PL. 14　土坑検出状況



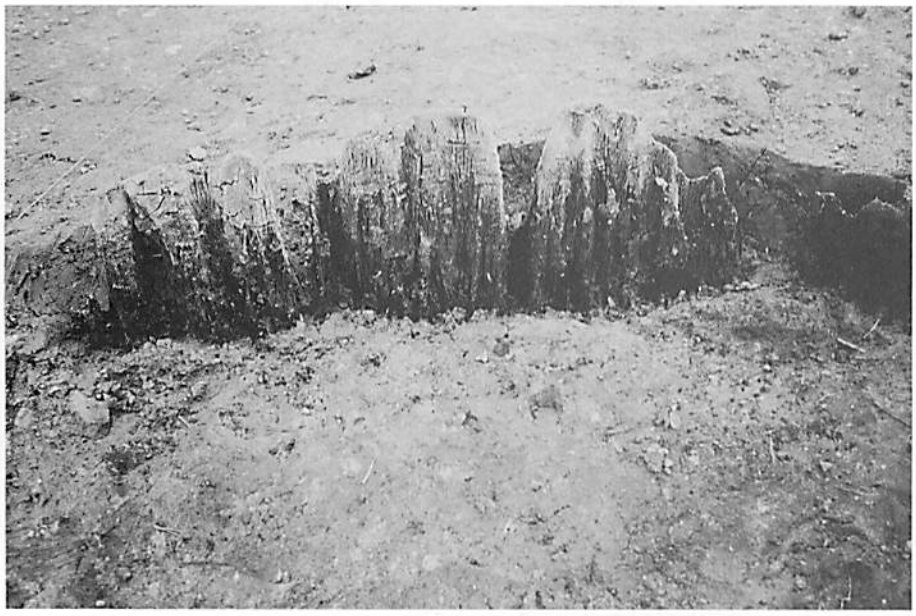


剝片出土土坑

PL. 15　土坑検出状況

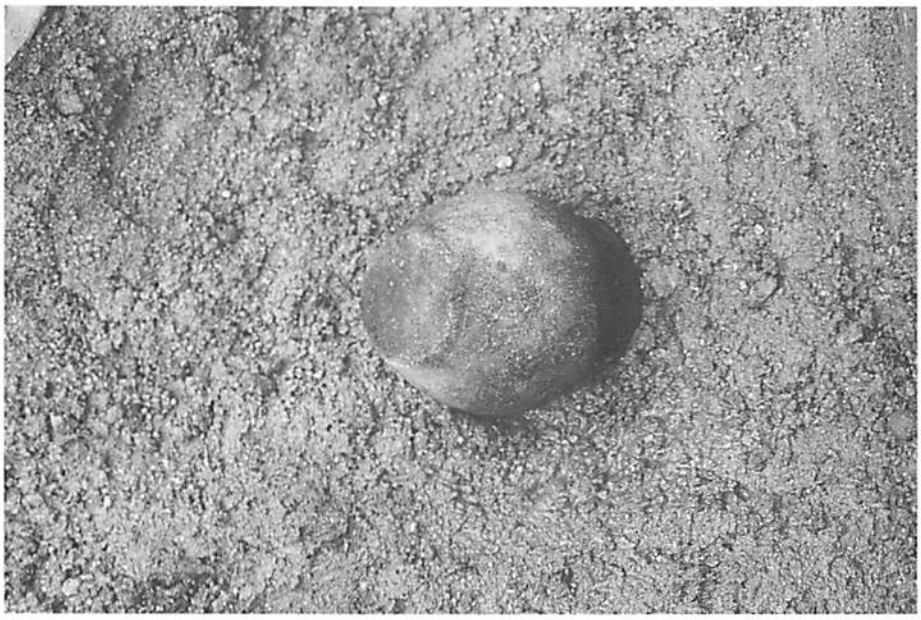
水田の畦畔遺構検出状況

畦畔遺構検出状況
（丘陵西側、池付近）



矢板出土状況

PL. 16　畦畔検出状況



無文土器出土状況

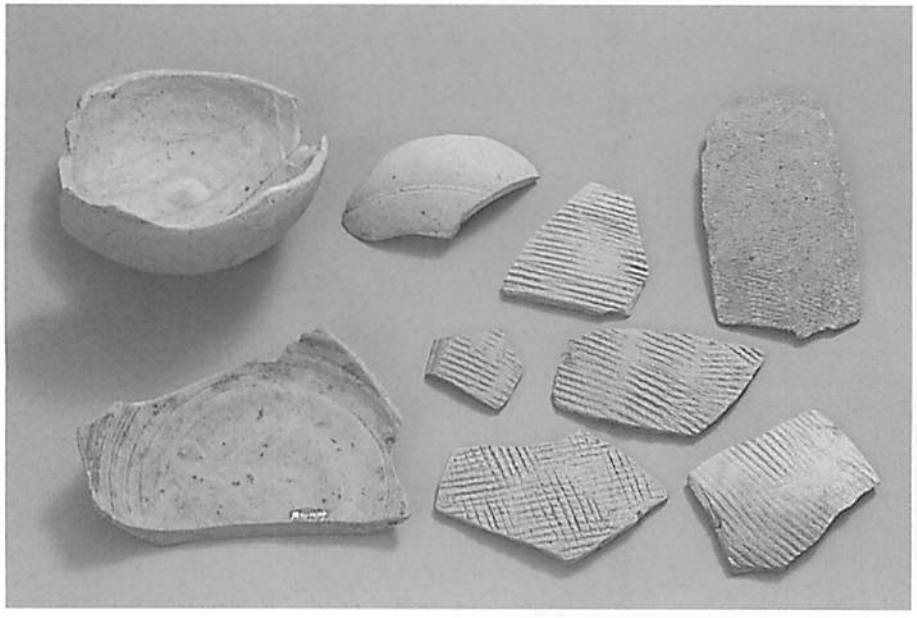
三韓土器出土状況

馬韓糸土器出土状況

PL. 17　朝鮮半島系土器出土状況

楽浪系土器出土状況

楽浪系土器出土状況



楽浪系土器／
弥生時代後期／左上　高さ7.8cm

PL. 18　朝鮮半島系土器出土状況

環濠内遺物出土状況

環濠内遺物出土状況

環濠内遺物出土状況

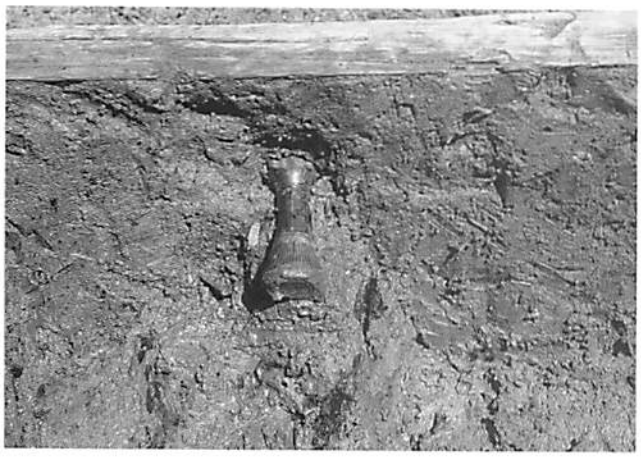
PL. 19　土器出土状況

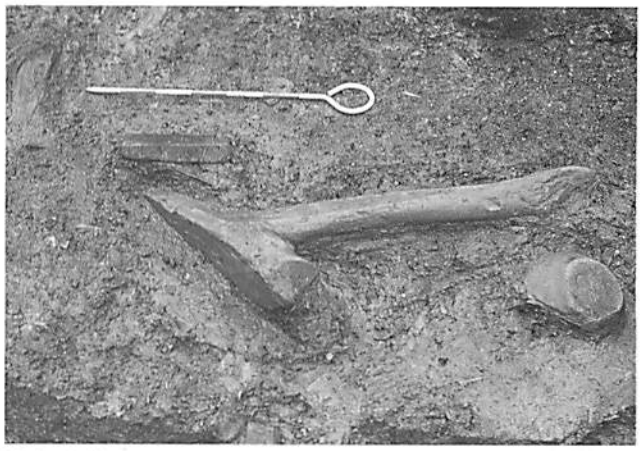
馬韓糸土器出土状況

環濠内土器出土状況

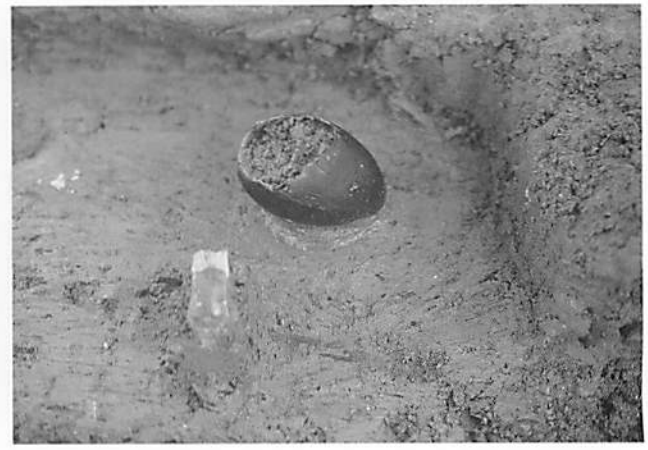
貝層と土器出土状況

PL. 20　土器出土状況

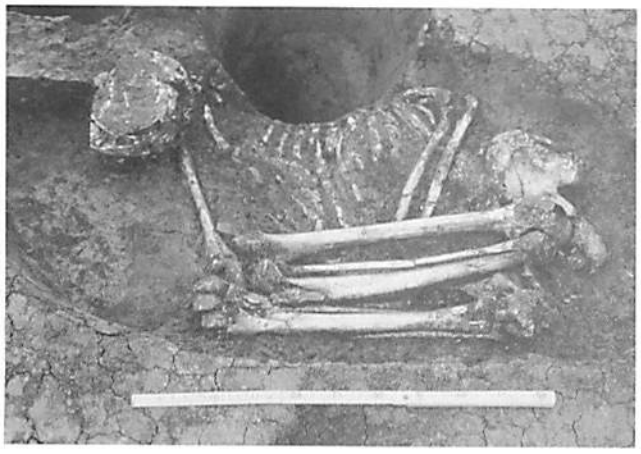




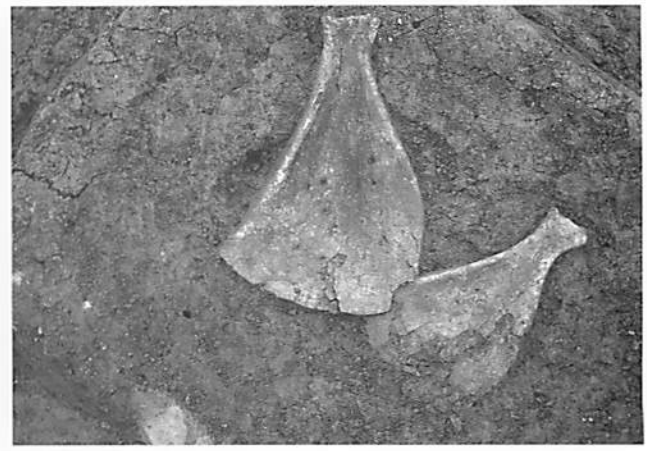
PL. 21　木製品出土状況



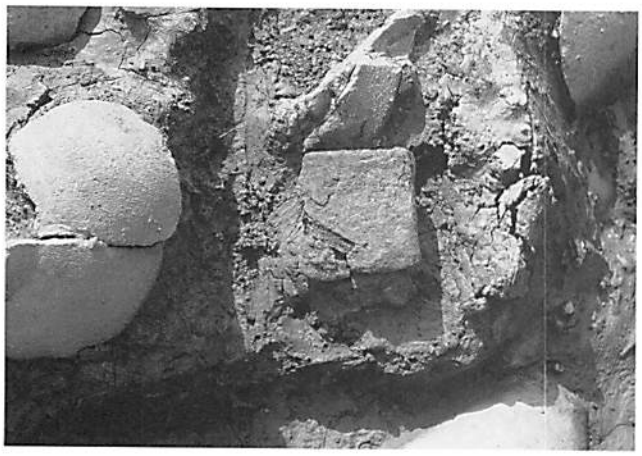
PL. 22　木製品出土状況

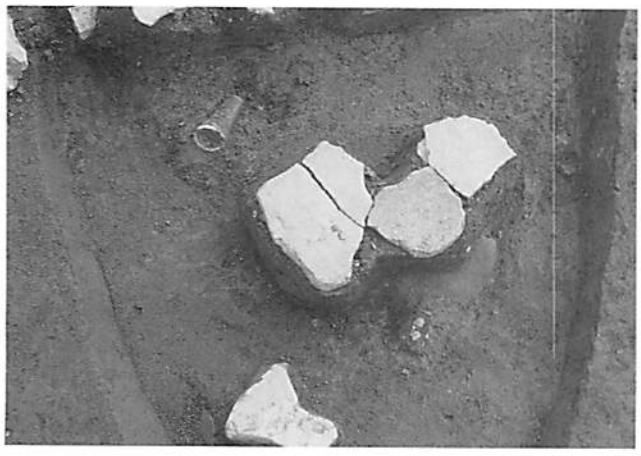


PL. 23　自然遺物出土状況

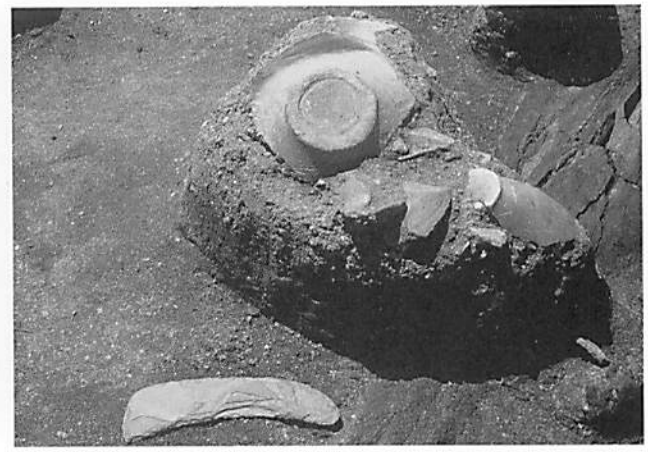


PL. 24　骨角器類出土状況

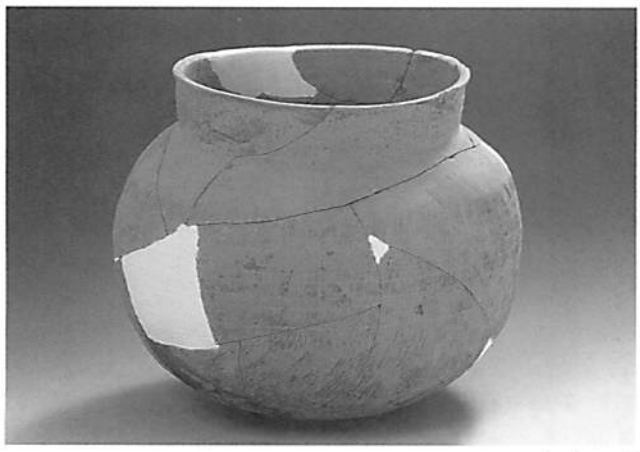


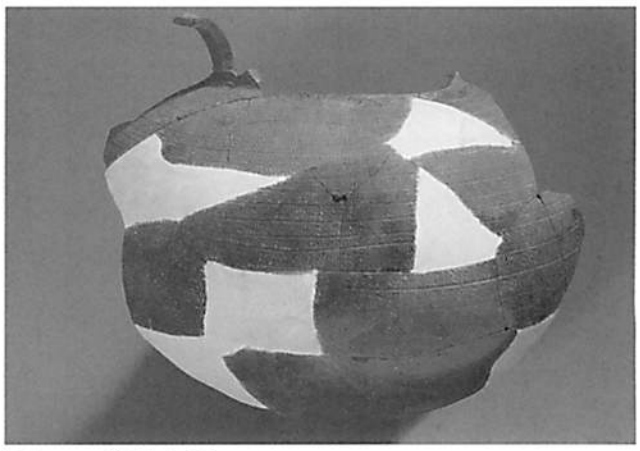


PL. 25　金属器出土状況



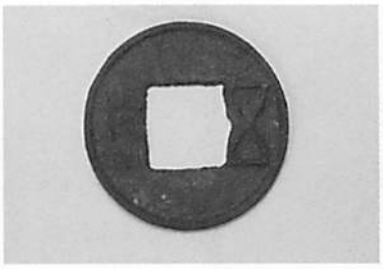
PL. 26　石器出土状況





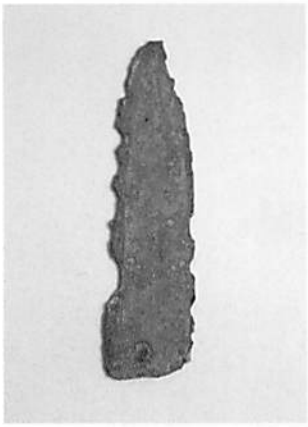
PL. 27　無文・楽浪系・三韓系土器

貨泉（八反地区）／弥生時代後期／



五銖銭（不條地区）／弥生時代中期／

大泉五十（不條地区）／弥生時代後期／



戦国式銅剣（石田大原地区）／弥生時代中期／長さ12・5cm

車馬具（八反地区）／弥生時代中期／高さ2.1cm

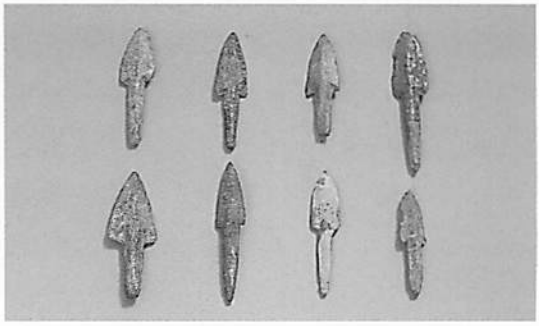
細形銅剣（不條地区）／弥生時代中期／長さ10・0cm

円圏文規矩四神鏡（大川地区）／弥生時代後期／

権（原地区）／弥生時代後期／高さ4.3cm

三翼鏃（不條地区）／弥生時代中期／長さ2.7cm

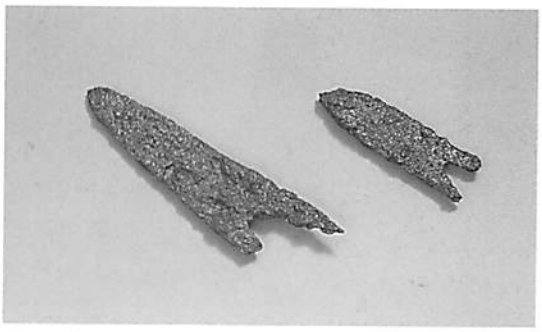
「長宜子孫」銘内行花文鏡（原ノ久保A地区）／



銅鏃（石田高原地区ほか）／弥生時代後期／

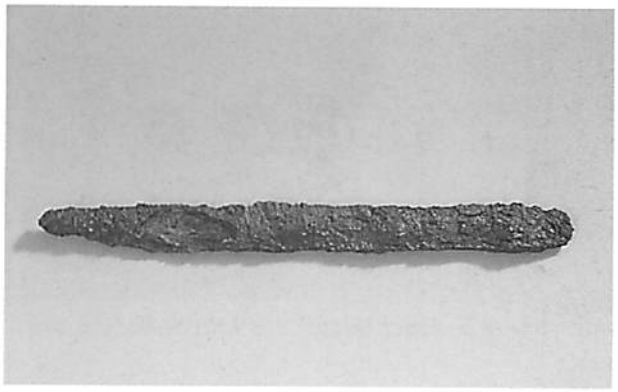
PL. 28　主な出土遺物

鉄鍬・鉄鋤等



鉄鏃（大川地区）／弥生時代後期／

板状鉄斧（八反地区）／
弥生時代後期／長さ28.5cm



鉄製鉇（大川地区）／

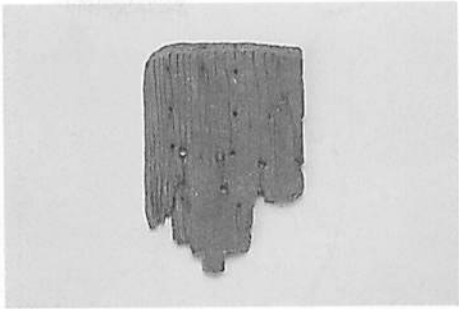
鋳造鉄斧（石田高原地区）／弥生時代後期／長さ9.5cm

鉄鎚（八反地区）／弥生時代後期／長さ
7.0cm

人面石製品（八反地区）／
弥生時代後期～古墳時代初頭／長さ10.2cm

PL. 29　主な出土遺物

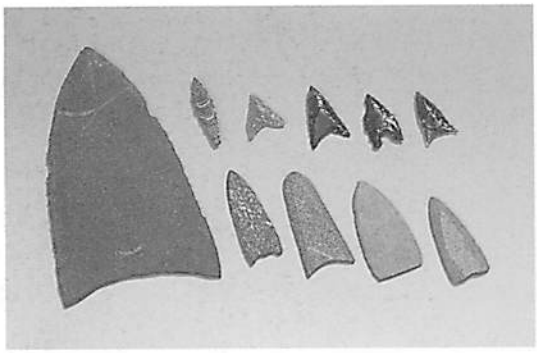
木製短甲（川原畑地区）／弥生時代中期／長さ15cm



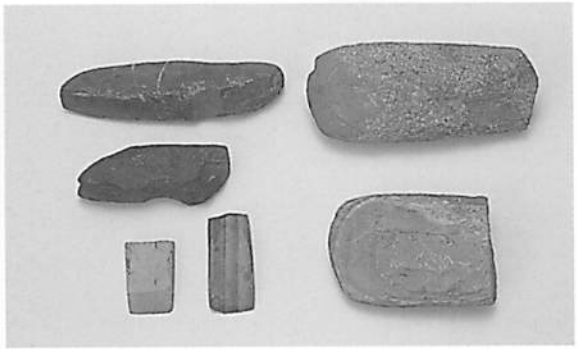
木製楯（石田高原地区）／弥生時代前期末～中期初／

トンボ玉（石田大原地区）／弥生時代中期／径0.8cm

ココヤシ製笛（不條地区）／弥生時代中期／12.8cm



石鏃（不條地区）／弥生時代前期～中期／左　長さ12.8cm



扁平石斧・柱状石斧・蛤刃石斧（不條地区）／

投弾／弥生時代前期～中期／長さ4.0cm～5.2cm

支脚形石製品（原地区ほか）／

PL. 30　主な出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき　そうしゅうへん
書名	原の辻遺跡　総集編Ⅰ
副書名	平成16年度までの調査成果
巻次	
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第30集
編著者名	福田一志・中尾篤志
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	㊡811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL0920(45)4080
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
原の辻遺跡（はるつじ）	長崎県壱岐市（ながさきけんいきし）	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″			

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	環濠集落	弥生時代 古墳時代	濠・竪穴住居群・船着き場跡・墓地群	弥生土器・楽浪系土器・三韓系土器 青銅製品各種 鉄製品各種 石器各種	遺跡は国特別史跡に指定されている。

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集

原の辻遺跡　総集編Ⅰ

2005. 3. 31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂